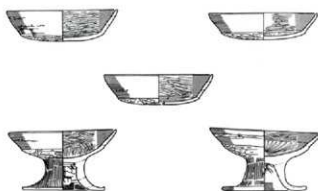


福島県文化財調査報告書第401集

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

高木・北ノ脇遺跡
[第2分冊]



2002年11月

福島県教育委員会
代表 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局福島工事事務所

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

なかぎ 高木のわき
高木・北ノ脇遺跡

目 次

[第2分冊]

第2編 北ノ脇遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	3		
第1節 調査経過	3		
第2節 調査と整理の方法	4		
第3節 遺構分布と基本土層	6		
第2章 遺構と遺物	9		
第1節 竪穴住居跡	9		
1号住居跡 (9)	2号住居跡 (12)	3号住居跡 (15)	4号住居跡 (23)
5号住居跡 (26)	6号住居跡 (28)	7号住居跡 (32)	8号住居跡 (34)
9号住居跡 (36)	10号住居跡 (38)	11号住居跡 (44)	12号住居跡 (47)
13号住居跡 (47)	14号住居跡 (49)	15号住居跡 (51)	16号住居跡 (56)
17号住居跡 (61)	18号住居跡 (65)	19号住居跡 (67)	20号住居跡 (69)
21号住居跡 (71)	22号住居跡 (73)	23号住居跡 (75)	24号住居跡 (76)
25号住居跡 (81)	26号住居跡 (84)	27号住居跡 (89)	28号住居跡 (93)
29号住居跡 (95)	30号住居跡 (97)	31号住居跡 (100)	32号住居跡 (102)
33号住居跡 (104)	34号住居跡 (107)	35号住居跡 (109)	36号住居跡 (110)
37号住居跡 (112)	38号住居跡 (116)	39号住居跡 (117)	40号住居跡 (120)
41号住居跡 (121)	42号住居跡 (126)		
第2節 土 坑	127		
1号土坑 (127)			
第3節 柱 列 跡	129		
1・2・3号柱列跡 (129)			
第4節 ビット群	130		
ビット群 (134)			
第5節 遺構外出土遺物	136		
第3編 考 察			
第1章 遺構と遺物について	173		
第1節 土師器	173		

第2節 須恵器	186
第3節 集落の変遷	194
第2章 まとめ	205

付 編

付編1 北ノ脇遺跡から出土した木材・炭化材の樹種	211
付編2 高木・北ノ脇遺跡から出土した獣骨の同定	215
付編3 高木・北ノ脇遺跡出土製鉄遺物の分析・調査	217
付編4 山王川原・高木・北ノ脇遺跡出土の須恵器と土師器の蛍光X線分析	235

挿図・表目次

第2編 北ノ脇遺跡

【挿 図】	
図1 ズリッド設定図	4
図2 基本土層様式図	7
図3 遺構配置図	8
図4 1号住居跡	10
図5 1号住居跡出土遺物	11
図6 2号住居跡	13
図7 2号住居跡出土遺物	14
図8 3号住居跡(1)	15
図9 3号住居跡(2)	16
図10 3号住居跡カマド	17
図11 3号住居跡遺物出土状況	18
図12 3号住居跡出土遺物(1)	19
図13 3号住居跡出土遺物(2)	20
図14 3号住居跡出土遺物(3)	21
図15 3号住居跡出土遺物(4)	22
図16 4号住居跡	24
図17 4号住居跡出土遺物	25
図18 5号住居跡・出土遺物	27
図19 6号住居跡	29
図20 6号住居跡出土遺物(1)	30
図21 6号住居跡出土遺物(2)	31
図22 7号住居跡	33
図23 7号住居跡出土遺物	34
図24 8号住居跡・出土遺物	35
図25 9号住居跡	36
図26 9号住居跡出土遺物	37
図27 10号住居跡	39
図28 10号住居跡カマド	40
図29 10号住居跡出土遺物(1)	41
図30 10号住居跡出土遺物(2)	42
図31 10号住居跡出土遺物(3)	43
図32 11号住居跡・出土遺物	45
図33 12号住居跡・出土遺物	46
図34 13号住居跡・出土遺物	48
図35 14号住居跡・出土遺物	50
図36 15号住居跡	52
図37 15号住居跡遺物出土状況	53
図38 15号住居跡出土遺物(1)	54
図39 15号住居跡出土遺物(2)	55
図40 15号住居跡出土遺物(3)	56
図41 16号住居跡	57
図42 16号住居跡カマド	58
図43 16号住居跡出土遺物(1)	59
図44 16号住居跡出土遺物(2)	60
図45 17号住居跡	62
図46 17号住居跡カマド	63
図47 17号住居跡出土遺物	64
図48 18号住居跡・出土遺物	66
図49 19号住居跡	68
図50 19号住居跡出土遺物	69
図51 20号住居跡・出土遺物	70
図52 21号住居跡・出土遺物	72
図53 22号住居跡・出土遺物	74
図54 23号住居跡	75
図55 23号住居跡出土遺物	76
図56 24号住居跡	77
図57 24号住居跡カマド	78
図58 24号住居跡出土遺物(1)	79
図59 24号住居跡出土遺物(2)	80
図60 25号住居跡	82
図61 25号住居跡出土遺物	83
図62 26号住居跡	85
図63 26号住居跡カマド	86
図64 26号住居跡出土遺物(1)	87

図65	26号住居跡出土遺物(2)	88	図92	41号住居跡出土遺物(2)	124
図66	27号住居跡	89	図93	41号住居跡出土遺物(3)	125
図67	27号住居跡カマド	90	図94	42号住居跡・出土遺物	126
図68	27号住居跡出土遺物(1)	91	図95	1号土坑・出土遺物	128
図69	27号住居跡出土遺物(2)	92	図96	1・2・3号柱列跡	129
図70	28号住居跡・出土遺物	94	図97	グリッドピット群・出土遺物	131
図71	29号住居跡	96	図98	9・15号ピット・出土遺物	134
図72	29号住居跡出土遺物	97	図99	31号ピット・出土遺物	135
図73	30号住居跡	98	図100	遺跡外出土遺物分布図(1)	137
図74	30号住居跡カマド・出土遺物	99	図101	遺跡外出土遺物分布図(2)	138
図75	31号住居跡・出土遺物	101	図102	遺跡外出土遺物(1)	140
図76	32号住居跡・出土遺物	103	図103	遺跡外出土遺物(2)	141
図77	32号住居跡カマド	104	図104	遺跡外出土遺物(3)	142
図78	33号住居跡	105	図105	遺跡外出土遺物(4)	143
図79	33号住居跡出土遺物	106	図106	遺跡外出土遺物(5)	144
図80	34号住居跡・出土遺物	108	図107	遺跡外出土遺物(6)	145
図81	35号住居跡・出土遺物	109	図108	遺跡外出土遺物(7)	146
図82	36号住居跡・出土遺物	111	図109	遺跡外出土遺物(8)	147
図83	37号住居跡	113	図110	遺跡外出土遺物(9)	148
図84	37号住居跡出土遺物	114	図111	遺跡外出土遺物(10)	149
図85	38号住居跡	115	図112	遺跡外出土遺物(11)	150
図86	38号住居跡出土遺物	116	図113	遺跡外出土遺物(12)	152
図87	39号住居跡	118	図114	遺跡外出土遺物(13)	153
図88	39号住居跡出土遺物	119	図115	遺跡外出土遺物(14)	154
図89	40号住居跡	120	図116	遺跡外出土遺物(15)	155
図90	41号住居跡	122	図117	遺跡外出土遺物(16)	157
図91	41号住居跡出土遺物(1)	123	図118	遺跡外出土遺物(17)	158
〔 表 〕					
表1	グリッドピット一覧(1)	132	表9	土師器観察表(6)	166
表2	グリッドピット一覧(2)	133	表10	須恵器観察表(1)	166
表3	竪穴住居跡一覧	160	表11	須恵器観察表(2)	167
表4	土師器観察表(1)	161	表12	土製品観察表(1)	168
表5	土師器観察表(2)	162	表13	土製品観察表(2)	169
表6	土師器観察表(3)	163	表14	石製品観察表	169
表7	土師器観察表(4)	164	表15	金属製品観察表	169
表8	土師器観察表(5)	165	表16	グリッドピット内出土土柱材	169

第3編 考 察

〔補 図〕

図1	土師器杯Ⅰ～Ⅲ群	174	図8	須恵器Ⅰ群(1)	187
図2	土師器杯Ⅳ群	175	図9	須恵器Ⅰ群(2)	188
図3	土師器杯Ⅴ～Ⅷ群	176	図10	須恵器Ⅱ群	191
図4	土師器壺Ⅰ～Ⅲ群	179	図11	須恵器と土師器の共伴例	193
図5	土師器壺Ⅳ～Ⅵ群	180	図12	集落変遷図(1)	195
図6	土師器瓶Ⅰ～Ⅳ群	181	図13	集落変遷図(2)	196
図7	舞台・太田・太根畑遺跡出土の土師器杯	183	図14	カマド位置	197

付編1

〔 表 〕

表1	木材の樹種同定結果	211	表2	S135炭化材の樹種同定結果	212
〔写 真〕					
写真1	木材	214	写真2	炭化材	214

付編 2

[挿 図]	[表]
図1 出土骸骨の残存状況216	表1 出土骨同定結果216

付編 3

[挿 図]	[表]
図1 出土鉄洋の全鉄量-チタニア量分布図225	図4 試料№F B I 000008のX線回折233
図2 製錬洋と鍛冶洋の分類226	図5 試料№F B I 000009のX線回折234
図3 砂鉄系鍛冶洋と鉱石系製錬洋の分類226	
[表]	
表1 調査項目217	表3 出土鉄塊の化学成分分析結果224
表2 出土鉄洋類の化学成分分析結果224	
[写 真]	
写真1 高木・北ノ脇遺跡の鉄洋外観写真228	写真7 試料№F B I 000005鉄洋の組織写真231
写真2 高木遺跡の鉄洋外観写真229	写真8 試料№F B I 000006鉄洋の組織写真231
写真3 試料№F B I 000001鉄洋の組織写真230	写真9 試料№F B I 000007鉄洋の組織写真232
写真4 試料№F B I 000002鉄洋の組織写真230	写真10 試料№F B I 000008鉄洋の組織写真232
写真5 試料№F B I 000003鉄洋の組織写真230	写真11 試料№F B I 000009鉄洋の組織写真232
写真6 試料№F B I 000004鉄洋の組織写真231	

付編 4

[挿 図]	[表]
図1 胎土分析試料集成 (1)240	図6 胎土分析試料集成 (6)245
図2 胎土分析試料集成 (2)241	図7 須恵器のクラスター分析246
図3 胎土分析試料集成 (3)242	図8 出土須恵器の両分布図247
図4 胎土分析試料集成 (4)243	図9 土師器クラスター分析248
図5 胎土分析試料集成 (5)244	図10 高木遺跡出土土師器の両分布図248
[表]	
表1 阿武隈川右岸築堤遺跡出土須恵器分析データ236	表2 阿武隈川右岸築堤遺跡出土土師器分析データ239

写 真 目 次

第1編 高 木 遺 跡

1 調査前遠景 (西より)251	17 5号住居跡 (南東より)258
2 調査前遠景 (南より)251	18 5号住居跡検出状況 (北西より)259
3 調査区遠景 (西より)252	19 5号住居跡細部259
4 調査区遠景 (北より)252	20 6号住居跡検出状況 (東より)260
5 基本土層拡大 (南より)253	21 6号住居跡 (東より)260
6 基本土層 (東より)253	22 6号住居跡細部261
7 作業風景253	23 6号住居跡細部261
8 基本土層 (南東より)254	24 7号住居跡 (南より)262
9 基本土層東西拡大 (北より)254	25 8号住居跡 (南西より)262
10 1号住居跡 (南東より)255	26 8号住居跡カマド (南西より)263
11 1号住居跡細部255	27 8号住居跡細部263
12 2号住居跡 (北東より)256	28 9号住居跡 (北西より)264
13 3号住居跡 (南東より)256	29 9号住居跡カマド (南より)264
14 3号住居跡 (北東より)257	30 10号住居跡 (西より)265
15 3号住居跡細部257	31 10号住居跡細部265
16 4号住居跡 (西より)258	32 11号住居跡 (東より)266

33	11号住居跡検出状況(南より)	266	89	31号住居跡細部	294
34	11号住居跡西平検出状況(南より)	267	90	32号住居跡(北東より)	295
35	11号住居跡細部	267	91	32号住居跡細部	295
36	12号住居跡(東より)	268	92	33号住居跡(東より)	296
37	12号住居跡細部	268	93	33号住居跡細部	296
38	13号住居跡(南東より)	269	94	34号住居跡(東より)	297
39	13号住居跡検出状況(南東より)	269	95	34号住居跡検出状況(東より)	297
40	14号住居跡検出状況(南西より)	270	96	34号住居跡細部	298
41	15号住居跡カマド検出状況(北西より)	270	97	34号住居跡カマド(東より)	298
42	15号住居跡カマド断層状況(北西より)	271	98	35号住居跡(東より)	299
43	16号住居跡(南東より)	271	99	35号住居跡検出状況(東より)	299
44	16号住居跡検出状況(北西より)	272	100	35号住居跡細部	300
45	16号住居跡細部	272	101	36号住居跡(南より)	300
46	16号住居跡カマド遺物出土状況(南東より)	273	102	36号住居跡細部	301
47	16号住居跡遺物出土状況(南東より)	273	103	37号住居跡(南東より)	301
48	17A号住居跡(南東より)	274	104	37号住居跡細部	302
49	17A号住居跡カマド(南東より)	274	105	38号住居跡(南西より)	302
50	17A号住居跡検出状況(北西より)	275	106	38号住居跡検出状況(南西より)	303
51	17A号住居跡細部	275	107	38号住居跡細部	303
52	17B号住居跡(南東より)	276	108	39号住居跡(東より)	304
53	17B号住居跡検出状況(北東より)	276	109	39号住居跡検出状況(北より)	304
54	17B号住居跡(南東より)	277	110	40号住居跡(東より)	305
55	17B号住居跡細部	277	111	40号住居跡検出状況(東より)	305
56	18号住居跡(南東より)	278	112	40号住居跡カマド(東より)	306
57	18号住居跡カマド(南より)	278	113	40号住居跡細部	306
58	18・19号住居跡細部	279	114	41号住居跡(南より)	307
59	19号住居跡(南西より)	279	115	42号住居跡(西より)	307
60	20号住居跡(南より)	280	116	42号住居跡カマド(西より)	308
61	20号住居跡細部	280	117	42号住居跡細部	308
62	22号住居跡(東より)	281	118	43号住居跡(南西より)	309
63	22号住居跡細部	281	119	43号住居跡検出状況(南西より)	309
64	23号住居跡(南より)	282	120	43号住居跡カマド(南より)	310
65	23号住居跡カマド(南より)	282	121	43号住居跡細部	310
66	23号住居跡細部	283	122	44号住居跡(南東より)	311
67	23号住居跡細部	283	123	44号住居跡検出状況(東より)	311
68	24号住居跡(東より)	284	124	44号住居跡カマド(南東より)	312
69	25号住居跡(西より)	284	125	44号住居跡細部	312
70	25号住居跡細部	285	126	45号住居跡(南西より)	313
71	25号住居跡細部	285	127	45号住居跡遺構断面(南より)	313
72	26号住居跡(南東より)	286	128	46号住居跡(南西より)	314
73	26号住居跡検出状況(南東より)	286	129	46号住居跡検出状況(南西より)	314
74	26号住居跡(南東より)	287	130	46号住居跡細部	315
75	26号住居跡細部	287	131	47号住居跡(東より)	315
76	26号住居跡細部	288	132	47号住居跡カマド(東より)	316
77	26号住居跡細部	288	133	47号住居跡細部	316
78	27号住居跡(南西より)	289	134	48号住居跡(南より)	317
79	27号住居跡カマド(南より)	289	135	48号住居跡細部	317
80	27号住居跡細部	290	136	49号住居跡検出状況(東より)	318
81	27号住居跡遺物出土状況(北より)	290	137	49号住居跡周辺検出状況(西より)	318
82	28号住居跡(北西より)	291	138	49号住居跡遺構断面(西より)	319
83	30号住居跡(南東より)	291	139	49号住居跡細部	319
84	30号住居跡遺物出土状況(南東より)	292	140	50号住居跡(西より)	320
85	30号住居跡検出状況(南東より)	292	141	50号住居跡(北より)	320
86	30号住居跡遺物出土状況(南西より)	293	142	50号住居跡カマド(西より)	321
87	30号住居跡遺構断面(北東より)	293	143	50号住居跡細部	321
88	31号住居跡(東より)	294	144	50号住居跡検出状況(南より)	322

145	51号住居跡カマド (南より)	322	201	78号住居跡細部	350
146	52号住居跡検出状況 (南より)	323	202	79号住居跡 (南より)	351
147	53号住居跡 (南東より)	323	203	79号住居跡細部	351
148	53号住居跡検出状況 (東より)	324	204	80号住居跡遺物出土状況 (北西より)	352
149	53号住居跡細部	324	205	80号住居跡遺物出土状況 (北東より)	352
150	55号住居跡遺構断面 (南東より)	325	206	80号住居跡細部	353
151	56号住居跡カマド (南より)	325	207	81号住居跡 (東より)	353
152	56号住居跡細部	326	208	81号住居跡細部	354
153	57号住居跡検出状況 (東より)	326	209	81号住居跡細部	354
154	58号住居跡 (南東より)	327	210	82号住居跡 (東より)	355
155	58・59号住居跡検出状況 (南より)	327	211	82号住居跡遺物出土状況 (東より)	355
156	58号住居跡細部	328	212	82号住居跡細部	356
157	59号住居跡細部	328	213	82号住居跡遺物出土状況 (南東より)	356
158	60号住居跡 (南西より)	329	214	83号住居跡 (南東より)	357
159	60号住居跡 (南西より)	329	215	83号住居跡細部	357
160	60号住居跡検出状況 (北東より)	330	216	84号住居跡 (南東より)	358
161	60号住居跡細部	330	217	84号住居跡細部	358
162	60号住居跡カマド (南西より)	331	218	85号住居跡 (東より)	359
163	60号住居跡細部	331	219	85号住居跡細部	359
164	60号住居跡細部	332	220	86号住居跡 (東より)	360
165	60号住居跡細部	332	221	86号住居跡細部	360
166	61号住居跡 (南東より)	333	222	87号住居跡 (東より)	361
167	62号住居跡 (南より)	333	223	87号住居跡細部	361
168	62号住居跡 (西より)	334	224	87号住居跡細部	362
169	62号住居跡細部	334	225	88号住居跡 (南東より)	362
170	63号住居跡 (西より)	335	226	88号住居跡細部	363
171	63号住居跡検出状況 (西より)	335	227	89号住居跡 (南西より)	363
172	64号住居跡 (南西より)	336	228	89号住居跡細部	364
173	64号住居跡検出状況 (南西より)	336	229	90号住居跡 (北東より)	364
174	64号住居跡細部	337	230	90号住居跡細部	365
175	65号住居跡焼土範圍 (東より)	337	231	91号住居跡検出状況 (南より)	365
176	65号住居跡細部	338	232	91号住居跡細部	366
177	66号住居跡 (南より)	338	233	92号住居跡カマド (北より)	366
178	66号住居跡 (南より)	339	234	93号住居跡 (南西より)	367
179	66号住居跡細部	339	235	93号住居跡細部	367
180	66号住居跡細部	340	236	94号住居跡 (南より)	368
181	66号住居跡細部	340	237	94号住居跡細部	368
182	68号住居跡検出状況 (南より)	341	238	94号住居跡カマド (南より)	369
183	68号住居跡細部	341	239	95号住居跡 (南東より)	369
184	69号住居跡 (北西より)	342	240	95号住居跡検出状況 (南東より)	370
185	69号住居跡検出状況 (南より)	342	241	95号住居跡細部	370
186	70号住居跡 (東より)	343	242	96号住居跡 (南より)	371
187	70号住居跡細部	343	243	96号住居跡細部	371
188	71号住居跡検出状況 (西より)	344	244	97号住居跡 (南東より)	372
189	72号住居跡カマド断層状況 (北東より)	344	245	97号住居跡細部	372
190	73号住居跡 (北東より)	345	246	97号住居跡細部	373
191	74号住居跡 (北より)	345	247	98号住居跡 (南東より)	373
192	75号住居跡 (南東より)	346	248	98号住居跡カマド (南東より)	374
193	75号住居跡検出状況 (南西より)	346	249	98号住居跡カマド遺物出土状況 (南東より)	374
194	75号住居跡細部	347	250	98号住居跡細部	375
195	75号住居跡細部	347	251	98号住居跡細部	375
196	76号住居跡 (南東より)	348	252	99号住居跡 (東より)	376
197	76号住居跡細部	348	253	99号住居跡細部	376
198	77号住居跡 (南より)	349	254	100号住居跡 (北より)	377
199	77号住居跡細部	349	255	100号住居跡細部	377
200	78号住居跡 (東より)	350	256	101号住居跡 (南東より)	378

257	101号住居跡細部	378	313	126号住居跡遺構断面(南より)	406
258	102号住居跡(北より)	379	314	127号住居跡(南より)	407
259	102号住居跡細部	379	315	127号住居跡遺構断面(北より)	407
260	102号住居跡カマド前遺物出土状況(北より)	380	316	128号住居跡(西より)	408
261	102号住居跡細部	380	317	129号住居跡(東より)	408
262	103号住居跡(南より)	381	318	129号住居跡遺物出土状況(西より)	409
263	103号住居跡検出状況(東より)	381	319	130号住居跡(西より)	409
264	103号住居跡カマド(南より)	382	320	131号住居跡(東より)	410
265	103号住居跡細部	382	321	131号住居跡カマド断面状況(東より)	410
266	103号住居跡細部	383	322	134号住居跡(東より)	411
267	103号住居跡細部	383	323	134号住居跡検出状況(西より)	411
268	104号住居跡(南東より)	384	324	135号住居跡(南より)	412
269	104号住居跡細部	384	325	135号住居跡遺構断面(南より)	412
270	105号住居跡(南東より)	385	326	136・146号住居跡(東より)	413
271	106号住居跡(南より)	385	327	136号住居跡細部	413
272	106号住居跡カマド(南より)	386	328	137号住居跡検出状況(南東より)	414
273	106号住居跡細部	386	329	137号住居跡細部	414
274	107号住居跡検出状況(南東より)	387	330	137号住居跡(南東より)	415
275	108号住居跡(南東より)	387	331	137号住居跡カマド(南東より)	415
276	108号住居跡カマド(南東より)	388	332	138号住居跡(南東より)	416
277	108号住居跡細部	388	333	138号住居跡検出状況(南東より)	416
278	109号住居跡(東より)	389	334	138号住居跡カマド(南東より)	417
279	109号住居跡細部	389	335	138号住居跡細部	417
280	109号住居跡カマド遺物出土状況(東より)	390	336	138号住居跡カマド前礎出土状況(南東より)	418
281	109号住居跡細部	390	337	138号住居跡掘形(南東より)	418
282	110号住居跡(南西より)	391	338	139号住居跡(南東より)	419
283	110号住居跡細部	391	339	139号住居跡検出状況(南東より)	419
284	111号住居跡(南東より)	392	340	140号住居跡(南より)	420
285	111号住居跡検出状況(南東より)	392	341	141号住居跡(北西より)	420
286	111号住居跡細部	393	342	142号住居跡(北より)	421
287	112号住居跡(西より)	393	343	142号住居跡検出状況(北より)	421
288	112号住居跡検出状況(西より)	394	344	142号住居跡カマド(北より)	422
289	112号住居跡細部	394	345	142号住居跡カマド(北より)	422
290	113号住居跡(東より)	395	346	142号住居跡カマド断面状況(北より)	423
291	113号住居跡検出状況(北より)	395	347	142号住居跡細部	423
292	114号住居跡(南東より)	396	348	142号住居跡細部	424
293	114号住居跡細部	396	349	142号住居跡細部	424
294	118号住居跡(南西より)	397	350	143号住居跡(南東より)	425
295	118号住居跡細部	397	351	143号住居跡検出状況(南東より)	425
296	119号住居跡(東より)	398	352	143号住居跡作業風景(南東より)	426
297	119号住居跡細部	398	353	143号住居跡細部	426
298	120号住居跡(南東より)	399	354	143号住居跡カマド(南東より)	427
299	120号住居跡検出状況(南東より)	399	355	143号住居跡細部	427
300	120号住居跡遺物出土状況(南より)	400	356	144号住居跡(南東より)	428
301	120号住居跡細部	400	357	144号住居跡遺物出土状況(南東より)	428
302	121号住居跡(南より)	401	358	144号住居跡カマド(南東より)	429
303	121号住居跡細部	401	359	144号住居跡細部	429
304	122号住居跡検出状況(東より)	402	360	144号住居跡細部	430
305	122号住居跡細部	402	361	144号住居跡遺物出土状況(南東より)	430
306	123号住居跡(西より)	403	362	145号住居跡(南東より)	431
307	123号住居跡検出状況(南東より)	403	363	145号住居跡細部	431
308	124号住居跡(北西より)	404	364	147号住居跡(南より)	432
309	124号住居跡遺構断面(南西より)	404	365	147号住居跡細部	432
310	125号住居跡(南東より)	405	366	148号住居跡(南より)	433
311	125号住居跡細部	405	367	148号住居跡カマド(南東より)	433
312	126号住居跡(南西より)	406	368	148号住居跡細部	434

369	149号住居跡（南西より）	434	425	194号住居跡検出状況（南西より）	462
370	151号住居跡（南東より）	435	426	195号住居跡遺構断面（北より）	463
371	151号住居跡細部	435	427	195号住居跡遺構断面拡大（北より）	463
372	153号住居跡（南東より）	436	428	196号住居跡（東より）	464
373	153号住居跡細部	436	429	196号住居跡細部	464
374	154号住居跡（東より）	437	430	199号住居跡（東より）	465
375	154号住居跡検出状況（東より）	437	431	199号住居跡細部	465
376	155号住居跡（南西より）	438	432	200号住居跡（東より）	466
377	156号住居跡（北東より）	438	433	200号住居跡検出状況（東より）	466
378	157号住居跡（南より）	439	434	214号住居跡（南東より）	467
379	157号住居跡細部	439	435	214号住居跡細部	467
380	157号住居跡カマド（南より）	440	436	1～3号土坑	468
381	158号住居跡（東より）	440	437	4～5号土坑	468
382	158号住居跡細部	441	438	5～7号土坑（東より）	469
383	159号住居跡（南東より）	441	439	5～7号土坑検出状況（北東より）	469
384	159号住居跡カマド（南東より）	442	440	6～8号土坑	470
385	159号住居跡細部	442	441	8・9・12号土坑	470
386	160号住居跡（南西より）	443	442	13・14号土坑	471
387	160号住居跡細部	443	443	15・16号土坑	471
388	161号住居跡（東より）	444	444	17号土坑細部	472
389	161号住居跡（北より）	444	445	18・19号土坑	472
390	161号住居跡細部	445	446	21・22号土坑	473
391	161号住居跡細部	445	447	23・24号土坑	473
392	162号住居跡（北東より）	446	448	26・29号土坑	474
393	162号住居跡細部	446	449	30・31号土坑	474
394	164号住居跡（東より）	447	450	32・35号土坑	475
395	164号住居跡細部	447	451	43・54号土坑	475
396	165号住居跡（南東より）	448	452	55・56号土坑	476
397	165号住居跡遺構断面（南西より）	448	453	57・58号土坑	476
398	166号住居跡（南東より）	449	454	1号溝跡検出状況（南東より）	477
399	167号住居跡検出状況（東より）	449	455	1号溝跡細部	477
400	169号住居跡（東より）	450	456	1号溝跡（南東より）	478
401	169号住居跡刈込検出状況（西より）	450	457	1・5号溝跡検出状況（南東より）	478
402	169号住居跡細部	451	458	1号溝跡細部	479
403	169号住居跡細部	451	459	1号溝跡細部	479
404	170号住居跡検出状況（南東より）	452	460	1号溝跡・6号特殊遺構（西より）	480
405	170号住居跡細部	452	461	a.6号特殊遺構断面（北東より）	480
406	173号住居跡（北西より）	453	b.1号溝跡銅圓出土状況（西より）	480	
407	173号住居跡細部	453	c.13号集石検出状況（南より）	480	
408	174号住居跡（南東より）	454	d.13号集石遺構断面（西より）	480	
409	174号住居跡遺構断面（南東より）	454	462	2号溝跡流渠（南東より）	481
410	178号住居跡（南より）	455	463	2号溝跡細部	482
411	178号住居跡細部	455	464	2号溝跡遺物出土状況（西より）	482
412	180号住居跡（東より）	456	465	2号溝跡遺物出土状況（東より）	483
413	180号住居跡検出状況（東より）	456	466	2号溝跡A群遺構断面（北東より）	484
414	181号住居跡（南東より）	457	467	2号溝跡細部	484
415	181号住居跡検出状況（南東より）	457	468	2号溝跡細部	485
416	185号住居跡（東より）	458	469	2号溝跡E・F群（北東より）	485
417	187号住居跡（東より）	458	470	2号溝跡E群（北東より）	486
418	191号住居跡（北西より）	459	471	2号溝跡F群（北東より）	486
419	191号住居跡細部	459	472	2号溝跡E・F群断部状況（北西より）	487
420	192号住居跡検出状況（南東より）	460	473	2号溝跡細部	487
421	192号住居跡遺構断面（北西より）	460	474	4号溝跡（南西より）	488
422	193号住居跡（西より）	461	475	4号溝跡細部	488
423	193号住居跡遺構断面（北西より）	461	476	5号溝跡検出状況（南東より）	489
424	194号住居跡（北西より）	462	477	5号溝跡細部	489

478	1～3号焼土遺構	490	534	49号住居跡出土遺物	537
479	3号焼土遺構細部	490	535	49号住居跡出土遺物	538
480	1号特殊遺構細部	490	536	49～52号住居跡出土遺物	539
481	1号特殊遺構細部	491	537	54・55・58・59号住居跡出土遺物	540
482	2号特殊遺構(南西より)	491	538	60号住居跡出土遺物	541
483	3号特殊遺構(北東より)	492	539	60号住居跡出土遺物	542
484	3・5・7号特殊遺構	492	540	60～64号住居跡出土遺物	543
485	1号遺物包含層遠景(南東より)	493	541	64・65号住居跡出土遺物	544
486	1号遺物包含層(南より)	493	542	64～66号住居跡出土遺物	545
487	1号遺物包含層遠景(北東より)	494	543	66号住居跡出土遺物	546
488	1号遺物包含層遠景(南東より)	494	544	66・70・71・73号住居跡出土遺物	547
489	1号遺物包含層拡大(東より)	495	545	73・75号住居跡出土遺物	548
490	1号遺物包含層細部	495	546	75号住居跡出土遺物	549
491	1号遺物包含層拡大(東より)	496	547	75～77・79号住居跡出土遺物	550
492	1号遺物包含層拡大(東より)	496	548	77・80号住居跡出土遺物	551
493	作業風景	496	549	80号住居跡出土遺物	552
494	1号住居跡出土遺物	497	550	80号住居跡出土遺物	553
495	1号住居跡出土遺物	498	551	80号住居跡出土遺物	554
496	1号住居跡出土遺物	499	552	80・81号住居跡出土遺物	555
497	2～4号住居跡出土遺物	500	553	81号住居跡出土遺物	556
498	4・5号住居跡出土遺物	501	554	81・82号住居跡出土遺物	557
499	5・6号住居跡出土遺物	502	555	82号住居跡出土遺物	558
500	6～8号住居跡出土遺物	503	556	82・83号住居跡出土遺物	559
501	9・10号住居跡出土遺物	504	557	84・85号住居跡出土遺物	560
502	11号住居跡出土遺物	505	558	85・87・88号住居跡出土遺物	561
503	11・12号住居跡出土遺物	506	559	87・88号住居跡出土遺物	562
504	12～15号住居跡出土遺物	507	560	88号住居跡出土遺物	563
505	15号住居跡出土遺物	508	561	88・89号住居跡出土遺物	564
506	16号住居跡出土遺物	509	562	88・90号住居跡出土遺物	565
507	16号住居跡出土遺物	510	563	91号住居跡出土遺物	566
508	16号住居跡出土遺物	511	564	91～94号住居跡出土遺物	567
509	16・17A号住居跡出土遺物	512	565	92・94号住居跡出土遺物	568
510	17A・17B・18号住居跡出土遺物	513	566	94号住居跡出土遺物	569
511	18～20・23号住居跡出土遺物	514	567	94・95号住居跡出土遺物	570
512	23・24号住居跡出土遺物	515	568	94・97・98号住居跡出土遺物	571
513	24～26号住居跡出土遺物	516	569	98号住居跡出土遺物	572
514	26・27号住居跡出土遺物	517	570	98号住居跡出土遺物	573
515	27号住居跡出土遺物	518	571	98～100号住居跡出土遺物	574
516	27号住居跡出土遺物	519	572	100号住居跡出土遺物	575
517	27・28・30号住居跡出土遺物	520	573	100・101号住居跡出土遺物	576
518	30号住居跡出土遺物	521	574	101・102号住居跡出土遺物	577
519	30号住居跡出土遺物	522	575	102号住居跡出土遺物	578
520	31号住居跡出土遺物	523	576	102・103号住居跡出土遺物	579
521	31・32・34号住居跡出土遺物	524	577	103号住居跡出土遺物	580
522	34・36号住居跡出土遺物	525	578	103・104号住居跡出土遺物	581
523	36号住居跡出土遺物	526	579	105・106号住居跡出土遺物	582
524	36号住居跡出土遺物	527	580	106号住居跡出土遺物	583
525	36～38号住居跡出土遺物	528	581	107・108号住居跡出土遺物	584
526	40号住居跡出土遺物	529	582	107・108号住居跡出土遺物	585
527	42・43号住居跡出土遺物	530	583	108号住居跡出土遺物	586
528	43号住居跡出土遺物	531	584	108・109号住居跡出土遺物	587
529	44号住居跡出土遺物	532	585	109・110号住居跡出土遺物	588
530	44～46号住居跡出土遺物	533	586	110・111号住居跡出土遺物	589
531	47・48号住居跡出土遺物	534	587	110～112号住居跡出土遺物	590
532	48号住居跡出土遺物	535	588	112・114・118号住居跡出土遺物	591
533	48・49号住居跡出土遺物	536	589	118号住居跡出土遺物	592

590	118 · 120号住居跡出土遺物	593	646	1号溝跡出土遺物	649
591	120号住居跡出土遺物	594	647	1号溝跡出土遺物	650
592	120～122号住居跡出土遺物	595	648	1号溝跡、6号特殊遺構出土遺物	651
593	121 · 122号住居跡出土遺物	596	649	6号特殊遺構出土遺物	652
594	122 · 123号住居跡出土遺物	597	650	2号溝跡出土遺物	653
595	123 · 126 · 127 · 129号住居跡出土遺物	598	651	2号溝跡出土遺物	654
596	129 · 131 · 136号住居跡出土遺物	599	652	2号溝跡出土遺物	655
597	134 · 136号住居跡出土遺物	600	653	2号溝跡出土遺物	656
598	136号住居跡出土遺物	601	654	2号溝跡出土遺物	657
599	136号住居跡出土遺物	602	655	2号溝跡出土遺物	658
600	136～138号住居跡出土遺物	603	656	2号溝跡出土遺物	659
601	137 · 138号住居跡出土遺物	604	657	2号溝跡出土遺物	660
602	138 · 139 · 142号住居跡出土遺物	605	658	2号溝跡出土遺物	661
603	142号住居跡出土遺物	606	659	2号溝跡出土遺物	662
604	142号住居跡出土遺物	607	660	2号溝跡出土遺物	663
605	142号住居跡出土遺物	608	661	2号溝跡出土遺物	664
606	142 · 143号住居跡出土遺物	609	662	2号溝跡出土遺物	665
607	142 · 143号住居跡出土遺物	610	663	2号溝跡出土遺物	666
608	143号住居跡出土遺物	611	664	2号溝跡出土遺物	667
609	143号住居跡出土遺物	612	665	2号溝跡出土遺物	668
610	143号住居跡出土遺物	613	666	2号溝跡出土遺物	669
611	143号住居跡出土遺物	614	667	2号溝跡出土遺物	670
612	143号住居跡出土遺物	615	668	2号溝跡出土遺物	671
613	144号住居跡出土遺物	616	669	2号溝跡出土遺物	672
614	144号住居跡出土遺物	617	670	2号溝跡出土遺物	673
615	144号住居跡出土遺物	618	671	2号溝跡出土遺物	674
616	144号住居跡出土遺物	619	672	2号溝跡出土遺物	675
617	144号住居跡出土遺物	620	673	4 · 5号溝跡出土遺物	676
618	144号住居跡出土遺物	621	674	1号遺物包含層出土遺物	677
619	144号住居跡出土遺物	622	675	1号遺物包含層出土遺物	678
620	144号住居跡出土遺物	623	676	1号遺物包含層出土遺物	679
621	144 · 147号住居跡出土遺物	624	677	1号遺物包含層出土遺物	680
622	147 · 148 · 156号住居跡出土遺物	625	678	1号遺物包含層出土遺物	681
623	154 · 156 · 157号住居跡出土遺物	626	679	1号遺物包含層出土遺物	682
624	157号住居跡出土遺物	627	680	1号遺物包含層出土遺物	683
625	158 · 159号住居跡出土遺物	628	681	1号遺物包含層出土遺物	684
626	159 · 160号住居跡出土遺物	629	682	1号遺物包含層出土遺物	685
627	161 · 162 · 164号住居跡出土遺物	630	683	1号遺物包含層出土遺物	686
628	164 · 165号住居跡出土遺物	631	684	1号遺物包含層出土遺物	687
629	165 · 169 · 170 · 173号住居跡出土遺物	632	685	1号遺物包含層出土遺物	688
630	174号住居跡出土遺物	633	686	1号遺物包含層、遺構外出土遺物	689
631	174 · 191 · 193 · 194号住居跡出土遺物	634	687	遺構外出土遺物	690
632	194 · 195号住居跡出土遺物	635	688	遺構外出土遺物	691
633	195 · 196号住居跡出土遺物	636	689	遺構外出土遺物	692
634	195 · 196 · 199号住居跡出土遺物	637	690	遺構外出土遺物	693
635	199号住居跡出土遺物	638	691	遺構外出土遺物	694
636	199 · 214号住居跡、12 · 14 · 17号土坑出土遺物	639	692	遺構外出土遺物	695
637	17 · 18号土坑出土遺物	640	693	遺構外出土遺物	696
638	18 · 22 · 35号土坑出土遺物	641	694	遺構外出土遺物	697
639	1 · 3号焼土遺構、2 · 7号特殊遺構出土遺物	642	695	遺構外出土遺物	698
640	1号溝跡出土遺物	643	696	遺構外出土遺物	699
641	1号溝跡出土遺物	644	697	遺構外出土遺物	700
642	1号溝跡出土遺物	645	698	遺構外出土遺物	701
643	1号溝跡出土遺物	646	699	遺構外出土遺物	702
644	1号溝跡出土遺物	647	700	遺構外出土遺物	703
645	1号溝跡出土遺物	648	701	遺構外出土遺物	704

702	遺構外出土遺物	705	706	遺構外出土遺物	709
703	遺構外出土遺物	706	707	遺構外出土遺物	710
704	遺構外出土遺物	707	708	遺構外出土遺物	711
705	遺構外出土遺物	708			

第2編 北ノ脇遺跡

1	調査区全景（北より）	715	44	30号住居跡（南より）	736
2	調査風景	715	45	30号住居跡カマド（南より）	736
3	1号住居跡（南西より）	716	46	31号住居跡（南西より）	737
4	2号住居跡（南西より）	716	47	33号住居跡（西より）	737
5	2・3号住居跡細部	717	48	32号住居跡（南東より）	738
6	3号住居跡（南東より）	717	49	32号住居跡カマド（南東より）	738
7	4号住居跡（南東より）	718	50	35号住居跡（南東より）	739
8	5号住居跡（北西より）	718	51	36号住居跡（東より）	739
9	6号住居跡（南西より）	719	52	37号住居跡（東より）	740
10	6号住居跡細部	719	53	38号住居跡（南より）	740
11	7号住居跡（南西より）	720	54	39号住居跡（東より）	741
12	7号住居跡カマド（南西より）	720	55	40号住居跡（東より）	741
13	8号住居跡（西より）	721	56	41号住居跡（南より）	742
14	9号住居跡（南より）	721	57	41号住居跡遺物出土状況（南より）	742
15	10号住居跡（西より）	722	58	41号住居跡細部	743
16	10号住居跡細部	722	59	42号住居跡（南東より）	743
17	11号住居跡（南東より）	723	60	1号土坑、ビット群	743
18	12号住居跡（西より）	723	61	1・2・3号柱列跡全景（南西より）	744
19	13号住居跡（南東より）	724	62	冬場の調査風景（北ノ脇遺跡を臨む）	744
20	14号住居跡（北東より）	724	63	1・2号住居跡出土遺物	745
21	15号住居跡（南東より）	725	64	3号住居跡出土遺物	746
22	15号住居跡細部	725	65	4・6号住居跡出土遺物	747
23	16号住居跡（南東より）	726	66	6・7・9・10号住居跡出土遺物	748
24	16号住居跡細部	726	67	12・15号住居跡出土遺物	749
25	17号住居跡（東より）	727	68	15・16号住居跡出土遺物	750
26	17号住居跡細部	727	69	16～18号住居跡出土遺物	751
27	18号住居跡（南東より）	728	70	18・19・21～23号住居跡出土遺物	752
28	19号住居跡（南東より）	728	71	24・25号住居跡出土遺物	753
29	20号住居跡	729	72	25・26号住居跡出土遺物	754
30	21号住居跡遺構断面（東より）	729	73	26・27号住居跡出土遺物	755
31	22号住居跡遺構断面（南より）	730	74	27・29・31号住居跡出土遺物	756
32	23号住居跡（南より）	730	75	32～35・37・38号住居跡出土遺物	757
33	24号住居跡（南より）	731	76	41号住居跡、1号土坑出土遺物	758
34	24号住居跡細部	731	77	1号土坑、O19-7・P2、遺構外出土遺物	759
35	25号住居跡（東より）	732	78	遺構外出土遺物	760
36	25号住居跡細部	732	79	遺構外出土遺物	761
37	26号住居跡（南東より）	733	80	遺構外出土遺物	762
38	26号住居跡細部	733	81	遺構外出土遺物、土製品、石製品	763
39	27号住居跡（南東より）	734	82	土製品、石製品	764
40	27号住居跡細部	734	83	ミニチュア土器、手捏土器	765
41	28号住居跡細部	735	84	土・石製玉類	765
42	29号住居跡（北西より）	735	85	鉄製品、グリッドビット出土柱材	766
43	34号住居跡（北西より）	735			

付図

付図 高木・北ノ脇遺跡遺構配置図

第2編 北ノ脇遺跡

遺跡記号 MM-KW

所在地 安達郡本宮町高木字北ノ脇

調査期間 平成11年4月12日～12月23日

調査員 松本 茂・安田 稔・高久田富裕
佐藤あかり・成田有葉・菅原祥夫
小暮伸之・木村直之・大河原勉
堀川雄二・大波紀子

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査経過

財団法人福島県文化振興事業団（当時は財団法人福島県文化センター）では、福島県教育委員会から本宮町阿武隈川右岸築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務を受託し、平成11年度から本宮町教育委員会とともに発掘調査を行った。対象となる49,500㎡のうち、県で調査を行った範囲は、Ⅰ・Ⅲ期工区18,050㎡（高木・北ノ脇遺跡）とⅡ期工区9,000㎡（山王川原遺跡）である。

そのうち県調査分の北ノ脇遺跡は、Ⅰ・Ⅲ期工区の北側部分である。北ノ脇遺跡の範囲では、以前に昭代橋建設や宅地造成に伴い、本宮町教育委員会によってⅠ～Ⅲ区の3地点の発掘調査が行われている。そのような経緯から、今回の発掘調査は4地点目であり、「北ノ脇遺跡Ⅳ区」となる。Ⅰ～Ⅲ区の総面積は約1,870㎡ほどで、そこからは古墳時代から平安時代にかけての堅穴住居跡を中心とした遺構を検出している。

事業団では、当事業に2班10名体制をとり、当初は高木・北ノ脇遺跡のⅠ・Ⅲ期工区分を1班5名で調査にあたった。高木・北ノ脇遺跡には未解決問題も多かったが、遺構密度は予想を遙かに上回り、砂質土の検出作業は困難を極めたことから、調査はなかなか進展しなかった。

8月末にⅡ期工区分の山王川原遺跡の調査が終了し、そこから高木・北ノ脇遺跡に調査員が合流したため、ようやく上層部分の見通しがつくようになった。その段階で北ノ脇遺跡の調査に移行することが可能となり、9月下旬から重機で調査区内の表土剥ぎを行った。9月末には高木遺跡の上層部分の一部を残して終了する見込みとなり、高木遺跡の下層部分と北ノ脇遺跡とに分かれて調査を行うこととなった。北ノ脇遺跡には、常時2～3名の調査員が配された。

10月に入って、調査区内のグリッド杭を設定しながら、グリッドごとに遺物包含層である基本土層LⅡの掘り込みを開始した。LⅡの遺物包含層からは、遺存状態の良い遺物が多数出土したが、LⅡ中からの遺構検出は困難であった。検出作業はなかなかはかどらず、無遺物層のLⅢ付近まで掘り下げなければならなかった。しかし、そのような作業を踏まえて、調査区内全体の遺構の重複



作業風景

状況がほぼ把握できると、10月半ば頃からは本格的に遺構精査に取り組むことができた。

11月6日（土）に現地説明会が行われ、準備などで調査は一時中断した形となったが、その後は比較的天候にも恵まれ、発掘調査は順調に進んだ。また、調査が進むにつれて出土遺物が増加したため、発掘調査と並行しながら遺物の洗浄作業も行った。

そのころになると、調査区内の下層部分の取り扱いが明確となった。北ノ脇遺跡の調査については、上層部分を12月中に終了させ、下層部分は年明け後に行うことに決められた。降雪は予想されたほどでなく、特に調査が終盤となった12月前半までは暖かな小春日和が続いたこともあり、上層部分の調査は余裕を持って終えることができた。

12月上旬には遺構の精査が一通り終了し、遺跡の全景写真を撮影し、地形測量を行った。最終的には、調査区全体を砂層のLⅣ上面まで掘り下げて、遺構や遺物の無いことを再確認した。その際に、LⅢ上面からは縄文土器片が出土したが、面的には広がらなかった。上層部分は、予定通り12月15日（水）までに調査を終了し、12月後半は年明け後の下層部分の調査準備に取りかかった。

整理作業は、すべての発掘調査が終了した平成12年度以降から行った。資料数が膨大であるため、古墳時代以降の上層部分と、縄文時代を中心とした下層部分とに分けて報告することとなった。本報告では上層部分を扱っている。

第2節 調査と整理の方法

北ノ脇遺跡の発掘調査は、阿武隈川右岸築堤事業に伴い、現状の変更が余儀なくされる部分について実施された。県教育委員会が担当した調査区は、山王川原遺跡の北側部分と、阿武隈川にかかる昭代橋と安達橋に挟まれた、北ノ脇遺跡と高木遺跡の範囲である。北ノ脇遺跡は、本宮町教育委員会と分担して調査が行われたが、県教育委員会が行ったのは、Ⅰ・Ⅲ期工区分の昭代橋を境にした南端部分にあたる。その部分は、阿武隈川に沿った、東西幅約40m、南北約55mである。

また、北ノ脇遺跡では、以前に、Ⅰ～Ⅲ区の3地点で発掘調査が実施されており、今回の調査区は「北ノ脇遺跡Ⅳ区」となる。

基準杭の設定は、調査区のはほぼ中央に位置する国土座標（ $X = 168,000 \cdot Y = 49,800$ ）を起点としている。この起点から、東西方向・南北方向の基準線を引き、調査区全体に40m四方の大グリッドを設定した。この大グリッドの中を、さらに4m四方の小グリッドで100区画に分割しており、遺構や遺物の位置関係などの基準となっている。

大グリッドの番号は、東西方向にアルファベットの大文字（西から東へA・B・C・…）、南北方

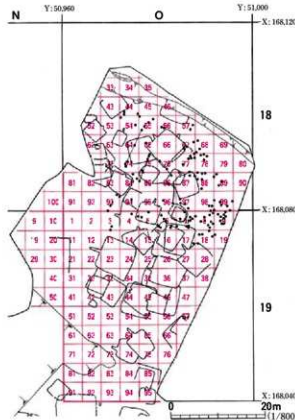


図1 グリッド設定図

向に算用数字（北から南へ1・2・3…）を付けて、「O18グリッド」などと呼称した。この番号は、開発地区全体をカバーできるように配慮して付けられている。県で担当した北ノ脇遺跡の調査区は、概ね「O18グリッド」「O19グリッド」にあてはまる。

小グリッド番号は、大グリッドの北西隅から南東隅に向かって1～100までの番号を振った。大グリッドの1辺を10ずつに区分し、北西隅から北東隅の番号は1・2…10、次は、また西から11・12…20と付けている。

遺構図を作成したり、遺物を取り上げたりする際には、この大グリッドと小グリッドを組み合わせて、「O18-82」などと表記している。

実際の調査にあたっては、はじめに重機を使用して表土を除去し、検出面を丁寧に削りながら遺構の輪郭を確認した。北ノ脇遺跡は阿武隈川が運んできた土砂が厚く堆積しており、その中からは残りの良い遺物が多数出土している。そのような包含層の遺物は、小グリッドごとに数段階に分けて掘り下げながら取り上げた。

調査中の作業は、河川側の斜面は急勾配となり崩落のおそれがあるため、足場の確保などを配慮しながら行っている。

遺構の掘り込みは、遺構数が多く、時間や人員に制約があったため、原則的に2分画法を用いて、手掘りで行っている。結果的には、遺構の遺存状態が悪かったため、有効な手段であった。また、住居跡のカマドや柱穴などの遺構本体に付属する施設を掘り込む場合や、重複する遺構の新旧関係を見極める場合などは、必要に際して土層観察用のベルトを適宜に設定している。

遺構の記録については、4m四方に設定した小グリッドをもとに、1m四方あるいは50cm四方の方眼を設定して、平面図・断面図を作成した。縮尺は1/20を基本としているが、遺物の出土状況やカマドなどの遺構の細部を記録する場合は、1/10縮尺で図化した。なお、地形図には平板やトータルステーションを使用し、1/200の縮尺で作成した。

写真撮影には、35mmと6×4.5cm版の中型カメラを併用し、露出を変えて同一被写体を、同一コマ数枚ずつ撮影した。フィルムはモノクロームとカラーリバーサルを使用している。場合によっては、遺跡全体の様子や臨場感を記録するために、高角度からの撮影も実施した。

発掘調査時に作成した各種図面は、報告書作成に際して、1枚ずつに遺構図用の整理スタンプを押し、市町村名、遺跡名、遺構名、図面の種別、断面図の測定標高、縮尺、実測年月日、実測者を銘記した。報告書作成後の遺物は、報告書に実測図を記載したものについては、一点ずつ挿入番号を記入した後、遺跡名、報告書名、挿入番号を銘記した整理箱に挿入ごとにまとめて収納した。

写真については、被写体、撮影方向、撮影日、フィルム番号を記入した写真台帳を作成した。現像された写真は、フィルムと一緒にネガアルバムに収納し、カラーリバーサル写真は、マウント部分に被写体、撮影方向を記入してから、スライドファイルに収納した。

発掘調査で得られた、これらの遺物、図面、写真などは、福島県文化振興事業団の収蔵施設に保管している。

第3節 遺構分布と基本土層

調査区内の地形と遺構の分布状況

今回対象となったところは、北ノ脇遺跡の南端にあたり、阿武隈川にかかる昭代橋を境にした南側である。調査区の範囲は阿武隈川のすぐ東側となり、南北約55m、東西約40mとあまり広くはないが、そこからは古墳時代から平安時代にかけての遺構が、多数検出されている。その範囲は、現地形ではほぼ平坦であるが、古代の遺跡が営まれたところの地形は、自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと緩やかに傾斜していた。

自然堤防は真北方向からやや西に傾くが、およそ南北方向へと延びており、検出された遺構は、東西幅約25mほどの自然堤防頂部となる、帯状の平坦面に密集している。その頂部平坦面の標高は約207.4～206.8mで、調査区内の最も標高の高い部分と低い部分とでは、約10mほどの高低差がある。

また、調査区から東へ約30mほどのところは、以前に、本宮町教育委員会で発掘調査が行われており、竪穴住居跡数軒を検出している。調査区の東側は、後背湿地が形成されていると考えられるが、本宮町教育委員会で調査を行った部分と、調査区内の緩斜面とは地形的につながっておらず、調査区の東側には、後背湿地から分岐した、沢状のものが入り込んだ地形となるかもしれない。

北ノ脇遺跡から検出した遺構のうち、古墳時代以降のものは竪穴住居跡42軒、土坑1基、柱列跡3基および多数のピット群である。これらの遺構のほとんどが、古墳時代後期から奈良時代にかけてのもので、竪穴住居跡よりもピット群のほうが新しい。図3の遺構配置図からもわかるように、竪穴住居跡を中心とした遺構は、著しく重複した状態で確認することができた。調査区範囲の面積は約1,300㎡ほどで、竪穴住居跡は4つの小グリッド(64㎡)につき、1.5軒の割合で存在している。

南接する高木遺跡の調査区北部では、後背湿地が形成されており、多種多量の遺物が出土して、祭祀が行われていた様子がうかがわれる。おそらく北ノ脇遺跡の東側斜面は、この部分に繋がっていくものと推察している。遺構はそのような地形のうち、竪穴住居跡が自然堤防の頂部平坦面に密集しており、ピット群が東側の緩斜面上から検出されている。

調査区内の自然堤防は、高木遺跡との境界付近がやや低くなっており、そこから僅かに北西方向に傾いて延びている。竪穴住居跡は調査区中央に多く分布するようであるが、北側の頂部平坦面は河川と接しているため、崩落して検出できなかった可能性がある。当時の河川は、もう少し西に流れていたのかもしれない。そのような制約もあるが、同じ自然堤防でも立地する地形は選択されていたようである。住居跡はできるだけ水はけの良い場所を選択していたようで、遺跡の境界付近や、頂部平坦面でも河川側にはあまり造られていない。

ピット群の時期は竪穴住居跡を掘り込んでいるため住居跡より新しく、建物跡を構成する柱穴であったと考えられる。それらピットは自然堤防上からの検出は少なく、東側の緩斜面上に多く分布する。そのことは住居跡内の堆積土中からの検出が困難であったことにもよるが、後背湿地側へ何

らかの建物跡が建設されていたようである。また、丸瓦が出土した住居跡があることから、付近には瓦葺きの建物跡が存在していたものと推察することができる。

北ノ脇遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡を主体とする集落遺跡である。その終わりには竪穴住居跡の数が激減し、掘立柱建物跡が建設されるようである。また、検出された住居跡の中には、高木遺跡よりも新しい時期のものを多く確認することができた。阿武隈川右岸の自然堤防上に営まれた集落は、ある時期になると、その主体が北ノ脇遺跡付近へと移るようである。

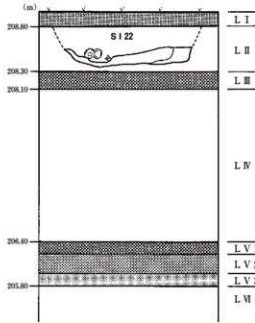
基本土層

北ノ脇遺跡は、阿武隈川右岸の自然堤防上に立地しており、河川が運んできた土砂が幾層にも堆積して形成されている。そのような堆積状況は、基本的には高木遺跡と一致しており、黒褐色の砂質土層と褐色の砂層とが交互に堆積する様子が観察できる。そのような基本土層は高木遺跡に準じており、L I～Vまでの5層に分層することができる。図2は、基本土層の模式図である。調査区北端から断面のみを検出した22号住居跡付近のもので、縮尺は任意である。

分層した5層のうち、鍵層となるのがL IIIの暗褐色砂質土の無遺物層である。この層は、調査区全域から確認できる安定した層で、古代の遺構の大半をL III上面から検出している。また、L III上

面からは、縄文時代晩期と考えられる遺物も出土しており、少なくともその時期以降の文化面は、L IIIが堆積した以降に形成されたようである。その上層に堆積するL IIのぶい黄褐色砂層は、検出した遺構と同時期の遺物が出土する包含層で、漸次堆積したものと考えられる。しかし、色調や含有物などからの識別は困難で、L IIを細分することはできなかった。

L IIIの下層に堆積するL IVは、ぶい黄褐色砂の無遺物層である。他の地点とは異なり、約2m近くも堆積していた。その下層のL Vは暗褐色砂質土で、縄文時代中期から後期にかけての遺物包含層である。本報告では直接関係しないため詳細については触れないが、L Vはさらに3層に細分することが可能である。(大 波)



- L I (現表土) ... 10Y R2/2 黒褐色砂質土
- L II ... 10Y R4/3 ぶい黄褐色砂
- L III ... 10Y R3/3 暗褐色砂質土
- L IV ... 10Y R6/3 ぶい黄褐色砂

図2 基本土層模式図

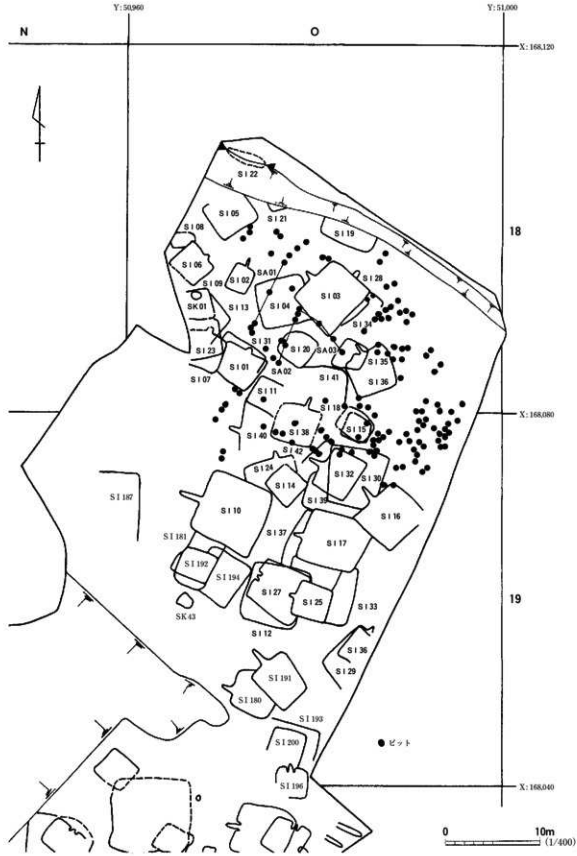


図3 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出できた遺構は、竪穴住居跡42軒、土坑1基、柱列跡3列およびピット群である。出土した遺物は、土師器26,460点、須恵器882点、土製品64点、石製品、鉄製品数点などである。

第1節 竪穴住居跡

今回の調査では、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡42軒を検出した。それらが営まれたところの地形は、調査区の東側が後背湿地にかけて緩やかに傾斜しており、住居跡は旧地形の自然堤防頂部の平坦なところに密集している。

以下に住居跡ごとの詳細について述べるが、それらは著しく重複して遺存状態が悪いものが多く、周囲の住居跡との関係を把握することが難しい。そのため、各住居跡の平面図の一角には、北方向を上とした周辺の遺構配置図を併せて掲載した。また、平面図は混乱を避けるため、重複する住居跡であっても、特に対象となる住居跡を改変したもの以外は載せていない。掘形については、平面図には上端のみを破線で記し、土層断面図にエレベーション図を付け加えている。

検出した住居跡は、北流する阿武隈川の流路方向を基準として造られたためか、グリッドを設定した南北ラインから主軸方位が大きく傾くものがほとんどである。カマドの位置は北東あるいは北西の2方向に付くものに大別でき、それぞれのカマドが付設された周壁を北周壁、西周壁として報告している。そのため、住居跡内の付属施設等の説明に用いられる東西南北については、そのようなカマド位置が基準となっており、カマドが検出できなかった住居跡にも準じて使用している。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図4、写真3)

本遺構は調査区西寄り、O18-83・84・93・94グリッドに所在し、LⅡ中において検出された。現況では阿武隈川河床に続く崖にほど近いが、旧地形をみると標高が高い部分にあり、自然堤防のほぼ頂部に位置するものと理解される。本遺構周辺は調査区内でも住居跡の密集する地区のひとつで、本住居跡は7・23・31号住居跡と重複する。検出状況からは23号住居跡との新旧関係は把握できなかったが、7号住居跡より古く、31号住居跡より新しい。

本住居跡の遺存状態は悪く、住居跡南東隅は失われている。また、西周壁についても7号住居跡によってほぼ完全に壊されている。遺存する周壁から推測される住居跡の規模は長辺約5m、短辺約3.7mで、平面形はほぼ長方形を呈するものと思われる。住居跡の隅はやや丸みを帯びている。北周壁から推測した方位との関係は、N33°Eとかなり東に傾いている。

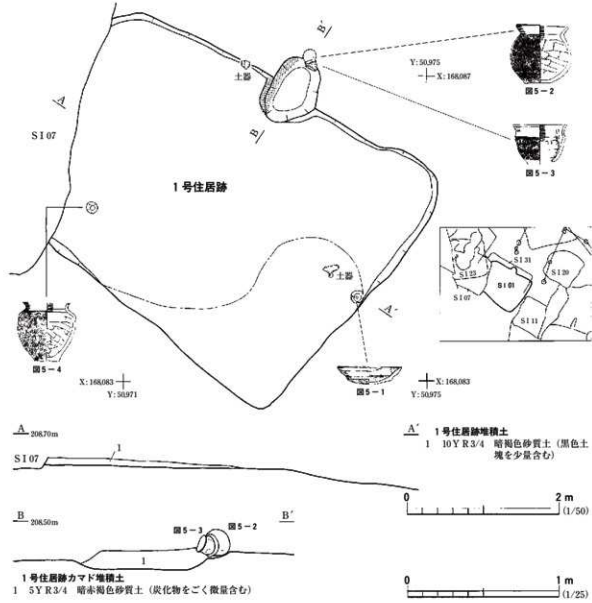


図4 1号住居跡

周壁はカマドが設置されている北周壁の残りがやや良いが、検出面から床面までの深さは最大約8cm程度である。床面は、ほぼ平坦で床は全体にやや締まっているもの、明確に踏み締まりと判断できるほどのものではない。

住居跡内堆積土は $\ell 1$ とした暗褐色砂質土のみの単層で、遺存状態が極めて悪かったため、その堆積状況を判断できるには至っていない。

カマドは北周壁中央で検出したが、床面より上の構造は完全に失われ、本来は掘形の底面であったと思われる楕円形の窪みだけが検出された。この窪みの規模は長軸約1m、短軸約75cmで、床面からの深さ最大約6cmを測る。カマド内堆積土 $\ell 1$ は、炭化物をごく微量含む以外は均質な砂質土で、あまりに締まりがないため、掘形埋土とは考えていない。また、 $\ell 1$ を除去した後に、掘形の西側上端部に焼面を確認している。

カマド奥壁近くからは、完形に近い小型の甕が2点、重なった状態で出土している。カマドがほぼ完全に壊れている事実を考慮すると、遺棄された遺物の可能性もある。

なお、カマド以外に住居跡内施設は、一切検出できなかった。 (木 村)

遺 物 (図5, 写真63)

本住居跡からは土師器片169点、須恵器片2点が出土した。遺物は、堆積土中からごく散発的に出土したほか、カマド掘形内と床面近くの2か所から、比較的遺存状態のよい遺物が出土している。ここでは、それら4点と須恵器片1点を図示した。

図5-1は土師器の杯で、口縁部が大きく開く有段丸底のものである。この杯の底部は、故意に穿孔されており、遺跡内からは杯以外のものも含めると、数例が出土している。穿孔された部分の大きさは約4cmほどである。数回に分けて力が加えられており、切れ口の形を整えた様子が観察できる。(第6節 遺構外出土遺物 図102-5参照)

図5-2・3・4は土師器の小型甕で、どの甕も体部外面がハケメ調整されている。そのうちの同図2・3の甕はカマド掘形から重なって出土したものである。同図4の底部には周縁に粘土が貼

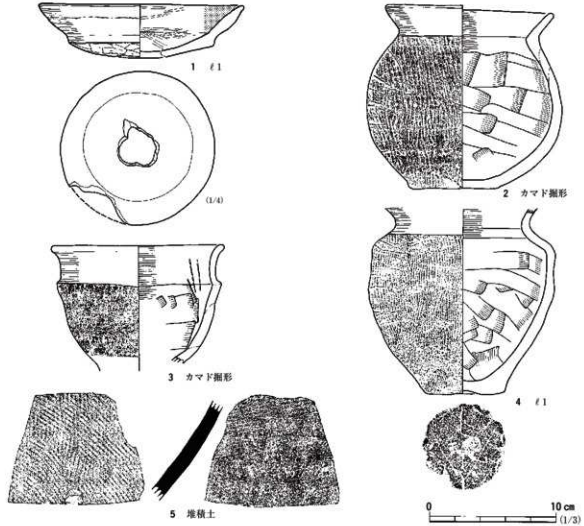


図5 1号住居跡出土遺物

第2編 北ノ脇遺跡

られており、木葉痕が認められる。

図5-5は須恵器の甕とみられる細片である。

ま と め

1号住居跡は、調査区内ではほぼ標準的な規模の住居跡である。遺構の遺存状態は極めて悪く、詳細については多くの見地を得ることはできなかった。しかし、そのような状態でもいくつかの注目すべき点が挙げられる。

そのひとつとしては、北周壁に設置されたカマドは、ほぼ完全に壊されて掘形しか検出できなかったが、その上端からは、完形に近い2個体の甕が重なって出土していたことである。この付近では住居どうしの重複が著しく、カマドが確認できた例が少ないため、本住居跡は住居の廃絶過程を知るうえで興味深い資料となっている。

出土遺物から、本住居跡は粟国式期に営まれたものと考えられる。(木村、大波)

2号住居跡 S102

遺 構 (図6、写真4・5)

本遺構は調査区北部、O18-53・54・63・64グリッドにかけて所在し、検出面はⅡⅢ面である。遺構周辺の旧地形はほぼ平坦で、標高は約207.3mと調査区内で最も高い部分にあたる。本遺構のような竪穴住居跡は、西側から南側にかけて著しく重複しているが、本住居跡はそれらの空隙に位置し、重複する遺構はない。

本住居跡の遺存状態は悪く、検出面から床面までの深さは、南周壁際で最大7cmである。平面形はほぼ正方形を呈し、南周壁はやや弧状に外に張り出している。大きさは南北幅約2.8m、東西幅約2.5mである。西周壁を基に方位との関係を見ると、N22°Eとやや東に傾いている。床はⅡⅢを掘り込んで造られている。床面は平坦で、全体に締まってはいるが、特に顕著な踏み締まりは確認できなかった。

住居跡内堆積土は、 $\ell 1$ とした暗褐色砂質土の単層である。 $\ell 1$ の堆積が非常に薄かったため、堆積状況を判断するには至っていないが、土質からは自然堆積土の可能性が高い。

住居跡施設はカマド1基を検出した。カマドは北周壁のほぼ中央に取り付いている。遺存するカマドの規模は全長155cm、最大幅は推定で約60cmである。遺存状態は悪く、右袖は完全に失われている。左袖は地山を掘り残して造られ、住居内に約60cm張り出し、床面からの高さは最大10cmである。

煙道は長さが約90cm、幅が基部付近で22cmを測る。煙道の底面は、先端に向かってごくわずかに下がり、検出面からの深さは最大で11cmである。燃焼部付近に焼面は検出できず、煙道先端近くに極めて弱い赤変がみられたのみである。

カマド堆積土 $\ell 1$ は焼土・炭化物粒を含んでいるが、その量はごく微量で、締まりもないことから、カマド廃棄以降に堆積したものとみている。カマドの左脇からは比較的良好な状態の遺物が集中して出土している。そのため、ここに貯蔵穴があった可能性も考えたが、精査の結果、床に直接

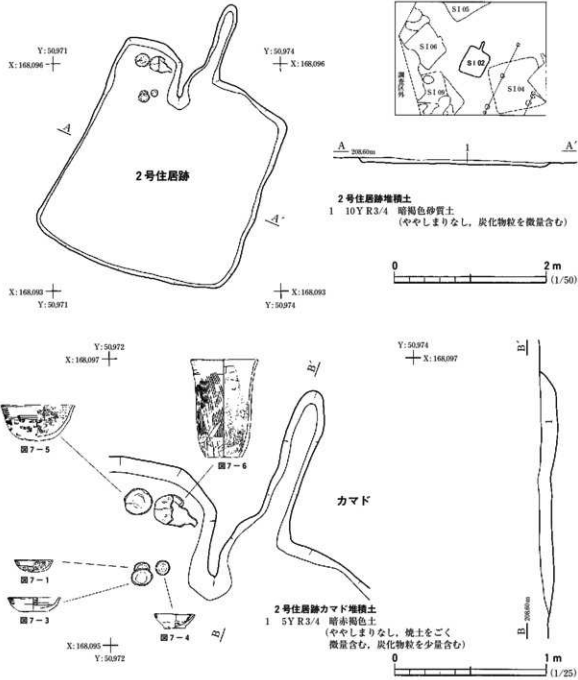


図6 2号住居跡

土器を並べたものと判断した。

カマドの他に、柱穴やピット等の施設は検出できなかった。

遺物 (図7、写真63)

本住居跡からは縄文土器片26点、土師器片130点が出土している。遺物については、①から出土したものもあるが、住居跡の遺存状態から、これらもほぼ床面出土としてよい状況である。カマド左脇からは図7-1・3~6の土器が集中して出土し、遺存状態もよく、ほぼ原位置を保っているものと考えている。

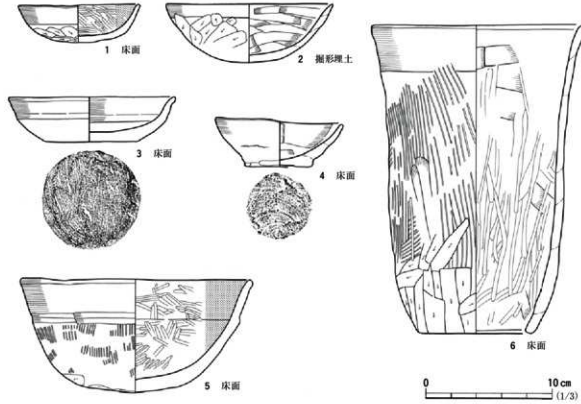


図7 2号住居跡出土遺物

ここでは土師器6点を図示した。

図7-1～5は土師器の杯である。同図1の小型杯と同図5の大型杯には内面に黒色処理が施されているが、他の杯には認められない。同図2は掘形埋土から出土しているため、本住居跡よりも1時期古くなるものとみられる。器形は丸底で、体部のケズリが口縁部近くまで及んでいる半球形のものである。同図3・4は平底で、同図3は底部にケズリが施されて不明であるが、同図4には静止糸切り痕が認められる。同図5は口縁部約18.2cm、器高約8.9cmと他の杯と比べて大きく、器形は有段丸底の杯が退化したものとみられ、体部外面にハケメ調整が認められる。

図7-6はカマド左袖脇から出土した飯で、無底式で、体部外面はハケメ調整される。

他に住居跡の床下から1個体分の縄文土器片が出土したが、本遺跡の下層部分を扱った(報告書3)で報告することとする。

まとめ

2号住居跡は一辺3m未満の大きさで、調査区内ではかなり小型の竪穴住居跡である。遺物の出土量は多くないが、カマド脇に残された土器は大きさの異なる土師器の杯4点と飯1点で、住居廃絶時の状況をよく保っているものと思われる。

カマドは北周壁に設置され、造り出しの袖を特徴とし、堆積状況から掘形を持たないものと判断している。

出土遺物から、本住居跡は国分寺下層式期に営まれたものと考えられる。

(木村、大波)

3号住居跡 S103

遺 構 (図8~11, 写真5・6)

本遺構は調査区のやや北寄り、O18-56・65-67・75-77グリッドに所在し、LⅡ中層において検出した。本住居跡の立地は、旧地形からみると阿武隈川の自然堤防が後背湿地側に傾き始める変換点近くに相当し、ごく僅かに南東に傾斜している。そのため、旧地形では自然堤防頂部の平坦な地形となる部分ほど堅穴住居跡が密集しておらず、この付近の住居跡の密度はやや低くなる。本遺構は重複する4・28・34号住居跡より新しく、3号柱列跡とも重複するため、1~3号柱列跡よりも古い。本住居跡の周辺には大小の擾乱が多くみられるが、直接遺構にかかるものは少なく、遺存状態は良好である。

本住居跡の規模は長軸約6.8m、短軸5.6mを測り、調査区内では比較的大きな住居跡のひとつである。住居跡の主軸方位はN45°Eと真北から大きく傾く。そのためカマドは北西方向に付くが、付近の他の住居跡との関係から、カマドの設置される周壁を西として報告する。住居跡の検出面から床面までの深さは、住居跡の南西隅近くが最大で40cm、最も浅い北東隅では25cmほどである。平面形は四隅がやや角張った長方形を呈する。周壁は全てほぼ垂直に立ち上がり、床はほぼ全面が貼床となっている。床面はほぼ平坦で、やや締まりは感じられるが、明確な踏み締まりによる硬化は認められない。住居跡の掘形底面には凹凸がみられ、壁際が深めに掘り込まれている。床面からの深さは平均すると約10cmであるが、断ち割った部分では南に深く北に浅く、南周壁際の一部で最大約21cmを測り、北周壁際ではほぼ床面と同じである。

住居跡内堆積土はℓ1~4の4層に区分した。ℓ1~4は黒褐色から灰黄褐色の砂層で、その土質と堆積状況から、いずれも自然堆積土と判断している。ℓ5は貼床と判断した。ℓ3・4はそれぞれ1層としたが、同じ砂層で、どちらも内部に縞状の層が確認できる。これに対して、ℓ2はシルト質に近い粒子の細かい砂層であり、様相がやや異なる。したがって、住居廃絶後ℓ3までの埋没は、かなり短期間に進んだものと考えている。

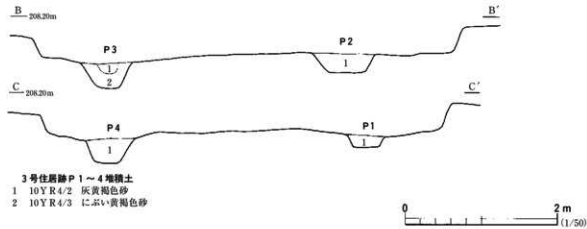


図8 3号住居跡(1)

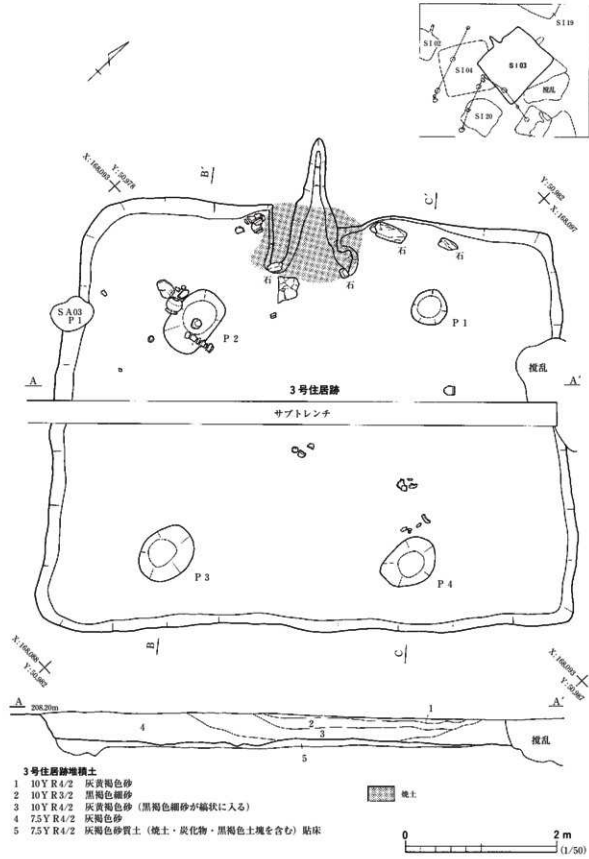


図9 3号住居跡(2)

住居跡施設はカマド1基とピット4個を検出した。カマドは西周壁のほぼ中央に取り付いている。遺存状態は良好である。遺存するカマドの規模は全長185cm、最大幅123cmを測る。右袖は調査中の降雨のため崩れてしまったが、左袖は住居内に張り出し、幅41cm、床面からの高さ20cmが遺存している。両袖の先端部、焚口であったとみられる付近には角礫が据え付けられ、構築材の一部となっている。燃焼部の平面形は、現況では焚口を底辺とする二等辺三角形を呈する。煙道の規模は長さ40cm、最大幅22cmを測る。燃焼部奥壁が煙道個にかなりはみ出しているが、これは燃焼部奥壁が崩落によって失われたためであることを、土層断面観察によって確認している。カマド掘形の規模は約130×100cmを測り、平面形は不整な長方形を呈する。断面形は浅い鍋底状で、底面はかなり凹凸が認められる。カマド掘形の西壁は、ほぼ住居跡の西周壁に沿っている。

カマド内堆積土は①～⑥までの6層に区分し、その堆積状況から自然堆積と判断している。

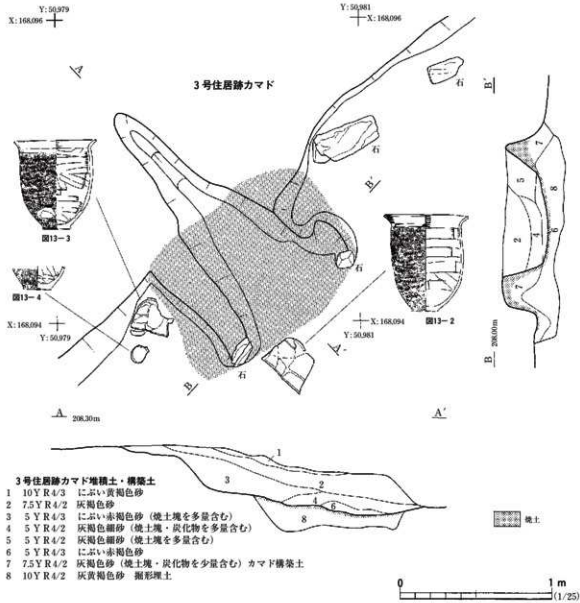


図10 3号住居跡カマド

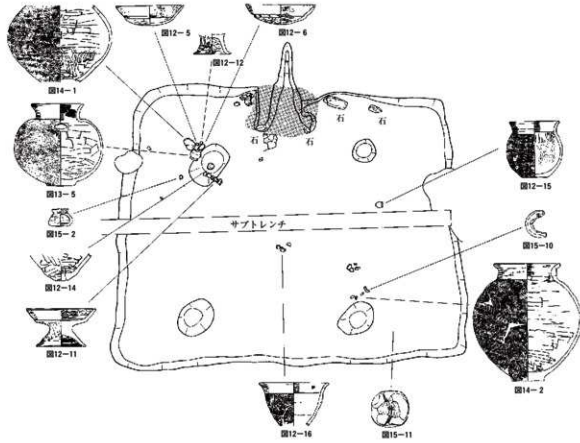


図11 3号住居跡遺物出土状況

ℓ 3は煙道および奥壁が崩落した際に生じたと思われる焼土塊を含んでいる。ℓ 5の内部には焼土が封じ込められていることから、カマドの天井崩落土塊の集合とも考えられるが、他の層と色調が近似しており細分できなかった。また、断ち割りした部分からℓ 7・ℓ 8の燃焼部構築土を確認することができた。ℓ 7はカマド袖の構築土で、ややシルト質である。ℓ 8はカマドの掘形埋土である。

ピット4個は全て床面で検出した。それぞれのピット間の距離は、P 1・P 4間が340cm、P 2・P 3間が310cm、P 1・P 2間が310cm、P 3・P 4間は325cmである。P 1～P 4は住居周壁と平行するように方形に配置され、その造られた位置と規模から、本住居跡の主柱穴と考えている。

(本 村)

遺 物 (図12～15, 写真64・81～84)

本住居跡からは土師器片1,557点、須恵器片14点、土製品6点、石製品数点が出土した。遺物は、カマド周辺及び住居跡南西部にあるP 2近くから集中して出土した。住居跡の南西部出土の遺物は若干床面から浮いているためℓ 4としたが、出土状況からは確実に本住居跡に伴うものとみられ、平面図上以示してある。また、住居跡北東隅で出土した鏡を模倣した土製品については、貼床土であるℓ 5中からの出土である。本住居跡からは堆積土中から出土したものも含めて多数の遺物が出土しているが、そのうちの遺存状態の良いものを図示した。

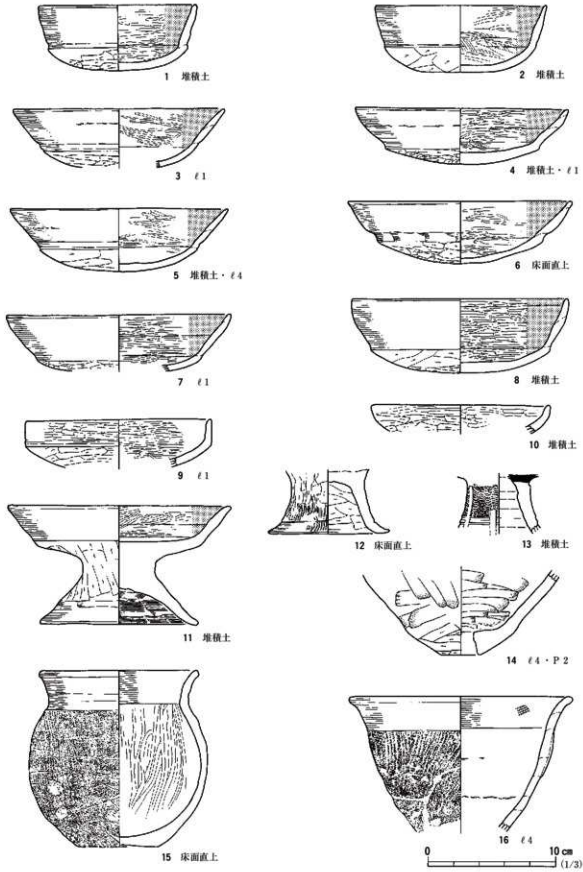


図12 3号住居跡出土遺物(1)

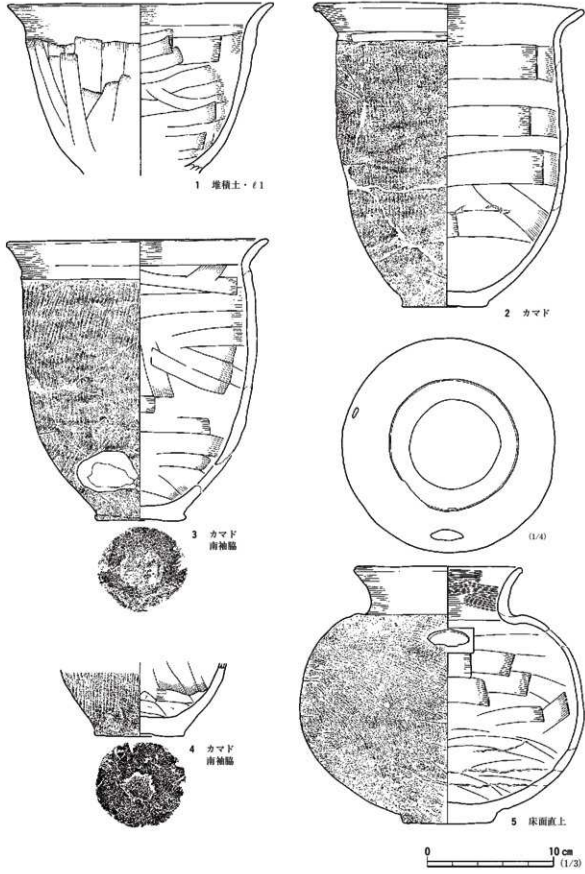
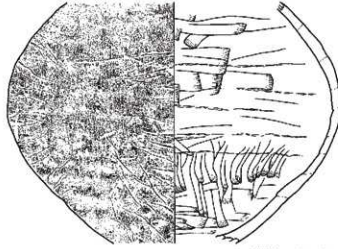
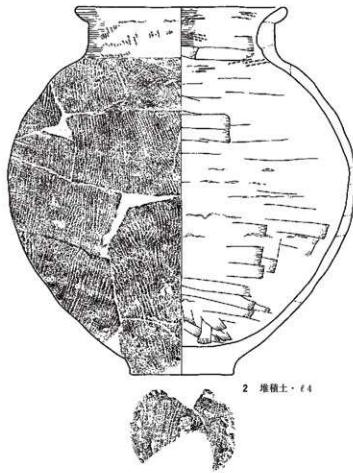


図13 3号住居跡出土遺物 (2)



1 堆積土・#1・#4



2 堆積土・#4



図14 3号住居跡出土遺物(3)

図12-1~10は土師器の杯である。そのうち本住居跡に伴うとみられるものは同図5・6の2点で、他は住居跡内の堆積土中から出土した。図12-1~8は内黒の有段丸底の杯であるが、同図1・2は口縁部が直立気味に外傾するもので、須恵器の杯蓋を模倣したものとみられる。他の杯は口縁部が大きく開いており、住居跡に伴うとみられる同図5・6の口縁部は直線的に外傾する。図12-9・10は関東系とみられるもので、口縁部にヘラミガキ、体部にケズリが施され、この時期、当地域に普遍的に認められる内面黒色処理が行われていない。同図9は口縁部が短く直立することから、須恵器の杯身の模倣である。

図12-11・12は土師器の高杯である。同図11の杯部は口縁部が大きく外傾しており、そこに「ハ」の字状に大きく開いた脚部が付いている。同図12は脚部しか残っていないが、短い中空の円筒状のもので裾が開く。

図12-14は土師器の瓶で、底部が単孔式の小型のものである。

図12-15・16、図13-1~5、図14-1・2は土師器の甕である。図13-1の甕を除き、ほとんどの甕の体部外面がハケメ調整される。そのうちの図12-15、図13-5、図14-1・2は球胴甕で、図12-15の小型甕の内面にはヘラミガキが施されている。どの甕も本住居跡に伴うもの

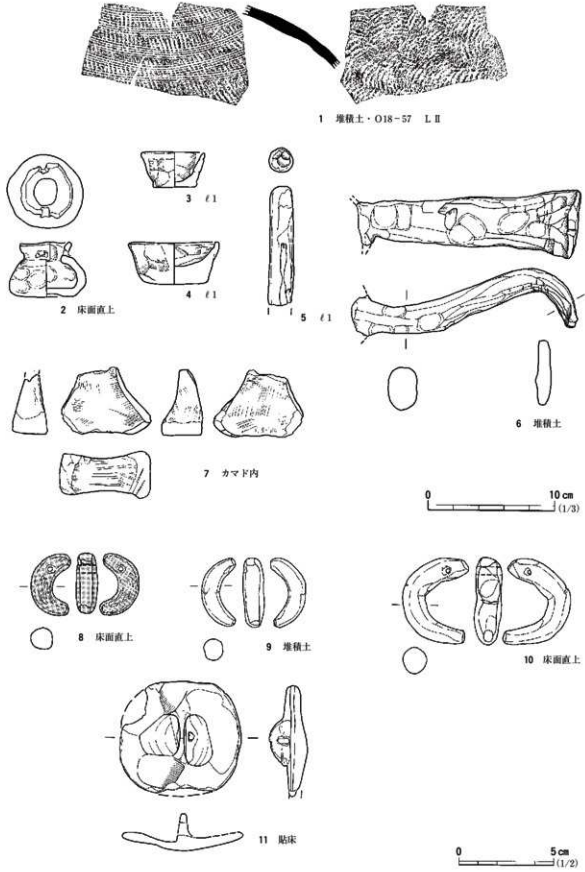


図15 3号住居跡出土遺物(4)

と考えられ、大きさも大中小が揃っている。他の甕は口縁部が最大径になるもので、大小の大きさがある。そのうち、カマド周辺から出土したものは図13-2・3・4の長胴のもので、同図3・4の底部の周縁には粘土が貼られている。それらの甕は煮炊具として使用されていたとみられ、同図2・3の内部にはリング状に煤が付着し、底部が赤く焼けている。また、甕の中には図13-3・5のように使用過程で故意に穿孔されるものがある。同図3の長胴甕は体部下半に1か所、同図5の球胴甕の肩部には2か所の穴が空けられている。

須恵器で図示したものは図12-13の高杯と図15-1の甕の2点で、どちらも堆積土中から出土している。図12-13の高杯には縦に細長い透かし穴が認められ、破片からは四方透かしであったようである。

小型のものとしては、図15-2のミニチュア土器や同図3・4の手づくね土器がある。同図2のミニチュア土器は床面直上から出土している。器形は小型の球胴甕のような形をしており、頸部のところには焼成前につけられた一対の穴が認められる。

図15-5・6は棒状の土製品で用途は不明である。しかし、同図6は特徴のある形をしており、端部の形状からは、体部が丸みのある器状のものに取り付いていた把手部分とみられる。先端部にかけて丸く湾曲し、断面は基部のところは楕円状であるが、先端にかけて平たくなっている。また、先端部分は欠けているが、1ないし2本の刻み目が観察できる。遺構外出土遺物の中には、把手部分が外れた状態で出土した球形の椀状の土器があり、同図6はこのようなものに取り付けられている可能性が考えられる。(第6節 遺構外出土遺物 図105-7参照)

図15-7はカマド内堆積土から出土した砥石で、かなり使い込んだ様子がかげえる。

図15-8・9・10は土製の勾玉である。同図8・10は端部近くに穿孔されるが、同図9は穿孔が認められない。同図10は他の2点に比べて大きく、同図8は丁寧にヘラミガキで磨かれ、表面が黒色処理されている。

図15-11は土製の鏡の模倣品で、紐通し穴の付いた紐が付いている。

まとめ

3号住居跡は長軸約7mを測る、調査区内では比較的大型の堅穴住居跡である。本住居跡は4本の主柱穴を備え、本調査区内からはあまり確認されなかった貼床が認められる。カマドは西周壁に設置され、遺存状態は良好である。遺物については、2つの集中区から極めて良好な状態で出土をみており、特にカマド周辺については良く現位置を保っているものと考えている。

出土遺物から、本住居跡は栗園式期に営まれたものと考えられる。(木村、大波)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図16, 写真7)

本遺構は調査区北部のO18-64・65・74・75グリッドから検出された堅穴住居跡である。本住居跡は、河川側の自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと緩やかに傾斜する斜面上に立地し、住居跡の

第2編 北ノ脇遺跡

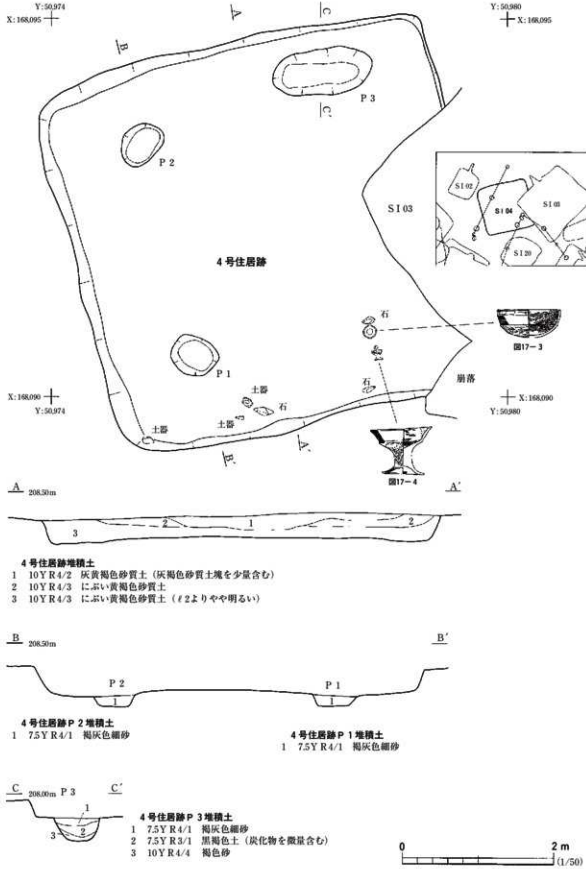


図16 4号住居跡

東側は3号住居跡と重複する。重複する他の遺構との関係は、4号住居跡→3号住居跡→1～3号柱列跡の順に造られており、その中では本住居跡が営まれた時期が最も古い。

本住居跡はⅡⅡ中から検出でき、東周壁の一部は3号住居跡に掘り込まれているが、遺存状態は比較的良好である。住居跡内堆積土は3層に分層したが、ℓ2とℓ3はほとんど見分けがつかず、ℓ2よりもℓ3の色調がやや明るいという程度である。住居跡内は洪水砂のようなもので一時期に埋まってしまったようで、その後でℓ1がレンズ状に堆積したものとみられる。

住居跡の大きさは遺存する北周壁で約5.3m、西周壁で約5.2mを測り、一辺約5mの正方形である。深さは約30cmほど残っており、周壁はほぼ直立して立ち上がる。床面は平坦で、貼床等は認められず、基本土層のⅡⅢを掘り込んで床面として使用していたようである。住居跡の主軸方位は、N12°Wと、やや西に傾く。本遺跡ではカマドは北周壁か西周壁に付設される例が多いが、本住居跡からはどちらの周壁からも確認できなかった。

カマドは確認できなかったが、本住居跡からは柱穴と考えられるピット3基を検出した。P1・P2とP3では様相が異なるが、それぞれ住居跡の対角線上に位置する主柱穴と考えられる。P1・P2は西周壁の両隅に位置し、長軸約60cm、短軸約50cmの楕円形で、深さは床面から約20cm前後のものである。ピット内には褐灰色の細かい砂が堆積していた。P3は北東隅に位置し、他のピットに比べて大きく長軸約110cm、短軸約60cmの細長い楕円形で、深さは床面から約30cmほどである。堆積土は3層に分層でき、ℓ1は他のピットと同じ砂層であったが、その下層には黒褐色土が堆積している。南東隅からは柱穴らしい痕跡は認められなかったが、本来は住居跡の四隅に配置されていたものと考えられる。

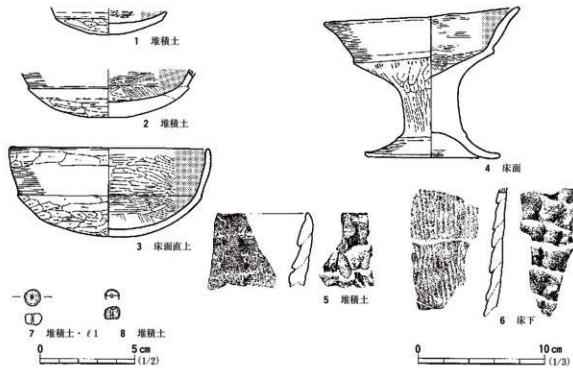


図17 4号住居跡出土遺物

遺物 (図17, 写真65・84)

本住居跡からは土師器片181点、須恵器1点、土製品4点が出土し、図示したものは8点である。そのうち確実に本住居跡に伴うものは、南東隅の床面および床面直上から出土した土師器の高杯1点と杯1点で、平面図上に表示している。

図17-1～3は土師器の杯で、内黒の有段丸底のものである。同図1は口唇部が欠けているが、ほぼ完形と考えられる。器高が約2.2cmほどの皿状の小型杯である。同図3は床面から僅かに浮いた状態で出土しており、本住居跡に伴うものとみられる。口縁部が直立した半球形をしており、口縁部径約15.6cm、器高約7.0cmの法量の大きな杯である。

図17-4は床面から出土した土師器の高杯で、杯部は口縁部が大きく外反し、脚部は柱状で裾が「ハ」の字状に開くものである。

図17-5・6は筒状の土製品である。内面には積み上げ痕が明瞭に残り、外面はハケメ調整されている。

図17-7・8は土製の丸玉で、表面が黒色処理される。

まとめ

本住居跡は四隅に主柱穴のある、一辺約5mの正方形の住居跡と考えられる。3号住居跡に一部破壊されているが、LⅢを深く掘り込んで造られているため遺存状態が良い。カマドは確認できなかったが、3号住居跡と重複する東周壁に付設されていた可能性が考えられる。

本住居跡の出土遺物は少ないが、床面から栗園式期のものとみられる土師器2点が出土している。特に床面から出土した高杯脚部の器形は栗園式でも古段階のものとみられ、本住居跡はこの付近に大集落が形成され始めた初期のものと推察される。 (大 波)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図18, 写真8)

本遺構は調査区北部のO18-43・44・53・54グリッドから検出された竪穴住居跡である。本住居跡は調査区の北西端に位置し、本遺跡内では珍しく他の住居跡とは重複せずに単独で検出することができた。本住居跡の位置する調査区の北側は橋脚を建設した際に掘削を受けているため断絶しているようであるが、橋脚を挟んだ北側にも同じように集落が広がっている。

本住居跡の自然堤防の西側は阿武隈川に面した勾配の急な斜面で、東側は本住居跡の立地するところを頂点として調査区東側の後背湿地へと緩やかに傾斜している。本住居跡は、調査区内の自然堤防上の最も標高の高い部分に立地しており、竪穴住居跡が著しく重複する一帯からはやや外れている。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、深さは約10cmほどしか残っておらず、住居跡内にはLⅠの灰黄褐色砂が堆積していた。住居跡の主軸方位はN36°Wと真北から大きく傾いている。住居跡の大きさは遺存する南周壁で約4.7m、西周壁で約4.3mを測り、東西にやや長い方形である。周壁はほぼ直立して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、貼床などは認められなかった。

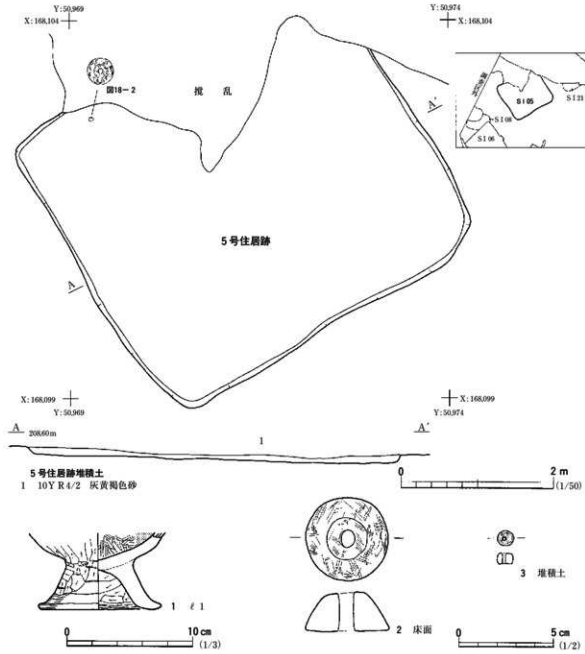


図18 5号住居跡・出土遺物

カマドや柱穴などの付属施設は確認できなかった。しかし、北周壁が大きく攪乱を受けていたため、カマドは北周壁に付設していた可能性が考えられる。

遺物 (図18, 写真82・84)

本住居跡からは土師器片104点、土製品1点、石製品1点が出土した。そのうち図示したものは3点である。確実に本住居跡に伴うものは、床面から出土した紡錘車1点である。しかし、他の住居跡と重複せず、検出面から床面までの掘り込みが浅いため、出土遺物のほとんどが本住居跡に伴うものと考えられる。

図18-1は土師器の高杯で、「ハ」の字状に開いた短い脚部が付くものである。杯部の口縁部は欠

損するが、内面黒色処理されており、外面は脚部から杯部にかけてヘラケズリが施されている。

図18-2は石製の紡錘車で、北周壁際の床面から出土したものである。高木遺跡では紡錘車の未製品が住居跡内から出土していることから、集落内で生産されたものと考えられる。

図18-3は径が約1cmほどの土製の丸玉である。外面は黒色処理され、部分的にミガキが施されている。穴のあいた面が平たく、両面から穿孔されていて、開口部がやや広がっている。

まとめ

カマドは確認できなかったが、攪乱を受けた北周壁に設置されていた可能性があり、一辺4～5mほどの大きさの標準的な住居として機能していたものと考えられる。

本住居跡から出土した遺物は少ないが、堆積土中から出土した土師器の細片は東四式期のものとみられ、床面から出土した石製の紡錘車も同時期の竪穴住居跡から出土している。そのため本住居跡はおよそ7世紀頃に営まれたものと考えられる。(大波)

6号住居跡 S106

遺構 (図19, 写真9・10)

本遺構は調査区北部のO18-52・53・62・63グリッドから検出された、調査区の西端に位置する竪穴住居跡である。本住居跡の立地する地形は、西側は河川に面した勾配の急な斜面となり、東側は本住居跡の立地する付近を頂点として緩やかに後背湿地へと傾斜している。また、他の住居跡との関係は、本住居跡の北東隅では一辺が約2mほどの小型の竪穴住居跡である8号住居跡と重複しており、本住居跡のほうが新しい。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、深さは約10cmほどしか残っていない。そのため住居跡内堆積土はⅡしか確認できず、灰黄褐色砂が堆積していた。住居跡の主軸方位はN43°Wで真北から大きく傾いているが、他の住居跡と同じように河川の流路方向を意識して造られているものと考えられる。そのため流路方向を南北軸とすると、住居跡の大きさは、遺存する北周壁で約3.7m、東周壁で約3.3mを測り、東西に少し長い方形である。それぞれの周壁は緩やかに立ち上がっており、床面はほぼ平坦であるが、貼床などは確認できなかった。他にカマド以外の住居跡と関連する付属施設は認められなかった。

カマドは北周壁のやや東寄り付設されていたが、燃焼部以外は検出できなかった。検出できたカマド袖も床面から約15～20cmほどしか残っておらず、燃焼部内には暗褐色砂が堆積していた。燃焼部は周壁をやや掘り込んで造られており、両袖とも奥壁から約50cmほど張り出し、両袖間は約40cmほどである。カマド燃焼部の断り切りからは、底面を椀状に掘り窪めて暗褐色砂で埋められており、袖の部分には焼土塊を含んだ褐色砂が用いられていることがわかった。また、住居跡の南西隅には長さ約40cm、幅約15cm、厚さ約5cmほどの板状の石が出土しているが、他の住居跡ではカマド付近から出土した例がみられるため、燃焼部天井の構築材に利用されたものと考えられる。また、カマドの燃焼部底面には土師器の甕2個体が出土しており、住居廃絶時に故意に置かれたものと考

第2編 北ノ脇遺跡

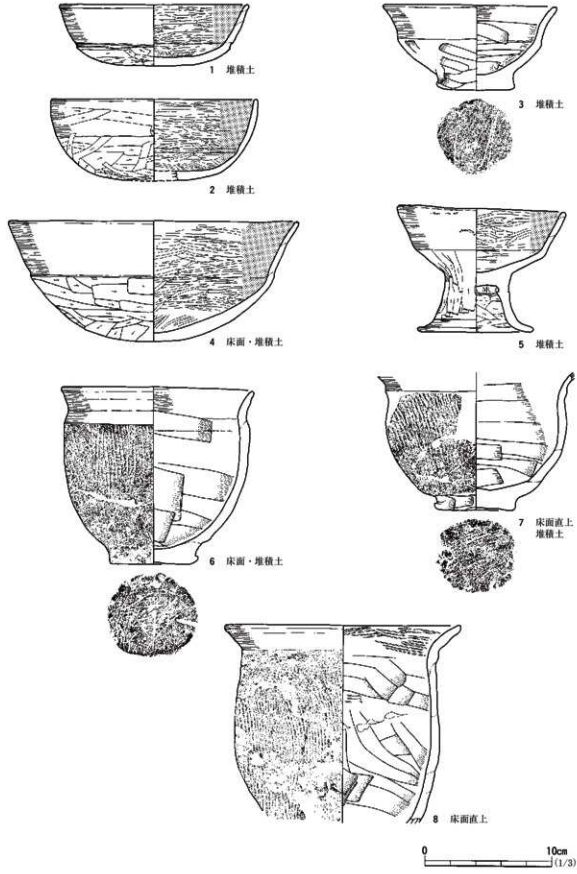


図20 6号住居跡出土遺物 (1)

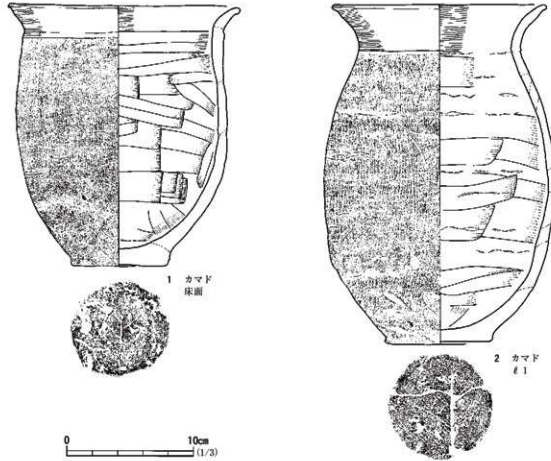


図21 6号住居跡出土遺物（2）

えられる。

遺物（図20・21、写真65・66）

出土した遺物は、土師器片177点、鉄片数点である。そのうち図示したものは土師器10点である。遺物はカマドの付く北周壁から西周壁にかけて出土しており、図示したものの多くは床面近くから出土している。

図20-1～4は土師器の有段丸底の杯で、同図4は床面から出土したため本住居跡に伴うものとみられる。同図2は内面には明瞭な段が認められもの、外面は口縁部までケズリが施されており、半球形をしている。同図3は内面がヘラナデのみで、底部は削り残したとみられる柱状の高台が付いている。同図4は口縁部が外傾して開くもので、径約22.7cm、器高9.5cmの法量の大きな杯である。

図20-5は高杯で床面から出土した。口縁部が外傾する有段丸底の杯に、裾が「ハ」の字状に開いた脚部が付くものである。

図20-6～8、図21-1・2は土師器の甕で、本住居跡に伴うものと考えられる。どの甕も体部外面がハケメ調整されている。そのうち底部が遺存するものには木葉痕が認められるものが多く、図21-1の甕は底部の周縁に粘土を貼って仕上げられている。図20-6・7の小型のものには、底部にヘラケズリが認められ、同図7は全面的に施されている。甕は大中小の大きさが認められるが

同じように煮炊具として使用されたとみられ、図20-6や図21-2の内面にはリング状に煤が付着している。また、カマド内に置かれていた図21-1・2はその中でも長胴のものであった。

まとめ

本住居跡の南側は複数の住居跡が著しく重複しており、そのような住居跡のほとんどが周壁の一部分しか検出できなかった。そうした状況と比較すると本住居跡は出土遺物も多く、カマドも残っていて遺存状態も良い。大きさは一辺が4 m未満とやや小さめの印象を受けるが、標準的な住居跡のひとつであったものとみられる。また、他の住居跡との関係からカマドの位置を北周壁としたが、主軸方位がN43°Wと大きく傾くため、長軸方向を南北として東周壁とも捉えることができる。

出土遺物から、本住居跡は粟四式期に営まれたものと考えている。(大波)

7号住居跡 S107

遺構 (図22, 写真11・12)

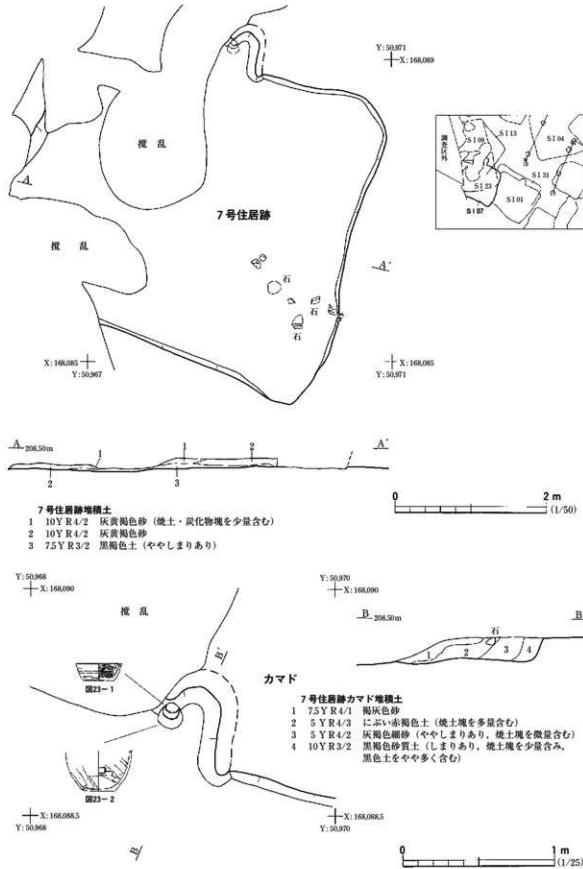
本遺構は調査区北部のO18-72・73・82・83グリッドから検出された竪穴住居跡で、調査区の河川に面した西端に位置するものひとつである。本住居跡は複数の住居跡と重複しているが、他の住居跡とは時期が異なる平安時代のもので、この付近の住居跡の中では最も新しい。

本住居跡のカマド部分はLⅡ中から検出していたもの、西側の複乱が著しかったために住居跡の範囲を確定できなかった。そのため、東側に重複する1号住居跡を先行して調査を行ってしまった。しかしながら、本住居跡の床面は1号住居跡の床面よりもLⅢを深く掘り込んでいたため、LⅡ中からは確認できなかった東周壁のプランを検出することができた。住居跡の最も残りの良い部分で土層断面を観察したところ、住居跡内堆積土は3層に分層できたが床面から約10cmほどしか残っておらず、堆積状況を判断できる材料にはならなかった。堆積土は砂層で占められるが、床面上には薄く黒褐色土が堆積している。

住居跡の大きさは遺存する東周壁で約3.9m、東西幅約4.5mを測り、東西に長い長方形である。周壁はほとんど残らないが、比較的遺存状態の良い北周壁は直立して立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、南東隅には礫が散乱している。住居跡の主軸方位はN18°Eである。

カマドは燃焼部のみ検出でき、煙道や煙出しは確認できなかった。カマド燃焼部は北周壁の中央に付設されていたものと考えられるが、北東隅から約2 mのところに位置する。燃焼部は北周壁を約70cmほど掘り込んで設置されているが、西袖部分は複乱で破壊されて残っていない。遺存する東袖も北周壁からほとんど張り出していなかった。カマド内堆積土は4層に分層でき、煙道方向から流れ込んで堆積した様子が観察できる。燃焼部底面は焚口がやや窪むようであるが、ほぼ平坦である。また、燃焼部底面からは土師器の甕と杯の2個体が、底部を上にして伏せた状態で重なって出土している。甕は上半部を欠いていた。

他に柱穴等、住居に関わる施設は確認できなかった。



遺物 (図23, 写真66)

出土した遺物は、土師器片144点、須恵器片6点である。そのうち図示したのはカマド内から出土した土師器2点で、確実に本住居跡に伴うものと考えられる。



図23 7号住居跡出土遺物

図23-1は土師器のロクロ調整された内黒の杯で、口縁部と比べ底部が大きく、体部が直線的に外傾する。底部は回転糸切り痕が残り、その周囲を手持ちヘラズリで再調整している。

図23-2は土師器の甕で、上半部分を欠いている。外面は縦方向のヘラズリが認められる。

まとめ

本住居跡は北周壁にカマドの付く、東西幅約5m、南北幅約4mの標準的な大きさの住居跡と推察される。遺存状態が悪いため詳細は不明であるが、カマド部分は良好な状態で検出することができた。カマドの燃焼部底面には土師器の杯と甕が伏せられて重なった状態で出土しており、カマド袖は故意に壊されたものとみられ、ほとんど残っていない。そのような状況は住居の廃絶時におけるカマド祭祀に関係した儀礼の一端と考えられる。

カマドの燃焼部底面に置かれた遺物から、本住居跡は平安時代の初め頃に営まれた住居跡と考えられる。この時期のものは調査区内からは検出できなかったが、隣接する高木遺跡からも数例が確認されている。

(大 渡)

8号住居跡 S108

遺構 (図24, 写真13)

本遺構は調査区北部のO18-52グリッドから検出された、一辺が約2mほどの小型の竪穴住居跡である。本住居跡の南東隅は6号住居跡と重複しており、本住居跡のほうが先に築かれている。

本住居跡の立地する地形は、西側は河川に面した勾配の急な斜面となり、東側は本住居跡の立地する付近を頂点として緩やかに後背湿地へと傾斜している。また、住居跡の主軸方位はN20°Eで、西側に流れる阿武隈川の流路方向に合わせて造られているようである。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、深さは約10cmほどしか残っておらず、住居跡内堆積土は単層でしか確認できなかった。その単層の ℓ 1はLⅢの色調とほとんど変わらない暗褐色砂である。住居跡の西周壁の一部は西側が斜面のため崩落したものとみられ、北西隅は擾乱を受け、南東隅は6号住居跡に破壊されているため、遺存状態は良くない。住居跡の大きさは東西幅約2.3m、南北幅約1.9mほどで、東西に長い方形である。

カマドや他の付属施設は確認できなかった。

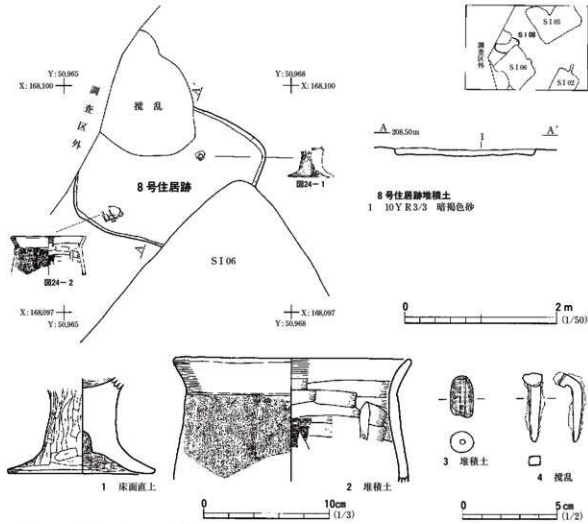


図24 8号住居跡・出土遺物

遺物 (図24, 写真84・85)

出土した遺物は、土師器片90点、須恵器片3点、土製品1点、鉄製品1点である。そのうち図示したものは4点である。

図24-1・2は土師器である。同図1は高杯で床面から少し浮いた状態で出土した。杯部は欠けていて不明であるが内面黒色処理されており、脚部は柱状で裾が「ハ」の字状に開いている。脚部の柱状部分の中空となるところは、棒状のものを差し込んだような痕跡である。同図2は甕で口縁部が「く」の字状に開き、体部外面はハケメ調整されている。

図24-3は土製の管玉の欠損品で外面が黒色処理され、ミガキが施されている。

図24-4は鉄製の角釘である。

まとめ

本住居跡は一辺約2mの小型の住居跡である。遺存状態が悪いことから断定できないが、小型でカマドも検出できなかったことから一般的な住居用ではなかった可能性が考えられる。出土遺物は少ないが、床面近くから出土した高杯脚部は柱状となっており、本住居跡は栗間式期でも古段階に

営まれたものと考えられる。

また、本住居跡から出土した角釘は堅穴住居跡に使用されたものではなく、調査区の東側から小ピットが多数検出できたことから、掘立柱建物跡に使用されたものとみられる。(大波)

9号住居跡 S109

遺構 (図25、写真14)

本遺構は調査区北部のO18-62・63・72・73グリッドから検出された、調査区の河川に面した西端に位置する堅穴住居跡のひとつである。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれの関係は23号住居跡→13号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順に造られる。

本住居跡は7号住居跡と南周壁部分を重複するが、本住居跡のほうが深く掘り込まれていたために南周壁の一部を確認できた。しかし、西側斜面および南東隅は攪乱を受けていて、遺存状態はよくない。本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、深さは約10cmほどしか残っていない。住居跡内堆積土は4層に分層したが、ℓ1～3は河川側から流れ込んだように堆積している。ℓ4はしまりが

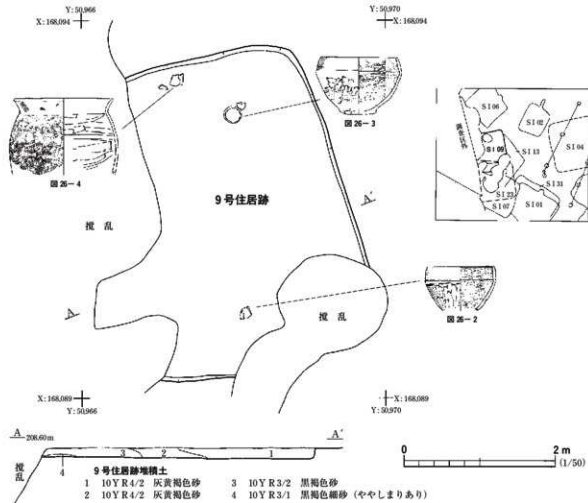


図25 9号住居跡

あり、他の堆積土とは質感が異なっており、床面上に薄く堆積していた。住居跡の大きさは南北幅が約4.2m、東西幅は遺存する部分で約3.7mである。周壁は直立して立ち上がり、床面はほぼ平坦である。カマドなどの付属施設は確認できなかった。住居跡の主軸方位はN17°Wと、南北基準線に対してやや西に傾いている。

遺物 (図26, 写真66)

出土した遺物は、土師器片192点、土製品1点である。そのうち図示したものは土師器4点である。図26-2~4は床面および床面直上から出土している。

図26-1の底部は欠けているが、内黒の有段丸底の杯である。

図26-2・3は本住居跡から出土した特徴的な遺物である。器形としては甕に類似のものもみられるが、煮炊具として使用されていないことから甕として報告することとする。器形は口縁部が内湾する半球形である。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面がヘラミガキ後に黒色処理される。同図3の底部には木葉痕が認められ、周縁には粘土が貼り付けられている。法量は同

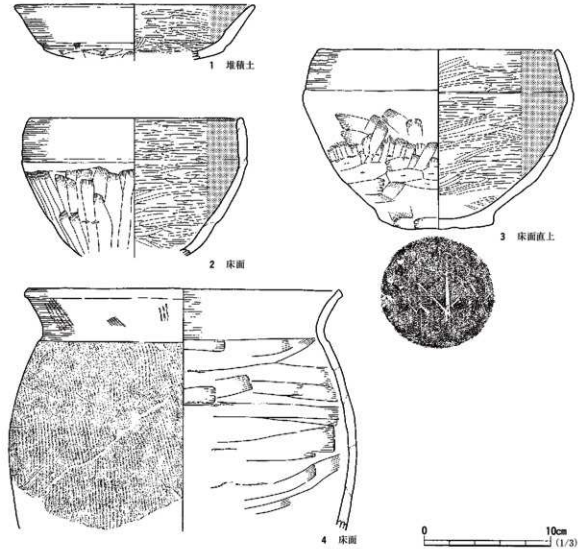


図26 9号住居跡出土遺物

第2編 北ノ脇遺跡

図3が口縁部径18.7cm、底径8.8cm、器高14.2cmである。同図2は上半部約1/3ほどしか残っていないが、口縁部径約16.7cmとほぼ同じ大きさであり、同じ目的で使用されたものとみられる。

図26-4は甕で、体部外面はハケメ調整されている。

ま と め

本住居跡の西側部分は河川に面した斜面となって崩落しており、住居跡の範囲は確定できなかった。カマドは検出できなかったが、崩落した部分に設置されていたものと考えられる。本住居跡は旧地形の自然堤防の頂部に位置し、周囲には竪穴住居跡が著しく重複する。自然堤防は現地形より北西方向に延びていたものと推測され、集落はこの付近で検出された住居跡のさらに西側にも広がっていたものと考えられる。

出土物は少ないため時期を特定することは難しいが、住居跡の時期は栗圃式期に上限が求められる。栗圃式期から国分寺下層式期に営まれたものようである。 (大 波)

10号住居跡 S110

遺 構 (図27・28, 写真15・16)

本遺構は、O19-13・14・22~24・32-34グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡の南端で、自然堤防の南向き斜面である。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

重複関係は、2軒の竪穴住居跡と重複している。24号住居跡と、高木遺跡の181号住居跡を切っている。また、北西隅から南東隅にかけては、配水管理設溝が横切っており、その影響で、周囲の土層は、青白くグライ化していた。このため、本住居跡はプランの確認が難しく、精査着手までに、思いのほか時間がかかってしまった。

堆積土は、にぶい黄橙色砂が1層だけ認められた。自然堆積土か人為堆積土かは、不明である。床面は、ドーナツ状の掘形に、灰黄褐色砂を充填することで、平坦に整えられている。踏み締まりに関しては、配水管理設溝の攪乱で、十分な観察が行うことができなかった。検出面と床面の比高差は、6~9cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西7.4m、南北7.4mを測り、大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に23°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、ほぼ中央である。煙道部は、周壁から長さ220cmを測り、煙出し孔側の底面は、窪んでいた。燃焼部は、袖長88cm、焚口幅60cmを測る。底面と側壁内面は強く焼けており、その範囲は、煙道部にも及んでいた。

ビット類は検出されていない。

遺 物 (図29~31, 写真66・81~85)

遺物は、土師器片1,643点、須恵器片59点、瓦片1点、土製品6点、石製品、鉄製品などが出土した。図示遺物は、34点を数える。それらの出土状況は、掘形埋土と堆積土に集中しており、床面の

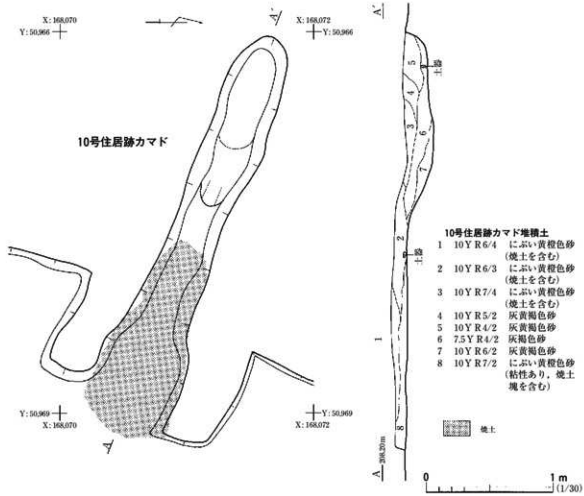


図28 10号住居跡カマド

ものは、わずか7点に過ぎない。しかし、出土層位は違っても、年代的に大きな開きは認められず、まとまりのある内容となっている。また、組成の面からいうと、須恵器の占める割合が高いことが、特徴として指摘できる。

図29-1~11・13は、土師器杯である。1・4~9は、有段丸底杯の最終段階に位置付けられるものと思われる。口縁部が内湾しており、その下端の段は痕跡的で、沈線状をなす。したがって、それら7点の杯は、国分寺下層式に比定して問題無かろう。それに対して、10は、一見すると、ロクロ土師器と勘違いしてしまうような特徴的な器形を呈している。底部は平底で、口縁部が直線的に開いている。また、同じ平底の11では、底部外面に糸切り痕が観察される。これも、ロクロ土師器につながる須恵器製作技術の影響とみることができよう。さらに、13の大型杯も、平底の可能性がある。なお、2・3は、口縁部が直立・内傾するもので、これらとは別系譜と考えられる。

図29-12は、土師器小甕である。器高が高く、口縁部が内傾する。内面が、ミガキ・黒色処理されていることから、煮炊具ではないと判断される。

図29-14は、ロクロ調整の土師器甕である。須恵器とみた方が無難とも考えたが、器表面に黒斑とみられる痕跡があり、ここでは、一応、土師器と理解しておく。北陸や羽根にみられる甕に類似

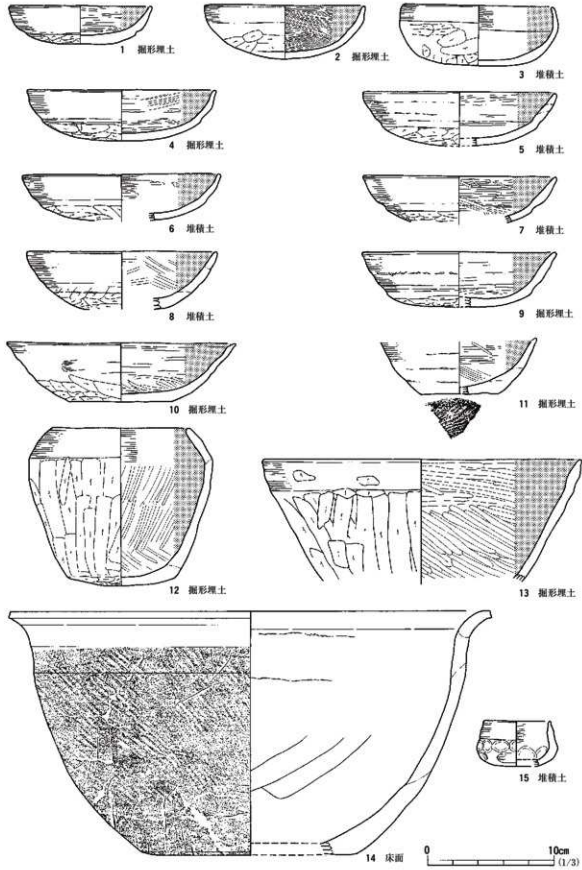


图29 10号住居跡出土遺物 (1)

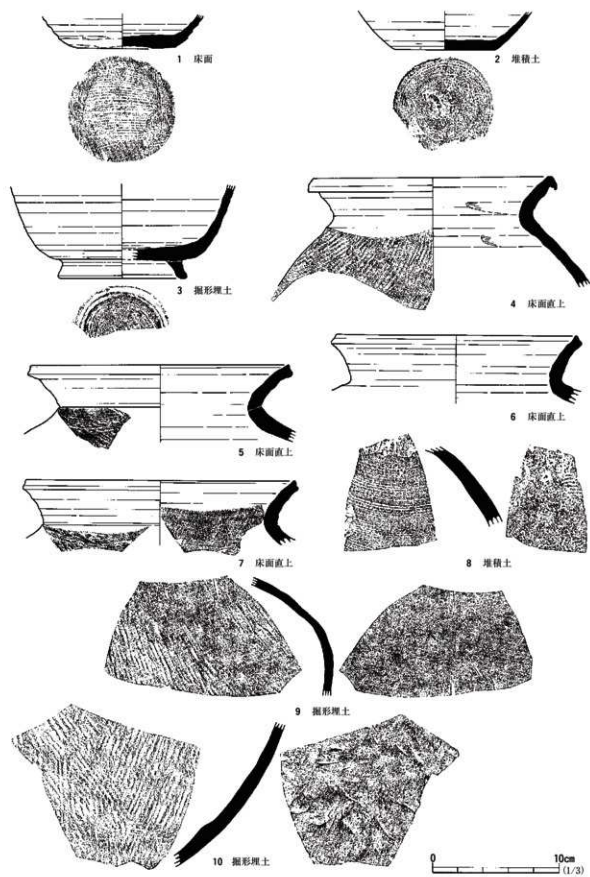


図30 10号住居跡出土遺物 (2)

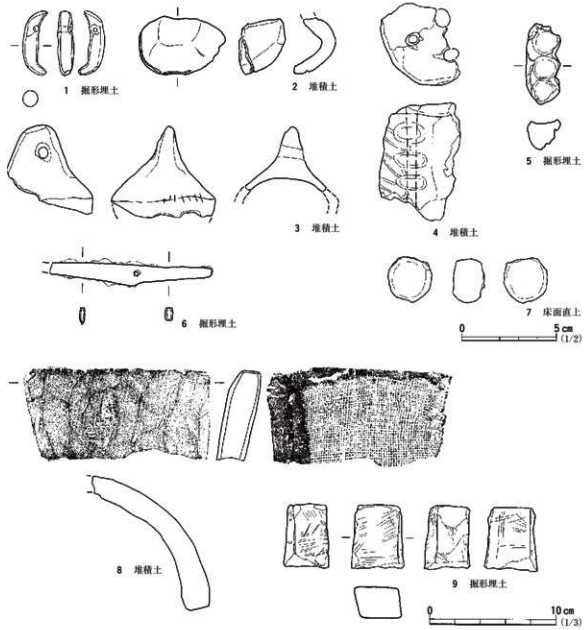


図31 10号住居跡出土遺物（3）

した器形を呈している。外面に、平行タタキメが観察される。

図29-15は、ミニチュアの土師器杯である。

図30-1・2は、須恵器杯である。1は、底部静止糸切り底で、周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されている。2は、底部切り離しが不明である。全面に、回転ヘラケズリ調整が施されている。

図30-3は、須恵器高台杯である。身の深い椀状の杯部に、高台が付く。

図30-4~10は、須恵器甕である。このうち、4~7の口縁部片は、床面で出土している。細部に着目すると、4は、口縁端部が下方に下がっており、5~7は、凹面をなすという違いが認められる。8は、胴部肩の破片とみられる。外面にカキメ調整が施されている。9は胴部肩の破片で、外面に平行タタキメが観察される。10は、胴下部の破片である。同じく、外面に平行タタキメが観

察される。

図31-1は、土製勾玉である。細身の形状であり、屈曲が弱い。

図31-2・3は、土鈴の破片である。3は、つまみが残っている。

図31-4は、土製支脚の破片である。3本の棒に粘土を巻いて成形・焼成したと思われる。その痕跡が、空洞になってあらわれている。

図31-5・7は、用途不明品である。5は土製品で、指の腹で表面を押さえただけの簡単な成形が行われている。7は鉄製品で、欠損しているので、全体の形状は判明しない。

図31-6は、鉄製刀子である。先端が欠けている。

図31-8は、丸瓦片である。凸面は縦位にヘラケズリされており、凹面には、単一の布目紋が観察される。小破片で、判断に苦しむが、行基式丸瓦の広端部と推定される。

図31-9は、砥石である。小型品で、断面は方形をなす。

まとめ

本住居跡は、北ノ脇遺跡南端の南向き斜面で検出された竪穴住居跡である。平面プランは、正方形を呈しており、規模が大きい。カマドの燃焼部は、強く焼けていた。

本住居跡では、掘形埋土と堆積土で、まとまりのある遺物に恵まれた。その内容は、退化した有段丸底杯が主体をなしている。したがって、本住居跡が営まれた時期は、国分寺下層式期の古い段階に求められるとみてよからう。

ただ、その中には、既に次型式の新しい要素が認められた。土鈴の存在から、本住居跡の居住者には、手工業生産に関わっていたことが推測されるので、それが、通常消費地に先行して、こうした現象を生む要因になったと考えられる。また、丸瓦が出土したことは、周辺に瓦使用の施設が営まれていた可能性を暗示していると思われる。

(菅原)

11号住居跡 S111

遺構 (図32, 写真17)

本住居跡は調査区のO18-84・94・95、O19-4グリッドに位置し、LⅡ中層において検出された。本遺構が位置するのは、本遺跡の調査区のはほぼ中央で、平坦な地形である。本住居跡は40号住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、38・41号住居跡とも重複すると思われるが、本住居跡の東側には掘乱が及んでいて、新田関係については不明である。

本住居跡の東周壁は掘乱によって失われ、検出できなかった。遺存する南・北・西周壁から推測される平面形は、ほぼ方形である。規模は南北幅が345cmで、東西幅もこれに近い数値と考えている。検出面から床面までの深さは最大23cmを測る。住居跡の周壁は垂直に立ち上がる。東周壁を基にした住居跡と方位の関係はN30°Eを示す。床面はLⅡを掘り込んで直に床とし、概ね平坦である。床面に踏み締まりは認められないが、住居跡内堆積土に比較するとやや締まりが感じられる。

住居跡内堆積土にはよい黄褐色砂質土 ℓ Ⅰの単層で、明黄褐色砂質土を少し含んでいる。堆積状

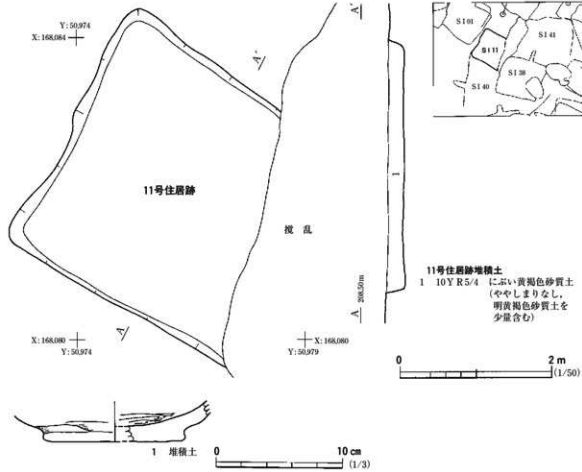


図32 11号住居跡・出土遺物

況を推測できるには至っていないが、土質から判断すると自然堆積土の可能性が高く、埋没も極めて短期間に進んだものとみている。

カマドや柱穴などの住居施設は一切検出できなかった。しかし、本住居跡の東に位置する掘乱内に、焼土塊の僅かな集積が確認され、これが本住居跡のカマドの痕跡である可能性もある。

遺物 (図32)

本住居跡からは土師器片20点、須恵器片3点、石製品4点が出土している。遺物は堆積土中から土師器の甕や杯の細片が散発的に出土するが、特に集中する地点はみられなかった。ここでは土師器1点を図示した。

図32-1は土師器の甕の底部で、調整にヘラナデが認められる。

まとめ

11号住居跡は遺存状態が悪く、カマドや柱穴などの住居跡施設も一切認められなかった。しかし、ほぼ方形に企画され、床面が平坦に造られていることなどから、竪穴住居跡と判断した。堆積土はしまりのないやや粗い砂質土で、床面までの深さがあるにもかかわらず単層であることから、本住居跡の埋没はかなり急速に進んだものとみている。出土遺物から年代を特定することは難しいが、周辺で検出された住居跡の遺物とそれほど異なつたものは認められない。(木村)

第2編 北ノ脇遺跡

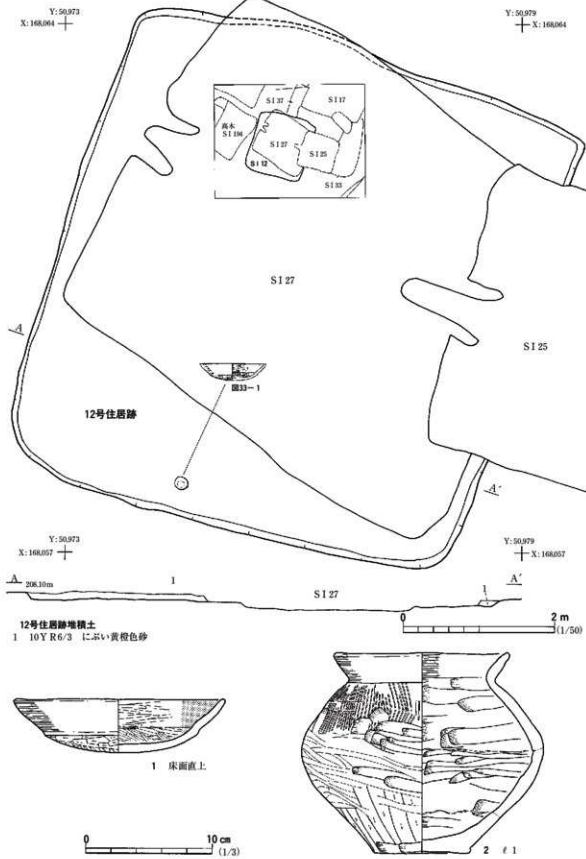


図33 12号住居跡・出土遺物

12号住居跡 S I 12

遺 構 (図33, 写真18)

本遺構は、O19-44・45・54・55グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡南端の南向き斜面である。北側に、数多くの住居跡が分布している。

重複関係を整理しておくとし、本住居跡は、25・27号住居跡に切られ、37号住居跡を切っている。この重複で、床面の3分の2近くが破壊されている。しかし、周壁は比較的破壊を免れており、平面プランはおおよそ把握できる。

堆積土は、にふい黄橙色砂が1層だけ認められた。自然堆積か人為堆積かは、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、8～11cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西6.2m、南北6.5mを測り、大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に17°振れている。

カマドは、検出されなかった。遺構の残り具合をみると、北周壁か東周壁のどちらかに設置されていた可能性が高いと推定される。しかし、それ以上の踏み込んだ言及はできない。

ピット類は検出されなかった。

遺 物 (図33, 写真67)

遺構の残りが不良であったのに、遺物は、土師器片340点と比較的多くが出土した。しかし、図示できたのは、2点しかない。

図33-1は、遺構に共存する土師器杯である。南周壁そばの床面直上で出土した。口縁部の内湾した有段丸底の形態を呈する。内面は、口縁部下端に稜が認められる。

図33-2は、小型の土師器球胴甕である。胴部中央が強く張っており、算盤玉状を呈する。口縁部は、「く」の字状に強く屈曲する。

ま と め

本遺構は、北ノ脇遺跡南端の南斜面に営まれた堅穴住居跡である。重複遺構の破壊で、遺構は残り不良であった。このため、カマドや細部施設は、検出されていない。

本住居跡が営まれたのは、床面から出土した遺物から、粟閉式期に比定される。(菅 原)

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図34, 写真19)

本遺構は調査区北部のO18-63・73・83グリッドから検出された、調査区の河川に面した西端に位置する堅穴住居跡のひとつである。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれの関係は23号住居跡→13号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順に造られている。

本住居跡の大部分が9号住居跡と重複し、大きく攪乱も受けているため、住居跡の一部分しか検

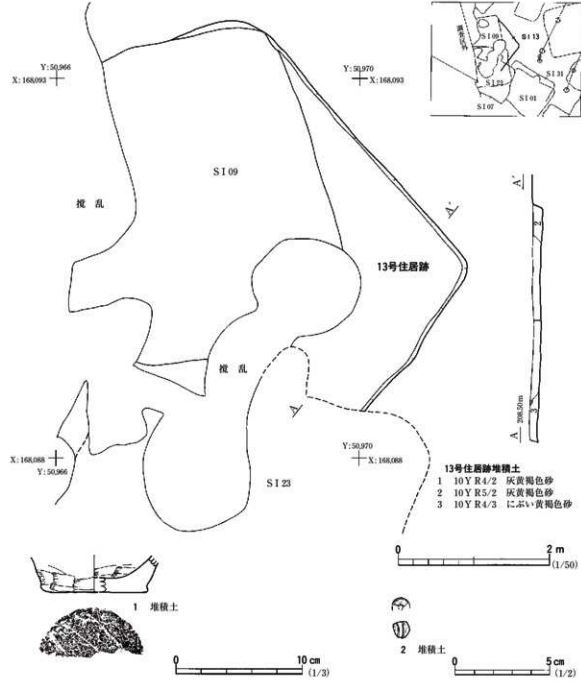


図34 13号住居跡・出土遺物

出できなかった。住居跡はLⅢ上面から検出できたが、付近の住居跡と同様に床面から約10cmほどの深さしか残っていない。しかし住居跡内堆積土は $\ell 2 \cdot 3$ が壁際の三角堆積と考えられ、 $\ell 1$ がレンズ状に堆積することから自然堆積である。

住居跡の大きさは検出できた東周壁が約4.7m、遺存する部分の東西幅が約4.5mを測る。住居跡の主軸方位はN42°Wと真北から大きく傾いている。住居跡の周壁はほぼ直立して立ち上がるが、北東隅はほとんど遺存していない。床面はほぼ平坦で、貼床等は認められず、9号住居跡の床面との高低差はほとんどなかった。

また、東周壁と南周壁の壁際の一部しか確認できなかったため、カマドなどの本住居跡の付属施設は認められなかった。

遺物 (図34)

出土遺物は少なく、土師器片37点、土製品1点である。そのうち図示したものは土師器甕1点と土製丸玉1点である。

図34-1は甕の底部周辺の部分で、底部周囲はヘラナデしており、底部には木葉痕が認められる。

図34-2は黒色処理された丸玉である。穿孔された部分から半分が割れていたため、穴は両面から穿たれていたことが観察できた。

まとめ

本住居跡は、複数の住居跡と重複するため遺存状態は悪く、東周壁側の一部分しか検出できなかった。そのため出土遺物も少なく、確実に本住居跡に伴うものは確認できなかった。しかし、重複する9・23号住居跡が営まれた時期とは大きく隔たらないものと考えられる。

本住居跡が位置する自然堤防は、旧地形ではさらに北西方向に延びていたものと考えられ、頂部にあたるこの付近では住居の建て替えが頻繁に行われたものと推察される。(大波)

14号住居跡 S114

遺構 (図35, 写真20)

本遺構は調査区北部のO19-14・15・24・25グリッドから検出された堅穴住居跡で、旧地形の自然堤防の頂部の平坦なところに立地する。この付近は著しく住居跡が重複しており、本住居跡も24・39号住居跡を掘り込んで造られている。

本住居跡はⅡ中から検出できた住居跡である。

住居跡の北東隅部分には、大きな攪乱が入り込んでいたが、重複する住居跡の中では最も新しくあったため、住居跡の範囲を確定することができた。住居跡内堆積土は、3層に分層できるが、大きく上下の2層に分けられる。①は下層の②・③の上にレンズ状に堆積するため、自然堆積と考えられる。

本住居跡の大きさは、一辺約3.5mほどのほぼ正方形の住居跡である。住居跡の主軸方位はN42°Wと真北から大きく傾くが、他の住居跡との関係からカマドの設置される周壁を西周壁として報告することとする。深さは検出面から約30cm前後で、東周壁側ではほぼ直立する。床面はほぼ平坦であるが、しまりは認められなかった。

カマドは西周壁に付設されていたようであるが、燃焼部の掘形しか検出できなかった。掘形は西周壁のほぼ中央に位置し、大きさは長軸約90cm、短軸約60cmの不整な方形である。周壁をやや掘り込んで造られており、底面は薄赤く熱変していた。掘形内の堆積土は3層に分層できたが、ほぼ全体が③の褐色砂質土で埋まっていた。

他に住居跡と関係する施設は確認できなかった。

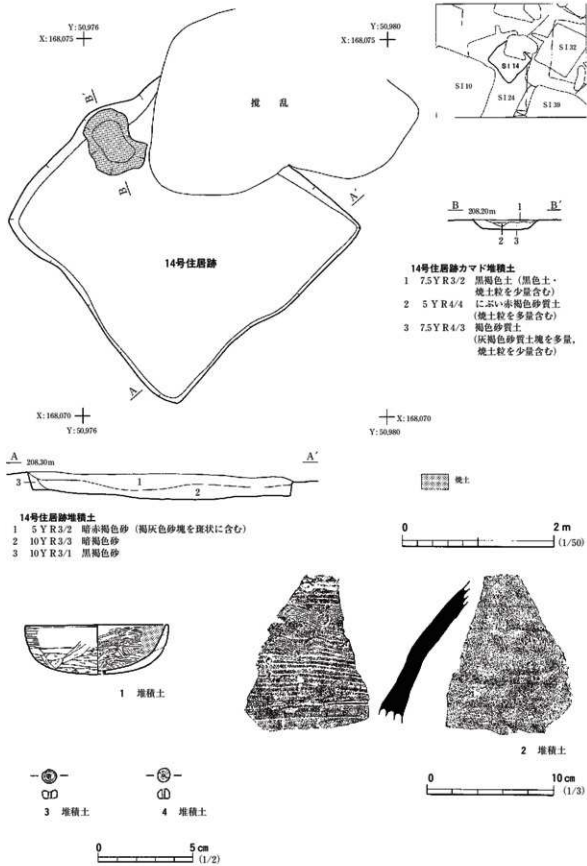


図35 14号住居跡・出土遺物

遺物 (図35・84)

出土遺物は、土師器片483点、須恵器片8点、土製品3点である。そのうち図示したものは4点で、どれも堆積土中から出土したものである。

図35-1は土師器の内黒の丸底杯で、体部から底部にかけてヘラケズリが施されているが、口縁部との境に明瞭な段が認められない。

図35-2は須恵器の甕の細片で、口縁部近くに波状文が認められる。

図35-3・4は土製の丸玉で、表面が黒色処理される。

まとめ

本住居跡は一辺約3.5mの正方形の竪穴住居跡で、西周壁にカマドが設置されている。カマドは掘形しか確認できなかったことから、住居の廃絶時に取り壊されたものと考えている。また、本住居跡より北に位置する11・20号住居跡は、同じく一辺約3.5mの正方形の竪穴住居跡とみられ、3遺構ともLⅡ中から検出でき、堆積土は短期間に埋没したものと推察される砂層であった。それぞれの住居跡は遺構に伴うと判断できる遺物が少なく、カマドは11・20号住居跡からは検出できず、本住居跡からは、掘形のみであった。そのようなことから、11・14・20号住居跡の3軒は同時期に営まれ、同じように住居内のかたづけを行って廃棄されたものと推察される。

出土遺物から年代を特定することは難しいが、堆積土中から出土した図35-1の杯は国分寺下層式期のものとみられる。本住居跡と11・20号住居跡の3軒は、それぞれに重複する住居跡のほうが先に造られており、3軒の住居跡は周囲の住居跡の中では新しい段階に属するものと考えられる。

(大 波)

15号住居跡 S I 15

遺構 (図36・37、写真21・22)

本住居跡は調査区のO18-97、O19-6・7グリッドに位置し、LⅢ上面において検出された竪穴住居跡である。本住居跡は自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと緩やかに傾斜する変換点に立地する。住居跡の南西方向には竪穴住居跡が著しく重複しており、東側からはビットが多数検出された。本住居跡の東側からは住居跡は検出できなかったが、西側は複数の住居跡と重複している。重複する住居跡は、41・18号住居跡で、それらよりも本住居跡のほうが新しい。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、LⅡ中から本住居跡のものとみられる多数の遺物が出土している。そのため遺物の出土範囲を高状に残しながら検出作業を行った。住居跡はLⅢを僅かに掘り込んで造られており、検出面から床面までの深さは約10cm前後であった。そのため、住居跡内堆積土は灰黄褐色砂の単層でしか確認できず、堆積状況を判断できる材料とはならなかった。住居跡の大きさは、南北幅約2.9m、東西幅約2.7mの一辺約3mほどで、正方形の小型の住居跡である。床面はほぼ平坦であるが、しまりはなかった。住居跡の主軸方位はN20°Eである。

本住居跡からはカマド等の付属施設は確認できなかった。

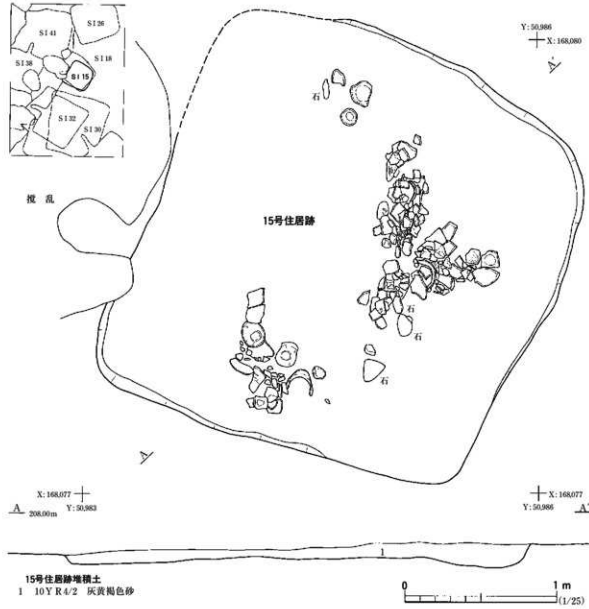


図36 15号住居跡

遺物 (図38~40, 写真67・68・84)

本住居跡からは土師器片587点, 須恵器片4点, 土製品1点など, 多数の遺物が出土している。これらの遺物は住居の廃絶時にまとめて捨てられたものと考えられ, 住居跡の規模に比べ遺物量が多いことから複数の住居分をまとめて投棄した可能性もある。本住居跡から出土した遺物のうち, 床面近くからまとめて出土したものを平面図上で示したが, 他の遺物の位置も床面とあまり変わらないため一括投棄された遺物と判断する。ここでは, 土師器の杯3点, 甌3点, 甕類7点, 須恵器片1点を図示した。

図38-1~3は土師器の杯である。同図1は平底化しているが, どれも内黒の有段丸底のものである。同図1・2は口縁部が大きく外傾して開くが, 同図3は直立気味に開き, 先端部分が僅かに内湾する。

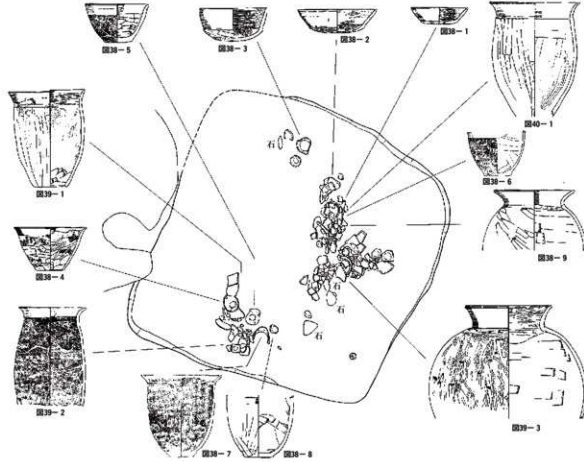


図37 15号住居跡遺物出土状況

甕類は体部が球胴のもの、口縁径が最大となるものと大きく分けられる。球胴の甕は図38-9・図39-3の2点であるが、図39-3は胴部の最大径が約30cmとなる極めて大きいものである。どちらも下半部が欠けていて不明であるが、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデされており、図39-3は体部外面と口縁部内面にヘラミガキが施されている。

その他の甕は煮炊具として使用されるもので、大小の大きさがある。図38-5・6は器高が約10cmほどの小型甕で、口縁部と体部の境が明瞭でなく、体部外面にハケメ調整が認められる。同図5は完形で、口縁部の内面にはリング状に付着した煤が観察できる。図38-7・8、図39-2の3点は器高が高くなり、口頭部が「く」の字状に屈曲している。そのうちの図38-7、図39-2は内外面ともハケメ調整が認められ、外面が縦方向、内面が横方向に施されている。図39-2は胴部が長く発達したものであるが、胴部の下方できれいに割り揃えられている。遺存する高さは約25cmほどで、同図1の甕とはほぼ一致している。また、同図2の甕はある程度乾燥させてから器壁を厚く作りなおしているようで、割れ口の内部からはハケメ調整された器面が確認できた。先に造られた部分のハケメ調整は内外面とも横方向に施されている。

図38-4、図39-1、図40-1は土師器の甕である。甕は大小の大きさの違いが認められるが、それぞれは甕の器形に認められるものである。

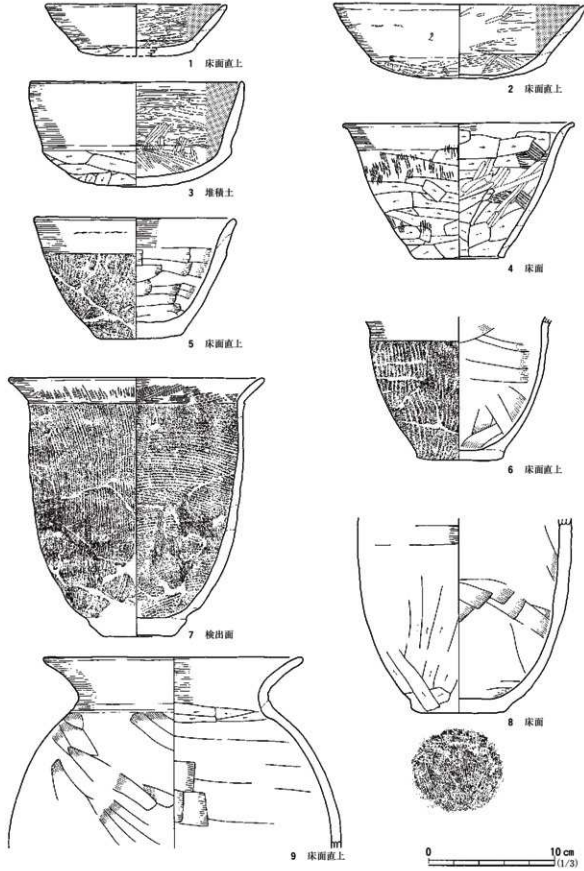


図38 15号住居跡出土遺物 (1)

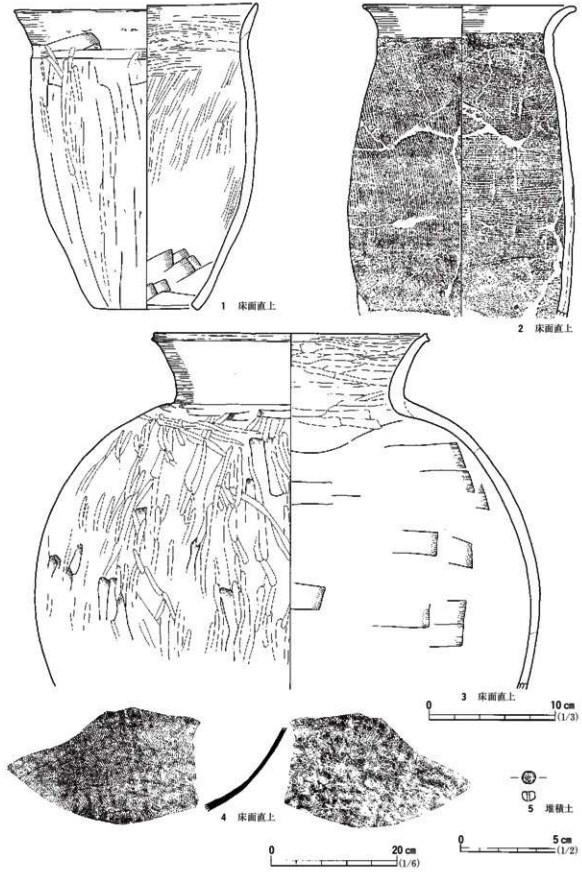


图39 15号住居跡出土遺物 (2)

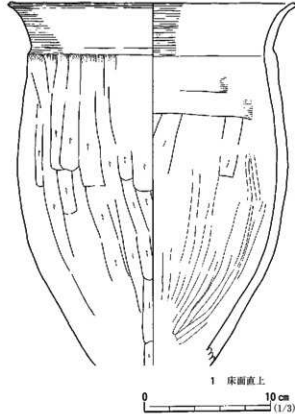


図40 15号住居跡出土遺物(3)

あることから、居住用の一般の住居跡とは異なった用途が考えられる。そのように考えれば、本住居跡は18号住居跡と同じ目的で同位置に建て替えられたものと推察することもできよう。

また、本住居跡の東・南周壁の外側からは、著しく重複したピットが周壁に平行して並んで検出された。それらは後背湿地帯から多数検出できたピット群と同じく、住居跡よりも新しい時期のものである。本住居跡とは直接的には関わらないが、同じ位置に小規模の建物が建てられていた可能性があり興味深い。

本遺構の時期は、出土した遺物から栗閉式期と考えられる。

(大 波)

16号住居跡 S 116

遺 構 (図41・42、写真23・24)

本遺構は、O19-17・18・27・28・37・38グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡南端の東向き斜面である。北西側に、数多くの住居跡が分布している。

重複関係を整理しておく、本住居跡は、17・30号住居跡を切っている。このうち、17号住居跡との関係は、重複部分が少ないうえ、ちようどそこに大きな攪乱があったので、前後の把握が微妙であった。遺物の特徴でも、両者の時期は近接している。

堆積土は、3層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、灰白色粘土混じりの貼床が、カマド周辺に施

図38-4は小型の瓶で、無底式のものである。体部は内外面をヘラケズリで形を整えており、部分的にハケメやヘラミガキの調整が認められる。図40-1は底部が欠けているが、図39-1と同じ無底式の瓶と考えられる。体部外面は縦方向にヘラケズリが認められ、内面はヘラミガキが施されている。

図39-4は須恵器の大甕で、体部下半のものともみられる。外面には平行タタキメが観察できる。

ま と め

本住居跡は一辺約3mの小型の住居跡でカマドは検出できなかった。ほぼ同位置からは本住居跡よりもひとまわりほど大きな18号住居跡が検出されている。18号住居跡は西周壁が攪乱を受けていて不明であるが、本住居跡にはカマドが無く、どちらの住居跡も小型で

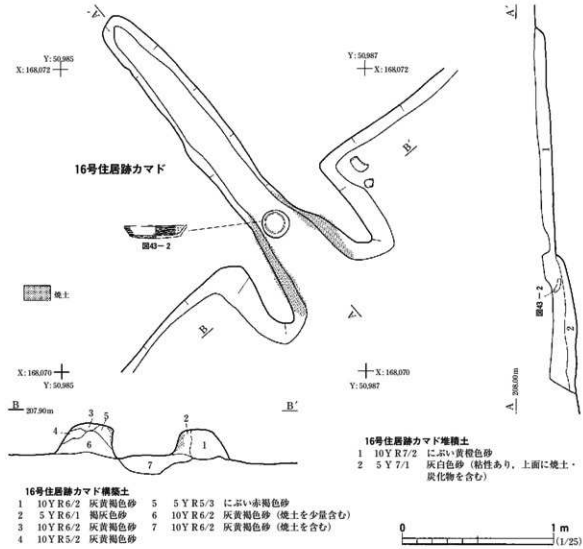


図42 16号住居跡カマド

されていた。この部分では、堅い踏み締まりが認められたが、断面図を作成した位置に分布が及んでおらず、図41には表現されていない。検出面と床面の比高差は、16~18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西5.5m、南北6.0mを測り、大型の部類に属する。床面積は、33.0㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、西に44°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。遺存状態は、良好である。煙道部は、周壁から170cmの長さを測り、底面は平坦で、煙出し孔側に向かってわずかにレベルが上がっていく。燃焼部とは、落差10cmほどの段で区画されている。燃焼部は、袖長69cm、焚口幅40cmの規模を有する。袖は、灰黄褐色砂主体に構築され、床面から約20cmの高さが残っていた。底面は、掘形に焼土を含む灰黄褐色砂が充填され、整えられている。

本住居跡のカマドでは、興味深い遺物の出土所見が得られている。燃焼部の奥壁直下で、完形の土師器杯が伏せられた状態で出土した。住居廃絶時のカマド儀礼ではないかと考えている。

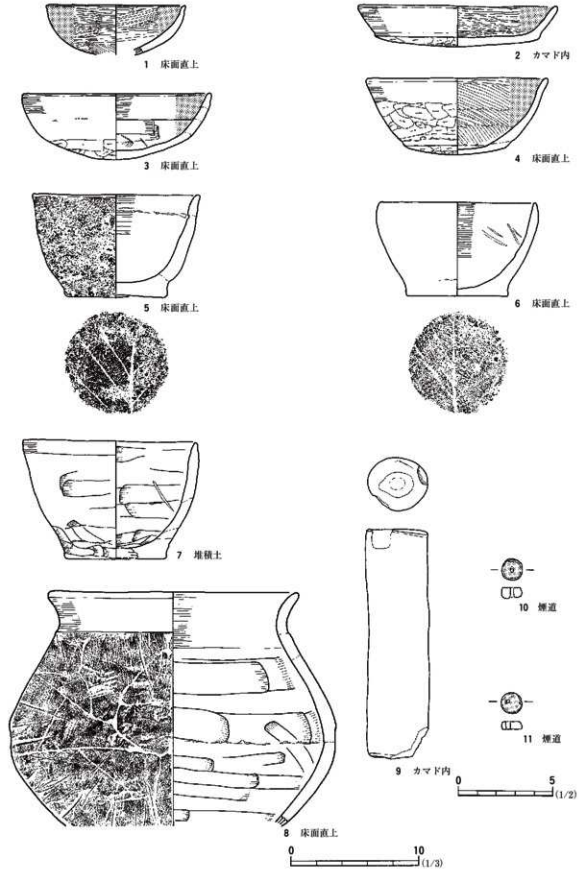


図43 16号住居跡出土遺物（1）

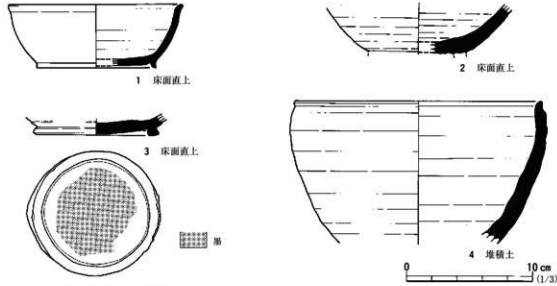


図44 16号住居跡出土遺物（2）

ピット類は、検出されていない。

遺物（図43・44、写真68・69・82・84）

本住居跡では、土師器片916点、須恵器片12点、土製品3点などが出土した。図示遺物は、15点あり、多くが床面の共伴資料である。それらの平面分布は、カマドの設置された西周壁側に集中しており、厨房施設との密接な相関関係が窺われる。

図43-1～4は、土師器杯である。1は、金属器模倣と考えられる。小型碗状の器形をなし、外面もミガキ・黒色処理されている。2は、平底風の有段丸底杯である。底径が大きく、皿状の形態を呈している。3は、無段丸底の身の深い碗状をなす。口縁部下端は、弱い稜を形成しており、ヘラケズリされた底部とは、はっきり区別される。したがって、有段丸底杯の退化形態とみることが可能である。4は、深めのロクロ土師器杯に似た器形を呈している。底部は平底風で、口縁部が外反する。外面は、底部全面に施されるヘラケズリが、口縁部中位まで及んでいる。

図43-5～7は、土師器小型甕である。3点は、器形・法量がよく似ている。側面からみた状態は逆台形状をなし、器高が口径を下回っている。これらは、煮炊痕跡が明瞭で、外面は、被熱のため、器壁がポロボロになっている。6では、内面にも同様な現象が顕著にみられ、口縁部下に、煤がリング状に付着している。

図43-8は、土師器球脚甕である。当該器種としては、小～中型品に属するもので、頸部の括れが弱いことが指摘できる。外面は、ハケメ調整されている。

図43-9は、カマド内から出土した土製支脚である。据えられた状態ではなかったため、廃棄時に動かされた可能性がある。

図43-10・11は、土製白玉である。表面は、黒色処理されている。カマド煙道部から出土しており、カマド儀礼に伴うものかもしれない。

図44-1・3は、須恵器高台杯である。1は、きわめてつくりの薄い、優品である。口縁部の立

上がり角度が急で、端部は外反し、内側が平坦に仕上げられている。高台は、外端接地で、ごく短い。底部と口縁部の境に、付されている。3は、口縁部を打ち欠いて、転用礎にされたものである。使用面は底部外面で、墨痕が観察される。この製品は、いわゆる出っ尻底であり、胎土・焼成の特徴からみても、湖西製品の可能性が高いとみられる。底部は、全面に回転ヘラケズリ調整が加えられている。

図44-2は、須恵器長頸瓶の底部であろうか。小破片なので、器種は特定が難しい。

図44-4は、須恵器鉢である。口縁部外面は、端部付近で沈線状に窪んでいる。胎土中に、大きな白色砂粒が顕著に観察される。

ま と め

本遺構は、北ノ脇遺跡南端の東斜面に営まれた堅穴住居跡である。平面プランは整った方形を呈しており、規模は比較的大きい。カマドは、廃絶時に支脚が動かされており、燃焼部は壊されたと考えられる。また、その際に、儀礼が行われたとみられ、燃焼部奥壁に、完形の土師器杯が伏せられていた。

本住居跡が営まれたのは、床面の遺物から、国分寺下層式期と考えられる。(菅 原)

17号住居跡 S117

遺 構 (図45・46、写真25・26)

本遺構は、O19-25~27・35~37・46・47グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡南端の後背湿地に面した自然堤防の東向き斜面である。この微地形のため、床面調査時には、水が湧いてきた。周囲の状況は、北側に、数多くの住居跡が分布している。

重複関係を整理しておくとして、本住居跡は、24・33・37・39号住居跡を切っており、16号住居跡に切られている。ただし、16号住居跡との関係は、重複部分が少ないため、前後の把握が微妙であった。遺物の特徴でも、両者の時期は近接している。

堆積土は、2層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、明黄褐色粘土混じりの貼床が全体に施され、カマド周辺では、踏み締まりが認められた。ただ、貼床土の層厚は、0.3~0.7mmの非常に薄いもので、断面図に表せていない。また、カマド右脇に灰白色粘土の塊が認められた。検出面と床面の比高差は、25~30cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西6.0m、南北6.0mを測り、大型の部類に属する。床面積は、36.0㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に18°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、少し左に偏っており、遺存状態は、良好である。煙道部は、周壁から104cmの長さを有し、底面は、外側に向かって徐々にレベルが上がっている。そして、煙出し孔部分では、底面が少し窪んでいた。なお、燃焼部との境は、明瞭でなく、崩れた可能性が

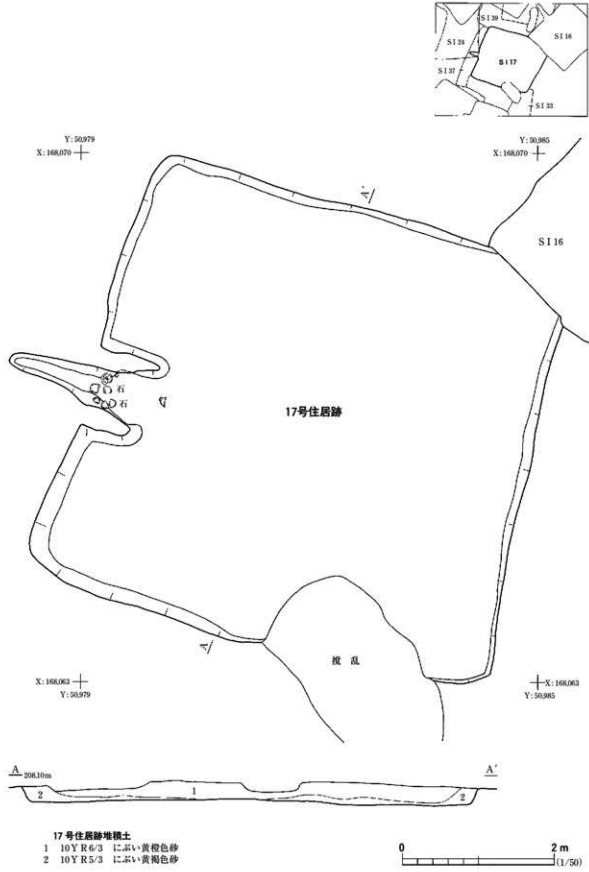


図45 17号住居跡

考えられる。燃焼部は、袖長80cm、焚口幅54cmの規模を有する。袖は、灰黄褐色砂主体に構築され、床面から32cmの高さが残っていた。

本住居跡のカマドでは、燃焼部奥壁で、礫5個と須恵器杯1点がまともに出土した。層位は、住居機能中に堆積したとみられるⅡ2直上である。16号住居跡にみられたようなカマド儀礼の痕跡と、考えている。ピット類は、検出されていない。

遺物

(図47、写真69・81・82・84)

本住居跡では、土師器片21点、須恵器片4点、土製品6点が出土した。図示遺物は、8点あり、このうち図47-1・6の2点が、遺構に伴っている。

図47-1～5は、土師器杯である。製作技術の違いで、1～3の非ロクロ土師器、4・5のロクロ土師器に分かれる。前者は、すべて無段である。1は、カマド内から出土したもので、上述のように遺構に共存する。平底風の底部から、口縁部が内湾して立ち上がっている。因分寺下層式に比定して問題なかろう。2は、椀状の器形をなし、口縁部は直立気味に立ち上がる。3は、底部が完全に平底化している。体部は、内湾して立ち上がり、端部で直立する。底部全面のヘラケズリが、口縁部下端にまで及んでいる。5は、断面逆台形の箱形をなすもので、底部に回転糸切り痕が観察される。口径に対する底径の比率が大きく、ロクロ土師器杯としては、古手に属する。4は、小破片なので、器形の特徴がよく分からない。

図47-6は、カマド儀礼に使用された須恵器杯である。体部の腰が張り、口縁部が直線的に外傾する。底部は、静止糸切り底で、底部周縁～体部下端に手持ちヘラケズリ調整が加えられている。

図47-7は、須恵器高台杯の破片である。静止糸切り痕が観察される。

図47-8は、土製丸玉である。

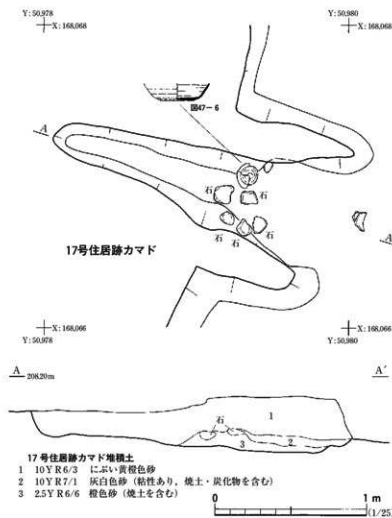


図46 17号住居跡カマド

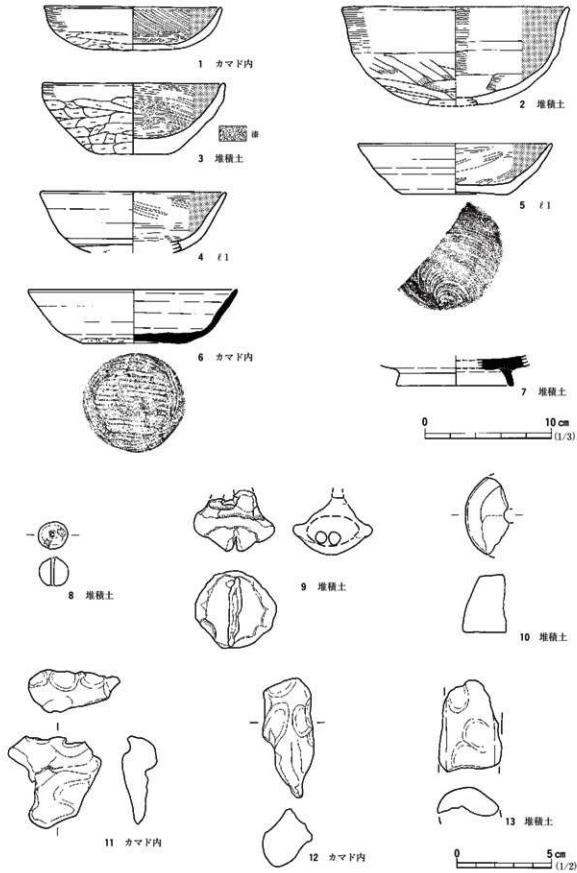


図47 17号住居跡出土遺物

図47-9は、つまみを欠いた土鈴であり、内側の玉が遺存している。今でも、振ると、カラカラと音がする。

図47-10は、土製紡錘車の破片である。

図47-11～13は、用途不明の土製品である。指で簡単に成形しただけのもので、使用痕跡は認められない。

まとめ

本住居跡は、後背湿地に面した自然堤防の東向き斜面に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、正方形を呈しており、規模は比較的大きい。カマドは、西周壁に設置され、廃絶時に礫と須恵器杯が燃焼部奥壁に置かれていた。

本住居跡が営まれたのは、カマド内の遺物から、国分寺下層式期と考えられる。(菅原)

18号住居跡 S I 18

遺構 (図48, 写真27)

本遺構は、O18-96・97、O19-6・7グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡の東端付近である。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

重複関係を整理しておくとして、本住居跡は、15号住居跡に切られている。遺存状態は、上部削平が著しく、不良であった。西周壁は、攪乱でほとんど無くなっている。

堆積土は、1層しか残っていなかった。このため、自然堆積土であるか人為堆積土であるかは、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。床面と検出面の比高差は、2～5 cmを測る。

本住居跡の平面プランは、長方形基調を呈している。規模は、東西3.6m、南北2.9mを測り、小型の部類に属する。床面積は、10.4㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に34°振れている。

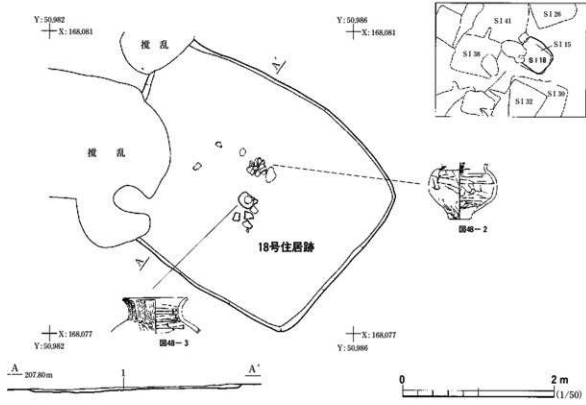
カマドは、検出されなかった。おそらく、攪乱で壊された西周壁に設置されていたと推定される。ピット類は検出されていない。

遺物 (図48, 写真69・70)

本住居跡では、土師器片132点が出土した。図示遺物は、3点ある。このうち、遺構に伴うのは、2点である。床面中央に潰れていた。

図48-1は、土師器小甕である。胴部は横長で、頸部が括れず、口縁部はそのまま内傾して立ち上がっている。頸部には、焼成前に2か所の穿孔が施されており、胴部には、焼成後に大きな孔が空けられている。外面の器面調整は、ハケメである。

図48-2・3は、土師器球胴甕である。2の器形は、肩が張っており、底部が突出する。小～中型品に分類される。3は、大型品になるもので、頸部が直立し、口縁部が外反する。



18号住居跡増殖土
1 7.5YR4/2 灰褐色砂

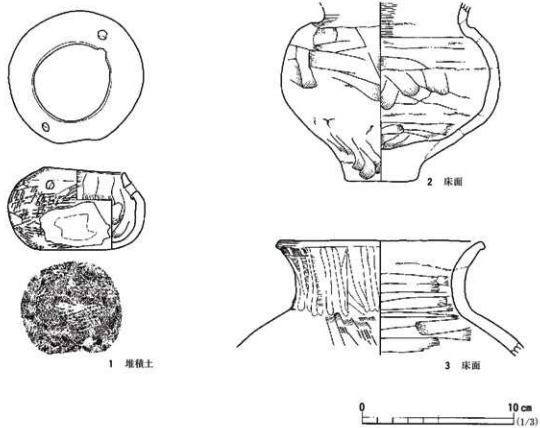


図48 18号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、北ノ脇遺跡の東端付近に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、長方形を呈しており、規模は小さい。遺存状態は、上部削平が著しく、不良であった。

カマドは、検出されていない。

本住居跡が営まれたのは、共存遺物から、佐平林式期～栗田式期に位置付けられる。（菅 原）

19号住居跡 S 119

遺 構 (図49, 写真28)

本遺構は調査区北部のO18-46・47・56・57グリッドから検出された竪穴住居跡である。本住居跡は調査区の北端に位置し、検出された住居の北側は調査区外となる。しかし、住居の北側部分は調査区内に設定した水路と、橋脚建設の際の掘削とでほとんど残っていないものとみられる。住居跡は、旧地形の自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと緩やかに傾斜する斜面上に立地しており、比較的この付近から検出できた住居跡は少ない。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、南周壁から約3mほどの部分しか確認できなかった。検出面から床面までの深さは約25-50cmとLⅢを深く掘り込んで造られている。住居跡内堆積土は3層に分層でき、きれいにレンズ状堆積する自然堆積である。ℓ2とℓ3は色調からはほとんど区別がつかないが、ℓ2には焼土や炭化物を含んでおり、ℓ3にはLⅢとみられる黒褐色砂質土が混じっている。

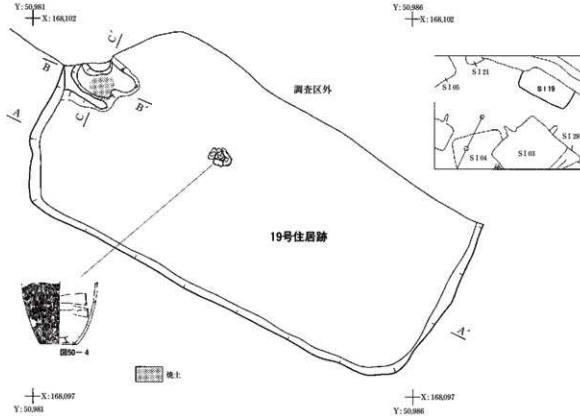
住居跡の大きさは南周壁で約5.7m、東周壁の遺存する部分で約2.9mを測る。住居跡の主軸方向はN27°Eで、カマドは西周壁に設置されている。周壁は西周壁側の残りが良く、床面からはほぼ直立する。床面はほぼ平坦であるが、貼り床等は認められなかった。また、他にカマド以外の施設は確認できなかった。

カマドは南西隅から約1.5mほど離れたところから検出されたため、西周壁の南寄りには付設されていたようである。カマドは燃焼部しか残っておらず、北側は崩落していて遺存状態は悪い。カマド南袖は壁際から約70cmほど細く張り出しているが、北袖はほとんど確認できなかった。燃焼部底面も鳥状に部分的にしか残っておらず、奥壁部分も元の形をとどめてはいない。検出状況からは燃焼部底面と住居跡の床面は高低差があるが、焚口側に緩やかに傾斜していたものと考えている。カマドの構築方法としては他の住居跡と同様に、燃焼部の底面と袖の部分とは構築土を使い分けていたようである。

遺 物 (図50, 写真70・83・84)

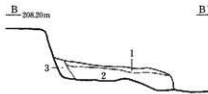
本住居跡からは土師器片279点、須恵器9点、土製品1点などが出土している。そのうち図示したものは土師器3点、須恵器2点、土製品1点である。そのうち床面から出土したものは図50-2の須恵器の杯蓋である。他は堆積土中であるが、図19-4は床面近くから出土したもので平面図上に示しており、本住居跡に伴うものとみられる。

第2編 北ノ脇遺跡



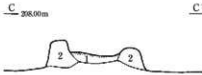
19号住居跡埋積土

- 1 10Y R4/3 に多い黄褐色砂質土 (に多い黄褐色砂を多量含む)
- 2 10Y R3/4 暗褐色砂質土 (焼土粒・炭化物粒を少量含む)
- 3 10Y R3/4 暗褐色砂質土 (黒褐色砂質土をやや多く含む)



19号住居跡カマド埋積土

- 1 5Y R4/3 に多い赤褐色細砂
- 2 5Y R4/2 灰褐色細砂 (焼土塊を多量含む)
- 3 5Y R4/1 褐灰色土 (焼土塊・炭化物を少量を含む)



19号住居跡カマド埋積土

- 1 7.5Y R4/2 灰褐色細砂 (焼土塊を少量を含む)
- 2 7.5Y R4/1 褐灰色砂 (焼土・炭化物を少量を含む)



図49 19号住居跡

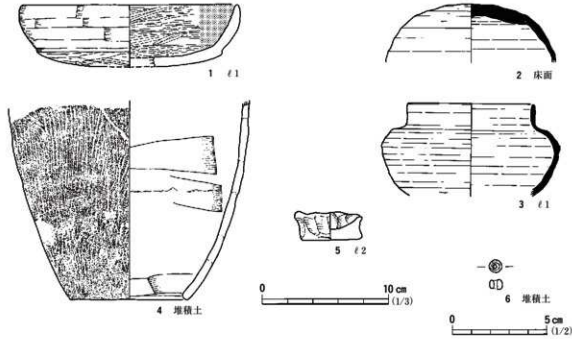


図50 19号住居跡出土遺物

図50-1・4・5は土師器である。同図1は内黒の有段丸底杯で、口縁部が内湾する。同図4は甗で、無底式のものである。体部外面はハケメ調整である。同図5は小型の手づくね土器である。

図50-2・3は須恵器である。同図2は杯蓋で、天井部が丸く、回転ヘラケズリが施されている。同図3は壺で、器形は平たく肩部がやや張り、口縁部が直立している。

図50-6は土製の丸玉で、表面が黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は一辺約6m前後の中型から大型の方形の住居跡と考えられる。そのため、検出できた範囲は住居跡の南側1/2程度で、北側半分は調査区外となっている。カマドは西周壁の南寄りに設置されていたため検出することができたが、遺存状態が悪いため詳細はわからなかった。

出土遺物は栗園式期のものとみられ、特に床面から出土した図50-2の須恵器の杯蓋の器形からその古段階に属するものと考えられる。(大波)

20号住居跡 S I 20

遺構 (図51, 写真29)

本遺構は本遺跡の調査区の中央やや北寄り、O18-75・76・85・86グリッドに所在し、L II中層において検出した。本住居跡は、阿武隈川の自然堤防の頂部から後背湿地へ傾き始める緩斜面上に立地している。ここから南に約40m、幅約15mの範囲は、自然堤防の頂部にわたって竪穴住居跡が密集しており、本住居跡はその密集区の北部に位置している。本住居跡は41号住居跡、3号柱列跡と重複するが、41号住居跡より新しく、柱列跡より古い。

本住居跡の平面形は方形を基調とするが、北隅が弧状を呈し、それ以外の三隅が角張った形状を

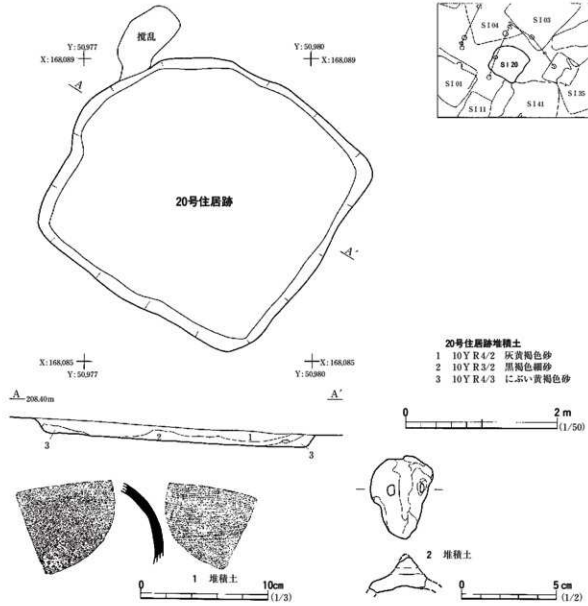


図51 20号住居跡・出土遺物

呈する。規模は一辺約3.5m、検出面から床面までの深さは住居跡南周壁近くで最大27cm、最も浅い北周壁近くでは15cmほどである。東周壁を基にした方位との関係は、 $N35^{\circ}E$ とやや東に傾いている。周壁の立ち上がりはやや緩やかであるが、崩落によるものと考えられている。床はIⅡを直に床とし、床面は地形に合わせて東に傾いているが、ほぼ平坦である。特に、踏み締まりによる硬化などは認められなかった。

住居跡内堆積土は $\ell 1 \sim 3$ の3層に区分した。 $\ell 3$ は周壁の崩落土とみられる鈍い黄褐色砂である。この $\ell 3$ が周壁際に三角堆積していることから、本住居跡は自然に埋没したものと考えている。その他、カマド等の住居施設は一切検出できなかった。(木村)

遺物 (図51)

本住居跡からは土師器片172点、須恵器片8点、土製品1点が出土している。出土遺物については

細片が多い。堆積土中から散発的に出土し、本住居跡に確実に伴うものはない。ここでは2点を図示した。

図51-1は須恵器片で、壺類の肩部のところである。

図51-2は土鈴とみられるが、下半部のほとんどが欠けていて形状はわからない。つまみ状に張り出す部分には紐通しとみられる穴が付いている。(木村、大波)

まとめ

20号住居跡はその平面形が不整で、また床面に明確な踏み締まりが認められないなど、住居跡とすることにやや疑問が残る。しかし、南南西約3mに隣接する11号住居跡と規模、主軸方向ともに近似していることから、これに近い年代、性格の遺構と判断した。あるいは、建築途中で放棄された住居と考えることも可能かもしれない。したがって、その所属時期についても11号住居跡とはほぼ同時期と考えられる。(木村)

21号住居跡 S121

遺構(図52, 写真30)

本住居跡は調査区北端近くのO18-44・45グリッドに所在し、LⅡ中層において検出した。本住居跡の立地を旧地形からみると、阿武隈川其自然堤防のほぼ頂部にあたり、調査区内では最も標高の高い部分である。本遺構より北については、昭代橋架橋の際に攪乱を受けたものとみられ、遺構はほとんど検出されていない。遺存状態が悪いせいもあり、本遺構と重複する遺構はないが、近接する遺構としては5号住居跡が約1.5m西に位置している。

本住居跡は、方形もしくは長方形を呈すると思われ、住居跡の南西隅のみを検出した。したがって、遺存する部分の平面形は北を底辺とする不整三角形形状を呈し、その規模は底辺1.6m、高さが0.8mである。検出面からの深さは最大約20cmを測る。遺存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。住居跡内堆積土は2層に区分でき、ともに褐色砂質土である。堆積状況を推定するだけの見地は得られなかった。(木村)

遺物(図52, 写真70)

本住居跡からは土師器片38点が出土している。検出時、壁際に埋まる形で、同一個体の土師器片が一括出土している。出土層位は $\ell 1$ で、床面からかなり浮いているが、本遺構に伴うとみて良いと考えている。ここでは、その土師器片1点を図示した。

図52-1がその土師器片で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、体部外面にハケメ調整が施されるものである。口縁部の内面にもハケメが認められる。器形は胴部が丸く張り出しているが、他の球胴甕に比べると口が広く作られており、口縁部径と胴部最大径とはほぼ同じ大きさである。底部の周縁にはドーナツ状に粘土が貼り付けられている。

まとめ

21号住居跡については、ほとんど原形をとどめておらず、その詳細については不明である。住居

第2編 北ノ脇遺跡

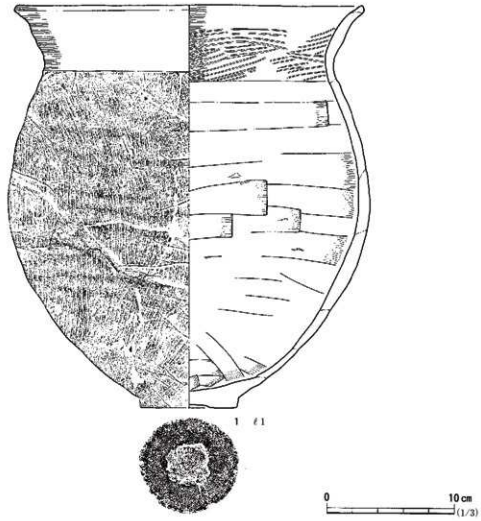
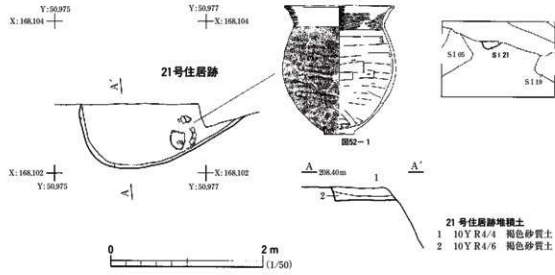


图52 21号住居跡・出土遺物

跡内から出土した土師器の甕は栗園式期のもものとみられ、周辺から検出された住居跡との関係を考慮しても、本住居跡の時期の上限はその時期に求めることができそうである。(木村・大波)

22号住居跡 S122

遺 構 (図53, 写真31)

本住居跡は調査区北端、O18-23・34グリッドにかけて検出した。本遺跡の調査区北縁部分とは、昭代橋架橋の際と思われる攪乱を受け、旧地形はほとんど残されておらず、遺構もほとんど検出されていない。本住居跡はこの地区に排水路を設定した際に水路壁面で検出した。ただし、この土層断面の背面直後まで深い攪乱が迫り、奥行きは10cmに満たず、平面形などについては一切不明である。断面上で確認できる遺構の掘り込み面は、LⅡ中層である。

検出された住居跡の規模は、断面幅で約3.5m、掘り込み面から床面までの深さが最大で40cmである。検出された住居跡断面を観察すると、西側底面の立ち上がりの形状から住居跡の南西隅部分を検出したものと思われる。また、やや西壁寄りに遺物が集中する部分が確認でき、この部分が周囲の床面よりやや深くなっている。このことから、住居跡南西隅部分がやや窪んでおり、そこに土器をおいていたものと考えられる。

堆積土はℓ1-3の3層に区分した。ℓ1は遺構内部の上層から遺構外に連続しており、西壁を大きく崩落させて外から流れ込んだ様子がうかがわれる。また、東壁の崩落土とみられるℓ3が壁際に堆積し、その上層にℓ2が形成されていることから自然堆積と判断している。前述の窪み部分から出土した土器が、横倒しでやや床面から浮いていることから、土砂の流入による西壁の崩落は、かなり急激なものであったと推測できる。

遺 物 (図53, 写真70)

本住居跡からは土師器が61点出土している。検出時、壁面に顔を出す形で、完形に近い土師器甕2点と、高杯1点が出土している。出土層位はℓ1であるが、予想される出土位置と埋没状況から、本遺構に伴う遺物と考えている。ここではこれらの土師器3点を図示した。

図53-1は土師器の高杯で、杯部は口縁部が大きく外傾する有段丸底で、脚部は椗が「ハ」の字状に開いている。

図53-2・3は土師器の甕で、体部外面がハケメ調整されている。同図2の甕は底部が特徴的で、丸く削って仕上げられて丸底となっている。このような底部を持つ甕の器形は、本遺跡のものとは別系譜のもので、日本海側にも類例が認められる。同図3の底部は木葉痕の付くもので、周縁に粘土が貼り付けられている。

ま と め

22号住居跡は詳細については不明である。しかし、断面でしか検出できなかったにも関わらず、出土した土師器3点の遺存状態は良好であった。出土遺物から、本住居跡は栗園式期に営まれたものと考えられる。(木村・大波)

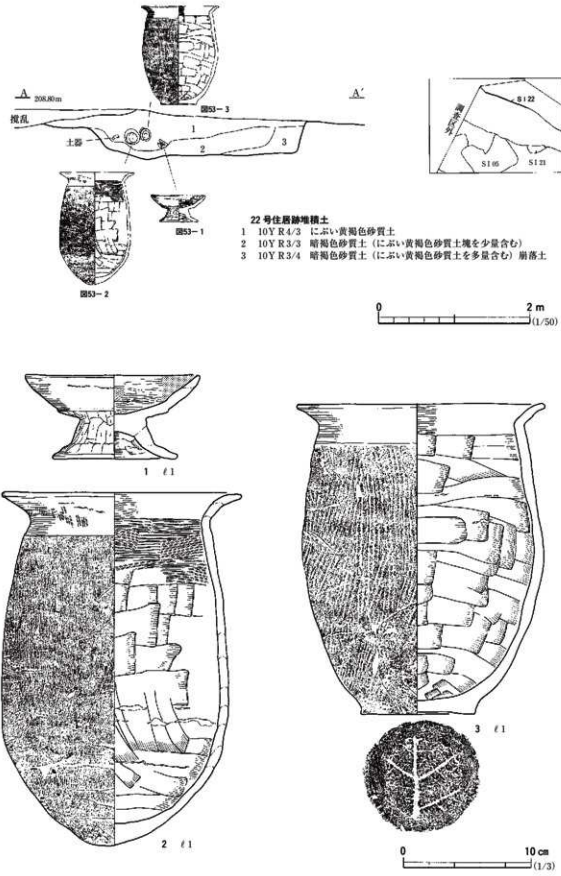


図53 22号住居跡・出土遺物

23号住居跡 S I 23

遺 構 (図54, 写真32)

本遺構は調査区北部のO18-72・73・82・83グリットにかけて検出した竪穴住居跡で、調査区の河川に面した西端に位置するもののひとつである。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれの関係は23号住居跡→13号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順に造られている。

本住居跡のほとんどの部分が他の住居跡と重複しているが、他の住居跡よりも深く掘り込まれていたため、それぞれの住居跡の床面から検出することができた。しかし、住居跡の中央は大きく攪乱を受けており、遺存状態はあまりよくない。そのため住居跡内堆積土は部分的にしか残っておらず、土層ベルトを設定した部分は色調の違いから6層に分層したものの、埋没過程を判断できる材料とはならなかった。

住居跡の大きさは東周壁が約3.8mで、東西幅は遺存する範囲で約4.8mを測る。平面形は東西に長い長方形である。周壁は立ち上がりが確認できるほど遺存していない。床面はほぼ平坦であるが、

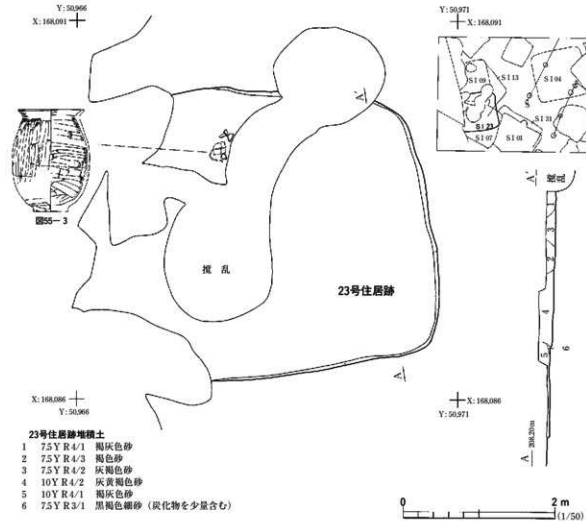


図54 23号住居跡

貼床等は確認できなかった。また、他にカマドなどの付属施設も確認できなかった。

遺物 (図55, 写真70)

本住居跡からは土師器片62点が出土している。そのうち住居跡に伴うと考えられるのは平面図上に示した糞1点のみである。遺構の重複や攪乱が著しいため、他の時期の混入品も多く含むものと考えられる。ここでは土師器3点を図示している。

図55-1は杯で、有段丸底のものがほとんど平底化している。同図2は甕類の底部のようであるが、内面はミガキが施され黒色処理されている。同図3は甕で、床面から少し浮いた状態で出土した。体部が丸みを帯びており、胴部中央が最大径となる。外面は縦方向にヘラナデで調整されている。底部には木葉痕が認められる。

まとめ

本住居跡の西側部分は斜面のため崩落し、住居跡内は大きく攪乱を受け、床面ぎりぎりまで他の住居跡に掘り込まれている。そのため遺存状態は極めて悪く、詳細については不明である。しかしながら、遺存する部分から東西幅約5m、南北幅約4mの標準的な大きさの住居跡が想定される。カマドは短軸方向の北周壁に設置されていたものと考えられるが、検出はできなかった。

出土遺物は少ないが、それらは栗園式期以降のものとみられる。どちらも堆積土中であるが、本住居跡と重複する9号住居跡からは平底化した土師器の杯が出土している。そのことから重複関係にある9・13・23号住居跡は、廃絶からあまり時間が経過しないうちに築かれたものと考えている。

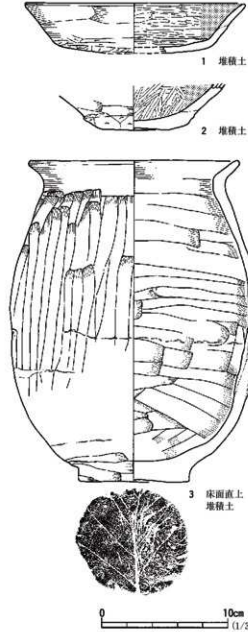


図55 23号住居跡出土遺物

24号住居跡 S 124

遺構 (図56・57, 写真33・34)

本遺構は、O19-4・5・14・15・24・25・34・35グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡の立地する自然堤防上の南端付近にあたる。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

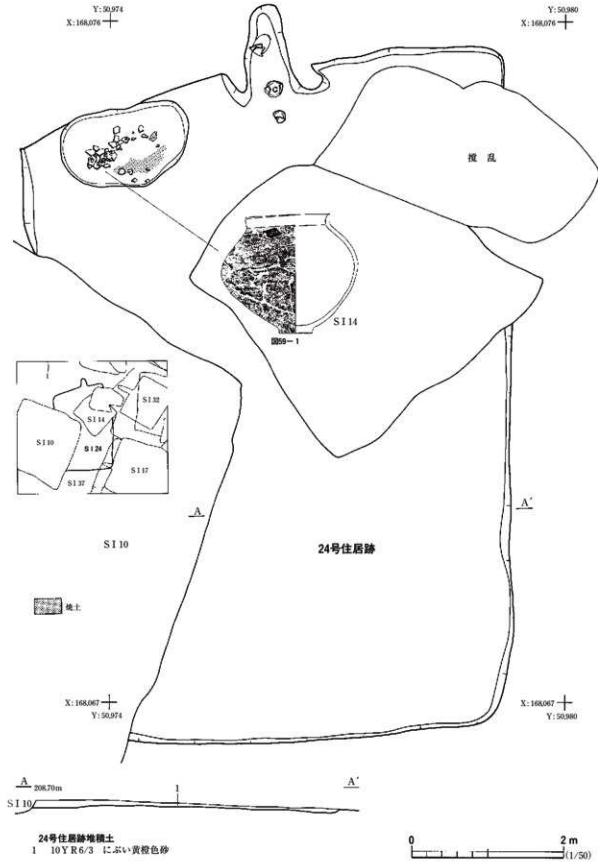


図56 24号住居跡

重複関係を整理しておくとして、本住居跡は、10・14・17号住居跡に切られており、37・39号住居跡を切っている。遺存状態は、カマド付近でよく残っていたが、他は破壊が進んでおり、周壁も、残り少ない。

堆積土は、1層しか残っていなかった。このため、自然堆積であるか人為堆積であるかは、不明である。床面は、ほとんど貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。ただ、カマド付近では、周囲より一段低い窪みが認められ、その埋土から定量の遺物が出土した。床面と検出面の比高差は、2～10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、長方形基調を呈している。しかし、北辺は、周壁が削平されているので、左半分のラインが本来の位置より後退している。規模は、東西6.3m、南北9.0mを測り、大型の部類に属する。床面積は、56.7㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、西に2°振れている。

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から長さ81cmを測り、住居跡規模の割りには、短い特徴が指摘される。一方、燃焼部は、住居跡絶時に袖が壊されたとみられ、長さ42cmしか残っていない。焚口幅は、55cmを測る。

このカマドからは、3点の土師器が出土している。図58-9の長胴甕は、懸け口に固定されていた煮炊具と考えられる。図58-3・7の杯・高杯は、伏せられており、意図的に置かれた状況を示していた。7は、支脚に転用されていたとみられるが、3については、儀礼に伴って置かれた可能

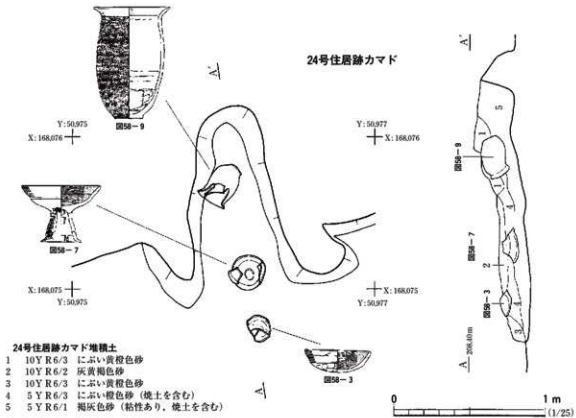


図57 24号住居跡カマド

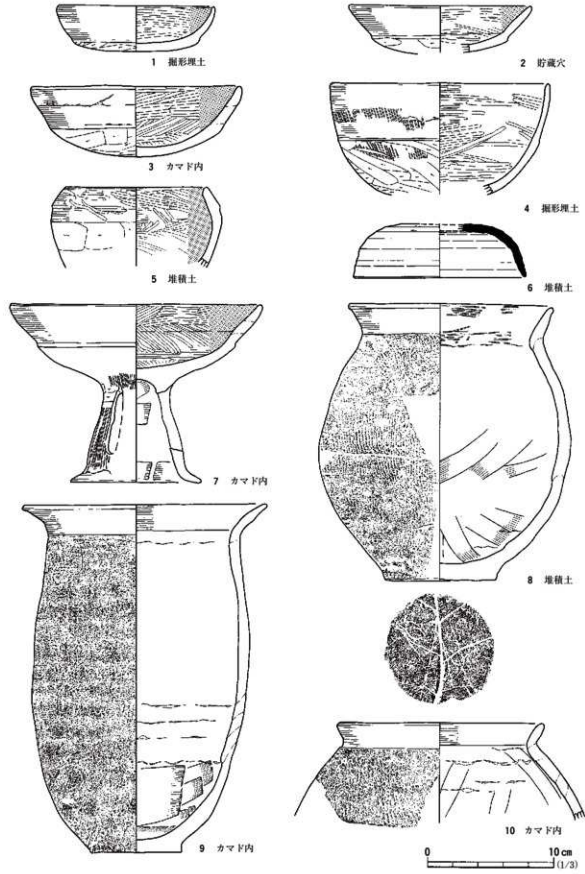


図58 24号住居跡出土遺物(1)

性が考慮されよう。

本住居跡では、カマド左脇で貯蔵穴が検出されている。170cm×106cmの横長楕円形を呈するもので、床面から32cmの深さを測る。内部は、焼土が充満しており、白い骨片が混じっていた。これは、本来、カマド燃焼部に堆積していた土層と推定される。住居廃絶に伴って、カマドを取り壊した際に、投棄されたのだろう。この施設から出土した、図58-2や図59-1は、この際に同時に投棄されたものと考えている。

遺物 (図58・59、写真71・83・84)

本住居跡では、土師器片549点、須恵器片5点、骨片多数が出土した。図示遺物は、13点ある。このうち、遺構に伴うものは、カマドとその周辺、そして、貯蔵穴に分布が集中している。

図58-1～5は、土師器杯である。このうち、1～3は、有段丸底杯に分類される。1は、口縁部が強く内湾しており、底部は平底風をなす。2は、口縁部の立上がりがり直線的で、大きく外傾する。3は、やや大型で、口縁部が内湾気味になっている。4は、身の深い椀状をなすものである。外面に、ハケメ調整痕が観察される。5も、同じく椀状の形態をなすが、口縁部が内傾する点で、

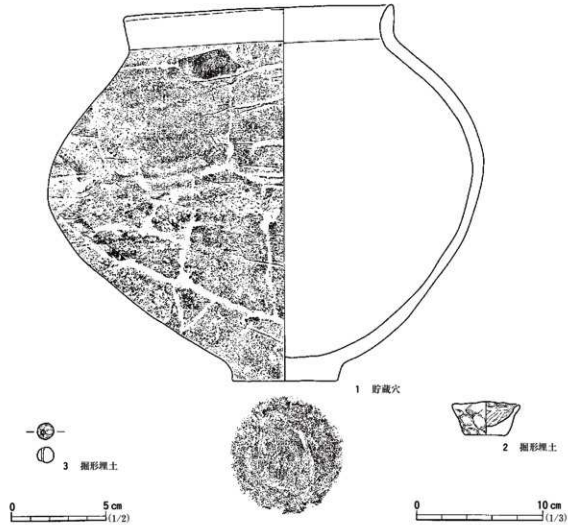


図59 24号住居跡出土遺物 (2)

違いがみられる。

図58-6は、須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、回転ヘラケズリ調整が施され、口縁部は「ハ」の字状に開いている。堆積土の資料であり、遺構には伴わない。

図58-7は、土師器高杯である。有段丸底杯に、長脚を乗せたもので、3方向からの透かしが入っている。杯部は、内面の黒色処理が半分再酸化している。

図58-8～10、図59-1は、土師器甕である。図58-9は長胴甕、図58-10・図59-1は、球胴甕に分類される。8は、両者の中間的な形態を呈しているが、器表面の痕跡から、煮炊具であったのが明らかである。

図59-3は、土製丸玉である。

図59-2は、小型手握ね土器で、内面が、ミガキ・黒色処理されている。

まとめ

本遺構は、北ノ脇遺跡の立地する自然堤防の南端付近に営まれた堅穴住居跡である。平面プランは、長方形を呈しており、規模が大きい。遺存状態は、上部削平が著しく、不良であった。

カマドは、北周壁に設置され、燃焼部に土師器杯と高杯が伏せられていた。その左脇に設けられた貯蔵穴では、カマドの焼土が充満して検出され、住居廃絶時に投棄されたと考えている。

本住居跡が営まれたのは、共伴遺物から、栗朔式期に位置付けられる。(菅原)

25号住居跡 S I 25

遺 構 (図60, 写真35・36)

本遺構は、O19-45・46・55・56グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡の南端付近である。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

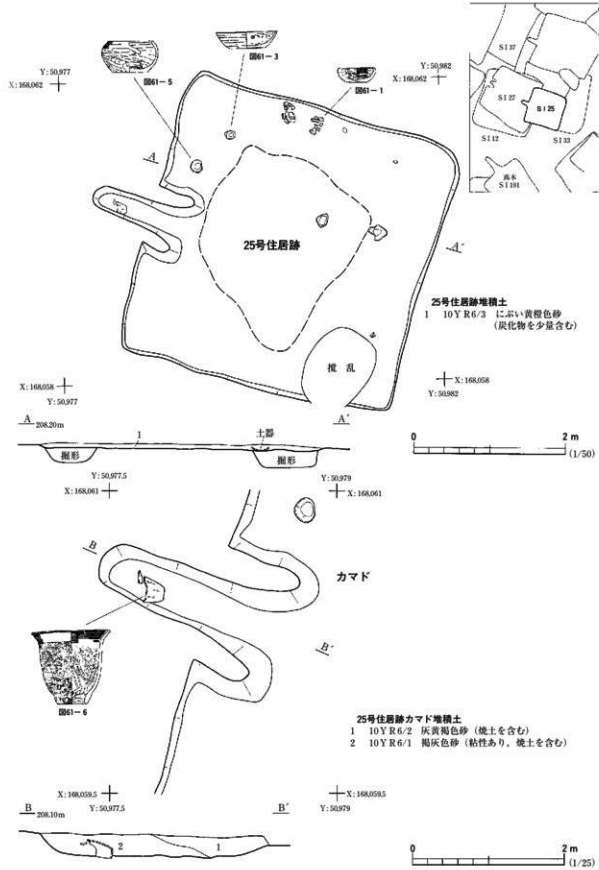
重複関係を整理しておくとして、本住居跡は、12・27・33・37号住居跡を切っている。遺存状態は、上部削平が著しい。それでも、平面プランは、ほぼ全体が捉えられている。

堆積土は、炭化物を少量含んだにぶい黄橙色砂が、1層確認された。自然堆積土であるか人為堆積土であるかは、不明である。

床面は、ドーナツ状を呈する住居掘形を埋めることで、平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりが認められた。床面と検出面の比高差は、4～10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、整った正方形基調を呈している。規模は、東西3.8m、南北3.8mを測り、小型の部類に属する。床面積は、14.4㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に17°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から長さ81cmを測り、水平な底面をなしている。先端底面からは、土師器甕が出土した(図61-6)。しかし、これは、重複する27号住居跡の堆積土に潜り込んでいたので、そちらに帰属する可能性が高いと思われる。燃焼部は、袖長51cm、焚口幅30cmの規模を有している。袖は、にぶい黄橙色砂主体に構築され、床面から9cmの高さが残っ



ていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図61. 写真71・72)

本住居跡では、土師器片244点、須恵器片3点が出土した。図示遺物は、6点ある。このうち、遺構に伴うのは、図61-1・3・5の3点である。6は、上述したように、本来は、27号住居跡に帰属する遺物であったと推定している。

1～3は、土師器杯である。1は、非ロクロ土師器であり、金属器を意識した製品とみられる。平底の底部から、体部が丸みを持って立ち上がり、口縁部で直立している。内外面ミガキ・黒色処理されている。2は、非ロクロの有段丸底杯である。3は、ロクロ土師器であり、逆台形の箱形状をなす。底部全面から体部下端に、回転ヘラケズリ調整が加えられている。

4は、非ロクロの土師器高杯である。有段丸底杯を短脚に乗せたもので、外面にハケメ調整が残っている。

5は、非ロクロ土師器の小型甕である。器形の上で、1の土師器杯と類似する点がある。器表面は荒れておらず、煮炊具ではないと考えている。

6は、非ロクロ土師器の甕である。無底式のもので、外面はハケメ調整されている。

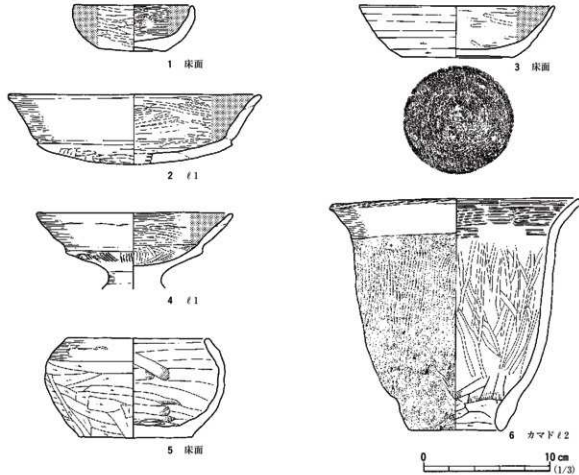


図61 25号住居跡出土遺物

ま と め

本遺構は、北ノ脇遺跡の南端付近に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、正方形を呈している。上部削平が進んでいたが、全体としての遺存状態は、良好であった。

本住居跡の遺物は、土器型式の過渡期の状況を示す好資料である。床面で、非ロクロ土師器杯とロクロ土師器杯が共存した。したがって、本住居跡が営まれた時期は、国分寺下層式期から表杉ノ入式期へ移行する段階と位置付けられよう。(菅 原)

26号住居跡 S 126

遺 構 (図62・63, 写真37・38)

本遺構は調査区北部のO18-86-88・97・98グリッドにかけて検出した、一辺約5mの竪穴住居跡である。本住居跡の立地する地形は、自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと傾き始める緩斜面である。本住居跡は自然堤防上に立地する住居跡の東端に位置し、後背湿地側には住居跡は認められないが多数の小ピットを検出することができた。本住居跡は35・41号住居跡や複数の小ピットと重複するが、どちらの住居跡よりも新しく、小ピットよりは先に造られている。

本住居跡はLⅡ中から検出でき、LⅢまで掘り込まれて造られていた。北側半分の残りが良く、その部分の検出面から床面までの深さは約20cm前後である。住居跡内堆積土は5層に分層できたが、ℓ1とℓ2が住居跡全体を占めるものとみられる。ℓ1・2は炭化物の含有量が異なる程度の違いしかなく、灰黄褐色砂が一時期に堆積したものと考えられる。ℓ3は東周壁側から流れ込んでおり、ℓ1・2のような灰黄褐色砂の塊を斑状に含んでいる。ℓ4・5は床面上に部分的に薄く堆積する。

住居跡の大きさは南北幅約4.8m、東西幅約4.6mである。北周壁側が崩落していることもあるが、北東隅と南西隅を結んだ対角線が長い菱形のような形をしている。主軸方位はN28°Wである。周壁はLⅢを掘り込んだ部分は直立するが、LⅡを掘り込んだところでは崩落が進み、立ち上がりは緩やかである。床面は平坦であるが、部分的に貼床が認められた。住居跡の付属施設としてはカマドと小ピット4つを検出している。

小ピットは住居跡の南西隅の床面から検出したが、規則的な配置はみられなかった。大きさは、P1・P2が長軸約30cm、P2・P3が長軸約40cmの楕円形で、床面からの深さは約15~20cmほどである。堆積土はどのピット内にも褐灰色砂が認められた。そのうちP1と、P4の上端からは土師器の甕が出土している。P1から出土した甕は全体としては1/3ほどしかないが、口縁部から底部を縦に割ったような状態で横に倒れて出土した。しかしながら、住居跡の周囲からは同様のピットが多数検出されているため、住居跡の検出時には確認できなかったものを床面から検出してしまった可能性がある。P1を除いた他のピットに関しては、その可能性が高いと考えている。

カマドは北周壁の中央に設置されている。煙出しや煙道も残っており、煙出しの先端から東袖の先まで約230cmを測る。両袖は壁面から約110cmほど張り出し、床面からの高さは東袖が約30cm、西袖が約20cmである。しかし、西袖や焚口部分は大きく抉れているところがあり、燃焼物の遺存状態は

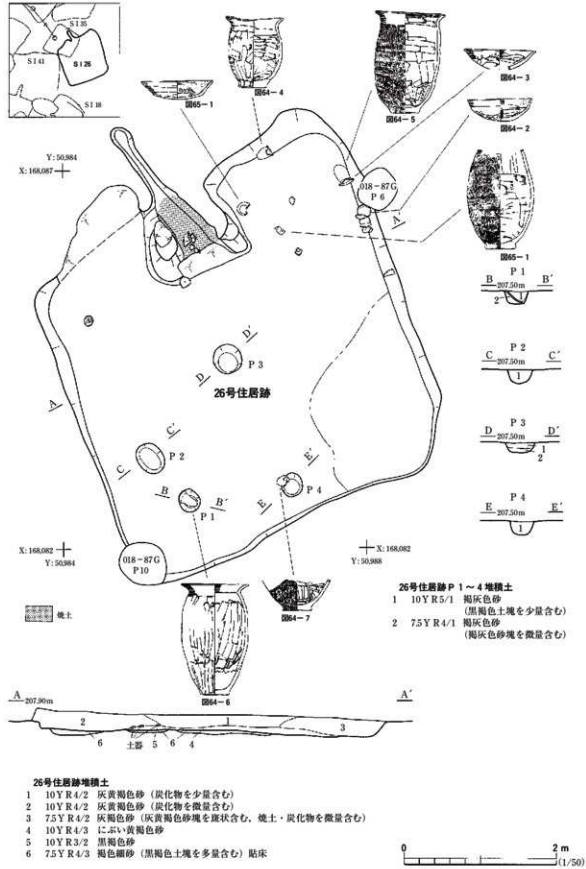


図62 26号住居跡

よくない。遺存する燃焼部底面はほぼ平坦で、あまり高低差はないが煙道は緩やかに上がり、煙出し部分の底面はやや窪んでいる。堆積土は6層に分層でき、 $\ell 3 \cdot 4$ が砂層であった。底面上の $\ell 2 \cdot 5 \cdot 7$ は粘土質であったため、カマド構築土の一部とも考えられる。

カマドの残りの良い部分に十字に断ち割りを入れて構築土を観察したところ、黄褐色砂で構築されており、カマド東袖の部分はLⅢを掘り残して使用されていたようである。また、燃焼部底面は $\ell 8$ の黒褐色砂で仕上げられていた。煙道部分は煙出しとの接合部分に燃焼部底面と同じ $\ell 8$ を用いて高低差をつけており、特に煙出し部分には粘土塊を含んだ灰黄褐色砂の $\ell 7$ で形を整えているようである。

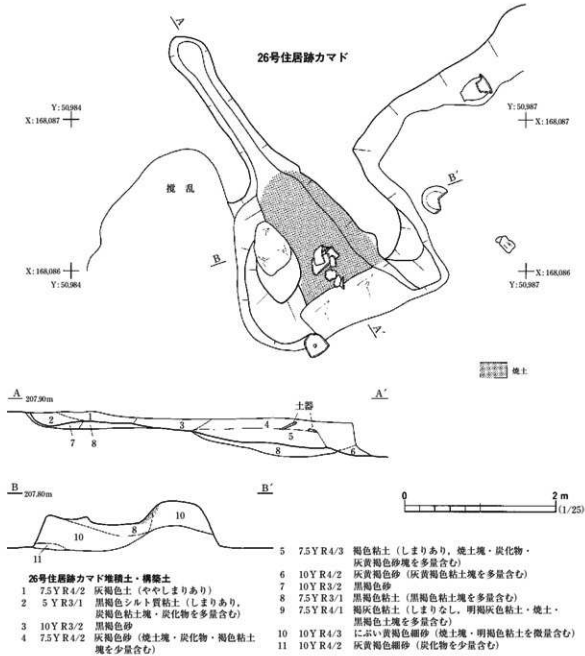


図63 26号住居跡カマド

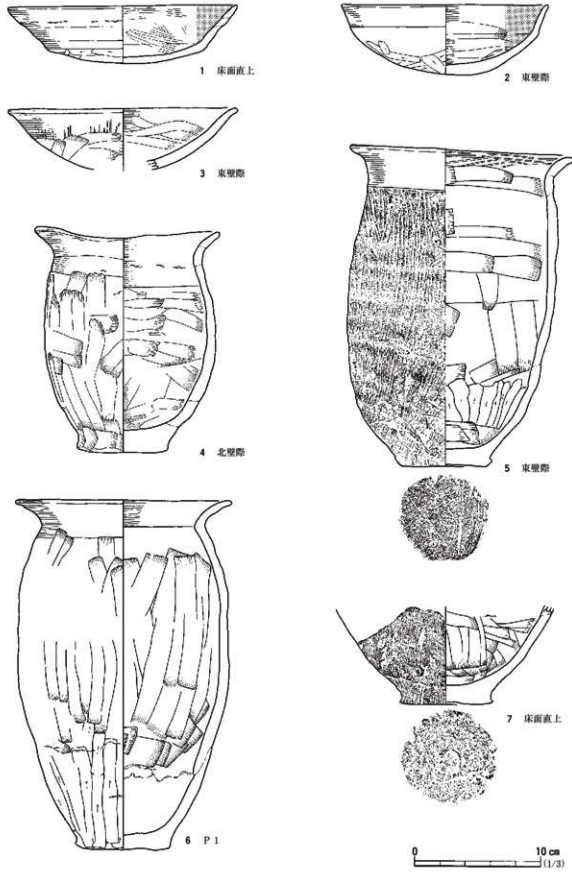


図64 26号住居跡出土遺物 (1)

遺物 (図64・65, 写真72・73)

本住居跡からは、土師器片327点などが出土した。そのうち図示したものは土師器8点で、どの遺物も本住居跡に伴うものと考えられる。それらの遺物は比較的残りが良く、床面あるいは床面から少し浮いた状態で出土しており、平面図上に出土状況を示した。遺物は、カマドの周辺あるいは北東隅の壁際に沿うように出土しており、特に壁際のもの遺存状態が良い。

図64-1～3は杯である。同図1・2は有段丸底で、同図1は口縁部が大きく開くが、同図2は短く外傾している。この時期のものは一般的に内面は同図1のようにヘラミガキ後に黒色処理されるが、同図2・3についてはヘラナデが認められるだけである。

図64-4～7、図65-1の5点は甕である。図64-4は小型であるが、他は長胴のものである。図64-5・7、図65-1は体部外面がハケメ調整で、底部は図64-5、図65-1には木葉痕が認められ、図64-7、図65-1は周縁に粘土が貼り付けられている。図64-4・6は体部外面がヘラナデされ、底部はヘラケズリで仕上げられている。同図6の甕は1号ピット内から出土したものである。

それらの甕は煮炊き用に使用されたと考えられる。図64-4の小型甕の内面には、口縁部から約7cmほどのところにリング状に煤が付着している。また、同図5の甕は赤く熱変した範囲が明瞭である。その範囲は全体の約1/2ほどで、底部から約18cmほどの所までが熱を受けて器面が荒れており、口縁部側を残して同じ方向から熱が加えられていたことがうかがえる。そのため、この甕はカマドの同じ位置に置かれて使用されていたものと推察され、口縁部側の部分は懸け口の外に出ているため熱変しなかったものと考えられる。

まとめ

本住居跡は一边約5mほどの略正方形の竪穴住居跡である。北周壁にカマドが付き、本集落内では検出例の少ない、煙道の先の煙出しまでも確認することができた。しかし、カマドの燃焼部は故意に壊されているようで、特に西袖の残りがよくない。図64-5の甕の熱変部分から推測するにカマド袖は燃焼部底面から約20cm以上の高さがなければならず、カマドの構築土は再利用されている可能性がある。本遺跡内のカマドの構築土には焼土塊が含まれている場合が多く、住居の廃絶後にカマドの構築土は再利用されたものと推察される。

出土遺物から、本住居跡は粟国式期ものとみられるため、7世紀頃の住居跡である。しかし、杯

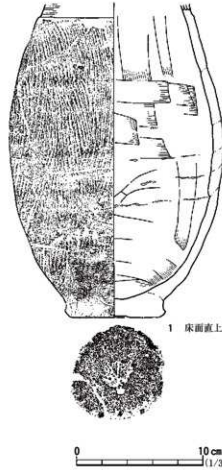


図65 26号住居跡出土遺物(2)

は黒色処理されず、甕の外面はヘラナデであるなど、出土遺物の中には一般に栗団式に認められる調整から外れるものがあり、それら別系統のものが半数を占めていて興味深い。(大波)

27号住居跡 S127

遺 構 (図66・67, 写真39・40)

本遺構は、O19-34・44・45・54・55グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、北ノ脇道跡の南端である。本住居跡からみた北側の方向に密集した住居跡の分布域が広がっている。

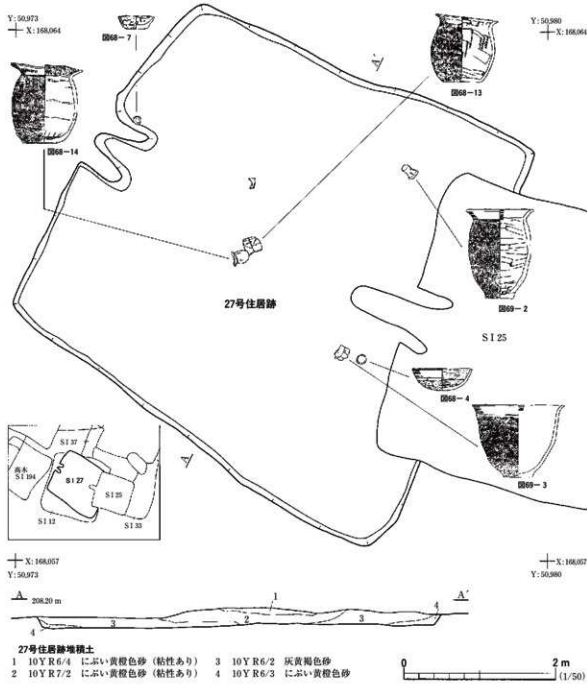


図66 27号住居跡

重複関係を整理しておくと、本住居跡は、25号住居跡に切られており、12・33・37号住居跡を切っている。この重複で、東周壁の中央が破壊されている。しかし、全体としては、比較的遺存状態は良好であった。

堆積土は、4層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み縮まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、15～20cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。ただ、向かい合う東周壁と西周壁では、長さが一致せず、台形気味となっている。規模は、東西5.6m、南北5.3mを測り、中型の部類に属する。床面積は、29.7㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に30°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、残っていない。燃焼部は、袖長70cm、焚口幅31cmの規模を有している。袖は、にぶい黄橙色砂主体に構築され、床面から10cmの高さが残っていた。右袖脇で、土師器粗製杯が出土している。

ビット類は、検出されていない。

遺物 (図68・69, 写真73・74・82・85)

本住居跡では、土師器片702点、須恵器片11点、土製品4点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は、22点ある。このうち、遺構に伴うのは7点で、半数に満たない。床面の遺物は、カマド周辺に分布が偏らず、むしろ離れた位置に散在する傾向が窺えた。

図68-1～8は、土師器杯である。1～4は、退化した有段丸底杯に分類される。全体に丸みのある器形であり、1を除くと、口縁部下端の段は痕跡的になっている。なお、4は、内面の黒色処理が、ほとんど再微化してしまっている。6は、無段丸底杯に分類される破片である。外面のケズリ調整は、粗く面取りされただけのもので、後述の杯とよく似ている。5・7・8は、内面をミガキ・黒色処理せず、ナデ調整だけで仕上げた杯である。また、外面の調整も粗雑であり、5・7は、ケズリの単位がはっきり分かる。なお、8は、底部に静止糸切り痕が観察される。

図68-12・図69-1・3は、口縁部の大きな土師器甕である。器形は広口で、胴部が膨らまずに、そのまま下に窄まっていく。細部を観察すると、外面は器壁が荒れており、内面は口縁部下に煤が

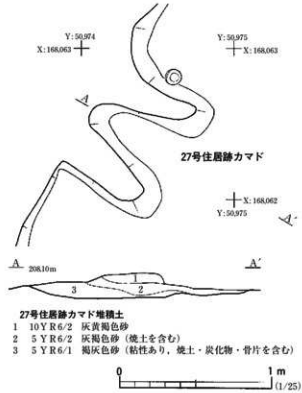


図67 27号住居跡カマド

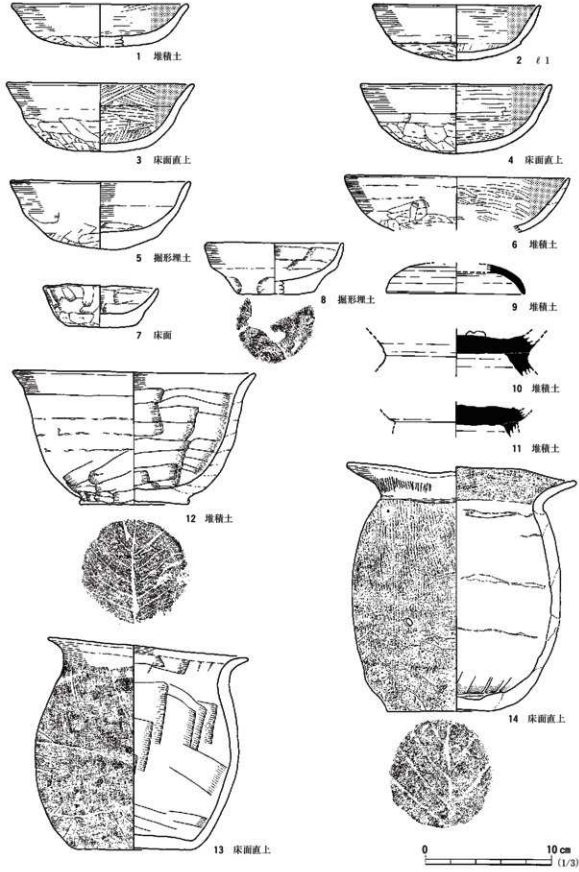


图68 27号住居跡出土遺物(1)

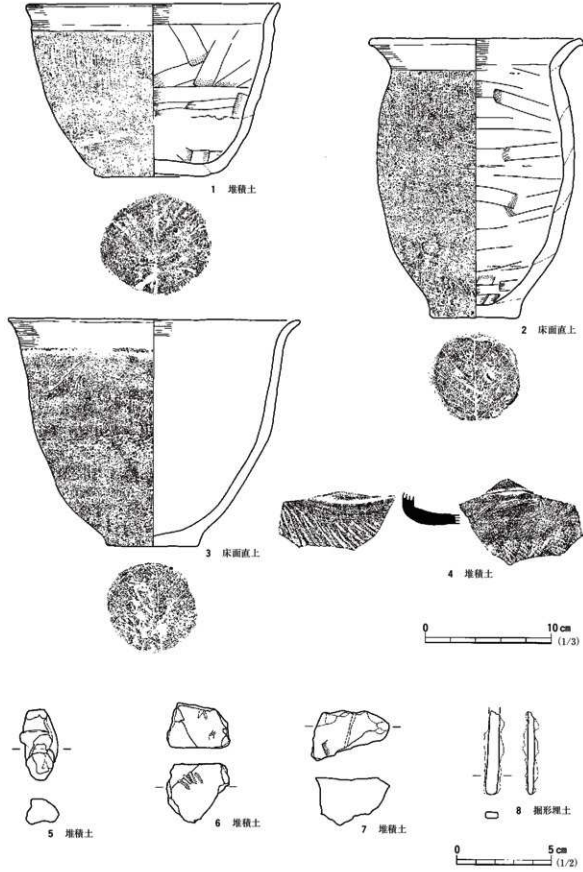


図69 27号住居跡出土遺物 (2)

付着している。この煮炊痕跡は、小型のものほど顕著な傾向が指摘される。

図68-13・14、図69-2は、胴部に膨らみを持つ土師器甕である。これに対応して、頸部は窄まっている。このうち、図68-14は、口縁部が上から押し潰されたように屈曲した特徴的な器形を呈している。類似した甕は、高木・北ノ脇遺跡で少なからず出土しており、年代的にまとまりのある系譜で捉えられるかも知れない。

図68-9は、須恵器杯蓋の破片である。胎土に、微細な白色粒子が観察される。天井部に、回転ヘラケズリ調整が加えられている。

図68-10・11は、大型の須恵器有台器種の破片である。高台は、「ハ」の字状に開くようで、体部も、横幅が広くなるとみられる。したがって、瓶類になるとは考えられず、鉢や盤を上に乗せる器種ではないかと推定している。

図69-4は、須恵器甕の頸部片である。外面に平行タクキメが観察される。

図69-5・7・8は、用途不明の土製品である。5は、指で簡単に成形している。7・8は、面取りされた部分が観察される。

図69-6は、鉄製刀子であろうか。欠損している。

まとめ

本遺構は、北ノ脇遺跡の南端で検出された堅穴住居跡である。遺存状態は、比較的良好であった。平面プランは、正方形基調を呈しており、中型の規模を有している。カマドは、西周壁中央に設置されていた。

本住居跡が営まれたのは、床面の遺物から、国分寺下層式期と考えている。 (菅原)

28号住居跡 S I 28

遺構 (図70, 写真41)

本遺構は調査区北部のO18-67・77グリッドにかけて検出した堅穴住居跡で、住居跡の大部分が3号住居跡と重複している。他にも複数の住居跡と重複する可能性があるが、新旧関係を判断できた住居跡どうしの関係は34号住居跡→28号住居跡→3号住居跡の順に造られている。それら3軒はほぼ同位置に建て替えられていたようである。3軒の住居跡は自然堤防の頂部から後背湿地へと傾き始める緩斜面上に立地しており、住居跡の東側からは小ピット以外の遺構は検出できなかった。

本住居跡はLⅡ中から検出できたが、東側の一部を残して3号住居跡に掘り込まれており、遺存状態は極めて悪い。3号住居跡の北周壁の延長上から北周壁の一部と北東隅部分が確認できたが、東周壁側には攪乱が入り込んでいた。そのため検出できた部分は、遺存する北周壁約2mと、それを底辺とした二等辺三角形のような形をした約4.5㎡ほどの範囲だけである。3号住居跡はLⅢを深く掘り込んでいたが、本住居跡は検出面から床面までの深さが約10cmと浅く、住居跡内堆積土は黒褐色砂の単層であった。遺存する北周壁の立ち上がりは緩やかで、床面はLⅡを掘り込んだだけで造られているため、ほぼ平坦であるがしまりは感じられなかった。遺存する北周壁部分から、住居

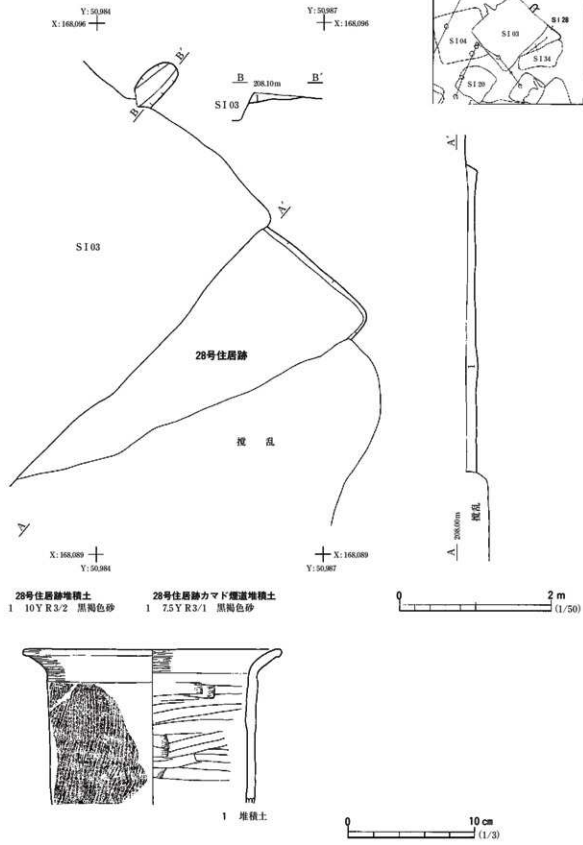


図70 28号住居跡・出土遺物

の主軸方位はN40°Eと推定される。

また、3号住居跡の北周壁からは煙道が確認できた。はじめ3号住居跡のカマドの造り替えの可能性を考えたが、3号住居跡と本住居跡の床面ではレベル的に本住居跡のほうが一致するため、本住居跡のカマドと判断した。煙道は長さ約80cm、幅約40cmの一部分しか確認できなかったが、周壁から直交して住居の外へと延びていたものとみられる。煙道内には黒褐色砂が堆積していた。

遺物 (図70)

本住居跡からの出土遺物は少なく、土師器片28点ほどである。そのうち図示したものは図70-1の土師器の裏1点である。体部外面にはハケメ調整が認められる。

まとめ

本住居跡から検出された煙道は北東隅から約4mのところを設置されている。そのため、カマドが周壁の中央に付設されていたものとすれば、一辺約8mほどの3号住居跡と同規模の大型の住居跡であった可能性も考えられる。大きさは南周壁側が確認できなかったため推測にすぎないが、3号住居跡は主軸の傾きや北周壁が一致しており、本住居跡を意識して造られたものとみられる。

出土遺物が少ないが、出土した遺物はおよそ栗園式期のものとみられ、本住居跡はそのころに営まれた住居跡と考えられる。

(大波)

29号住居跡 S I 29

遺構 (図71, 写真42)

本遺構は、O19-56・57・66グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。本住居跡の東半分は、調査区外に広がっており、今回は部分的な調査にとどまった。

重複関係を整理しておくと、本住居跡は、36号住居跡を切っている。

堆積土は、3層に分層された。このうち、②・③は、カマド内堆積土であり、焼土を多量に含んでいる。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み縮まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、28cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西3.5m、南北5.5m以上を測り、中型の部類に属する。床面積は、13.8㎡以上である。住居跡方向は発掘基準線北に対して、東に43°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、残っていない。燃燒部は、袖長110cm、焚口幅45cmの規模を有している。袖は、にぶい黄褐色砂主体に構築され、床面から26cmの高さが残っていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図72, 写真74・82)

本住居跡では、土師器片208点、須恵器片4点、土製品1点が出土した。図示遺物は、6点ある。

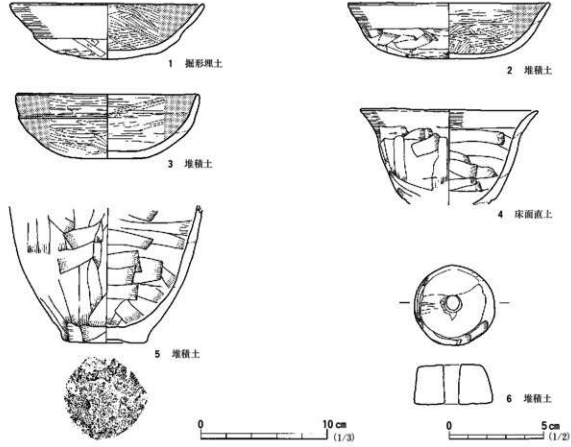


図72 29号住居跡出土遺物

本住居跡が営まれたのは、床面の遺物と下層住居跡の所見から、栗園式期～国分寺下層式期の中で捉えられる。

(菅原)

30号住居跡 S130

遺構 (図73・74, 写真44・45)

本遺構は、O19-6・7・16・17・26・27グリッドにかけて検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。重複関係を整理しておくとして、16号住居跡に切られ、32・39号住居跡を切っている。南東隅が壊されているが、平面プランは、ほぼ全体が捉えられている。

埴積土は、1層で、にぶい黄橙色砂が床面を覆っていた。この土層が、自然埴積土であるか、人為埴積土であるかについては、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりが顕著に認められた。床面と検出面の比高差は、12～15cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西5.6m、南北6.3mを測り、北ノ脇遺跡では、中型の部類に属する。床面積は、35.3㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に10°振れている。

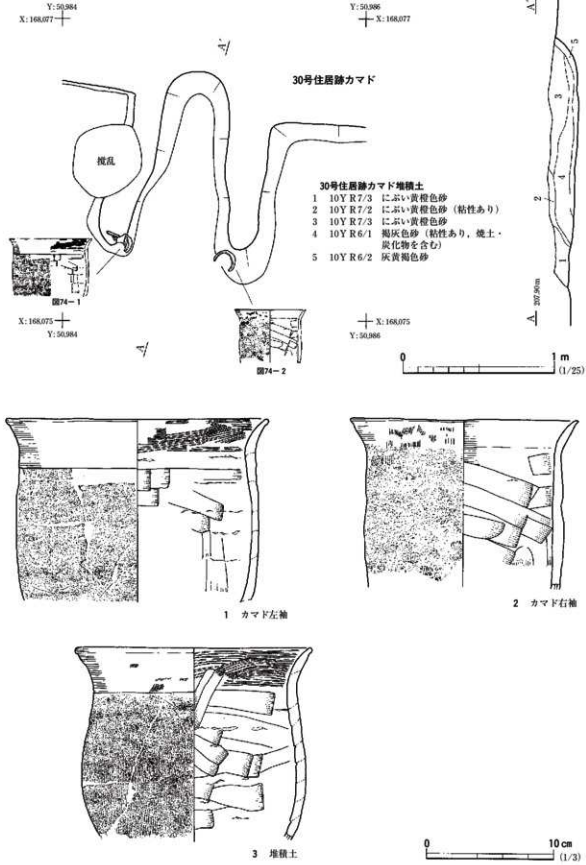


図74 30号住居跡カマド・出土遺物

第2編 北ノ脇遺跡

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は、ほとんど残っていない。燃焼部は、袖長110cm、焚口幅46cmの規模を有している。袖は、にぶい黄褐色砂主体に構築され、床面から14cmの高さが残っていた。構築土には、部分的に焼土が含まれている。また、両袖は、伏せた土師器甕を先端に埋め込んで、補強が行われていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図74)

本住居跡では、土師器片370点が出土した。図示遺物には、土師器甕3点がある。このうち、図74-1・2の2点が、カマド袖に転用されていたものである。

図74-1は、胴部の膨らみが弱く、2は、寸胴である。3は、卵形の胴部を有している。以上の3点は、外面がハケメ調整で共通する。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、長方形基調を呈しており、中型の規模を有している。

カマドは、北周壁中央に設置されていた。

本住居跡が営まれたのは、相伴遺物と重複遺構の所見から、栗園式期～国分寺下層式の幅の中で捉えられると思われる。(菅原)

31号住居跡 S 131

遺構 (図75, 写真46)

本遺構は調査区北部のO18-73・74・83・84グリッドから検出された竪穴住居跡である。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれの関係は31号住居跡→1号住居跡→7号住居跡の順に造られている。他に23号住居跡とも重複しているが、その部分は7号住居跡で破壊されており、遺構の調査からは新田関係を判断できなかった。

本住居跡はLⅢ上面から検出できたが、ほとんどが1号住居跡と重複するため、検出できた部分は北周壁際と東周壁の一部である。検出できた周壁からは、住居跡の主軸方位がN31°Eと、1号住居跡と傾きもほぼ一致している。本住居跡の遺存状態は悪く、住居跡内堆積土は床面上に部分的に堆積した灰黄褐色砂しか確認できなかった。住居跡の大きさは、北周壁で約5.0m、東周壁の遺存する部分で約2.0mを測る。床面はほとんど残らないが、確認できた範囲では平坦に造られている。カマドなどの付属施設は確認できなかった。

遺物 (図75, 写真74)

本住居跡からは土師器片40点が出土している。そのうち図示したものは土師器2点で、この2点は1号住居跡の調査中から確認できていたもので、北周壁の両隣のほぼ床面から出土したものである。

図75-1は器形から杯としたが、内面はヘラナデのみで、黒色処理が行われていない。同図2は

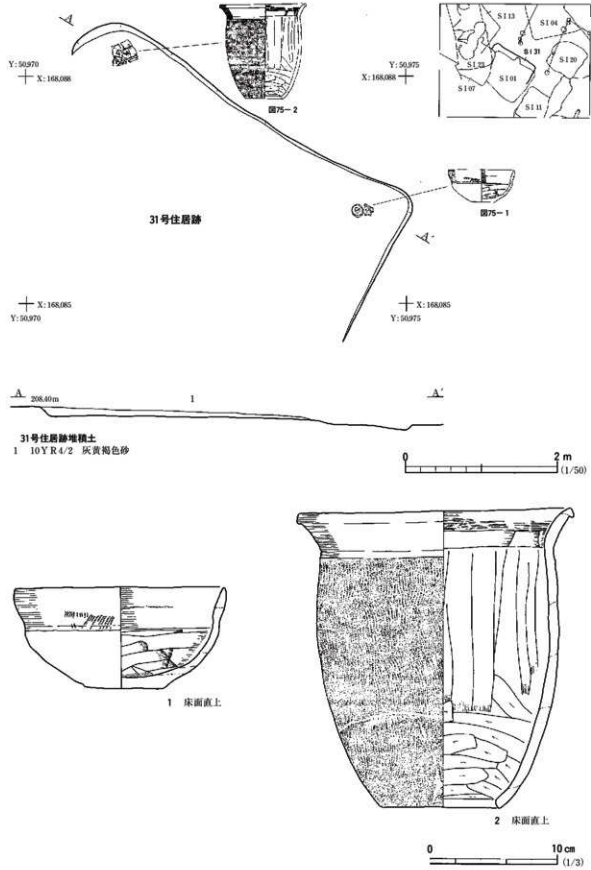


図75 31号住居跡・出土遺物

無底式の甗である。器形は甗に近似したものが認められるが、内面は縦方向にヘラナデが施され、下部を横方向のケズリで仕上げられている。

まとめ

本住居跡の遺存状態は悪く詳細は不明であるが、北周壁が約5mを測ることから本集落内では標準的な大きさの住居跡とみられる。また、ほぼ同位置に造られた1号住居跡は、住居跡の傾きも一致し、北周壁は同じく約5mであることから、本住居跡を意識して建て替えられたものと推測する。

出土遺物や重複する住居跡との関係から、本住居跡は栗圃式期のものと考えられる (大 波)

32号住居跡 S 132

遺 構 (図76・77, 写真48・49)

本遺構は、O19-6・15-17・26・27グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。重複関係を整理しておくとし、16・30住居跡に切れ、39号住居跡を切っている。上部削平が著しいが、平面プランは、全体が捉えられている。

堆積土は、1層で、ぶい黄褐色砂が床面を覆っていた。この土層が、自然堆積土であるか、人為堆積土であるかは、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりが顕著に認められた。床面と検出面の比高差は、最大で2～6cmを測る。

本住居跡の平面プランは、長方形を呈している。長軸方向は、南北にある。規模は、東西4.0m、南北4.8mを測り、中型の部類に属する。床面積は、19.2㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に對して、東に34°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から151cmの長さを測り、底面レベルは、先端に向かってわずかに上がっている。燃焼部は、袖長87cm、焚口幅38cmの規模を有している。袖は、ぶい黄褐色砂主体に構築され、床面から25cmの高さが残っていた。構築土には、部分的に焼土が含まれている。袖内壁面の焼土化は、断面図で示したような状況であった。

左袖脇から、土師器杯と小甕が出土した。杯は、伏せられており、甕は正立していた。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図76, 写真75)

本住居跡では、土師器片180点、須恵器片4点が出土した。図示遺物は、3点ある。どれも遺構に伴っている。

図76-1・2は、土師器杯である。1は、有段丸底杯に分類されるもので、口縁部が直線的に外傾している。2も、この類型に含まれるものであるが、底部は平底風をなしており、段は痕跡程度になっている。以上の2点は、再酸化しており、内面の黒色処理がほとんど消えかかっている。

3は、土師器小甕である。口縁部が上から押し潰されたように強く屈曲した、特徴的な器形を呈している。また、外面のハケメ調整痕も、小口柎目の条線間隔が広く、他と異なっている。高木重

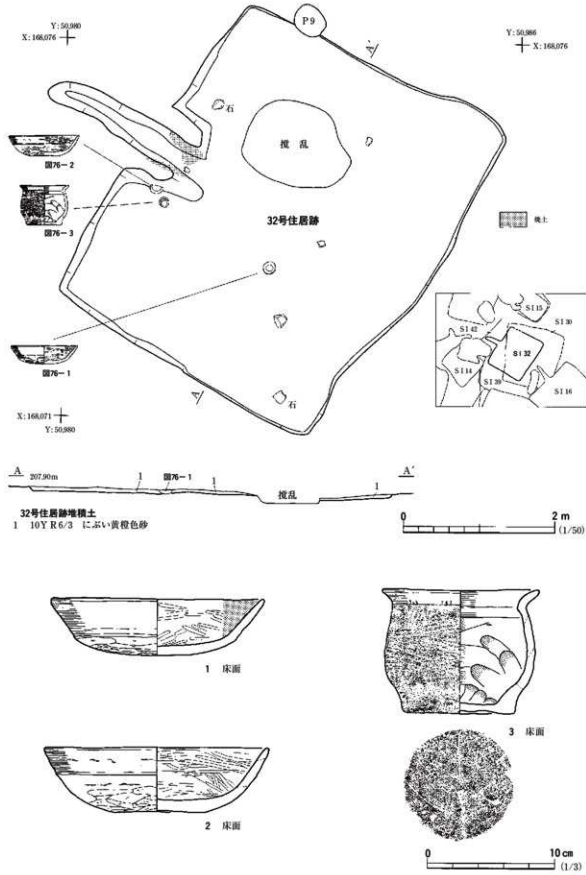


図76 32号住居跡・出土遺物

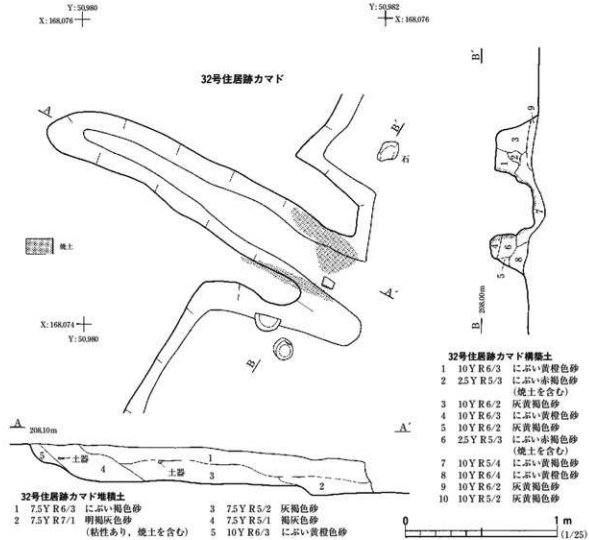


図77 32号住居跡カマド

跡9区の98号住居跡に類例がみられる。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、長方形基調を呈しており、中型の規模を有している。カマドは、西周壁中央に設置されていた。

本住居跡が営まれたのは、共存遺物と重複遺構の関係から、栗田式期～国分寺下層式の幅の中で捉えられると思われる。(菅原)

33号住居跡 S 133

遺構 (図78、写真47)

本遺構は、O19-35・45-47・56・57グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡南端の自然堤防の東斜面である。重複関係を整理しておくと、12・17・25・27号住居跡に切られ、37号住居跡を切っている。

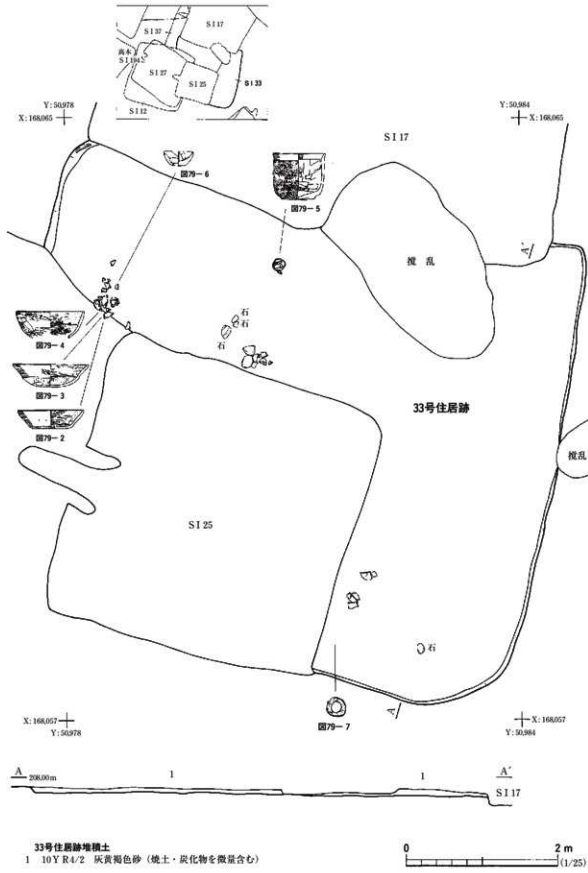


图78 33号住居跡

本住居跡は、重複遺構の破壊で、遺存状態には恵まれなかった。検出されたのは、床面積の2分の1程度である。

堆積土は、1層で、灰黄褐色砂が床面を覆っていた。この土層には、微量の焼土・炭化物が含まれている。自然堆積土であるか、人為堆積土であるかについては、不明である。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出範囲では、とくに顕著な踏み縮まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、7～9 cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西7.1m、南北6.3mを測り、大型のクラスに属する。床面積は、44.7㎡である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に14°振れている。カマドは、検出されていない。遺物の集中からみると、西周壁に設置されていた可能性が高いと思われるが、27号住居跡の破壊で、確かめることはできなかった。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図79、写真75・81・83)

本住居跡では、土師器片372点、須恵器片1点、石製品1点が出土した。図示遺物は7点ある。このうち、図79-1を除く6点が、遺構に共伴している。床面の土師器杯4点は、1か所にまとまっ

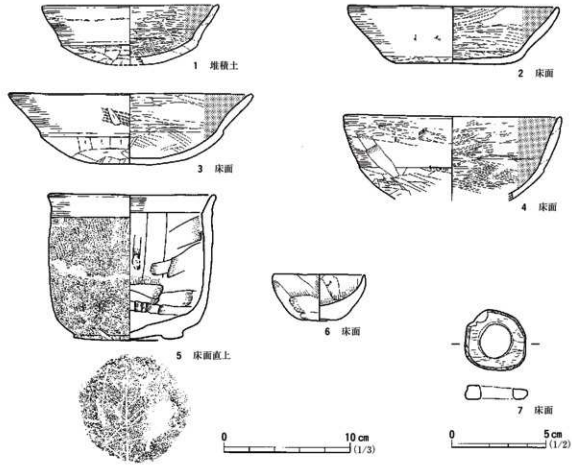


図79 33号住居跡出土遺物

ていた(図79-2~4・6)。

図79-1~4は、土師器杯である。1~3は、有段丸底杯に分類される。1は、小型品で、身が深い。口縁部が急角度で立ち上がる。2は、底部が平底風で、口縁部の外側が肥厚している。3は、大型品である。口縁部下端の段が、稜をなし、鋭い。4は、身の深い椀状をなすもので、口縁部下端に痕跡的な段が認められる。

5は、土師器小甕である。口縁部が短く屈曲するだけで、あとは頸部から下が、ほとんど膨らみを持たないで、そのまま底部にいたる。外面は、被熱しており、器壁がボロボロに荒れている。

6は、ミニチュアの土師器杯である。

7は、有孔の石製品である。大型の平玉とみるべきだろうか。高本遺跡9区の1号溝跡で、小型品の類別が出土している。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態に恵まれておらず、床面積の半分は失われていた。カマドも検出されていない。平面プランは、方形をなしており、大きな規模を有している。

本住居跡が営まれた時期は、共存遺物から、栗園式期に求められる。

(菅原)

34号住居跡 S I 34

遺構(図80, 写真43)

本遺構は調査区北部のO18-67・76・77グリッドにかけて検出した竪穴住居跡で、複数の住居跡と重複している。重複する住居は34号住居跡→28号住居跡→3号住居跡の順に造られており、3軒はほぼ同位置に建て替えられている。後背湿地へと傾く緩斜面上に立地するが、本住居跡付近から東側は小ピットが多数検出されている。

本住居跡は28号住居跡の床面から検出できたが、西側の大部分は3号住居跡に掘り込まれていて確認できなかった。検出できた部分は東周壁約3.5mと、そこから西へ約1mほどの範囲で、北東隅は小ピットに掘り込まれている。住居跡内堆積土は灰黄褐色砂であるが、北周壁の壁際にはにぶい黄褐色砂塊を多量に含んだ砂層が三角堆積していることから、自然堆積と考えられる。検出面から床面までの深さは約20cm前後で、周壁はほぼ直立する。本住居跡は緩斜面上に厚く堆積したL IIを掘り込んで造られるため、床面にしまりがなく、現状では凹凸がみられる。住居跡の主軸方位は、遺存する東周壁部分からN40°Eと推定される。

本住居跡は遺存する範囲が狭いため、他の付属施設は認められなかった。

遺物(図80, 写真75)

本住居跡からの出土遺物は少なく、土師器片25点ほどである。そのうち図示したものは土師器の甕2点であるが、どちらも堆積土中から出土したものである。

図80-1は小型の甕で、口縁部が直立し、頸部に括れない半球形のものである。体部外面に部

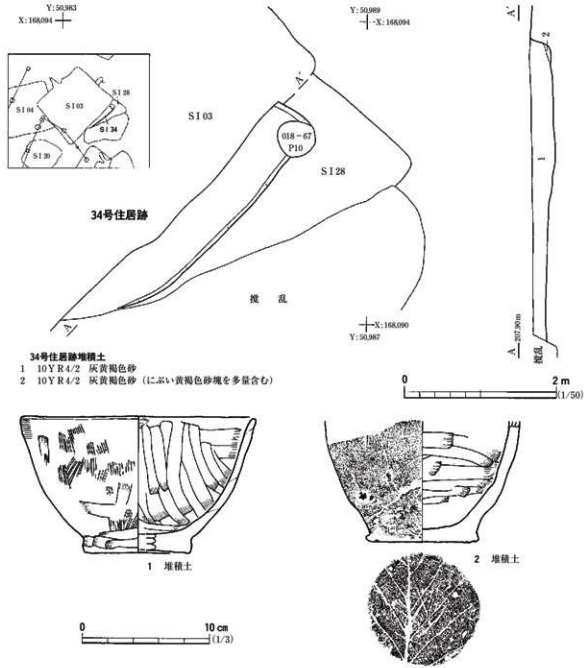


図80 34号住居跡・出土遺物

分的にハケメが認められる。同図2は壘の下半部で、体部外面がハケメ調整で、底部に木葉痕が認められる。

まとめ

本住居跡は遺存状態が悪く、詳細はよくわからなかった。また、出土遺物も少なく時期は特定できないが、重複する3号住居跡との関係から栗圃式期に下限が求められる。

本住居跡は、東周壁側の一部分しか確認できなかったが、重複する3・28号住居跡の主軸の傾きはほぼ一致しており、興味深い。(大波)

35号住居跡 S I 35

遺 構 (図81, 写真50)

本遺構は調査区北部のO18-76・77・86・87グリッドにかけて検出した、一辺約3mの小型の堅穴住居跡である。本住居跡の立地する地形は、自然堤防の頂部から東側の後背湿地へと傾き始める緩斜面である。そのため、本住居跡の周囲は自然堤防頂部の平坦なところほど住居は密集していない。

本住居跡は、住居跡の東側に重複する26号住居跡よりも先に築かれているが、本集落内の住居跡と比べて掘り込みが深いため床面が遺存しており、住居跡の範囲を確定することができた。また、3号柱列跡を構成する4号ピットとも重複しており、柱列跡のほうが新しい。

本住居跡はLⅡ中から検出でき、検出面から床面までの深さは約70cmを測る。住居跡内堆積土は

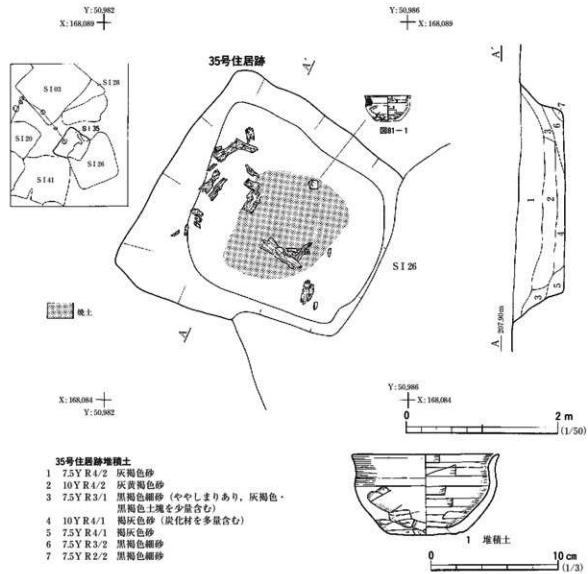


図81 35号住居跡・出土遺物

レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。堆積過程は大きく2段階に分けることができ、はじめにℓ5・6の褐灰色砂を基調としたℓ5～8が堆積し、その後でℓ1・2の灰褐色砂を基調としたℓ1～3が堆積したようである。ℓ3・7・8はLⅢと近似する黒褐色細砂であるため、それぞれの段階の周壁の崩落土と考えられる。全体的にみると均質な砂層が厚く堆積しており、1段階と2段階のあいだにやや時間差が感じられるが、洪水砂のようなもので短時間に埋没したものと推察される。

住居跡の主軸方位はN25°Eと東へやや傾く。大きさは西周壁の上端が約3.2mを測るが、下端では一辺約2.5mのほぼ正方形である。

周壁は床面から約30cmほどは直立して立ち上がるが、そこから上部は緩やかに外側へと傾斜している。床面はほぼ平坦であったが、LⅣの砂層まで掘り込まれていたために調査中は水はけが悪く、しまりはまったく感じられなかった。床面の中央には炭化物が広がっており、その周囲には西周壁を中心に炭化材が散在していた。

同一の平面図上に同様に表現してしまっただが、ちょうど床面の炭化物の広がるトーンの上に描かれた遺物や炭化材はℓ2から出土したもので、後から流れ込んだものと考えられる。樹種同定の結果からも床面から出土したものは異なった結果が出ている。

西周壁側から検出された炭化材はモミ属と同定され、本住居跡に使用された木材と考えられる。

遺物 (図81, 写真75)

本住居跡からの出土遺物は少なく、土師器片39点、須恵器片2点である。そのうち図示したものは土師器1点であるが、後から流れ込んだもので本住居跡に伴うものではないと考えている。

図81-1は小型の甕で、口縁部が僅かに外傾し、体部は内外面ともヘラナデが認められる。底部は粗くケズリが施されていた。

まとめ

本住居跡は一辺約3mほどの小型で、他の住居跡と比べて掘り込みが深いことが特徴である。同規模の住居跡としては8号住居跡や15号住居跡が挙げられるが、同じくカマドが付いておらず、居住用に使用されていたとは考え難い。

また、本住居跡からは炭化材が検出されたことから焼失家屋の可能性が考えられるが、炭化材以外は積極的に判断できる材料はなかった。

本住居跡の時期は出土遺物が少ないため特定できないが、周辺に広がる住居跡の年代と大きく隔たらないものと推測され、栗園式期の年代幅に収まるものとみている。 (大 波)

36号住居跡 S 136

遺構 (図82, 写真51)

本遺構は、O19-57・66・67グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の東斜面である。本住居跡は、東半分が調査区外に広がっており、今回は、部分的な調査にとどまっ

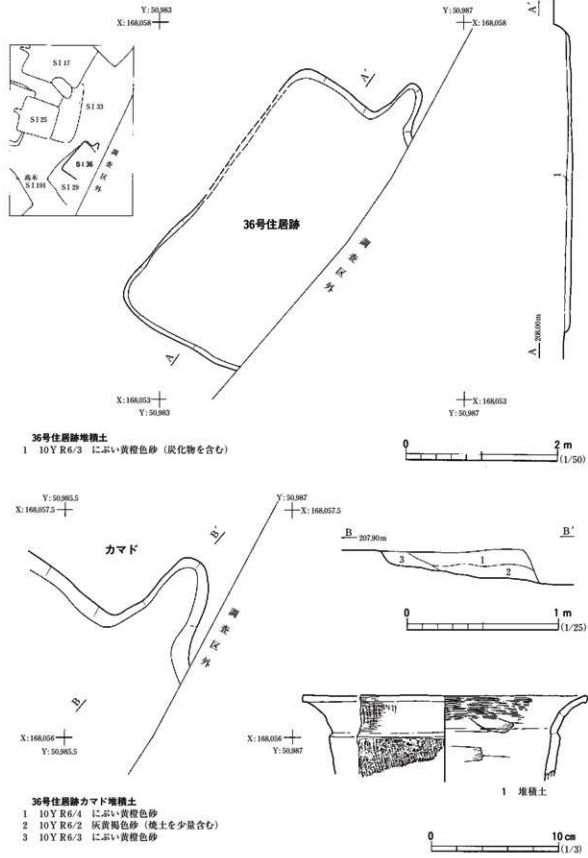


図82 36号住居跡・出土遺物

た。重複関係は、29号住居跡に切られている。

堆積土は、1層で、黄橙色砂が床面を覆っていた。この土層には、炭化物が含まれており、比較的大きめの炭化材の混入も、少なからず認められた。しかし、床面に密着したものは無く、焼土もほとんど形成されていなかったため、検出範囲の中では本住居跡が火災住居跡であるという確証は得られなかった。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み跡は認められなかった。床面と検出面の比高差は、残りの良い北周壁で22cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西1.9m以上、南北4.1mを測り、小型の部類に属する。床面積は、7.8㎡以上である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に38°振られている。

カマドは、北周壁で検出された。袖は残っておらず、住居廃絶時に壊されたと考えられる。煙道部は、周壁から63cm残っていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図82)

本住居跡では、土師器片9点が出土した。図示遺物には、土師器壺1点がある。これは、堆積土から出土したもので、遺構には共存していない。

図82-1は、外面の頸部下端に段を形成しており、口縁部は外反して、端が玉縁状をなす。胴部外面は、ハケメ調整されている。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。調査区外に東半分が広がっており、今回は部分的な調査にとどまった。床面直上層の様子から、火災住居跡の可能性もあるが、確証は得られていない。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構の関係から、栗園式期～国分寺下層式期の幅の中で捉えることが可能と思われる。

(菅原)

37号住居跡 S137

遺構 (図83, 写真52)

本遺構は、O19・25・26・35・45グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡南端の自然堤防の東斜面である。重複関係を整理しておくとし、17・24・25・27・33号住居跡に切られている。この重複で、床面積の約3分の2が破壊されてしまっている。

堆積土は、1層で、黄橙色砂が床面を覆っていた。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み跡は認められなかった。床面と検出面の比高差は、3～7cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。しかし、破壊が著しく、詳細な検討は行われてい

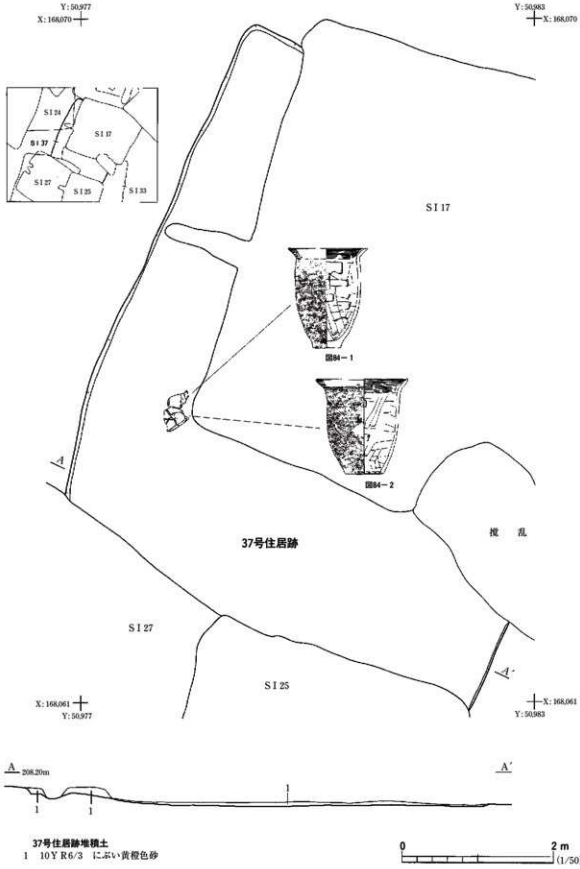


図83 37号住居跡

ない。規模は、東西6.3m、南北7.3m以上を測り、大型の部類に属する。床面積は、46㎡以上である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に25°振れている。

カマドは、検出されなかった。西周壁を除く場所が候補になるが、具体的には、分からない。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図84, 写真75)

本住居跡では、土師器片150点が出土した。図示遺物には、土師器煮炊具2点がある。互いにもたれかかった状態で、床面から出土した。

図84-1は、大型の土師器長胴甕である。口径が、器形全体のなかで最も大きく、胴部径は、頸部径を下回っている。つまり、上から下に窄まっていく器形を呈している。口頸部は、「く」の字状に屈曲する。外面は、ハケメ調整である。

図84-2は、大型の土師器甕である。無底式であり、外面はハケメ調整されている。胴部にあまり影らみは無く、口頸部は、「く」の字状に屈曲する。

まとめ

本遺構は、北ノ脇遺跡南端で、自然堤防の東斜面に営まれた堅穴住居跡である。重複遺構の破壊が著しく、床面積の3分の1しか残っていない。カマドも検出されていない。

平面プランは、方形を呈しており、大きな規模を有している。

本住居跡が営まれたのは、床面の遺物から、栗囲式期に求められる。

(菅原)

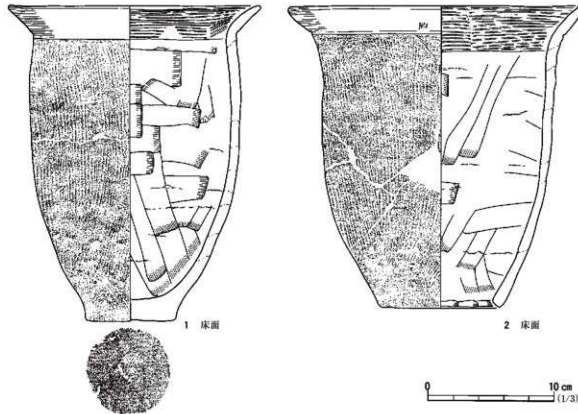
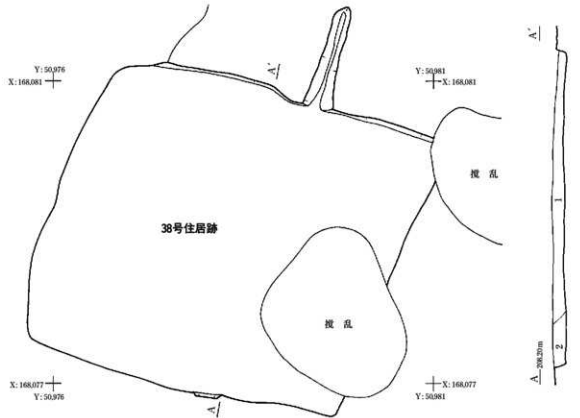
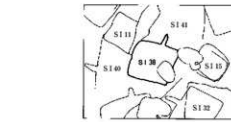
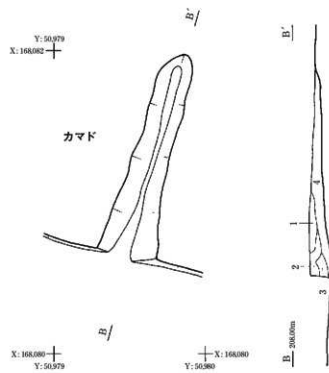


図84 37号住居跡出土遺物



- 38号住居跡堆積土**
- 1 10Y R 6/3 に深い黄褐色砂 (焼土粒・炭化物粒を微量含む)
 - 2 10Y R 5/4 に深い黄褐色砂 (炭化物粒をごく微量含む)



- 38号住居跡カマド堆積土**
- 1 10Y R 5/3 に深い黄褐色砂 (炭化物を含む)
 - 2 10Y R 6/4 に深い黄褐色砂 (焼土粒・炭化物を微量含む)
 - 3 10Y R 5/4 に深い黄褐色砂 (焼土塊を含む、炭化物粒を微量含む)
 - 4 10Y R 6/3 に深い黄褐色砂



図85 38号住居跡

38号住居跡 S I 38

遺 構 (図85, 写真53)

本遺構は、O18-95・96、O19-4～6グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の尾根中央付近である。他の遺構とは、直接の重複関係を持たない。ただ、周囲には数多くの住居跡が密集している。

本住居跡は、プランの確定が難しかった。このため、ベルトを残した南北ラインを除くと、検出作業を繰り返すうちに、周壁がほとんど無くなってしまった。

床面と周囲の土層は、堅さが違い、床面の方には微細な炭化物や粘土粒の分布がみられたので、これを基準に両者を区別している。

堆積土は、2層に分層された。断面の様子から、それらは自然流入したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。ただ、カマド付近では、浅い掘形が認められ、図示資料3点を含む定量の遺物が出土している。また、カマド前面中心に、踏み締まりが認められた。床面と検出面の比高差は、15cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。しかし、破壊が著しく、詳細な検討は行っていない。規模は、東西4.5m、南北4.2mを測り、中型の部類に属する。床面積は、18.9m²である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に15°振れている。

カマドは、北周壁中央で検出された。袖は残っておらず、住居廃絶時に壊されたと考えられる。煙道部は、周壁から長さ139cmを測る。

ビッド類は、検出されていない。

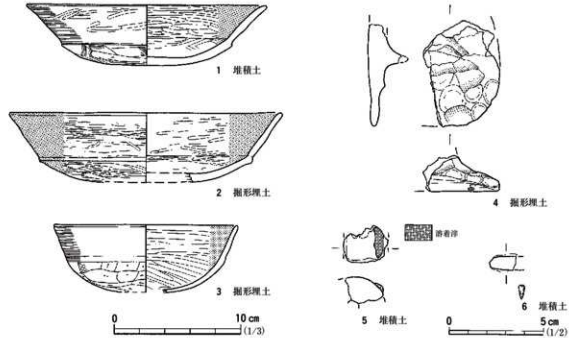


図86 38号住居跡出土遺物

遺物 (図86, 写真75・82)

本住居跡では、土師器片636点、土製品2点、鉄製品1点が出土した。床面の遺物は無いが、掘形出土の3点は、構築年代の上限を知る手がかりとなる。

図86-1～3は、有段丸底の土師器杯である。1は、口縁部が大きく外傾するもので、口縁部外面に軽いミガキが加えられている。2は、これに黒色処理が施されたもので、やや大型である。3は、碗状の器形をなすもので、小型品に分類される。

図86-4は、土製模造鏡である。指で簡単に成形しただけのもので、指頭痕が観察される。鈕は、先端が欠けている。

図86-5は、羽口の小破片である。溶着滓が付着している。

図86-6は、鉄製刀子の破片とみられる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の尾根中央付近に営まれた堅穴住居跡である。平面プランは、正方形基調を呈し、中型の規模を有している。

カマドは、北周壁中央に付設されていた。袖は、残っておらず、住居廃絶時に壊されたと考えている。

本住居跡が営まれたのは、掘形の遺物から、栗園式期に上限が求められる。(菅原)

39号住居跡 S I 39

遺構 (図87, 写真54)

本遺構は、O19-15・16・25-27グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、北ノ脇遺跡の南端で、自然堤防の東斜面にあたる。重複関係を整理しておくこと、16・17・32号住居跡の3軒に切られている。

本住居跡は、周辺遺構の調査が一段落し、検出面全体を30cmほど下げた駄目押しの際に、検出された。このため、破壊を免れた一部の床面が検出されたにすぎない。したがって、実際の平面プランは、図示した状態より整っていたはずで、規模が大きかったと推定される。北周壁の位置は、もつと外側で、南西隅は、より大きく外側に回り込んでいたと考えられる。

堆積土は、駄目押し時に設定したベルトで、3層に分層された。断面の様子から、それらは自然流入したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。微細な炭化物や粘土粒が散らばっており、周囲の基本土層とは明確に区別された。ただ、踏み締まりは認められず、むしろ、検出面より柔らかく感じられたほどであった。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。しかし、破壊が著しく、詳細な検討を行うことができなかった。規模は、東西7.5m以上、南北4.3m以上を測り、大型の部類に属する。床面積は、32.3㎡以上である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に26°振れている。

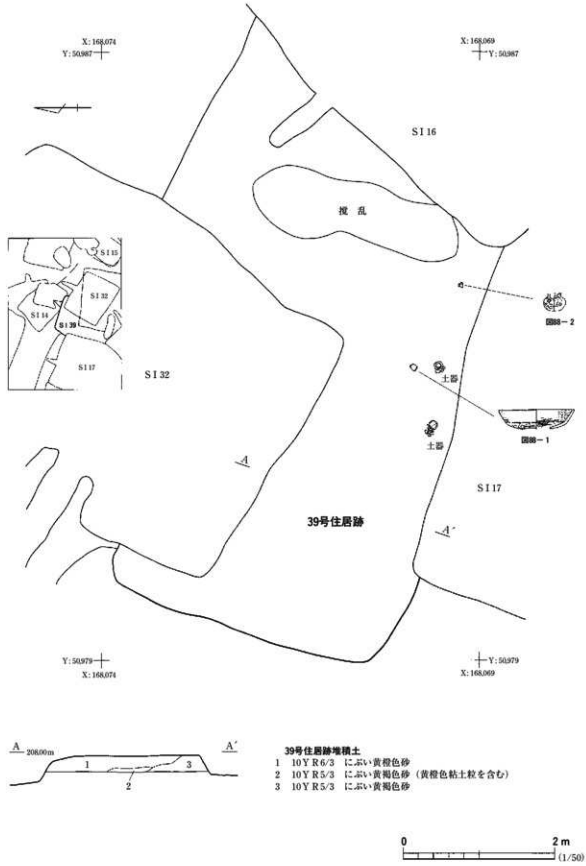


図87 39号住居跡

カマド・ピット類は、検出されていない。

遺物 (図88, 写真82~85)

本住居跡では、土師器片309点、土製品3点、石製品2点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は8点あり、このうち5点が遺構に伴っている。

図88-1は、有段丸底の土師器杯である。口縁部の立ち上がり角度が急で、底径の比較的大きい器形を呈している。底部外面に、焼成前の線刻が観察される。

図88-2は、ミニチュアの土師器球胴甕である。口縁部は、意図的に打ち割られた状態を示している。

図88-3・4は、土製白玉である。表面は、黒色処理されている。

図88-5は、石製白玉である。33号住居跡の有孔石製品と同じ石材を用いている。

図88-6は、球形の石製品であり、用途不明。

図88-7は、土錐である。管玉の模造品かも知れないが、ここでは、両端が先細りになる形態の特徴を優先して考えておく。

図88-8は、鉄製刀子である。両端が欠損している。

まとめ

本遺構は、北ノ脇遺跡南端で、自然堤防の東斜面に営まれた堅穴住居跡である。駄目押しで検出したため、本来残っていた平面プランは捉えることができなかった。

また、カマドも検出されていない。

本住居跡は、規模の大きいのが、特徴である。

なお、営まれた時期に関しては、床面の遺物から、栗田式期と考えられる。

(菅原)

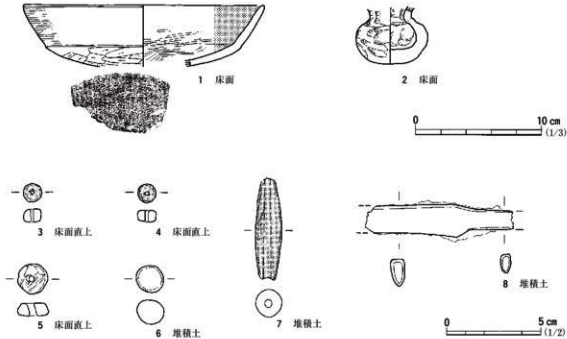


図88 33号住居跡出土遺物

堆積土は、2層に分層された。残り少ないが、断面はレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、2～4cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。しかし、破壊が著しく、詳細な検討は行われていない。規模は、東西2.7m以上、南北6.0m以上を測り、大型の部類に属するとみられる。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に6°振れている。

カマドは西周壁で検出された。軸は残っていない。煙道部は、周壁から長さ141cmを測り、堆積土には、多量の焼土塊が含まれていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物は、土師器片4点が出土した。図示可能なものは無い。

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態が悪く、検出されたのは、推定床面積の3分の1以下にとどまる。

カマドは西周壁に設置されていた。

本住居跡は、良好な伴遺物に恵まれていない。重複する11号住居跡も、同様なので、営まれた時期については、特定することができない。

(菅原)

41号住居跡 S I 41

遺 構 (図90, 写真56～58)

本遺構は、O18-85・86・95・96グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係を整理しておく、周辺遺構の中では最も古く位置付けられ、20・35・38号住居跡に切られている。

本住居跡は、南側で上部削平が著しく、ここでは、周壁と床面が失われていた。このため、検出されたのは、推定床面積の3分の2程度である。

堆積土は、4層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を示しており、このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、残りの良い北周壁で、5～10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西6.2m以上、南北4.0m以上を測り、大型の部類に属するとみられる。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に4°振れている。

カマドは検出されなかった。西周壁に設置されていた蓋然性が高いと思われるが、確認は得られていない。

ピット類は、検出されていない。

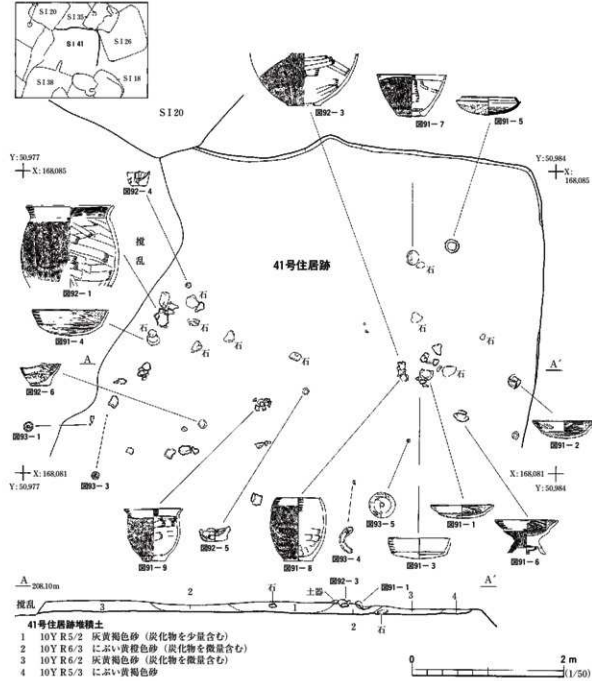


図90 41号住居跡

遺物 (図91~93, 写真76・82~84)

本住居跡では、土師器片531点、須恵器片3点、土製品4点、石製品1点などが出土した。

図示遺物は21点ある。それらは、出土状況の違いで、床面の一群と、堆積土の一群に分けられる。後者は、礎や焼土・炭化物が一緒になっており、生活残滓が一括廃棄された状況を明確に示していた。ちなみに、両者の間には、型式的に分離できるほどの年代差は認められない。したがって、住居廃絶から、堆積土へ遺物が一括廃棄されるまでの時間幅は、さほど大きなものではなかったと推定している。

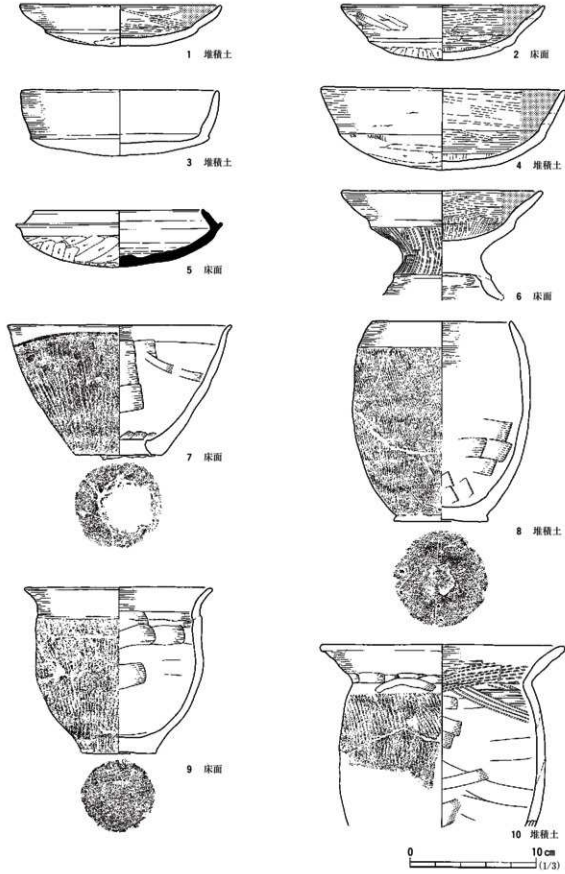


図91 41号住居跡出土遺物(1)

図91-1～4は、土師器杯である。1・2は、口縁部の大きく開いた有段丸底杯に分類される。

3は、須恵器杯蓋の模倣杯で、再酸化している。内面は、ミガキ・黒色処理されていたと推定されるが、ほとんど痕跡をとどめていない。

4は、やや大型の有段丸底杯で、1・2に比べると、口縁部が急角度で立ち上がる。

図91-5は、完形品の須恵器杯身である。床面に正立していた。全体に扁平な器形であり、口縁部の立ち上がり角度は、かなり斜めである。底部外面は、手持ちヘラケズリ調整が加えられている。胎土に、径2～4mmの白色粒子の混入が目立つ。色調は、表面が青灰色、断面がにぶい赤褐色を呈している。焼成は良好で、堅緻である。TK43～TK209型式に比定されよう。

図91-6は、土師器高杯である。有段丸底杯を短脚に乗せたもので、外面に、ハケメ調整痕が観察される。脚部外面には、段が形成されている。また、脚部の端は、きれいに削り揃えられている。何かに転用されたのだろうか。

図91-7は、小型の土師器飯である。全体の器形は、逆台形を呈し、口縁部が短く屈曲する。底部の孔は、中心からずれている。

図91-8・9は、土師器小型甕である。8は、胴部中央に膨らみを持

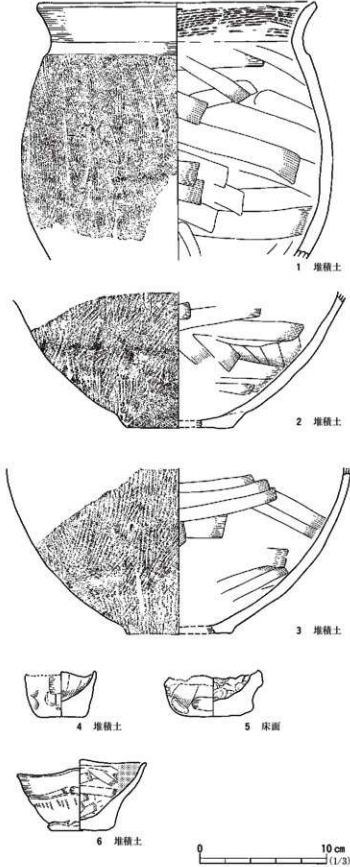


図92 41号住居跡出土遺物(2)

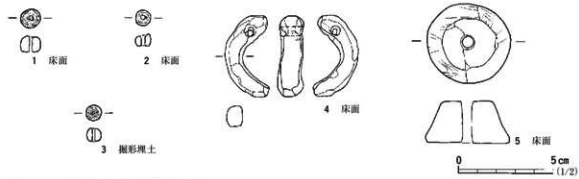


図93 41号住居跡出土遺物（3）

ち、頸部から口縁部がそのまま内傾する。器面は、荒れておらず、内面に煤の付着が観察されていない。したがって、煮炊に使用されたものではないと考えられる。それに対して、9は、煮炊痕跡が顕著である。器形は、口縁部下端に段を有し、胴部下半が強く窄まる。以上の2点は、外面がハケメ調整されている。

図91-10は、中型の土師器甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、外面はハケメ調整されている。

図92-1～3は、土師器球胴甕である。器形全体の判明するものは無い。どれも大型で、外面はハケメ調整されている。1は、広口で、口縁部下端に段が形成されている。

図92-4～6は、土師器手づくね土器である。4・6は、指で簡単に形を整えただけの小型品である。6は、やや大型で、内外面に粗雑な調整が加えられている。なお、内面は黒色を呈しており、意図的なものと考えた。

図93-1～3は、土製丸玉である。2は、扁平気味なので、白玉とした方が良いのかもしれない。表面は、黒色処理されている。

図93-4は、土製勾玉である。

図93-5は、石製紡錘車であり、表面に研磨痕が観察される。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。南周壁脚は、削平され、残っていない。カマドも検出されなかった。平面プランは、方形を呈しており、比較的大きな規模を有している。

本住居跡では、床面と堆積土で定量の遺物が出土した。後者は、生活残滓と共に一括廃棄されたものである。

それらの内容を参考にすると、本住居跡が営まれた時期は、栗園式期に求められると思われる。

（菅原）

42号住居跡 S142

遺構 (図94, 写真59)

本遺構は、O19-6・15・16グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。重複関係を整理しておく、30・32号住居跡に切られている。

本住居跡は、西周壁付近の一部が検出されただけで、ほとんどは、重複遺構と攪乱で破壊されていた。検出されたのは、推定床面積の4分の1以下である。

堆積土は、3層に分層された。断面は、典型的なレンス状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み跡まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、15cm前後を測る。

本住居跡の規模は、東西1.7m以上、南北3.2m以上を測る。検出された西周壁でみると、住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に40°振れている。

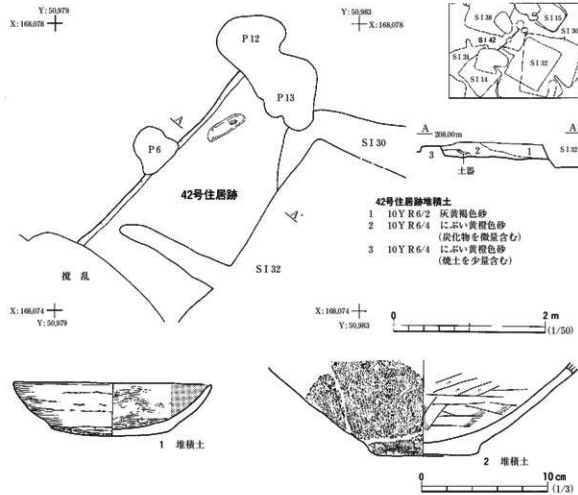


図94 42号住居跡・出土遺物

カマドは検出されなかった。ただ、西周壁ぎわの床面で、カマド構築材とみられる板状石が出土している。したがって、この付近に設置されていた可能性が高いと推定している。

ビッド類は、検出されていない。

遺物 (図94)

本住居跡では、土師器片123点が出土した。図示遺物は2点ある。それらは、堆積土から出土しており、遺構には伴っていない。

図94-1は、有段丸底の土師器杯である。底部は平底風で、口縁部が内湾する。

図94-2は、土師器甕の底部片である。大型の球胴甕であろうか。外面は、ハケメ調整されている。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれた堅穴住居跡である。遺存状態が悪く、検出されたのは、西周壁付近のごく一部だけであった。このため、遺構の詳細については、ほとんど知ることができなかった。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構の所見から、国分寺下層式期～栗岡式期に下限を設定できる。ただ、それ以上のことは、良好な共存遺物に恵まれず、検討することができない。(菅原)

第2節 土坑

1号土坑 SK01

遺構 (図95, 写真60)

本遺構は調査区北部のO18-62・63グリッドにかけて検出した土坑で、LⅣ上面から検出した。この付近は堅穴住居跡の重複が著しく、本土坑は住居跡内の貯蔵穴とも考えたが、どの住居跡のものとも判断できないため、1号土坑として報告することとする。

本遺構は砂層のLⅣ上面から検出したが、少なくともLⅢ上面から掘り込んで造られたものとみられる。大きさは上端が長軸約110cm、短軸約90cmの楕円形状であるが、下端は長軸約70cm、短軸約40cmの長方形である。方形を基調に造られたものとみられるが、周壁が大きく崩落してしまったようである。深さは検出面から約35cmを測る。堆積土は4層に分層でき、周囲から流れ込んだ様子が観察できた。底面は平坦で、そこからは土師器の甕と瓶の2個体が出土している。

遺物 (図95, 写真76・77)

出土した遺物は土師器42点で、平面図上に示した2個体である。図95-1の小型の甕は底面から約10cmほど浮いているが、同図2の瓶はほとんど底面と変わらない位置から出土しており、本遺構に伴うものとみられる。

図95-1は小型の甕でリング状に煤が付着しており、煮炊具として使用されたようである。底部

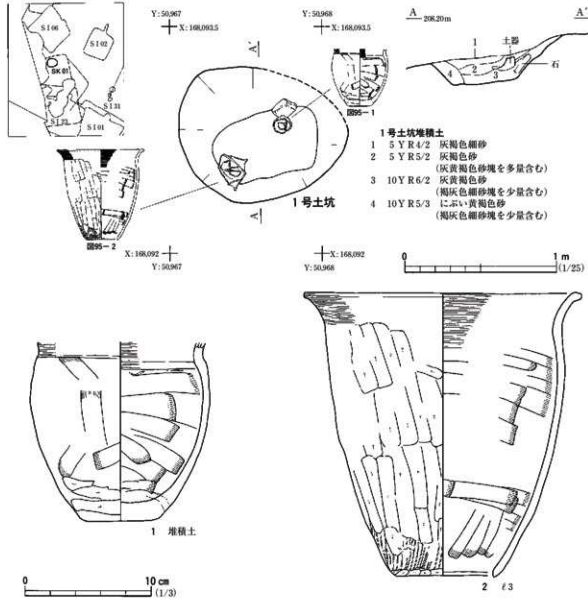


図95 1号土坑・出土遺物

は粗く削って仕上げられている。

図95-2は無底式の甎で、体部外面は縦方向にヘラケズリが施されている。

まとめ

本遺構は形状と出土遺物から住居跡の貯蔵穴と考えられる。

この土坑と重複する住居跡は9・13号住居跡があげられるが、位置的には9号住居跡の北周壁に沿っている。また、出土遺物が甎や甎などの煮炊具であったことから、カマド脇に設けられたものの可能性がある。仮に9号住居跡に付属するものとすれば、9号住居跡のカマドは北周壁に付設されていたとも推察できよう。

出土遺物からは時期が特定できないが、周辺から検出された住居跡と大きく隔たるものではないようである。

(大波)

第3節 柱列跡

1・2・3号柱列跡 SA01・02・03

遺構 (図96, 写真61)

本調査において検出された柱列跡は1～3号までの3条である。調査の結果、これら3条の柱列跡は同時、あるいは極めて近い時期に機能したものと判断したため、ここでは併せて報告することとした。以下、詳細について検討する。

これらの柱列跡は調査区北側の中央部分に位置している。旧地形からみると、この付近は自然堤

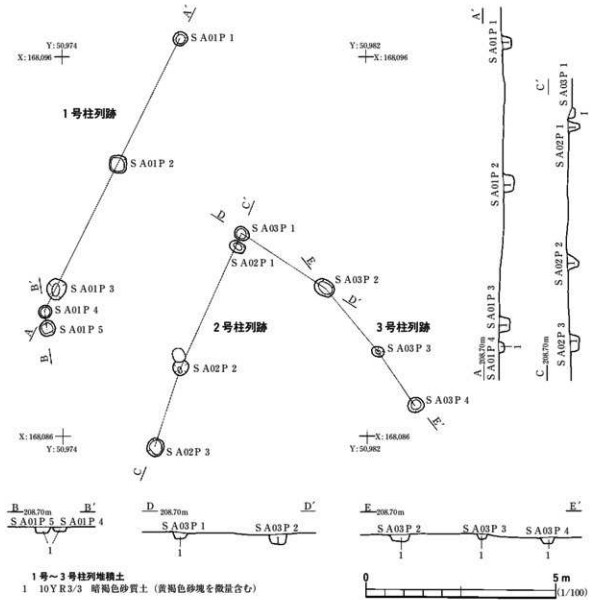


図96 1・2・3号柱列跡

防頂部の平坦な地形となり、そこから東側は後背湿地にかけて緩やかに傾斜する。1・2号柱列跡はこの地区を通る等高線には沿って並び、3号柱列跡は等高線に直交している。遺構の分布からみると、3条の柱列跡は調査区南側の堅穴住居跡が密集する区域の北端付近に位置する。遺構の重複関係は1号柱列跡が4号住居跡、2号柱列跡が4・20号住居跡、3号柱列跡が3・4・35号住居跡とそれぞれ重複し、これら全ての堅穴住居跡より新しい。

1号柱列跡は5個、2号柱列跡は3個、3号柱列跡は4個の柱穴で構成される。堆積土は基本土層のⅡ塊を含む暗褐色砂質土で、柱穴の南側ほど色調がやや明るくなるところが、全ての柱穴に共通している。遺構の位置は1号柱列跡がO18-55・64・74グリッド、2号柱列跡がO18-75・85グリッド、3号柱列跡がO18-75・76・86グリッドにそれぞれまたがって所在する。柱穴の平面形は1号柱列跡P2が隅丸方形に近いが、他は円形ないし楕円形を呈する。規模は2号柱列跡P1が約30cmで、浅めの1号柱列跡P4・5、3号柱列跡P3などが約10cm前後で、他はほぼ20cm内外である。それぞれの柱列跡の各柱穴間の間隔は、1号柱列跡はP1からP5に向かって3.7+3.8+0.6+0.4m、全長8.5m、2号柱列跡がP1からP3に向かって3.6+2.1m、全長5.7m、3号柱列跡がP1からP4に向かって2.6+2.2+1.75mで、全長6.55mを測る。1号柱列跡のP4・5については浅く、軸方向を変えてP3に近接していることから、P3の支え柱などの補助的役割、あるいは何らかの付帯施設の柱穴の可能性もある。

まとめ

1号柱列跡と2号柱列跡の軸方向はほぼ平行で、3号柱列跡の端部は2号柱列跡の端部に近接し、ほぼ等高線に直交した後背湿地側に延びている。このような遺構配置と、堆積土及び堆積状況が共通することなどが、ほぼ同時期に柱列跡として機能していたと推測される点である。しかし、出土遺物で明確に遺構に伴うものも無く、時期や性格は不明である。調査区内からは同様の小ピットを多数検出していることから、それら小ピットとの関係を再検討することが必要である。

本遺構の所属時期は、他の住居跡との重複関係から、栗西式期～国分寺下層式期に上限が求められる。(木村)

第4節 ピット群

今回の調査では、多数のピットを検出した。その分布は、住居跡が密集して検出できた自然堤防の頂部からは少なく、その東側の後背湿地へと続くとみられる緩斜面上に集中する。そのようなピット群の中には堅穴住居跡を掘り込んでいるものもあり、全体的に住居跡よりも新しいようである。

しかし、ピット群の検出は困難で、建物跡や柱列跡、あるいは個々の遺構に付属した施設というように関連づけ把握することができなかった。そこで速やかに住居跡の発掘調査に移るため、調査方法の円滑化を計り、記録方法の簡略化を行っている。

ピット番号は、4つの小グリッドを合わせ、その範囲内で検出できた順に通し番号を付け、北西

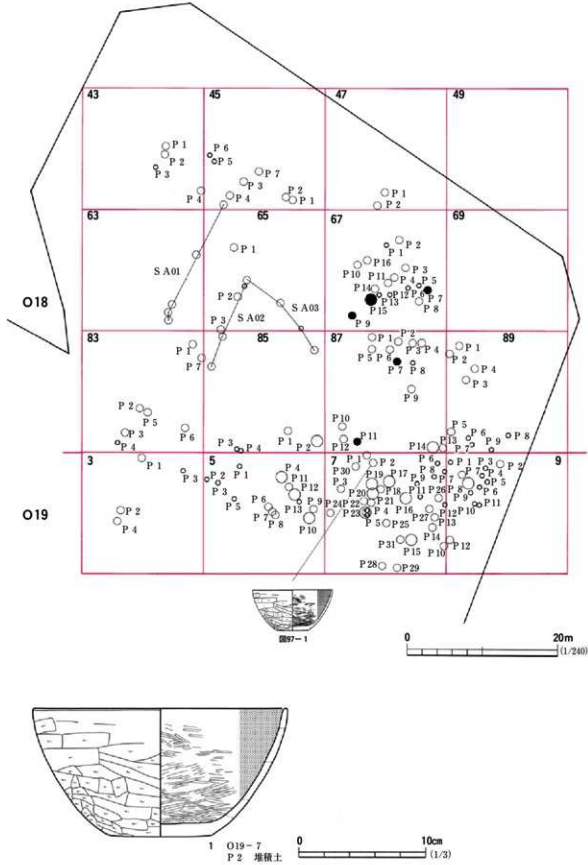


図97 グリッドピット群・出土遺物

表1 グリッドビット一覧(1)

グリッド	ビット 番号	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	土 層 注 記	備 考	
O18-43	P 1	43×40	28	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 2	33×33	33	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 3	30×25	16	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 4	42×40	12	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
O18-45	P 1	59×51	31	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 2	45×42	19	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 3	50×46	26	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 4	47×47	42	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
O18-47	P 5	42×21	8	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 6	29×29	15	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 7	46×45	12	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 1	50×48	-	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂	しまりなし	
O18-65	P 2	53×53	-	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂	しまりなし	
	P 1	55×48	36	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 2	42×45	19	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 3	35×32	29	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂		
O18-67	P 1	32×30	26	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 2	43×38	35	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 3	50×47	27	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 4	37×31	28	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 5	25×20	-	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 6	25×25	21	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 7	53×48	32	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂	柱径径約 8cm	
	P 8	46×44	9	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 9	60×52	24	10 Y R 6 / 1 褐色色砂	柱材(カヤ)が出土する。	
	P 10	48×45	11	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 11	63×50	30	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 12	30×26	5	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
O18-83	P 13	40×30	20	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 14	35×33	31	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 15	65×61	35	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂	柱材(カヤ)が出土する。	
	P 16	70×32	22	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 1	35×31	17	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 2	42×36	19	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 3	45×43	15	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 4	24×23	6	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 5	46×42	20	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 6	72×40	12	10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色砂		
	P 7	38×32	21	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂		
	O18-85	P 1	59×51	30	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂	
P 2		106×89	54	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 3		10×15	10	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 4		20×16	16	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 1		38×34	20	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 2		60×51	32	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 3		46×44	26	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 4		46×46	23	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 5		48×43	19	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 6		60×55	31	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
P 7		61×55	36	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
O18-87		P 8	36×26	16	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂	柱径径約12cm
	P 9	62×52	21	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 10	75×60	25	10 Y R 6 / 2 灰黄褐色砂		
	P 11	55×46	45	10 Y R 6 / 1 褐色色砂	柱径径約11cm 焼土を含む。	
	P 12	63×40	22	10 Y R 6 / 1 褐色色砂	焼土を少量含む。	
	P 13	67×50	47	10 Y R 6 / 1 褐色色砂		
	P 14	65×62	50	10 Y R 6 / 1 褐色色砂		
	O18-89	P 1	71×45	22	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂	
		P 2	73×50	24	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂	
		P 3	64×42	30	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂	
		P 4	100×60	40	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂	
		P 5	60×60	20	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂	
P 6		26×24	24	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂		
P 7		20×20	22	10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色砂		

表2 グリッドビット一覧(2)

グリッド	ビット 番号	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	土 層 注 記	備 考
O18-89	P 8	40×30	25	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 9	29×28	23	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 11	36×34	11	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
O19-3	P 2	72×50	34	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P 3	30×28	15	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 4	50×48	45	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
O19-5	P 1	36×24	42	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 2	10×8	12	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 3	12×9	9	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 4	76×68	37	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 5	21×19	4	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 6	48×40	26	10Y R 6/1 褐灰色砂	
	P 7	58×38	28	10Y R 6/1 褐灰色砂	
	P 8	47×39	25	10Y R 6/1 褐灰色砂	
	P 9	50×40	35	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
	P10	90×68	47	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
	P11	92×55	31	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
	P12	75×70	39	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
	P13	28×26	22	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
O19-7	P 1	64×50	22	10Y R 5/1 褐灰色砂	焼土を含む。
	P 2	60×40	32	10Y R 5/1 褐灰色砂	焼土を含む。
	P 3	42×40	21	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 4	21×20	16	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 5	21×20	15	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 6	27×26	14	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 7	24×21	15	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	焼土を含む。
	P 8	21×20	12	10Y R 5/1 褐灰色砂	焼土を含む。
	P 9	38×30	13	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P10	58×56	35	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P11	30×30	23	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P12	20×19	14	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P13	63×58	21	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P14	52×47	23	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P15	70×65	29	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
P16	74×67	30	10Y R 5/1 褐灰色砂	焼土を含む。	
P17	100×73	29	10Y R 5/1 褐灰色砂	焼土を含む。	
P18	60×54	30	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P19	80×80	15	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P20	70×63	40	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P21	115×50	38	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P22	60×53	29	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P23	90×87	45	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P24	50×48	28	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P25	34×33	18	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P26	32×32	24	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂		
P27	55×43	26	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂		
P28	80×48	18	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂		
P29	86×54	20	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂		
P30	63×60	38	10Y R 5/1 褐灰色砂		
P31	80×45	43	10Y R 5/1 褐灰色砂		
O19-9	P 1	27×26	21	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 2	68×53	30	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 3	24×23	20	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 4	25×25	25	10Y R 5/3 に深い黄褐色砂	
	P 5	27×22	25	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 6	23×22	29	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 7	37×34	36	10Y R 6/3 に深い黄褐色砂	
	P 8	76×63	43	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P 9	135×18	40	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P10	29×29	23	10Y R 6/2 灰黄褐色砂	
	P11	26×25	15	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	
	P12	56×51	26	10Y R 7/2 に深い黄褐色砂	

検出できたピットには同一方向に並んでいるものが多く、それぞれが何らかの建物跡を構成した柱穴のひとつである可能性が高い。

住居跡を著しく重複して検出した頂部平坦面の分布状況は稀薄であったが、建物跡を建設する際に立地条件の良い頂部平坦面を避け、後背湿地帯が選地されたとは考え難い。ピット群は、自然堤防頂部から東側の緩斜面にかけて広く分布し、複数の建物跡を構成していたものと考えられる。頂部平坦面では住居跡内堆積土を掘り込んで造られていたため、その部分に位置したピットは確認できず、調査の際に掘り込まれてしまったものが少なくないものとみられる。

ピットの大きさは、直径約50cm前後のもの、それよりも小さい30cm未満のものに分けることができる。平面形は、円形ないし楕円形を基調としている。検出面からの深さは30cm前後であり、特に大きな掘形を必要とする建物跡ではなかったようである。

堆積土は、ほとんどが単一層で、基本土層のL IIとは若干の色調の違いでしか判断できなかった。しかし、堆積土中に焼土塊を著しく含んだピットも存在しており、人為堆積の様相がうかがえる。また、柱痕跡が確認できたものがあり、直径約10cmほどであった。

柱材の一部が出土したO19-7・P31からは、柱材を堆積土との関係で捉えることができた。柱材は、根本を褐灰色砂で固めてから、灰褐色砂で覆っていた。

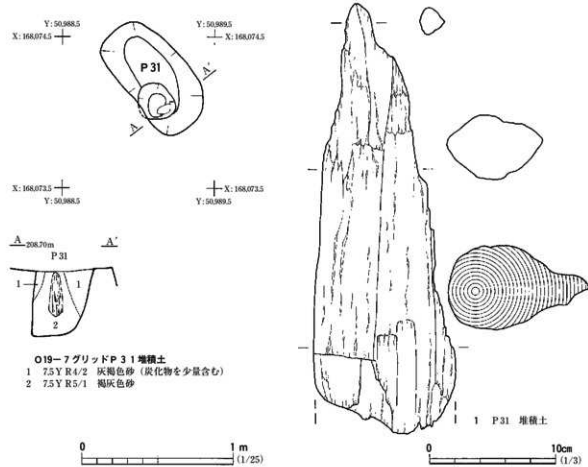


図99 31号ピット・出土遺物

遺物 (図97～99, 写真77・85)

遺物は、掘形内から数点が出土している。そのほとんどが土師器の細片で、住居跡から出土したものと大きな違いは認められなかった。図示できたのは、O19-7・P2から出土した1点のみである。O19-7・P2は、著しく重複するピット群の一角にあたる。

図97-1は土師器の杯で、O19-7・P2の掘形内から出土した。ここから出土した杯は、口縁部径約19.9cmの大型で、平底の杯である。調整は、体部外面がヘラケズリで、内面がヘラミガキ後に黒色処理が行われている。

また、O18-67・P9・P15とO19-7・P31からは、柱材が出土している。遺存状態が悪いため加工痕等は確認できなかった。しかし、樹種同定の結果、どの柱材も針葉樹のカヤが使用されており、規格性がうかがえる。

まとめ

今回の調査は円筒化を計って、ピットの記録を簡略化して堅穴住居跡の調査を急いだため、必ずしも十分な検討はできなかった。

ピット群には、自然堤防に平行するように並んだ状況が認められるものもあり、頂部平坦面から後背湿地にかけて複数の建物跡が同時存在していた可能性が考えられる。そのような状況を加味すれば、第3節で述べた1～3号柱列跡も単独に存在したのではなく、他のピットと関連したものであろう。

ピット群の時期は、他の遺構との重複関係や出土した遺物から、国分寺下層式期に上限が求められる。O19-7付近のピットは著しく重複するが、ピット群はほぼ同時期に出現し、短期間のうちに機能を終えたと推察される。その時期は、自然堤防上に営まれた堅穴住居跡が激減する時期に一致している。

(大 波)

第5節 遺構外出土遺物

今回の調査で、北ノ脇遺跡からは遺物27,569点が出土したが、そのうち遺構外から出土したものはおよそ半数の13,612点である。その内訳は、土師器12,798点、須恵器720点、土製品19点、石製品6点、鉄製品7点、古銭などである。それらはすべて基本土層のLⅡ中から出土している。土師器・須恵器の出土量が多いが、北ノ脇遺跡で検出された住居跡とほぼ同時期のもので、古墳時代から平安時代にかけてのものである。また、LⅢ上層からは僅かながら縄文土器も出土しているが、それらは下層部分の報告で扱うこととし、本報告書では取り上げてはいない。

北ノ脇遺跡は、阿武隈川右岸に発達した自然堤防上に立地するが、現況では耕作地となっており、ほぼ平坦な地形となっている。しかし、古墳時代から平安時代にかけて集落が営まれたころの地形は、現地形とは異なり、南北方向に延びた自然堤防の東側は、後背湿地へと続く緩斜面となっている。自然堤防の頂部の東西幅は約15mほどで、その平坦部分に住居跡は密集している。調査区内に

において自然堤防の頂部と後背湿地との比高差は約8mを測るが、住居跡が立地するのは東側の後背湿地側へ比高差約4mほどのところまでである。それより東側からは、多数の小ピットが検出されている。

遺物は、調査区全体から出土しているが、住居跡の密集する範囲に集中している。しかし、そこから後背湿地側の緩斜面上には、多くの遺物が流れ込んでおり、基本土層のLIIが厚く堆積して、遺物包含層を形成している。

出土遺物のうち、土師器・須恵器の土器類については、それぞれの出土傾向をグリッドごとに集計し、図100・101の模式図に示した。

土師器は出土量が多いため、小グリッドごとに集計した。

住居跡の分布する範囲の自然堤防上から東側の緩斜面にかけて多く出土し、住居跡の重複が著しい部分に集中して

土師器

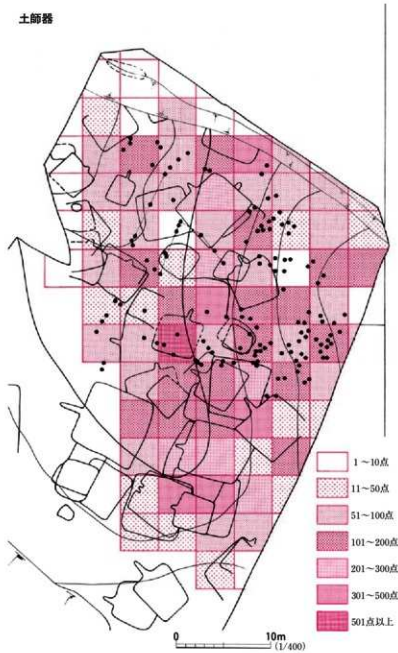


図100 遺構外出土遺物分布図(1)

いる。特に遺構の検出が困難であったグリッドの集計数が高く、この部分から検出できた住居跡の遺物の保有率は高かったものとみられる。また、調査区北端のO18-57グリッドに遺物が集中するのは、調査区内に排水路を引いた際に、19号住居跡に伴っていた遺物を取りあげてしまったためと考えられる。

須恵器は土師器ほど遺物が多くなかったため、4つの小グリッドを合わせて集計した。調査区全体から均一に出土しているが、国分寺下層式期の住居跡が比較的まとまって検出できた南端部分からは、若干多く出土するようである。しかし、調査区の東端にあたるO18-89・90・99・100グリッドからは、出土した須恵器の総数の約1/3にあたる約250点が出土している。この付近は調査区内

で最も標高の低い部分となり、ピット群以外の遺構は検出されていない。そのため、西側に分布する遺構からの流れ込みとも考えられるが、土師器の出土点数に対しても、あまりにも須恵器の点数が卓越していることから、何らかの要因が併存するものと推察される。

南接する高木遺跡は、調査区北部の東側が後背湿地となっており、おそらく北ノ脇遺跡の東側斜面は、この部分に繋がっていくものと推測できる。

高木遺跡の大溝と後背湿地では、水辺の祭祀が行われており、そこからは須恵器提瓶・横瓶、土製玉類、土製模倣鏡など多種多量の遺物が出土している。そのため、北ノ脇遺跡の東側に形成された後背湿地でも、高木遺跡と同じような水辺の祭祀が行われていた可能性があり、出土点数に反映したのかもしれない。

遺構外から出土した遺物のうち、遺存状態の良いもの

の特徴のあるものについては、図102～118に図示した。出土遺物は土師器の出土量が圧倒的に多いため、図示した遺物は須恵器を含んだ土器類が中心である。それらの時期は、北ノ脇遺跡で集落が営まれた古墳時代の終わりから平安時代にかけてのもので、遺物量は検出された時期の遺構数に比例するようである。土器以外の遺物は、時期の異なるものも含まれるが量的には少なく、概ね土器類の時期と一致している。



図101 遺構外出土遺物分布図(2)

土師器 (図102～112, 写真77～80・83)

土師器は図102～112に図示した。それらは古墳時代の終わりから平安時代にかけてのもので、栗園式から表杉ノ入式に分類することができる。そのうちの大多数は栗園式期から国分寺下層式期に位置づけられるものである。ここでは、製作技術にロクロが導入されるものは区別して、非ロクロ土師器の後方に配列している。

図102～図105-5は非ロクロの土師器杯で、ほとんどの杯の内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。そのうちの大半の杯は、口縁部下端に段ないし稜が認められ、底部をヘラケズりで仕上げた有段丸底のものである。

図102-1～図103-6は口縁部が大きく外反ないし外傾して開くもので、図102-7・8を除き、口縁部下端に対応する段ないし稜が内面にも認められる。口縁部は、図103-4・6のように先端部分が内湾するものもあるが、直線的に開いているものが多い。

図102-1・2は他のものに比べて口縁部が短く外反ないし外傾しており、底部の弧はあまりきつくないため、前型式の特徴を継承しているようである。

図102-5の内面には漆が付着している。この杯の底部は焼成後に穿孔されており、同様のものが1号住居跡からも出土している。(図5-1参照)

図102-11は口縁部の外面にも部分的にヘラミガキが認められる。

図102-12は器形、整形技法とも他のものと一致しているが、口縁部径が推定値で約24.7cm、器高が約7.1cmと大型である。

図103-7～13は有段丸底杯であるが、口縁部が直立気味に立ち上がり、須恵器杯の影響を受けて成立した器形と考えられる。同図10を除き、他の杯は口縁部が外傾しており、杯蓋を模倣したものとみられる。

図103-8は、口縁部先端が内湾する。

図103-9は口縁部が推定値で約12.8cmと、他のものと比べて小型である。

図103-10の口縁部は推定値で約12.3cmと同図9と同じく小型であるが、口縁部が内傾しており、須恵器杯身の模倣とみられる。

図103-14～図104-9は有段丸底杯の退化傾向がうかがわれ、口縁部下端に認められる内外面の段ないし稜は、痕跡程度にしか残っていない。図104-5・7は、口縁部と体部の境の段が沈線化している。

図104-2・6は、他の杯と異なり、底部から体部にかけてハケメ調整されている。

図104-7・8・9は口縁部径が13cm未満の小型のものである。

図104-8の底部は厚く、中央部分をケズリ残しており、平底に近い形になるものとみられる。

図104-10～15の器形は半球形をしており、同図10・14は口縁部先端がやや外反するが、他の杯には口縁部と体部との境がほとんど認められない。

図104-10の底部から体部にかけての外面調整はヘラナデである。

図104-13は、口縁部が直立ないし内湾しており、外面は体部のみならず口縁部にまでヘラケズリが施されている。

図104-14・15は外面全体にヘラミガキが認められる。

図105-1・2は平底化が認められる杯で、同図1は体部に沈線状の段が認められる。

図105-3の底部は柱状の高台が付く。

図104-4は須恵器杯身の器形に影響を受けたとみられる関東系のものである。内外面に黒漆が塗られている。

図105-5は丸底で、口縁部径の割に器高が低い皿状のものである。口縁部は極めて短いものが直立しており、外面の口縁部下端のところは沈線状になっている。調整は、外面は底部から口縁部にかけてヘラケズリが施されており、内面はヘラミガキ後に黒色処理が行われている。この器形は他の杯には認められず、上下を逆にすると須恵器杯蓋に近似している。また、この杯の口縁部分には故意に欠いた痕跡が認められる。

図105-6は杯蓋のつまみのところで、内外面にミガキが施され、黒色処理されている。

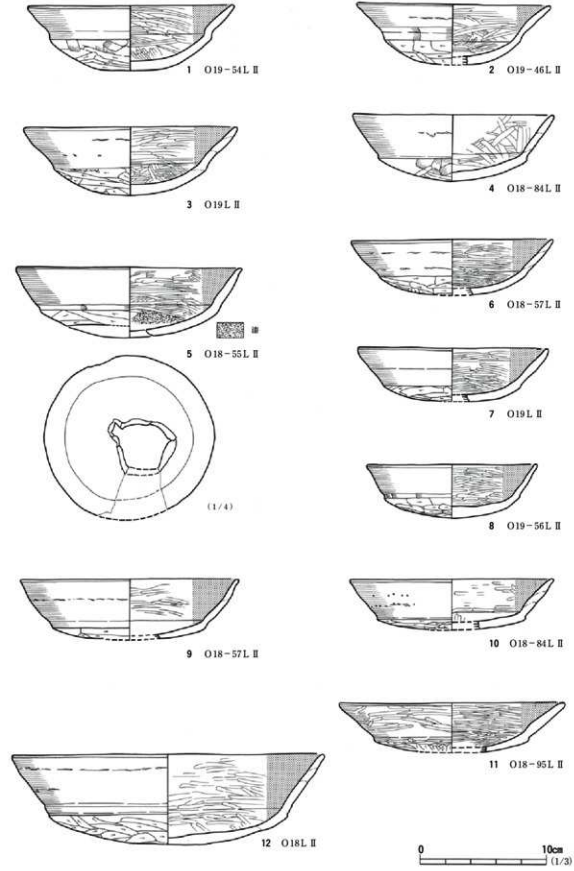


図102 遺構外出土遺物 (1)

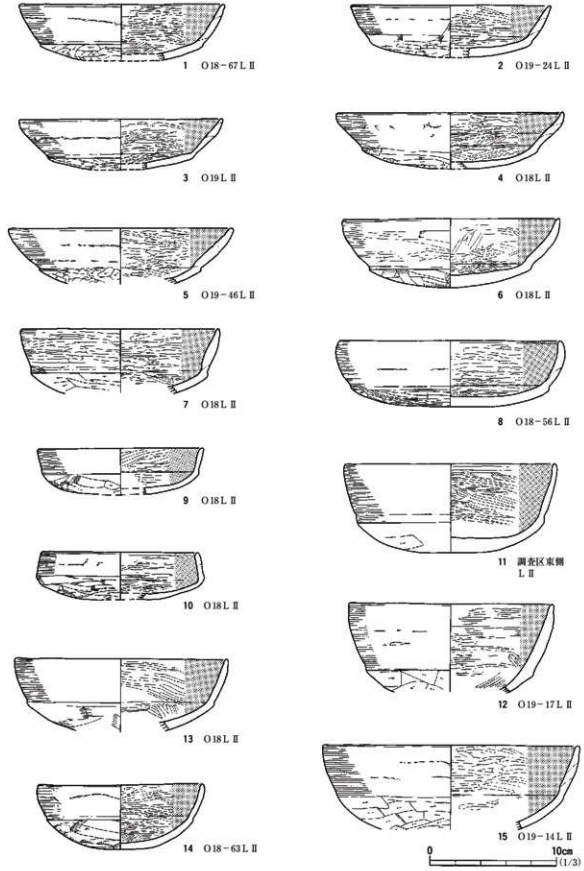


図103 遺構外出土遺物 (2)

第2編 北ノ脇遺跡

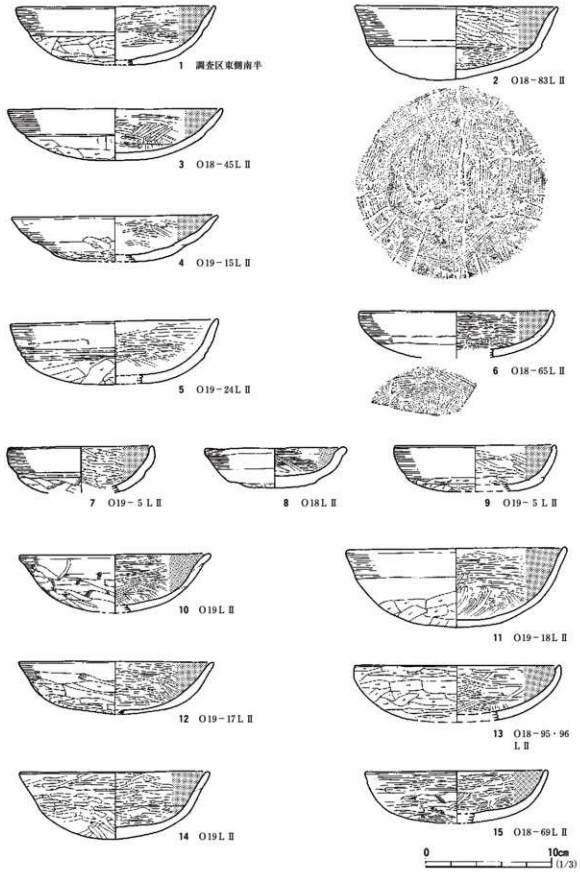


図104 遺構外出土遺物 (3)

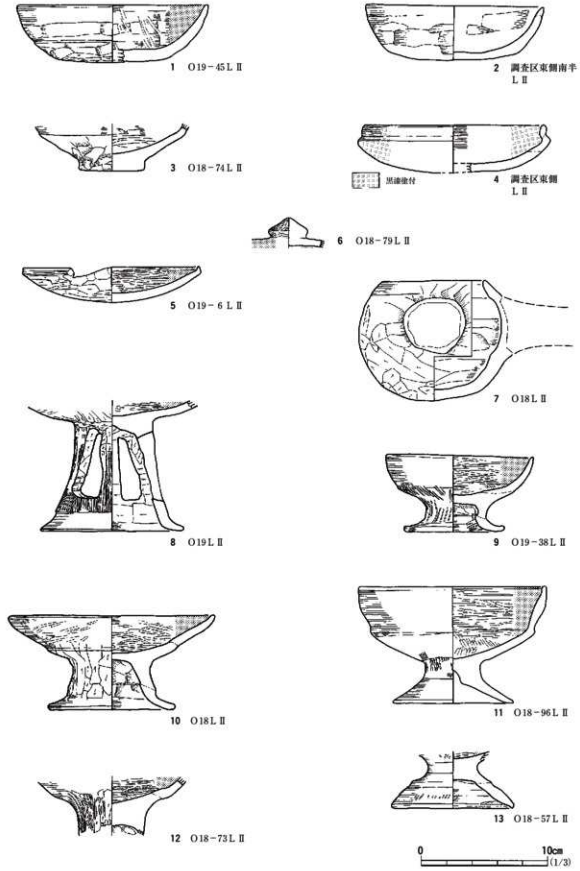


図105 遺構外出土遺物 (4)

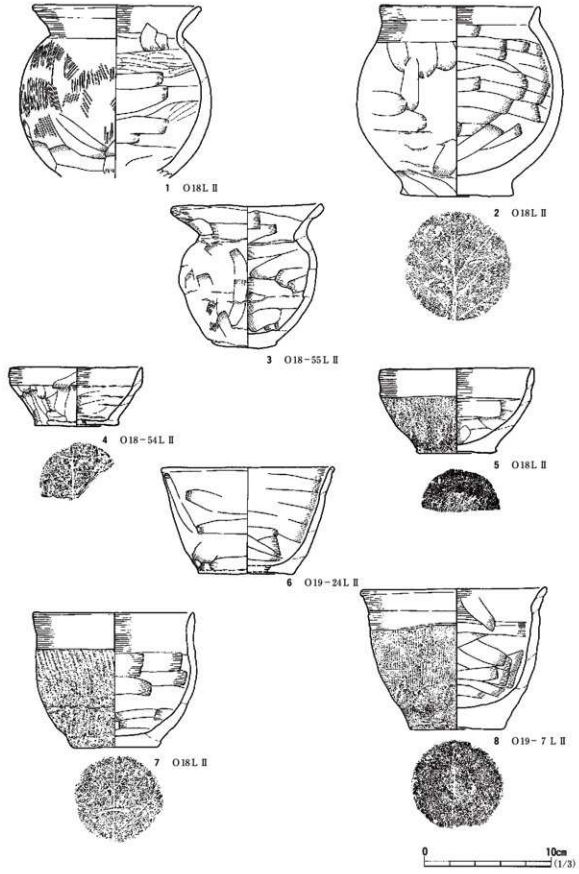


図106 遺構外出土遺物 (5)

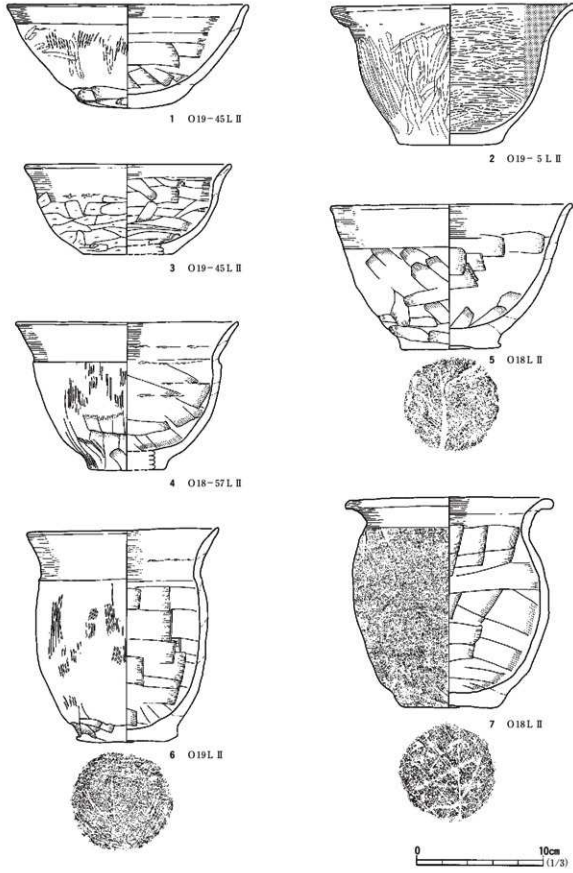


図107 遺構外出土遺物 (6)

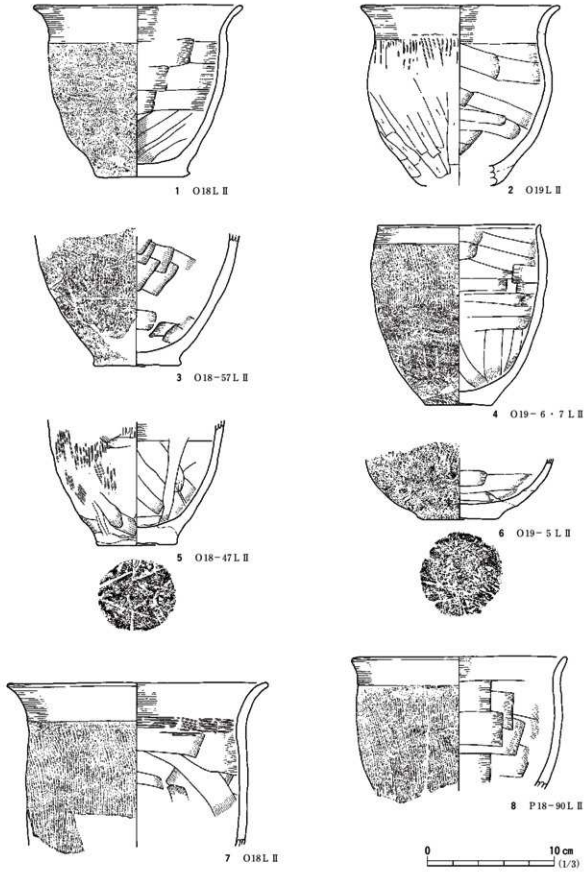


図108 遺構外出土遺物 (7)

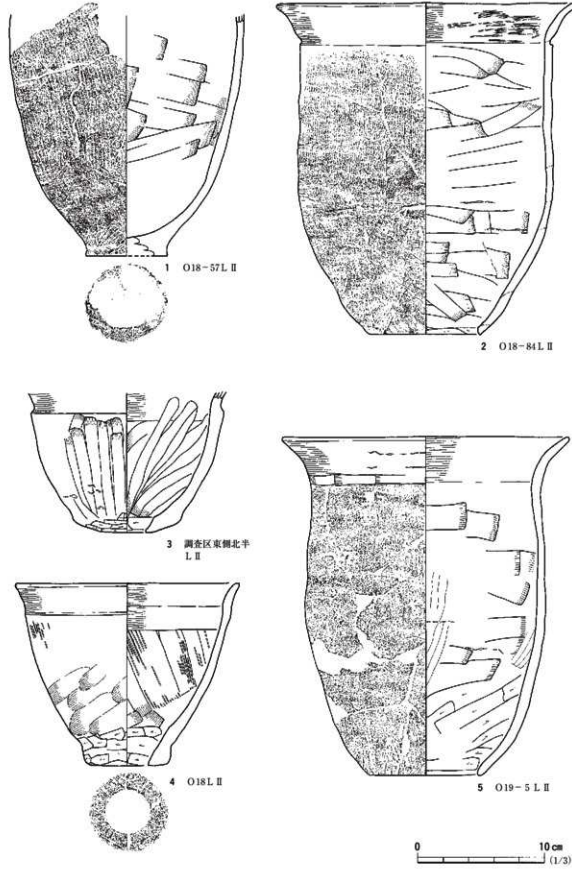


図109 遺構外出土遺物 (8)

図105-7は球形の椀状のもので、把手状のものがはずれた痕跡が認められる。把手部分は確認できなかったが、胎土は異なるものの3号住居跡から把手状の土製品が出土しており、この椀形土器にも同様のものが付いていた可能性が考えられる。(第1節 堅穴住居跡 図15-6参照)

図105-8～13は高杯である。杯部は内面黒色処理され、遺存するものは有段丸底杯に器形が求められる。口縁部は、同図10では大きく外傾するが、同図9・11は直立気味に立ち上がっている。脚部の外面調整は、図105-10はヘラケズリで仕上げられているが、他のものにはハケメ調整が認められる。同図8の脚部は長く発達し、4方透かしが認められるが、他のものは柱状ないし筒状の短いもので、裾が「ハ」の字状に開いている。

図106-1～図108-8、図110-1は甕である。大半の甕の外面はハケメ調整され、底部の遺存するものには木葉痕が認められるものと、周縁に粘土が貼り付けられるものが多い。

図106-1～3は小型球胴甕で、最大径は体部の中心にあり、頸部が括れて口縁部がくの字状に開いている。同図1の外面にはハケメも認められるが、それらは内外面ともヘラナデが施され、煮炊具として使用された痕跡は認められなかった。

図106-1の内面にはミガキが認められる。

図106-2は口縁部が短く直立気味に外傾し、底部が張り出す。底部には木葉痕が認められるが、その他に10数粒の粉痕が確認できる。

図106-3の甕は、他の球胴甕が端正に仕上げられる印象を受けるのに対し、歪みが多い。口縁部を上からみると、円形というよりは方形に近い形になるものとみられる。(写真78参照)

図106-4～図107-5の甕は最大径が口縁部にあり、器高よりも口縁部径のほうが大きい。

図106-4～8、図107-5の甕には頸部に明瞭な括れはなく、口縁部は直立気味に外傾しており、小型のものにその傾向が強い。他は、図107-1～3の甕は頸部が僅かに括れ、口縁部が短く外反する。同図4は、口縁部下端に明瞭な段が認められ、そこから直線的に外傾する。

外面はハケメ調整のものも認められるが、図106-4・6、図107-4・5にはヘラナデ、図107-1・2にヘラミガキ、図107-3にヘラケズリが施されている。

図106-7の内面にはリング状に煤が付着する。

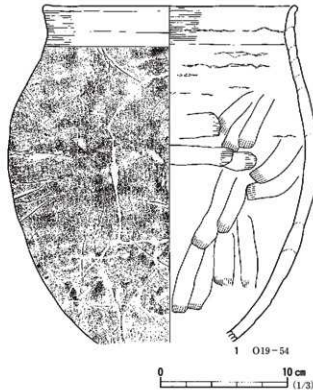


図110 遺構外出土土物(9)

図107-1の外面には部分的にヘラミガキが認められる。

図107-2は外面が縦方向、内面が横方向にヘラミガキが施されており、内面は黒色処理されている。

図107-6～図109-1、図110-1の甕は、口縁部径よりも器高のほうが大きい。口縁部が遺存するものは、外反ないし外傾するものが多く、口縁部と体部との境には段ないし稜が確認できる。

図107-6の底部の周縁にはヘラケズリが施されている。

図107-7の底部には木葉痕が2つ観察できる。

図108-4は頸部に括れがなく、口縁部が内湾し、先端が僅かに外反する。

図108-5・6の底部は、周縁に粘土が貼られている。

図110-1は他の甕に比べて法量が大きく、肩部に最大径があり、口縁部が直立する。口縁部付近の積み上げ痕が目立つ。

図109-2～5は甕である。

図109-3・4が単孔式の小型のもので、内外面ともヘラナデが施されており、特に底部の周囲はヘラケズリで仕上げられている。

図109-2・5は無底式の大型のものである。それら2個体は近似しており、器形は土師器甕に求めることができる。体部調整は、外面がハケメ、内面がヘラナデで、底部近くにはヘラケズリが施されている。

また、同図5の内面には部分的にヘラミガキが認められる。

図111-1～3はミニチュア土器である。

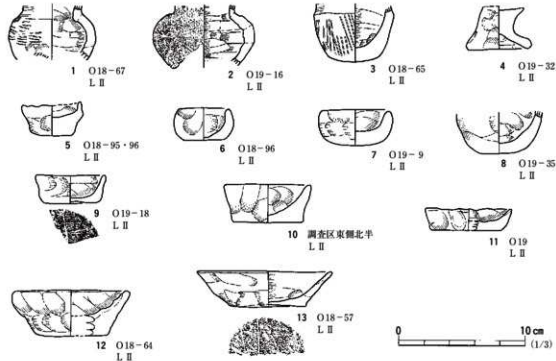


図111 遺構外出土遺物 (10)

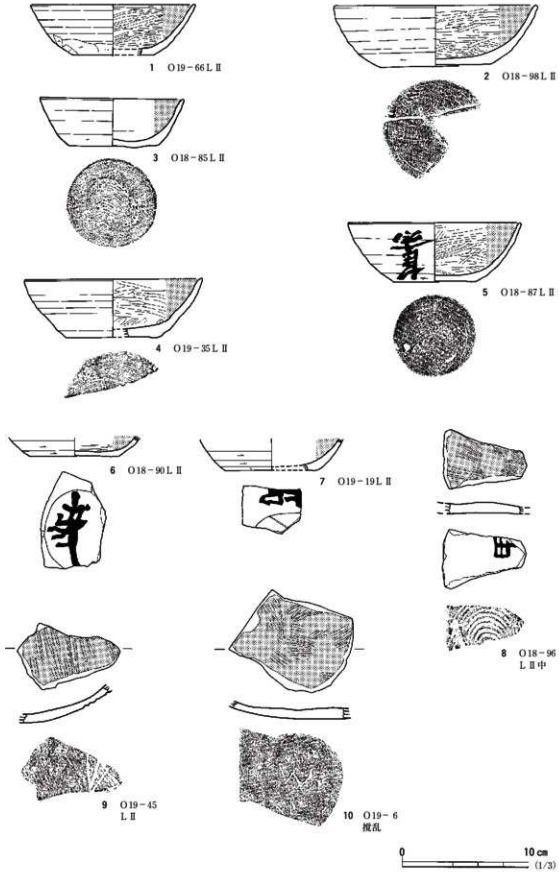


図112 遺構外出土遺物 (11)

図111-1～3の外面にはハケメ調整が認められる。

図111-1・2は口縁部と底部が遺存しないが、器形は土師器の球胴甕に求められる。

図111-3の外表面調整は、口縁部がヨコナデで、体部に縦方向にハケメが施されており、器形は土師器甕に求めることができる。

図111-4～13は手握ね土器で、指ナデや指押さえが認められる。

図111-4は高坏の脚部のような形をしており、他のものとは異なっている。

図111-6～8は丸底で、口縁部が内湾する。

図111-5・9～13は平底のものである。同図5・13の底部には木葉痕が認められる。

図111-5・9～11の口縁部は底部からほぼ直立している。

図111-12・13は底部から直線的に外傾している。特に同図13はロクロ調整の杯に近似している。

図112-1～8はロクロ調整の杯である。どの杯の内面も、ヘラミガキ後に黒色処理されている。

底部の切り難しは、同図2・5は回転ヘラケズリで再調整されて不明であるが、同図3・4・8は回転糸切り痕が観察できる。

そのうちの図112-5～8は墨書土器で、同図5は「集」とみられるが、他のものは遺存状態が悪く、判別できなかった。

図112-9・10は非ロクロの内黒杯とみられる細片であるが、線刻の可能性のある沈線が確認できたため図示した。

須恵器 (図113～116, 写真80・81)

須恵器は図113～116に図示した。細片のものが多かったが、特徴あるものについては復元的に実測図を作成して載せている。

図113-1～8は杯蓋である。同図1～3と同図4～8とに大別することができ、前者は丸底杯に、後者は平底杯に伴うものとみられる。

図113-1・2は天井部が丸く、回転ヘラケズリが施されている。同図2は遺存状態が良く、天井部と口縁部との境に形成された稜が明瞭で、口縁部がやや外に開いている。同図3は細片であるが、口縁部の傾きから杯蓋とみられ、短く直立している。

図113-4は天井部が厚く平たいもので、口縁部は天井部から外傾し、先端に近くなるほど薄く作られる。

図113-5・6は扁平で、同図7・8のようなつまみが付くものとみられる。天井部は平たく、そこから口縁部にかけて大きく外に開き、端部が下方を向いている。どちらにもかえりは認められなかった。

図113-7・8は故意に欠いた痕跡が認められるもので、同図7・8ともつまみ部分を残して似たような形に割れている。また、つまみの縁の部分も細かく欠いた様子が観察できる。

図113-9・10・13は杯身である。

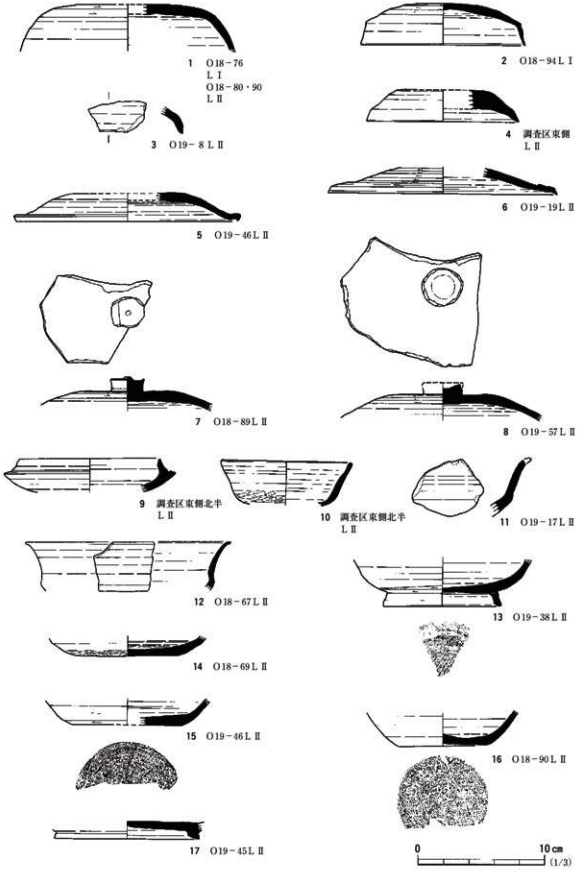


図113 遺構外出土遺物 (12)

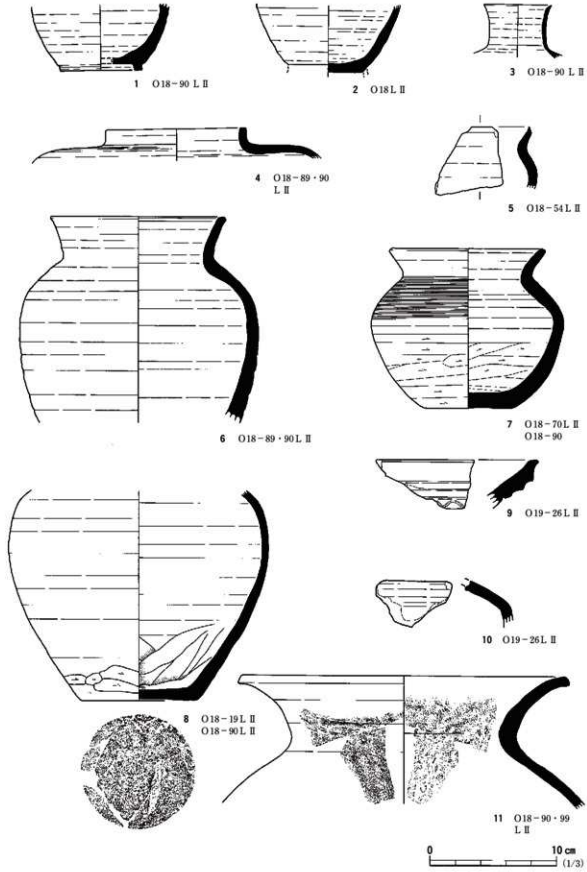


図114 遺構外出土遺物 (13)

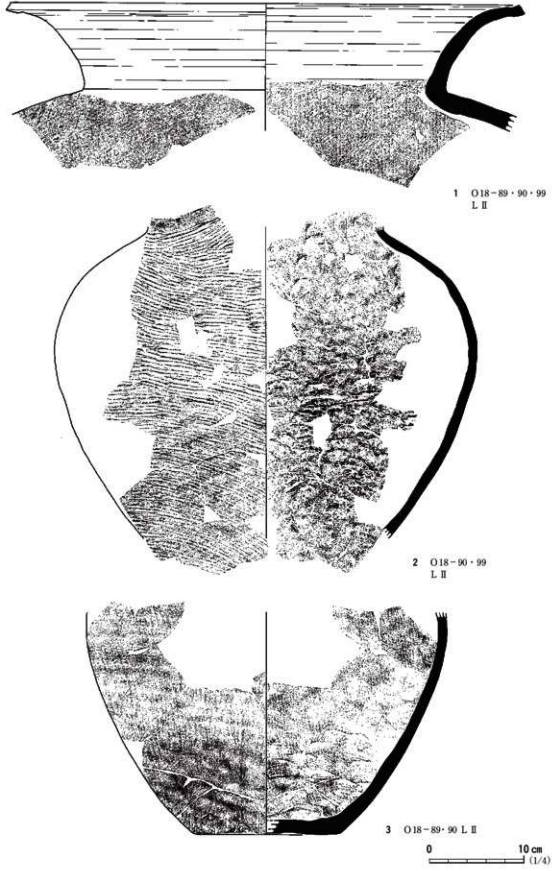


図115 遺構外出土遺物 (14)

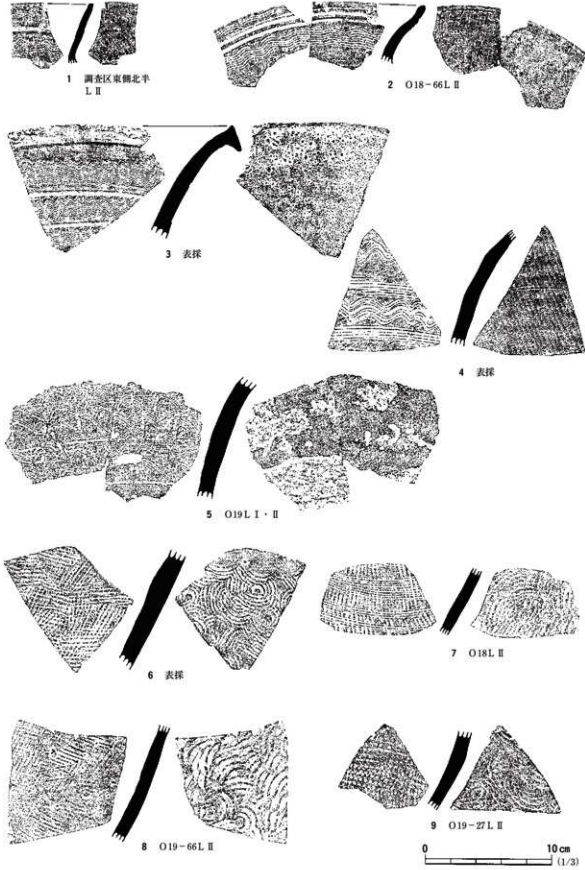


図116 遺構外出土遺物 (15)

図113-9は底部が欠損しているが、受け口が付く丸底杯である。

図113-10も底部が遺存しないが、手持ちヘラケズリが施された平底杯で、底部から口縁部にかけて外傾している。

図113-11・12は佐渡理椀模倣とみられる高台杯である。同図11・14は細片であるが、焼成は良好で、口縁部が外反する。

図113-13は高台杯で、底部は静止糸切りである。

図113-14は底部しか遺存しないが、手持ちヘラケズリが施された平底杯とみられる。

図113-15～図114-11は壺類あるいは甕類で、多種多様のものがみられる。

図113-15～17は底部周辺しか遺存していないため、器形は不明である。同図15・16の底部は回転ヘラケズリで再調整されており、同図17は短い高台が付く。

図114-1・2は瓶類とみられ、遺存する部分の大きさや器形は近似しており、同規模で、短い高台が付くものようである。

図114-3は短頸瓶で、頸部が短く直立する。

図114-4は肩部が張り、短く直立した口縁部の付いた短頸壺である。

図114-5～7は口縁部が「く」の字状に開く、壺類とみられる。同図7は遺存状態が良く、体部の上半部分にはカキメが観察でき、下半部にはヘラケズリが施されている。

図114-8は、口縁部が欠損するため器形はよくわからないが、肩部の張り具合から瓶類になるものとみられる。底部は回転ヘラケズリが施されている。

図114-11～図115-3は甕で、特に図115に掲載した3点は大型である。外面にはタタキメ、内面には当て具痕が観察できる。

図114-9・10、図116は細片のため、器形は不明なものが多い。

図114-9、図116-1～5は口縁部付近の細片である。どれも外面には波状文が付き、図116-3～5は波状文が沈線で区画されている。

図114-6～9は体部の細片で、タタキメと同心円状の当て具痕が認められる。タタキメは、同図6～8は平行タタキであるが、同図9は格子状のものである。同図7には横方向に走るカキメも観察できる。

土製品・石製品 (図117、写真81・82・84)

土製品のほとんどは、検出された住居跡に出土例がみられるものである。そのうち図示したものは、玉類7点、羽口1点、筒形土製品1点、棒状土製品6点、円盤状土製品1点である。石製品で図示できたものは石臼1点である。

図117-1～5は土製丸玉で、どれも表面が黒色処理されており、部分的にミガキが認められるものもある。どれも丸玉として報告するが、同図2・3などは穿孔されている両面が平たいため、白玉としたほうがよいかもしいない。

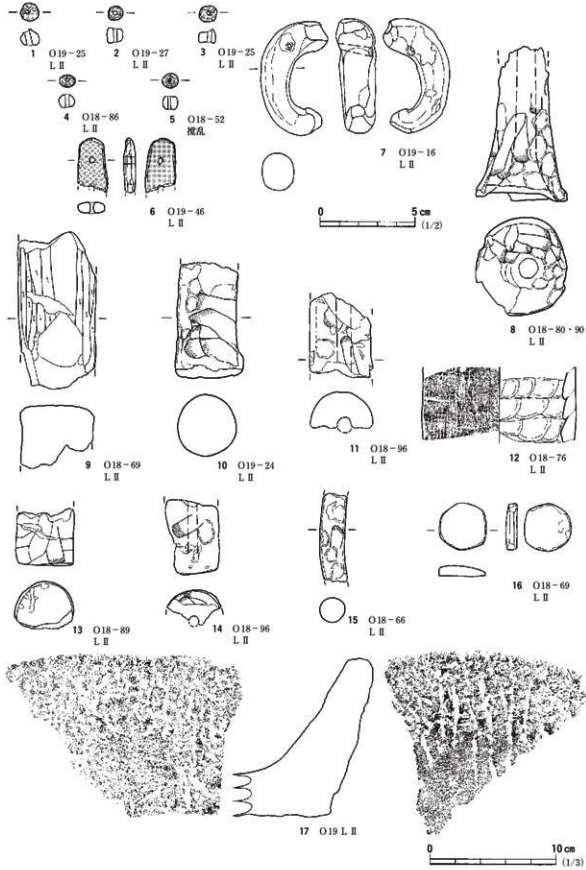


図117 遺構外出土遺物 (16)

図117-6は丸玉と同じように表面が黒色処理され、2つ並んで穿孔されている。欠損して元
の形状は不明であるが、全長約5cmほどになるとみられる。

図117-7は勾玉である。穿孔される部分が厚ぼったく作られており、面取りされて丸みを帯びて
仕上げられている。

図117-8は羽口で、端部が欠けている。

図117-12は筒形土器である。外面はハケメ調整されるが、内面は指押さえの付いた積み上げ痕が
そのまま残っている。

図117-9～11, 15は欠損しており、元の形状がよくわからず、用途は不明である。同図9は断面
が方形となり、縦方向にケズリが施されている。同図10・11・13・14の断面は直径約5cm前後の円形
である。指ナデで形が整えられている。同図11・14は芯材に植物質のものを入れて焼いたためか、
その部分が空洞となっている。それらの用途については、同図10は端部が広めに作られており、そ
のような形状はカマド支脚に認められる。他の3点についても支脚であった可能性がある。同図15
は直径約2cm前後のもので、他のものとは異なった用途が考えられる。

図117-16は円盤状のもので、面取りされて円形に近い形に仕上げられている。

図117-17は石臼である。内面には刻み目が付けられている。

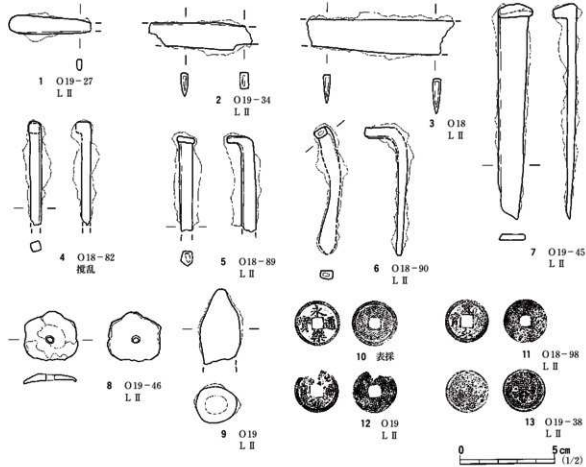


図118 遺構外出土遺物 (17)

その他 (図118、写真85)

他に図示したものは図118-1～9の鉄製品9点、同図10～13の古銭4点である。鉄製品は遺存状態が悪いが、形状がわかるものについては、北ノ脇遺跡で営まれた集落の時期と重なるものとみられる。

図118-1～3の3点は欠損して元形状がわからないが、断面の形状から刀子とみられる。同図1・2に比べて同図3がやや大きい。

図118-4～7の4点は錆跡が著しいが、端部と断面の形状から角釘と考えられる。同図7の残りが良く、他のものと比べて幅広のものである。

図118-8は遺存状態が悪いが、中央が穿孔されており、金メッキが施されている。このような形状は、藤ノ木古墳などの末期古墳から出土する座金具に類例が求められ、元は六弁の蓮華文であったものと推測される。

図118-9は先端が尖っていたものとみられるが、錆跡が著しく元の形状はわからない。

図示した古銭のうち、図118-10が「永楽通寶」、同図11・12が「寛永通寶」の文字が読み取れる。

図118-13は、明治以降に鑄造された一銭である。

(大 波)

表3 竪穴住居跡一覧

No	グリッド	平面形	主軸方位	規模 (長軸×短軸m)	カマド 位置	備 考
S 1 01	O18-83-84-93-94	長方形	N33°E	5.0×3.7	北周壁	カマド掘形のみ
S 1 02	O18-53-54-63-64	略正方形	N22°E	2.8×2.5	北周壁	
S 1 03	O18-56-65-67-75-77	長方形	N45°E	6.8×5.6	西周壁	4主柱穴、部分的に貼床
S 1 04	O18-64-65-74-75	正方形	N12°W	5.3×5.2	-	4主柱穴?
S 1 05	O18-43-44-53-54	略正方形	N36°W	4.7×4.3	-	
S 1 06	O18-52-53-62-63	略正方形	N43°W	3.7×3.3	北周壁	
S 1 07	O18-72-73-82-83	長方形	N18°E	残4.5×3.9	北周壁	
S 1 08	O18-52	長方形	N20°E	残2.3×1.9	-	
S 1 09	O18-62-63-72-73	方形	N17°W	4.2×残3.7	-	
S 1 10	O19-13-14-22-24-32-34	正方形	N23°E	7.3×7.2	西周壁	住居掘形を確認
S 1 11	O18-84-94-95-O19-4	正方形?	N30°E	残3.4×3.4	-	
S 1 12	O19-44-45-54-55	正方形	N17°E	6.5×6.2	-	
S 1 13	O18-63-73-83	方形	N42°W	4.7×残4.5	-	
S 1 14	O19-14-15-24-25	正方形	N42°W	3.5×3.4	西周壁	カマド掘形のみ
S 1 15	O18-97, O19-6-7	正方形	N20°E	2.9×2.7	-	
S 1 16	O19-17-18-27-28-37-38	略正方形	N44°W	6.0×5.5	西周壁	
S 1 17	O19-25-27-35-37-46-47	正方形	N18°E	6.0×6.0	西周壁	
S 1 18	O18-96-97, O19-6-7	長方形	N34°E	3.6×2.9	-	
S 1 19	O18-46-47-56-57	長方形	N27°E	5.7×残2.9	西周壁	
S 1 20	O18-75-76-85-86	略正方形	N35°E	3.5×3.4	-	
S 1 21	O18-44-45	方形?	N27°E?	残1.5×残1.1	-	
S 1 22	O18-23-34	-	-	残3.0	-	住居断面のみ確認
S 1 23	O18-72-73-82-83	長方形	N10°W	残4.8×3.8	-	
S 1 24	O19-45-14-15-24-25-34-35	長方形	N 2° W	9.0×6.3	北周壁	カマド西脇に貯蔵穴
S 1 25	O19-45-46-55-56	正方形	N17°E	3.8×3.8	西周壁	住居掘形を確認
S 1 26	O18-86-88-97-98	略正方形	N28°W	4.8×4.6	西周壁	部分的に貼床、ビット4基
S 1 27	O19-34-44-45-54-55	略正方形	N30°E	5.6×5.3	西周壁	
S 1 28	O18-67-77	方形	N40°E	残4.3×4.2	北周壁	カマド礎道のみ
S 1 29	O19-56-57-66	方形	N43°E	5.5×残3.9	西周壁	
S 1 30	O19-6-7-16-17-26-27	略正方形	N10°E	6.3×5.6	北周壁	
S 1 31	O18-73-74-83-84	方形	N31°E	5.0×残3.1	-	
S 1 32	O19-6-15-17-26-27	長方形	N34°E	4.8×4.0	西周壁	
S 1 33	O19-35-45-47-56-57	略正方形	N14°E	7.1×6.3	-	
S 1 34	O18-67-76-77	方形	N40°E	残3.5×残0.5	-	
S 1 35	O18-76-77-86-87	略正方形	N25°E	3.2×3.0	-	炭化材出土
S 1 36	O19-57-66-67	方形	N38°E	4.1×残1.9	北周壁	
S 1 37	O19-25-26-35-45	長方形	N25°E	残7.3×6.3	-	
S 1 38	O18-95-96, O19-4-6	方形	N15°E	残4.5×4.2	北周壁	カマド礎道のみ
S 1 39	O19-15-16-25-27	方形	N26°E	残7.5×残4.3	-	
S 1 40	O18-94, O19-3-4	方形	N 6° E	残6.0×残2.7	西周壁	カマド礎道のみ
S 1 41	O18-85-86-95-96	方形	N 4° E	残6.2×4.0	-	
S 1 42	O19-6-15-16	方形	N40°E	残3.2×残1.7	-	

表4 土師器観察表(1)

神田 番号	写真 番号	遺構・ グリップ	層位	器種	量 量 (cm)			器 器 器		透 透 透	備 考	
					△埋定値(残存値)	口径	器高	底径	内 面			
									外 面			内 面
3101	63	S 101	f 1	杯	15.9	4.1	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	90%	破れ残部穿孔	
3102	62	S 101	カマド裏砂	小型鉢類	13.2	14.6	6.3	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	定形		
3103	63	S 101	カマド裏面	小笠	13.6	0.0	-	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	90%		
3104	63	S 101	f 1	小笠	-	(14.8)	6.1	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	60%	破れ面1箇所、本葉面	
7101	63	S 102	床面	小笠	9.6	3.0	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	80%		
7102	63	S 102	彫刻層上	杯	△13.0	4.6	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	ナデ	20%	非内面黒色処理	
7103	63	S 102	床面	杯	12.9	3.5	7.2	ヨコナデ	ヨコナデ	定形	彫刻層ナズリ、非内面黒色処理	
7104	63	S 102	床面	杯	10.0	3.9	5.2	ヨコナデ	ナデ	定形	彫刻層非赤塗り、非内面	
7105	63	S 102	床面	大笠	18.2	8.9	丸 底	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ・ナデ	2 赤キ・黒色処理	定形		
7106	63	S 102	床面	瓶	△16.4	24.3	△5.8	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ・ナデ	ナデ・1 赤キ	60%	側孔	
12101	64	S 103	層積土	杯	△12.3	5.3	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	20%		
12102	64	S 103	層積土	杯	△13.4	5.3	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	30%		
12103	64	S 103	f 1	杯	△16.3	(4.6)	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	2 赤キ・黒色処理	20%		
12104	64	S 103	層積土 f 1	杯	16.5	4.4	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	85%		
12105	64	S 103	層積土 f 4	杯	△17.0	4.9	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	25%		
12106	64	S 103	床面積上	杯	△17.4	4.9	丸 底	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	40%		
12107	64	S 103	f 1	杯	△17.5	(4.4)	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	30%		
12108	64	S 103	層積土	杯	16.8	3.8	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	50%		
12109	64	S 103	f 1	杯	△14.4	(3.7)	-	1 赤キ・ナズリ	1 赤キ	10%	非内面黒色処理	
12110	64	S 103	層積土	杯	△14.0	(2.2)	-	1 赤キ・ナズリ	2 赤キ	5%	非内面黒色処理	
12111	64	S 103	層積土	高杯	17.4	9.3	12.2	ヨコナデ・ナズリ・ナデ	1 赤キ・黒色処理・ハナメ・ナズリ	70%		
12112	64	S 103	床面積上	高杯	-	(5.1)	△0.3	ナズリ・ハナメ・ヨコナデ	ナズリ・ヨコナデ	15%		
12114	64	S 103	f 4 P 2	瓶	-	(6.7)	3.0	ナズリ・ナズリ	ヨコナデ・1 赤キ	25%	側孔	
12115	64	S 103	床面積上	小型鉢類	△12.2	13.9	6.0	ヨコナデ・ナズリ・ハナメ	ナデ	90%		
12116	64	S 103	f 4	小笠	△17.2	(10.7)	-	ヨコナデ・ハナメ	ハナメ・ヨコナデ	25%		
12117	64	S 103	層積土 f 1	小笠	△28.8	(12.4)	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	25%		
12118	64	S 103	カマド	甕	20.9	24.0	6.6	ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%		
12119	64	S 103	カマド左縁	甕	20.6	22.2	7.0	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	定形	赤塗り。破れ面1箇所	
13101	64	S 103	カマド左縁	甕	-	(3.7)	6.9	ハナメ	ナデ・ナズリ	30%	彫刻層1箇所	
13105	64	S 103	床面積上	埴輪	12.9	20.3	6.8	ヨコナデ・ハナメ	ハナメ・ヨコナデ・ナデ	定形	破れ面、経路穿孔1つ	
14101	64	S 103	f 1 f 4	大型鉢類	-	(19.0)	-	ハナメ	ナデ	40%		
14102	64	S 103	層積土 f 4	大型鉢類	16.4	(19.0)	8.0	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ	ヨコナデ・ハナメ・ナデ	30%	彫刻層ナズリ	
15102	83	S 103	床面積上	ミニコナデ	△3.9	4.3	3.8	彫ナデ・削ナズリ	彫ナデ・削ナズリ	90%	側面穿孔1つ	
15103	83	S 103	f 1	手捏	4.8	2.8	3.3	削ナデ	削ナデ	90%		
15104	83	S 103	f 1	手捏	△6.9	3.3	4.7	削ナデ	削ナデ	60%		
17101	65	S 104	層積土	小笠	-	(2.2)	丸 底	ナズリ	1 赤キ・黒色処理	定形		
17102	65	S 104	層積土	杯	-	(3.8)	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	40%		
17103	65	S 104	床面積上	大笠	15.6	7.0	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	定形		
17104	65	S 104	床面	高杯	15.4	11.8	10.5	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ・ナデ	2 赤キ・黒色処理、ヨコナデ	80%		
18101	65	S 105	f 1	高杯	-	(6.0)	△9.4	ナズリ・ヨコナデ	1 赤キ・黒色処理・ナズリ	25%		
20101	65	S 106	層積土	杯	△13.7	4.8	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	60%		
20102	65	S 106	層積土	杯	△16.0	(6.5)	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	30%		
20103	65	S 106	層積土	杯	13.4	6.7	5.9	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	経路穿孔、非内面黒色処理	
20104	65	S 106	床面	大笠	22.7	9.5	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	2 赤キ・黒色処理	90%		
20105	65	S 106	層積土	高杯	△13.1	10.0	8.9	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理・ナズリ	70%		
20106	65	S 106	床面	小笠	△15.0	14.0	6.4	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	60%	経路穿孔、ナズリ	
20107	65	S 106	床面積上	小笠	-	(19.9)	6.2	ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ナデ・1 赤キ	40%	彫刻層ナズリ	
20108	66	S 106	床面積上	甕	18.4	(15.6)	-	ヨコナデ・ハナメ	ハナメ・ナデ	60%		
21101	66	S 106	カマド裏面	甕	18.0	20.7	7.5	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	80%	経路穿孔、粘土層付	
21102	66	S 106	カマド f 1	甕	△16.4	26.8	6.3	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	80%	経路穿孔	
21103	66	S 107	カマド裏面	杯	11.3	4.2	7.3	ヨコナデ・ナズリ・ナデ	2 赤キ・黒色処理	定形	経路穿孔赤塗り	
21104	66	S 107	カマド裏面	甕	-	△10.1	8.4	ナズリ	ナデ	25%	彫刻層ナズリ	
24101	66	S 108	床面積上	高杯	-	(7.6)	11.4	ナズリ・ヨコナデ	1 赤キ・黒色処理・ナズリ・ナデ	30%		
24102	66	S 108	層積土	甕	△18.3	(9.8)	-	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ・ハナメ	10%		
26101	66	S 109	層積土	杯	△18.6	(4.3)	平底	ヨコナデ・ナデ	1 赤キ・黒色処理	10%		
26102	66	S 109	床面	瓶	△16.3	(10.9)	-	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	30%		
26103	66	S 109	床面積上	瓶	18.7	14.3	8.8	ヨコナデ・ハナメ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	80%	経路穿孔、粘土層付	
26104	66	S 109	床面	甕	△24.4	(18.9)	-	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	25%		
26105	66	S 110	彫刻層上	小笠	11.2	3.0	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	40%		
26106	66	S 110	彫刻層上	杯	12.6	4.2	丸 底	ヨコナデ・ナズリ	1 赤キ・黒色処理	20%		

第2編 北ノ脇道路

表5 土師器観察表(2)

神岡 番号	写真 番号	遺構・ グリット	層位	器種	法量 (cm)			器面調整		透存 値	備考
					口径	器高	底径	外面	内面		
29083	66	S 110	甕類土	杯	φ11.8	4.7	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ヨコナガ・原色処理	50%	
29084	66	S 110	甕類土	杯	14.8	4.0	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	60%	
29085	66	S 110	甕類土	杯	φ15.2	(4.2)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	50%	
29086		S 110	甕類土	杯	φ15.5	(3.6)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ヨコナガ・ミヅギ・原色処理	10%	
29087		S 110	甕類土	杯	φ15.2	(2.6)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	25%	
29088		S 110	甕類土	杯	φ15.0	(4.5)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	30%	
29089	66	S 110	甕類土	杯	15.2	(4.3)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	50%	
29090		S 110	甕類土	杯	φ18.0	4.6	丸 底	ヨコナガ・クズリ・クズリ	ミヅギ・原色処理	60%	
29091		S 110	甕類土	杯	-	(4.1)	丸 底	ヨコナガ	ミヅギ・原色処理	25%	甕部ハキメ
29092	66	S 110	甕類土	瓶	16.8	12.5	平底	ヨコナガ・クズリ	ヨコナガ・ミヅギ・原色処理	60%	
29093		S 110	甕類土	大甕杯	25.0	(9.5)	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	50%	
29094		S 110	甕類土	甕	37.6	(16.5)	φ16.8	ヨコナガ・クズリ	ヨコナガ・クズリ・ハラナガ	25%	
29095	83	S 110	甕類土	手取缶	5.2	3.6	丸 底	ヨコナガ・器中ナメ	ヨコナガ・器中ナメ	60%	
29096		S 111	甕類土	甕	-	(2.2)	φ11.1	ナメ	ナメ	5%	
29097	67	S 112	甕類土	杯	16.5	4.2	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	60%	甕部ハキメ
29098	67	S 112	甕類土	フ 1	φ13.5	15.9	7.4	ヨコナガ・ハラナガ・ミヅギ	ヨコナガ・ナメ	70%	甕部ハキメ
29099		S 113	甕類土	甕	-	(5.0)	φ8.2	ナメ	ナメ	5%	甕部ハキメ
29100		S 113	甕類土	杯	φ14.1	(4.1)	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	50%	
29101		S 113	甕類土	杯	φ14.1	(4.1)	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	25%	
29102	67	S 113	甕類土	大甕杯	φ19.6	3.9	丸 底	ヨコナガ・クズリ・クズリ	ミヅギ・原色処理	70%	
29103	67	S 113	甕類土	大甕杯	φ16.6	8.3	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	70%	
29104	67	S 113	甕類土	小甕	18.0	10.7	φ6.9	ヨコナガ・ハラナガ・クズリ	ヨコナガ・ハラナガ・クズリ・ミヅギ	60%	甕部ハキメ
29105	67	S 113	甕類土	小甕	15.6	9.6	6.8	ヨコナガ・ハラナメ	ヨコナガ・ナメ	80%	甕部ハキメ
29106		S 113	甕類土	小甕	-	(11.3)	6.8	ヨコナガ・ハラメ	ナメ	50%	甕部ハキメ
29107		S 113	甕類土	甕	φ20.1	20.4	5.7	ヨコナガ・ハラメ	ヨコナガ・ハラメ	55%	
29108		S 113	甕類土	甕	-	φ18.1	6.8	ナメ	ナメ	60%	甕部ハキメ
29109	68	S 113	甕類土	球脚甕	φ20.3	(15.0)	-	ヨコナガ・ナメ	ヨコナガ・クズリ・ナメ	25%	
29110	67	S 113	甕類土	瓶	19.1	24.1	8.2	ヨコナガ・クズリ・ミヅギ	ヨコナガ・ミヅギ・ナメ	60%	甕部ハキメ
29112	68	S 113	甕類土	甕	16.8	24.6	-	ヨコナガ・ハラメ・クズリ	ヨコナガ・ハラメ	70%	甕部ハキメ
29113		S 113	甕類土	大甕球脚甕	21.6	(26.0)	-	ヨコナガ・ナメ・ミヅギ	ミヅギ・ナメ	50%	
43001	68	S 113	甕類土	瓶	φ22.2	(26.0)	-	ヨコナガ・クズリ・クズリ	ヨコナガ・クズリ・クズリ・ミヅギ	80%	
43002		S 116	甕類土	杯	11.0	(3.8)	丸 底	ミヅギ・原色処理	ミヅギ・原色処理	10%	
43003	68	S 116	甕類土	杯	15.7	3.2	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	60%	
43004	68	S 116	甕類土	杯	14.6	5.2	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ヨコナガ・ハラナメ・原色処理	60%	
43005	69	S 116	甕類土	杯	14.1	6.0	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	60%	
43006	69	S 116	甕類土	小甕	13.0	8.1	7.8	ヨコナガ	60%	甕部ハキメ	
43007	69	S 116	甕類土	小甕	12.3	7.4	7.8	ヨコナガ	60%	甕部ハキメ	
43008	69	S 116	甕類土	球脚甕	φ19.6	(18.1)	-	ヨコナガ・ハラメ	ヨコナガ・ナメ	20%	
47001	69	S 117	甕類土	杯	13.9	3.4	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	80%	
47002		S 117	甕類土	大甕杯	φ17.8	(7.7)	丸 底	ヨコナガ・クズリ・クズリ	ヨコナガ・ナメ・原色処理	50%	
47003	69	S 117	甕類土	杯	14.2	5.6	5.6	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	75%	甕部ハキメ
47004		S 117	フ 1	杯	14.8	(4.8)	-	ヨコナガ・器中ハラナメ	ミヅギ・原色処理	20%	
47005		S 117	フ 1	杯	φ15.5	4.0	φ8.5	ヨコナガ	ミヅギ・原色処理	60%	甕部ハキメ
48001	69	S 118	甕類土	瓶	6.5	6.5	5.7	ヨコナガ・ハラメ・ナメ	ヨコナガ・ナメ	60%	口縁付取付品 2、甕部ハキメ
48002	70	S 118	甕類土	小甕球脚甕	-	(14.0)	5.7	ヨコナガ・ナメ	ヨコナガ・ナメ	80%	
48003		S 118	甕類土	球脚甕	φ15.8	(9.2)	-	ヨコナガ・ハラメ・ナメ・ミヅギ	ナメ	10%	
49001	70	S 119	フ 1	杯	φ17.0	(4.7)	丸 底	ナメ	ナメ	20%	
49004		S 119	甕類土	瓶	-	(16.7)	9.1	ハラメ	ナメ	50%	甕部ハキメ
50005	83	S 119	フ 2	手取缶	φ5.2	2.3	φ4.2	器中ナメ・器中ナメ	器中ナメ	75%	
50006	70	S 121	フ 1	甕	φ27.1	31.8	7.5	ヨコナガ・ハラメ	ヨコナガ・ハラメ・ハラナメ	60%	甕部ハキメ
53001	70	S 122	フ 1	高杯	13.7	6.6	9.6	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理・ナメ	75%	
53002	70	S 122	フ 1	甕	18.7	27.8	丸 底	ヨコナガ・ハラメ	ヨコナガ・ハラメ・ナメ	60%	
53003	70	S 122	フ 1	甕	φ19.0	24.5	9.0	ヨコナガ・ハラメ	ヨコナガ・ナメ	70%	甕部ハキメ、口縁付
53004		S 123	甕類土	杯	φ7.1	(3.3)	平底	ヨコナガ・クズリ・クズリ	ミヅギ・原色処理	10%	
53005		S 123	甕類土	杯	-	(5.5)	3.8	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	50%	
53006	70	S 123	甕類土	甕	φ16.2	25.3	丸 底	ヨコナガ・ナメ	ヨコナガ・ナメ	60%	甕部ハキメ
53007		S 124	甕類土	杯	12.1	3.6	平底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	25%	
53008		S 124	甕類土	杯	φ14.4	(13.7)	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	20%	
53009	71	S 124	ナメド内	杯	16.6	5.5	丸 底	ヨコナガ・クズリ	ミヅギ・原色処理	80%	

表6 土師器観察表(3)

神田 番号	写真 番号	遺構・ グリップ	層位	器種	量 量 (cm)			器 面 調 整		透 孔 値	備 考
					△埋定値 (残存値)	口径	器高	底径	外 面		
5084	71	S 124	甕形埴土	大型杯	17.4	(9.0)	丸 底	滑コテ・ハケメ・ナズリ	滑コテ・ナズ	50%	内面顔彩色処理
5085	71	S 124	瓦輪土	杯	△11.2	(6.6)	丸 底	滑コテ・ナズリ・ミヤキ	滑コテ・ナズ	15%	
5087	71	S 124	赤ヤリ西	高杯	20.0	14.0	10.2	滑コテ・ナズリ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	30%	1層赤土
5088	71	S 124	瓦輪土	壺	16.1	21.7	8.6	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズ	85%	顔彩色処理
5089	71	S 124	赤ヤリ西	壺	19.4	27.4	7.0	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	50%	
50810		S 124	赤ヤリ西	埴製壺	△16.2	(7.0)	-	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	10%	
50811	71	S 124	貯蔵穴	大型埴製壺	△21.3	29.3	8.4	ハケメ		60%	底縁土層付
50812	83	S 124	甕形埴土	子爵盆	△5.4	2.6	3.2	指ナズ・磨ヤキ	磨ヤキ・ミヤキ・顔彩色処理	60%	
6100	72	S 125	床面	杯	9.2	3.6	5.3	ミヤキ・顔彩色処理	ミヤキ・顔彩色処理	50%	
6101	72	S 125	埴土	大型杯	△19.6	(5.5)	丸 底	滑コテ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	40%	
6102	71	S 125	床面	杯	15.2	4.1	8.8	滑コテ・ナズリ・顔彩色処理	ミヤキ・顔彩色処理	90%	底縁縁付・ナズリ
6103	74	S 125	f 1	高杯	15.2	(6.0)	-	滑コテ・ハケメ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	40%	
6105	72	S 125	床面	碗	11.3	7.8	8.8	滑コテ・ナズリ	ナズ	85%	底縁ナズリ
6106	72	S 125	赤ヤリ西	瓶	19.3	16.4	7.2	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ミヤキ・ナズリ・ナズ	50%	底縁土層付
6401	72	S 126	床面直上	杯	18.0	4.5	丸 底	滑コテ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	70%	
6402	72	S 126	甕形壺	杯	16.2	5.5	丸 底	滑コテ・ナズリ	滑コテ・ナズ	85%	
6403		S 126	甕形壺	杯	△17.8	(4.8)	丸 底	滑コテ・ハケメ・ナズ	滑コテ・ナズ	35%	内面顔彩色処理
6404	72	S 126	甕形壺	小壺	△14.3	(7.8)	7.1	滑コテ・ナズ	滑コテ・ナズ	65%	内面顔彩色処理
6405	72	S 126	甕形壺	壺	17.4	25.8	4.8	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズリ・ナズ	50%	内面顔彩色処理
6406	72	S 126	f 1	壺	△16.6	27.6	7.3	滑コテ・ナズ・ナズ	滑コテ・ハケメ	60%	内面顔彩色処理
6407		S 126	床面直上	壺	-	(7.7)	7.3	ハケメ・ナズ	ナズ	20%	内面顔彩色処理
6501	72	S 126	床面直上	壺	-	(24.7)	7.8	滑コテ・ハケメ	ナズ	60%	底縁土層付
6502	71	S 127	甕輪土	杯	△14.9	(3.4)	平底化	滑コテ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	25%	
6802		S 127	f 1	杯	△13.2	(4.8)	丸 底	滑コテ・ナズ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	15%	
6803	72	S 127	床面直上	杯	14.8	5.3	丸 底	滑コテ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	55%	
6804	72	S 127	床面直上	杯	15.0	5.5	丸 底	滑コテ・ナズ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	50%	
6805	72	S 127	甕形埴土	杯	14.0	5.4	丸 底	滑コテ・ナズ・ナズ	滑コテ・ハケメ	75%	
6806	6	S 127	甕輪土	杯	△17.5	(4.1)	-	滑コテ・ナズ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	20%	
6807	71	S 127	床面	小壺	8.9	3.3	5.1	滑コテ・ナズ・ナズ	ナズ	50%	底縁土層付
6808	72	S 127	甕形埴土	小壺	△10.8	4.0	6.0	滑コテ・ナズ	ナズ	45%	底縁土層付
68012	72	S 127	甕輪土	小壺	△18.9	10.6	8.0	滑コテ・ナズ	滑コテ・ナズ	60%	内面顔彩色処理
68013	72	S 127	床面直上	小壺	15.8	16.7	9.0	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	50%	
68014	74	S 127	床面直上	小壺	18.3	19.0	8.1	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズ	50%	内面顔彩色処理
6901	72	S 127	甕輪土	小壺	△19.7	13.8	8.2	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	40%	底縁土層付
6902	74	S 127	床面直上	壺	16.9	22.1	6.6	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ハケメ	50%	底縁土層付
6903	74	S 127	床面直上	壺	23.0	17.9	7.0	滑コテ・ナズ	滑コテ・ナズ	75%	底縁土層付
7201	71	S 128	甕輪土	壺	△20.1	(12.2)	-	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	5%	
7202	71	S 129	甕形埴土	杯	△15.3	4.4	丸 底	滑コテ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	40%	
7203	74	S 129	甕輪土	杯	△15.7	4.4	丸 底	滑コテ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	40%	
7204	74	S 129	甕輪土	杯	△14.6	5.1	丸 底	滑コテ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	45%	
7205	74	S 129	甕形埴土	小壺	△13.9	(7.4)	-	滑コテ・ナズ	滑コテ・ナズ	60%	底縁土層付
7401		S 129	甕輪土	壺	-	(10.9)	6.6	ナズ	ナズ	20%	
7402	71	S 130	赤ヤリ右輪	壺	△20.4	(11.1)	-	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズ	30%	
7403		S 130	赤ヤリ右輪	壺	△17.8	(13.2)	-	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	10%	
7404		S 130	甕輪土	壺	△18.4	(15.2)	-	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズ	25%	
7501	74	S 131	床面直上	杯	16.5	8.0	5.7	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	50%	
7502	74	S 131	床面直上	瓶	21.4	23.8	9.3	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ハケメ・ナズリ・ナズ	90%	底縁土層付
7601	72	S 132	床面	杯	16.7	4.1	丸 底	滑コテ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	50%	
7602	72	S 132	床面	杯	△17.4	3.1	平底化	滑コテ・ナズリ	ミヤキ	60%	内面顔彩色処理
7603	72	S 132	床面	小壺	12.4	9.8	8.6	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	50%	底縁土層付
7604	71	S 133	甕輪土	杯	△12.7	(4.6)	丸 底	滑コテ・ナズ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	15%	
7605	72	S 133	床面	杯	△16.6	4.6	8.8	滑コテ・ナズリ	ミヤキ・顔彩色処理	60%	
7606	72	S 133	床面	杯	19.1	5.7	丸 底	滑コテ・ハケメ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	90%	
7607	74	S 133	床面	杯	△16.9	(6.6)	丸 底	滑コテ・ナズリ・ナズ	ミヤキ・顔彩色処理	10%	
7900	72	S 133	床面直上	小壺	△12.9	11.5	8.5	滑コテ・ハケメ	滑コテ・ナズ	65%	底縁土層付
7906	82	S 133	床面	子爵盆	△2.2	2.6	丸 底	指ナズ	ナズ	60%	
8001	72	S 134	甕輪土	小壺	△18.3	10.8	△6.1	滑コテ・ハケメ・ナズ	滑コテ・ナズ	45%	底縁土層付
8002		S 134	甕輪土	小壺	-	(9.3)	8.6	ハケメ	ナズ	25%	底縁土層付
8101	71	S 135	甕輪土	小壺	11.6	6.4	6.1	滑コテ・ハケメ・ナズ	ナズ	70%	
8202		S 136	甕輪土	壺	-	(6.8)	-	滑コテ・ハケメ	ハケメ・ナズ	5%	

第2編 北ノ脇道路

表7 土師器観察表(4)

神岡 番号	写真 番号	遺構・ グリット	層位	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存 値	備考
					口径	器高	底径	外面	内面		
948R2	75	S 1-37	床面	甕	△19.8	24.0	6.9	ヨコナデ・ハナメ	ハケメ・ハラナデ	65%	瓦葺跡1層付
948R2	75	S 1-37	床面	甕	△22.8	24.8	5.5	ヨコナデ・ハナメ	ハナメ・ナナデ	60%	無風式
948R1	75	S 1-38	埋積土	杯	△16.8	5.8	4.8	ヨコナデ・ハナメ・ナナデ・クズリ	ナナデ	70%	1層半・黒色化層
948R2	75	S 1-38	埋積埋土	大惣椀	△21.3	15.5	4.5	1層半・黒色化層・ハナメ	1層半・黒色化層	15%	
948R3	75	S 1-38	埋積埋土	杯	△14.4	15.3	4.8	ヨコナデ・ナナデ・クズリ	1層半・黒色化層	25%	
948R1	75	S 1-39	床面	大惣椀	△18.8	14.8	4.8	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	甕葺
948R2	63	S 1-39	床面	ミニチュア	-	(4.5)	4.8	器ナデ・指ササエ	器ナデ・指ササエ	90%	
948R1	76	S 1-41	埋積土	杯	15.8	3.2	平底化	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	65%	
948R2	76	S 1-41	床面	杯	16.0	4.3	丸底	ヨコナデ・ナナデ・クズリ	1層半・黒色化層	90%	
948R3	76	S 1-41	埋積土	杯	15.8	5.3	平底化	ヨコナデ	1層半・黒色化層	60%	
948R4	76	S 1-41	埋積土	杯	19.2	6.4	丸底	ヨコナデ・ハナメ・クズリ	1層半・黒色化層	60%	
948R6	76	S 1-41	埋積土	高杯	15.8	16.4	-	ヨコナデ・ハナメ・ハナメ	1層半・黒色・ナナデ・ヨコナデ	60%	
948R7	76	S 1-41	床面	小惣椀	17.6	10.2	6.8	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	60%	葺丸式 底基本甕葺
948R8	76	S 1-41	埋積土	小惣椀	△19.9	15.7	7.4	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	10%	瓦葺跡1層付
948R9	76	S 1-41	床面	小惣椀	14.8	13.0	5.6	ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	80%	瓦葺跡1層付、内面縁付着
948R10	76	S 1-41	埋積土	甕	21.6	(20.3)	-	ヨコナデ・ナナデ・ハナメ	ヨコナデ・ハナメ・ナナデ	30%	
948R1	76	S 1-41	埋積土	甕	19.2	(18.3)	-	ヨコナデ・ナナデ・ハナメ	ハナメ・ナナデ	15%	
948R2	76	S 1-41	埋積土	埋積埋土	-	(16.0)	8.3	ハナメ	ナナデ	15%	
948R3	76	S 1-41	埋積土	埋積埋土	-	(13.0)	△8.0	ハナメ	ナナデ	20%	
948R4	83	S 1-41	埋積土	手取皿	5.4	3.6	3.4	器ナデ・指ササエ	器ナデ	90%	
948R5	83	S 1-41	床面	手取皿	7.2	3.6	5.6	器ナデ・指ササエ	器ナデ	60%	
948R6	83	S 1-41	埋積土	手取皿	10.1	5.5	4.4	ヨコナデ・ナナデ・ハナメ	ナナデ・黒色化層	60%	
948R1	77	S 1-42	埋積土	杯	△15.5	4.1	平底化	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R2	77	S 1-42	埋積土	埋積埋土	-	(7.4)	△6.5	ハナメ・クズリ	ナナデ・ナナデ	10%	
948R1	77	S K01	埋積土	小惣椀	-	(14.1)	5.8	ヨコナデ・ハナメ・クズリ	ヨコナデ・ナナデ	75%	内面縁付着
948R2	76	S K01	手取	皿	11.5	22.2	△2.7	ヨコナデ・クズリ・ハナメ	ヨコナデ・ナナデ	50%	無風式
948R1	77	O19-17-1	埋積土	大惣椀	△18.9	10.1	6.0	クズリ	1層半・黒色化層	50%	
948R1	77	O19-14	1層	杯	16.0	3.1	丸底	ヨコナデ・ハナメ・クズリ	2層半・黒色化層	50%	
948R2	77	O19-46	1層	杯	△15.0	14.8	丸底	ヨコナデ・ハナメ・クズリ	1層半・黒色化層	50%	
948R3	77	O19	1層	杯	△16.6	5.4	丸底	ヨコナデ・クズリ	3層半・黒色化層	35%	
948R4	77	O18-84	1層	杯	△15.6	5.3	丸底	ヨコナデ・ナナデ	1層半	25%	漆内面黒色化層
948R5	77	O18-55	1層	杯	17.5	5.4	丸底	ヨコナデ・ハナメ・クズリ	1層半・黒色化層	65%	瓦葺中央葺丸、内面縁付着
948R6	77	O18-52	1層	杯	△15.8	14.3	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	30%	
948R7	77	O19	1層	杯	△14.8	14.2	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	25%	
948R8	77	O19-56	1層	杯	△13.1	4.3	丸底	ヨコナデ・クズリ・クズリ	2層半・黒色化層	55%	
948R9	77	O18-57	1層	杯	△17.0	14.7	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	25%	
948R10	77	O18-84	1層	杯	△15.9	14.0	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R11	77	O18-95	1層	杯	△17.6	13.9	丸底	ヨコナデ・1層半・クズリ	1層半・黒色化層	35%	
948R12	77	O18	1層	大惣椀	△24.4	7.1	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	65%	
948R1	77	O18-67	1層	杯	△15.8	14.1	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	15%	
948R2	77	O19-24	1層	杯	△15.4	14.1	丸底	ヨコナデ・クズリ・クズリ	1層半・黒色化層	50%	
948R3	77	O18-49	1層	杯	15.8	14.0	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	70%	
948R4	77	O18	1層	杯	△17.7	14.5	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	25%	
948R5	77	O19-46	1層	杯	△17.4	14.1	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R6	77	O18	1層	杯	△16.9	15.5	丸底	ヨコナデ・1層半・ナナデ	1層半・黒色化層	50%	
948R7	77	O18	1層	杯	△15.4	15.1	丸底	ヨコナデ・1層半・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R8	77	O18-56	1層	杯	△17.3	5.2	平底化	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	60%	
948R9	77	O18	1層	杯	△12.8	13.4	丸底	ヨコナデ・ナナデ・クズリ	1層半・黒色化層	15%	
948R10	77	O18	1層	杯	△12.2	13.7	平底化	ヨコナデ・ナナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R11	77	O18	1層	杯	△14.4	2.0	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	35%	
948R12	77	O19-17	1層	杯	△16.0	17.0	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R13	77	O18	1層	杯	△16.5	15.7	丸底	ヨコナデ・ナナデ	1層半・黒色化層	20%	
948R14	77	O18-63	1層	杯	△12.9	5.1	丸底	ヨコナデ・ナナデ	1層半・黒色化層	60%	
948R15	77	O19-14	1層	大惣椀	△20.0	16.7	-	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R1	77	O18-85	1層	杯	△15.5	14.1	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	45%	
948R2	77	O18-85	1層	杯	16.0	5.5	丸底	ヨコナデ・ハナメ	1層半・黒色化層	60%	
948R3	77	O18-49	1層	杯	16.8	4.1	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R4	77	O19-15	1層	杯	△16.1	13.4	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半・黒色化層	20%	
948R5	77	O19-24	1層	杯	△16.2	3.0	丸底	ヨコナデ・クズリ	1層半	10%	漆内面黒色化層
948R6	77	O18-65	1層	杯	△15.2	13.7	丸底	ヨコナデ・ハナメ	1層半・黒色化層	20%	

表8 土師器観察表(5)

神田 番号	写真 番号	遺構・ グッド	層位	器種	量 量 (cm)			器 面 調 整		遺 存 値	備 考
					△埋定値(残存値)	口徑	器高	底径	外 面		
10404 7		O19-5	1.B	小型杯	11.4	3.6		丸 底	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	1.5赤・黒色焼埋	20%
10404 8	77	O18	1.B	小型杯	10.9	3.2		平底	ヨコナデ・ナデ	1.5赤・黒色焼埋	80%
10404 9		O19-5	1.B	杯	△12.7	△3.6		丸 底	ヨコナデ・ナデ	1.5赤・黒色焼埋	30%
10404 10		O19	1.B	杯	△14.8	△4.6		丸 底	ヨコナデ・ナデ	1.5赤・黒色焼埋	30%
10404 11		O19-18	1.B	杯	△17.0	6.2		丸 底	ヨコナデ・ナデ	1.5赤・黒色焼埋	60%
10404 12		O19-17	1.B	杯	△15.2	4.1		丸 底	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	1.5赤・黒色焼埋	25%
10404 13		O18-96	1.B	杯	△16.9	△4.4		丸 底	ケズリ	1.5赤・黒色焼埋	20%
10404 14	78	O19	1.B	杯	14.8	5.3		丸 底	1.5赤	1.5赤・黒色焼埋	85%
10404 15		O18-69	1.B	杯	△14.2	△4.1		丸 底	1.5赤・ナデ	1.5赤・黒色焼埋	20%
10404 1		O19-45	1.B	杯	△14.9	4.5		平底	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・1.5赤・黒色焼埋	40%
10404 2		黒瀬南平	1.B	杯	△12.9	4.3		平底	ヨコナデ・ナデ	ナデ	25%
10404 3		O18-74	1.B	杯	-	△3.7	5.1		ヨコナデ・ナデ	ナデ	40%
10404 4	78	黒瀬	1.B	杯	△14.2	△3.7		丸 底	ヨコナデ	ヨコナデ	15%
10404 5		O19-6	1.B	裏のつまみ	-	△3.0	-		1.5赤・黒色焼埋	1.5赤・黒色焼埋	10%
10404 6		O18	1.B	肥子付柄	8.1	9.5		丸 底	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ナデ	80%
10404 8		O19	1.B	高杯	-	△10.4	△11.1		ヨコナデ・1.5赤・ナデ・ハナメ	1.5赤・黒色・ナデ・ナデ・ナデ	50%
10404 9	78	O18-79	1.B	高杯	11.5	6.1	7.5		ヨコナデ・ナデ	1.5赤・黒色・ヨコナデ・ナデ	65%
10404 10	78	O18	1.B	高杯	16.1	7.5	9.8		ヨコナデ・1.5赤・ナデ	1.5赤・黒色焼埋・ヨコナデ・ナデ	60%
10404 11		O18-86	1.B	高杯	△14.6	9.2	9.4		ヨコナデ・ナデ・ハナメ	1.5赤・黒色焼埋	40%
10404 12		O18-73	1.B	高杯	-	△4.7	-		ヨコナデ・ナデ・ハナメ	1.5赤・黒色焼埋・ハナメ	20%
10404 13		O18-57	1.B	高杯	-	△4.5	9.4		ヨコナデ・ハナメ	1.5赤・黒色焼埋・ヨコナデ・ナデ	20%
10404 1	78	O18	1.B	小型縁取罎	△13.1	△13.6	-		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・1.5赤	25%
10404 2	78	O18	1.B	小型縁取罎	12.3	15.1	8.7		ヨコナデ・罎ナデ	ヨコナデ・ナデ	定形
10404 3	78	O18-55	1.B	小型罎	△11.8	11.4	5.0		ヨコナデ・ナデ・ハナメ	ナデ	90%
10404 4		O18-54	1.B	小型罎	△10.3	4.7	△6.1		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%
10404 5		O18	1.B	小型罎	△12.0	6.7	△6.2		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	25%
10404 6		O19-24	1.B	小型罎	△13.4	8.1	△7.4		ナデ	ナデ	20%
10404 7	79	O18	1.B	小型罎	12.5	10.6	6.8		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	定形
10404 8	78	O19-7	1.B	小型罎	14.4	11.2	7.3		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	定形
10404 1	79	O19-45	1.B	小型罎	18.6	8.2	丸 底		ヨコナデ・ハナメ・1.5赤・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%
10404 2	79	O19-5	1.B	小型罎	19.1	11.2	8.2		ヨコナデ・1.5赤	1.5赤・黒色焼埋	90%
10404 3		O19-45	1.B	小型罎	△16.0	7.1	△6.9		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	25%
10404 4	79	O18-57	1.B	小型罎	17.3	11.9	6.1		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%
10404 5	79	O18	1.B	小型罎	18.8	11.6	7.7		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	定形
10404 6	79	O19	1.B	小型罎	14.8	17.0	7.8		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%
10404 7	79	O18	1.B	小型罎	14.4	16.6	7.6		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	定形
10404 1		O18	1.B	小型罎	△16.2	13.6	7.2		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	60%
10404 2		O19	1.B	小型罎	△15.6	△14.3	△6.0		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%
10404 3		O18-57	1.B	小型罎	-	△10.3	6.8		ハナメ・ナデ	ナデ	15%
10404 4		O19-47	1.B	小型罎	△12.6	14.3	5.1		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ナデ	60%
10404 5		O18-47	1.B	小型罎	-	△9.8	6.2		ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%
10404 6		O19-5	1.L	小型罎	-	△4.8	5.9		ハナメ・ナデ	ナデ	10%
10404 7		O18	1.B	罎	△20.5	△13.9	-		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ハナメ・ナデ	25%
10404 8		P18-90	1.L	罎	△16.8	△10.5	-		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	20%
10404 1		O18-57	1.B	罎	-	△18.9	6.4		ハナメ・ケズリ	ナデ	40%
10404 2		O18-84	1.B	瓶	22.9	29.2	8.7		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ハナメ・ナデ・ナデ	50%
10404 3		黒瀬南平	1.B	小型瓶	△11.0	11.0	8.3		ヨコナデ・ナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ナデ	60%
10404 4	79	O18	1.B	小型瓶	17.4	14.5	6.1		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ハナメ・ナデ	定形
10404 5	80	O19-5	1.B	瓶	△22.2	26.7	8.8		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・1.5赤・ナデ	60%
10404 6	80	O19-54		罎	19.8	△26.5	-		ヨコナデ・ハナメ	ヨコナデ・ナデ	65%
11104 1		O18-67	1.B	ミコチユア	-	△4.3	-		ヨコナデ・ハナメ・ナデ	ナデ	40%
11104 2		O19-16	1.B	ミコチユア	-	△4.7	-		ハナメ	ナデ	30%
11104 3		O18-65	1.B	ミコチユア	-	△4.5	丸 底		ヨコナデ・ハナメ	罎ナデ	50%
11104 4	83	O19-32	1.B	子控石	-	△3.7	4.5		罎ナデ・罎ナデ	罎ナデ・罎ナデ	30%
11104 5	83	O19-36	1.B	子控石	4.5	2.7	3.2		罎ナデ	罎ナデ	定形
11104 6		O18-96	1.B	子控石	3.9	2.5	3.2		罎ナデ	罎ナデ	60%
11104 7		O19-9	1.B	子控石	△5.2	2.8	丸 底		罎ナデ	罎ナデ	40%
11104 8		O19-25	1.B	子控石	-	△3.2	丸 底		罎ナデ	罎ナデ	45%
11104 9		O19-18	1.B	子控石	△5.4	2.2	4.2		罎ナデ	罎ナデ	25%

第2編 北ノ脇道路

表9 土師器観察表(6)

神岡 番号	写真 番号	遺構・ グロット	層位	器種	法量 (cm)			器面調整		遺 存 値	備 考
					口径	器高	底径	外 面	内 面		
113910		東照土平	L Ⅱ	手捏ね	△6.4	3.0	△5.4	磨子デ	磨子デ	60%	
113911		O19	L Ⅱ	手捏ね	△6.8	1.8	△5.5	磨子デ・擦子サエ	磨子デ	50%	
113912		O18-64	L Ⅱ	手捏ね	△9.0	3.3	3.4	磨子デ	磨子デ	50%	
113913		O18-57	L Ⅱ	小骨棒	△10.4	2.9	△5.9	サデ	サデ	60%	底面本底面
113914		O19-66	L Ⅱ	杯	△12.9	4.0	△6.3	ロタロサデ・手捏ヘラサデ	1サキ・黒色処理	25%	
113915	80	O18-98	L Ⅱ	杯	△5.8	4.9	8.7	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	1サキ・黒色処理	60%	
113916	60	O18-85	L Ⅱ	杯	11.3	3.9	7.0	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	黒色処理	60%	底面磨細面有り
113917		O19-25	L Ⅱ	杯	△13.8	4.7	△7.4	ロタロサデ	1サキ・黒色処理	25%	底面磨細面有り
113918	80	O18-87	L Ⅰ	杯	13.5	4.7	6.4	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	1サキ・黒色処理	60%	磨子
113919	60	O18-90	L Ⅱ	杯	-	(1.7)	△5.7	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	1サキ・黒色処理	15%	磨子
113927		O19-19	L Ⅱ	杯	-	(2.5)	△6.8	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	1サキ・黒色処理	5%	磨子・磨細
113928		O18-96	L Ⅱ中	杯	-	-	-	ロタロサデ	1サキ・黒色処理	60%	磨子・底面磨細面有り
113929		O19-45	L Ⅱ	杯	-	-	-	磨子	磨子		磨子
113930		O19-6	覆瓦	杯	-	-	-	磨子	磨子		磨子

表10 須恵器観察表(1)

神岡 番号	写真 番号	遺構・ グロット	層位	器種	法量 (cm)			器面調整		遺 存 値	備 考
					口径	器高	底径	外 面	内 面		
3005		S 101	埴輪土	壺	-	-	-	平行サキ	磨子		
300510		S 103	埴輪土	高杯	-	(4.7)	-	ロタロサデ・洗炭文	ロタロサデ	5%	4先通かし
300511		S 103	埴輪土	壺	-	-	-	サキメ・平行サキ	同心文アタメ	60%	磨子
300511		S 110	埴輪土	杯	-	(2.7)	7.9	ロタロサデ・手捏ヘラサデ	ロタロサデ	30%	底面磨細面有り
30052		S 110	埴輪土	杯	-	(3.0)	8.0	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	25%	底面磨細ヘラサデ
30053	66	S 110	埴輪土	高台杯	-	(7.3)	△10.0	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	20%	底面磨細面有り
30054	66	S 110	埴輪土	壺	△18.4	(8.8)	-	ロタロサデ・平行サキ	ロタロサデ	10%	
30055		S 110	埴輪土	壺	△20.2	(6.1)	-	ロタロサデ・平行サキ	ロタロサデ	5%	
30056		S 110	埴輪土	壺	△18.8	(5.3)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
30057		S 110	埴輪土	壺	21.0	(5.1)	-	ロタロサデ・平行サキ	ロタロサデ	10%	
30058		S 110	埴輪土	壺	-	-	-	サキメ	同心文アタメ	60%	磨子
30059		S 110	埴輪土	壺	-	-	-	平行サキ	ロタロサデ	60%	磨子
30060		S 110	埴輪土	壺	-	-	-	平行サキ	アタメ	60%	磨子
30062		S 111	埴輪土	丸型壺	-	-	-	洗炭・洗炭文	ロタロサデ	60%	磨子
30064		S 113	埴輪土	丸型壺	-	-	-	平行サキ	アタメ	60%	磨子
4001		S 116	埴輪土	高台杯	△13.8	3.0	△9.4	ロタロサデ	ロタロサデ	30%	
4002		S 116	埴輪土	高台杯	-	(4.0)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
4003	69	S 116	埴輪土	高台杯	-	(11.7)	9.9	ロタロサデ	ロタロサデ	25%	底面磨細 覆瓦面?
4004	69	S 116	埴輪土	鉢	△19.3	(11.1)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	10%	
4706	69	S 117	サマド内	杯	△16.5	4.2	8.0	ロタロサデ・手捏ヘラサデ	ロタロサデ	70%	底面磨細面有り?
47067		S 117	埴輪土	高台杯	-	(2.4)	△9.2	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
50002		S 119	埴輪土	杯	-	(4.0)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	60%	
50003	79	S 119	F 1	智恵瓶	△9.9	(7.3)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	30%	
5001		S 120	埴輪土	壺	-	-	-	サキメ	磨子		磨子
5006		S 124	埴輪土	杯	△13.5	4.2	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	15%	
50089		S 127	埴輪土	杯	△10.8	(2.4)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	5%	
50090		S 127	埴輪土	高台杯	-	(3.3)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
50091		S 127	埴輪土	高台杯	-	(2.5)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
50094		S 127	埴輪土	高台杯	-	-	-	平行サキ	アタメ	60%	磨子
50095	76	S 131	埴輪土	杯	13.2	4.5	丸 底	ロタロサデ・手捏ヘラサデ	ロタロサデ	20%	
113921		59-5908	L Ⅰ・Ⅱ	杯	-	(2.7)	丸 底	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	60%	
113922	80	O18-94	L Ⅰ	杯	△12.4	3.3	丸 底	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	75%	
113923		O19-8	L Ⅱ	杯	-	(2.4)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	5%	
113924		東照	L Ⅱ	杯	△11.9	(2.5)	-	ロタロサデ	ロタロサデ	15%	
113925		O19-46	L Ⅱ	杯	△17.3	2.2	-	ロタロサデ	ロタロサデ	15%	
113926		O19-19	L Ⅱ	杯	18.9	(2.1)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	30%	
113927		O18-89	L Ⅱ	杯	-	(2.7)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	30%	
113928		O19-57	L Ⅱ	杯	-	(2.9)	-	ロタロサデ・磨細ヘラサデ	ロタロサデ	30%	

表11 須恵器観察表(2)

採回 番号	写真 番号	遺構・ グリッド	層位	器種	法 量 (cm)			器 面 調 整		遺 存 値	備 考
					△埋定値(残存値)	口徑	器高	底径	外 面		
113図9		東側北半	L.Ⅱ	杯身	△11.0	(2.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	15%	
113図10		東側北半	L.Ⅱ	杯身	△16.2	(3.5)	-	ロクロナデ・手持ちヘラナズリ	ロクロナデ	10%	
113図11		O19-17	L.Ⅱ	高台杯	-	(2.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
113図12		O18-47	L.Ⅱ	高台杯	△16.1	(3.9)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
113図13		O19-38	L.Ⅱ	高台杯	-	(2.7)	△6.2	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	ロクロナデ	10%	底面割れ・糸取り
113図14		O18-69	L.Ⅱ	杯	-	(1.6)	△6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	20%	
113図15		O19-46	L.Ⅱ	杯	-	(2.1)	△6.4	ロクロナデ・回転ヘラナズリ	ロクロナデ	5%	底面割れヘラナズリ
113図16		O18-90	L.Ⅱ	杯	-	(2.7)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	30%	底面割れヘラナズリ
113図17		O19-45	L.Ⅱ	高台杯	-	(1.4)	△11.4	ロクロナデ	ロクロナデ	15%	
114図1		O18-90	L.Ⅱ	高台瓶	-	(5.4)	△6.3	ロクロナデ	ロクロナデ	10%	
114図2		O18	L.Ⅱ	高台瓶	-	(5.4)	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	20%	磨削
114図3		O18-90	L.Ⅱ	短頸瓶	△5.2	(4.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
114図4		O9-40-30	L.Ⅱ	短頸瓶	△11.0	(2.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
114図5		O18-54	L.Ⅱ	小壺形	-	(4.9)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
114図6	80	O8-30-30	L.Ⅱ	壺	△13.5	(16.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	50%	
114図7	80	O8-31-30	L.Ⅱ	小壺形	△11.6	12.6	6.8	ロクロナデ・ネリメ・回転ヘラナズリ	ロクロナデ・ヘラナズリ	70%	
114図8		O8-31-30	L.Ⅱ	瓶類	-	(16.5)	9.0	ロクロナデ・手持ちヘラナズリ	ロクロナデ・ヘラナズリ	40%	
114図9		O19-26	L.Ⅱ	壺類	-	(3.8)	-	ロクロナデ・底状文	ロクロナデ	5%	
114図10		O19-26	L.Ⅱ	壺類	-	(3.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
114図11		O8-30-30	L.Ⅱ	壺類	△34.0	(14.0)	-	ロクロナデ・平行タタキ	ロクロナデ・タタキメ	5%	
115図1	81	O8-30-30	L.Ⅱ	壺	△32.6	(13.5)	-	ロクロナデ・平行タタキ	ロクロナデ・同心円文アタメ	10%	
115図2		O8-30-30	L.Ⅱ	大壺形	-	(24.0)	-	ロクロナデ・平行タタキ	アタメ	15%	
115図3		O8-30-30	L.Ⅱ	大壺形	-	(23.5)	16.0	平行タタキ	同心円文アタメ	15%	
116図1		東側北半	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	流鏝・底状文	ロクロナデ	破片	
116図2		O18-66	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	流鏝	ロクロナデ	破片	
116図3	80	表径	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	流鏝・底状文	ロクロナデ	破片	
116図4		表径	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	流鏝	ロクロナデ	破片	
116図5		O19	L.Ⅰ・Ⅱ	壺類	-	-	-	流鏝・底状文	ロクロナデ	破片	
116図6		表径	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	平行タタキ	同心円文アタメ	破片	
116図7		38	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	タタキ・平行タタキ	同心円文アタメ	破片	
116図8		O19-66	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	平行タタキ	同心円文アタメ	破片	
116図9		O19-27	L.Ⅱ	壺類	-	-	-	格子状タタキ	同心円文アタメ	破片	

第2編 北ノ脇遺跡

表12 土製品観察表(1)

採信番号	写真番号	遺構・グリッド	層位	形態	大きさ [cm] [現存値]			重量 (g)	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
15図5	82	S 1 03	#1	壺状土製品	(5,4)	1.8	1.9	-	
15図6	83	S 1 03	堆積土	肥子炊飯品	17,7	5,1	2,3	-	存在中
15図8	84	S 1 03	床面直上	勾玉	4,5	1,3	1,2	12,5	
15図9	84	S 1 03	堆積土	勾玉	3,6	1,0	1,1	6,8	
15図10	84	S 1 03	床面直上	勾玉	3,25	1,1	1,1	5,9	
15図11	82	S 1 03	庭先	鏡板製品	5,8	6,4	-	26,6	
17図1	84	S 1 04	堆積土	筒状土製品	6,0	外縁ハワメ	内縁直サエ	-	組み上げ前
17図6	84	S 1 04	床子	筒状土製品	10,4	外縁ハワメ	内縁直サエ	-	組み上げ前
17図7	84	S 1 04	堆積土	丸玉	外径 0,7	内径 0,2	0,6	0,16	紫色処理
17図8	84	S 1 04	堆積土#1	丸玉	外径 0,85	内径 0,2	0,6	0,41	紫色処理
18図3	84	S 1 05	堆積土	丸玉	外径 0,8	内径 0,2	0,55	0,31	紫色処理
24図3	84	S 1 08	堆積土	管玉	(12,2)	1,2	1,1	3,0	紫色処理
24図4	84	S 1 10	堆積土	勾玉	3,35	0,8	0,8	2,3	
24図5	84	S 1 10	堆積土	土鈴	(2,0)	(4,5)	-	13,4	
24図3	81	S 1 10	堆積土	土鈴	(4,8)	(5,4)	-	25,7	
24図4	84	S 1 10	堆積土	円筒状土製品	(6,1)	(4,0)	(3,5)	-	
24図5	82	S 1 10	観察所上	粘土塊	4,2	1,75	1,4	-	器サエ
24図8	82	S 1 10	堆積土	丸瓦	(7,1)	(13,5)	2,1	-	
34図2	84	S 1 13	堆積土	丸玉	外径 (8,9)	内径 (5,25)	0,9	0,22	紫色処理
34図3	84	S 1 13	堆積土	丸玉	外径 0,95	内径 0,35	0,5	0,25	紫色処理
34図4	84	S 1 14	堆積土	丸玉	外径 0,7	内径 0,35	0,4	0,23	紫色処理
34図5	84	S 1 15	堆積土	丸玉	外径 0,7	内径 0,2	0,35	0,2	紫色処理
43図9	82	S 1 16	カマド内	支脚	18	4,8	4,2	-	
43図10	84	S 1 16	礎造	丸玉	外径 1,1	内径 0,35	0,6	0,77	紫色処理
43図11	84	S 1 16	礎造	丸玉	外径 1,1	内径 0,2	0,4	0,66	紫色処理
47図8	84	S 1 17	堆積土	丸玉	外径 1,6	内径 0,2	1,5	3,12	
47図9	84	S 1 17	堆積土	土鈴	(3,2)	4,3	-	22,2	
47図10	84	S 1 17	堆積土	細線管	上縁 1,41	下縁 1,2	3,0	-	
47図11	82	S 1 17	カマド内	粘土塊	4,6	4,9	2,2	-	器サエ
47図12	82	S 1 17	カマド内	粘土塊	6,4	2,7	3,0	-	器サエ
47図13	84	S 1 17	堆積土	円筒状土製品	(4,8)	(3,2)	(1,3)	-	器サエ
50図6	84	S 1 19	堆積土	丸玉	外径 0,7	内径 0,2	0,5	0,22	紫色処理
51図2	84	S 1 20	堆積土	土鈴	(4,4)	(2,2)	-	14,1	
58図3	84	S 1 24	観察所上	丸玉	外径 1,85	内径 1,25	0,85	0,52	紫色処理
69図1	82	S 1 27	堆積土	粘土塊	3,7	2,7	3,8	-	
69図4	84	S 1 27	堆積土	粘土塊	3,8	1,9	1,2	-	肉状
69図7	84	S 1 27	堆積土	粘土塊	4,7	4,8	3,5	-	肉状
72図6	82	S 1 29	堆積土	紡錘車	上輪 3,5	下輪 4,2	2,1	40,5	
86図4	82	S 1 38	観察所上	鏡板製品	(5,4)	(3,6)	(1,8)	19,1	
86図5	84	S 1 38	堆積土	皿口	(2,8)	(2,5)	2,2	-	滑着層
88図3	84	S 1 39	床面直上	丸玉	外径 0,8	内径 0,2	0,6	0,48	紫色処理
88図4	84	S 1 39	床面直上	丸玉	外径 1	内径 0,2	0,6	0,47	紫色処理
88図6	84	S 1 39	堆積土	丸玉	1,05	(1,4)	1,3	2,97	
88図7	82	S 1 39	堆積土	土鈴	5,4	1,4	1,5	9	
93図1	84	S 1 41	床面	丸玉	外径 1,1	内径 0,2	0,9	0,95	紫色処理
93図2	84	S 1 41	床面	丸玉	外径 0,9	内径 0,2	0,6	0,57	紫色処理
93図3	84	S 1 41	観察所上	丸玉	外径 0,8	内径 0,15	0,7	0,48	紫色処理
93図4	84	S 1 41	床面	勾玉	4,3	0,9	1,1	8,1	
117図1	84	O19-25	L 8	丸玉	外径 0,8	内径 0,1	0,9	0,57	紫色処理
117図2	84	O19-27	L 8	丸玉	外径 0,8	内径 0,25	0,8	0,5	紫色処理
117図3	84	O19-25	L 8	丸玉	外径 0,9	内径 0,2	0,7	0,45	紫色処理
117図4	84	O18-86	L 8	丸玉	外径 0,8	内径 0,15	0,7	0,29	紫色処理
117図5	84	O18-52	履丸	丸玉	外径 0,8	内径 0,1	0,7	0,46	紫色処理
117図6	84	O19-46	L 8	装身具類	(2,8)	1,6	0,6	-	穿孔エツ、紫色処理
117図7	84	O19-16	L 8	勾玉	6,0	1,7	1,95	29,9	
117図8	84	O18-80-90	L 8	皿口	(12,2)	7,1	-	-	
117図9	84	O18-89	L 8	内筒状土製品	(12,2)	5,9	(4,9)	-	ハコナリ
117図10	84	O19-24	L 8	円筒状土製品	(8,2)	(4,4)	-	-	サマノ器サエ
117図11	84	O18-96	L 8	円筒状土製品	(6,1)	3,0	-	-	サマノ器サエ
117図12	84	O18-76	L 8	筒状土製品	径12,1	外縁ハワメ	内縁直サエ	-	組み上げ前
117図13	84	O18-89	L 8	円筒状土製品	(4,5)	4,6	-	-	子テ

表13 土製品観察表(2)

検出 番号	写真 番号	遺構・ グリッド	層位	形 態	大 小 寸 (cm) [現存値]			重 量 (g)	備 考
					最大長	最大幅	最大厚		
117R14	018-96	L II	円柱状土製品		5.9	4.0	-	-	ナブ・器ナキエ
117R15	018-66	L II	棒状土製品		7.0	1.9	-	-	ナブ・器ナキエ
117R16	018-69	L II	円盤状土製品		3.7	3.7	0.8	-	-

表14 石製品観察表

検出 番号	写真 番号	遺構・ グリッド	層位	形 態	大 小 寸 (cm) [現存値]			重 量 (g)	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚			
11R7	81	S 1 03	中ナブ内	砥石		7.9	2.9	-	砥石	
11R2	82	S 1 05	床面	紡錘車	上輪	2.1	2.1	2.1	48.4	磨石
11R9	81	S 1 10	掘削面上	砥石		3.9	3.3	-	磨石	
79R7	81	S 1 23	床面	環状石製品	3.2	3.4	0.7	7.79	緑色千枚岩	
80R5	84	S 1 29	床面直上	白玉	男律	1.6	0.4	0.7	2.64	磨石
80R5	82	S 1 41	床面	紡錘車	上輪	2.7	2.8	2.2	61	砥石
117R17		O19	L II	石臼	器高	11.5	-	-	-	ナブナキエ

表15 金属製品観察表

検出 番号	写真 番号	遺構・ グリッド	層位	種 類	形 態	大 小 寸 (cm) [現存値]			重 量 (g)	備 考
						最大長	最大幅	最大厚		
21R4	85	S 1 08	覆瓦	鉄製品	角釘	3.7	0.9	0.7	4.27	
31R6	85	S 1 10	掘削面上	鉄製品	刀子	[6.5]	1.1	0.5	8.57	刃先あり
31R7	85	S 1 10	床面直上	鉄製品	環状製品	2.9	2.9	1.7	11.53	
60R8	85	S 1 27	掘削面上	鉄製品	棒状製品	[4.2]	0.6	-	4.58	
80R6	85	S 1 28	埋積土	鉄製品	刀子	[3.4]	0.6	-	0.87	
80R6	85	S 1 29	埋積土	鉄製品	刀子	[5.6]	2.1	1.0	11.17	
118R1	85	O19-27	L II	鉄製品	刀子	[6.5]	1.1	0.4	8.29	
118R2	85	O19-34	L II	鉄製品	刀子	[5.5]	1.8	0.4	8.29	
118R3	85	O18	L II	鉄製品	直刀	[7.7]	2.3	0.4	19.5	
118R4	85	O18-82	覆瓦	鉄製品	角釘	[6.3]	1.3	0.5	9.55	
118R5	85	O18-89	L II	鉄製品	角釘	[5.2]	1.4	0.6	16.5	
118R6	85	O18-90	L II	鉄製品	角釘	2.9	1.7	0.5	10.4	
118R7	85	O19-45	L II	鉄製品	角釘	11.4	1.9	0.5	36.2	
118R8	85	O19-46	L II	銅製品	硬金目	2.8	2.8	0.3	-	
118R9	85	O19	L II	鉄製品	不明	[6.1]	2.4	2.1	18.7	金ナブキ
118R10		表探	L II	銅製品	凸鏡	2.4	-	-	-	[水産遺物]
118R11		O18-98	L II	銅製品	凸鏡	2.3	-	-	-	[水産遺物]
118R12		O19	L II	銅製品	凸鏡	2.3	-	-	-	[水産遺物]
118R13		O19-38	L II	銅製品	凸鏡	2.2	-	-	-	[鏡]

表16 グリッドピット内出土柱材

検出 番号	写真 番号	グリッド	ピット 番号	層位	遺存値 (cm)			樹 種	木取り	備 考
					長さ	幅	厚さ			
80R1	85	O18-67	P 9	埋積土	24.9	6.6	2.1	ナブ (針葉樹)	芯持ち	加工痕有り
80R2	85	O18-67	P10	埋積土	16.4	5.5	2.5	ナブ (針葉樹)	芯持ち	加工痕有り
90R1	85	O19-7	P21	埋積土	33.8	11.1	6.9	ナブ (針葉樹)	芯持ち	加工痕有り

第 3 編 考 察

第1章 遺構と遺物について

前編で記述したように本遺跡からは竪穴住居跡を中心とした多数の遺構と土師器・須恵器を中心とした多量の遺物が出土している。本編ではそれらの資料に多少の検討を加えることで本遺跡に対する理解を少しでも深めることを目指すことにしたい。

第1節 土 師 器

土師器は本遺跡から極めて多量の出土をみているが、それらは形態の変化から古墳時代～平安時代にかけての資料であることを知ることができる。ここでは資料に見られる多数の形態を分類して土器群を抽出し、その変遷を見てみることにしたい。なお、扱う資料は住居跡床面から出土したものを中心に据えることにし、それ以外は補助的に使用することにしたい。

土師器杯・碗・高杯

I 群土器 (図1-1~9)

75・94号住居跡出土資料があげられ、杯には、a (1・2)・b (3・4)・c (5)・d (6・7) の4類が認められる。a～c類は口縁部と体部の境がくびれ、口縁部が外湾するものでb類はa類に比べてくびれの位置が高い。c類はくびれが弱く、外湾度も弱いものである。d類は粗製の杯と考えたものであるが、器形・調整ともa～c類とは大きく異なっており、用途の違いが想定される。8・9は碗としたもので、口縁部が直立気味に立ち、深みがある。

II A 群土器 (図1-10~20)

43・48・103号住居跡出土資料があげられ、杯にはa (10・11)・b (12・13)・c (14・15)・d (16)・e (19)の5類が認められる。a類は口縁部と体部の境のくびれがI群a類に比べて鋭角的で、外湾する口縁部にもシャープさがある。b類は口縁部と体部の境がくびれではなく外面で段となるもので、口縁部も内湾気味である。法量に大小の2種がある。c類は口縁部が短く外湾するもので、全体的に丸みがある。d類は口縁部が直立するもので外面にミガキ調整が認められる。e類は大形の杯で、口縁部と体部の境は外面で段を形成する。

17・18は碗で体部のくびれがI群碗ほど明瞭でなく、口縁部は外湾している。20は高杯であるが杯部の形態はII A 群の杯にはないものである。

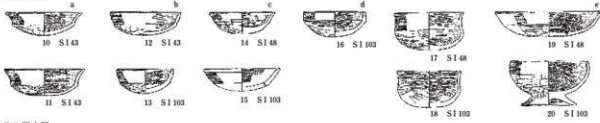
II B 群土器 (図1-21~39)

60・90・129・142号住居跡があげられ、杯にはa (21~23)・b (24・25)・c (26~28)・d (29~31)・e (32~34)・f (35・36)の6類が認められる。a類はII A 群a類からの流れを汲むものと

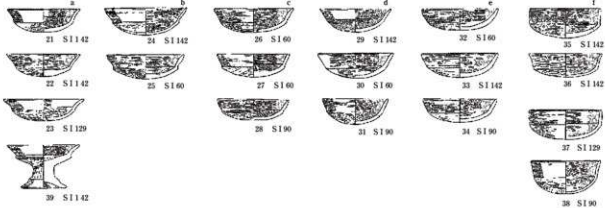
I群土器



II A群土器



II B群土器



III群土器

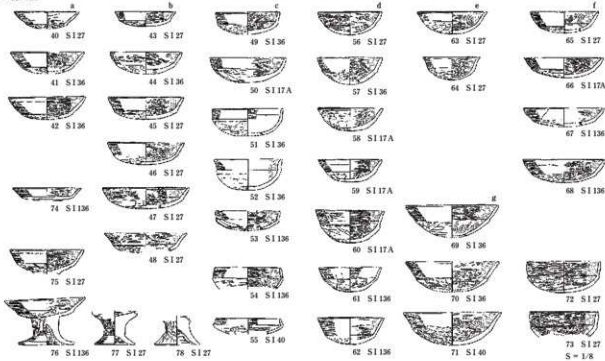


图1 土師器杯I~III群

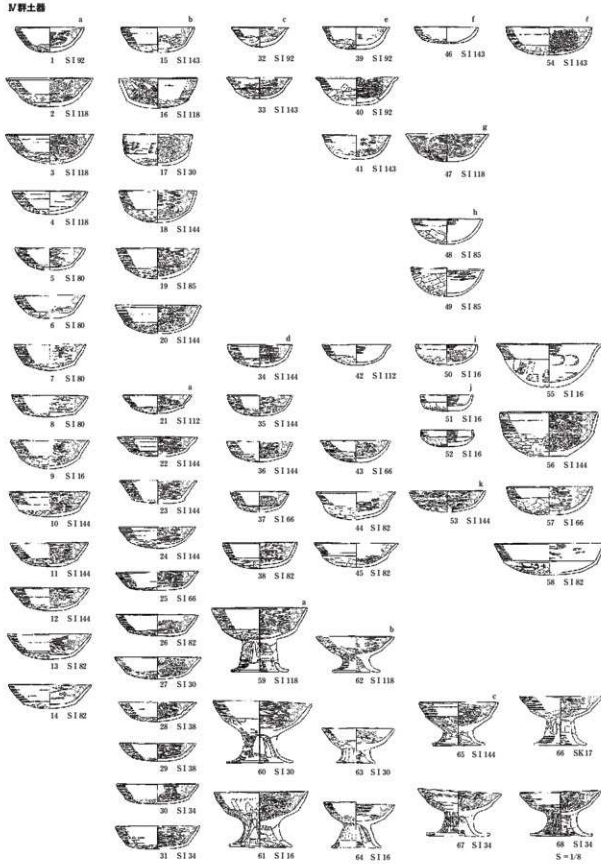


図2 土器杯IV群

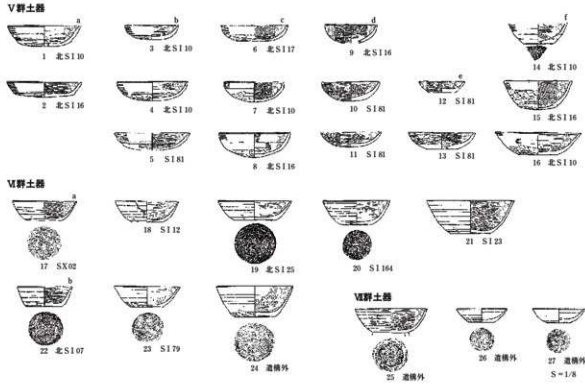


図3 土師器杯V～VII群

考えられるが口縁部と体部の境のくびれがややシャープさに欠けるものとなっている。また、22の口縁部にはミガキ調整が施されている。b類は口縁部と体部の境のくびれが外面で段となるもので口縁部は直線的に外傾している。25は外面にもミガキ調整が施されている。c類は口縁部と体部の境のくびれが緩く、a・b類に比べて口縁部が立ち気味である。範囲の多少はあるが外面にミガキ調整が施されている。II A群b類からの流れが考慮される。d類はc類に比べ丸みのあるものである。II A群c類からの流れが考慮される。e類は口縁部と体部の境のくびれが不明瞭なもので、外面にもミガキ調整が施されている。f類は口縁部が直立気味に立ち上がるもので、ミガキ調整が顕著である。

37・38は碗で口縁部が直立気味のものとならずに外傾するものがある。両者とも外面にもミガキ調整が施されている。39は高杯で脚部が中実である。

III群土器 (図1-40～78)

17A・27・36・40・136号住居跡があげられ、杯にはa (40～42)・b (43～48)・c (49～55)・d (56～62)・e (63・64)・f (65～68)・g (69～71)の7類が認められる。a類は口縁部と体部の境のくびれが外面で軽い段となり、口縁部が外傾するものである。口縁部長が長いのに比べて体底部が縮小している感がある。b類はII B群c類からの流れが考慮されるものがあるが、外面にミガキ調整を施さないものと施すものの2種がある。c類は須恵器模倣あるいは関東に系譜が求められるものである。特に55は関東地方からの搬入品と考えられる。d類はII B群d類からの流れが考慮

されるものであるが、b類同様外面にミガキ調整を施さないものの比率が高くなっている。e類はd類の範ちゅうとも考えられるが、口唇部近くでやや強く外湾することから別類とした。f類は口縁部と体部の境のくびれが外面で軽い段となり、口縁部が内湾気味に外傾するものである。a類に比べ口径に対して器高が小さくなり浅い器形となる。g類は大型では口縁部と体部の境のくびれが外面で軽い段となり、口縁部が直線的に外傾するものである。

72・73は碗で口縁部が直立気味に立ち上がり、外面にもミガキ調整が施されている。76～78は高杯で脚部が中実のものとして脚部中央付近まで中空のものがある。

IV群土器（図2-1～68）

16・30・34・38・66・80・82・85・92・112・118・143・144号住居跡と17号土坑があげられ、杯にはa（1～14・21～31）・b（15～20）・c（32・33）・d（34～38）・e（39～45）・f（46）・g（47）・h（48・49）・i（50）・j（51・52）・k（53）・ℓ（54～58）の12類が認められる。a類はⅢ群土器a類からの流れが考慮されるものである。b類はa類の口縁部が立ち上がったものであり、その分器高が高くなっている。Ⅲ群土器までの碗との関連が予想される。c類はⅢ群土器d類からの流れが考慮されるものである。d類はa類の口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、a類に比較して小ぶりである。e類はⅢ群土器c類からの流れが考慮されるもので、a類に比べて体部の比率が多く、口縁部の作り出しにややバラティーがある。f・g類は口縁部と体部の境が不明瞭なものである。h類は半球状の器形で内面黒色処理が施されていない。関東系の土器と考えられる。i類はⅢ群土器c類からの流れが考慮されるものである。j類は内面黒色処理を施さない小ぶりなものでやはり関東系の土器と考えられる。k類はⅢ群土器f類からの流れが考慮されるものであるが、外面にもミガキ調整が施されている。ℓ類は大型のものを一括した。

59～68までは高杯であるが、杯b類を杯部とし脚部が中空の高杯a類・杯a類を杯部とし脚部が杯底部中央に近い部分に取り付いて裾部のあまり開かない高杯b類・杯a類を杯部とし脚部が杯底部脇に取り付いて裾部が開く高杯c類の3類がある。a・b類は一つの住居跡でセットで出土している。

V群土器（図3-1～16）

81・北10・北16・北17号住居跡があげられ、杯にはa（1・2）・b（3～5）・c（6～8）・d（9～11）・e（12・13）・f（14～16）の6類が認められる。a類はⅣ群土器a類からの流れが考慮されるものである。b類は口縁部と体部の境のくびれが外面で軽い段となり、口縁部が内湾気味に外傾するものである。c類は口縁部と体部の境が不明瞭で口縁部が内湾気味に外傾するものである。d類は平底風丸底のもので外面にもミガキ調整が施されている。e類は平底のもので外面にもミガキ調整が施されている。f類はe類以外の平底のものである。

VI群土器（図3-17～24）

12・23・79・164・北7・北25号住居跡と遺構外出土の一部があげられ、杯にはa（17～21）・b（22～24）の2類が認められる。a類はロクロを使用して整形し体部下端に回転ヘラズリ調整を

施すものである。b類はロクロを使用して整形し体部下端に手持ちヘラケズリ調整を施すものである。

Ⅶ群土器 (図3-25-27)

遺構外出土の一部があげられ、ロクロ整形による高台のついた碗と小型杯(皿)が認められる。小型杯は内面もロクロ整形痕のみである。

土師器甕

I群土器 (図4-1-5)

a (1)・b (2)・c (3)・d (4)・e (5)の5類が認められる。a類は胴部中位に最大径があり口縁部があまり窄まらないもので、外面はナデ調整である。b類は胴部中位に最大径があり口縁部が窄まるもので、外面はナデ調整である。c類は口径と胴部中位にある最大径がそれほど差がないもので、外面はナデ調整である。d類は胴部中位に最大径があり口縁部が窄まるもので、外面はハケメ調整である。e類は長胴で胴部中位に最大径があり外面はハケメ調整である。

II群土器 (図4-6-10)

a (6)・b (7)・c (8)・d (9)・e (10)の5類が認められる。a類は胴部中位に最大径が予想され、外面がナデ調整のもの。I群土器a類に近いものが考えられる。b類は胴部中位に最大径があり口縁部がやや窄まるもので、外面はナデ調整である。I群土器b・c類を折衷したような器形である。c類は長胴で最大径が胴部下位にあり口縁部がやや窄まるもので、外面はハケメ調整である。d類は長胴で最大径が胴部中位にあり口縁部がやや窄まるもので、外面はハケメ調整である。e類はI群土器e類と同様の特徴である。

III群土器 (図4-11-15)

a (11)・b (12)・c (13)・d (14)・e (15)の5類が認められる。a類はIIA群土器b類からの流れが考慮されるものである。b類はI群土器c類からの流れが考慮されるものである。c・d・e類はそれぞれIIA群土器c・d・e類からの流れが考慮されるものである。

IV群土器 (図4-16-24)

a (16)・b (17)・c (18-20)・d (21-23)・e (24)の4類が認められる。a類は最大径が胴部中位にある球胴のもので、外面はハケメ調整である。b類は器形としてはII B群土器b類とII B群土器d類からの流れが考慮されるもので、外面はハケメ調整である。c類はII B群土器c類からの流れが考慮されるものである。d類はII B群土器e類からの流れが考慮されるものである。

V群土器 (図5-1-22)

a (1)・b (2)・c (3-6)・d (7-12)・e (13-15)・f (16)・g (17)・h (18-21)・i (22)の7類が認められる。a類は最大径が胴部中位にある球胴のもので、外面はナデとケズリ調整である。b類はIII群土器a類からの流れが考慮されるものである。c類はIII群土器b類からの流れが考慮されるものである。d類は胴部中位に最大径があり口縁部が窄まるもので、外面はハケメとナデ調整

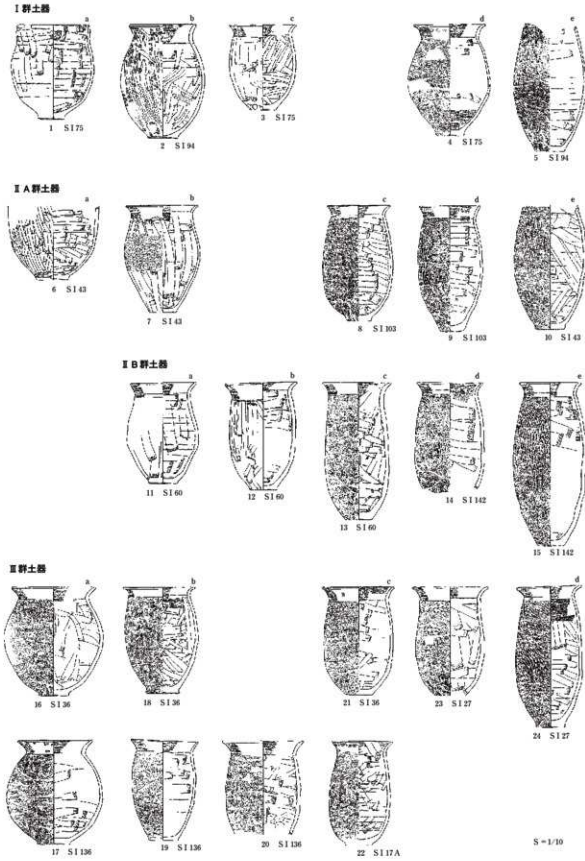


図4 土師器堯I~III群

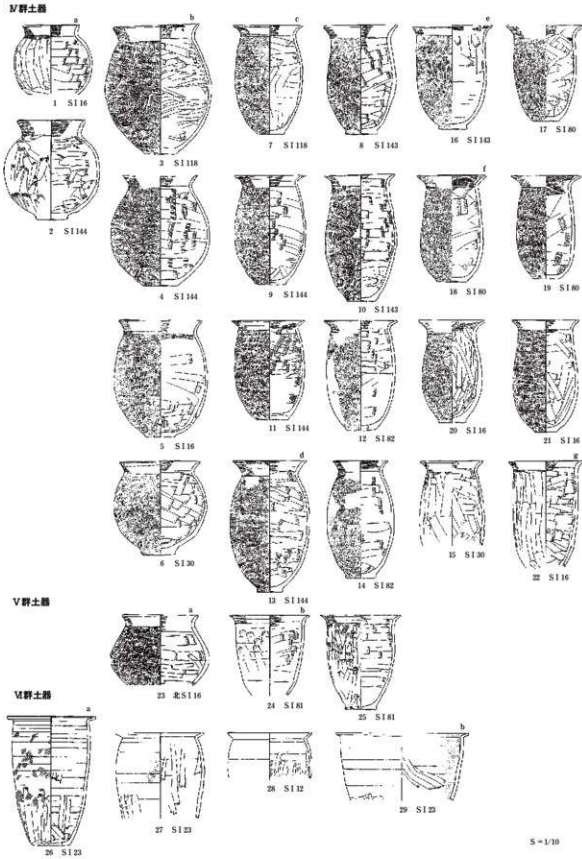


图5 土師器Ⅳ～Ⅵ群

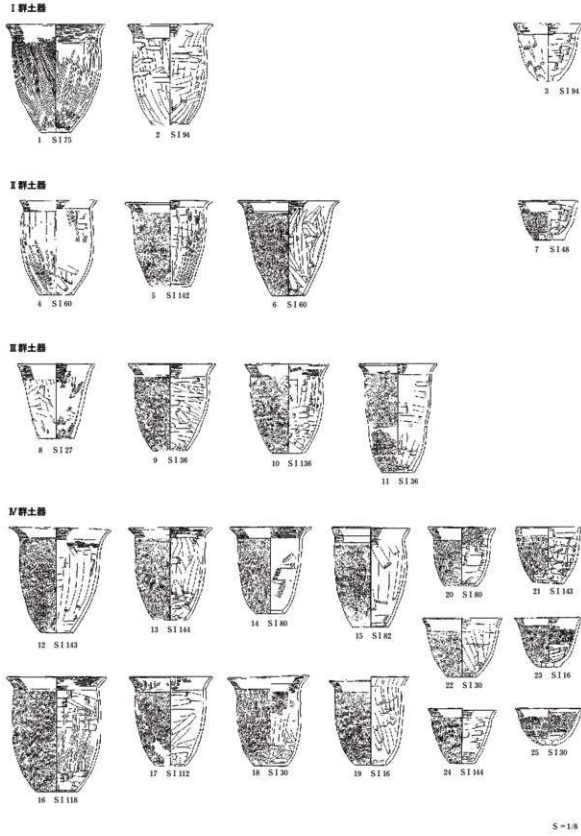


図6 土師器瓶I～IV群

である。e類は口縁部に最大径があり口縁部が窄まらないもので、外面はハケメ調整である。f類はⅢ群土器c類からの流れが考慮されるものである。g類は口縁部に最大径があり口縁部が窄まらないもので、外面はケズリ調整である。a類の1とg類の22は関東系の杯を出した住居跡の甕であり、ケズリ調整にやはり関東系の技術がうかがわれる。

V群土器 (図5-23-25)

a (23)・b (24・25) の2類が認められる。a類はⅣ群土器b類からの流れが考慮されるものである。b類は口縁部に最大径があり口縁部が窄まらないもので、外面はナデ調整である。

VI群土器 (図5-26-29)

a (26-28)・b (29) の2類が認められる。a類は口縁部に最大径があり口縁部が窄まらない器形で、ロクロ整形によるものである。b類はa類に比べ口径が大きく器高が低いものである。

土師器瓶 (図6-1-25)

瓶についてもⅠ群土器からⅣ群土器まで並べおいてみたが、大型小型とも器形においては大きな変化は認められない。調整の面ではⅠ群土器ではハケメ調整が認められずナデとミガキ調整が施されている。ハケメ調整はⅡ群土器から認められるが、Ⅰ群土器の調整がⅡ・Ⅲ群土器には残り、Ⅳ群土器ではハケメ調整のみとなる。なお、本遺跡ではⅤ群土器以降では瓶は検出できなかった。

各土器群の様相

前項で分類した土器群について、ここでは福島県内での遺物出土例をみながら各群の様相について若干の検討を加えることにしたい。

I群土器

本群は天栄村舞台遺跡出土資料によって設定された舞台式(玉川:1981)に比定されるものと考えられる。舞台式にはA~M類までの多様な杯が出土しているが、口縁と底部の境界に明瞭な変換点を有し口縁部が外反するF類が東北部の福年における住社式(氏家:1957)の杯に共通することから、舞台式は住社式と並行すると考えられている。

始めに杯類を比較すると、本群のa類は舞台遺跡GⅠ類、b類3はGⅡ類、b類4はHⅡ類にあたと考えられる。c類は舞台遺跡に相似する類例がないがG類の範囲の中で許容できると考えられ、くびれの弱い点は県中以北の特徴である可能性がある。d類は粗製の杯で舞台遺跡L類に相当する。椀類は舞台遺跡出土資料とやや異なるが舞台遺跡より時期が遡る引田式資料とされる郡山市山中日照田C24号住居跡の出土遺物に口縁部の短い類似品がある。

d類は手捏土器とあわせて祭祀に関わる土器として論じられることが多いものであり、古墳の周溝からの出土例が知られているし、本遺跡でも祭祀跡と考えられる1号包含層から小型の手捏土器が土製勾玉と共に出土している。したがって住居跡からの出土は住居内での祭祀を予想させるが、本遺跡ではそのことを証明する資料は得られなかった。また手捏土器とされるものは古墳時代を通

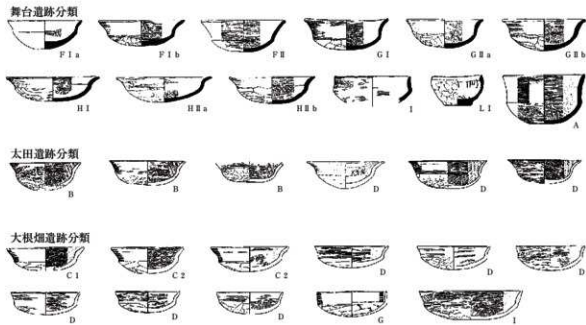


図7 舞台・太田・大根畑遺跡出土の土器器杯

して10世紀までその出土が知られていることから（高松・石本：1993）、d類はI群土器を構成するひとつであり該期に出土例が多い傾向にはあるものの、かならずしもI群の指標となるものではない。

粟をみると本群a類は舞台遺跡B類、b類はC類、d類はA類にあたると思われるが、c・e類の類似資料はない。本群土器より遡る他遺跡例を見てもc・e類はみられないことから本群の時期頃から出現するものと考えられる。調整の面ではナデ調整とハケメ調整があり、ナデ調整は前段階からの流れであり、ハケメ調整は本群頃から開始されるものである。

丸底で外湾する口縁部下に稜を作り出す杯a類は舞台式の前段階である東村佐平林遺跡出土資料によって設定された佐平林式（目黒他：1978）にその祖形が出現し、舞台式において量を増すものである。その出現は須恵器の根柢に始まると考えられており、一定量の出土はひとつの時期を画するものと思われる。

なお、舞台遺跡資料と同段階の県中資料として柳沼は郡山市の太田遺跡をあげている（柳沼：1989）。太田遺跡資料については大根畑遺跡の報告（柳沼：1987）で再考されており、その分類によれば本群a類が太田遺跡D類、本群b類が太田遺跡B類と考えられる。柳沼は住社式を細分し太田遺跡資料を住社式古段階としている。地理的条件からして本遺跡の場合は郡山市出土資料との比較が肝要であるが、福島県内資料で設定された舞台式を尊重し初めに比較した。結果的には県南地域との比較が可能であることと、あわせて舞台式の位置の確認もできたと思われる。

II A・II B群土器

II A群とII B群には若干の様相差があるが、住居跡の変遷を考える上でその差が有意な段階差で

あるかどうかは判断に苦しむところである。したがってここでは両群をあわせて考えていくことにしたい。本群の位置付けは前群との関係から住社式新段階とすることができる。住社式新段階の資料としては大根畑遺跡の資料があげられており、その分類と前段階の分類を加味しながら見ることにしたい。

Ⅱ A群 a類とⅡ B群 a類はくびれのシャープさがややよくなるものの舞台遺跡 F類の系譜上にあると考えられる。Ⅱ B群 b類は大根畑遺跡 C類、Ⅱ B群 c類は大根畑遺跡 D類にあたると考えられ、Ⅱ A群 d類は大根畑遺跡 G類にあたる。Ⅱ B群 f類は舞台遺跡 I類からの系譜が想定される。Ⅱ A群 e類は大根畑遺跡 I類に通じるものと思われる。Ⅱ A群 b・c類とⅡ B群 d・e類は類例がさがせないことから本群頃から出現する可能性が高い。Ⅱ A群 b類は須恵器蓋模倣、他は現時点では杯のパラエティーと考えておきたい。

椀については舞台遺跡椀 A類からの系譜が考えられるもの(17・18・38)とⅠ群椀からの系譜が考えられるもの(37)の2種がある。杯椀共に外面のミガキ調整が盛行する傾向にあることが指摘できる。

甕はⅠ群からの系譜が考えられるものがⅡ A・Ⅱ B群の a・b・c類で d類は本群からの出現と思われる。なお、大根畑遺跡や同じ住社式新段階とされる郡山市丸山遺跡12号住居跡の甕は球胴に近い胴部を有すもので本群で見られる長胴甕は出土していない。Ⅰ群 e類とあわせて本遺跡がハケメ長胴甕出現の最も早い県内例となる可能性が高い。

Ⅲ 群土器

本群は栗開式に比定されると考えられる。a類は栗開式の表徴であるいわゆる有段九底の杯であり、前群までの a類の変化から本群になって出現するものと考えられる。ただし、Ⅱ B群 a類と本群 a類では形態差がやや大きいことから、Ⅱ B群 b類を加味する必要があるように思われる。栗開式の古い段階では口唇部が外反するものが多いという指摘があるが、本群では直線的に外傾(40・41)あるいはどちらかという内湾気味(42)であるのが特徴である。また、栗開式になると杯においては2～3の器形に統一されるという指摘もあるが、本群の場合はまだ複数類型が存在し、須恵器模倣系と考えられる c類も多く認められる。また、外面のミガキ調整は前群に比べ減少し、b類と椀に多く用いられている。

高杯は脚部の中央付近まで中空で裾部の広がるもの(76)が出現し、前群からの変化がうかがわれる。このことは舞台式から栗開式への変化を示すとされる白河市明戸遺跡の5号住居跡から4号住居跡への変遷の中にも認められることからひとつの目安となるかもしれない。

甕は球胴と長胴の2種がありハケメ調整が主流である。d類は極端に長胴の前群 e類の系譜を引くものと考えられるが、この類は本群をもって終息するようである。また、栗開式の特徴である頸部の段が明確なものが見られるようになる。

Ⅳ 群土器

本群も栗開式の範疇であると考えられるがⅢ群よりは時期が下ると予想される。杯の主体は a類

であり、他類は減少傾向にある。住居跡内の組み合わせでも143号住居跡では5類と多いが他は2～3類程度であり、34号住居跡ではa類の1類のみである。またa類は器高が高く体底部の直径が小さいものから器高が低く体底部の直径が大きいものへ変化していくと考えられる。Ⅲ群c類で見られた須恵器模倣系統の杯は本群では存在が不明瞭となる。

高杯は脚部を中空とするものが主体をしめ、本群でも時期の早いものは2種(a・b類)のセットが見られるが、下るものは1種になると予想される。

甕はⅢ群同様球胴と長胴の2種がありハケメ調整が主流である。栗囲式では胴部最大径が中央部ないし肩部にあるとされるが、本遺跡では肩部にあるものは目立たず中央から下半にあるものが目立っている。

V群土器

本群は国分寺下層式に比定されるものと考えられる。杯は6類が存在し住居跡内の組み合わせでは比ノ脇16号住居跡では4類と多いが他は2～3類程度である。d・e類は金属器を模倣したものと考えられ本群で出現する。f類の平底杯も本群からの出現であり、須恵器の影響であると考えられる。b・e類には法量分化のようすがうかがわれるが、資料数が少ないことから通常の現象であるのかは定かではない。本群で高杯は確認できていない。

甕はハケメ調整の長胴甕は見られなくなり、ナデ調整で口の広いものへと変化している。

Ⅵ群土器

本群は表杉ノ入式に比定されるものと考えられる。杯はすべてロクロ整形によるもので、大小の別がある。回転ヘラケズリ調整から手持ちヘラケズリ調整へ移行していくと考えられるが、22は手持ちヘラケズリ調整であるが底径と口径の差が少ないことから、時期の早いものと思われる。

甕もすべてロクロ整形である。26には平行タキが残っており、須恵器製作技術との関連がうかがわれる。なお29は甕というより鍋とすべきものかもしれない。

Ⅶ群土器

本群も広い意味で表杉ノ入式に比定されるものと考えられるが、前群の杯がみられないことから別群とした。いわゆる碗皿のセットであり時期の下るものである。本群の甕は確認できていない。

まとめ

本遺跡出土の土師器は舞台式から表杉ノ入式の資料であったが、量的には栗囲式が中心をなすものである。各群の新旧は住居跡の重複関係によりある程度確認でき、その関係を示すと以下の通りである。

75号住(Ⅰ群)→48号住(ⅡA群)→45号住→40号住(Ⅲ群)、129号住(ⅡB群)→136号住(Ⅲ群)、142号住(ⅡB群)→17号土坑(Ⅳ群)、60号住(ⅡB群)→38号住(Ⅳ群)

このほか少数資料でも数例確認することができ、

各群の時期については決め手となるものが少ないが、これまでの研究成果からすれば、大まかに

I・II群が6世紀中葉～後葉、III・IV群が7世紀、V群が8世紀、VI群が9世紀、VII群が10世紀とすることができると思われる。

なお、土師器にはIII群土器とIV群土器に関東系土器が含まれており7世紀を通して、関東地方との交流があったことを知ることができる。(安 田)

第2節 須 恵 器

本遺跡から出土した須恵器は、古墳時代の集落遺跡からの出土量としては県内で他に例のない多さであるといえる。ただ、出土状況に良好なものが少ないことから、層位的にそれぞれの新旧を見定めるのは困難である。したがってここでは出土須恵器を近接遺跡を含めて通覧し、特徴を抽出しながら所属時期について考えてみることにしたい。なお杯H・Gの記号は奈文研分類にしている。

I 群土器

古墳時代の資料と考えられるものをI群土器とした。

杯H (図8-1~43)

図8の杯H蓋は肩部に稜のあるものa (1~3)、肩部の稜が明確でないものb (4~23)、口縁部が「ハ」の字状に開くものc (24~27)、天井部が平坦なものd (28~30)を口径の大きいものから並べたものである。

1は山王川原遺跡出土の資料で最も古い様相を呈しており、器形からしてTK208~23型式に相当するものと考えられる。本報告土師器資料では該期まで遡る資料は出土していないが、隣接する山王川原・百日本遺跡の土坑資料に該期資料がある。2は少破片で不明部分も多いが、やはり時期の遡るものと考えられる。3は稜がみられるものの1・2ほどは明瞭ではなく口縁が広がり、胎土が大粒の白色石を含む独特のものであることから在地あるいは東国産の可能性が高い。時期についても4以降の杯蓋に比較的近い時期が考えられる。

蓋b (肩部の稜が明確でないもの)は法量から3グループ程度に分けることができる。1グループが4~15までで口径が16.5cm~14.2cm、2グループが16~19までで口径が13.5cm~12.8cm、3グループが20~23までで口径が11.7cm~10.8cmである。須恵器編年ではMT15型式以降杯蓋の法量が大型化し徐々に縮小していくことが知られており、そのことからすれば1グループから3グループへの変遷が考えられ、本遺跡でも1グループ7・9の肩部に退化した稜が残っていることから首肯することができる。該期の須恵器杯蓋については近年小森によって再計測作業が行われており(小森:1998)、それを参考にするならば概ね1グループがTK43型式、2グループがTK209型式、3グループがTK217型式にあてることができると思われる。

蓋c (口縁部が「ハ」の字状に開くもの)は関東地方の在地産須恵器の特徴という指摘があり、6

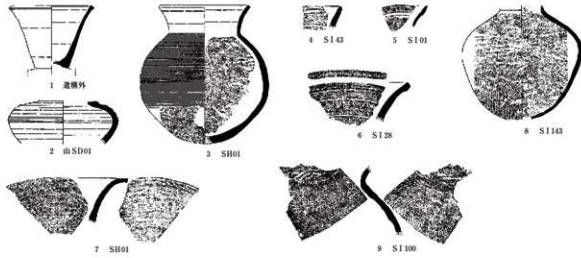


図9 須恵器I群(2)

世紀から出現するとされている。ただし、本遺跡資料は口径が縮小傾向にありやはり7世紀代の時期が考えられる。口径が10cm以下まで縮小した栃木県南高岡窯(梁木:1987)の類似資料は飛鳥Iにあてられており(服部:1995)、本資料も近い時期が考えられる。

蓋d(天井部が平坦なもの)は28・29に類似する資料がTK48窯出土資料で杯とされるものもある。7世紀後半の時期が考えられる。

杯H身も蓋と同様に口径の大きいものから並べている。31~34は蓋b1グループに対応すると思われる、底部に回転ヘラケズリを施すものと手持ちヘラケズリを施すものの2種がある。両者は胎土の違いから産地が異なることが知られ、調整の違いは産地の特徴であり時期の違いではないように思われる。35・36は小破片資料であり口径が不明確であるが、35は全体のシャープさ、36は胎土と器形が34と同等であることから両者とも31~34のグループに入ると考えられる。

37~40は法量から蓋b2グループに対応すると思われる、胎土分析では19・37が同じグループとされている。先のグループに比べ器高が低く浅くなっていることを知る事ができる。なお、40は底部が扁平となるもので口縁部の作りが34に似るなどの点で他の3点とはやや異質である。器形の近似した資料は埼玉県舞台遺跡1号住居跡にみることができ、舞台遺跡では肩部に稜のある蓋を伴っており、本遺跡の3の蓋に近い。3と40は同じ胎土であり、組み合わせるとすれば舞台遺跡の類例とすることができる。舞台遺跡資料は6世紀末とされており(酒井:1989)、そのことからすると40だけは31~34のグループに入る可能性がある。なお、胎土分析では3・33・34・40は同じグループである。

41・42は胎土・法量・出土位置から蓋cと組み合わせる可能性が極めて高く、したがって関東の影響下にある製品と考えることができる。

このようにみえてくると蓋b3グループに組み合わせる杯H身が不明確となるが、蓋b3グループは口縁部が立ち上がる傾向のものが多いことから、杯として使用された可能性があると思われる。

杯G (図8-44~55)

44~46は蓋であるが、46については壺類の蓋の可能性も考えられる。44・45は破片であるがカエリの突起が蓋の端部より飛び出さないものである。44の天井部には手持ちヘラケズリが施されており、やはり関東的特徴であると考えられる。47~55は杯G身で口径は10cm~11.6cmの中に収まっている。回転ヘラケズリ(47)・手持ちヘラケズリ(49・51~55)・未調整(48)のものがあるが、それが時期差を表すのかは不明である。むしろ杯H同様手持ちヘラケズリは関東の特長とすべきと思われる。なお44は1号溝で杯H蓋cと杯身42ともに出土しており、杯Hと杯Gの同時存在が予想されるが層位的には確認不足である。時期については杯GがTK217~46型式に存続の中心を持つものであることから総じてその頃にあてておきたい。

盤 (図8-56~59)

盤皿は田辺編年(田辺:1966)によればⅡ期後半に出現する器種であり、Ⅲ期以降定量化するとされるものであるが、図示したような大型の盤はTK217型式あたりから目立つようである。福島県内の窯跡資料でも相馬市の善光寺窯跡群でTK217型式に平行すると考えられる善光寺2型式の窯から出土しており、また原町市島打沢A遺跡ではTK46型式に比定される1号窯からの出土が知られている。当遺跡出土の盤も両型式の頃が考えられる。

高杯 (図8-60~75)

高杯は有蓋のものと無蓋の2種が認められる。有蓋の60は山王川原遺跡8号住居跡から出土した完品である。杯部の器形と三方透かしであることからTK43型式が考えられるが、TK209型式にも遺存する特徴であることからやや幅を持って考えたい。無蓋高杯は杯部(63~67・68)だけでも数種認められるが、いずれも篩工具などによる装飾が施されていないことからTK209型式の範ちゅうと思われる。ただし脚部には装飾のあるもの(73~75)が存在し、透かしも上下段でそろわれないなどTK10型式まで遡る特徴を有するものが存在する。

甕 (図8-76~82)

76は百目木遺跡18号土坑の出土品である。特徴から5世紀後半が考えられ、当高木遺跡では同時期の住居跡は見当たらないが、1の蓋とあわせて近辺に当該時期の営みが予想される。他は1個が1種という状況でバラエティーがあるが特徴からやはりTK43~TK209型式のものと考えられる。ただし装飾のあるものや口縁部内面に段があり端部のつくりが鋭いことなどからするとTK43型式の特徴が色濃いと思われる。

壺・瓶類 (図8-83~88, 図9-2・3)

壺・瓶類には短頸の広口壺(84)・広口壺(85・3)・横瓶(86)・提瓶(87・88)・長頸壺?(2)などがみられる。提瓶と横瓶は田辺編年Ⅱ期の特徴的な器種であるが、85の広口壺は検討の結果、湖西窯産との見解を得ており、その見地からすると84~88は湖西窯産ではないが西笠子64号窯跡の調査で出土した資料または同期とされる資料中に類似品が確認される。西笠子64号は概ねTK43型式に比定されている。湖西産の須恵器は7世紀中葉から8世紀前半にかけて関東地方に多量に供給さ

れたことが知られているが、本例はそれよりやや早い段階の搬入例になると思われる。

甕 (図9-4~9)

甕は遺構内外から破片で約500点程出土しているが、すべてについて時期を見極めることは困難で、図 には土師器Ⅰ~Ⅳ群土器と共存した代表的なものを示した。特徴的なことは口縁部資料において歯歯の密な波状文と口端部や内面に波状文を施すものが見られることである。

Ⅱ群土器

奈良時代以降と考えられるものをⅡ群土器とした。

杯 (図10-1~7)

杯はロクロからの切り離しに糸切りのものが目立ち、5~7は静止糸切り、2は回転糸切りの可能性が高い。再調整は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリがあるが手持ちヘラケズリは底部周縁、回転ヘラケズリは体部下端から底部全面に施されている。静止糸切りは年代決定資料の多い多賀城近辺では8世紀前半でも中頃に近い時期に認められる例が多く、福島県内でもその頃に比定される大木戸窯跡などで認められる。おそらく当資料もその頃の年代が推定される。回転ヘラケズリについては福島県内では8世紀前半と考えられる窯跡資料に認められるものであることから、静止糸切りのグループとそれほど時期差のないものと考えられる。

高台杯 (図10-8~17)

高台杯においても底部に静止糸切りを残すものが多く(10・15・16・17)、杯と同様の時期が推定される。8は器形や細部の作りなどから県内の窯跡資料にはあまり見られないもので、同一住居跡の9も底の形態から湖西産と考える向きがある。時期としては8世紀のものと考えられるが搬入品の可能性が高い。11・12は金属器を意識した器形であり、やはり8世紀代が推定される。13は高台杯というよりは、脚杯の壺のような器形も考えられ、そうであれば7世紀まで遡る可能性を有している。

蓋 (図10-18~29)

大半が高台杯の蓋と考えられるが、29は壺類の蓋と思われる。25以外は天井部の回転ヘラケズリが広い範囲に及んでおり、器高が低めで比較的直線的に広がることから8世紀以前のものとして推定される。特に18は端正な宝珠つまみであり古い要素を有している。25は陣笠形に近いことを考え合わせてやや時期の下るものと思われる。

瓶・鉢・壺・甕 (図10-30~48)

30~36は長頸瓶と考えられる。32・33は会津大戸窯の製品と推定されており、高台などの形状からすると30・31とあわせて9世紀代の時期が考えられる。34は伴出する須恵器杯から8世紀の遺物と考えられる。35・36は小型品で水瓶などの可能性があるが時期とあわせて定かではない。37~39は鉢と考えられ37は伴出する須恵器高台杯から8世紀の遺物と考えられる。38・39は不明である。40は短頸壺であるが肩の張り具合からして8世紀代の時期が推定される。甕は中型・大型があり伴出遺物

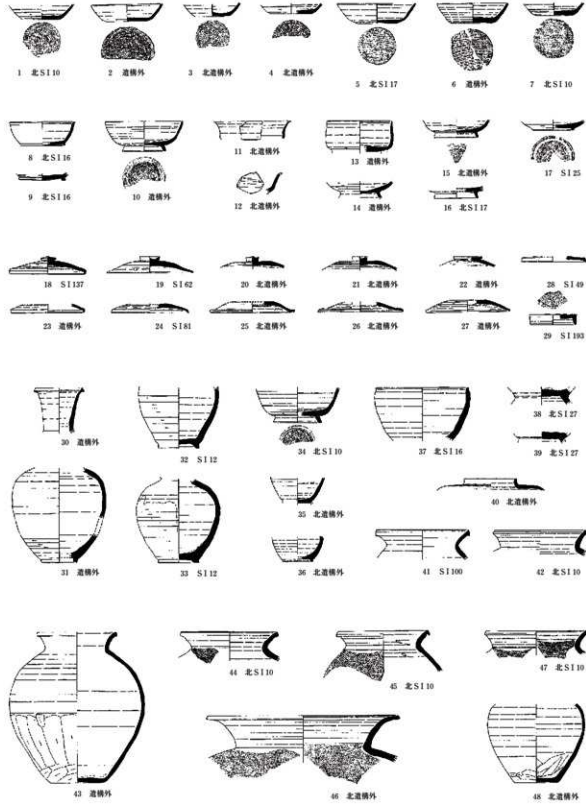


図10 須恵器Ⅱ群

から8世紀代が考えられるのが42・44・45・47である。いずれも口縁部の装飾は見られず胴部にはタタキが認められる。胴部にタタキが見られずロクロナデのみのものも見られるが器形的には近似すると思われる。46は大型であるがやはり口縁部の装飾がないことや口端部の形態から8世紀以降のものと考えられる。

土師器と須恵器の共存関係

前項で土師器と須恵器の特徴などについて述べたが、ここでは遺構内における両者の共存資料について若干の検討をしてみることにしたい。なお、共存資料はできるだけ住居跡表面資料などの確実性の高いものを扱うことにした。

1～4は百目木遺跡18号土坑の資料である。5世紀後半と推定される厩と南小泉式と考えられる土師器壺・土師器の意模倣品が共存している。これまでの南小泉式の年代的位置付けと矛盾するものではなく、祭祀などに関わり一括廃棄（埋納？）されたものと思われる。

次に土師器Ⅱ群土器からⅣ土器までの須恵器との共存例を列記すると以下のようになる。5～7は北ノ脇遺跡41号住居跡の資料で前項でTK43型式に比定した杯身と土師器ⅡB群土器が共存している。8～10は高木遺跡9号住居跡の資料でTK43型式以前と考えた杯蓋と土師器ⅡB群土器が共存している。11～18は高木遺跡142号住居跡の資料でTK43型式と考えた杯蓋と土師器ⅡB群土器が共存している。19～26は百目木遺跡59号住居跡の資料でTK43型式（19～21）と考えた杯蓋・TK217～46型式（22）と考えた杯蓋が土師器Ⅲ群土器と共存している。27～29は百目木遺跡37号住居跡の資料でTK43型式と考えた杯蓋と土師器Ⅳ群土器が共存している。30～39は山王川原2号住居跡の資料で地域色が強く6世紀末まで遡る可能性を有す須恵器杯身とⅢ～Ⅳ群土器の特徴を有す土師器が共存している。40～49は山王川原8号住居跡の資料でTK43～209型式と考えた有蓋高杯と土師器Ⅳ群土器が共存している。50～52は百目木遺跡10号住居跡の資料でTK217～46型式と考えた杯G身とⅢあるいはⅣ群土器と共存している。53～58は高木遺跡82号住居跡の資料でTK48型式頃と考えた杯蓋と土師器Ⅳ群土器が共存している。

以上の例ではTK43型式と考えた須恵器がⅡB～Ⅳ群土器と共存し、TK209～48型式と考えた須恵器がⅣ群土器と共存しているということが出来る。検討が必要と思われるのはTK43型式の共存期間が長いことであるが、百目木遺跡59号住居跡例に示した4点の須恵器が同時期のものと判断しにくい点を考えると古いものがそれほど長い期間ではないが伝世したと推定するのが自然であろう。したがって少数の須恵器をもって土師器各群の位置付けを行うのは正確さにやや欠けるが、当遺跡の場合、大づかみな流れを考える上ではそれほど大きな矛盾は見られない共存例であるように思われる。

次にⅡ群須恵器の共存例は次の通りである。59・60は北ノ脇遺跡17号住居跡の資料で8世紀前半と考えた杯と土師器Ⅴ群土器が共存している。61～67は北ノ脇遺跡61号住居跡の資料で8世紀前半と考えた杯と土師器Ⅴ群土器が共存している。68～73は北ノ脇遺跡16号住居跡の資料で8世紀と考

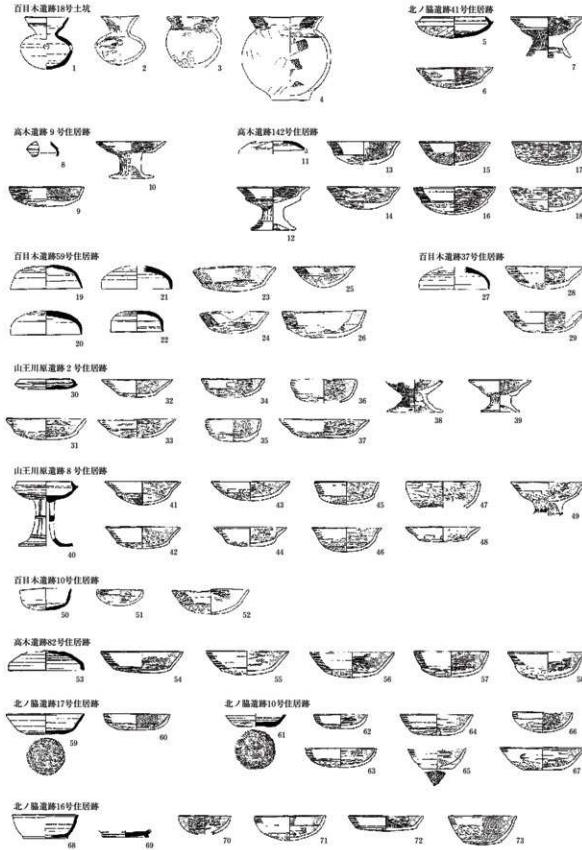


図11 須恵器と土師器の共存例

S = 1/8

えた高台杯と土師器V群土器が共存している。3例とも国分寺下層式と考えられる土師器資料との共存であり、これまでの年代的位置付けと矛盾のない良好な資料と思われる。(安田)

第3節 集落の変遷

この節では、本章の第1・2節で分類された土器群を基準としながら、竪穴住居跡を中心とした集落の変遷について検討していきたい。

今回、発掘調査が行われたI区工期からは、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡を著しく重複した状態で検出した。検出数は、高木遺跡では172軒、北ノ脇遺跡では42軒となり、両遺跡をあわせた調査面積12,450㎡から214軒の住居跡が検出され、約60㎡に1軒の割合で存在している。高木遺跡の河川に面した部分では、堆積層序が大きく乱れていて遺構の検出ができなかった範囲もあるため、実際の比率はもう少し高かったものとみられる。このことは、一般の集落遺跡での竪穴住居跡が数100㎡につき1～2軒の割合であることと比べても、かなり特異な状況であったことが理解できる。

このように高木・北ノ脇遺跡は、阿武隈川右岸の自然堤防上に営まれた大集落で、出土遺物からは7世紀を中心とした時期に最も発展していることがうかがえる。また、同じ阿武隈川右岸の自然堤防上には、両遺跡の北に山王川原遺跡、南に百目木・原遺跡が位置し、各遺跡で行われた発掘調査の成果〔註1〕からも高木・北ノ脇遺跡と同様の状況を示している。それら5遺跡は、字名によって区切られているものの、実際はひとつづきの集落遺跡である。阿武隈川に平行して延びる自然堤防は、山王川原遺跡から原遺跡までの約2kmにわたって延びており、集落はその広範な範囲に継続して営まれているのである。

阿武隈川右岸に営まれた一連の集落遺跡に関しては、各遺跡の調査成果をもとに相互の比較検討を加えるべきであるが、ここでは他の遺跡を検討する準備ができていない。そのため、本報告で扱われている高木・北ノ脇遺跡の調査成果から、その範囲においての集落の傾向と消長について考えてみたいと思う。高木遺跡の一角は、集落の一部を大溝で区画し、大溝と東側の湿地を利用した水辺の祭祀が行われているなど、集落の中心となる役割を果たしていたことが推測でき、右岸に営まれた集落を特徴づける一側面が捉えられるものとみられる。

本章の第1・2節では土器群をI～VII群に分類している。そこで、分類された土器群を基準とし、対応する時期区分をそれぞれI～VII期と称して、それぞれの時期ごとに竪穴住居跡を中心とした遺構から集落の変遷を追っていくことにする。しかし、検出された竪穴住居跡の数は多いが、遺構検出が困難であったことや、同じところに複数の住居跡が幾重にも重複することから、必ずしも個々の住居跡の残りは良くない。そのような条件では、出土遺物も乏しい場合が少なくなかった。原則としては床面出土の遺物を基準として時期の設定を行ったが、そのような材料に乏しくても、集落

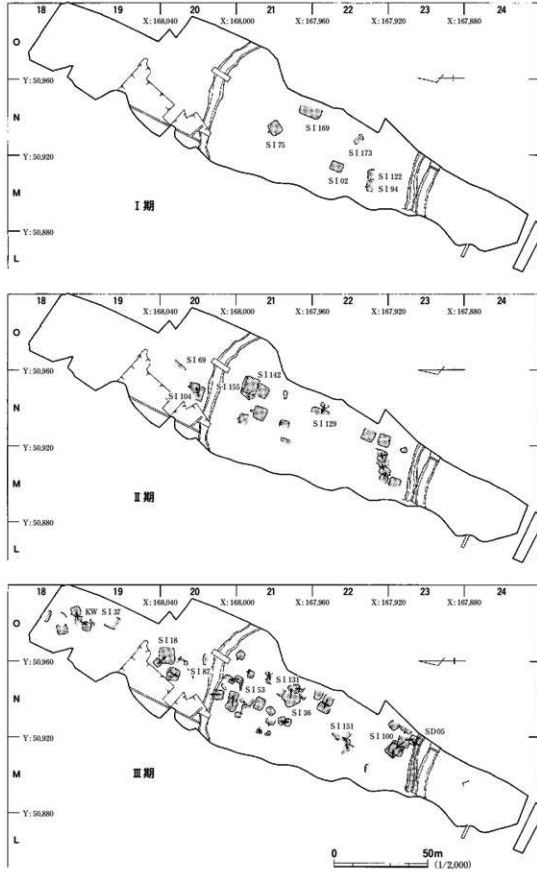


図12 集落変遷図 (1)

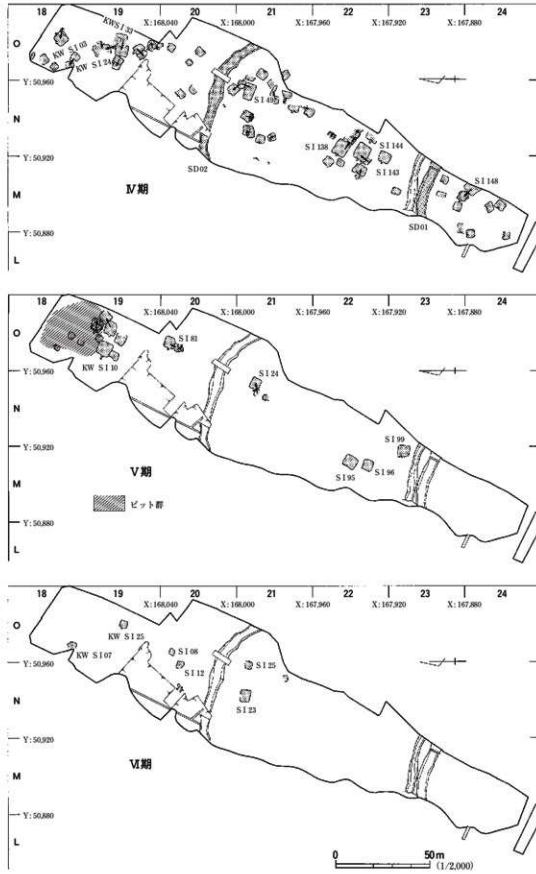


図13 集落変遷図(2)

の傾向を把握するために重複関係から判断した場合もある。

また、集落のある時期には、その一部を区画する大溝が巡っており、集落の大きな特徴となっている。集落の変遷とあわせて、大溝の時期や機能についても考えていきたい。

I～VI期の住居跡の分布状況は、図12・13に「集落変遷図」として時期ごとの堅穴住居跡の配置図を作成した。大溝との位置関係を検討するため、集落を区画する1・2・5号溝跡については全時期に図示しているが、機能していたと推察される時期には住居跡と同じ網点で表現した。また、重複状況が判断できるものに関しては、(旧)

→(新)の方向に矢印を付けている。堅穴住居跡と大溝以外の遺構は配置図から除いているが、VII期については調査区北部から検出したピット群の範囲も図示している。

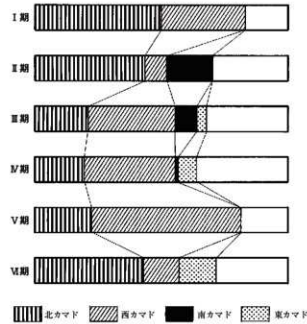


図14 カマド位置

【時期区分】

- ① I期・・・・・・Ⅰ群土器（舞台式期・住社式古段階）
- ② II期・・・・・・ⅡA・B群土器（住社式新段階）
- ③ III期・・・・・・Ⅲ群土器（栗園式期前葉）
- ④ IV期・・・・・・Ⅳ群土器（栗園式期中葉～後葉）
- ⑤ V期・・・・・・Ⅴ群土器（国分寺下層式期）
- ⑥ VI期・・・・・・Ⅵ群土器（表杉ノ入式期）
- ⑦ VII期・・・・・・Ⅶ群土器（10世紀代）

I期

調査区内では、高木遺跡にのみ6軒の堅穴住居跡（S I 02・75・94・122・169・170）が舞台式期頃の住居跡として検出できた。そのうちの170号住居跡は、カマドの対面に古墳時代中・後期の住居跡にみられる張り出しピットがあり、そこから舞台式期としても可能な土師器杯が出土していることからI期に区分した。しかし、調査区内では他に張り出しピットのある例は認められなかった。

第3編 考 察

それらの住居跡は、1・2・5号溝跡で区画される内側に位置し、その中心から弧状に配置されているようにも見受けられる。この一帯は、大雨によって度々冠水などの被害を受けていたことが推測され、自然堤防上でも最も標高が高く、水はけの良い居住に適した場所を選択して営まれたものとみられる。

169号住居跡は一辺約12mと、他時期の住居跡の中でも群を抜いて長大であるが、他の住居跡は一辺約4～6mの標準的な大きさである。94・122号住居跡が軸を揃えて並列するため建て替えの可能性も考えられるが、6軒の住居跡は同時期に機能していた集落とみられる。1軒の大型住居跡と数軒の住居跡で構成されている。

住居跡の主軸は、94・122号住居跡が南北ラインに一致させており、他は阿武隈川の流路方向に合わせた傾きとなっている。カマドは2号住居跡からは検出できなかったが、他の住居跡は西周壁か北周壁かに付設していた。主軸の傾きごとにカマド位置が異なっており、南北ラインに一致する94・122号住居跡は北カマドで、他の住居跡は西カマドであった。170号住居跡の張り出しビット以外には、他に付属施設などで目立った特徴のあるものは無かった。

Ⅱ期

出土遺物はⅡA群とⅡB群とに分類され、舞台式期から栗岡式期への移行期にあっている。しかし、出土遺物が乏しい住居跡では判断材料に欠けるため、遺構の時期は細分せずに同時期として扱うことにする。

Ⅱ期の住居跡は調査区内から20数軒の竪穴住居跡を検出し、前段階と同様に水はけの良い居住に適したところを選択して造られているようである。しかし、集落の範囲は、調査区南側を巡る大溝跡から高木遺跡の北端付近までと、住居跡の増加に伴いⅠ期に比べて南北に広がりをみせている。集落は、遺物の細分とも一致するように、重複関係からも大きく2時期に区分できるようである。

住居跡は、一辺約8m前後の大型住居跡（S I 69・104・129・142・155等）と一辺約5～6mの中型の住居跡、それよりも小型のものに分けることができる。土器群と同じように2時期とすると、ひとつの時期は大型住居跡2～3軒と中型住居跡など10軒程度で構成されることになる。住居跡の軸方向は、全体的に河川の流路方向に合わせているものが多く、Ⅱ期の中でも初期の住居跡にその傾向が強い。カマドは、はじめはⅠ期にみられたように西周壁からも検出できたが、大半は北周壁に付設している。主軸方向とカマド位置から、特にⅡ期の初め頃ののものについては、Ⅰ期よりもⅡ期のほうが規格的に造られているようである。

住居跡の構造等には大きな変化はないが、他の時期に比べるとカマド周囲から貯蔵穴が検出できた例が多い。また、ⅡB群土器の時期にあたと考えられる後出する住居跡は、カマドが南周壁に付設する傾向が認められる。ⅡB群土器が出土した142号住居跡は大型で遺存状態が良く、間仕切りまで確認できた住居跡である。その廃絶以降、その周囲に執拗な建て替えが行われるが、カマドが検出できた位置は142号住居跡も含めてすべて南周壁からであった。

土器群の時期区分に反映するように、Ⅱ期の後半に転換期を求めるとすれば、住居跡の軸方向がばらつき、南カマドが出現するなどして住居跡の規格性が崩れたときであろう。142号住居跡周辺の著しい建て替えなどもその現れかもしれない。Ⅱ期を通して、基本的には大型住居跡と数軒の一般的な住居跡とで構成される小さなまとまりがあり、それらが幾つか集まって集落を形成している。例えば、南側を巡る1・5号溝跡の北側に位置する住居跡の一群は、重複関係と軸方向、カマドの位置から2〜3軒ずつの3変遷が辿れ、Ⅱ期後半とみられる南カマドの住居跡は3変遷目にあたる。そのまとまりではⅡ期を通して営まれ続けているようである。

Ⅱ期の集落と大溝跡との関係は不明である。2号溝跡以北にもⅡ期の住居跡は広がっているにもかかわらず、大溝跡とは重複するものは無かった。大溝の巡る範囲からは、Ⅱ期に限らず住居跡の分布状況は希薄である。

Ⅲ期

この時期は栗園式期の前葉頃にあたり、検出した堅穴住居跡は約60軒が数えられ、集落が飛躍的に発展している。それらは調査区内の北側へも広がっており、北ノ脇遺跡の範囲からもⅢ期と考えられる住居跡を検出している。Ⅰ・Ⅱ期までは大溝の区画内に集中していたが、Ⅲ期以降はそのような傾向は認められず、自然堤防全体に広がっている。住居跡どうしの重複関係からは、Ⅲ期の集落は大きく2変遷が認められる。そして、集落の南側に巡る2条の大溝のうち、北に位置する5号溝跡の堆積土中からはⅢ期の住居跡を検出しており、この溝跡はⅢ期以前には築かれており、機能を停止している。

住居跡の大きさは、一辺約7 m以上の大型の住居跡（S I 18・36・53・100・131・151、北ノ脇S I 37等）、一辺約5〜6 mの中型の住居跡、一辺約4 m前後の小型の住居跡とに分かれる。Ⅱ期と大型住居跡の数はあまり変わらないが、重複する住居跡としては後出するものに多い。それ以外の一般的な住居跡は、Ⅱ期よりも小型化している。Ⅲ期の集落を2変遷とすれば、大型住居跡は同時に2〜5軒が併存しており、ひとつのまとまりは1軒の大型住居跡と5〜10軒ほどの小・中型の住居跡で構成されていたようである。

住居跡の大半は、主軸を河川の流路方向に合わせて造られているが、南北ラインに合わせているものが、重複関係の判断できるものの中では後出するものに存在する。特に2号溝跡の北側に位置する住居跡の一群が顕著で、18号住居跡を中心としたまとまりに認められる。それらの中には円面硯を出土した87号住居跡があり、他の遺構とは重複しないが、軸方向が一致するためⅢ期でも後出するものと考えられる。

カマドは、Ⅱ期とは異なり西周壁に付設するものが多く、次いで北周壁に付設しており、検出数の主体となっている。このような傾向はⅤ期まで続いている。また、Ⅱ・Ⅲ期には南カマドが認められるが、重複関係からはⅢ期でも後出するもので、Ⅱ期後半から継続するものではない。その他に住居跡の構造などに大きな変化は無いが、この時期までのカマドの権出しは住居跡の外側に長く

延びているものが多い。それは遺構がⅢまで掘り込まれていることが多く、検出状況の違いによるものかもしれない。

Ⅱ期までの集落と大溝との関係を判断できる材料は乏しいが、Ⅲ期のある時期には5号溝跡が築かれている。5号溝跡は、1・2号溝跡と比べるとやや規模が小さいが、1号溝跡と平行するように巡っており、1号溝跡に先行して造られた同じ用途のものと考えられる。5号溝跡の堆積土中からはⅢ期でも後出する158号住居跡を検出し、堆積土中からはⅢ群土器を中心とした遺物が出土したことから、少なくともⅢ期には機能していたようである。5号溝跡と対応するような北側の溝跡は確認できなかった。

集落内では、円面硯や耳環などが出土した住居跡も存在するが、特別な住居跡というものではない。

Ⅳ期

この時期は栗田式期の中葉から後葉頃にあたり、検出した竪穴住居跡はⅢ期とほとんど変わらず約60軒が数えられる。この時期の住居跡は、堆積土との識別が困難であったⅡ中に造られることが多く、実際はもう少し多かったものとみられる。Ⅲ期の集落を継続しながら、さらに発展させており、住居跡は調査区全体に広がっている。Ⅳ期の住居跡も、重複関係から大きく2変遷として捉えることができる。それらの住居跡の一部を大溝で区画しており、大溝跡と東側の後背湿地では大がかりな水辺の祭祀が行われている。

住居跡の大きさは、一辺約7m以上の大型の住居跡（S I 31・49・138・143・148、北ノ脇S I 3・24・33等）、一辺約5～6mの中型の住居跡、一辺約4m前後の小型の住居跡とに分かれる。大型住居跡の数は、Ⅱ・Ⅲ期とそれほど変わっていない。それ以外の住居跡の大きさは、Ⅲ期では小型の住居跡が主体であったが、Ⅳ期では中型のものが増加し、小型住居跡とは1：1の比率となる。Ⅳ期の集落を2変遷とすれば、大型住居跡は同時に約4、5軒が併存しており、その周囲に数軒の住居跡が配置されていたものとみられる。

住居跡は、全体的に河川の流路方向に合わせて造られている。カマドは、西周壁に付設されるものが多く、西カマドと北カマドの割合はⅢ期とほぼ同じであるが、南カマドはほとんど認められない。住居跡の傾きやカマドの位置は、1軒の大型住居跡を中心としたまとまりごとに制約が認められる。例えば、調査区北端の住居跡の一群は、新旧の遺構ごとに傾きとカマド位置が一致している。一方、南側の大溝の北に位置する一群は、新旧関係で変化は認められない。その他に住居跡の構造などに大きな変化は無いが、検出できた層序との関係からか、全体的にあまり深く掘り込むものが少ない。そのためか、カマドの煙道も確認できたものが少なかった。

1・2号溝跡からはⅣ群土器を中心とした遺物が出土しており、それらの大溝跡と東側の後背湿地では土器を多用した祭祀跡が確認されている。大溝は南側と北側に築かれ、平行して河川側から東側への湿地へと延び、集落の一部に巡らされている。南北の大溝に区画された内側と外側とでは、住居跡どうしに大きな違いは認められない。しかし、1号溝跡のすぐ北に位置する143・144号

住居跡は、調査区内から検出できた住居跡の中でも有数の遺物量が出土しており、周囲には比較的大きな住居跡が多い。

Ⅳ期の住居跡から出土した特徴的な遺物としては、143号住居跡から出土した刀剣類の鐙が挙げられ、1号溝跡からも祭祀に使用されたものとみられる武具類が出土していることから興味深い。

Ⅴ期

この時期は国分寺下層式期にあたり、堅穴住居跡約20軒を検出した。住居跡は、南側の大溝から調査区北端まで検出できたが、調査区北側の北ノ脇遺跡の範囲に集中する。それより南に位置するものは、適度な間隔をあけて3～4軒ずつが3カ所にまとまっている。住居跡の重複関係から少なくとも2変遷が迫れるが、大部分は国分寺下層式期でも前半のものである。この後半には堅穴住居跡の検出数は激減し、それと代替するように、北ノ脇遺跡の範囲にあたるO18グリッド付近からは、多数のピット群を検出している。

この時期の住居跡は、一辺約7mを越えるものは北ノ脇遺跡の10号住居跡だけで、他は1辺約3～6mに収まる。大きさは3～4mの小型のものと、5～6mの中型のものがあり、その比率は1：2である。主軸方向はおおよそ流路方向に一致しており、カマドは西周壁に付設するものが主流となる。住居跡の付属施設などに、他の時期との差は認められない。

集落は、基本的には前段階からの継続として捉えられるが、高木遺跡から北ノ脇遺跡へと中心部分に移っている。そのため、この時期には完全に大溝跡は機能を停止していると考えられる。その集落も、調査区内ではⅤ期の後半の堅穴住居跡がほとんど検出できないため、一時的に断絶するようである。しかし、ピット群が検出できたことから、この時期には調査区北端では掘立柱建物で建てられていたことが推測される。ピットどうしが重複することから建物跡も数変遷が迫れるようであるが、周囲の出土遺物を考慮しても、Ⅴ期後半に収まるものと考えられる。

Ⅵ期

この時期は表杉ノ入式期にあたり、平安時代の初め頃と考えられる住居跡7軒を検出した。住居跡の数としてはⅠ期と変わらないが、住居跡どうしにはやや時間差があるようである。それらは調査区北半に適当な距離を置いて散在している。自然堤防の東側の後背湿地では水稲耕作が行われていたものと考えられ、古墳時代の遺物包含層の上層からは耕作痕とみられる畝状遺構も検出されている。また、河川側からは鍛冶跡も検出できた。

住居跡の大きさは、長軸約6mの23号住居跡を除き、どの住居跡も1辺約4m前後の小型のもので、正方形である。住居跡の主軸方向は南北ラインに沿うものが多いが、8・12号住居跡は河川の流路方向に傾いて隣接することから、同時期に併存していたものとみられる。カマドは、6軒中3軒が北周壁に付設されていた。

住居跡は重複しないが、出土遺物からは多少の前後関係が認められ、北ノ脇遺跡から検出した7

・25号住居跡は他のものよりも先行するようである。Ⅳ期の集落は後背湿地側の水田に面したところに立地した、ひとつのまとまりが2～3軒程度の小規模のものである。

Ⅴ群土器は遺物が認められるものの、この時期の遺構は堅穴住居跡に限らず検出できなかった。古墳時代から続いた集落は、Ⅵ期を最後に終焉を迎えるようである。

1・2・5号溝跡

集落を区画したと考えられる大溝は、北側に位置する2号溝跡と、南側に位置する1・5号溝跡である。1・5号溝跡は東側が調査区外となるが、2号溝跡は約70mの長さを検出し、阿武隈川の氾濫源から蛇行しつつ東側の後背湿地へと延びており、後背湿地へつながる部分では区画された内側に向かって内湾している。3条の溝跡は、集落の中心部分を意識しながら、河川から後背湿地へと自然堤防を分断して巡っているものと考えられる。南側の1・5号溝跡と北側の2号溝跡との距離は約110mを測る。1・5号溝跡は浅い沢状の地形を選択しているが、2号溝跡は調査区内の最も標高の高い部分に築かれている。

溝跡は、1・2号溝跡は上端で幅約5～6m、深さ約1m前後と同規模であるため、2条の溝跡は対になっていったものと考えられるが、5号溝跡は上端で幅約3～4m、深さ約70～80mと規模が小さく、1号溝跡の北側に平行して延びている。断面は逆台形で、堆積土には人為的堆積の様相は認められなかった。大溝と後背湿地では祭祀関連の遺構を確認しているが、その祭祀跡は大溝の底面と、埋没が進んでからのものものを検出している。

堆積土中の出土遺物は、5号溝跡にはⅢ群土器、1・2号溝跡にはⅣ群土器が中心であった。1・5号溝跡との関係は、5号溝跡の堆積土中からはⅢ期でも後出すると考えられる住居跡を検出していることから、5号溝跡が先行して築かれている。また、2号溝跡はⅢ期でも後出すると考えられる住居跡を掘り込んでいるため、対となる1・2号溝跡はⅢ期以降に築かれている。それぞれの溝跡が機能していた時期は、5号溝跡はⅢ期を下限し、1・2号溝跡はⅢ期を上限としたⅣ期以降に求められる。

1・2号溝跡は、埋没の過程で行われた祭祀跡も栗囲式期に取りまり、後背湿地で行われた祭祀跡の時期とも一致することから、Ⅳ期の集落に巡らされていたものと考えられる。そして、5号溝跡は出土遺物も少ないことから、Ⅲ期の集落に限られた期間のみに存在し、1号溝跡に替わられている。5号溝跡の対になる北側の溝跡は確認できなかったが、1・2号溝跡との関係からも北側には同時期の溝跡が配置されていたものと考えられ、2号溝跡は拡張された可能性が考えられる。集落を区画する大溝は、集落の発展とともにⅢ期に出現し、Ⅳ期に拡張して、Ⅴ期以降は機能を停止している。

このように調査区内からは、Ⅰ～Ⅵ群土器の時期に相当するⅠ～Ⅵ期の住居跡を検出し、古墳時代後期から平安時代初めごろにかけて継続的に集落が営まれていた様子がうかがわれる。しかし、

V期後半になると竪穴住居跡がほとんど検出できず、替わって調査区北部には掘立柱建物が建てられていたようであり、V期からVI期へとは直接的にはつながらないようである。VI期の集落には、V期以前に認められた大型住居跡を含んでおらず、2～3軒程度の小型の住居跡で構成されている。この時期の集落数は増加するものの小規模化する傾向があり、VI期の集落は当時の一般的な在り方を示している。そのため、V期前半までの集落の在り方とは様相が異なっている。

I期に出現した集落も、この時期の一般的な在り方を示し〔註2〕、1軒の大型住居跡を含んだ数軒の住居跡で構成されている。I～IV期までの集落を概観すると、大型住居跡はIV期までは一定の割合を占めており、その周囲には数軒の小・中型の住居跡が配置されている。集落は、そのようなまとまりを最小単位として構成されている。II期以降の集落は、I期に比べると何倍にも住居跡数が膨れあがっているが、基本的にはI期の集落の在り方を発展させたもので、その単位集団〔註3〕が複数となって同時期に併存し、集落を形成しているのである。そして、II期までの段階では、それぞれ単位集団どうしの差別化はほとんど無かったものとみられる。

しかし、III・IV期になると集落には大溝が巡り、その一部を区画するようになる。大溝は約110m離れた南北に配置され、阿武隈川の氾濫源から後背湿地へと東西に延びている。南側と北側の大溝に挟まれた範囲は、西側は河川で、東側は湿地となっており、自然地形を利用した広義の環濠集落〔註4〕とも呼べそうである。大溝で区画される内側と外側とは明確な違いは認められないが、集落が自然堤防全体に拡張する過程で、中心的な役割を果たした単位集団が存在したことが考えられる。

IV期には、大溝と後背湿地とで水辺を意識して行われた祭祀跡を検出しており、集落内ではそのような大がかりな祭りを行うだけの統括者あるいは集団が必要であったと考えられる。IV期では、区画された内側の143号住居跡を中心とした範囲に、住居跡が軸を一にして並列しており、他の住居跡を卓越する量の遺物が出土している。その143号住居跡からは刀剣類の一部が出土しており、祭祀跡からも武器類が出土することから、あるいは中心的な役割を担っていたのかもしれない。前段階のIII期ではあまり顕著ではないが、II期の後半にも142号住居跡の周囲にはそのような傾向が認められる。

しかし、そのような集落もV期には中心部が高木地区から調査区以北の北ノ脇地区へと移っており、V期後半には掘立柱建物が出現する。この時期にあたる8世紀後半には、福島県内でも掘立柱建物跡が検出され始める時期で、竪穴住居跡で構成される住居跡群からは大型のものが消失していく。そのような集落の変化は、「墾田永世私財法」に示される律令制的土地所有制度の変質に伴い、伝統的家族の没落と新たな階層の台頭という集落内における階層分化が生じた（木本；1985）とも指摘されるが、調査区内でもそのような傾向と一致してくるのかもしれない。

阿武隈川右岸築堤関連の発掘調査では、遺跡群の約70%を発掘調査し、600軒を越える竪穴住居跡を検出している。そして、本調査区内から検出した住居跡の8割が移行期を含めた栗園式期のもの

で、今回の時期区分ではⅡ～Ⅳ期にあたる。この時期は、古墳時代の第三の画期（辻；1990）を包括しており、土器の型式からは生活様式の変化が認められ、墓制には横穴式石室や横穴が導入されるなど、東北地方南部の社会は大きく変容している。

そのような社会背景のもと、阿武隈川右岸の自然堤防上では継続的に集落が営まれている。Ⅱ～Ⅳ期の集落の膨脹は、自然堤防一帯に大規模な移住が行われた結果と考えられ、住居跡や出土遺物の中には他地域の影響が認められるものもある。例えば、出土遺物には関東地方の鬼高系や真間系が混入〔註5〕しており、カマドには関東地方に特徴的なもの〔註6〕が認められる。これらから、関東地方の人々が何らかの形で関わっていたことが想定され、右岸地区への移住計画は広範に影響力を持つ畿内政権の介入が無ければ考えられない。自然堤防の一帯は必ずしも居住に適してはおらず、集落は度々冠水して洪水砂で埋まりながらも長期にわたって営まれており、それなりの強制力があつたものとみられる。

律令体制が本格化し、中央集権化が推し進められるのは大化の改新後のこととされるが、地方への政策はそれ以後に急速に行われたものではなく、以前から継続的に為されていたようである。東北地方南部の一集落からも、その一端がうかがえる。（大 波）

〔註1〕右岸地区の自然堤防上に立地する遺跡群の総面積は約104,000㎡で、平成11・12年度に行われた「阿武隈川平成の大改修」に伴う発掘調査によって、総面積の約7割の発掘調査が終了した。平成10年度以前には、北ノ脇遺跡約1,870㎡、山王川原遺跡約535㎡、高木遺跡約5,909㎡、百目木遺跡約12,538㎡、あわせて約20,852㎡の発掘調査を行っている。

〔註2〕舞台式の標識遺跡となる岩瀬郡天栄村舞台遺跡（玉川；1981）では、約50m四方の範囲に9～10軒の竪穴住居跡で構成され、大型住居跡の周囲に小・中型の住居跡が配置されている。

〔註3〕1軒の大型住居跡と数軒の小・中型の住居跡で構成されるまとまりは、集落内では相対的に自立していたと考えられる最小の単位である。高木地区を中心とした自然堤防上に営まれた集落を近藤義郎氏のいう「共同体」とすれば、その最小単位は「単位集団」ということになる。（近藤；1959）

〔註4〕狭義の環濠集落では弥生時代の防御性集落を指すことがあるが、ここでは集落を区画するという広義の意味において使用している。濠あるいは堀によって居住区を区画するものとしては豪族館舎や館跡などもあつるが、一般的な集落は不特定多数の集団から構成されており、それらとは性格を異にしている。

〔註5〕高木遺跡から出土した何点かの土師器を胎土分析したところ、関東系としたものと在地のものとは、使用されていた粘土に大きな違いは認められなかった。（付編4参照）

〔註6〕宮城県内の遺跡では、関東系土師器を出土する住居跡のカマド構造には、在地のものとは異なった特徴が認められるものがある。それらの特徴は、①固壁を掘り込んでカマド本体を造る、②その際に最奥部を煙道の機能を持たせる、③構築土に白色粘土を使用する、④焚口を土師器甕で補強する等である。（村田；2000）高木遺跡で検出した住居跡にも同様のカマド構造を持つものが認められる。

第2章 ま と め

高木・北ノ脇遺跡は阿武隈川の自然堤防上に営まれた集落跡であり、北には山王川原遺跡、南には百目木遺跡が隣接し、4遺跡全体の長さは約1.5kmにもおよぶものである。ただしそれぞれの遺跡は単に字名で区切ったものであることから実際には一連の遺跡とすることができる。発掘調査は昭和63年度から継続して行われているが、規模の大きい調査は平成11年度であり、その年度には本宮町教育委員会と福島県文化センター（現福島県文化振興事業団）が分担して調査を実施した。それ以前の平成10年度までについては本宮町教育委員会単独で調査が進められており、報告書もすでに刊行済みである。以下、既刊の成果を加味しながら古墳時代以降の高木・北ノ脇遺跡のまとめを試みることにしたい。

当地区に古墳時代の遺構が認められるのは、塩釜式期からである。少数の住居跡が確認され遺物も少量が広い範囲に散発的に認められる。次に続く南小泉式期の資料も塩釜式期と同様の傾向があるが住居跡などは確認されていない。塩釜式期～南小泉式期は概ね古墳時代前期～中期にあたと考えられるが、本宮町において本遺跡の所在する阿武隈川右岸には当該時期の古墳は確認されていない。むしろ北隣の大玉村を含めた阿武隈川左岸西側の沖積地および微高地に該期の古墳が点在しており、中心的集落も左岸側に存在することが予想される。阿武隈川右岸地区は未開発部分が多かったものと考えられる。

古墳時代後期になると当地区において新たな集落の展開が見られ、住居跡も継続的に営まれるようになる。その開始は6世紀中葉頃と考えられ7世紀いっぱいまで規模の大きさを保っている。住居跡の変遷はⅠ期の6軒から始まり時期を追って数を増やし、Ⅲ・Ⅳ期にはⅠ期の10倍の数に及んでいる。おそらく自然堤防後背湿地側の開発が進み、広く開かれた水田に生産基盤があったものと推定される。

集落内に設けられた大溝は、Ⅲ期に出現しⅣ期に拡張されるようである。その性格については断定できる資料に乏しいが、溝内では祭祀が行われ、溝で区切られた内部の住居跡には多くの土器と若干の金属製品を有する大型の住居跡も見られることなどから、区画内の集団が集落の中心的位置を占めていた可能性はわずかではあるが認められるとすることができるかもしれない。しかしそれ以外では区画内と外では際立った差が認められないのも事実であり、今後類例を含めたさらなる検討が必要である。

なお、集落を見下ろす東側の丘陵上には当該時期の間谷山古墳群と根岸古墳群が存在し、集落と密接な関連を持って出現したものと予想される。

奈良時代になると住居跡の軒数は減少する傾向にあるものの、北ノ脇遺跡側に中心を持ちつつ集落が継続しているように見受けられる。おそらく律令体制の下で集落も変貌を遂げたものと予想さ

第3編 考 察

れる。本宮町の奈良時代の遺跡としては瓦の出土する小幡遺跡が目されるが、北ノ脇遺跡本宮町調査地区でも瓦片が出土し、掘立柱建物跡も検出されている。集落変貌の要因をうかがわせる一資料である。

平安時代の住居跡は調査区内に点在するあり方となる。調査されている平安時代の遺跡は阿武隈川左岸西側の低地に位置する遺跡が多いが、すべて小規模の調査であり全貌は不明な点が多い。ただ、本宮町付近は時代のやや下がった延喜6（906）年に安積郡から安達・入野・佐戸の3郷を分離して安達郡を健甞した際の安達郷ではないかとされる向きがあり、以前とは異なる集落形態を有しながらの充実ぶりが予想される。（安 田）

参 考 文 献

- 吾妻俊典 2001 「多賀城周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究会第6回シンポジウム』古代の土器研究会
- 石田明夫 1994 『会津大戸窯 遺物編』福島県会津若松市教育委員会
- 石本 弘 1995 「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』十四輯 東北史学会
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 木本元治・福島雅儀 1988 「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会 財福島県分化センター
- 木本元治 1990 「南東北地方における歴史時代の須恵器編年1」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』
- 木本元治 1999 「七世紀土器年代観の諸問題」『歴史』九三輯 東北史学会
- 工藤哲司 1982 「栗遺跡」仙台市教育委員会
- 後藤健一 1987 「西笠子第64号窯跡発掘調査報告書」静岡県湖西市教育委員会
- 小森俊寛 1998 「Ⅳ陶器」『古代の土器5-2 7世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器研究会
- 酒井清治 1981 「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館』第十三号
- 酒井清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開」『研究紀要』第11号 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治 1993 「須恵器の編年 関東」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣
- 佐久間正明 1996 「杯形土器の共通性からみた「舞台式」と周辺土器との関係」『法政考古学』第22集 法政考古学会
- 白石耕治 2000 「陶器窯における古墳時代の須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2000 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会
- 鈴木雅文 1989～1997 「阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅰ～Ⅷ」福島県安達郡本宮町教育委員会
- 高松俊雄・石本 弘 1993 「福島県における祭祀遺跡」『古墳時代の祭祀』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会
- 田辺昭三 1966 「陶器古窯址群Ⅰ」平安学同考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 玉川一郎 1981 「舞台」福島県岩瀬郡天栄村教育委員会
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の編年について（その2）」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』
- 鶴岡正明 2000 「関東における古墳時代の須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 東海土器研究会

- 鶴岡正明 2001 「関東出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会
- 長谷川厚 1995 「東国における七世紀史の意義」『王朝の考古学』大川清博士古希記念会編
- 長谷川厚 1995 「東国における律令制成立以前の土師器の特徴について」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 服部敬史 1995 「東国における古墳時代須恵器生産の特徴」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 服部敬史 1995 「東国における六・七世紀の須恵器生産」『王朝の考古学』大川清博士古希記念会編
- 村田晃一 1995 「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺一移民の時代—」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会
- 柳沼賢治 1987 「大根畑遺跡」福島県郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 柳沼賢治 1987 「福島県中通り地方の土師器について」『福島県に於ける古代土器の諸問題』万葉の里シンポジウム実行委員会
- 安田 稔・長田義雄 1992 「鳥打沢A遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県教育委員会 郡福島県文化センター
- 安田 稔・小暮伸之・大河原勉他 2001 「阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告1」福島県教育委員会 郡福島県文化センター
- 栗木 誠 1987 「南高岡窯跡群採集の須恵器」『真岡市史案内』第6号 真岡市教育委員会

付 編

- 自然化学分析 -

付編 1 北ノ脇遺跡から出土した木材・炭化材の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北ノ脇遺跡は隣接する高木遺跡とともに阿武隈川右岸の自然防上りに立地する。これまでの発掘調査により本遺跡は縄文時代と古墳時代の二つの文化層からなる複合遺跡で、古墳時代中頃から平安時代とくに7世紀を主体として大集落が営まれていたことが確かめられている。検出された遺構は竪穴住居跡、土坑、溝跡、竊穴などである。この中で、35号住居跡は焼失住居と考えられ、住居構築材の一部と考えられる炭化材が出土している。また、掘立柱建物跡の柱穴からは、柱材の一部が生木の状態で出土している。本報告では、これらの柱材や住居構築材について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 掘立柱建物跡の柱材の樹種

(1) 試料

試料は、7世紀～8世紀の掘立柱建物跡の柱穴（O18-67グリッドP9・P15、O19-7グリッドP31）から出土した柱材3点（FB001～003）である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・柀目（接線断面）の3断面の徒手切片を複製し、ガム・クロラール（指水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパレートを作製する。複製したプレパレートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。

表1 木材の樹種同定結果

番号	遺構	時期	用途	樹種
FB001	P9	7世紀～8世紀	柱材	カヤ
FB002	P15	7世紀～8世紀	柱材	カヤ
FB003	P31	7世紀～8世紀	柱材	カヤ

柱材は、全て針葉樹のカヤに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・カヤ (Torreyia nucifera Siebet Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には封をなしたらせん肥厚が認められる。

(4) 考察

掘立柱建物の柱材は、3点とも針葉樹のカヤであった。この結果から、柱材としてカヤが選択的に利用されていたことが推定される。カヤは木理が直で、耐水・耐湿性が比較的高い。また、樹幹が真っ直ぐにのび、大径木になる。掘立柱建物の柱材としては、材質、形状、大きさなどの点で適材といえる。このような材質を考慮した用材選択が行われていたと考えられる。

柱材を含む建築材にカヤが認められた例は、本州を中心に報告されているが、針葉樹のヒノキやスギに比較すると少ない（高地・伊東, 1998; 伊東, 1990）。福島県内では、御山千軒遺跡で建築材とされる丸材にカヤが確認されている（陶倉, 1983a; 鈴籠, 1983）。この結果は、今回の結果とも一致しており、少なくとも福島県の内陸部では、古墳時代から古代にかけて、カヤが柱材などの建築材として選択・利用されていたことが推定される。

本遺跡では、焼失住居跡も検出されているが、出土した炭化材にはモミ属が多く認められ、カヤは認められなかった。この結果から、掘立柱建物と竪穴住居では用材選択が異なっていた可能性がある。今後さらに資料を蓄積し、検討したい。

2. 焼失住居跡の炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、7世紀の焼失住居跡（S135）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材5点（FB001～005）である。

(2) 方法

炭化材は水を大量に吸っていった状態であったため、吸水性の高いJクワイバーの上に炭化材を載せて、常温で1ヶ

月ほど乾燥させた。木口・径目・板目の3断面の割断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定した。

(3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。

炭化材は針葉樹1種類(モミ属)と広葉樹1種類(ヤマグワ)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・モミ属 (Abies) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹胞道が認められる試料がある。

表2 S135炭化材の樹種同定結果

番号	時期	出土位置	用途	樹種
FB001	7世紀	埋積土	住居構築材	ヤマグワ
FB002	7世紀	床面	住居構築材	モミ属
FB003	7世紀	西壁階	住居構築材	モミ属
FB004	7世紀	西壁階	住居構築材	モミ属
FB005	7世紀	西壁階	住居構築材	モミ属

放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じょうず状末端壁が認められる。分野管孔はS字型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・ヤマグワ (Morus australis Poirlet) タワ科クワ属

環孔材で孔間部は1~5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、この塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2~3個が複合。小道管は管壁厚は中層、横断面では多角形に複合管孔をなす。道管は単管孔を有し、管孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は男性II~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は固状~黄状および散在状。年輪界は明瞭。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、埋積土の試料がヤマグワ、床面および西壁階の試料がモミ属であった。この結果から、S135の住居構築材は針葉樹のモミ属を中心とした用材選択であったことが推定される。

福島県内でこれまで行われた古墳時代~古代の住居構築材の樹種同定では、基本的には落葉広葉樹のクヌギ平部・コナラ節・クナなどが主とすることが多い。(嶋倉1983b, 1986a, 1986b, 1987, 1994; バリノサーヴェイ株式会社, 1987, 1995a, 1998a, 1998B, 1999)。モミ属の検出例は少ないが、大船道A遺跡の住居階で壁溝の板材に確認

された例や、深作A遺跡の貯蔵穴の蓋材などに認められた例がある(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1995a, 1995b, 1998, 1999)。今回の試料を見ると、3点は壁階から出土している。炭化材の形状からは、元の部材の形状を推定することは困難であるが、壁階から出土していることを考慮すると大船道A遺跡のように、板材として利用されていた可能性もある。試料の出土状況の詳細も含めて検討したい。また、周辺での類例の蓄積も進めたい。

引用文献

島地 謙・伊東隆夫編 (1998)

日本の遺跡出土木製品鑑賞, 296p. 雄山閣。

伊東隆夫 (1990)

日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1987)

炭化材同定, 「安積区函修理関連 大根畑遺跡 一発掘調査報告書」, p.69-74, 福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1995a)

深作A遺跡・深作B遺跡から出土した炭化材の樹種, 三春町文化財調査報告書第21集「田村西部工業団地関連遺跡調査報告書」, p.257-260, 福島県企業局・三春町教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1995b)

原町市島打沢A遺跡・島井沢B遺跡・大船道A遺跡から出土した炭化材の樹種, 福島県文化財調査報告書第315集「原町火力発電所関連遺跡調査報告書」, p.621-632, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1998a)

下宮崎A遺跡から出土した炭化材の樹種, 福島県文化財調査報告書第353集「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書2」, p.141-147, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1998b)

小又遺跡から出土した炭化材の樹種, 福島県文化財調査報告書第353集「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書2」, p.151-157, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部。

パブリコ・サーヴェイ株式会社 (1999)

白山A道跡・白山C道跡から出土した炭化材の樹種。福島県文化財調査報告書第354集「福島空港・あぶくま街道道跡発掘調査報告3」, p. 280-287, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部。

嶋倉巳三郎 (1983 a)

御山千軒道跡から出土した木質遺物。福島県文化財調査報告書第109集「東北新幹線関連道跡発掘調査報告VI 御山千軒道跡」, p. 9-30, 福島県教育委員会・日本国有鉄道。

嶋倉巳三郎 (1983 b)

上郷戸道跡出土炭化材の樹種。福島県文化財調査報告書第116集「国営総合農地開発事業 母畑地区道跡発掘調査報告12 上郷戸道跡・下郷戸道跡」, p. 184, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。

嶋倉巳三郎 (1986 a)

高畑道跡出土の炭化木。福島県文化財調査報告書第162集「国営総合農地開発事業 母畑地区道跡発掘調査報告20 高畑道跡・藪ノ原A道跡」, p. 22, 福島県教育委員会。

嶋倉巳三郎 (1986 b)

大内B道跡出土の炭化木。福島県文化財調査報告書第163集「国営総合農地開発事業 母畑地区道跡発掘調査報告21 免喰道跡・堂平B道跡・大内B道跡」, p. 162, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。

嶋倉巳三郎 (1987)

北大久保B・C道跡出土の炭化木。福島県文化財調査報告書第178集「国営総合農地開発事業 矢吹地区道跡発掘調査報告1 二本松道跡・北大久保B・C道跡」, p. 70, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。

嶋倉巳三郎 (1994)

炭化材樹種同定報告。福島県文化財調査報告書第288集「国営総合農地開発事業 母畑地区道跡発掘調査報告34 正直A道跡 -下巻-」, p. 385-388, 福島県教育委員会。

鈴鹿八重子 (1983)

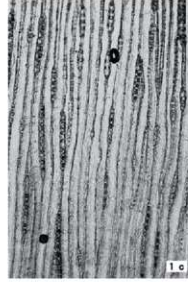
木製品の材質について。福島県文化財調査報告書第109集「東北新幹線関連道跡発掘調査報告VI 御山千軒道跡」, p. 307-310, 福島県教育委員会・日本国有鉄道。



写真1 木材



1. カヤ (FB1000001)
a : 木口, b : 柀目, c : 柀目



200µm : a
200µm : b, c

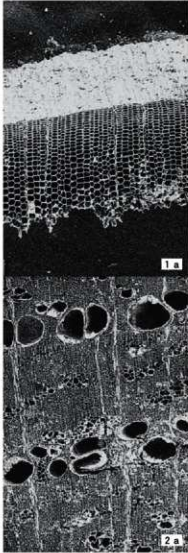
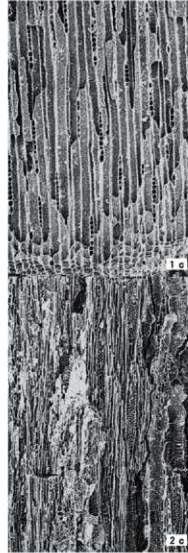


写真2 炭化材



1. モミ属 (FB1000003) 2. ヤマヅク (FB1000001)
a : 木口, b : 柀目, c : 柀目



200µm : a
200µm : b, c

付編2 高木・北ノ脇遺跡から出土した獣骨の同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高木遺跡と北ノ脇遺跡では、古墳時代中頃から平安時代とくに7世紀を主体として大集落が営まれていたことが確かめられている。この時期の遺構としては竪穴住居跡、土坑、溝跡、竈治などが検出されており、一部の住居跡や溝跡からは食物残渣の一部と考えられる焼けた獣骨片が出土している。これらの獣骨の種類を知ることは、周囲の環境と食生活などを知る上で重要である。本報告では、これらの獣骨片の同定を行い、動物食糧に関する資料を得る。なお、同定は早稲田大学の金子浩昌先生にお願いし、署名原稿として掲載する。

1. 試料

試料は、高木遺跡の各住居跡（11号、80号、106号、129号、142号）、2号溝跡と北ノ脇遺跡の3号住居跡から出土した獣骨片11点（FB1001～FB1011）である。各試料の詳細は、同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

ルーベなどを用いて各試料の形態的特徴を観察し、種および部位を同定すると共に、計測等の記録をおこなう。

3. 結果

同定結果を表1、獣骨の状況を図2に示す。以下に、早稲田大学の金子浩昌先生にお願いした結果を署名原稿として報告する。

4. 高木・北ノ脇遺跡から出土した獣骨の種類

早稲田大学 金子浩昌

(1) 結果

検出された動物は、以下の通りである。

哺乳綱 Class Mammalia

ウシ目 (偶蹄目) Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

・イノシシ

環椎 (FB1007)：大破しているが、左側の形態をほぼこの寸成獣。

鼻骨片 (FB1002) はあまり大型個体のものとは思えない。左上顎臼歯M2 (FB1009) と右下顎臼歯M3 (FB1010)：破損した歯冠部を残す。M2は比較的大きい個体の臼歯で、エナメル質咬耗が一部にみられる段階である。2才弱の年齢であろう。捕獲率の高い個体である。M3は歯冠幅狭く、イノシシとしては小さい臼歯である。イノシシの個体差は大きいので、このような小サイズの歯をもつ個体もある。咬耗は全面にエナメル質咬耗が及ぶので、M3歯出後さらに年を経ている個体である。4～5才と推定される。上述のように、2試料は別個体の歯である。

・ニホンジカ

標本個数としてはニホンジカの出土が多い。距骨 (FB10011) と踵骨 (FB1008) は断片であるが、各1点出土している。中手あるいは中足骨の遠位端 (FB1004) と基節骨 (FB1003)・(FB1005) 2点が出土している。

基節骨2点のなかで、1点は完存し、1点は近位端のみをのこす。被熱し、骨に亀裂を生じる程であるが、なお原形を保っていた。カマド中で埋没後移動することがなかったからであろう。

(2) 考察

10数点の獣骨であるが、種類はイノシシとニホンジカに限られ、他の動物を含むことがなかった。当時の主要な狩猟獣がこの2種であることを示している。

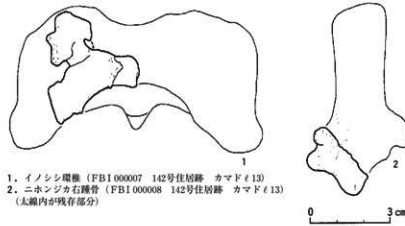
焼骨としては、保存の良い状態であった。条件に恵まれれば、このような骨を残すことを教えている。この時代の獣と人との関わりを知る貴重な資料といえよう。

付 編

表1 出土骨同定結果

遺物番号	遺跡名	遺構	出土層位	分類名	部 位	左右	部 分	備 考	計測値 (mm)
FB1001	高木遺跡	11b号住居跡	カマド焼土	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	-	後関節突起	焼骨	
FB1002	高木遺跡	80号住居跡	床面	イノシシ	鼻骨片	-		焼骨	
FB1003	高木遺跡	106号住居跡	＃11	ニホンジカ	基節骨	-	近位骨端	焼骨	
FB1004	高木遺跡	129号住居跡	＃13	ニホンジカ	中手骨/中足骨	-	遠位骨端	焼骨	
FB1005	高木遺跡	142号住居跡	カマド＃13	ニホンジカ	基節骨	-	完全	焼骨	Bp13.20, GL44.83, Bd11.84
FB1006	高木遺跡	142号住居跡	＃12	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	-	骨体片	焼骨	
FB1007	高木遺跡	142号住居跡	カマド＃13	イノシシ	環椎	-		焼骨	
FB1008	高木遺跡	142号住居跡	カマド＃13	ニホンジカ	踵骨	右		焼骨	
FB1009	高木遺跡	2号溝	F群	イノシシ	上顎前	左	M2	焼骨、咬耗 +/-	歯冠幅 18.29
FB10010	高木遺跡	2号溝	I群	イノシシ	下顎前	右	M3	焼骨、咬耗 +/+/+	歯冠幅 15.82
FB10011	北ノ脇遺跡	3号住居跡	埋積土	ニホンジカ	距骨	右		焼骨、CMあり	

<凡例>Bp:近位骨端, GL:骨全長, Bd:遠位端幅, +:象牙質まで咬耗, -:エナメル質のみ咬耗, CM:カットマーク(切痕)
M:犬臼歯



1. イノシシ環椎 (FB100007 142号住居跡 カマド＃13)
2. ニホンジカ右踵骨 (FB100008 142号住居跡 カマド＃13)
(太線内が残存部分)

図1 出土獣骨の残存状況

付編3 高木・北ノ脇遺跡出土製鉄遺物の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社 分析・評価事業部

埋蔵文化財調査研究室

岡原 正明 小川 太一 菅 孝宏

1. はじめに

財福島県文化センター蔵が、平成11年4月から福島県中
通り地方の中央部、安達郡本宮町に所在する高木・北ノ脇
遺跡を発掘調査され、住居跡、鍛冶炉跡等から出土した製
鉄遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環
として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依
頼があった。

調査の観点として、鉄滓については、①製鉄原料の推定、
②製鉄工程上の位置付け、③観察上の特記事項など、錐化
鉄塊については、①残存金属の確認、②金属鉄成分の分析、
③加工状況や観察上の特記事項などを中心に調査した。

その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査項目

表1参照

(2) 重量計測と着磁力調査

計重は電子天秤を使用しを行い、小数点2位以下で四捨
五入した。着磁力調査については、直径30mmのリング状フェ
ライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中
・やや弱・弱」の5ランクで、個別調査結果の文中に表示し
た。

表1 調査項目

試料No	種別	遺跡名	出土遺構	重量 g	着磁力	MC 反応	外観 写真	化学 成分	組織 写真	X線 回折
FBH001	鉄滓→ 粘土溶融物	北ノ脇	3号住居跡 #1	11.4	弱	無	○	○	○	
FBH002	鉄滓→ 粘土溶融物	高木	17B号住居跡 床上	12.7	稍弱	無	○	○	○	
FBH003	鉄滓→ 鼠鉤鉄塊系遺物	高木	30号住居跡 床上	47	強	有	○	○	○	
FBH004	鉄滓→ 鍛冶工程排滓	高木	88号住居跡 床上	13.7	中	無	○	○	○	
FBH005	鉄滓→ ガス質滓	高木	100号住居跡 #1	16.1	弱	無	○	○	○	
FBH006	鉄滓→ 鍛冶滓 (精錬工程後半または 鍛錬工程前半作業)	高木	101号住居跡 #1	68.9	稍強	無	○	○	○	
FBH007	鉄滓→ 粘土溶融物	高木	142号住居跡 床上	51.1	稍弱	無	○	○	○	
FBH008	鉄滓→ 椀形錐錐鍛冶滓	高木	2号特殊遺構 焼土上面	55.3	稍強	無	○	○	○	○
FBH009	鉄滓→ ガス質滓	高木	6号特殊遺構 #1	19.6	中	無	○	○	○	○

注 (1) 試料の名称、試料のNoおよび採取位置は文化振興事業団の試料に準拠した。
(2) 試料の種別の項で→後は弊社の検討結果である。
(3) MC反応とはメタルエッチャーによる残存金属の有無を示す。

付 編

(3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位までであるスケールを同時写し込みで撮影した。また、試料採取時の特質部分についても撮影を行った。

(4) 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行った。分析方法および分析結果は後頁の表2と表3に示した。この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行った。分析項目は、鉄滓が18成分、鉄塊遺物が13成分とした。

(5) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、熔融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶過程の状況を明らかにする。原因として100倍と400倍で撮影を行う。

(6) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定する。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。装置の仕様や測定条件、測定結果を別頁に添付した。

3. 調査および考察結果

試料毎の調査および考察結果を次に述べる。

(1) 試料番号 FBI00001 鉄滓-粘土溶融物

長さ52mm、幅26mm、厚さ18mmで、やや扁平で流出滓の先端状に見えるが、非常に軽量感がある試料である。その外観写真を後頁に示した。珪酸酸を巻き込んだような黒色発泡粗鬆な滓の様な感じで、内部は著しく発泡している。表面が内層部に1つあり、如壁溶融部の様に見える。全体に着磁力は弱く、MC反応はない。総重量は11.4gである。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に多くの空洞が存在する。鉱物組成は、

一様に溶融した基地のガラス質スラグが主体で、鉄滓の特徴的な晶相である白色歯状のウスタイト(FeO)結晶や、灰白色短冊状のファイヤライト($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)結晶等の鉱物組織は全く観察されない。また、所々に白く見える点は金属鉄細粒と推定される。

化学成分分析の結果(後頁の表2)によると、全鉄(T. Fe)は7.13%と少なく、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)1.07%に対して、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe 2O_3)は8.21%と相対的に高い。また、金属鉄(M. Fe)は0.56%と少なく、一方洋中の成分の指標となる所謂渣滓成分(SiO 2 +Al 2O_3 +CaO+MgO+Na 2 O+K 2 O)は88.3%と非常に高い。総じて、成分的には鉄分が少なくガラス成分の多いガラス質滓あるいは粘土遺物の成分構成に類似している。

一方、チタニア(TiO 2)は0.79%、バナジウム(V)も0.01%存在するが、その由来を砂鉄原料によるものなのか、あるいは粘土(1)によるものかを区別するのが困難な残存レベルである。しかし、鉱石に含まれる成分の一つである銅(Cu)は0.004%と更に少ないので、鉱石を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性は少ないものと推定される。また、化合水の値は0.45%なので、残存する鉄分が酸化第二鉄と水との化合物で鉄結の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄($\alpha\text{-FeOOH}$ 等)の状態ではほとんど残存していないことが推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図1と図2の結果では、砂鉄を始発原料とする製錬滓の一種である如壁粘土と反応して鉄分を殆ど含有しないガラス質滓に近いが、本試料のチタニアの含有量レベルは低く、かつ製錬滓の一種であるガラス質滓の組織に見られるウルボスピネル($2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)、イルメナイト(FeO $\cdot\text{TiO}_2$)等の鉄とチタンとの酸化化合物結晶等が晶出していない等の点が異なる。また、同一遺構から出土した後述の鍛冶滓の存在を考慮すると、一般に“けら”など素材的に完成されたものからの加工では、ウスタイト(FeO)の晶出した比重大の鉄滓を伴うが、素材的に未完成なものを対象とする精錬工程では高温状態で行うために、比較的比重の小さなガラス質の鉄滓を排すること2)および本試料の化学成分は鍛錬鍛冶工程における赤熱鉄材の酸化防止剤を塗布した溶融物の化学成分1)にも類似している等の点が指摘されるが、洋断面形状が黒色の光沢あるガラス質状態ではなく、粗面を呈していることから、本試料は恐らく如壁等の粘土材が溶融・流出した粘土溶融物である可能性が高いと推定される。

(2) 試料番号 FB000002 鉄洋→粘土溶融物

長さ42mm、幅38mm、厚さ18mmで、灰色塊状の試料である。その外観写真を後頁に示した。非常に軽量感があり、中央部から割れが確認される。持ち上げると3片に崩れた。内部は発泡が著しく軽石の空洞が多く観察される。付着土砂はない。知覚溶融部の様に見える。全体に着磁力はやや弱く、MC反応はない。総重量は12.7gである。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に多くの空洞が存在する。鉱物組成は、一様に溶融した基底のガラス質スラグが主体で、鉄洋の特徴的な晶粒である白色歯状のウスタイト(FeO)結晶や、灰白色短棒状のファイヤライト(2FeO・SiO₂)結晶等の鉱物組織は全く観察されない。また、所々に白く見える点は金属鉄細粒と推定され、先のFB000001試料と同様である。

化学成分分析の結果(後頁の表2)によると、全鉄(T, Fe)は46.29%と少なく、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)0.90%に対して、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe₂O₃)は7.68%と相対的に高い。また、金属鉄(M, Fe)は0.22%と少なく、一方洋中の成分の指標となる所謂渣洋成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は89.0%と非常に高い。総じて、成分的には鉄分が少なくガラス質成分の多いガラス質洋あるいは粘土遺物の成分構成に類似している。

一方、チタニア(TiO₂)は0.70%、バナジウム(V)も0.010%存在するが、その由来を鉄鉱原料によるものか、あるいは粘土1)によるものかを区別するのが困難な残存レベルである。しかし、鉱石に含まれる成分の一つである銅(Cu)は0.004%と更に少ないので、鉱石を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性は少ないものと推定される。また、化合水の値は0.85%なので、残存する鉄分が酸化第二鉄と水との化合物で鉄鱗の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄(α -FeOOH等)の状態ではほとんど残存していないことが推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図1と図2の結果では、先のFB000001試料とはほぼ同じで、また洋断面形状が黒色の光沢あるガラス質状態ではなく、粗粒面を呈していることから、本試料はFB000001試料と同様に知覚等の粘土材が溶融した粘土溶融物である可能性が高いと推定される。

(3) 試料番号 FB000003 鉄洋→鼠跡鉄塊系遺物

長さ43mm、幅37mm、厚さ26mmで、全体に水酸化鉄と砂礫の固着物に覆われた砂礫状試料である。その外観写真を後頁に示した。重量感があり、全面に割れがある。鑄化進行中の鉄塊系遺物であろう。全体に着磁力は強く、MC反応がある。総重量は47.0gである。残存鉄の金属箇所分析を行う。

残存金属箇所断面の顕微鏡組織写真を後頁に示した。顕微鏡組織写真には、適度に伸びた片状黒鉛が無秩序に析出し、基底はパーライト〔フェライトとセメントイト(炭化鉄)とが交互に層状になった組織〕より構成される所謂鼠跡鉄組織である。一般に、鋼鉄はこの組織のような鼠跡鉄と白鋼鉄(凝固のとき炭素がセメントイトとして晶出し、セメントイト中に斑点状にパーライト組織が見れる所謂レナードライト組織)に大別され、両者の差は、主として冷却速度と成分により生じる。本試料の場合、凝固直後の高温組織がゆっくと冷却されたものと思われる。

化学成分分析の結果(後頁の表3)によると、炭素(C)の含有量は3.55%であるが、珪素(Si)は0.037%、不純物金属元素としてアルミニウム(Al)が0.012%と非常に少なく、非金属不純物である硫黄(S)や燐(P)は0.11%と0.12%と少量含まれているが、総じて炭素含有量が高く、不純物の少ない鋼鉄(鉄鱗)鉄塊系遺物である。

また、鉄源原料が砂鉄であることの指標元素であるチタニウム(Ti)とバナジウム(V)は各々0.001%以下と非常に少なく、一方鉱石源の指標元素である銅(Cu)も0.007%と少ないので、本試料の始発鉄原料を特定することは困難であった。

以上の結果を総合すると、

この試料は、炭素含有量3.55%の不純物元素の比較的小さい鼠跡鉄塊系遺物と推定されるが、その始発鉄源を特定することは出来なかった。

(4) 試料番号 FB000004 鉄洋→鍛冶工程排滓

長さ38mm、幅29mm、厚さ11mmで、水酸化鉄と砂礫に覆われた試料である。その外観写真を後頁に示した。3方に割欠面を持ち、上面は扁平で成出洋状である。下部も砂礫が付着し、その断面は黒色発泡粗粒な洋である。全体に着磁力は中程度で、MC反応はない。総重量は43.7gである。砂礫は除去して分析用試料を採取する。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡写真では、黒い小さな空孔が散在する。顕微鏡組織には、大きな幅広短冊のややくずれた青灰色のフアイヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）結晶とその粒間に微細なマグネサイト（ Fe_3O_4 ）結晶および基地のガラス質スラグなどから構成される。また、一部赤褐色の弱化した酸化鉄（酸化第二鉄、 Fe_2O_3 ）と思われる細粒も観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の洋と考えられる。

化学成分分析の結果によると、全鉄（T, Fe）は36.9%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト： FeO ）は30.1%と高い値である。一方、酸化第二鉄（ヘマタイト： Fe_2O_3 ）は18.9%と相対的に少ない。また、金属鉄（M, Fe）は0.28%と少なく、洋中の成分の指標となる所謂渣洋成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ ）は49.9%と比較的高い。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム（酸化チタニウムで表示： TiO_2 ）は0.58%存在し、一方鉱石に含有される成分の一つである銅（Cu）は0.021%と相対的に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄洋である。また、化合水の値は0.39%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄屑の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄（ $\alpha\text{-Fe}(\text{OH})_2$ ）はほとんど存在しないものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけを特定するために、これまでの砂鉄および鉱石を始発原料とする製鉄関連道路（1）3）4）より出土した鉄洋類（約450点）について、T, Fe-TiO₂分布およびT, Fe-渣洋成分分布図等を整理し、本試料との比較分析を行った。その結果を後頁の図1～図3に示した。図1と図2の分布図において、本試料の位置づけは、鉱石を始発原料とする製錬洋グループもしくは砂鉄を始発原料とする鍛冶工程で排出された鉄洋の成分構成に類似したが、図3の鉱石を始発原料とする製錬洋グループと砂鉄を始発原料とする鍛冶洋との分類結果から、本試料は、明らかに鉱石を始発原料とする製錬洋ではなく、砂鉄を始発原料とする鍛冶工程で排出された鍛冶洋の一種に分類されると推定される。

以上の結果を総合すると、

- ①この試料は、鍛冶工程で排出された鍛冶洋の一種で、
 - ②鉄洋には砂鉄が使用された可能性が高い。
- ものと推定される。

(5) 試料番号 FB000005 鉄洋→ガラス質洋

長さ61mm、幅39mm、厚さ12mmで、その外観写真を後頁に示した。片面は黒光りしたガラス状の滑らかな面を持ち、他面はざらざらした粗粒面の如き溶融状の試料で、軽量感がある。全体に着磁力が弱く、MC反応はない。総重量は16.1gである。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に多くの空孔が存在する。鉱物組成は、一様に溶融した基地のガラス質スラグが主体であり、一部小さな白色歯状のウスタイト（ FeO ）結晶が凝集した箇所が存在する。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の洋と考えられる。

化学成分分析の結果（後頁の表2）によると、全鉄（T, Fe）は8.68%と少なく、酸化第一鉄（ウスタイト： FeO ）2.61%に対して、酸化第二鉄（ヘマタイト： Fe_2O_3 ）は9.12%と相対的に高い。また、金属鉄（M, Fe）は0.27%と少なく、一方洋中の成分の指標となる所謂渣洋成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ ）は85.7%と非常に高い。総じて、成分的には鉄分が少なくガラス質成分の多いガラス質洋あるいは粘土遺物の成分構成に類似している。

一方、チタニア（ TiO_2 ）とバナジウム（V）6.0, 0.022%存在するが、その由来を砂鉄原料によるものか、あるいは粘土（1）によるものかを区別するのが困難な残存レベルにある。しかし、鉱石に含有される成分の一つである銅（Cu）は0.007%と更に少ないので、鉱石を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性は少ないものと推定される。また、化合水の値は0.54%なので、残存する鉄分が酸化第二鉄と水との化合物で鉄屑の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄（ $\alpha\text{-Fe}(\text{OH})_2$ ）の状態ではほとんど残存していないことが推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図1と図2の結果では、砂鉄を始発原料とする製錬洋の一種である如き粘土と反応して鉄分を殆ど含有しないガラス質洋に近いが、本試料のチタニアの含有量は低く、かつ製錬洋の一種であるガラス質洋の組織に見られるウルボスピネル（ $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）やイルメナイト（ $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）等の鉄とチタンとの酸化化合物結晶等が晶出していないことが異なる。また、同一遺構から出土した後述の鍛冶洋の存在を考慮すると、一般に“けら”など素材的に完成されたものからの加工では、ウスタイト（ FeO ）の晶出した比重大の鉄洋を伴うが、素材的に未完成なものを対象とする精錬

工程では高温状態で行うために、比較的比重の小さなガラス質の鉄滓を排出すること②および本試料の化学成分は鍛錬鍛冶工程における赤熱鉄材の酸化防止剤を塗布した溶融物の化学成分①にも類似し、かつCaOおよびMgOなどの塩基成分も8.3%と多いことが指摘される。

したがって、本試料はその洋断面の形状からも、恐らく鍛冶工程の作業で排出されたガラス質である可能性が高いと推定される。

(6) 試料番号 FB1000006 鉄滓→鍛冶洋 (精錬工程の後半作業又は鍛錬工程の前半作業)

長さ62mm、幅59mm、厚さ15mmで、上面は扁平で端部に流出洋のような溶融面のある試料である。その外観写真を後頁に示した。割欠面は1つある。橙色の水酸化鉄が一部固着している。下面には木炭繊維もあり、割欠面は黒色発泡粗粒な洋状を呈し、重量感がある。全体に着磁力はやや強いが、MC反応はない。総重量は68.9gである。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に大きな空孔が散在し、空孔内には赤褐色の酸化した酸化鉄(酸化第二鉄、 Fe_2O_3)と思われる組織も観察される。顕微鏡写真では、灰白色の大きな幅広短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト($2FeO \cdot SiO_2$)結晶とその粒間に灰白色の粒状および骨状のウスタイト(FeO)結晶および基地のガラス質スラグなどから構成される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の洋と考えられる。

化学成分分析の結果によると、全鉄(T、Fe)は45.2%に対して、酸化第一鉄(ウスタイト： FeO)は47.5%と高い値である。一方、酸化第二鉄(ヘマタイト： Fe_2O_3)は11.5%と相対的に少ない。また、金属鉄(M、Fe)は0.28%と少なく、洋中の成分の指標となる所謂渣滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + Na_2O + K_2O$)は39.0%と比較的高い値であった。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム(酸化チタニウムで表示： TiO_2)は0.46%と多く、バナジウム(V)も0.06%存在し、一方鉱石に含まれる成分の一つである銅(Cu)は0.04%と非常に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、化合水の値は0.76%なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄結晶の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄($\alpha-FeOOH$ 等)が少々存在すると推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図1と

図2の分布図において、鉱石を始発原料とする製錬洋グループもしくは砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶洋グループの境界領域に位置するが、一方図3の鉱石を始発原料とする製錬洋グループと砂鉄を始発原料とする鍛冶洋との分類結果から、本試料は、明らかに鉱石を始発原料とする製錬洋ではなく、砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶洋と鍛錬鍛冶洋の境界領域に位置し、本試料が砂鉄を始発原料とする鍛冶洋で、精錬工程の後半作業または鍛錬工程の前半作業で排出された鍛冶洋に分類されると推定される。

以上の結果を総合すると、

①この試料は、精錬鍛冶工程の後半または鍛錬鍛冶工程の前半作業のいずれかで排出された鍛冶洋で、

②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、ものと推定される。

(7) 試料番号 FB1000007 鉄滓→粘土溶融物

長さ75mm、幅55mm、厚さ38mmの灰色葡萄房状の試料である。その外観写真を後頁に示した。試料FB1000002とよく似た性状の様に見える。砂礫に付着も少なく、水酸化鉄もない。ひび割れは1箇所あり、内部は発泡し粗粒軽量感がある。全体に着磁力はやや弱く、MC反応もない。総重量は51.1gである。

洋断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に多くの空孔が存在する。鉱物組成は、一様に溶融した基地のガラス質スラグが主体で、鉄滓の微細な晶粒である白色鱗状のウスタイト(FeO)結晶や、灰白色短冊状のファイヤライト($2FeO \cdot SiO_2$)結晶等の鉱物組織は全く観察されない。また、所々に白く見える点は金属鉄細粒と推定され、先のFB1000002試料と同様である。

化学成分分析の結果(後頁の表2)によると、全鉄(T、

Fe)は6.58%と少なく、酸化第一鉄(ウスタイト： FeO)1.42%に対して、酸化第二鉄(ヘマタイト： Fe_2O_3)は7.59%と相対的に高い。また、金属鉄(M、Fe)は0.17%と少なく、一方洋中の成分の指標となる所謂渣滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + Na_2O + K_2O$)は88.7%と非常に高い。総じて、成分的には鉄分が少なくガラス質成分の多いガラス質洋あるいは粘土遺物の成分構成に類似している。

一方、チタニウム(TiO_2)は0.88%、バナジウム(V)も0.01%存在するが、その由来を砂鉄原料によるものか、

あるいは粘土 1) によるものを区別するのが困難な残存レベルである。しかし、鉱石に含まれる成分の一つである銅 (Cu) は 0.002% と非常に少ないので、鉱石を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性は少ないものと推定される。また、化合水の値は 0.37% なので、残存する鉄分が酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) の状態ではほとんど残存していないことが推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図 1 と図 2 の結果では、先の FB1000001 試料とはほぼ同じで、また洋断面形状が黒色の光沢あるガラス質状態ではなく、粗粒面を呈していることから、本試料は FB1000001 試料と同様に伊里等の粘土層が溶融した粘土溶融物である可能性が高いと推定される。

(8) 試料番号 FBH000008 鉄滓→塊形精錬鍛冶滓

長さ 53mm、幅 48mm、厚さ 22mm の小型塊形状の試料である。その外観写真を後頁に示した。重量感があり、上面は褐色で赤茶色の水酸化鉄が付着している。下部は塊底状で全体に砂塵の付着は少なく、一口壺頭状である。全体に着磁力はやや強いが、MC 反応はない。総重量は 55.3g である。

洋断面の 100 倍と 400 倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡写真では、灰白色の大きな幅広短冊のややくずれた青灰色のファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶と灰白色の粒状および骨状のウスタイト (FeO) 結晶および基地のガラス質スラグなどが主として観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。

別頁の X 線回折チャートでは、ファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) の強いピークが検出され、この他中程度のウスタイト (FeO) および少量の鉱物質シリカ (SiO_2) の存在がみとめられる。また、金属鉄 ($\alpha\text{-Fe}$) の存在を表わすピークは検出されない。

化学成分分析の結果によると、全鉄 (T, Fe) は 48.1% に対して、酸化第一鉄 (ウスタイト) : FeO は 52.6% と高い値である。一方、酸化第二鉄 (ヘマタイト) : Fe_2O_3 は 49.4% と相対的に少ない。また、金属鉄 (M, Fe) は 0.56% と少なく、洋中の成分の指標となる所謂渣成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は 35.7% である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニウム (酸化チタニウムで表示: TiO₂) は 0.35% で、一方鉱石に含まれる成分の一つであ

る銅 (Cu) は 0.029% と相対的に少ない。したがって、本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性の高い鉄滓である。また、化合水の値は 0.53% なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 ($\alpha\text{-FeOOH}$ 等) がほとんど存在しないものと推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図 1 と図 2 の分布図において、鉱石を始発原料とする製錬洋グループもしくは砂鉄を始発原料とする鍛冶洋グループの境界領域に位置するが、一方図 3 の鉱石を始発原料とする製錬洋グループと砂鉄を始発原料とする鍛冶洋グループとの分類結果から、本試料は、明らかに前者ではなく、後者の精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界領域に位置し、本試料が砂鉄を始発原料とする鍛冶滓で、精錬工程の後半作業または鍛錬工程の前半作業で排出された鍛冶滓に相当すると考えられるが、更にその塊形状を加味すると、精錬工程の後半作業で排出した塊形精錬鍛冶滓と推定される。

以上の結果を総合すると、

①この試料は、その形状をも加味し、塊形精錬鍛冶滓で、

②鉄源には砂鉄が使用された可能性が高い、

ものと推定される。

(9) 試料番号 FBH000009 鉄滓→ガラス質洋

長さ 42mm、幅 35mm、厚さ 23mm で、須臾器片か鉱物を噛み込んでいる様な部分も観察される流出洋状の小片試料である。その外観写真を後頁に示した。上部は胡麻塩状の理で光沢があり、下部は褐色の水酸化鉄に薄く覆われ、部分的に黒色泡発粗粒な洋状を呈する。全体に着磁力は中程度で、MC 反応はない。総重量は 19.6g である。

洋断面の 100 倍と 400 倍の顕微鏡写真を後頁に示した。顕微鏡組織には、洋中に大小多くの空孔が散在し、空孔内には赤褐色の錐化した酸化鉄 (酸化第二鉄, Fe_2O_3) と思われる組織も観察される。鉱物組成は、一様に溶融した基地のガラス質スラグが主体であり、特定できる鉱物結晶は観察されない。

別頁の X 線回折チャートでは、鉱物である $[\text{Na, Ca}](\text{Al, Si})_4\text{O}_{18}$ の強いピークが検出され、この他中程度のマグネサイト (Fe_3O_4) と鉱物質シリカ (SiO_2) の存在がみとめられる。また、ファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) や、ウスタイト (FeO) および金属鉄 ($\alpha\text{-Fe}$) の存在を表わすピークは検出されない。

化学成分分析の結果(後頁の表2)によると、全鉄(T. Fe)は7.11%と少なく、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)1.74%に対して、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe₂O₃)は7.83%と相対的に高い。また、金属鉄(M. Fe)は0.28%と少なく、一方洋中の成分の指標となる所謂渣滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は88.7%と非常に高い。総じて、成分的には鉄分が少なくガラス質成分の多いガラス質洋あるいは粘土遺物の構成に類似している。

一方、チタニア(TiO₂)は0.66%、バナジウム(V)も0.016%存在するが、その由来を砂鉄原料によるものか、あるいは粘土1)によるものかを区別するのが困難な残存レベルにある。しかし、鉱石に含まれる成分の一つである銅(Cu)は0.003%と更に少ないので、鉱石を始発原料とする製鉄工程で生成した可能性は少ないものと推定される。また、化合物の値は0.32%なので、残存する鉄分が酸化第二鉄と水との化合物で鉄燐の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄(α -FeOOH等)の状態ではほとんど残存していないことが推定される。

一方、本試料の製鉄工程上の位置づけは、後頁の図1と図2の結果では、砂鉄を始発原料とする製煉洋の一種である伊噺粘土と反応して鉄分を殆ど含まないガラス質洋に近いが、本試料のチタニアの含有量は低く、また、同一遺構から出土した前述の鍛冶洋の存在を考慮すると、一般に“けら”など素材的に完成されたものからの加工では、ウスタイト(FeO)の晶出した比重大の鉄洋を伴うが、素材的に未完成のものを対象とする精錬工程では高温状態で行うために、比較的小さいガラス質の鉄洋を排出すること2)および本試料の化学成分は鍛錬鍛冶工程における赤熱鉄材の酸化防止剤を塗布した溶融物の化学成分3)にも類似し、かつCaOおよびMgOなどの塩基成分も9.05%と多く、先の試料・FBH000005と同様である。

したがって、本試料は、恐らく鍛冶工程の作業で排出されたガラス質洋である可能性が高いと推定される。

4. まとめ

考察の結果は次のようになる。

1) 出土した製鉄遺物の製鉄工程上の位置づけは、以下の通り推定された。

①試料番号FBH000001、000002そして000007は、伊噺等の粘土材が溶融・流出した粘土溶融物である。

②試料番号FBH000005と000009は、鍛冶工程で排出されたガラス質洋である。他方、FBH000004試料も鍛冶工程で排出された鍛冶洋の一種(通常の精錬、鍛錬鍛冶洋とは成分構成が異なる)である。

③試料番号FBH000006と000008は鍛冶洋で、前者は精錬工程の後半作業または鍛錬工程の前半作業の何れかで排出された鉄洋であり、一方後者は碗形精錬鍛冶洋である。

④試料番号FBH000003は、炭素含有量3.55%で不純物の少ない鼠崎鉄塊系遺物である。

2) 本遺跡から出土した鉄洋類の始発鉄原料には、砂鉄が使用された可能性が高いと推定されるが、一方試料FBH000003の鼠崎鉄塊系遺物の始発鉄原料を特定することは困難であった。

5. 参考文献

- 1) 大澤正己、梅原朝堂遺跡出土金属製品と鍛冶・鑄造関連遺物の金属学的調査、第二分冊、富山県文化振興財団(1996)
- 2) たたら研究会編『日本古代の鉄生産』たたら研究会、P.70、(1991)
- 3) 相馬開発関連遺跡調査報告(1991年3月、1997年3月) 原町火力発電所関連遺跡調査報告(1997年3月、1998年2月、1998年3月) 常磐自動車遺跡調査報告(1995年2月、1996年7月、1999年3月) いわき市平ノバス水道跡(1994年7月、1995年3月) 郡山市妙音寺遺跡(1996年1月) 新潟県三島郡和島村・門新遺跡、八幡林他(1995年2月、1996年12月) 山梨県八田村大塚遺跡(1997年3月) 山梨県横森東下遺跡(1998年3月) 山梨県白根町百々遺跡②(2000年3月) 等々の砂鉄を始発原料とする出土鉄洋関連の分析調査報告書、川崎テクノリサーチ報。
- 4) 窪田龍嗣著、『製鉄遺跡』ニュー・サイエンス社、P.81、(1986); たたら研究会編『日本古代の鉄生産』たたら研究会、P.164、(1991)、他。

化学成分分析表

表2 高木・北ノ嶺遺跡出土鉄滓類の化学成分分析結果(2-1)

試料No	T・Fe	M・Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
FBH001	7.13	0.56	1.07	8.21	62.1	14.4	3.65	1.72	3.51	2.92
FBH002	6.29	0.22	0.90	7.68	60.7	15.2	4.90	1.62	3.28	3.31
FBH004	36.9	0.28	30.1	18.9	35.4	8.42	1.91	1.10	1.49	1.55
FBH005	8.68	0.27	2.61	9.12	58.3	13.2	6.15	2.18	3.36	2.52
FBH006	45.2	0.28	47.5	11.5	27.0	6.15	2.59	0.75	1.65	0.85
FBH007	6.58	0.17	1.42	7.59	62.7	16.2	3.05	1.72	3.60	2.44
FBH008	48.1	0.56	52.6	9.49	25.1	5.91	1.97	0.58	1.36	0.80
FBH009	7.11	0.28	1.74	7.83	60.6	15.1	5.75	3.30	1.08	2.88

高木・北ノ嶺遺跡出土鉄滓類の化学成分分析結果(2-2)

試料No	MnO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	化合水	P ₂ O ₅	C	V	Cu	造滓成分	TiO ₂ /TFe
FBH001	0.14	0.79	0.006	0.45	0.302	0.056	0.011	0.004	88.30	0.111
FBH002	0.13	0.70	0.006	0.85	0.272	0.063	0.01	0.004	89.01	0.111
FBH004	0.08	0.58	0.002	0.39	0.130	0.059	0.008	0.021	49.87	0.016
FBH005	0.17	0.96	0.029	0.54	0.349	0.063	0.012	0.007	85.71	0.111
FBH006	0.08	0.46	0.001	0.76	0.241	0.069	0.006	0.004	38.99	0.010
FBH007	0.13	0.88	0.012	0.37	0.241	0.047	0.011	0.002	88.71	0.134
FBH008	0.05	0.35	0.001	0.53	0.275	0.049	0.004	0.029	35.72	0.007
FBH009	0.14	0.66	0.018	0.32	0.118	0.032	0.016	0.003	88.71	0.093

[分析方法] JISに準拠し、以下の方法で行いました。

T・Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

M・Fe : 臭素メタノール分解-E D T A滴定法

FeO : ニクロム酸カリウム滴定法

Fe₂O₃ : 計算

C・W : カルフウィッシャー法

C : 燃焼-赤外線吸収法

CaO, MgO, MnO, Cr₂O₃, Na₂O, V, Cu : ICP発光分析法

SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, TiO₂, P₂O₅, K₂O : ガラスビード蛍光X線分析法

但しCaO, MgO, MnOは含有率に応じてICP分析法または蛍光X線分析法

表3 高木・北ノ嶺遺跡出土鉄塊の化学成分分析結果

試料No	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Cr	Al	V
FBH003	3.55	0.037	0.001	0.110	0.1	0.007	0.001	0.001	0.012	0.001
試料No	Ti	Ca	Mg							
FBH003	0.001	0.090	0.007							

[分析方法] JISに準拠し、以下の方法で行いました。

Si, Mn, Al, P, Cu, Ti, Cr, Ni, V : ICP発光分析法

C, S : 燃焼-赤外線吸収法

Ca, Mg, Ni : 原子吸光分析法

6. 参考

(1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると、

①製鉄滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して、酸素を取り除き、金属鉄を取り出す時に発生するもので、炉内滓や炉底滓および炉外流出滓などがある。

②精錬治滓 (大鍛治滓) ①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材 (鉄塊) にする時に生成するもので、成分的には①の製鉄滓に近い。

③鍛錬治滓 (小鍛治滓) ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して、鉄製品を作っていく過程で生成する鉄滓で、その生成過程により塊形鍛治滓、鍛造割片や粒状鉄滓 (通称湯玉) 等の形となる。

④鋳物滓 鉄を溶解し、鋳型に流し込んで鋳物を作る時に生成するもの。

等がある。

本報告では、本道産出土試料の製鉄工程上の位置づけを

特定するために、これまでの製鉄関連道産1) 3) 4) より出土した鉄滓類の分析データ (約450点) と合わせて、T、Fe-TiO₂分布図 (図1参照)、T、Fe-造滓成分分布図 (図2参照) として鍛治滓の分類図 (図3参照) の作成を行い、本試料との比較分析を行った。

鉄は再加工 (いわゆるリサイクル) の可能な素材として利用できるもので、鍛治場には各地で新規に生産された鉄と同時にリサイクル品が持ち込まれてきた可能性もあると考えるのが妥当である。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか、製鉄技術の進歩の状況はどうであったか等については、特定製鉄道産に付随する鍛治工房や、製品としての鉄器類の道産調査研究を進めて行く過程で更に解明出来るものと思われる。

(2) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分 (Total Fe=T、Feと表示) の量と、その後に記載されている金属鉄 (Metallic Fe=M、Fe)、酸化第一鉄 (FeO) および酸化第二鉄 (Fe₂O₃) との関係を簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄 (鉄と酸素の化合物) を示しており、それらの鉄

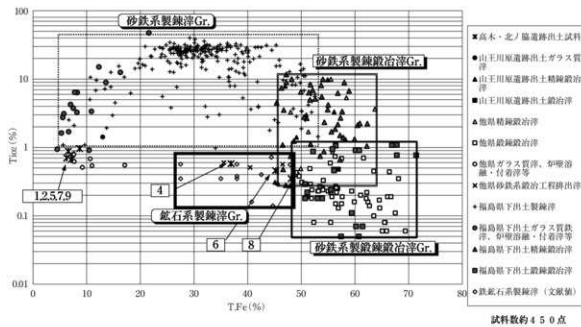


図1 出土鉄滓類の全鉄量 (T、Fe) - チタニア (TiO₂) 量分布図

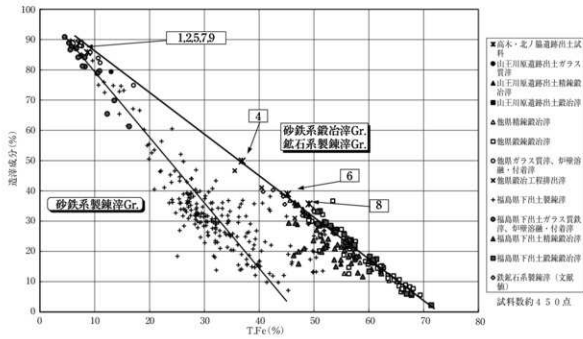


図 2 製錬萍と鍛治萍の分類

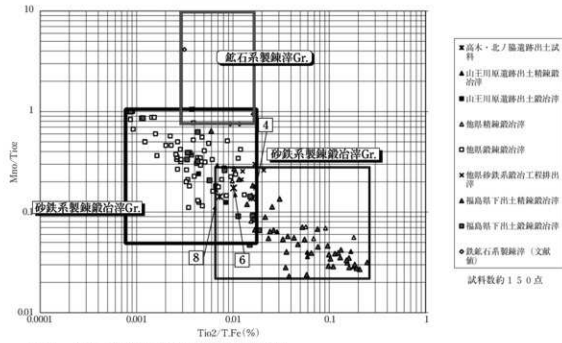


図 3 砂鉄系鍛治萍と鉍石系製錬萍の分類

(Fe) の量と M、Fe の量とを合計したものが前者の T、Fe となる。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要がある。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄滓中の鉄の成分量を見る場合には、全鉄分 (T、Fe) が重要になる。

なお、酸化鉄の他の化合物としては四三酸化鉄 ($\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 = \text{Fe}_3\text{O}_4$) があるが、化学成分分析から直接含有量は求められない。

また、水分との接触が多い鉄器や鉄滓の場合、水分 (C、W) と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄 ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O} = 2\text{FeOOH}$) が一般的に認められる。その時の鉄錆の形態は、ゲーサイト [Goethite: $\alpha\text{-FeOOH}$]、アカゴナイト [Akagonite: $\beta\text{-FeOOH}$]、レピッドクロサイト [Lepidocrocite: $\gamma\text{-FeOOH}$] の3種であり、生成環境や条件により変化する。

(3) 鉄滓の化合物について

鉄滓を構成する化合物は一般に次のようなものであり、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められる。なお、このほかにガラス質の化合物も存在する。

ウスタイト : Wustite (FeO) 白色の礫玉または葡萄の房状結晶

ファイヤライト : Fayalite ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 短冊状やレース状の長い結晶

マグネタイト : Magnetite (Fe_3O_4) 多角盤状または樹枝状の結晶

ヘマタイト : Hematite ($\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$) 赤褐色~赤紫色

マグヘマイト : Maghemite ($\gamma\text{-Fe}_2\text{O}_3$) 赤紫色~黒紫色

ウルボスピネル : Ulvospinel ($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 淡褐色、角尖状~六角形状結晶

イルメナイト : Ilmenite ($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 褐色針状の長い結晶

シュードブルッカイト : Pseudobrookite ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$) 針状または板状結晶

ゲーサイト : Goethite ($\alpha\text{-FeOOH}$) 黄赤色、不定型

アカゴナイト : Akagonite ($\beta\text{-FeOOH}$) 黄色、不定型

レピッドクロサイト : Lepidocrocite ($\gamma\text{-FeOOH}$) 橙赤色、不定型

ヘーシナイト : Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) クスタイト中に多く析出。胡麻粒状

その他、石英=クオーツ (Quartz: SiO_2)、ルーサイト (Leucite: KAlSi_2O_6)、プラギオクレーゼ [Plagioclase: (Na, Ca) (Al, Si) 4O_8]、フロマイト [Dolomite: $\text{CaMg}(\text{CO}_3)_2$] 等の鉱物やガラス質のものがある。なお、色調は前記したものと若干異なる場合もある。

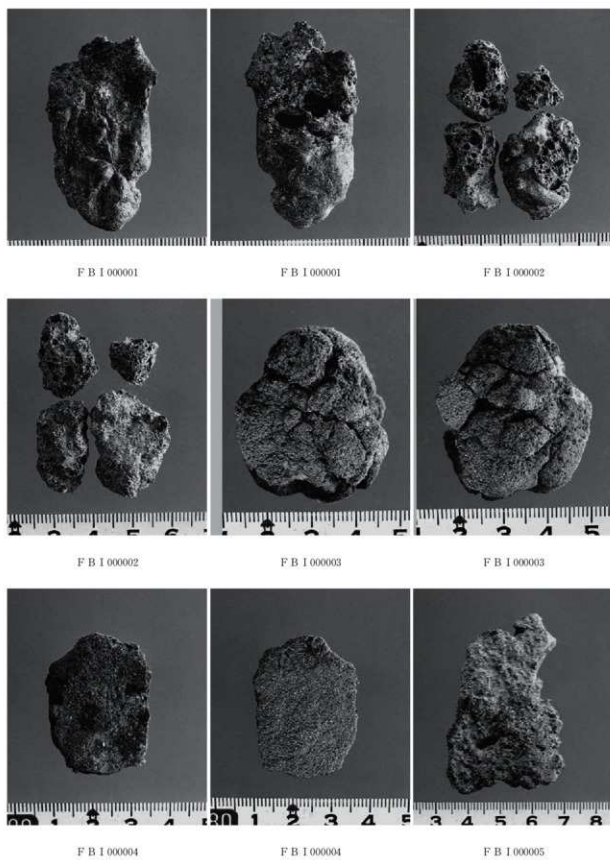


写真1 高木・北ノ脇遺跡の鉄滓外観写真

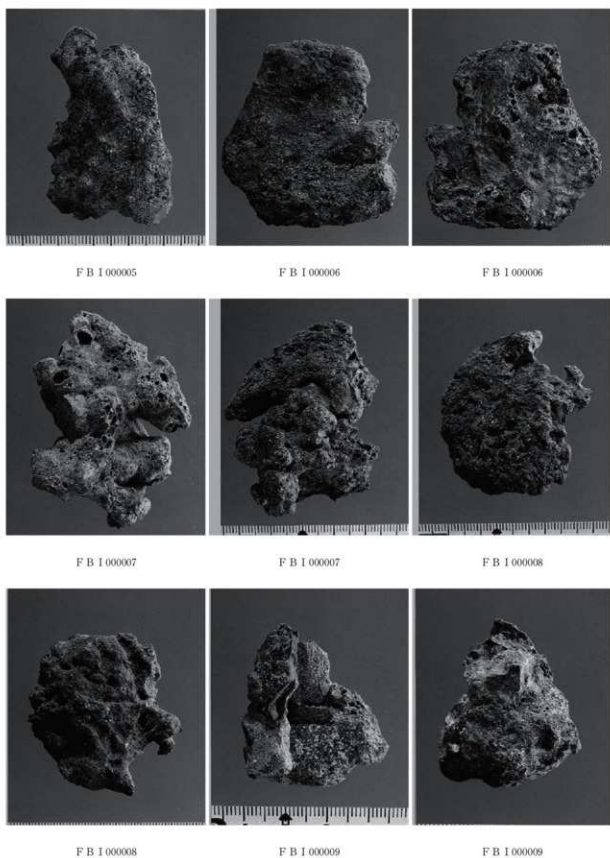
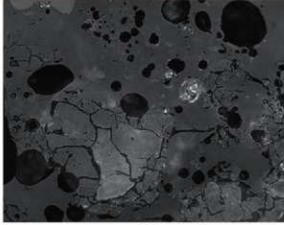


写真2 高木遺跡の鉄滓外観写真



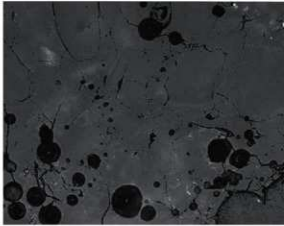
×100



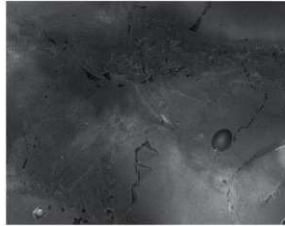
×400

(写真は2/3に縮小)

写真3 北ノ脇遺跡 試料NoFB1000001 鉄滓の組織写真



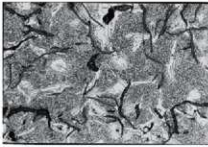
×100



×400

(写真は2/3に縮小)

写真4 高木遺跡 試料NoFB1000002 鉄滓の組織写真



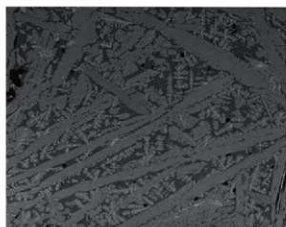
×100



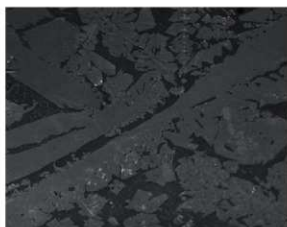
×400

(写真は2/3に縮小)

写真5 高木遺跡 試料NoFB1000003 鉄滓の組織写真(ナイタル腐食)



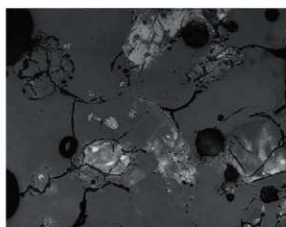
×100



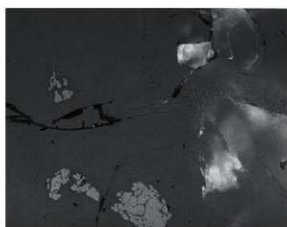
×400

(写真は2/3に縮小)

写真6 高木遺跡 試料NaFBI000004 鉄滓の組織写真



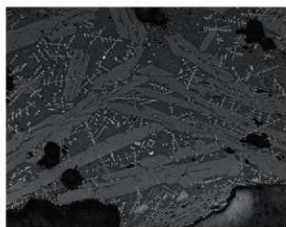
×100



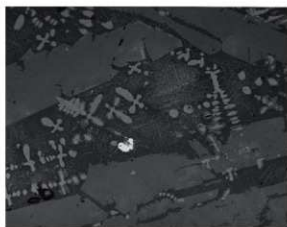
×400

(写真は2/3に縮小)

写真7 高木遺跡 試料NaFBI000005 鉄滓の組織写真



×100



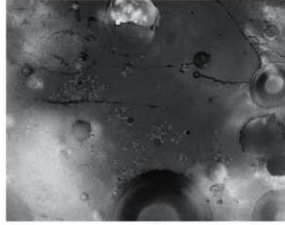
×400

(写真は2/3に縮小)

写真8 高木遺跡 試料NaFBI000006 鉄滓の組織写真



×100



×400

(写真は2/3に縮小)

写真9 高木遺跡 試料NaFBI000007 鉄滓の組織写真



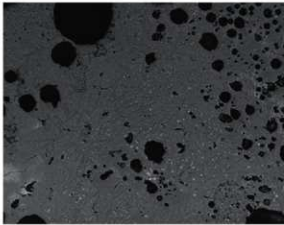
×100



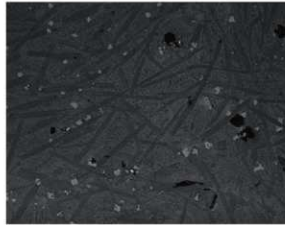
×400

(写真は2/3に縮小)

写真10 高木遺跡 試料NaFBI000008 鉄滓の組織写真



×100



×400

(写真は2/3に縮小)

写真11 高木遺跡 試料NaFBI000009 鉄滓の組織写真

試験報告書

- | | |
|--|-------------------------|
| 1. 件名
X線回折による鉄滓の定性分析 | ④スキャンング・スピード : 2°/min. |
| 2. 試料番号
FB1000008 FB1000009 | ⑤サンプリング・インターバル : 0.020° |
| 3. 測定装置
理学電機株式会社製ガイガー・フレックス (RAD-II A型) | ⑥D. S. スリット : 1° |
| 4. 測定条件
①使用X線 : Co-K α (波長=1.79021Å) | ⑦R. S. スリット : 0.3mm |
| ②K β 線の除去 : Fe | ⑧S. S. スリット : 1° |
| ③管電圧・管電流 : 50kV・35mA | ⑨検出器 : シンチレーション・カウンタ |
| 5. 測定結果
同定された物質はチャートに記入しましたので御参照下さい。 | |

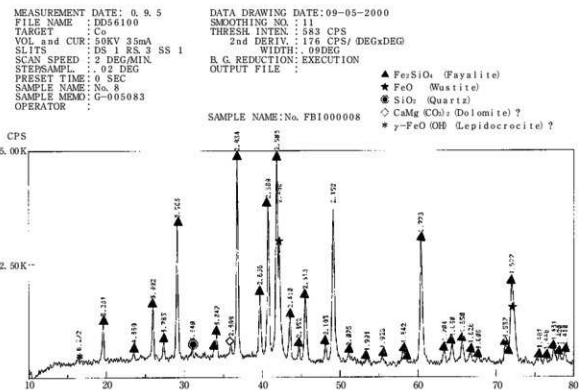


図4 試料No.FB1000008のX線回折

付 編

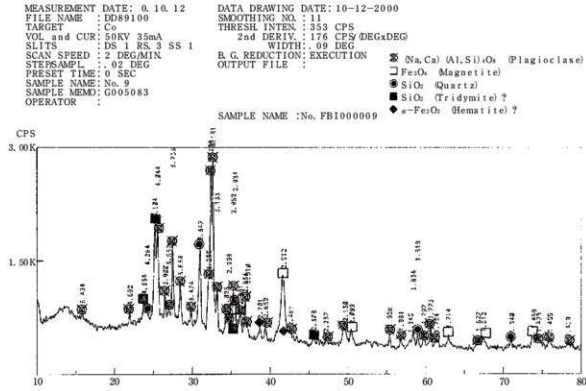


図 5 試料No.FB1000009のX線回折

付編4 山王川原・高木・北ノ脇遺跡出土の須恵器と土師器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

土器胎土中には種々の元素が含まれていることは周知の事実である。しかし、これらの元素の含有量を求めただけでは考古学に関する有意な情報を引き出すことはできない。須恵器の産地問題の研究では、前によって、各窯群の須恵器胎土の特徴を示す元素（これを指標元素と呼ぶ）を求めておき、指標合わせの考え方で産地を求め、産地推定とは指標分析に他ならないのである。しかし、指標合わせをする前に、なんらかの形で遺跡から出土した須恵器胎土を整理しておく必要がある。本報告ではクラスター分析法を使い、山王川原、北ノ脇、高木の3遺跡から出土した須恵器胎土を分類し、胎土の共通性と、その逆の異質性を調べてみた。また、高木遺跡から出土した土師器胎土についても、どの程度のまとまりがあるかについても検討した。

2) 分析結果

分析結果は表1にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1による標準化値で表示されている。この値に、地質調査所が公表しているJG-1の各元素の分析値（%またはppm）を乗ずれば、須恵器胎土中の各元素の分析値が%またはppm表示で得られる訳であるが、指標分析では必ずしも、%、ppm表示は必要ではなく、むしろ、JG-1の標準化値の方が統計計算や分析図作成には便利であるので、筆者はJG-1による標準化値を分析値として使用している。

今回のデータ解析には指標元素として、K、Ca、Rb、Srの4元素を使用した。Fe、Naは参考にとどめた。

図7には、3遺跡から出土した須恵器のクラスター分析の結果が示されている。横軸に並んだ数字はコンピュータにデータ入力した順番を示す番号（クラスター番号としてある）である。試料量不足のため分析できなかった試料もあり、また、Caの含有量が異常に多いため、クラスター分析から除去したのもあるため、クラスター番号は必ずしも、試料番号とは一致しなくなった。それで表1には試料番号の他にクラスター番号を記載してある。クラスター分

析は須恵器と土師器についてはそれぞれ別に行っているので、須恵器クラスター番号と、土師器クラスター番号の2種のクラスター番号が必要となった。それぞれ、表1では分けて記載してある。なお、試験的にT点の土師器は須恵器のクラスター分析に含めてみた。試料番号FB0132~0136である。表1をみるときはご注意ください。

図7のデンドログラムから、・27~104をA群、・45~47をB群、・90~73をC群、・81~110をD群として分類し、他を未分類試料とした。クラスター分析の結果はK-Ca、Rb-Sr分布図を作成し、確認するのが普通である。図8には山王川原遺跡から出土した須恵器の分類結果を含めて作成した両分布図を示す。各点はクラスター分析によって分類されたA、B、C群に分けてプロットしてある。D群はその他の試料を一括して表示した。なお、図8~10にはできるだけ多くの各群の試料を包含するように各群領域を描いてある。これらは各群を比較対照するために描いたものであり、統計学的な意味のある領域ではない。A、B、C群の試料は比較的近接して分布するが、とくに、A、B群の領域はかなりの部分が重複しており、A、B両領域をまとめて一つの領域にすると広がりが大きすぎる。それで、A、B別群に分類することにした。B群に帰属する試料は多いが、この分布領域は山崎窯の製品の分布領域にはほぼ対応する。県内の山崎窯産の可能性をもつ。今回は2群判別分析をすることはできなかったが、いずれ、その計算をする予定である。A、C群も県内産のものである可能性がある。その他に含まれる大平の試料にはCa、Sr量が少ない。これらは陶邑産と猿投産の製品である可能性がある。未分類の試料のうち、No9の高杯のみは産地不明である。

図9には北ノ脇遺跡出土須恵器の両分布図を示す。B群に分類された試料が主成分となる。ここではD群に分類された試料は2点あるが、FB0046の高杯とFB0051の杯であり、いずれも炊飯具である。この2点はFe、Naの含有量からしても陶邑産の可能性が高い。未分類の試料も2~3種類の胎土があり、それぞれ、別産地の製品とみられる。

図10には高木遺跡出土須恵器の両分布図を示す。一部に

重複するところがあるものの、明らかに、A、B、Cの3種類の胎土があることがわかる。3種類の胎土があることは3遺跡に共通である。そして、その他の試料の中に、Ca、Sr量が少ないものが圧倒的に多いことがわかる。これらの多くは、もし、7世紀代の須恵器であるとすれば、陶邑産の可能性が高い。さらに、Ca、Sr量が多い数点の試料も3遺跡に共通してみつけられているが、その産地は不明である。

以上の結果から、A、B、C群胎土を持つ須恵器と、D群に分類されたCa、Sr量の少ない胎土をもつ須恵器が出土することは山王川原、北ノ脇、高木の3遺跡に共通した点であることがわかった。このうち、A、B、C群は在地産とみられ、D群は陶邑からの搬入品である可能性があることがわかった。

次に、高木遺跡から出土した土師器のクラスター分析の

結果を示す。まとまって群を形成せず、小さな小枝に分かれることがわかる。このことはこれらの土師器はあちこちで散発的に作られたものであり、集中生産されたものではないことを示している。これらの土師器の両分布図は図12に示されている。テンドログラムからも予想されるように、かなり広がって分布する。しかし、全体にK、Rb量が少ないという傾向があり、この特徴をもつ在地産の土師器と考えられる。しかし、このうち、土師器クラスター番号の・4と5、・2と3、・7と15、・12と16、・17と18はそれぞれ同じ胎土であり、同じところで製作された土師器と考えられる。土師器のデータ解読法は須恵器のように出来上がった訳ではないが、このような方法で基礎データを集積することによって開発されてくるものと思われる。

表1 阿武隈川右岸築地遺跡出土須恵器の分析データ

クラスター番号	試料番号	遺跡名	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
1	FB0001	山王川原	須恵器	壺蓋	0.516	0.214	3.760	0.466	0.439	0.246	A
2	FB0002	山王川原	須恵器	高杯	0.483	0.238	3.970	0.443	0.432	0.220	A
3	FB0003	山王川原	須恵器	鉢	0.482	0.131	3.610	0.468	0.342	0.175	D
4	FB0004	山王川原	須恵器	壺	0.361	0.480	3.920	3.920	0.600	0.315	C
5	FB0005	山王川原	須恵器	杯身	0.469	0.254	3.810	0.389	0.486	0.254	A
6	FB0006	山王川原	須恵器	高杯	0.433	0.064	1.900	0.703	0.250	0.073	未分類
7	FB0007	山王川原	須恵器	杯蓋	0.447	0.127	2.390	0.520	0.395	0.265	D
8	FB0008	山王川原	須恵器	杯身	0.511	0.137	2.690	0.776	0.308	0.135	未分類
9	FB0009	山王川原	須恵器	高杯	0.357	0.611	3.000	0.273	0.865	0.399	未分類
10	FB0010	山王川原	須恵器	壺	0.387	0.351	1.800	0.370	0.623	0.317	B
11	FB0011	山王川原	須恵器	杯蓋	0.517	0.187	3.490	0.559	0.417	0.257	D
12	FB0012	山王川原	須恵器	杯蓋	0.331	0.044	3.040	0.415	0.197	0.064	未分類
13	FB0013	山王川原	須恵器	瓶	0.337	0.418	1.260	0.331	0.765	0.388	C
14	FB0014	山王川原	須恵器	壺	0.383	0.298	3.320	0.356	0.414	0.267	B
15	FB0015	山王川原	須恵器	壺	0.314	0.400	2.650	0.361	0.549	0.282	C
16	FB0016	山王川原	須恵器	高杯	0.365	0.284	1.630	0.339	0.547	0.301	B
17	FB0017	山王川原	須恵器	蓋	0.439	0.403	2.970	0.369	0.606	0.366	B
18	FB0018	山王川原	須恵器	蓋	0.657	0.139	1.540	0.699	0.249	0.304	未分類
19	FB0019	山王川原	須恵器	蓋	0.316	0.395	3.440	0.307	0.476	0.181	C
20	FB0021	山王川原	須恵器	杯	0.628	0.171	1.600	0.676	0.327	0.330	未分類
21	FB0022	山王川原	須恵器	杯	0.350	0.292	3.310	0.328	0.474	0.130	B
22	FB0023	山王川原	須恵器	杯	0.294	0.501	3.430	0.282	0.545	0.200	C
23	FB0024	山王川原	須恵器	杯	0.375	0.325	2.690	0.413	0.547	0.306	B
24	FB0025	山王川原	須恵器	高台杯	0.314	0.459	3.360	0.305	0.525	0.197	C
25	FB0026	山王川原	須恵器	高台杯	0.324	0.507	3.460	0.306	0.556	0.203	C
26	FB0027	山王川原	須恵器	杯蓋	0.373	0.411	2.090	0.352	0.726	0.334	B
27	FB0028	北ノ脇	須恵器	杯身	0.460	0.248	3.330	0.401	0.493	0.249	A
28	FB0029	北ノ脇	須恵器	杯蓋	0.477	0.280	3.410	0.414	0.523	0.284	A

ガラス番号	試料番号	遺跡名	種別	器種	K	Ca	Fe	Pb	Sr	Na	分類
29	FB10030	北ノ脇	須忠器	杯蓋	0.291	0.335	3.800	0.196	0.443	0.226	C
30	FB10031	北ノ脇	須忠器	高台杯	0.388	0.313	1.920	0.370	0.550	0.301	B
31	FB10033	北ノ脇	須忠器	杯	0.455	0.230	3.780	0.405	0.371	0.096	A
32	FB10034	北ノ脇	須忠器	杯	0.398	0.232	3.930	0.417	0.363	0.136	A
33	FB10035	北ノ脇	須忠器	杯	0.390	0.313	1.940	0.382	0.616	0.299	B
34	FB10036	北ノ脇	須忠器	高台杯	0.367	0.358	2.410	0.330	0.584	0.292	B
35	FB10037	北ノ脇	須忠器	高台杯	0.386	0.346	2.520	0.348	0.558	0.310	B
36	FB10038	北ノ脇	須忠器	瓶(?)	0.356	0.611	1.800	0.336	0.805	0.361	未分類
37	FB10039	北ノ脇	須忠器	甕	0.320	0.397	2.270	0.312	0.606	0.304	C
38	FB10040	北ノ脇	須忠器	不明	0.358	0.501	2.920	0.349	0.628	0.305	C
39	FB10041	北ノ脇	須忠器	甕	0.442	0.298	2.970	0.369	0.493	0.492	A
40	FB10042	北ノ脇	須忠器	甕	0.318	0.598	2.160	0.336	0.704	0.281	未分類
41	FB10043	北ノ脇	須忠器	甕	0.465	0.477	2.850	0.504	0.635	0.259	B
42	FB10044	北ノ脇	須忠器	杯蓋	0.323	0.426	1.870	0.283	0.544	0.183	C
43	FB10045	北ノ脇	須忠器	鉢	0.388	0.424	2.100	0.383	0.612	0.269	B
44	FB10046	北ノ脇	須忠器	高杯	0.494	0.156	2.270	0.504	0.401	0.197	D
45	FB10047	北ノ脇	須忠器	大甕	0.435	0.398	1.870	0.418	0.664	0.371	B
46	FB10048	北ノ脇	須忠器	小甕(?)	0.586	0.171	1.360	0.660	0.321	0.277	未分類
47	FB10049	北ノ脇	須忠器	杯	0.331	0.355	2.040	0.351	0.586	0.283	B
48	FB10050	北ノ脇	須忠器	杯蓋	0.331	0.388	2.160	0.267	0.594	0.321	C
49	FB10051	北ノ脇	須忠器	杯身	0.427	0.236	3.140	0.521	0.373	0.163	D
50	FB10052	北ノ脇	須忠器	小甕	0.398	0.365	1.970	0.385	0.622	0.324	B
51	FB10053	北ノ脇	須忠器	甕	0.377	0.568	1.770	0.357	0.797	0.303	未分類
52	FB10054	高木	須忠器	不明	0.476	0.139	2.710	0.498	0.376	0.123	D
53	FB10055	高木	須忠器	杯蓋	0.499	0.122	3.310	0.475	0.316	0.151	D
54	FB10056	高木	須忠器	皿	0.458	0.073	1.830	0.621	0.265	0.059	D
55	FB10057	高木	須忠器	壺	0.359	0.287	1.970	0.371	0.509	0.267	B
56	FB10058	高木	須忠器	甕	0.385	0.389	2.030	0.297	0.637	0.314	C
57	FB10059	高木	須忠器	高杯	0.508	0.078	2.640	0.577	0.234	0.082	D
58	FB10060	高木	須忠器	蓋	0.516	0.278	2.790	0.587	0.547	0.259	D
59	FB10061	高木	須忠器	甕	0.471	0.348	1.760	0.405	0.534	0.372	A
60	FB10062	高木	須忠器	杯蓋	0.338	0.457	2.160	0.295	0.631	0.313	C
61	FB10063	高木	須忠器	杯	0.502	0.122	3.070	0.518	0.346	0.151	D
62	FB10064	高木	須忠器	皿	0.323	0.371	3.690	0.308	0.391	0.226	C
63	FB10066	高木	須忠器	皿	0.725	0.078	2.180	0.841	0.242	0.211	未分類
64	FB10067	高木	須忠器	提瓶	0.399	0.667	2.090	0.321	0.781	0.391	未分類
65	FB10068	高木	須忠器	甕	0.418	0.548	3.370	0.349	0.858	0.243	未分類
66	FB10069	高木	須忠器	甕	0.383	0.325	2.330	0.346	0.525	0.286	B
67	FB10070	高木	須忠器	甕	0.332	0.384	1.910	0.287	0.664	0.347	C
68	FB10071	高木	須忠器	長頸瓶	0.639	0.106	1.580	0.685	0.247	0.372	未分類
69	FB10072	高木	須忠器	杯蓋	0.445	0.406	2.200	0.485	0.628	0.305	B
70	FB10073	高木	須忠器	杯身	0.447	0.382	2.170	0.473	0.652	0.278	B
71	FB10074	高木	須忠器	蓋	0.296	0.340	1.810	0.270	0.621	0.309	C
72	FB10075	高木	須忠器	長頸瓶	0.719	0.386	1.410	0.678	0.469	0.329	未分類
73	FB10077	高木	須忠器	蓋	0.340	0.315	2.560	0.279	0.460	0.201	C
74	FB10078	高木	須忠器	杯	0.382	0.311	1.910	0.380	0.588	0.305	B
75	FB10079	高木	須忠器	白付甕	0.344	0.598	2.150	0.319	0.823	0.334	未分類
76	FB10080	高木	須忠器	甕	0.347	0.358	3.940	0.261	0.462	0.233	C
77	FB10081	高木	須忠器	甕	0.418	0.502	2.410	0.445	0.600	0.259	B
78	FB10082	高木	須忠器	壺	0.502	0.126	2.960	0.539	0.352	0.173	D

付 編

クラスター番号	試料番号	遺跡名	種 別	器 種	K	Ca	Fe	Pb	Sr	Na	分 類
79	FB10083	高木	須忠器	甕	0.430	0.175	3.860	0.366	0.412	0.259	A
80	FB10084	高木	須忠器	甕	0.237	0.361	2.130	0.212	0.582	0.188	C
81	FB10085	高木	須忠器	高杯	0.362	0.141	2.400	0.533	0.424	0.206	D
82	FB10086	高木	須忠器	甕	0.528	0.138	2.550	0.553	0.384	0.181	D
83	FB10087	高木	須忠器	甕	0.417	0.380	2.430	0.432	0.531	0.274	B
84	FB10088	高木	須忠器	甕	0.389	0.275	2.560	0.368	0.459	0.263	B
85	FB10089	高木	須忠器	大甕	0.400	0.419	2.340	0.420	0.576	0.277	B
86	FB10090	高木	須忠器	大甕	0.434	0.392	1.950	0.457	0.652	0.291	未分類
87	FB10091	高木	須忠器	甕	0.399	0.551	2.570	0.347	0.692	0.328	未分類
88	FB10092	高木	須忠器	密か瓶	0.217	0.455	3.620	0.192	0.466	0.266	C
89	FB10093	高木	須忠器	高台杯	0.316	0.486	3.380	0.300	0.506	0.201	C
90	FB10094	高木	須忠器	蓋	0.246	0.426	3.210	0.217	0.483	0.247	C
91	FB10095	高木	須忠器	盤	0.366	0.597	1.780	0.355	0.789	0.293	未分類
92	FB10096	高木	須忠器	高台杯	0.521	0.447	2.060	0.400	0.535	0.324	未分類
93	FB10097	高木	須忠器	甕	0.520	0.205	1.880	0.578	0.298	0.079	D
94	FB10098	高木	須忠器	小甕(?)	0.481	0.122	3.060	0.502	0.325	0.161	D
95	FB10099	高木	須忠器	杯	0.204	0.184	2.190	0.186	0.365	0.226	未分類
96	FB10100	高木	須忠器	杯蓋	0.469	0.405	2.160	0.510	0.634	0.319	B
97	FB10101	高木	須忠器	小甕	0.576	0.173	1.400	0.661	0.319	0.243	未分類
98	FB10102	高木	須忠器	高杯	0.474	0.135	0.988	0.533	0.416	0.138	D
99	FB10103	高木	須忠器	甕	0.447	0.072	2.120	0.568	0.269	0.088	D
100	FB10104	高木	須忠器	杯高杯	0.452	0.071	1.740	0.608	0.247	0.068	D
101	FB10105	高木	須忠器	高杯	0.374	0.233	3.950	0.374	0.359	0.221	A
102	FB10106	高木	須忠器	杯蓋	0.481	0.121	3.110	0.494	0.334	0.149	D
103	FB10107	高木	須忠器	杯蓋	0.461	0.378	2.230	0.471	0.594	0.275	B
104	FB10108	高木	須忠器	杯蓋	0.336	0.220	4.140	0.319	0.359	0.228	A
105	FB10109	高木	須忠器	程鉢(?)	0.357	0.344	2.440	0.319	0.567	0.296	B
106	FB10110	高木	須忠器	高台杯	0.399	0.393	2.420	0.360	0.582	0.313	B
107	FB10111	高木	須忠器	杯身	0.469	0.124	2.510	0.540	0.361	0.133	D
108	FB10112	高木	須忠器	杯身	0.458	0.242	3.330	0.402	0.477	0.237	A
109	FB10113	高木	須忠器	高杯	0.508	0.137	3.270	0.517	0.353	0.176	D
110	FB10114	高木	須忠器	杯	0.542	0.156	4.070	0.400	0.320	0.163	D
111	FB10115	高木	須忠器	小甕	0.233	0.579	4.360	0.173	0.514	0.258	未分類
112	FB10116	高木	須忠器	鉢	0.366	0.356	3.110	0.393	0.514	0.279	B
113	FB10117	高木	須忠器	鉢	0.449	0.333	2.660	0.446	0.539	0.282	A
114	FB10118	高木	須忠器	杯	0.379	0.194	2.190	0.611	0.478	0.224	D
115	FB10119	高木	須忠器	高台杯	0.419	0.344	1.910	0.399	0.676	0.248	B
116	FB10120	高木	須忠器	高杯	0.457	0.245	3.370	0.459	0.455	0.241	A
117	FB10121	高木	須忠器	不明	0.445	0.181	3.940	0.366	0.331	0.189	A
118	FB10122	高木	須忠器	不明	0.425	0.181	3.870	0.368	0.385	0.184	A
119	FB10123	高木	須忠器	杯蓋	0.496	0.154	3.300	0.487	0.348	0.128	D
120	FB10124	高木	須忠器	杯身	0.270	0.418	2.880	0.218	0.503	0.252	C
121	FB10125	高木	須忠器	杯身	0.453	0.402	2.150	0.497	0.649	0.319	B
122	FB10126	高木	須忠器	杯蓋	0.526	0.128	3.340	0.543	0.313	0.149	D
123	FB10127	高木	須忠器	蓋	0.326	0.515	2.240	0.335	0.662	0.304	C
124	FB10128	高木	須忠器	杯身	0.398	0.213	4.020	0.334	0.366	0.181	A
125	FB10129	高木	須忠器	甕(?)	0.311	0.472	2.820	0.313	0.433	0.202	C
126	FB10130	高木	須忠器	提瓶か横瓶	0.512	0.123	3.280	0.508	0.34	0.141	D
127	FB10131	高木	須忠器	杯	0.445	0.297	3.010	0.431	0.516	0.271	A

表2 阿武隈川右岸築堤遺跡出土土師器の分析データ

クラスター番号	試料番号	遺跡名	種別	器種	K	Ca	Fe	Pb	Sr	Na	分類
1	FB0132	高木	土師器	杯	0.355	0.756	2.700	0.213	0.842	0.303	
2	FB0133	高木	土師器	杯	0.258	0.340	2.330	0.230	0.563	0.279	C(a)
3	FB0134	高木	土師器	杯	0.274	0.349	2.450	0.251	0.614	0.253	C(a)
4	FB0135	高木	土師器	杯	0.357	0.325	3.310	0.312	0.470	0.124	B(b)
5	FB0136	高木	土師器	杯	0.384	0.294	2.380	0.333	0.530	0.224	B(b)
6	FB0137	高木	土師器	甕	0.327	0.572	1.760	0.215	0.960	0.248	
7	FB0138	高木	土師器	甕	0.350	0.625	2.900	0.215	0.739	0.219	(e)
8	FB0139	高木	土師器	杯	0.296	0.503	2.200	0.294	0.684	0.204	
9	FB0140	高木	土師器	杯	0.310	0.415	3.540	0.224	0.470	0.247	
10	FB0141	高木	土師器	杯	0.536	0.372	1.520	0.433	0.828	0.272	
11	FB0142	高木	土師器	杯	0.368	0.542	2.210	0.347	0.679	0.215	
12	FB0143	高木	土師器	甕	0.441	0.531	2.260	0.313	0.823	0.246	(d)
13	FB0144	高木	土師器	甕	0.551	0.335	2.570	0.300	0.577	0.188	
14	FB0145	高木	土師器	杯	0.264	0.381	2.990	0.220	0.816	0.122	
15	FB0146	高木	土師器	杯	0.300	0.557	3.340	0.209	0.708	0.159	(e)
16	FB0147	高木	土師器	杯	0.412	0.598	2.830	0.264	0.816	0.242	(d)
17	FB0148	高木	土師器	杯	0.321	0.479	2.770	0.248	1.010	0.205	(c)
18	FB0149	高木	土師器	杯	0.290	0.433	3.460	0.210	0.982	0.914	(c)
19	FB0149	高木	土師器	杯	0.33	0.388	2.930	0.322	0.734	0.220	

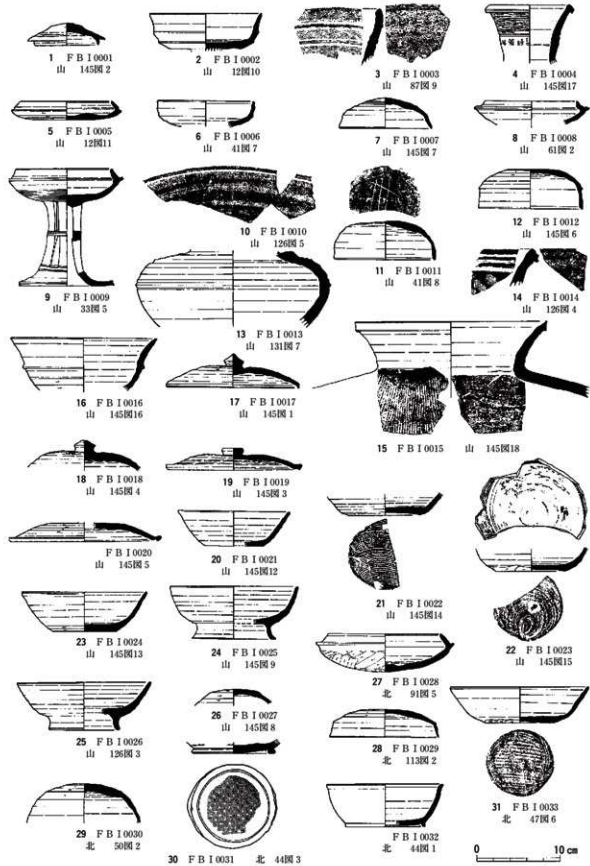


図 1 胎土分析試料集成 (1)

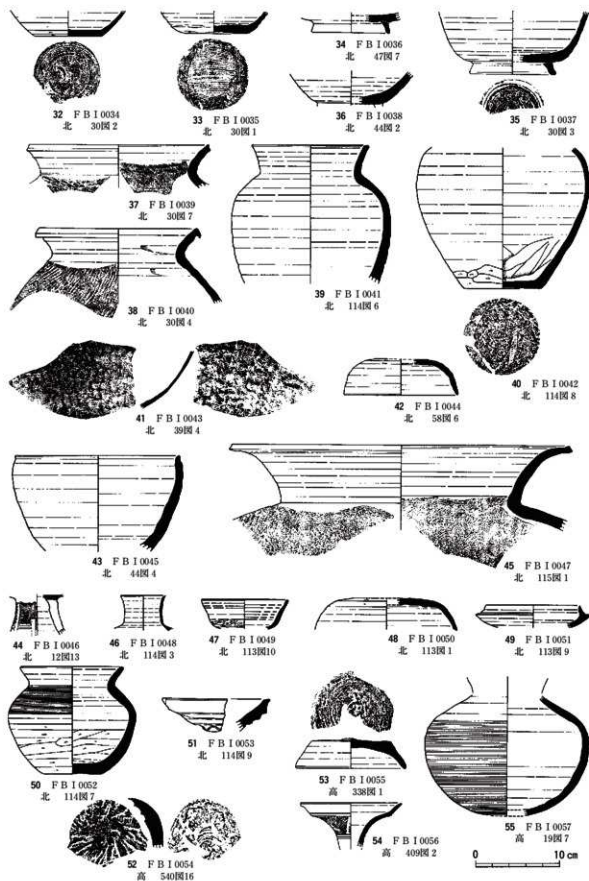


图2 胎土分析试料集成(2)

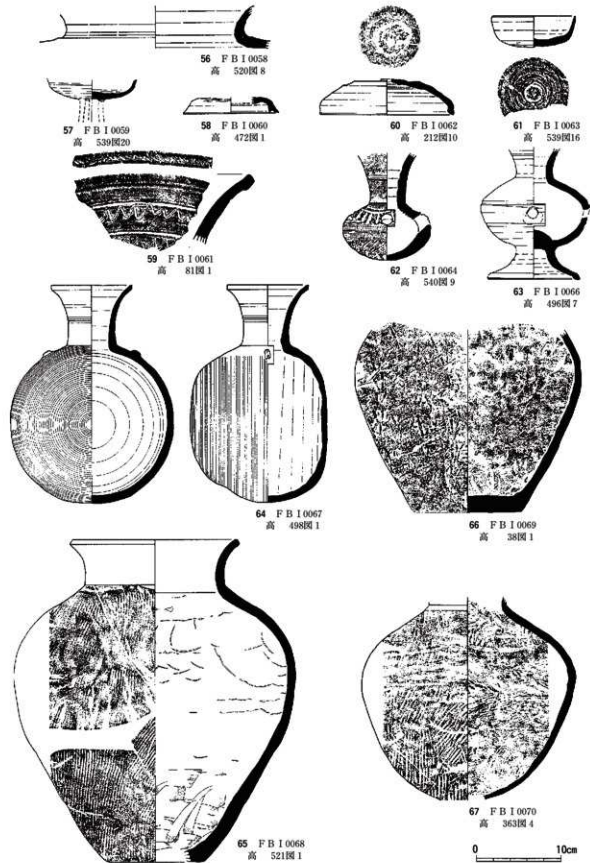


図 3 胎土分析試料集成 (3)

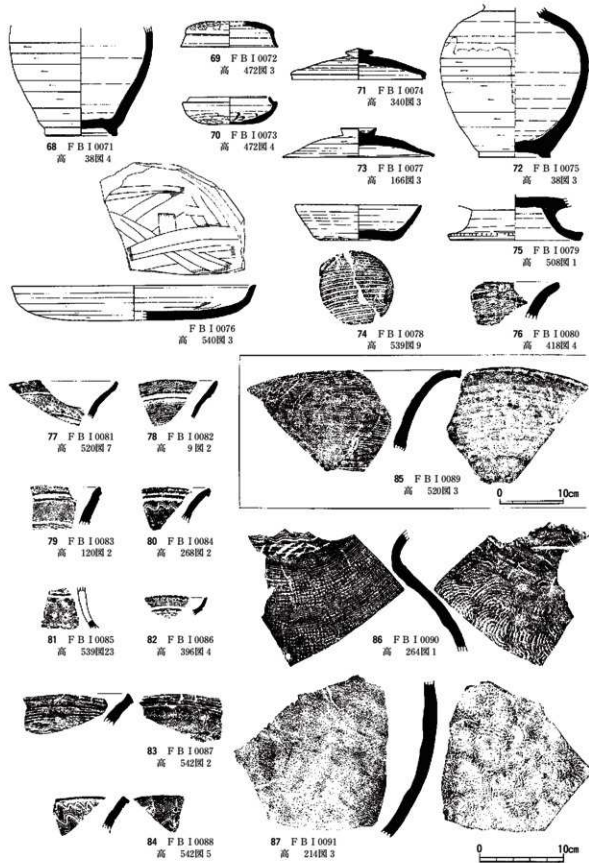


圖 4 胎土分析試料集成 (4)

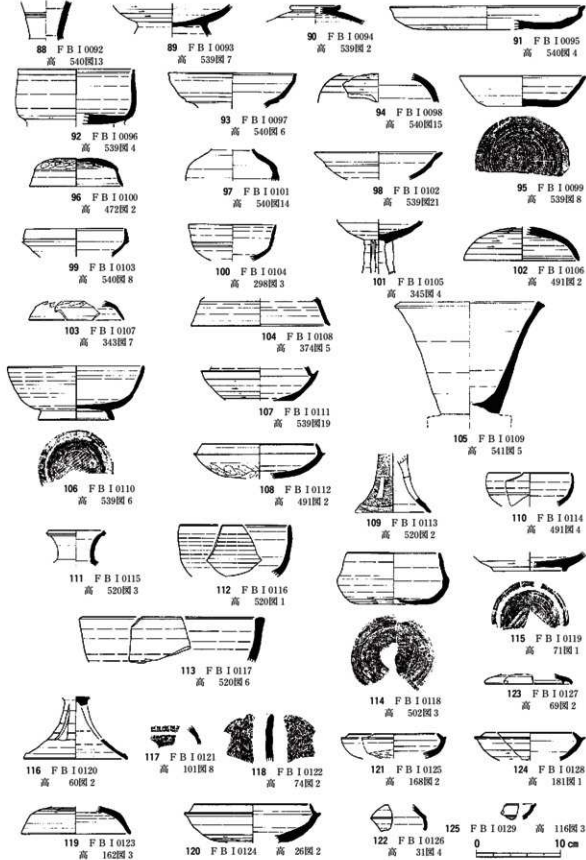


図5 胎土分析試料集成(5)

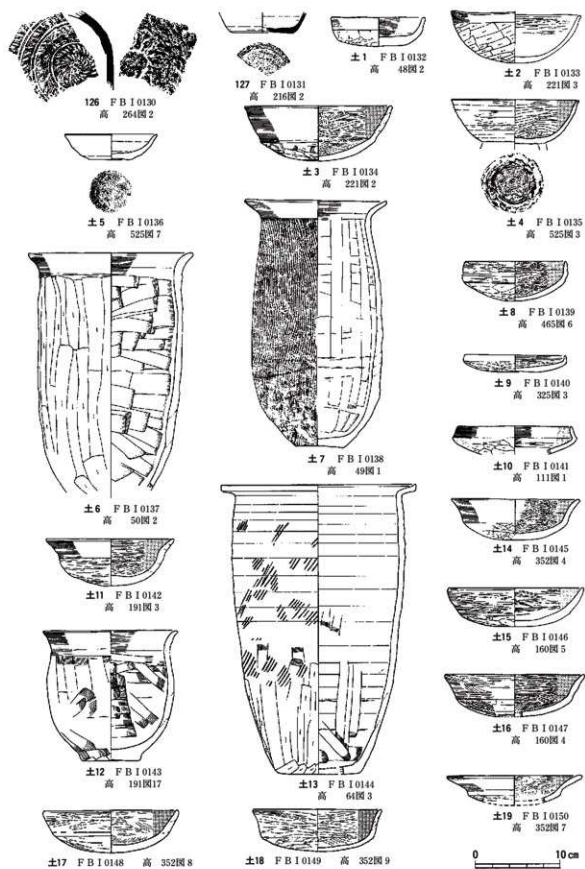


图6 胎土分析試料集成(6)

Dendrogram using Average Linkage (Between Groups)

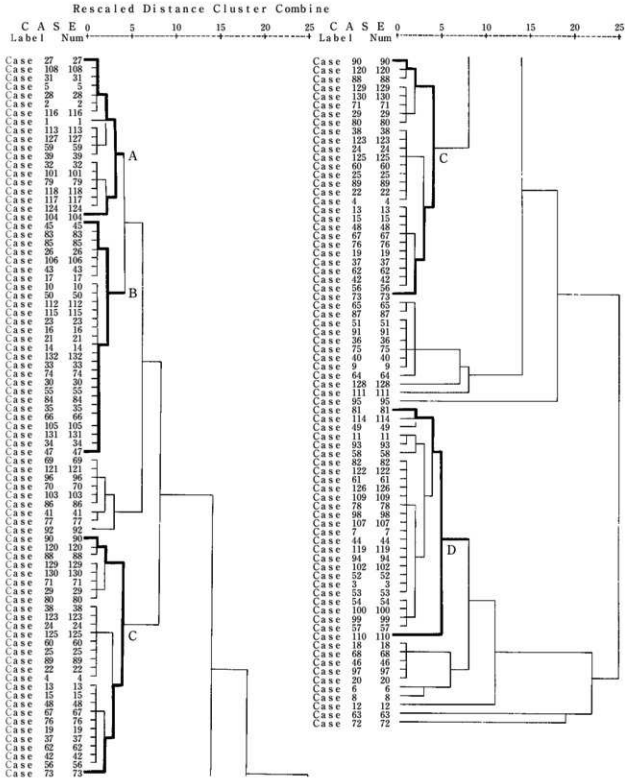


図7 須臾器のクラスター分析 (K, Ca, Rb, Sr 因子使用)

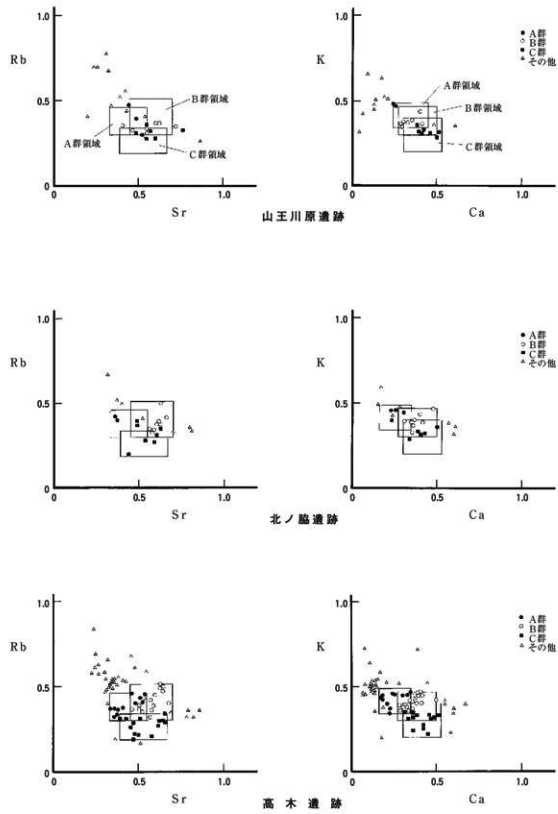


図8 山王川原・高木・北ノ脇遺跡出土須恵器の两分布図

付 編

Dendrogram using Average Linkage (Between Groups)

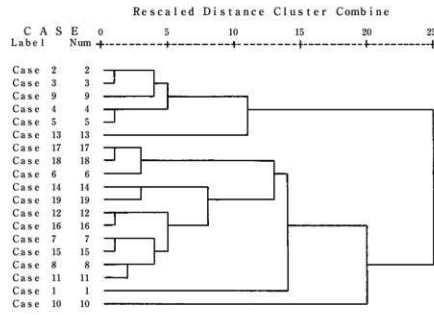


図9 土師器のクラスター分析 (K, Ca, Rb, Sr 因子使用)

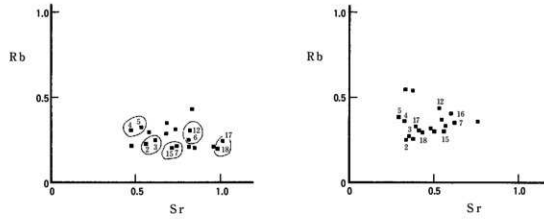


図10 高木遺跡出土土師器の兩分布図

写 真 図 版

第 1 編 ^{たか}高木遺跡



1 調査前遠景 (西より)



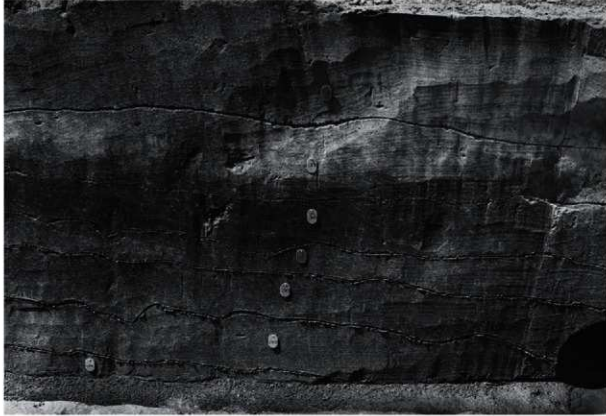
2 調査前遠景 (南より)



3 調査区遠景 (西より)



4 調査区遠景 (北より)



5 基本土層拡大（南より）



6 基本土層（東より）



7 作業風景



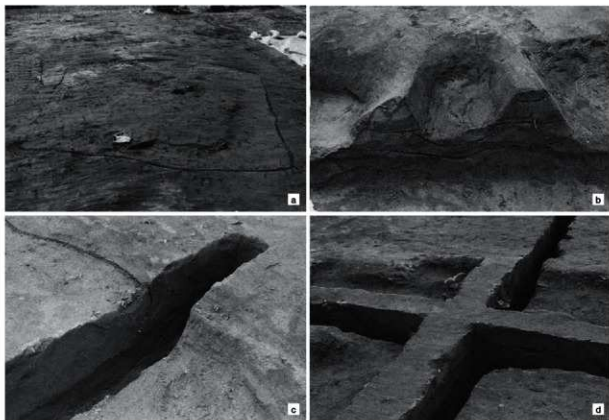
8 基本土層（南東より）



9 基本土層東西拡大（北より）



10 1号住居跡（南東より）



11 1号住居跡細部

- a 検出状況（南東より）
- b カマド断削状況（南東より）
- c 西壁断ち上がり断面（東より）
- d 東西土層断面（北より）



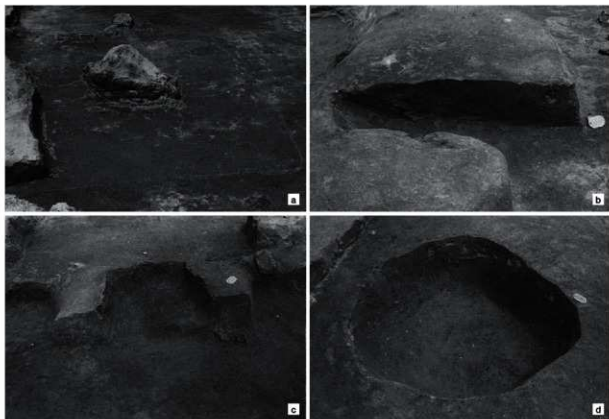
12 2号住居跡（北東より）



13 3号住居跡（南東より）



14 3号住居跡（北東より）



15 3号住居跡細部

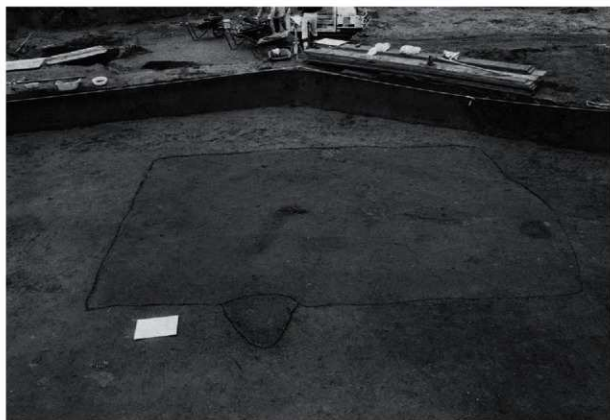
a 検出状況（南東より）
b カマド断面（南西より）
c カマド断面状況（南東より）
d P1（南西より）



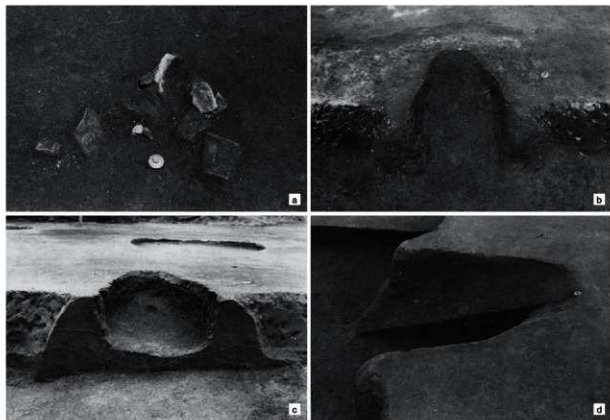
16 4号住居跡（西より）



17 5号住居跡（南東より）



18 5号住居跡検出状況（北西より）



19 5号住居跡細部

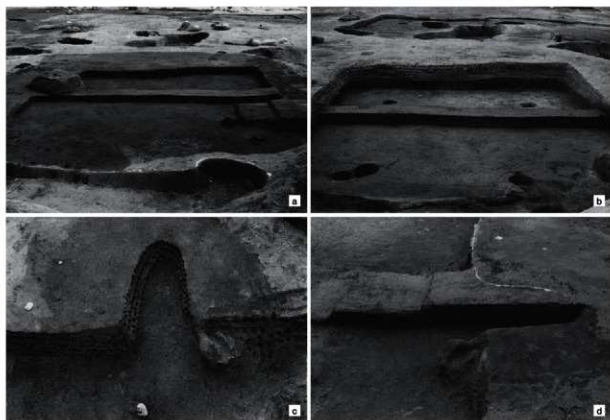
a 遺物出土状況（南より）
b カマド（南東より）
c カマド断割状況（南東より）
d カマド撮影断面（北東より）



20 6号住居跡検出状況（東より）

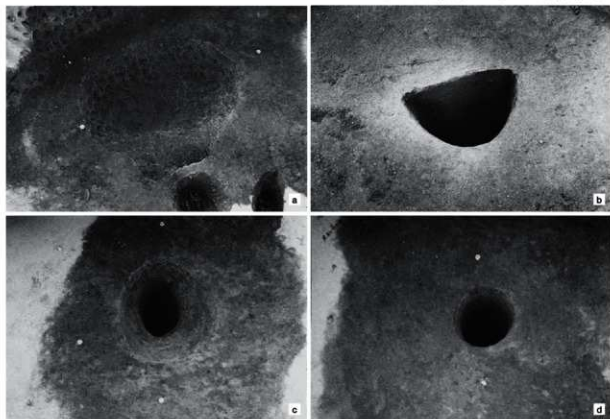


21 6号住居跡（東より）



22 6号住居跡細部

a 遺構断面 (北より) b 遺構断削 (北より)
c カマド (東より) d カマド断面 (北より)



23 6号住居跡細部

a P1 (東より) b P2断面 (北より)
c P3 (東より) d P4 (東より)



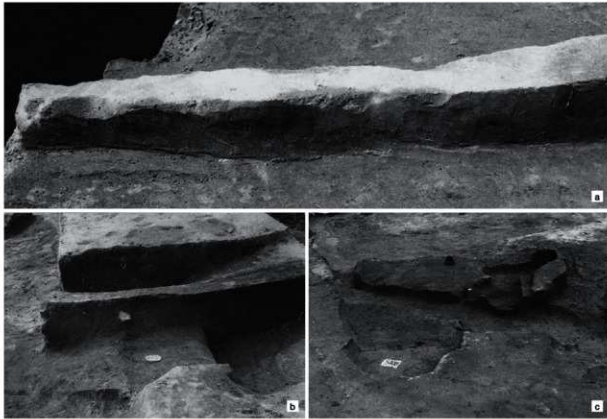
24 7号住居跡 (南より)



25 8号住居跡 (南西より)



26 8号住居跡カマド (南西より)



27 8号住居跡細部

a 遺構断面 (南西より) b カマド断面 (南東より)
c 遺構平面 (東より)



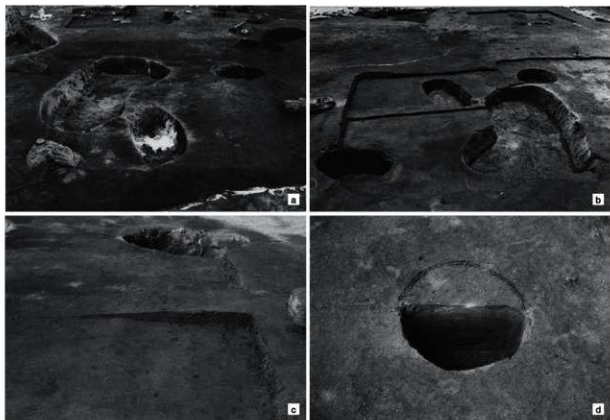
28 9号住居跡（北西より）



29 9号住居跡カマド（南より）



30 10号住居跡（西より）



31 10号住居跡細部

- a 掘出状況（南西より）
b 遺構断面状況（北より）
c 遺構断面（南西より）
d P.1断面（南西より）



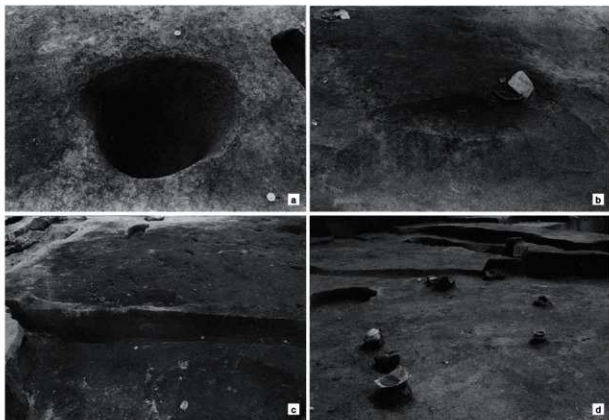
32 11号住居跡（東より）



33 11号住居跡検出状況（南より）



34 11号住居跡西半検出状況（南より）

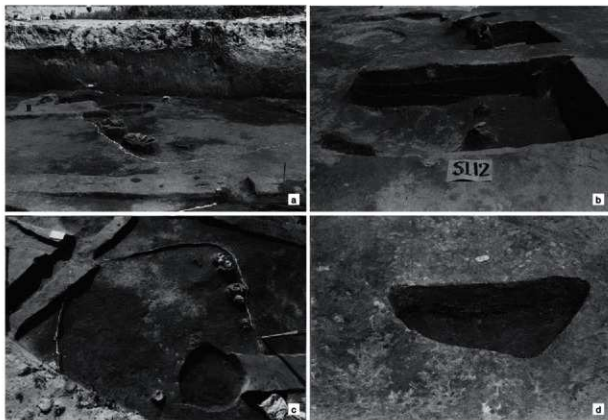


35 11号住居跡細部

- a P 7（南東より）
b 焼土範囲（東より）
c 遺構断面状況（南東より）
d 遺物出土状況（北より）

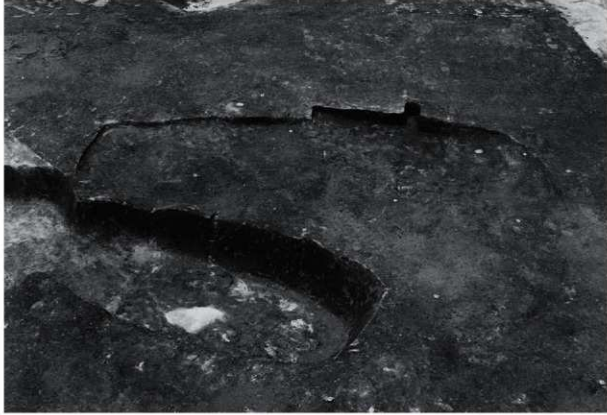


36 12号住居跡 (東より)



37 12号住居跡細部

a 遺構断面 (北西より) b 遺構断面 (南より)
c 遺物出土状況 (南東より) d P1断面 (南より)



38 13号住居跡（南東より）



39 13号住居跡検出状況（南東より）



40 14号住居跡検出状況（南西より）



41 15号住居跡カマド検出状況（北西より）



42 15号住居跡カマ下断面状況（北西より）



43 16号住居跡（南東より）



44 16号住居跡検出状況（北西より）



45 16号住居跡細部

a 遺構断面（南東より）
b カマド断層状況（南東より）
c カマド断層状況（南より）



46 16号住居跡カマド遺物出土状況（南東より）



47 16号住居跡遺物出土状況（南東より）



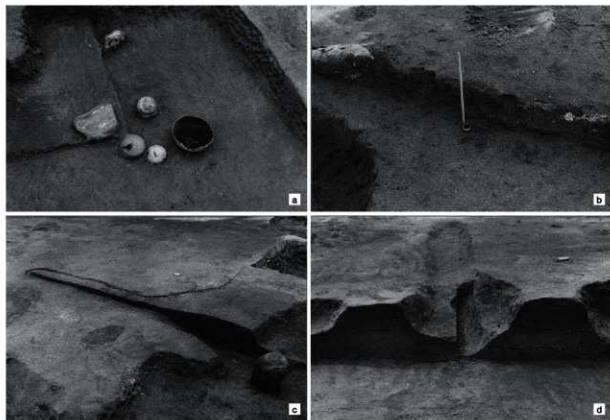
48 17A号住居跡（南東より）



49 17A号住居跡カマド（南東より）



50 17A号住居跡検出状況（北西より）



51 17A号住居跡細部

a 遺物出土状況（南より）
b 竈環出土状況
c カマ下断面（南西より）
d カマ下断側状況（南東より）



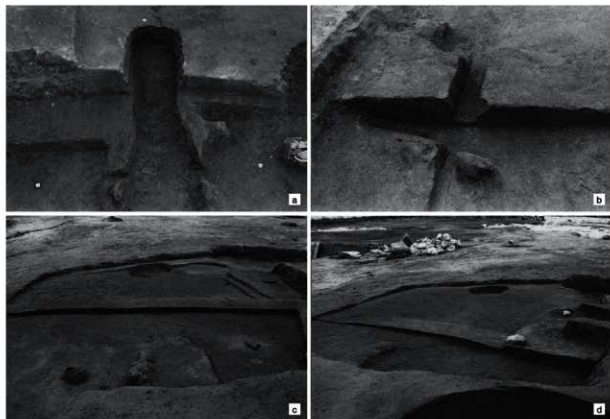
52 17B号住居跡（南東より）



53 17B号住居跡検出状況（北東より）



54 17B号住居跡（南東より）



55 17B号住居跡細部

a カマド（南東より） b カマド断面（南西より）
c 遺構断面（北西より） d 遺構断面状況（北東より）



56 18号住居跡（南東より）



57 18号住居跡カマド（南より）



58 18・19号住居跡細部

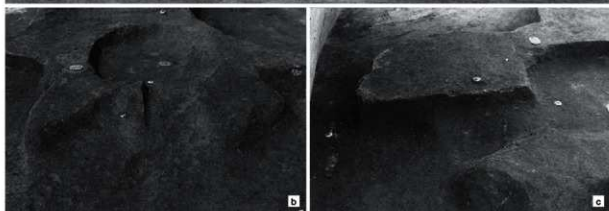
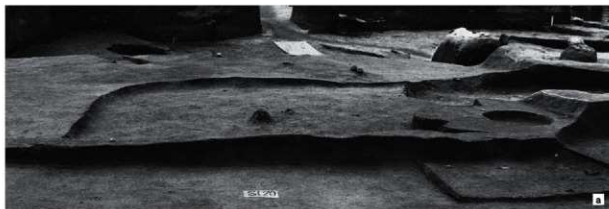
a 18号南北遺構断面(南東より)
b 19号遺構断面(南西より)



59 19号住居跡(南西より)



60 20号住居跡 (南より)

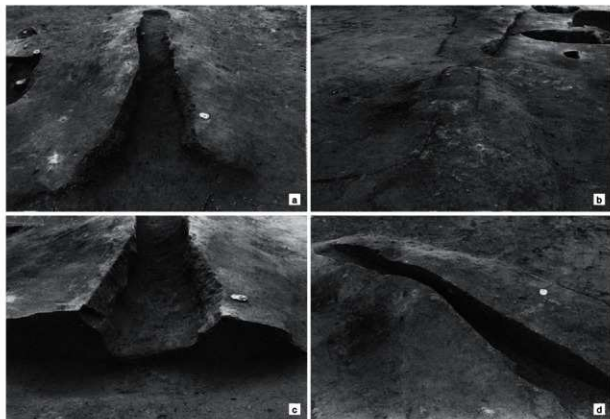


61 20号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド (南西より)
 c カマド断面 (南東より)



62 22号住居跡 (東より)



63 22号住居跡細部

a カマド (東より) b カマド検出状況 (東より)
c カマド断面状況 (東より) d カマド断面 (南東より)



64 23号住居跡 (南より)

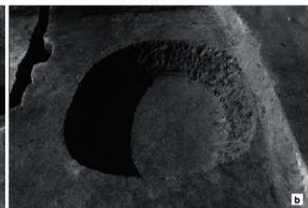


65 23号住居跡カマド (南より)



66 23号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b 検出状況 (南より)
c カマド断面 (東より)



67 23号住居跡細部

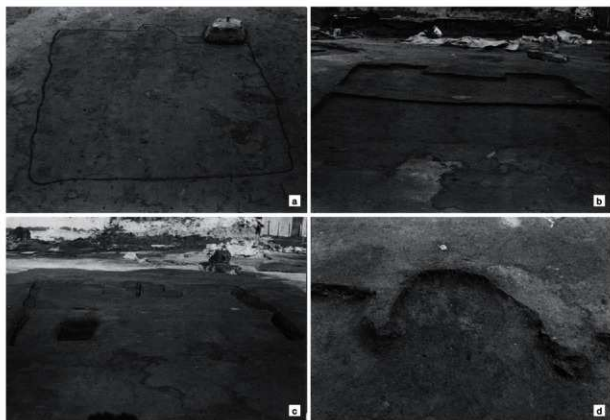
a カマド断面状況 (東より) b P.1 (南より)
c P.2 (南より) d P.3 (南より)



68 24号住居跡 (東より)



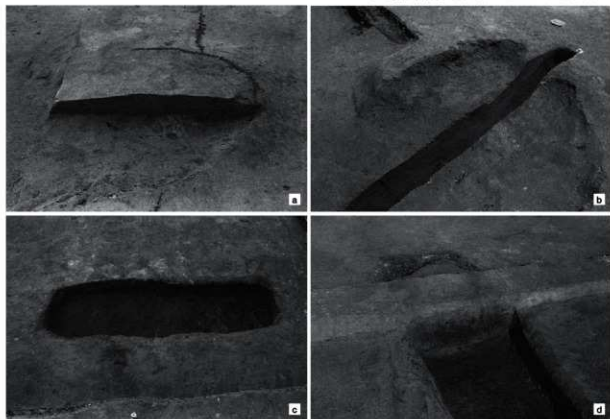
69 25号住居跡 (西より)



70 25号住居跡細部

a 検出状況 (西より) b 遺構断面 (西より)

c 遺構断面状況 (西より) d カマド (西より)



71 25号住居跡細部

a カマド断面 (南より) b カマド断面状況 (南西より)

c P1 (北より) d P1断面 (西より)



72 26号住居跡 (南東より)



73 26号住居跡検出状況 (南東より)

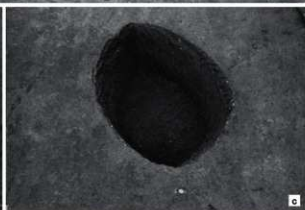


74 26号住居跡 (南東より)



75 26号住居跡細部

a 遺構断面 (北西より) b カマド (北西より)
c P1断面 (南西より)



76 26号住居跡細部

a カマド断面 (北より) b P.1 (東より)
c P.2 (東より)



77 26号住居跡細部

a P.2断面 (南西より) b P.3 (南東より)
c P.4断面 (南西より) d P.4 (南東より)



78 27号住居跡（南西より）



79 27号住居跡カマド（南より）



80 27号住居跡細部

a 遺構断面（北西より） b 遺構断面（東より）



81 27号住居跡遺物出土状況（北より）



82 28号住居跡（北西より）



83 30号住居跡（南東より）



84 30号住居跡遺物出土状況（南東より）



85 30号住居跡検出状況（南東より）



86 30号住居跡遺物出土状況（南西より）



87 30号住居跡遺物構断面（北東より）



88 31号住居跡 (東より)

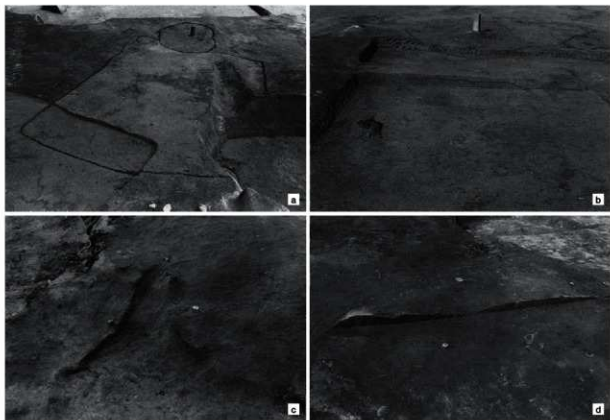


89 31号住居跡細部

a 検出状況 (南より) b 遺構断面 (東より)
c 遺構断面 (南より) d カマド (東より)



90 32号住居跡（北東より）

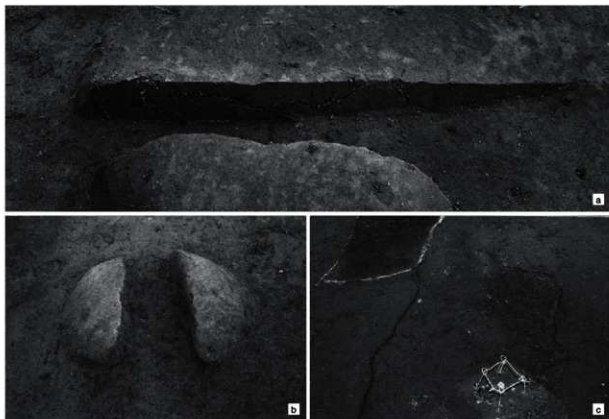


91 32号住居跡細部

- | | |
|-------------------|-------------------|
| a 検出状況（南西より） | b 遺構断面（南西より） |
| c カマド痕跡検出状況（南東より） | d カマド痕跡断面状況（南西より） |



92 33号住居跡 (東より)



93 33号住居跡細部

a カマド断面 (南より) b カマド (東より)
c 検出状況 (東より)



94 34号住居跡（東より）



95 34号住居跡検出状況（東より）



96 34号住居跡細部

a 遺構断面 (西より) b 遺物出土状況 (南より)
c 遺物出土状況 (西より)



97 34号住居跡カマド (東より)



98 35号住居跡（東より）



99 35号住居跡検出状況（東より）

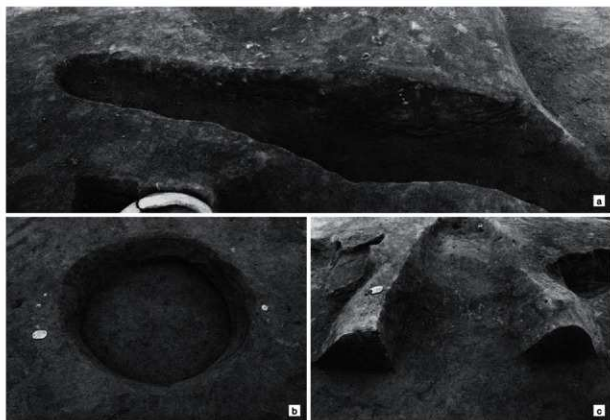


100 35号住居跡細部

a 遺構断面 (西より) b カマド断面 (南より)
c カマド断面状況 (東より)



101 36号住居跡 (南より)



102 36号住居跡細部

a カマド断面(南西より) b P1(東より)
c カマド断層状況(南東より)



103 37号住居跡(南東より)



104 37号住居跡細部

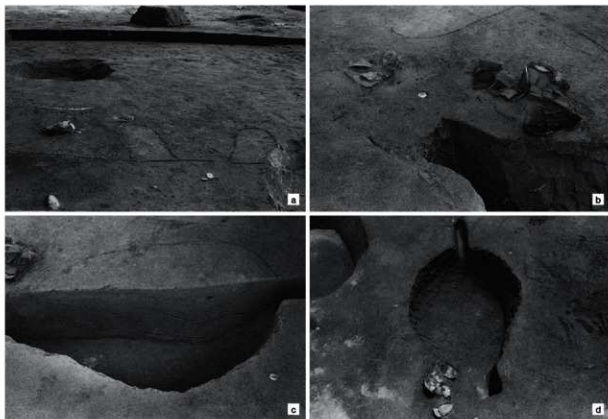
a カマ下断面状況 (南東より) b カマ下断面 (南西より)
c P1断面 (南西より)



105 38号住居跡 (南西より)



106 38号住居跡検出状況 (南西より)



107 38号住居跡細部

a 道横断面 (北東より) b 遺物出土状況 (南東より)
c P-1断面 (南より) d P-1 (西より)



108 39号住居跡（東より）



109 39号住居跡検出状況（北より）



110 40号住居跡（東より）



111 40号住居跡検出状況（東より）



112 40号住居跡カマド (東より)



113 40号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b カマド断面 (南より)
c カマド断層状況 (東より)



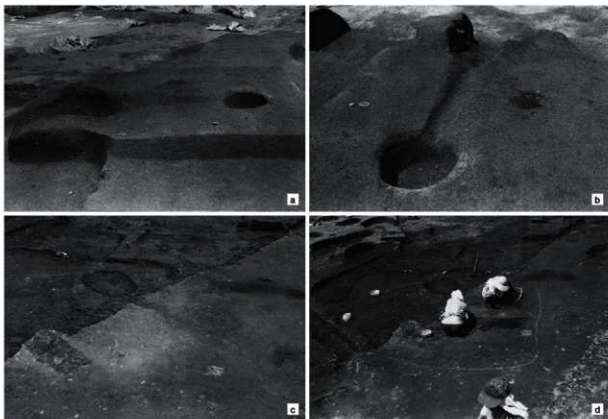
114 41号住居跡（南より）



115 42号住居跡（西より）



116 42号住居跡カマド (西より)



117 42号住居跡細部

- a カマド (南より) b カマド煙道 (東より)
 c 掘出状況 (南より) d 掘り込み状況 (南より)



118 43号住居跡（南西より）



119 43号住居跡検出状況（南西より）



120 43号住居跡カマド (南より)



121 43号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b カマド断面 (北西より)
c P1 (南より)



122 44号住居跡（南東より）



123 44号住居跡検出状況（東より）



124 44号住居跡カマド（南東より）



125 44号住居跡細部

a カマド断面（南西より）
b 遺物出土状況（南東より）
c 遺物出土状況（東より）



126 45号住居跡（南西より）



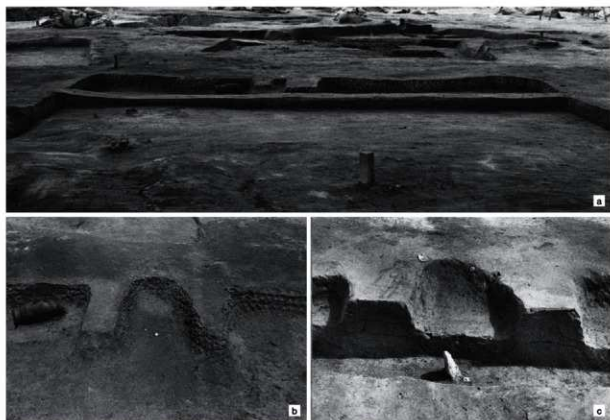
127 45号住居跡遺構断面（南より）



128 46号住居跡 (南西より)



129 46号住居跡検出状況 (南西より)



130 46号住居跡細部

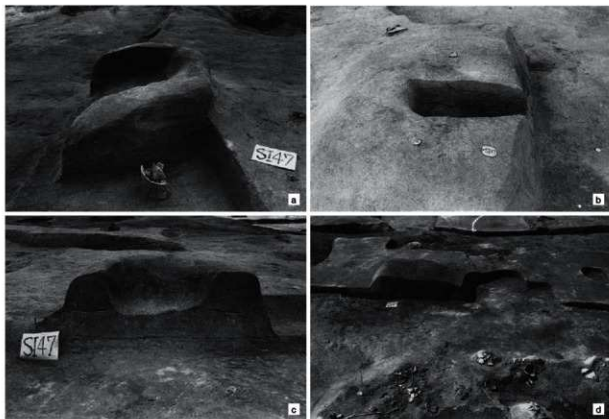
a 遺構断面 (南西より) b カマド (南西より)
c カマド断面状況 (南西より)



131 47号住居跡 (東より)



132 47号住居跡カマド（東より）

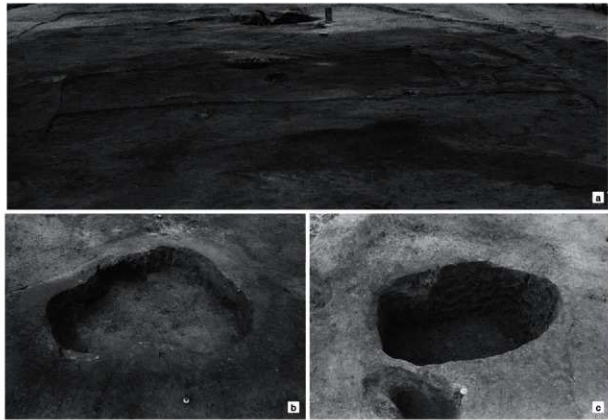


133 47号住居跡細部

a カマド（北より） b カマド断面（南より）
c カマド断面状況（東より） d カマド出土状況（東より）



134 48号住居跡（南より）



135 48号住居跡細部

a 道横断面（東より） b P1（南より）
c P2（南より）



136 49号住居跡検出状況（東より）



137 49号住居跡周辺検出状況（西より）



138 49号住居跡遺構断面（西より）



139 49号住居跡細部

a 東西遺構断面（北より）
b 遺物出土状況（南より）
c 遺物出土状況（東より）



140 50号住居跡 (西より)



141 50号住居跡 (北より)



142 50号住居跡カマド（西より）



143 50号住居跡細部

a 遺構断面（西より）
b カマド（南より）
c カマド断柄状況（西より）



144 50号住居跡検出状況（南より）



145 51号住居跡カマド（南より）



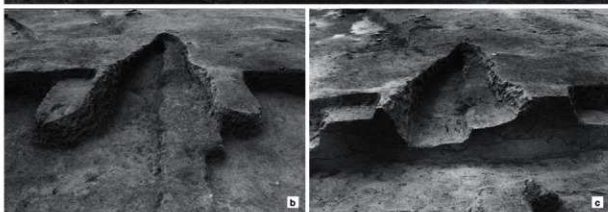
146 52号住居跡検出状況（南より）



147 53号住居跡（南東より）

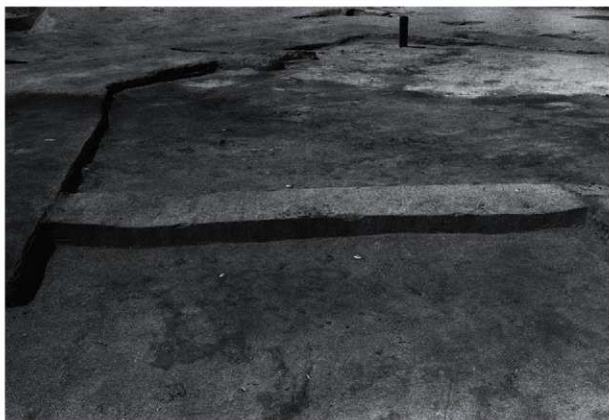


148 53号住居跡検出状況 (南東より)



149 53号住居跡細部

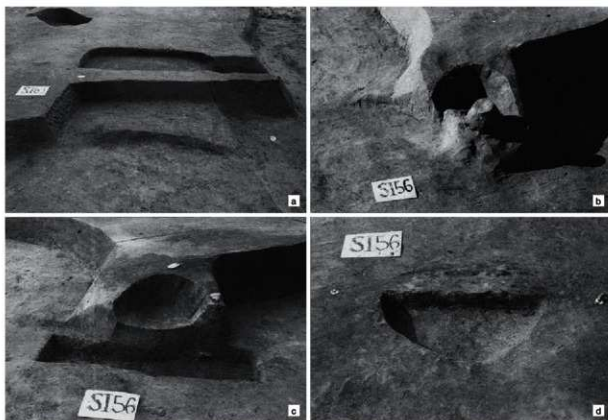
a 遺構断面 (南西より) b カマド (南東より)
c カマド断削状況 (南東より)



150 55号住居跡遺構断面（南東より）



151 56号住居跡カマド（南より）



152 56号住居跡細部

- a S161・56遺構断面 (南より) b カマド (南より)
 c カマド断面状況 (南より) d 焼土範囲断面状況 (南より)



153 57号住居跡検出状況 (東より)



154 58号住居跡（南東より）



155 58・59号住居跡検出状況（南より）



156 58号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b 焼土範囲 (南西より)
c 焼土堆積状況 (北西より)



157 59号住居跡細部

a 遺構断面 (北西より) b カマド断面 (南東より)
c 遺構完損状況 (北東より)



158 60号住居跡（南西より）



159 60号住居跡（南西より）



160 60号住居跡検出状況（北東より）

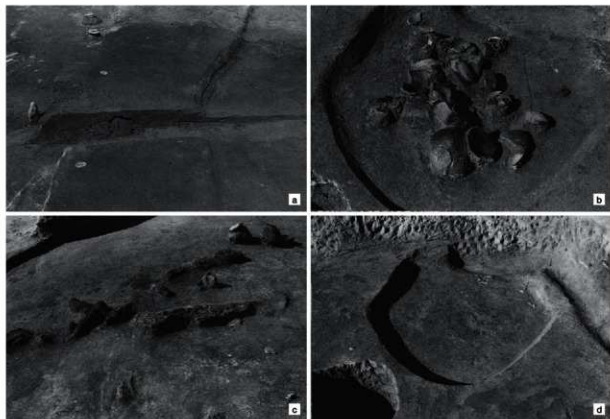


161 60号住居跡細部

a 遺構断面（南東より）
b 遺物出土状況（南西より）
c 遺物出土状況（南より）

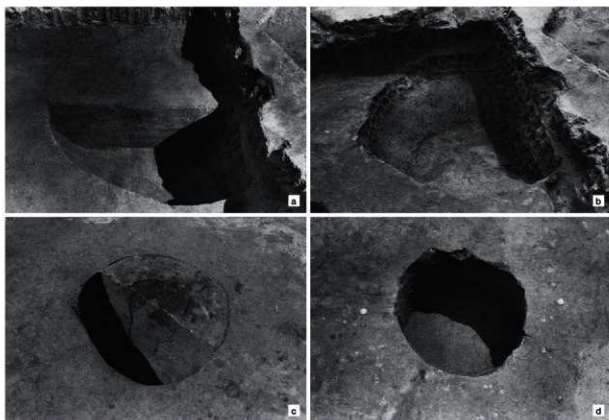


162 60号住居跡カマド (南西より)



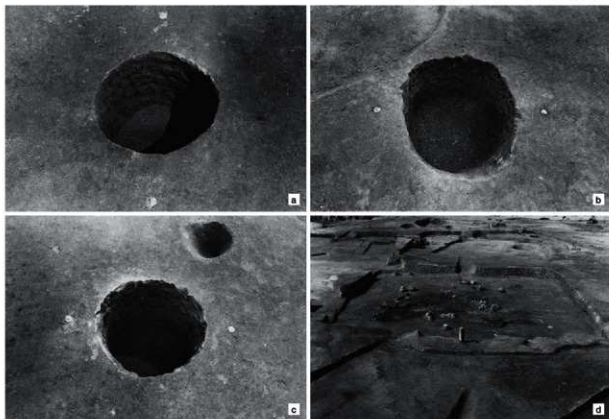
163 60号住居跡細部

a カマド断面 (東より) b P5 遺物出土状況 (南より)
c 炭化材出土状況 (南より) d P5 (南より)



164 60号住居跡細部

a P 6 断面 (西より) b P 6 (西より)
c P 1 断面 (東より) d P 1 (西より)



165 60号住居跡細部

a P 2 (南より) b P 3 (西より)
c P 4 (西より) d 遺構完損状況 (南西より)



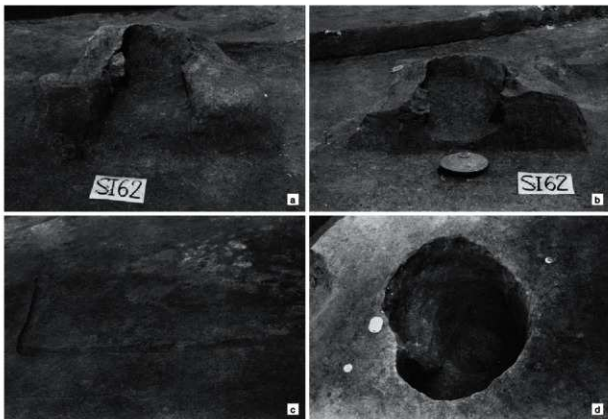
166 61号住居跡（南東より）



167 62号住居跡（南より）



168 62号住居跡 (西より)



169 62号住居跡細部

a カマド (南より) b カマド断面状況 (南より)
c 壁溝 (南より) d P1 (南より)



170 63号住居跡（西より）



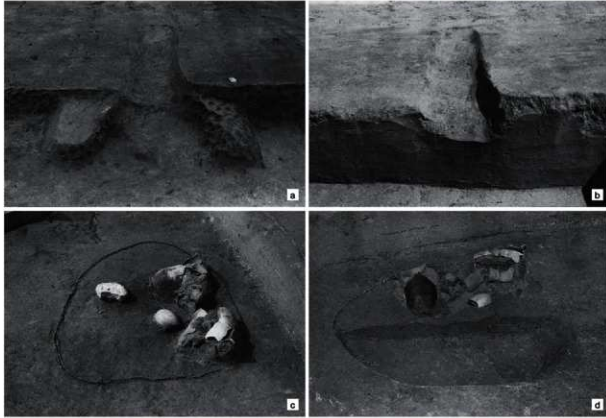
171 63号住居跡検出状況（西より）



172 64号住居跡 (南西より)



173 64号住居跡検出状況 (南西より)

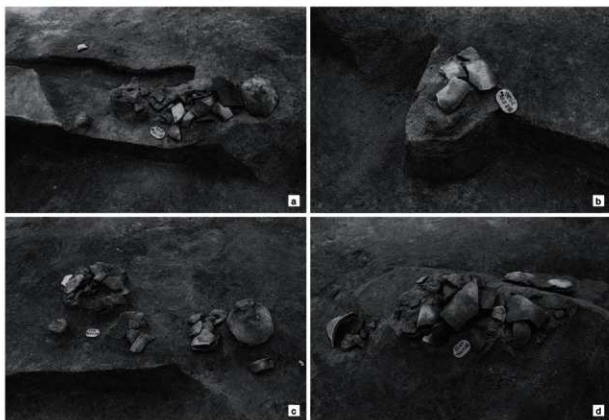


174 64号住居跡細部

a カマド (南西より) b カマド断面状況 (南より)
c P1検出状況 (北より) d P1断面 (東より)



175 65号住居跡焼土範囲 (東より)



176 65号住居跡細部

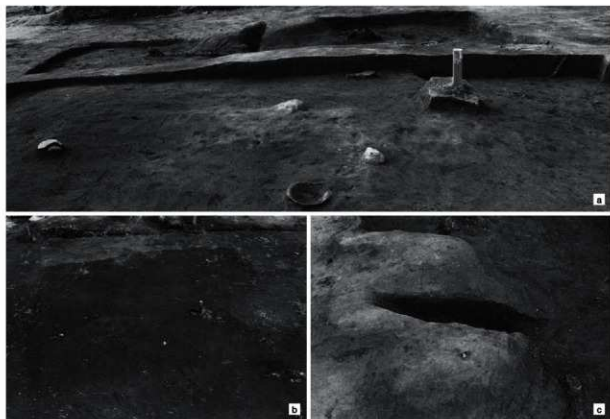
a 遺物出土状況 b 遺物出土状況
c 遺物出土状況 d 遺物出土状況



177 66号住居跡 (南より)

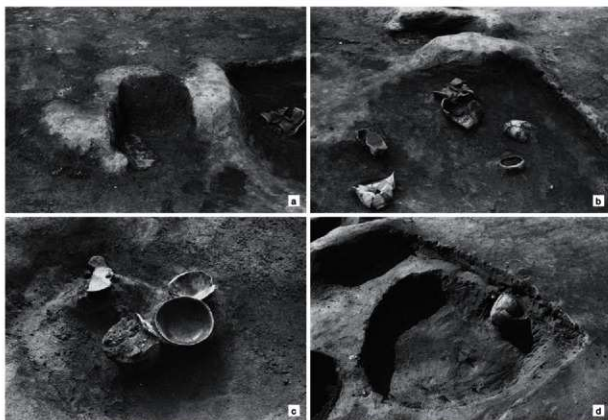


178 66号住居跡 (南より)



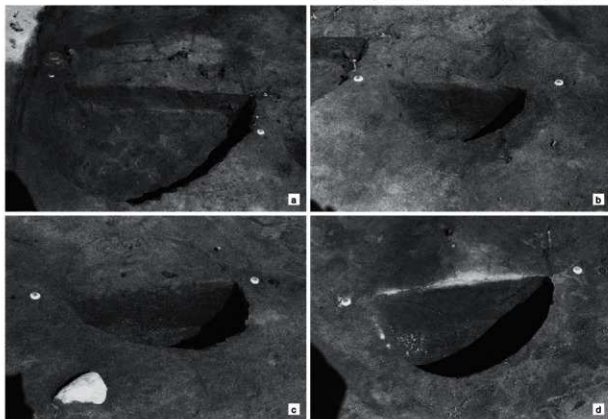
179 66号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b 検出状況 (南より)
c カマド断面 (南より)



180 66号住居跡細部

a カマド (南より) b カマド遺物出土状況 (東より)
 c 遺物出土状況 d P1 遺物出土状況 (南東より)

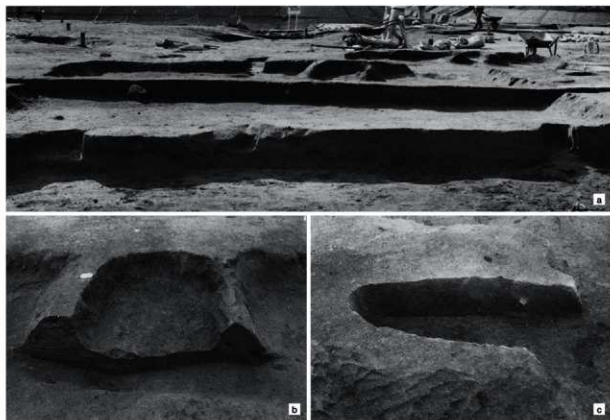


181 66号住居跡細部

a P1断面 (東より) b P2断面 (東より)
 c P3断面 (東より) d P4断面 (東より)



182 68号住居跡検出状況 (南より)



183 68号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b カマド断面状況 (東より)
c カマド断面 (南より)



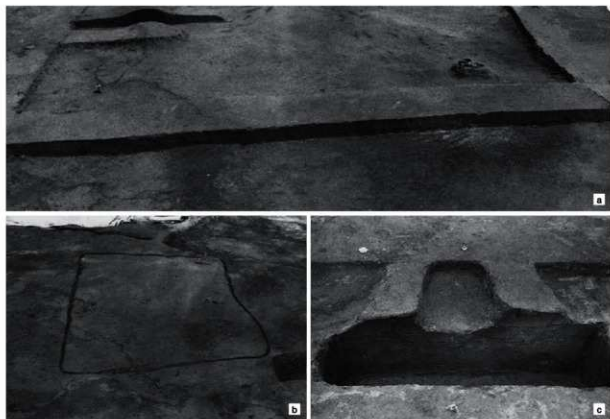
184 69号住居跡 (北西より)



185 69号住居跡検出状況 (南より)



186 70号住居跡（東より）



187 70号住居跡細部

a 道橋断面（南より）
b 検出状況（南西より）
c カマド断面状況（東より）



188 71号住居跡検出状況（西より）



189 72号住居跡カマド断割状況（北東より）



190 73号住居跡（北東より）



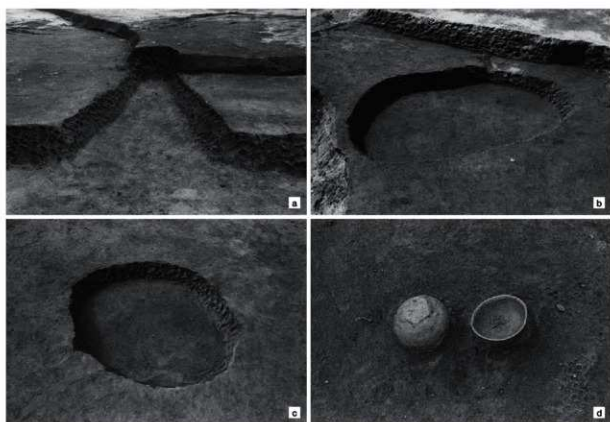
191 74号住居跡（北より）



192 75号住居跡 (南東より)

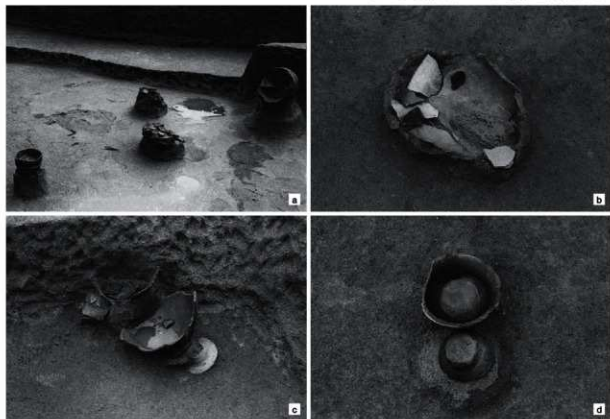


193 75号住居跡検出状況 (南西より)



194 75号住居跡細部

- a カマド (南東より) b P.1 (北東より)
c P.2 (南東より) d 遺物出土状況 (南より)



195 75号住居跡細部

- a 遺物出土状況 (北西より) b 遺物出土状況 (南より)
c 遺物出土状況 (南東より) d 遺物出土状況 (南より)



196 76号住居跡 (南東より)



197 76号住居跡細部

a 道橋断面 (北東より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (東より)



198 77号住居跡（南より）



199 77号住居跡細部

a 遺構断面（南東より）
b カマド（南より）
c カマド断層状況（南より）



200 78号住居跡 (東より)

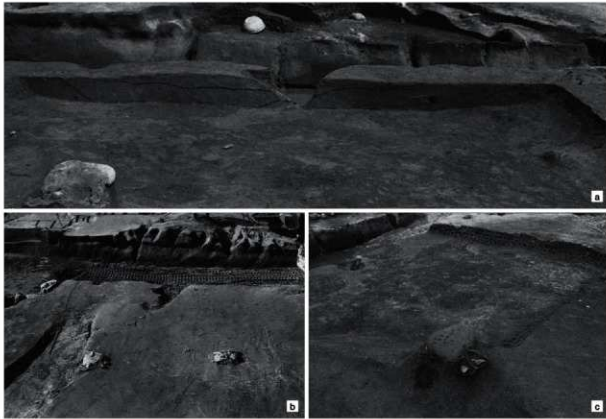


201 78号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b カマド (東より)
c カマド断面 (南より)



202 79号住居跡（南より）



203 79号住居跡細部

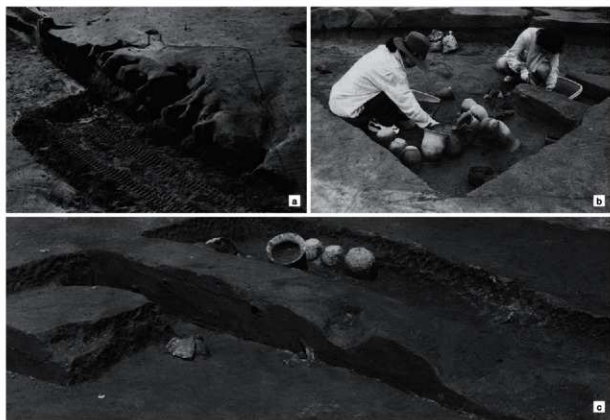
a 遺構断面（南より）
b 遺構検出状況（南より）
c 遺物出土状況（南西より）



204 80号住居跡遺物出土状況（北西より）



205 80号住居跡遺物出土状況（北東より）



206 80号住居跡細部

a 検出状況 (南東より) b 作業風景
c 遺構断面 (東より)



207 81号住居跡 (東より)



208 81号住居跡細部

a 遺構断面 (北東より) b 遺構平面 (北東より)
c カマド断面 (北東より)



209 81号住居跡細部

a カマド (南東より) b カマド断割状況 (南東より)
c P1断面 (東より) d P2 (南より)



210 82号住居跡（東より）



211 82号住居跡遺物出土状況（東より）



212 82号住居跡細部

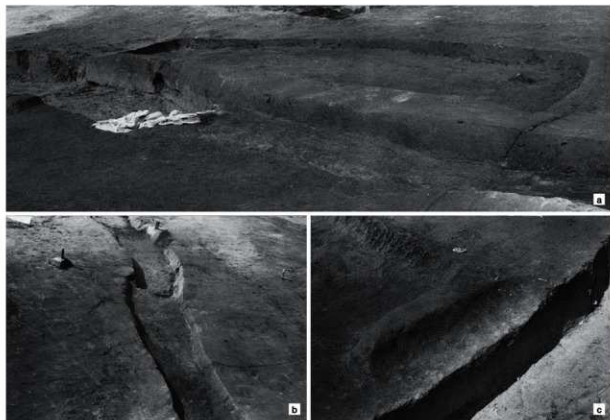
a 遺構断面（西より）
b 検出状況（西より）
c 枳鉢取出土状況（東より）



213 82号住居跡遺物出土状況（南東より）



214 83号住居跡 (南東より)



215 83号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b 発出状況 (南東より)
c カマド (北東より)



216 84号住居跡 (南東より)

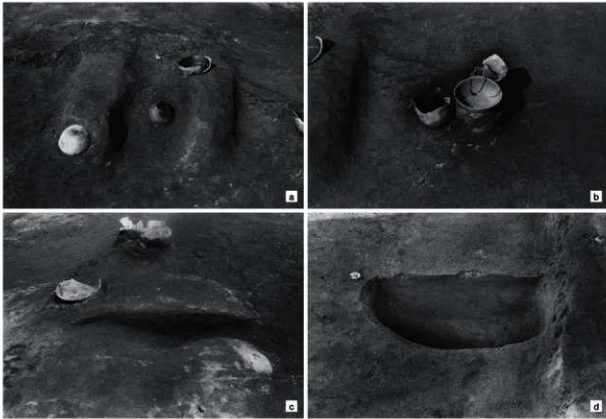


217 84号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド断面 (北東より)
c カマド (南東より)

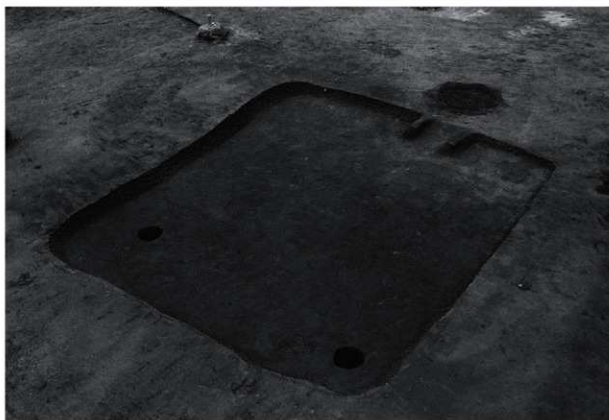


218 85号住居跡（東より）



219 85号住居跡細部

a カマド（東より）
b カマド内部遺物出土状況（東より）
c カマド断面（南より）
d P1断面（南より）



220 86号住居跡（東より）

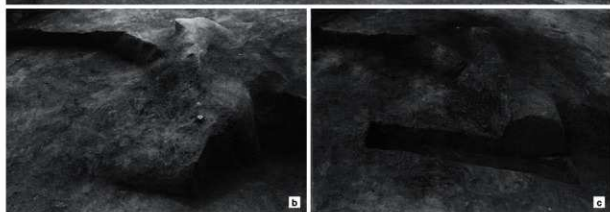


221 86号住居跡細部

a 遺構断面（東より）
b カマド（南東より）
c カマド断面（南西より）

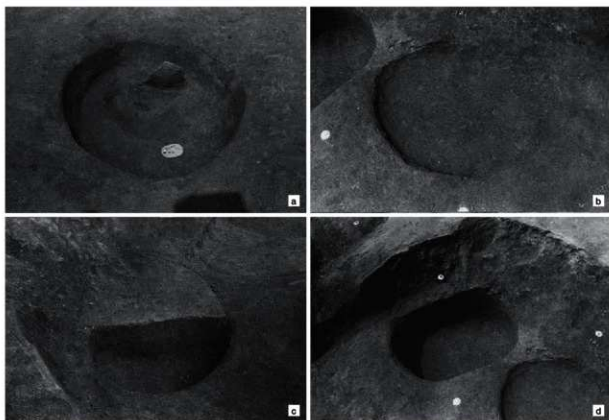


222 87号住居跡（東より）



223 87号住居跡細部

a 遺構断面状況（南より）
b カマド（東より）
c カマド断面状況（東より）



224 87号住居跡細部

a P.1 (東より) b P.2 (南より)
 c P.3 断面 (南西より) d P.3 (南東より)



225 88号住居跡 (南東より)



226 88号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b 検出状況 (北西より)
c 遺物出土状況 (西より)



227 89号住居跡 (南西より)

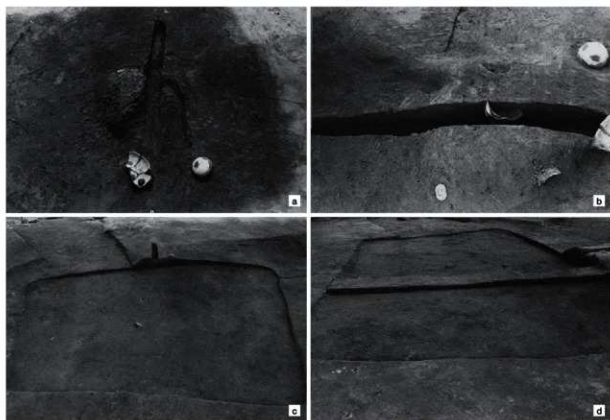


228 89号住居跡細部

a 遺構断面状況（北東より） b カマド（南西より）
c 遺構断面状況（北東より）

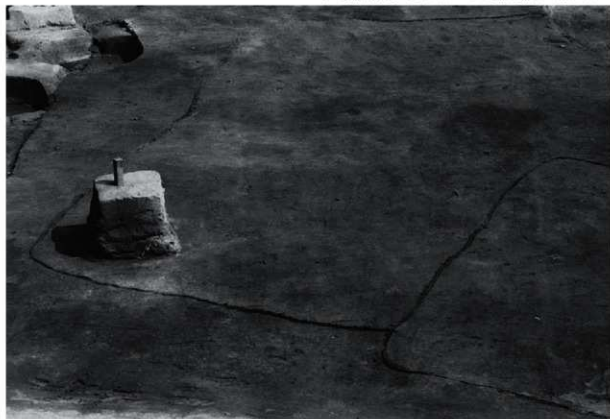


229 90号住居跡（北東より）



230 90号住居跡細部

a カマド（北東より）
b カマド断面状況（北東より）
c 遺構断面状況（北東より）
d 遺構断面状況（北西より）



231 91号住居跡検出状況（南より）



232 91号住居跡細部

a カマド断面（北西より） b カマド断面状況（北東より）
c 遺構断面状況（南東より）



233 92号住居跡カマド（北より）



234 93号住居跡（南西より）

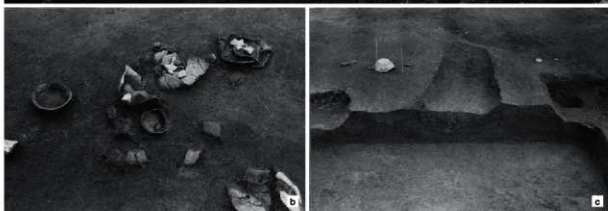


235 93号住居跡細部

a 遺構断面（西より）
b 検出状況（南より）
c 作業風景



236 94号住居跡 (南より)



237 94号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b 遺物出土状況 (西より)
c カマド断層状況 (南より)



238 94号住居跡カマド (南より)



239 95号住居跡 (南東より)



240 95号住居跡検出状況 (南東より)

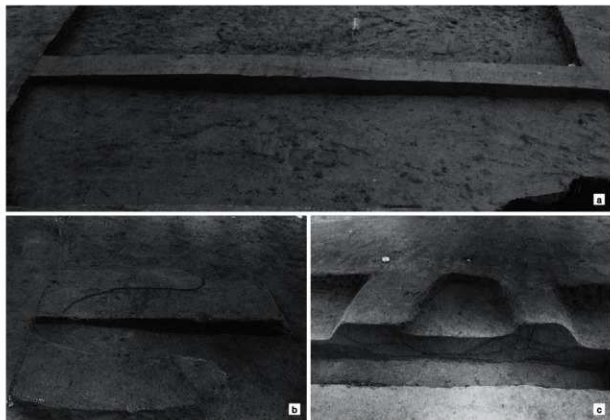


241 95号住居跡細部

a 遺構断面 (南西より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (南西より)



242 96号住居跡（南より）



243 96号住居跡細部

a 道横断面（南より）
b カマド断面（西より）
c カマド断割状況（南より）

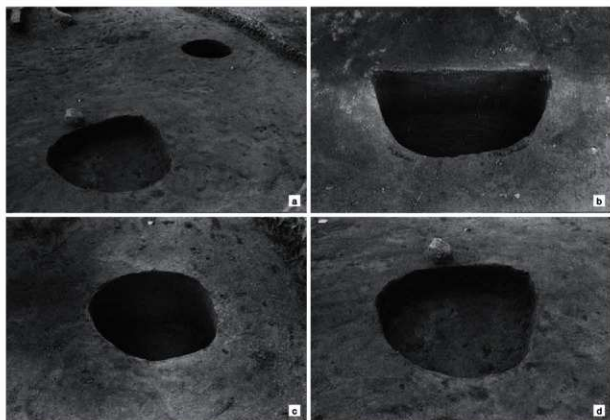


244 97号住居跡 (南東より)



245 97号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (北東より)



246 97号住居跡細部

a P.1・P.2 (南より) b P.1断面 (南西より)
c P.1 (南東より) d P.2 (南東より)



247 98号住居跡 (南東より)



248 98号住居跡カマド（南東より）



249 98号住居跡カマド遺物出土状況（南東より）



250 98号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b 遺物出土状況 (南東より)
c 遺物出土状況 (北西より)

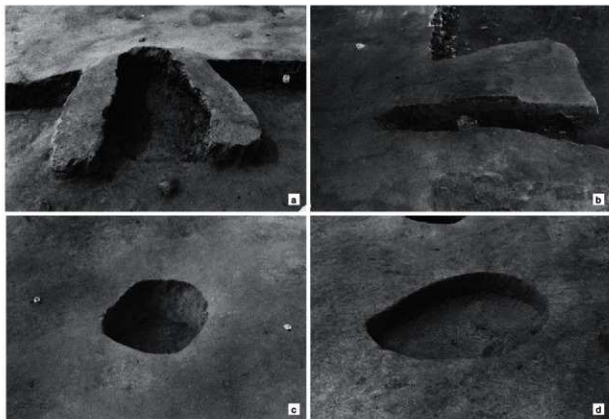


251 98号住居跡細部

a P 2 (南東より) b P 3 (南東より)
c カマド (南東より) d カマド断面 (南西より)



252 99号住居跡（東より）

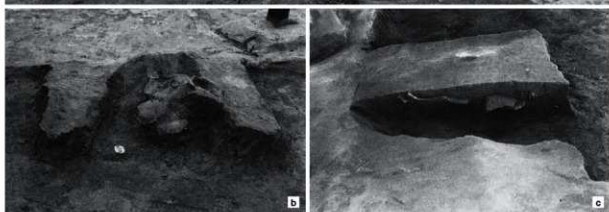


253 99号住居跡細部

a カマド（東より） b カマド断面（南より）
c P-1（東より） d P-2（東より）



254 100号住居跡 (北より)



255 100号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド (北東より)
c カマド断面 (南東より)

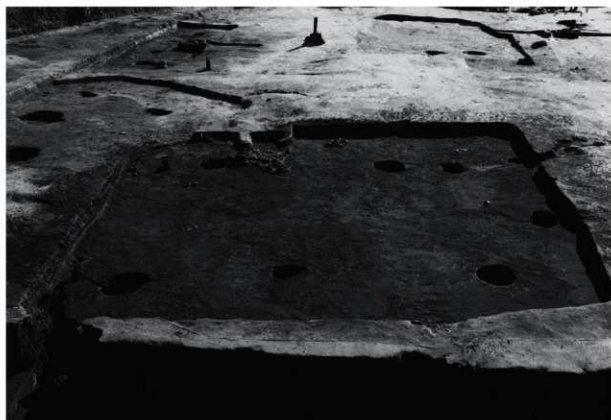


256 101号住居跡 (南東より)



257 101号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b カマド (南東より)
c 遺物出土状況 (南東より)



258 102号住居跡（北より）

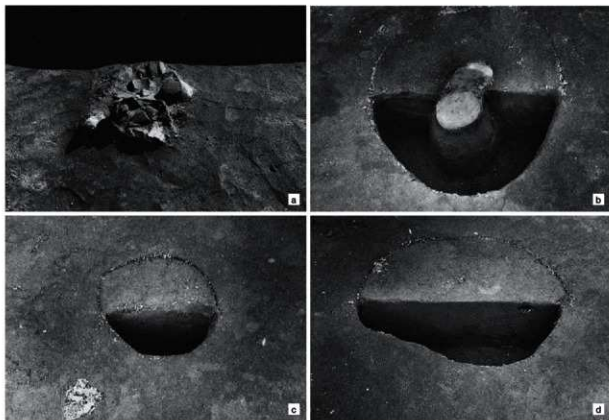


259 102号住居跡細部

a 道橋断面（南西より）
b カマド断面伏尻（北より）
c カマド断面（東より）



260 102号住居跡カマド前遺物出土状況（北より）



261 102号住居跡細部

a 遺物出土状況（北より）
b P1断面（南より）
c P2断面（南より）
d P4断面（南より）



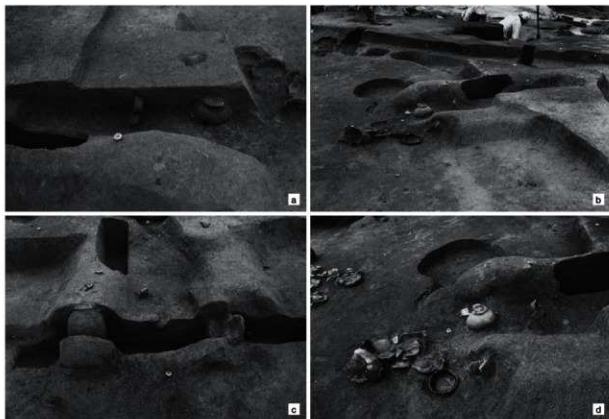
262 103号住居跡（南より）



263 103号住居跡検出状況（東より）



264 103号住居跡カマド（南より）



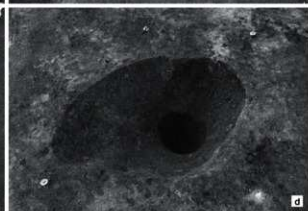
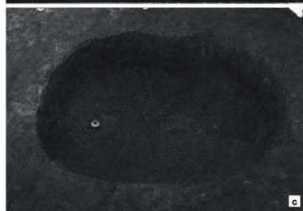
265 103号住居跡細部

a カマド断面（西より） b カマド（東より）
c カマド断面状況（南より） d カマド付近遺物出土状況（東より）



266 103号住居跡細部

a 遺構断面(南より) b 遺物出土状況(東より)
c P.1断面(西より)

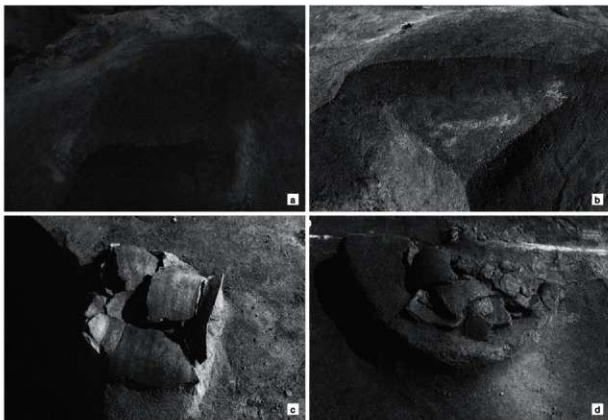


267 103号住居跡細部

a P.2断面(南東より) b P.3断面(東より)
c P.3(南西より) d P.4(東より)



268 104号住居跡（南東より）



269 104号住居跡細部

a 焼土範囲（南東より） b 焼土断倒状況（東より）
c 遺物出土状況（南東より） d 遺物出土状況（南東より）



270 105号住居跡（南東より）



271 106号住居跡（南より）



272 106号住居跡カマド（南より）



273 106号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b カマド断面状況（南より）
c 遺物出土状況（南より）



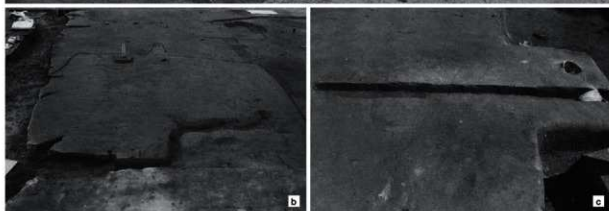
274 107号住居跡検出状況（南東より）



275 108号住居跡（南東より）



276 108号住居跡カマド (南東より)



277 108号住居跡細部

a 遺構断面 (北より) b 検出状況 (南東より)
c カマド断面 (南西より)



278 109号住居跡（東より）

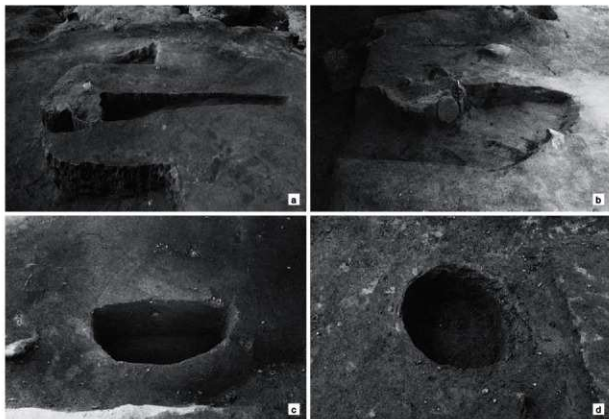


279 109号住居跡細部

a 遺構断面（東より）
b カマド（東より）
c カマド断層状況（東より）



280 109号住居跡カマド遺物出土状況（東より）



281 109号住居跡細部

a カマド断面（北より） b カマド断面（北より）
c P1断面（南より） d P1（東より）



282 110号住居跡 (南西より)



283 110号住居跡細部

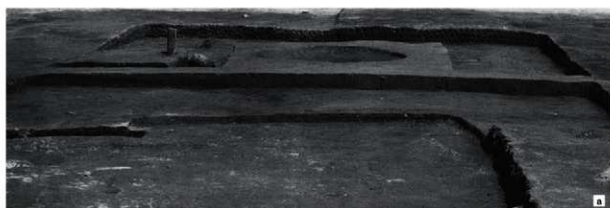
a 遺構断面 (南より) b カマド (南西より)
c カマド断面状況 (南より)



284 111号住居跡（南東より）



285 111号住居跡検出状況（南東より）



286 111号住居跡細部

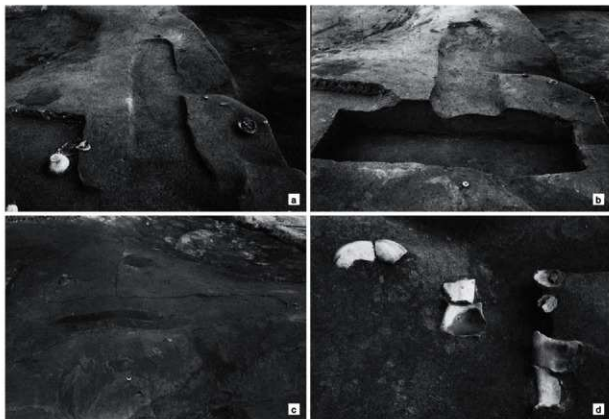
a 遺構断面（南より） b カマド断面（北東より）
c カマド（南東より）



287 112号住居跡（西より）



288 112号住居跡検出状況 (西より)



289 112号住居跡細部

a カマド (西より) b カマド断面状況 (西より)
c カマド断面 (南より) d 遺物出土状況 (北西より)



290 113号住居跡（東より）



291 113号住居跡検出状況（北より）



292 114号住居跡 (南東より)

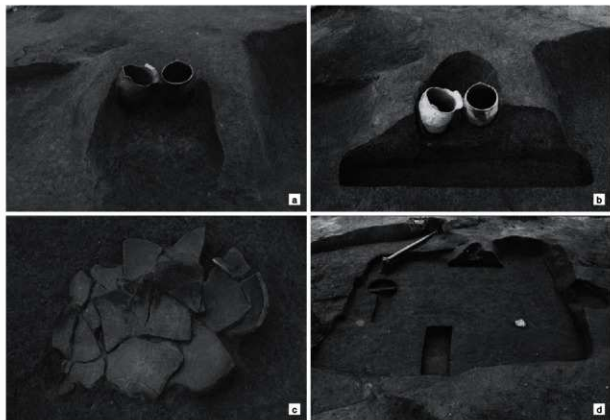


293 114号住居跡細部

a 遺構断面 (西より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (南西より)



294 118号住居跡 (南西より)

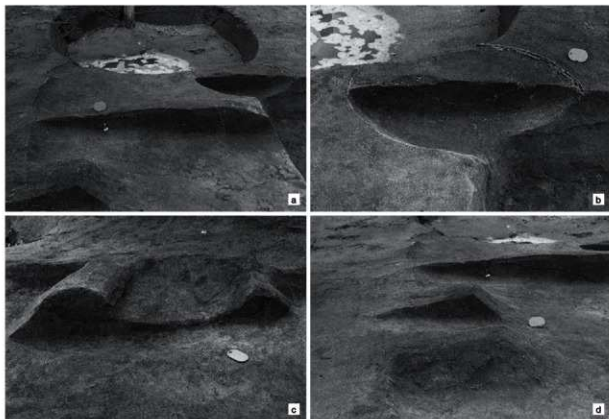


295 118号住居跡細部

a カマド (南西より) b カマド断面状況 (南西より)
c 遺物出土状況 (南より) d 遺構全景 (南より)



296 119号住居跡（東より）



297 119号住居跡細部

a 東西土層断面（南より）
 b P.1断面（南より）
 c カマド断層状況（東より）
 d カマド断面（南より）



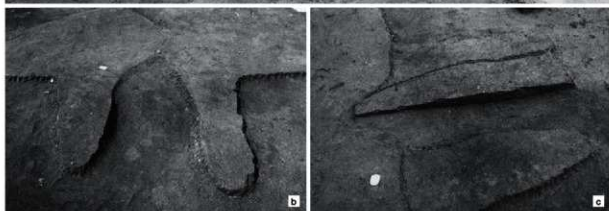
298 120号住居跡（南東より）



299 120号住居跡検出状況（南東より）



300 120号住居跡遺物出土状況 (南より)

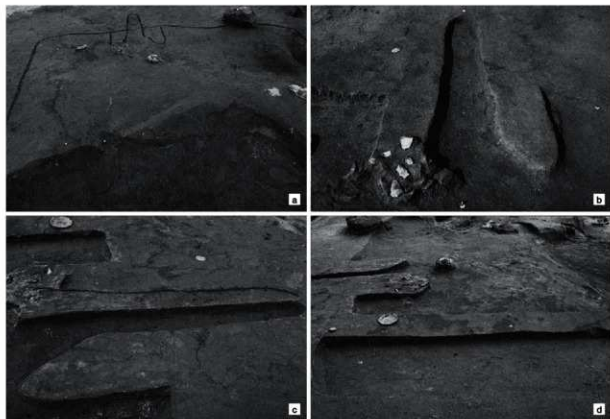


301 120号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (南西より)



302 121号住居跡 (南より)

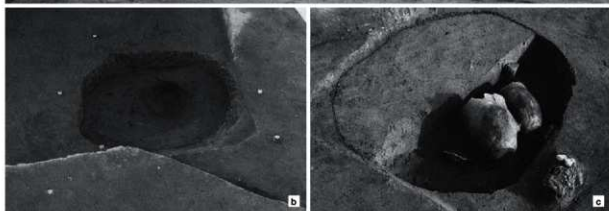


303 121号住居跡細部

a 検出状況 (南より) b カマド (南より)
c カマド断面 (東より) d 遺構断面 (西より)



304 122号住居跡検出状況（東より）



305 122号住居跡細部

a 遺構断面（北より）
b P1（東より）
c P1断面（北西より）



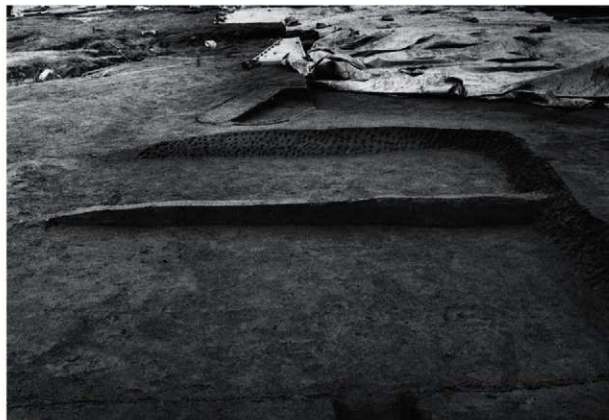
306 123号住居跡（西より）



307 123号住居跡検出状況（南東より）



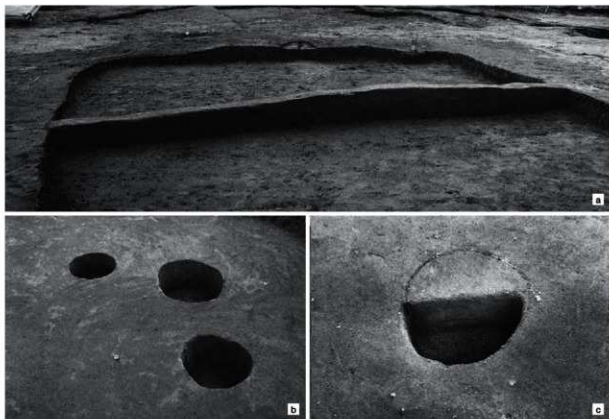
308 124号住居跡（北西より）



309 124号住居跡遺構断面（南西より）



310 125号住居跡 (南東より)



311 125号住居跡細部

a 道橋断面 (北東より) b P1・2・6 (南東より)
c P3断面 (南東より)



312 126号住居跡（南西より）



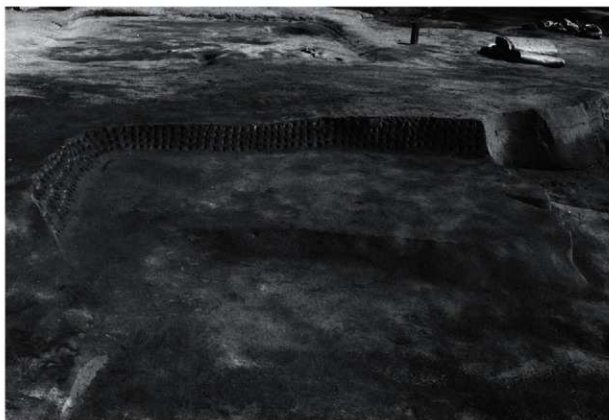
313 126号住居跡遺構断面（南より）



314 127号住居跡（南より）



315 127号住居跡遺構断面（北より）



316 128号住居跡（西より）



317 129号住居跡（東より）



318 129号住居跡遺物出土状況（西より）



319 130号住居跡（西より）



320 131号住居跡（東より）



321 131号住居跡カマ下断面状況（東より）



322 134号住居跡（東より）



323 134号住居跡検出状況（西より）



324 135号住居跡 (南より)



325 135号住居跡遺構断面 (南より)



326 136・146号住居跡（東より）

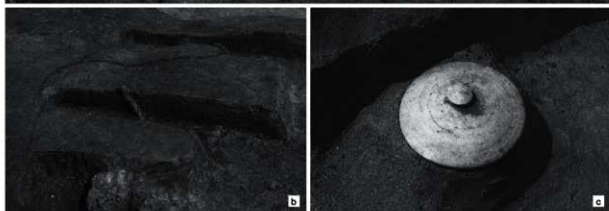


327 136号住居跡細部

a 遺構断面（東より）
b S T 136・146遺物出土状況
c 遺物出土状況（南より）



328 137号住居跡検出状況（南東より）



329 137号住居跡細部

a 遺構断面（南より）
b カマド断面（南西より）
c 遺物出土状況（北より）



330 137号住居跡（南東より）



331 137号住居跡カマド（南東より）



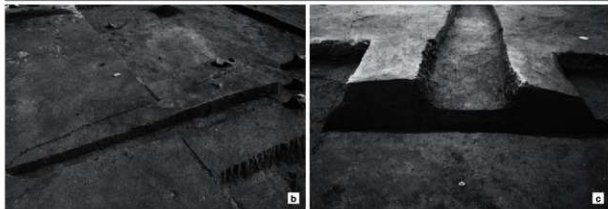
332 138号住居跡（南東より）



333 138号住居跡検出状況（南東より）



334 138号住居跡カマド (南東より)



335 138号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド断面 (南より)
c カマド断削状況 (南東より)



336 138号住居跡カマド前出土状況(南東より)



337 138号住居跡掘形(南東より)



338 139号住居跡 (南東より)



339 139号住居跡検出状況 (南東より)



340 140号住居跡（南より）



341 141号住居跡（北西より）



342 142号住居跡（北より）



343 142号住居跡検出状況（北より）



344 142号住居跡カマド（北より）



345 142号住居跡カマド（北より）

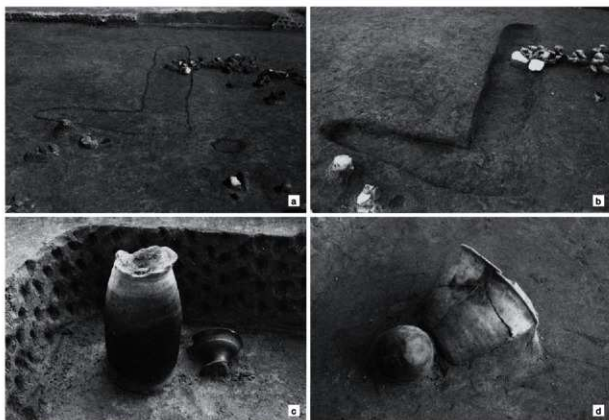


346 142号住居跡カマド断面状況（北より）



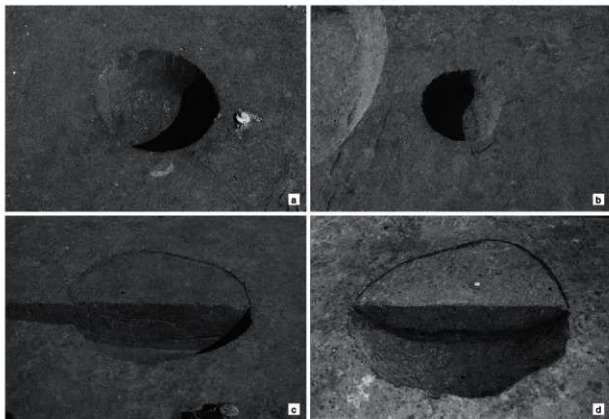
347 142号住居跡細部

a 遺構断面（南より）
b カマド断面（南西より）
c 間仕切り溝断面（南より）



348 142号住居跡細部

a 間仕切り溝掘出状況(南より) b 間仕切り溝(南より)
c 遺物出土状況(北より) d 遺物出土状況(西より)



349 142号住居跡細部

a P1(南より) b P2(東より)
c P4断面(南より) d P6断面(西より)



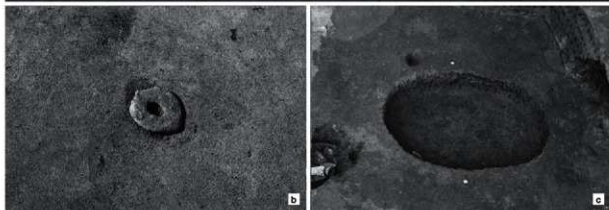
350 143号住居跡（南東より）



351 143号住居跡検出状況（南東より）

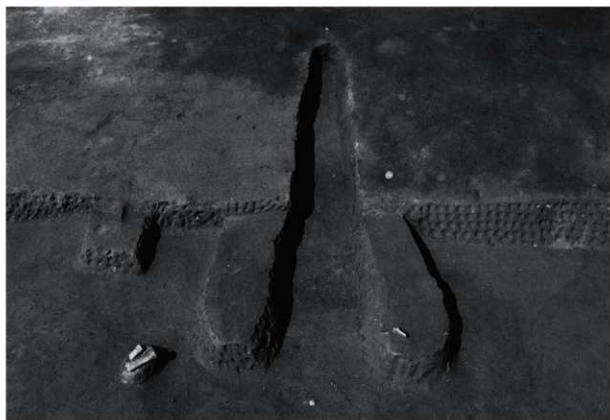


352 143号住居跡作業風景 (南東より)

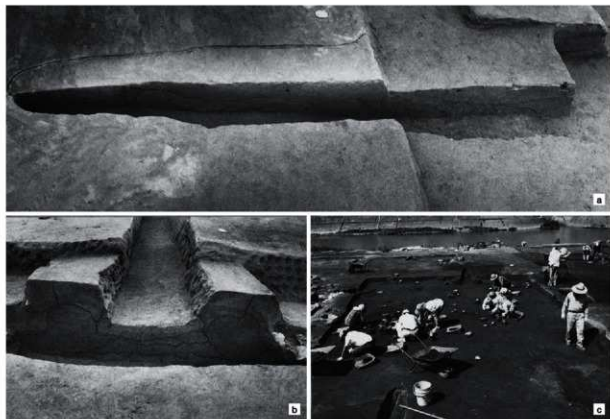


353 143号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b 遺物出土状況 (北より)
c P1 (東より)



354 143号住居跡カマド (南東より)



355 143号住居跡細部

a カマド断面 (南西より) b カマド断面状況 (南東より)
c 作業風景



356 144号住居跡（南東より）



357 144号住居跡遺物出土状況（南東より）

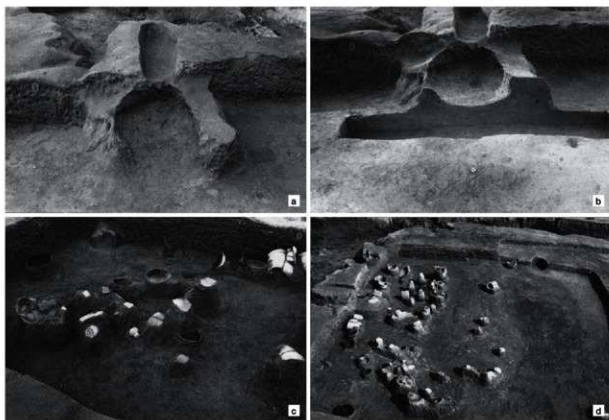


358 144号住居跡カマド (南東より)



359 144号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b 陥床断面 (南東より)



360 144号住居跡細部

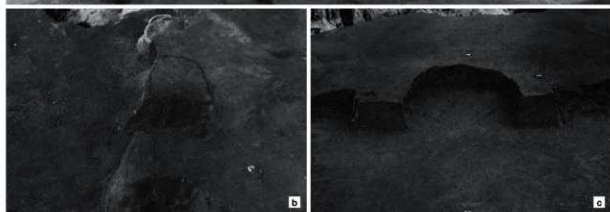
a カマド (南東より) b カマド断層状況 (南東より)
 c 遺物出土状況 (南東より) d 遺物出土状況 (南より)



361 144号住居跡遺物出土状況 (南東より)



362 145号住居跡（南東より）



363 145号住居跡細部

a 遺構断面（南西より）
b カマド断面（南東より）
c カマド断層状況（南西より）



364 147号住居跡（南より）



365 147号住居跡細部

a 鉄刀出土状況（南西より）
b 断層状況（南西より）
c 鉄刀出土状況（南より）



366 148号住居跡 (南より)



367 148号住居跡カマド (南東より)



368 148号住居跡細部

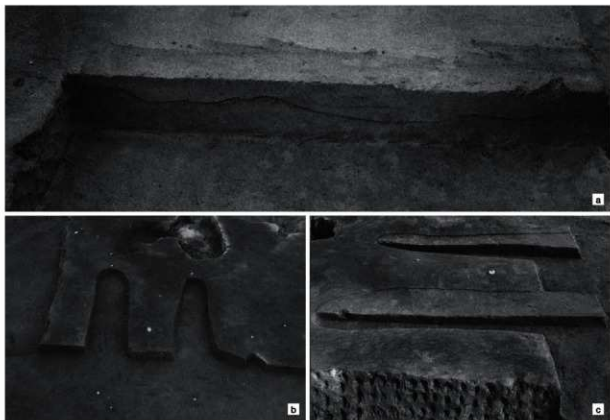
a 遺構断面 (北西より) b 検出状況 (南東より)
c カマ下断面 (南西より)



369 149号住居跡 (南西より)



370 151号住居跡 (南東より)



371 151号住居跡細部

a 遺構断面 (南西より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (南西より)



372 153号住居跡（南東より）



373 153号住居跡細部

a 遺構断面（北西より） b カマド（南東より）
c カマド断面（南西より）



374 154号住居跡（東より）



375 154号住居跡検出状況（東より）



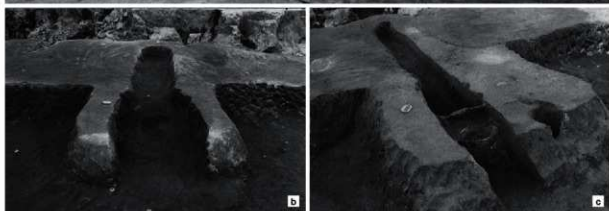
376 155号住居跡（南西より）



377 156号住居跡（北東より）



378 157号住居跡（南より）



379 157号住居跡細部

a 遺構断面（南より）
b カマド（南より）
c カマド断面（南西より）



380 157号住居跡カマド（南より）



381 158号住居跡（東より）



382 158号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b カマド (北東より)
c カマド断面 (南東より)



383 159号住居跡 (南東より)



384 159号住居跡カマド (南東より)

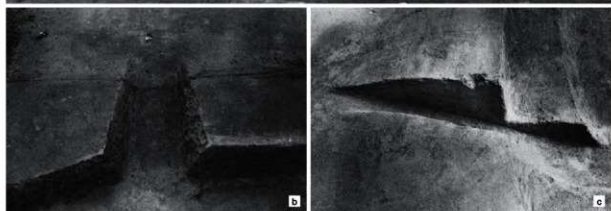


385 159号住居跡細部

a カマド断面 (南西より) b 遺物出土状況 (南東より)
c 検出状況 (東より)



386 160号住居跡 (南西より)



387 160号住居跡細部

a 遺構断面 (東より) b カマド (南より)
c カマド断面 (西より)



388 161号住居跡（東より）



389 161号住居跡（北より）



390 161号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド断削状況 (東より)
c カマド断面 (北より)



391 161号住居跡細部

a P1断面 (北より) b P2断面 (北より)
c P3断面 (北より) d P4断面 (北より)



392 162号住居跡（北東より）

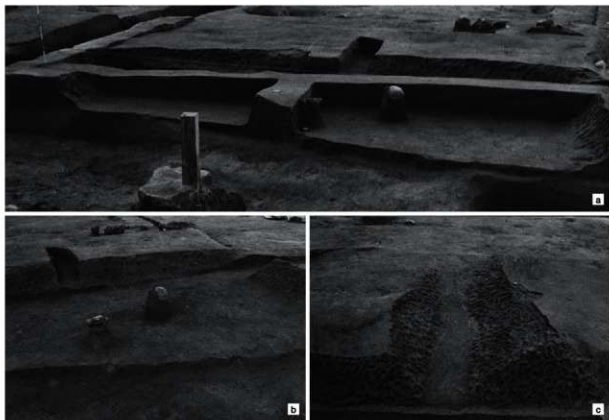


393 162号住居跡細部

a 遺構断面（東より） b 検出状況（東より）
c 作業風景



394 164号住居跡（東より）



395 164号住居跡細部

a 遺構断面（東より） b 遺物出土状況（東より）
c カマド（東より）



396 165号住居跡（南東より）



397 165号住居跡遺構断面（南西より）



398 166号住居跡（南東より）



399 167号住居跡検出状況（東より）



400 169号住居跡（東より）

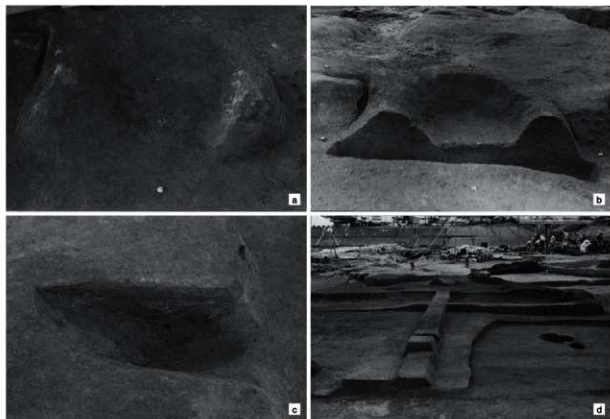


401 169号住居跡周辺検出状況（西より）



402 169号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b 遺構断面 (南東より)



403 169号住居跡細部

a カマド (東より) b カマド断面伏尻 (東より)
c カマド断面 (南より) d 遺構断面 (東より)



404 170号住居跡検出状況 (南東より)

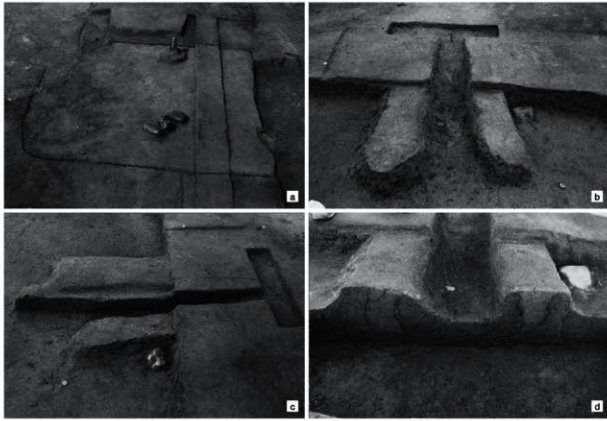


405 170号住居跡細部

a 遺構断面 (南西より) b カマド (南東より)
c カマド断面 (南西より)



406 173号住居跡（北西より）



407 173号住居跡細部

a 検出状況（南東より） b カマド（北西より）
c カマド断面（南西より） d カマド断面状況（北西より）



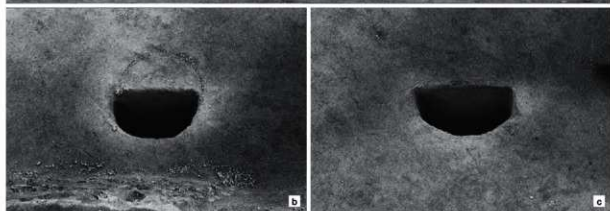
408 174号住居跡（南東より）



409 174号住居跡遺構断面（南東より）



410 178号住居跡（南より）



411 178号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b P1断面（北より）
c P2断面（北より）



412 180号住居跡（東より）



413 180号住居跡検出状況（東より）



414 181号住居跡（南東より）



415 181号住居跡検出状況（南東より）



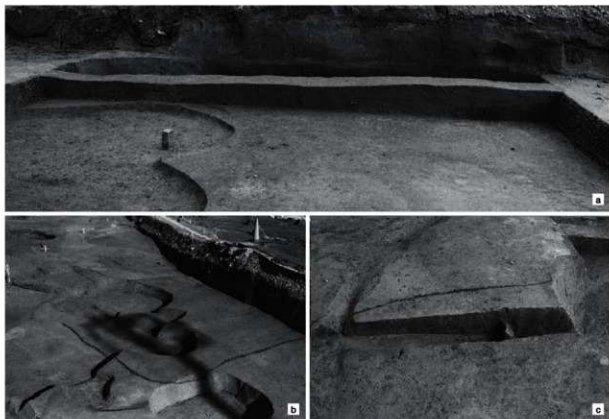
416 185号住居跡（東より）



417 187号住居跡（東より）



418 191号住居跡（北西より）



419 191号住居跡細部

a 遺構断面（南西より）
b 検出状況（南より）
c カマド断面（南西より）



420 192号住居跡検出状況（南東より）



421 192号住居跡遺構断面（北西より）



422 193号住居跡（西より）



423 193号住居跡遺構断面（北西より）



424 194号住居跡（北西より）



425 194号住居跡検出状況（南西より）



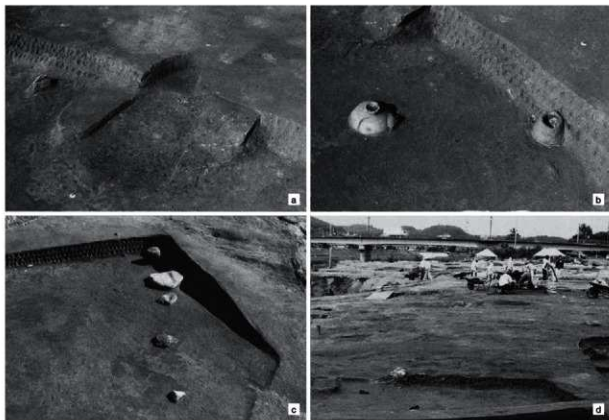
426 195号住居跡遺構断面（北より）



427 195号住居跡遺構断面拡大（北より）



428 196号住居跡（東より）

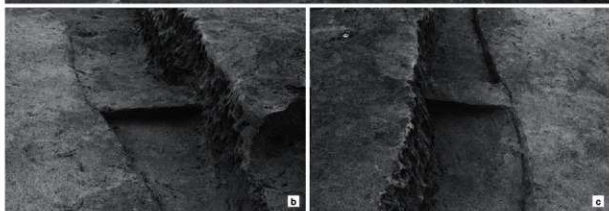


429 196号住居跡細部

a カマド（南東より） b 遺物出土状況（南東より）
c 床面石列（西より） d 作業風景



430 199号住居跡（東より）



431 199号住居跡細部

a 遺構断面（南西より）
b 壁溝断面（北より）
c 壁溝断面（南より）



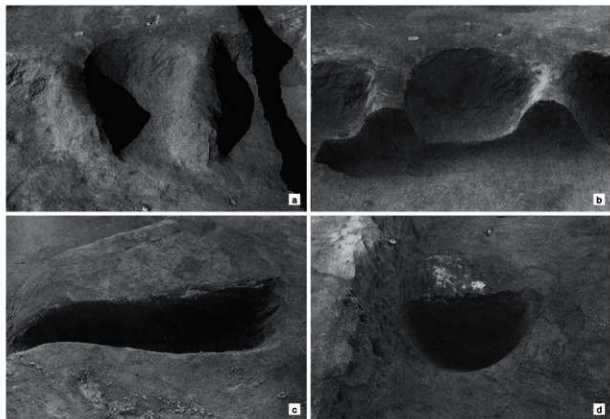
432 200号住居跡（東より）



433 200号住居跡検出状況（東より）

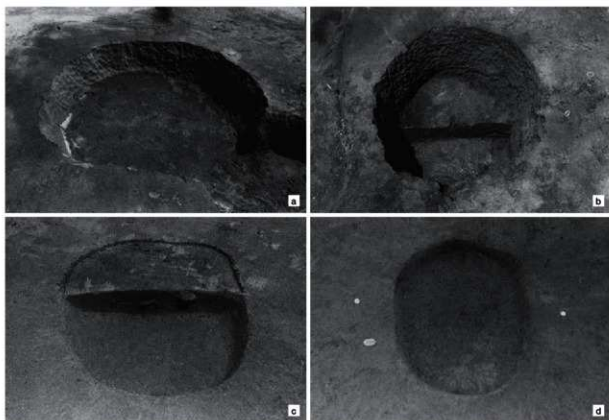


434 214号住居跡（南東より）



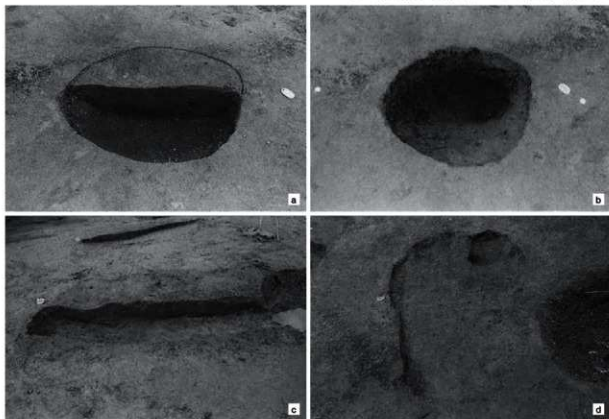
435 214号住居跡細部

a カマド（南東より）
b カマド断面状況（南東より）
c カマド断面（北東より）
d P2断面（南西より）



436 1～3号土坑

a 1号土坑 (南西より) b 2号土坑 (東より)
 c 3号土坑断面 (南東より) d 3号土坑 (南東より)



437 4・5号土坑

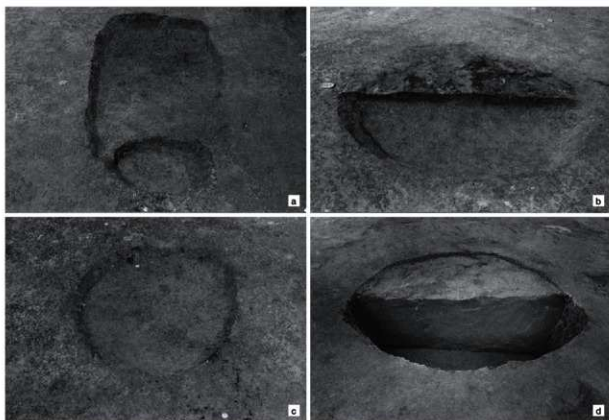
a 4号土坑断面 (南西より) b 4号土坑 (南西より)
 c 5号土坑断面 (南より) d 5号土坑 (東より)



438 5～7号土坑（東より）

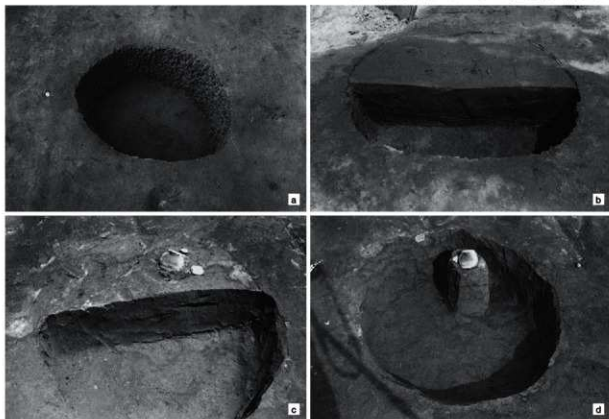


439 5～7号土坑検出状況（北東より）



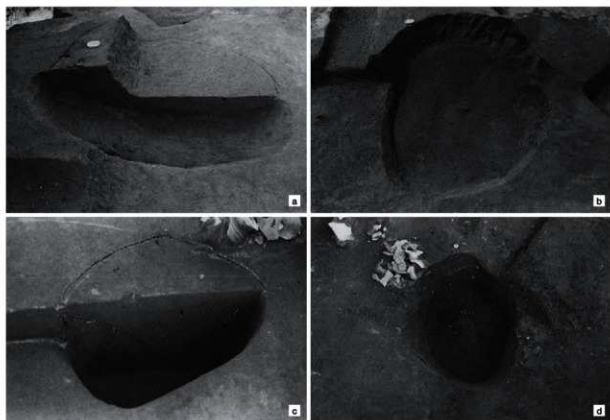
440 6～8号土坑

a 6号土坑 (南東より) b 7号土坑断面 (南より)
c 7号土坑 (南東より) d 8号土坑断面 (南西より)



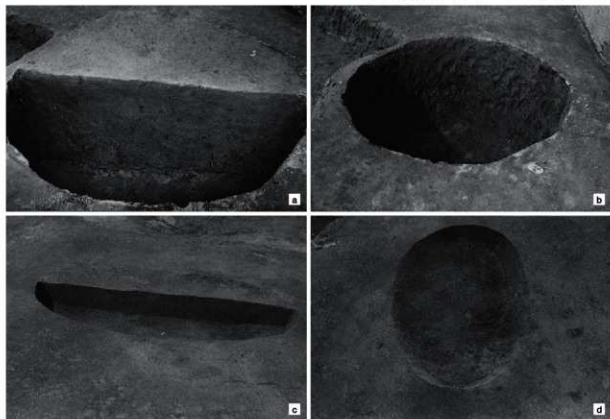
441 8・9・12号土坑

a 8号土坑 (南より) b 9号土坑断面 (西より)
c 12号土坑断面 (西より) d 12号土坑 (西より)



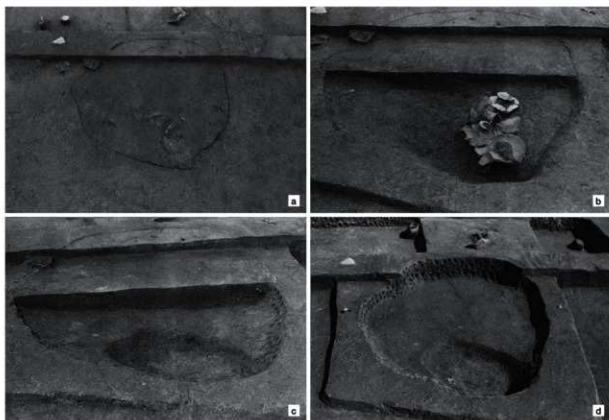
442 13・14号土坑

a 13号土坑断面(南より) b 13号土坑(東より)
c 14号土坑断面(南より) d 14号土坑(南より)



443 15・16号土坑

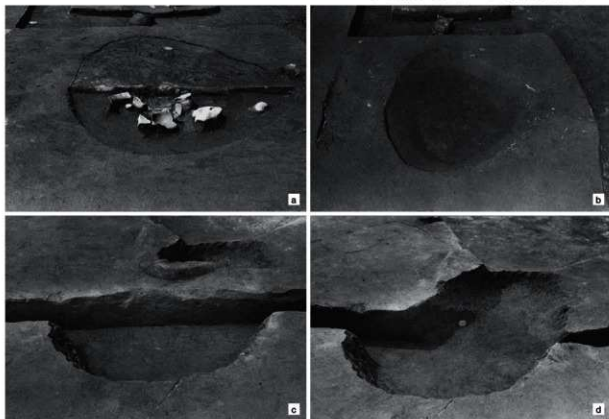
a 15号土坑断面(南より) b 15号土坑(南より)
c 16号土坑断面(南より) d 16号土坑(東より)



444 17号土坑細部

a 検出状況(南より) b 遺物出土状況(南より)

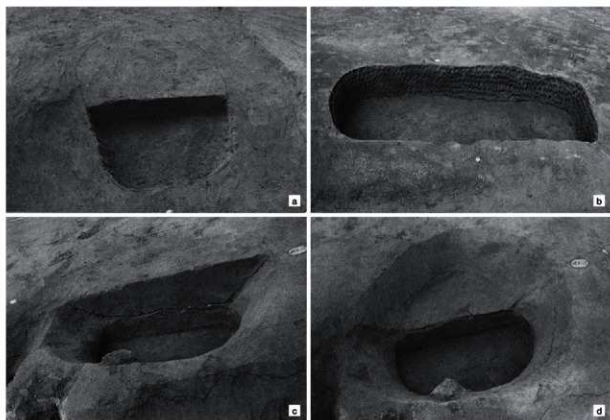
c 土坑断面(南より) d 完掘状況(南より)



445 18・19号土坑

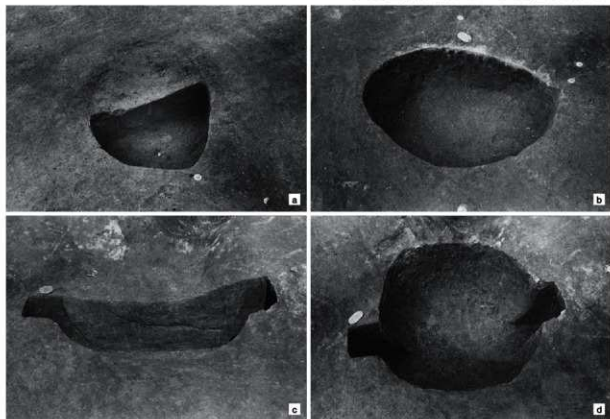
a 18号土坑遺物出土状況(東より) b 18号土坑(東より)

c 19号土坑断面(東より) d 19号土坑(東より)



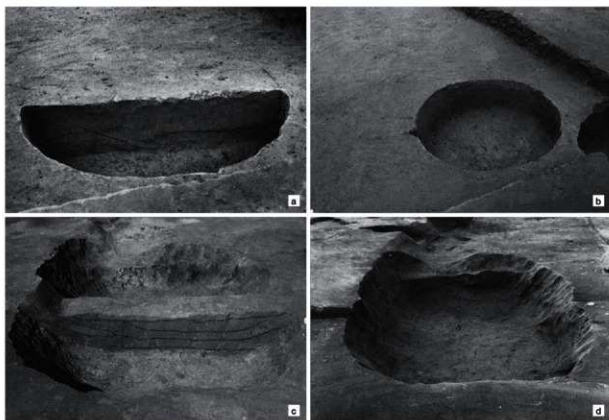
446 21・22号土坑

a 21号土坑断面(東より) b 21号土坑(南西より)
c 22号土坑断面(南西より) d 22号土坑(南西より)



447 23・24号土坑

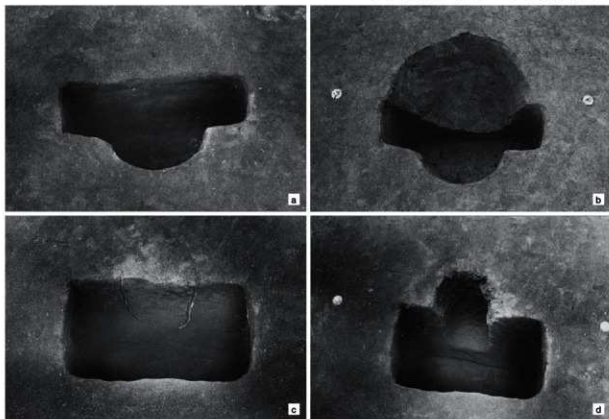
a 23号土坑断面(東より) b 23号土坑(南西より)
c 24号土坑断面(南西より) d 24号土坑(南西より)



448 26・29号土坑

a 26号土坑断面(南より) b 26号土坑(南より)

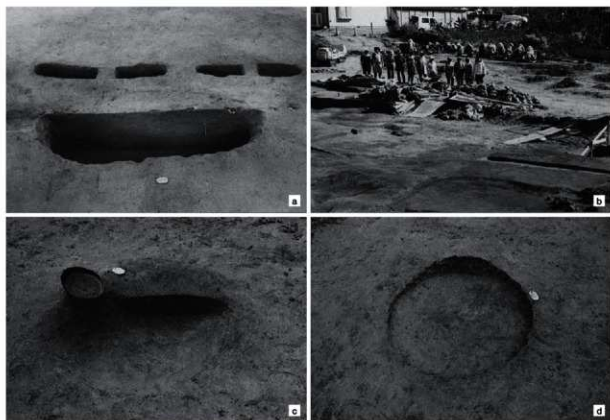
c 29号土坑断面(東より) d 29号土坑(東より)



449 30・31号土坑

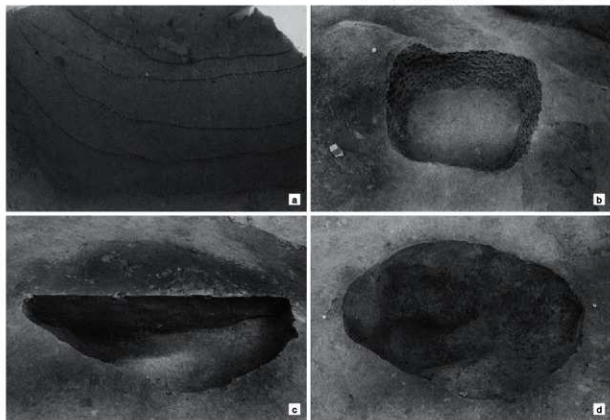
a 30号土坑断面(東より) b 30号土坑(東より)

c 31号土坑断面(東より) d 31号土坑(東より)



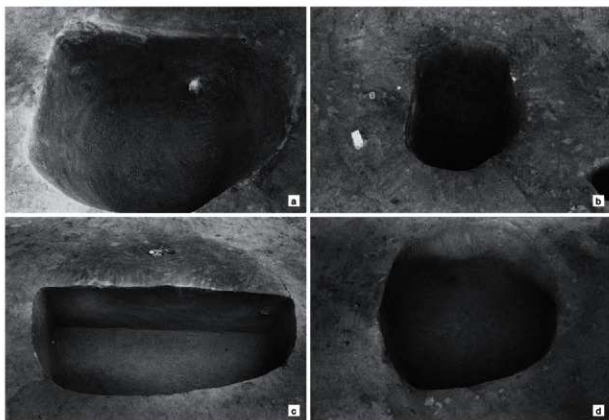
450 32・35号土坑

a 32号土坑断面(南より) b 作業風景
c 35号土坑断面(南東より) d 35号土坑(西より)



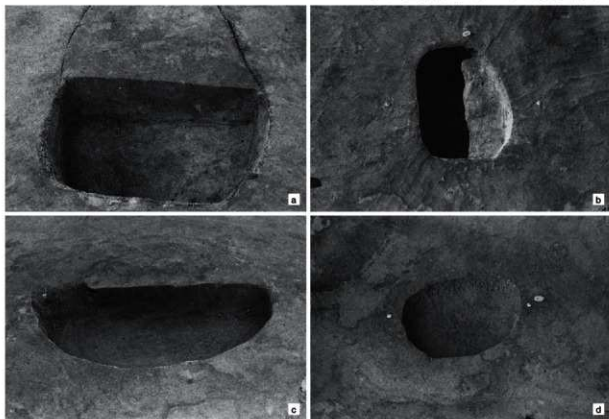
451 43・54号土坑

a 43号土坑断面(北より) b 43号土坑(東より)
c 54号土坑断面(南より) d 54号土坑(南西より)



452 55・56号土坑

a 55号土坑断面 (南より) b 55号土坑 (南より)
c 56号土坑断面 (南より) d 56号土坑 (南より)



453 57・58号土坑

a 57号土坑断面 (南より) b 57号土坑 (東より)
c 58号土坑断面 (南より) d 58号土坑 (南より)



454 1号溝跡検出状況（南東より）



455 1号溝跡細部

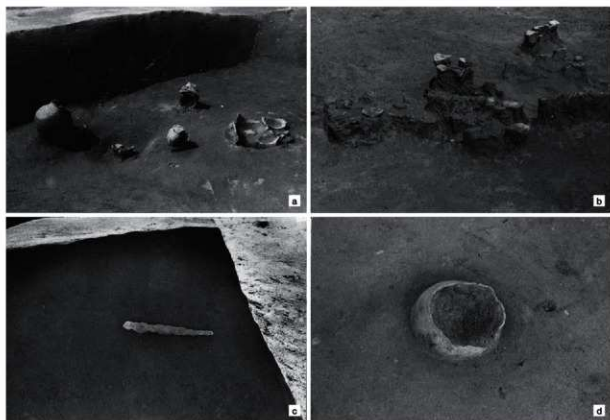
a 遺構断面（北西より） b 遺構断面（北西より）



456 1号溝跡 (南東より)

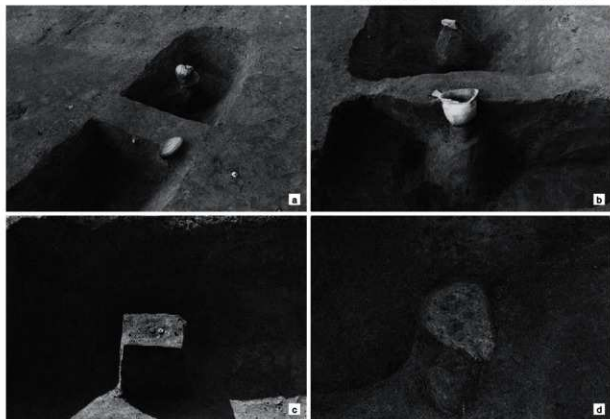


457 1・5号溝跡検出状況 (南東より)



458 1号溝跡細部

a 遺物出土状況（南東より） b 遺物出土状況（南より）
c 鉄刀出土状況（北より） d 横断面遺物出土状況

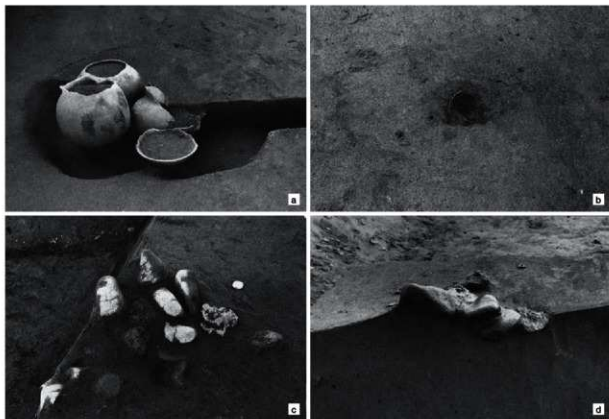


459 1号溝跡細部

a 遺物出土状況（南東より） b 遺物出土状況（東より）
c 遺物出土状況（東より） d 底面遺物出土状況（西より）



460 1号溝跡・6号特殊遺構（西より）



461

a 6号特殊遺構断面（北東より）
 b 1号溝跡掘削出土状況（西より）
 c 13号集石検出状況（南より）
 d 13号集石遺構断面（西より）



462 2号溝跡遠景（南東より）



463 2号溝跡細部

a 遺構断面(北西より) b 遺構断面(北西より)



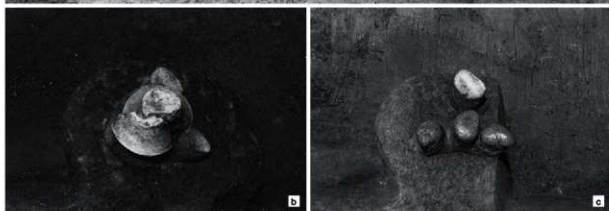
464 2号溝跡遺物出土状況(西より)



465 2号溝跡遺物出土状況（東より）

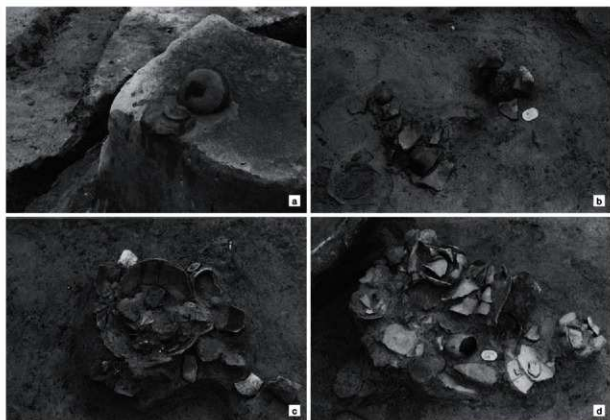


466 2号溝跡A群遺構断面(北東より)



467 2号溝跡細部

a A群遺構断面(北西より) b A群遺物出土状況(南東より)
c A群祭祀石出土状況(南東より)



468 2号溝跡細部

a 遺物出土状況(南より) b C群(北東より)
c B群(北より) d D群(南西より)



469 2号溝跡E・F群(北東より)



470 2号溝跡E群 (北東より)



471 2号溝跡F群 (北東より)



472 2号溝跡E・F群断削状況(北西より)

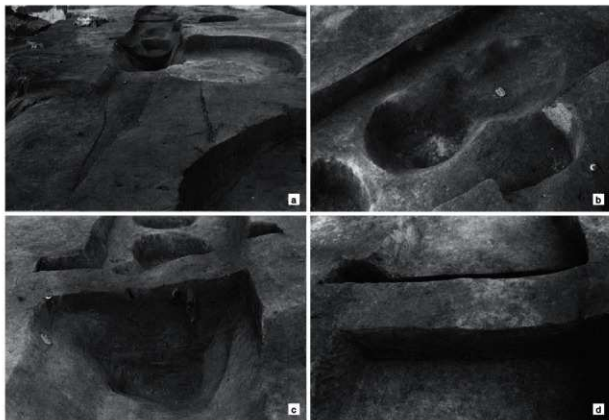


473 2号溝跡細部

a E・F群断削状況(南西より) b 日群(北東より)
c I群(北より)



474 4号溝跡 (南西より)

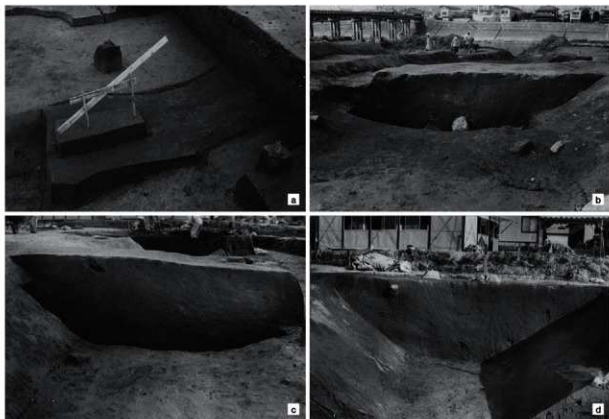


475 4号溝跡細部

a 掘出状況 (南西より) b 完掘状況 (南西より)
c 遺構断面 (南西より) d 遺構断面 (南西より)



476 5号溝跡検出状況（南東より）

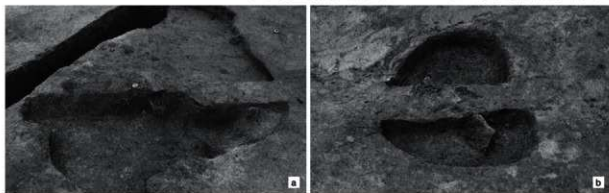


477 5号溝跡細部

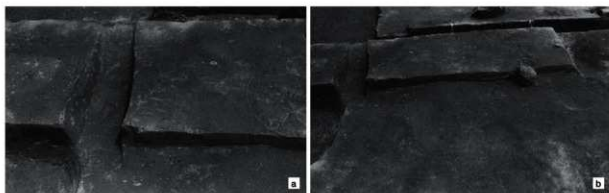
a 検出状況（南西より） b 遺構断面（南東より）
c 遺構断面（北西より） d 遺構断面（北西より）



478 1～3号焼土遺構 a 1号焼土遺構遺物出土状況(南西より) b 1号焼土遺構(南より)
c 2号焼土遺構断面(南東より) d 3号焼土遺構検出状況(南より)



479 3号焼土遺構細部 a 断面状況(南西より) b 断面状況(南より)



480 1号特殊遺構細部 a 検出状況(西より) b 検出状況(南より)



481 1号特殊遺構細部

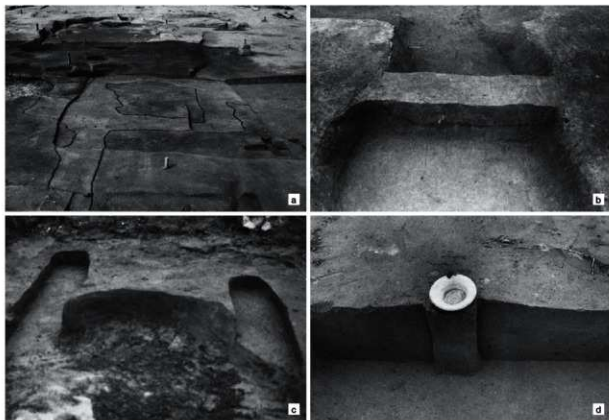
a 遺構断面(南東より) b 完復状況(北西より)



482 2号特殊遺構(南西より)



483 3号特殊遺構（北東より）



484 3・5・7号特殊遺構

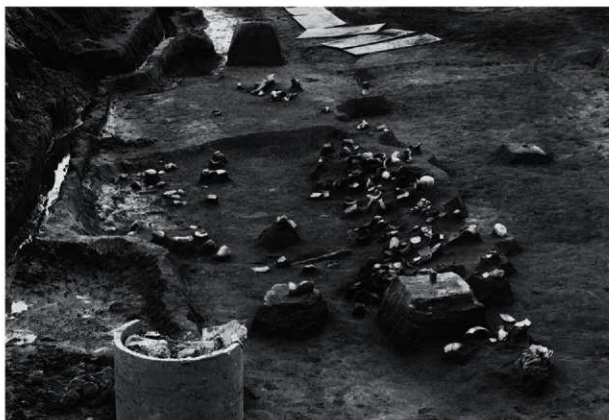
a 3号特殊遺構検出状況（南東より）
 b 3号特殊遺構断面（南西より）
 c 5号特殊遺構（北西より）
 d 7号特殊遺構断面別状況（西より）



485 1号遺物包含層遠景（南東より）



486 1号遺物包含層（南より）



487 1号遺物包含層遠景（北東より）



488 1号遺物包含層遠景（南東より）



489 1号遺物包含層拡大(東より)



490 1号遺物包含層細部

a 遺物出土状況(東より) b 遺物出土状況(北東より)
c 遺物出土状況(東より)



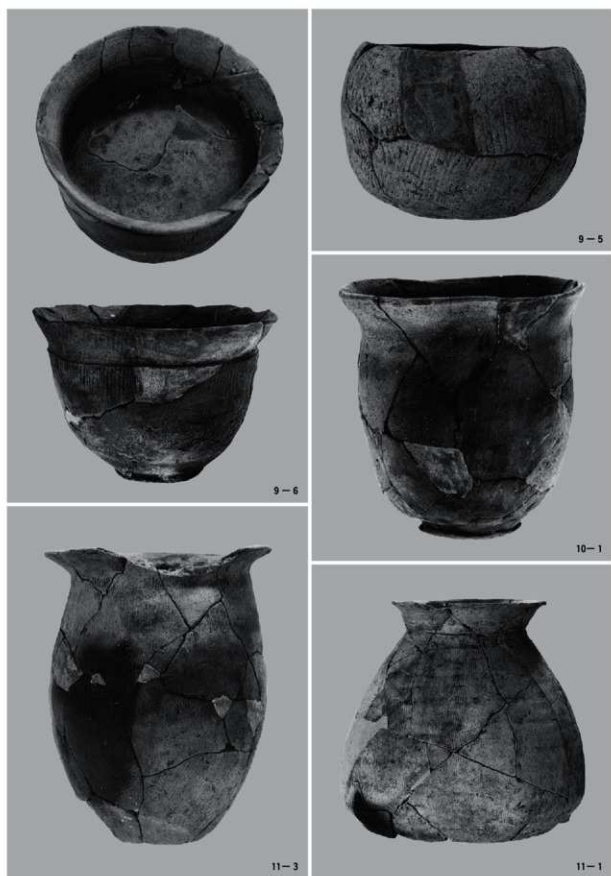
491 1号遺物包含層拡大(東より)



492 1号遺物包含層拡大(東より)



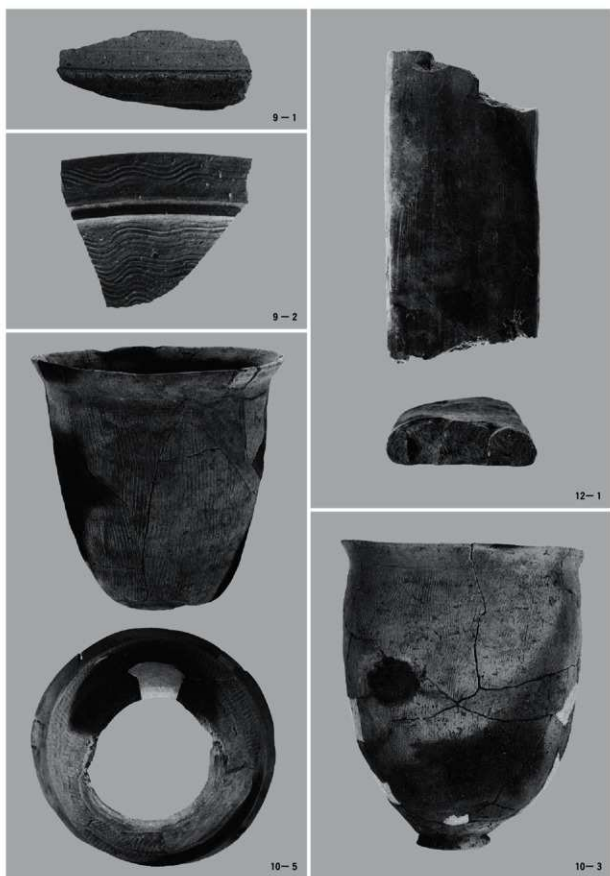
493 作業風景



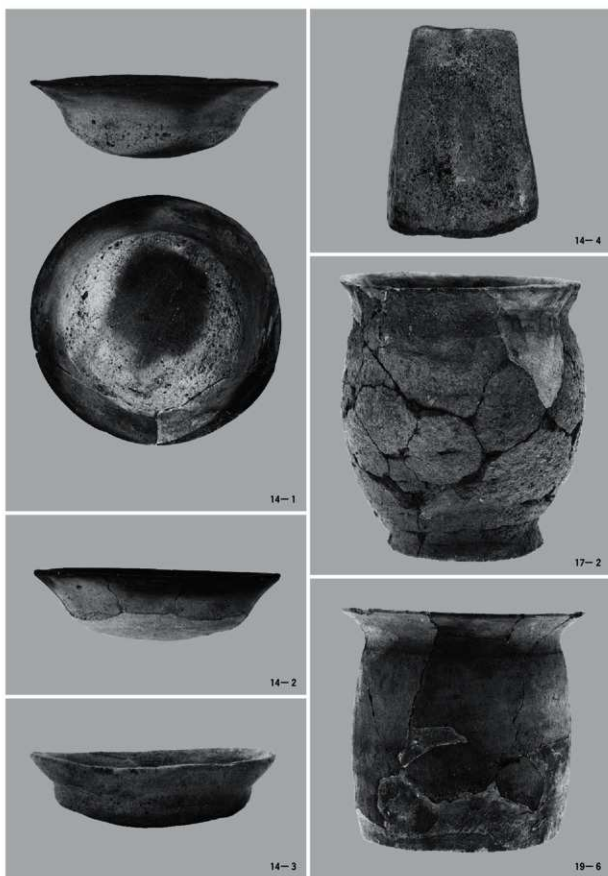
494 1号住居跡出土遺物



495 1号住居跡出土遺物



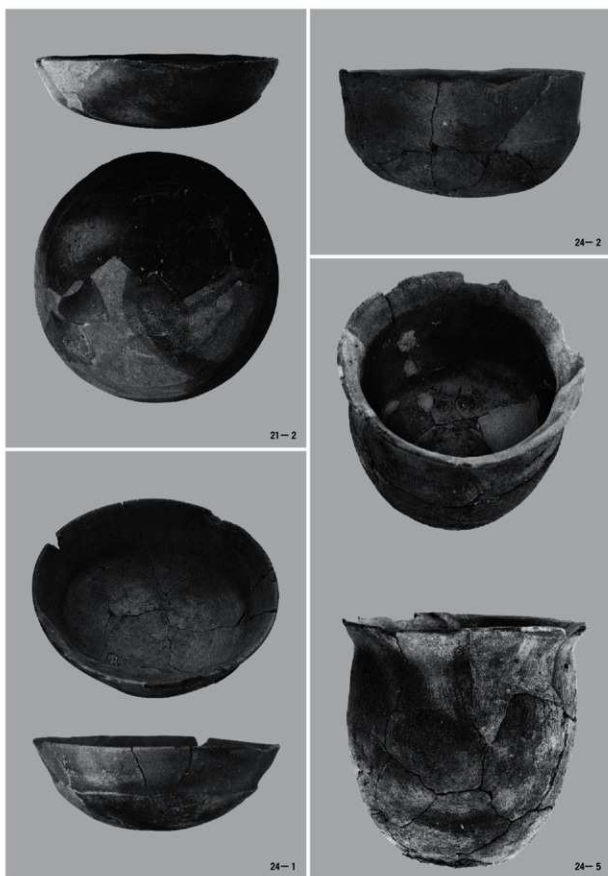
496 1号住居跡出土遺物



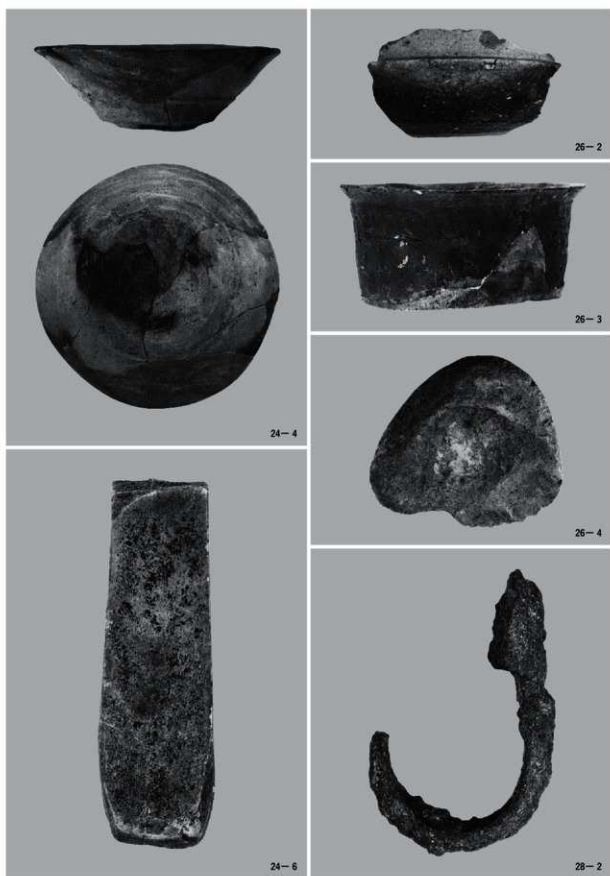
497 2～4号住居跡出土遺物



498 4・5号住居跡出土遺物



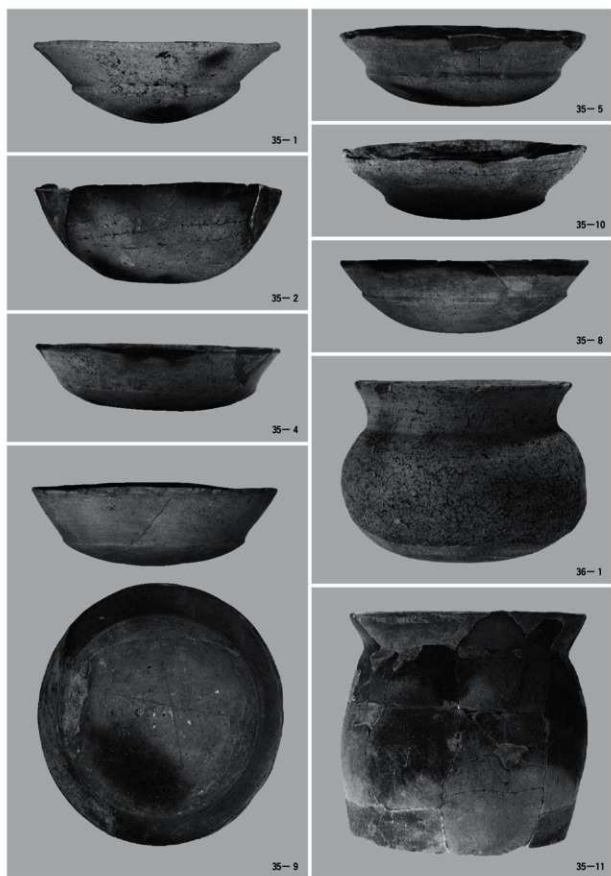
499 5・6号住居跡出土遺物



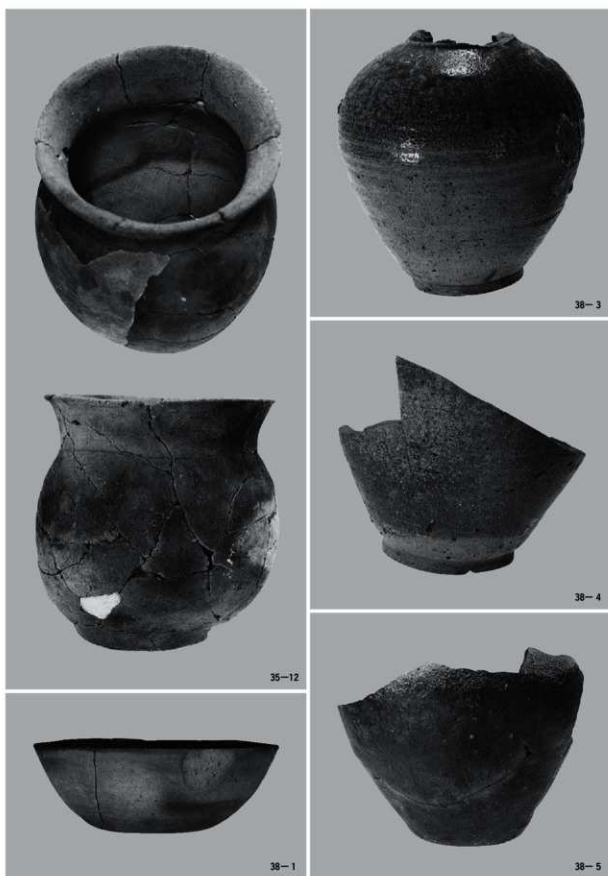
500 6～8号住居跡出土遺物



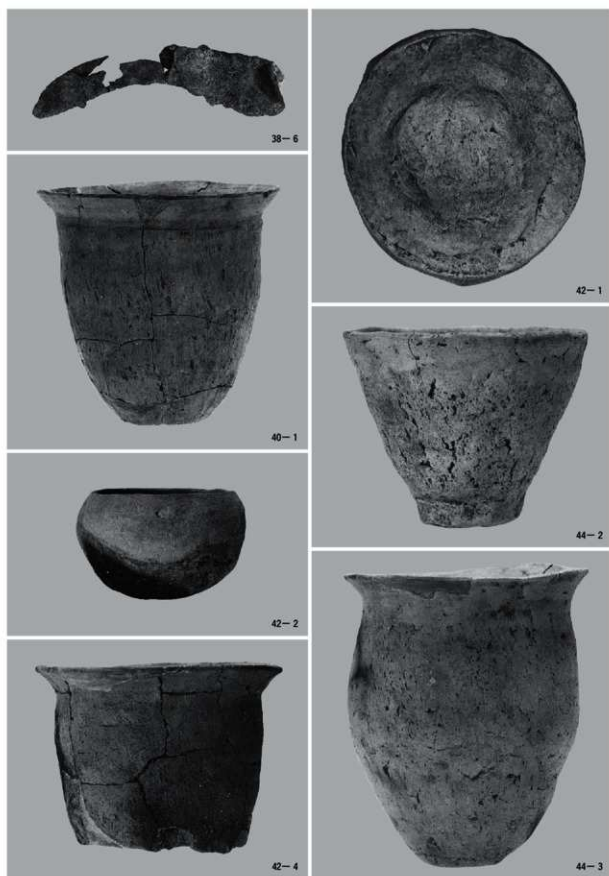
501 9・10号住居跡出土遺物



502 11号住居跡出土遺物



503 11・12号住居跡出土遺物



504 12~15号住居跡出土遺物



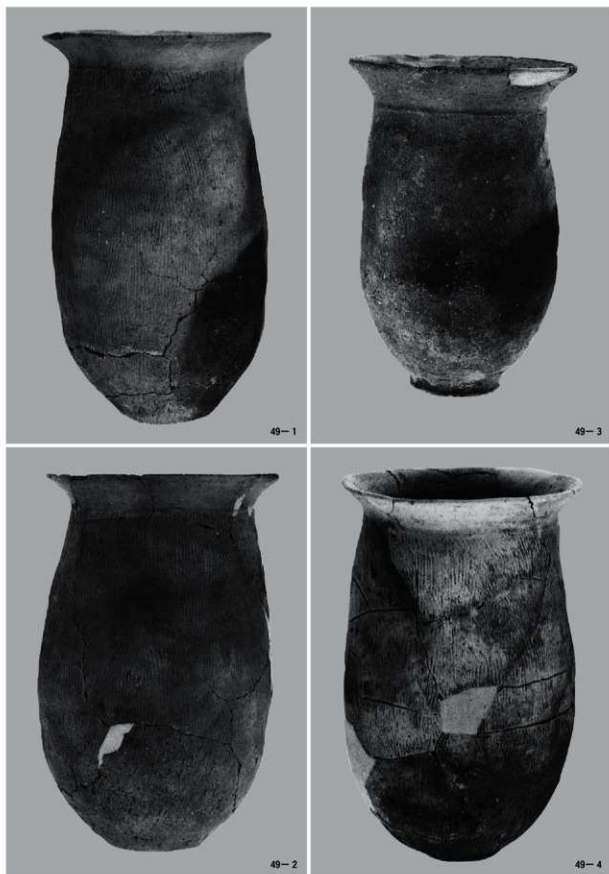
505 15号住居跡出土遺物



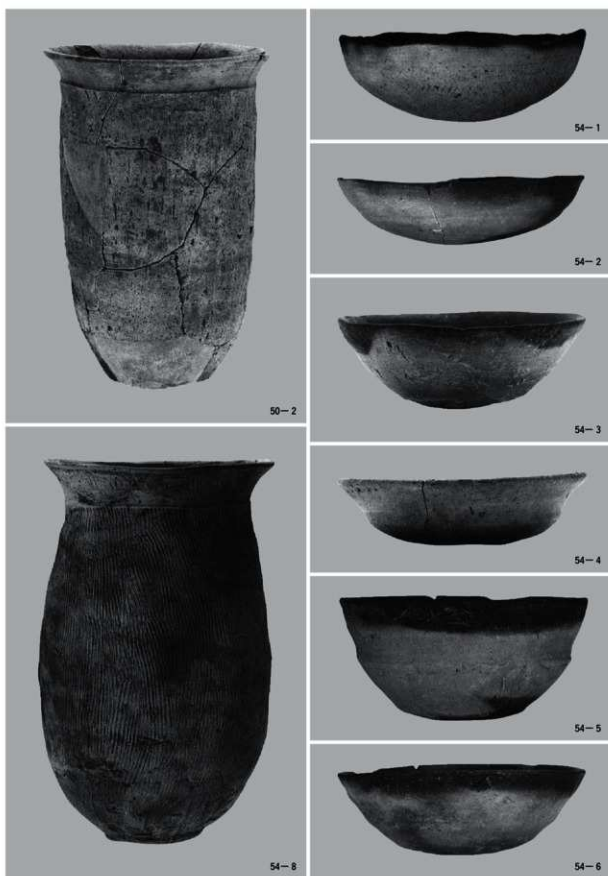
506 16号住居跡出土遺物



507 16号住居跡出土遺物



508 16号住居跡出土遺物



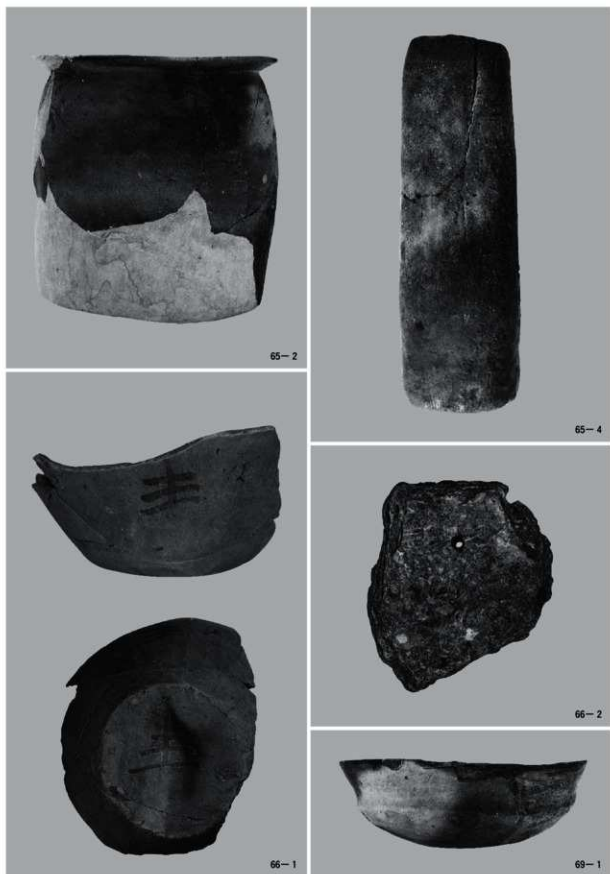
509 16・17A号住居跡出土遺物



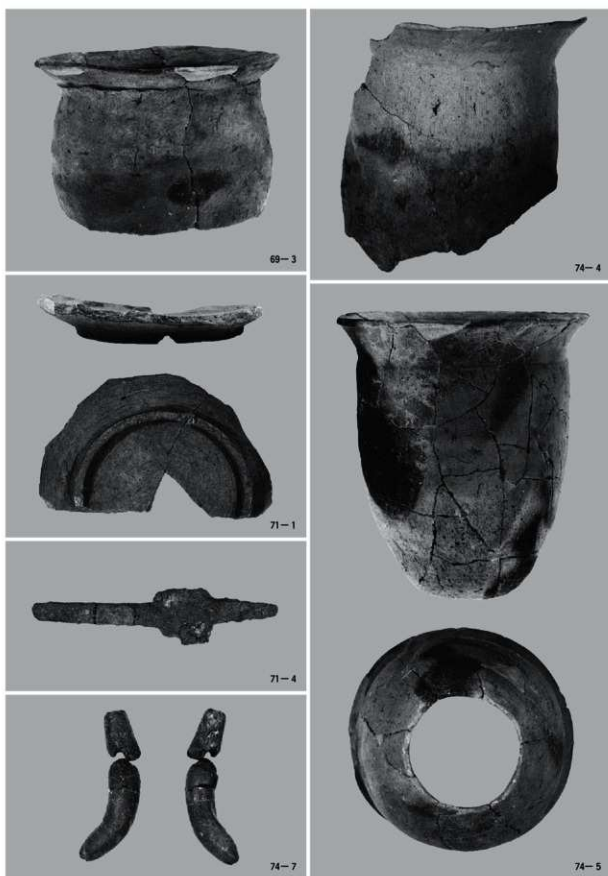
510 17A・17B・18号住居跡出土遺物



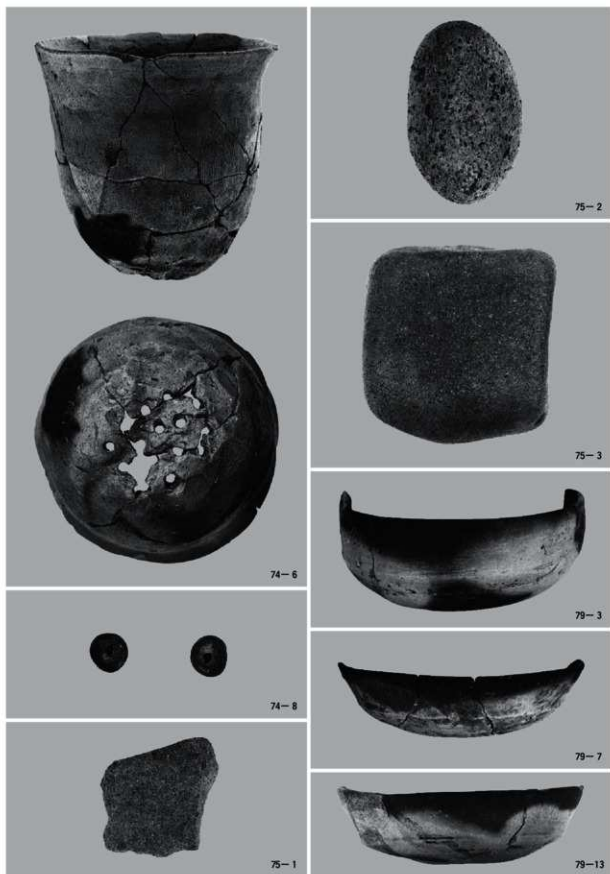
511 18~20・23号住居跡出土遺物



512 23・24号住居跡出土遺物



513 24~26号住居跡出土遺物



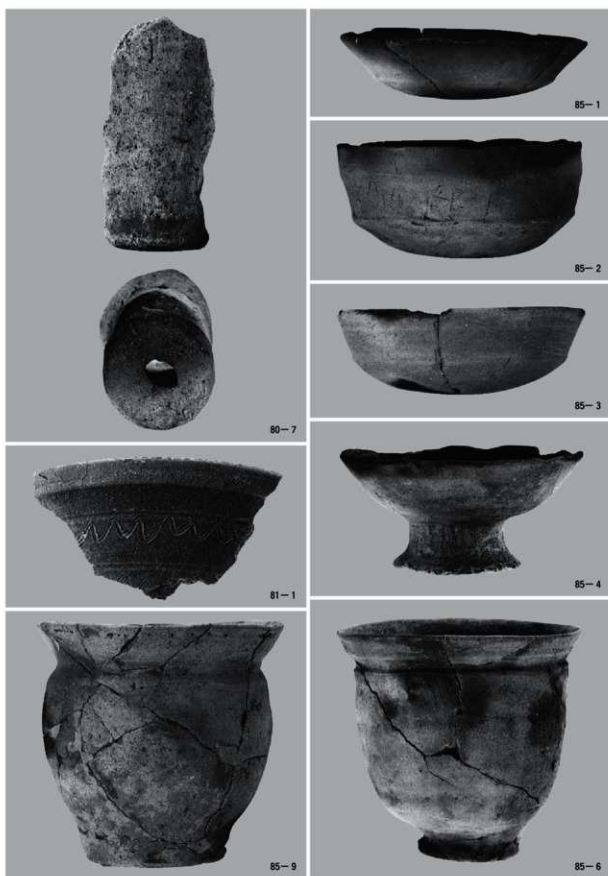
514 26・27号住居跡出土遺物



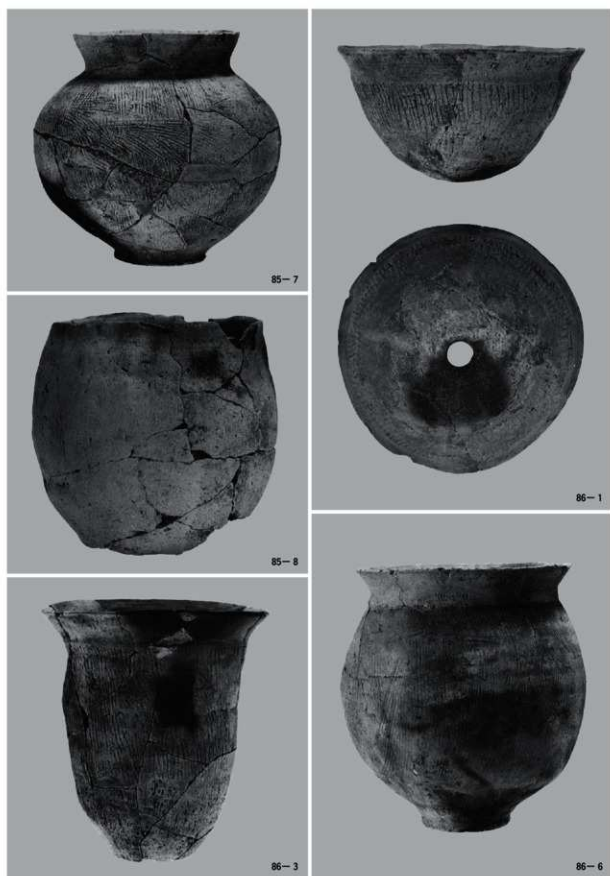
515 27号住居跡出土遺物



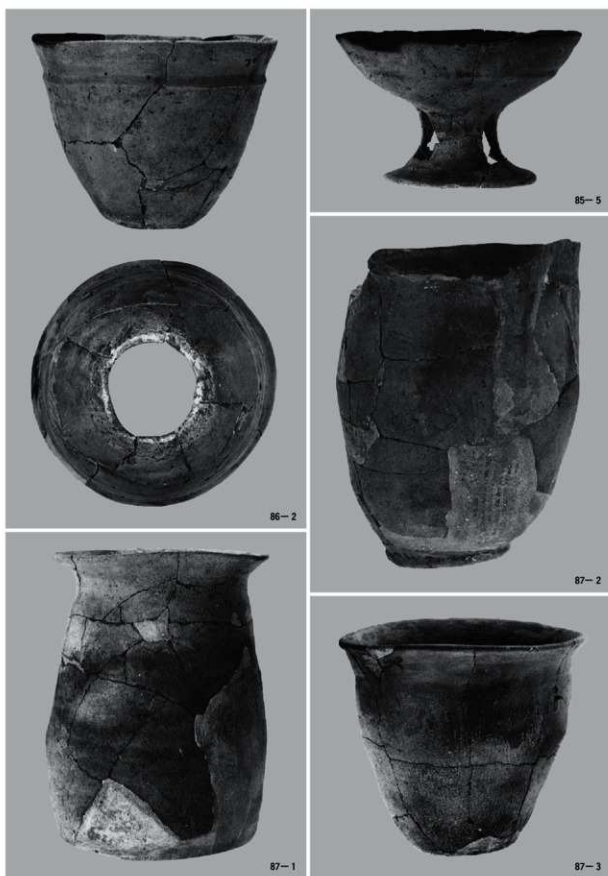
516 27号住居跡出土遺物



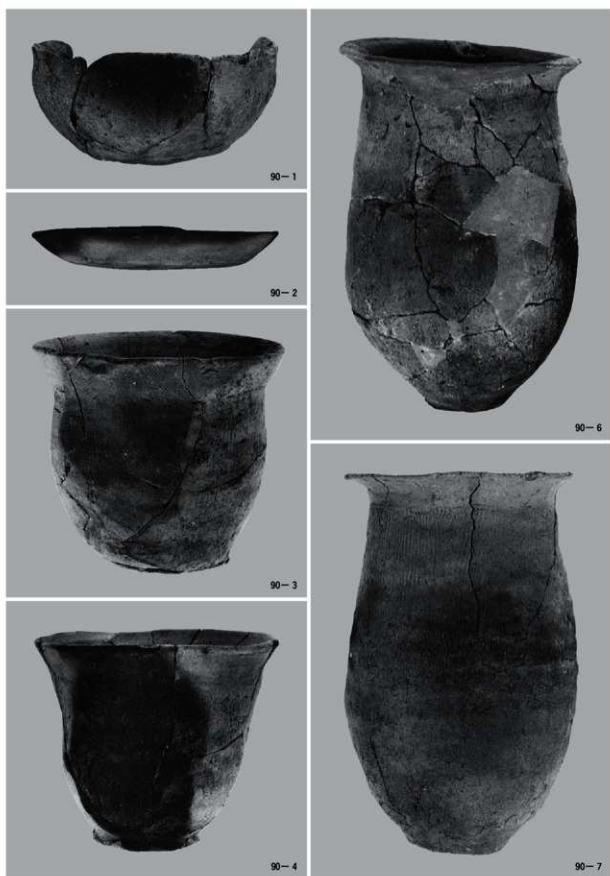
517 27·28·30号住居跡出土遺物



518 30号住居跡出土遺物



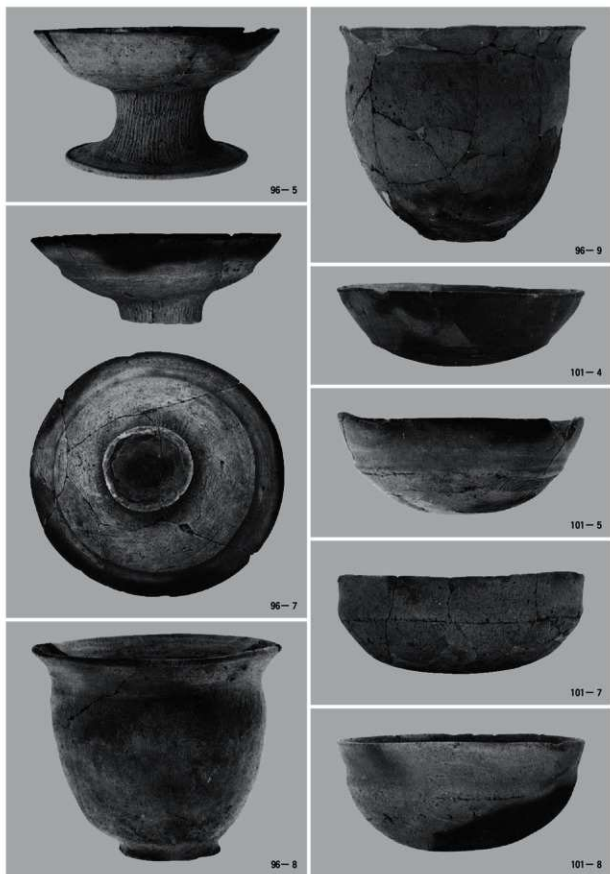
519 30号住居跡出土遺物



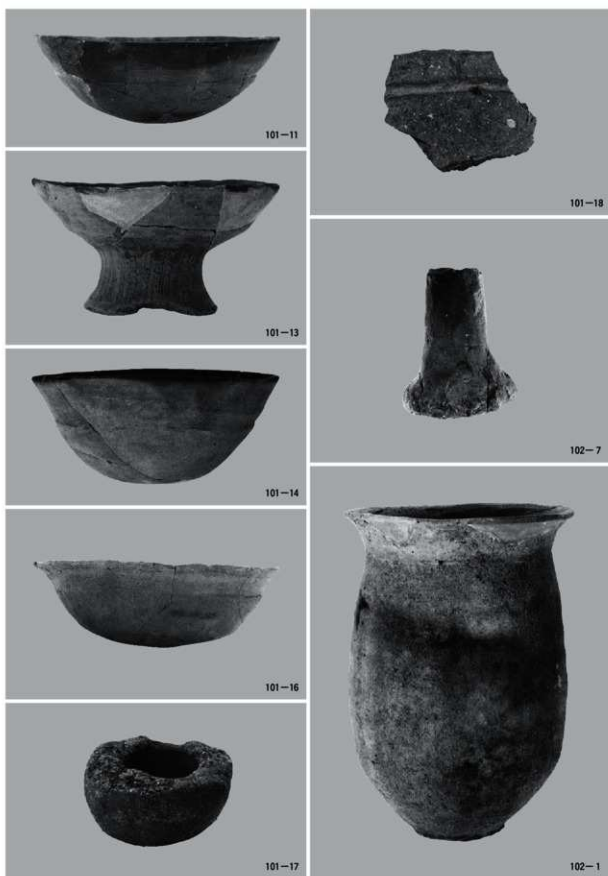
520 31号住居跡出土遺物



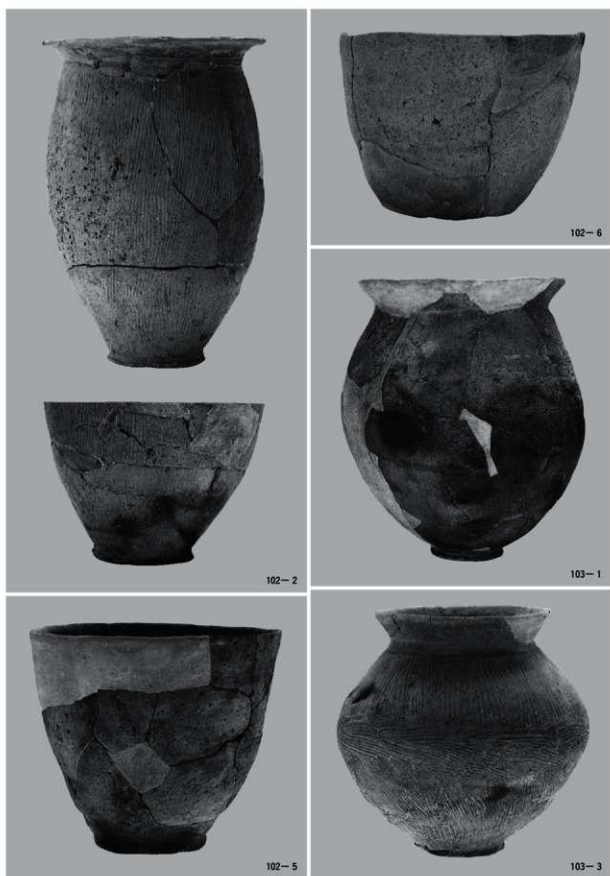
521 31·32·34号住居跡出土遺物



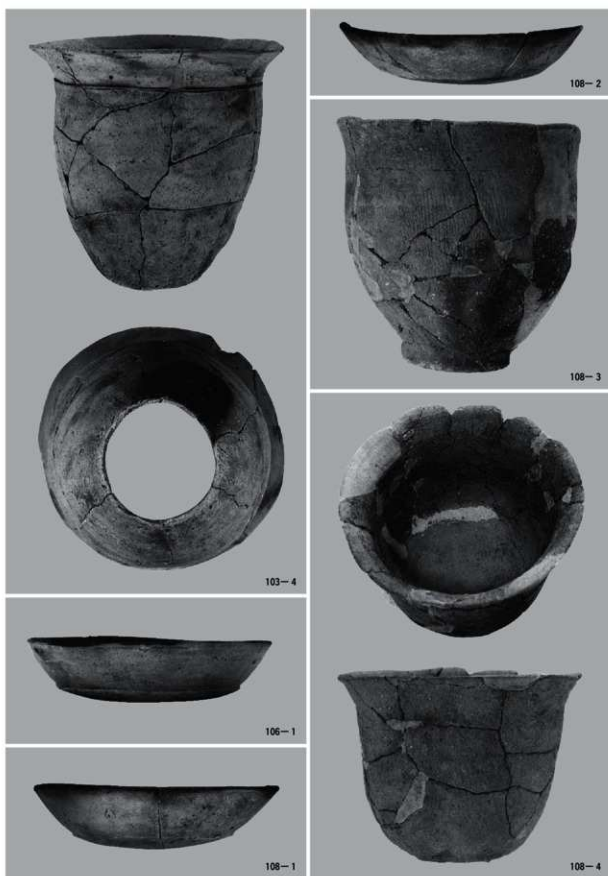
522 34・36号住居跡出土遺物



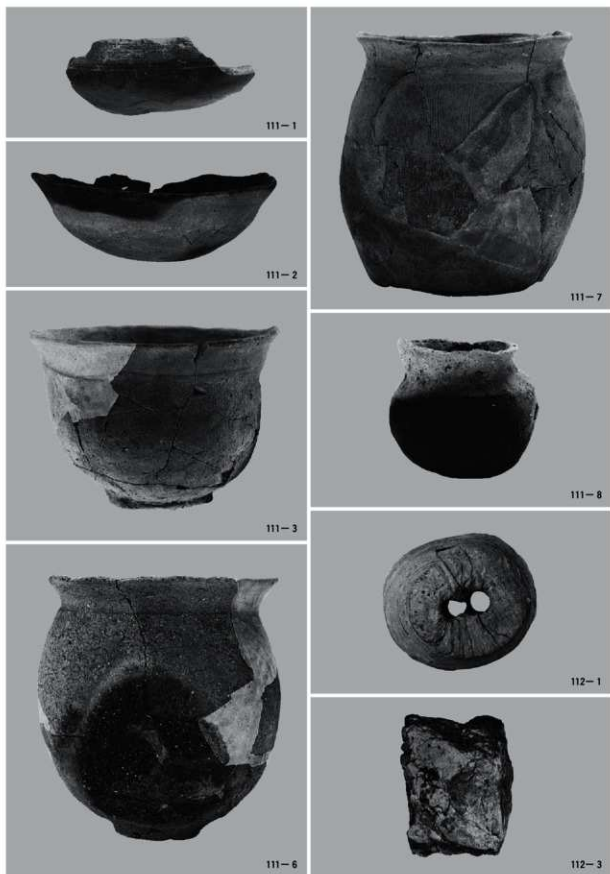
523 36号住居跡出土遺物



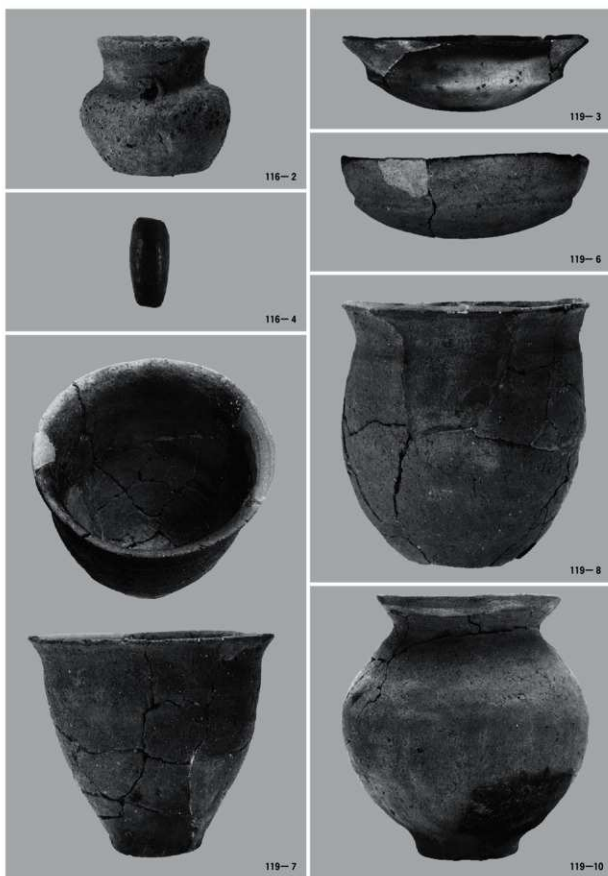
524 36号住居跡出土遺物



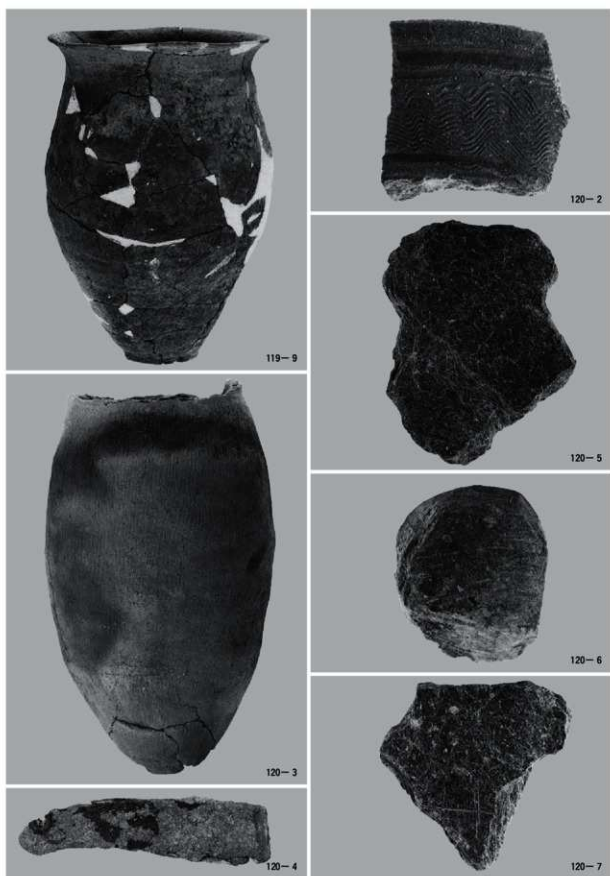
525 36~38号住居跡出土遺物



526 40号住居跡出土遺物



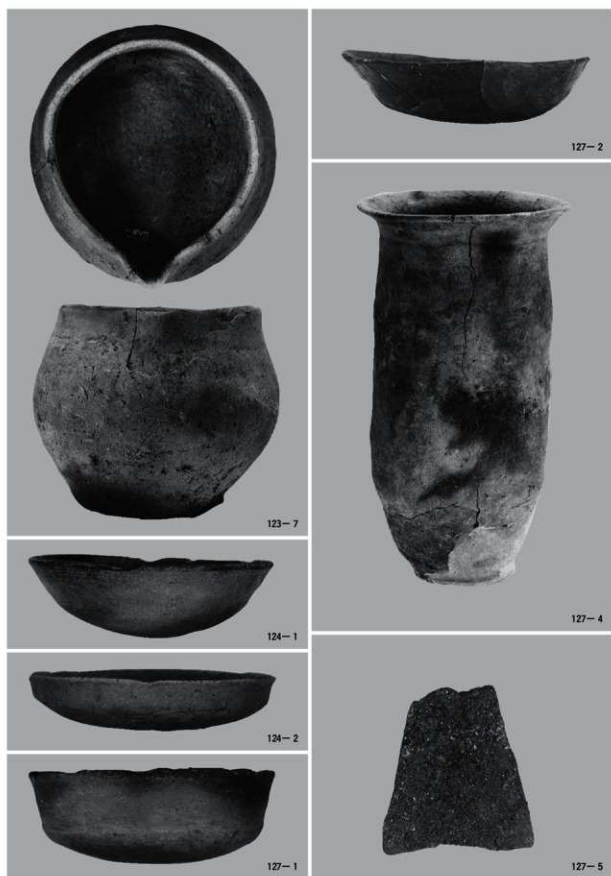
527 42・43号住居跡出土遺物



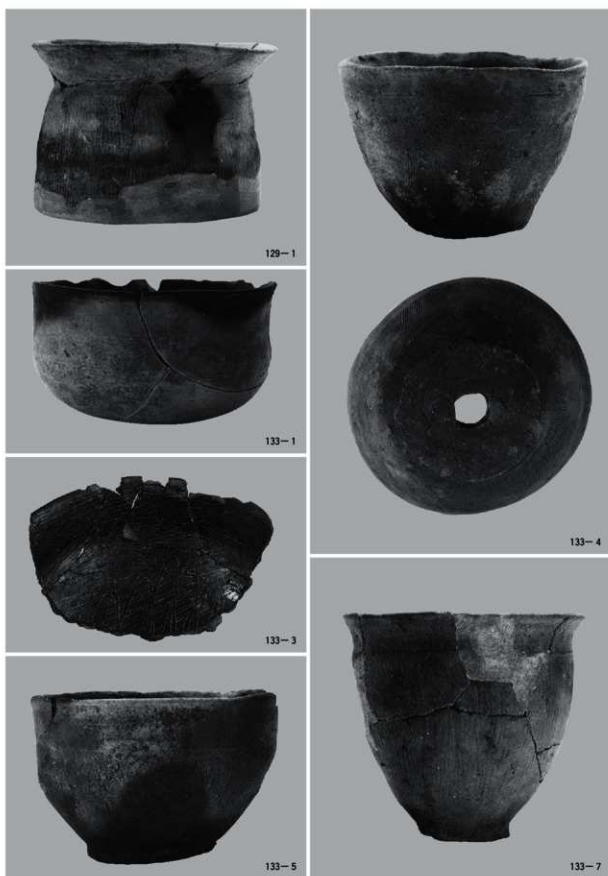
528 43号住居跡出土遺物



529 44号住居跡出土遺物



530 44~46号住居跡出土遺物



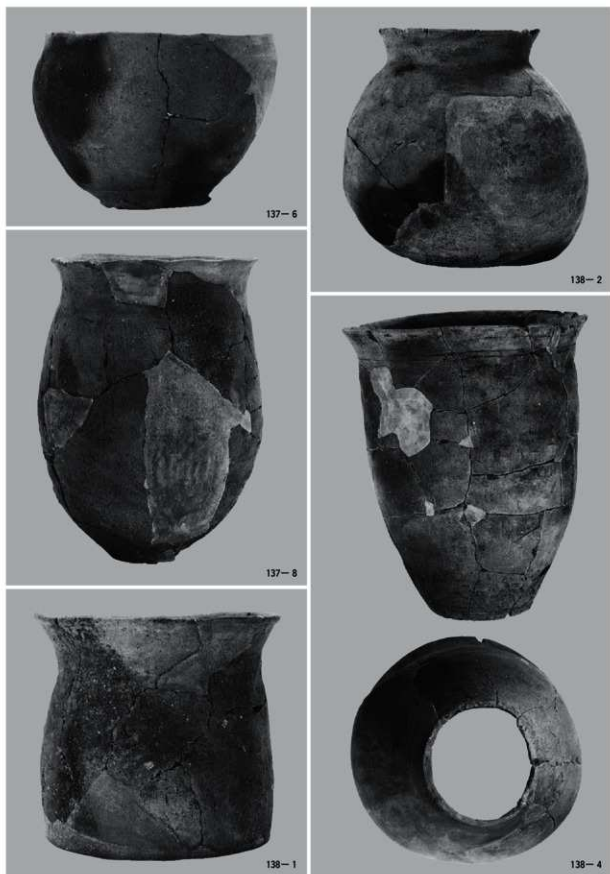
531 47・48号住居跡出土遺物



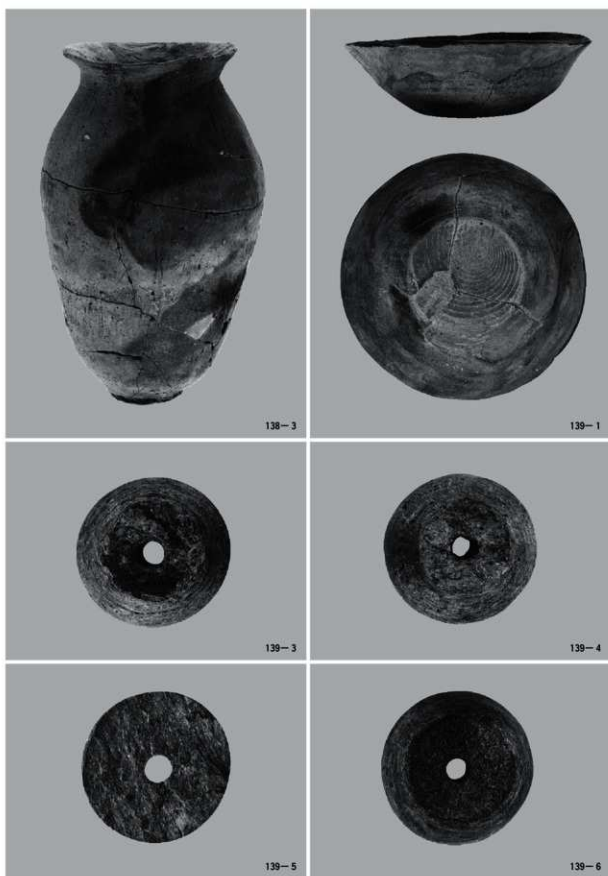
532 48号住居跡出土遺物



533 48・49号住居跡出土遺物



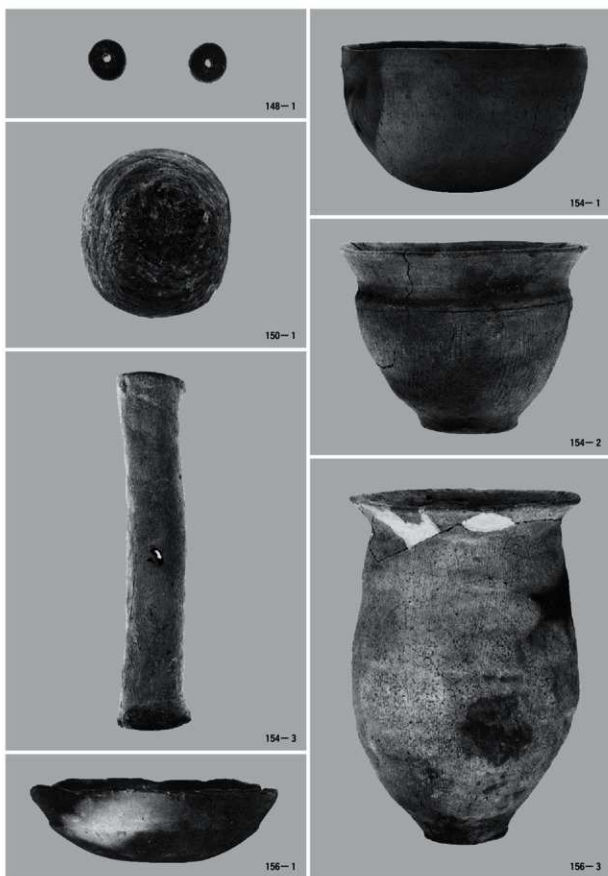
534 49号住居跡出土遺物



535 49号住居跡出土遺物



536 49～52号住居跡出土遺物



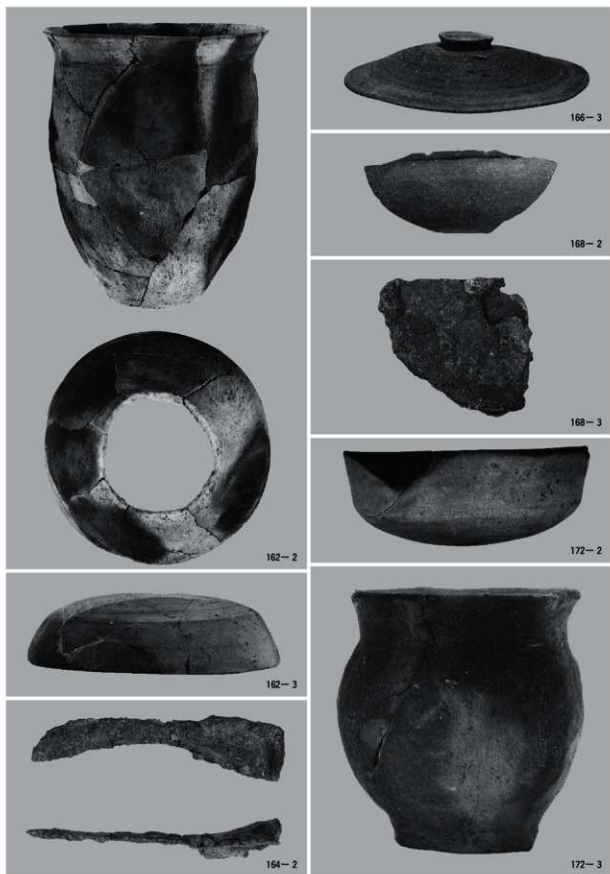
537 54・55・58・59号住居跡出土遺物



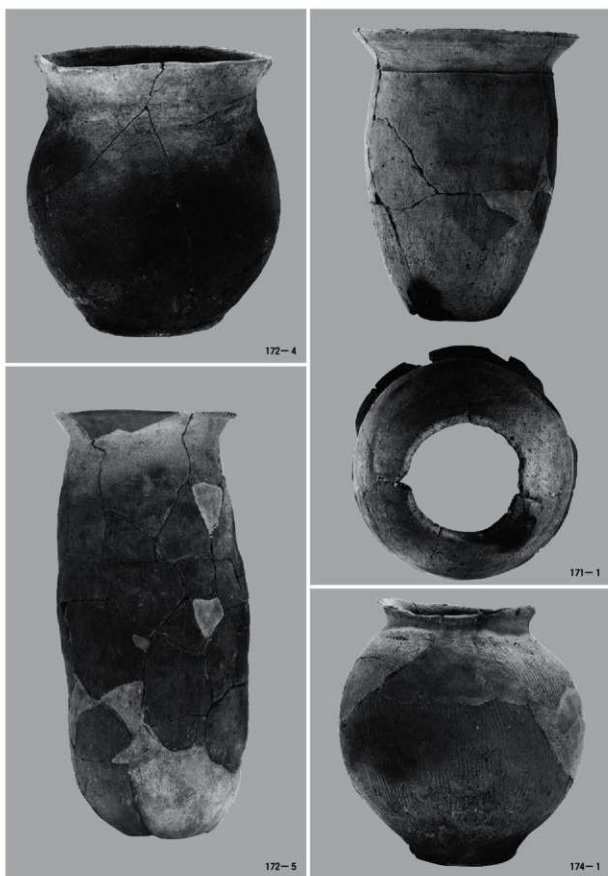
538 60号住居跡出土遺物



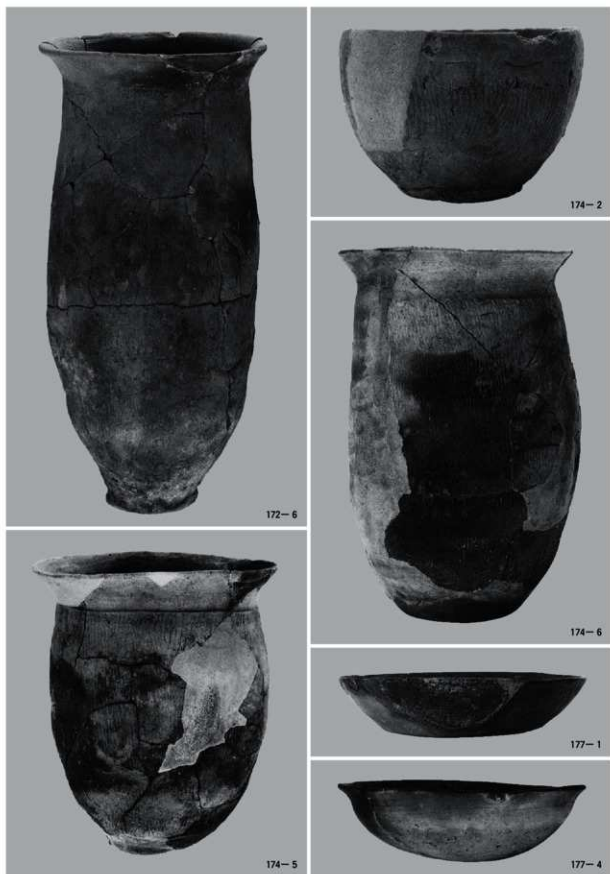
539 60号住居跡出土遺物



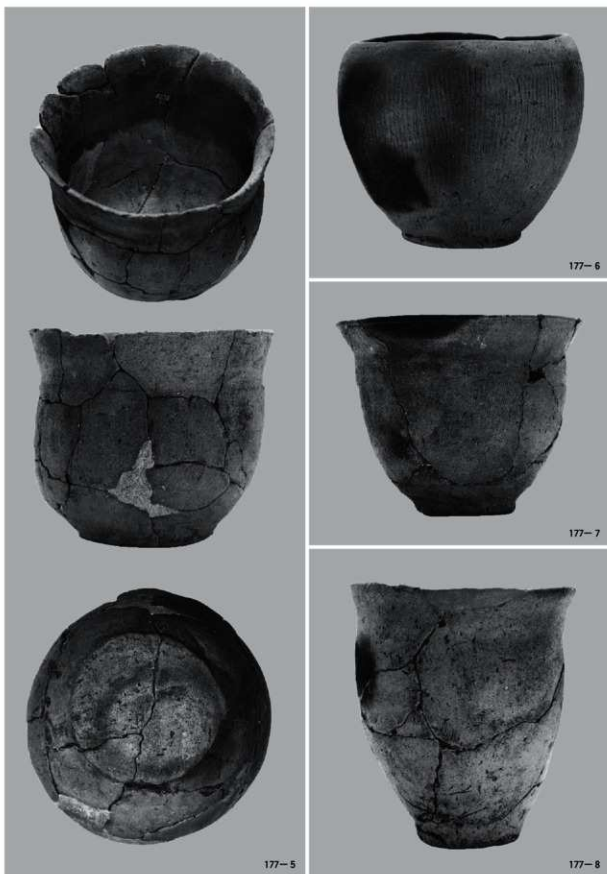
540 60~64号住居跡出土遺物



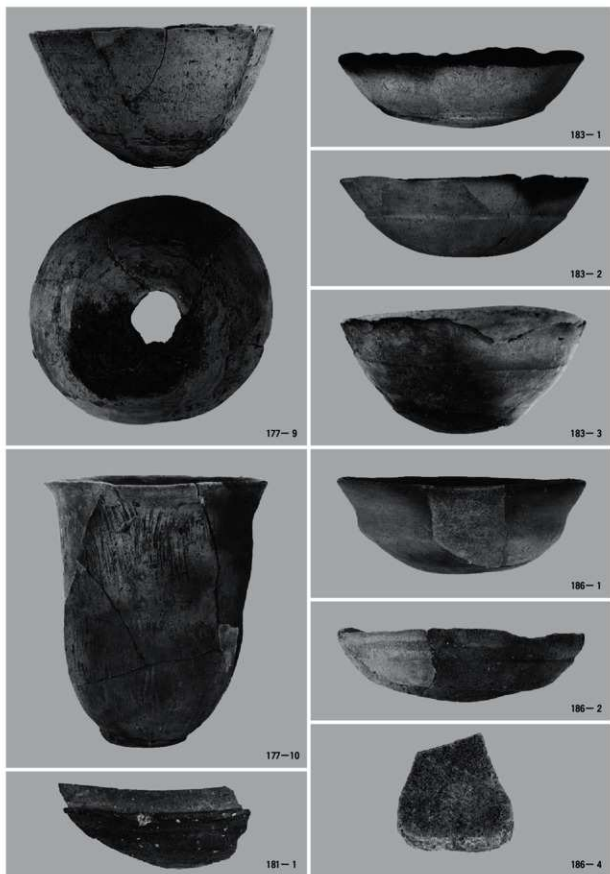
541 64・65号住居跡出土遺物



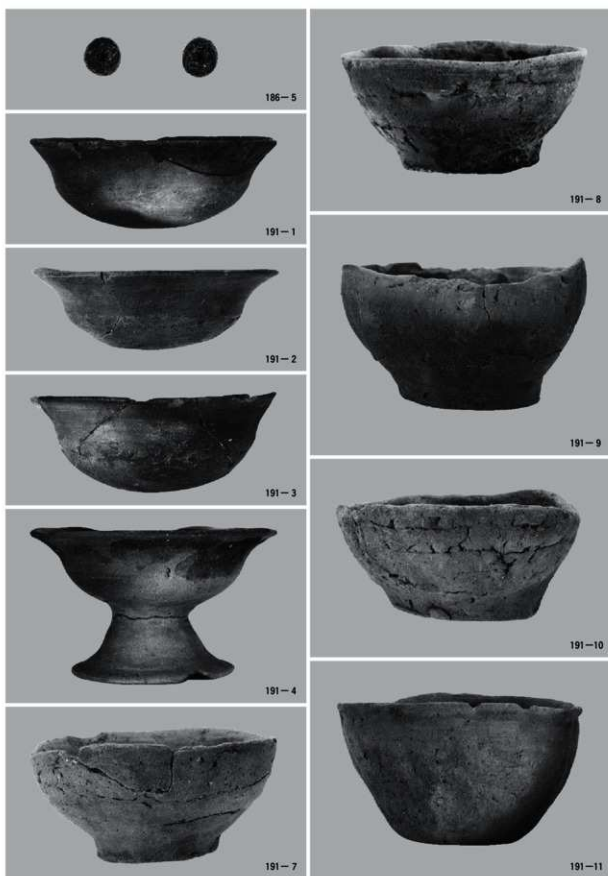
542 64~66号住居跡出土遺物



543 66号住居跡出土遺物



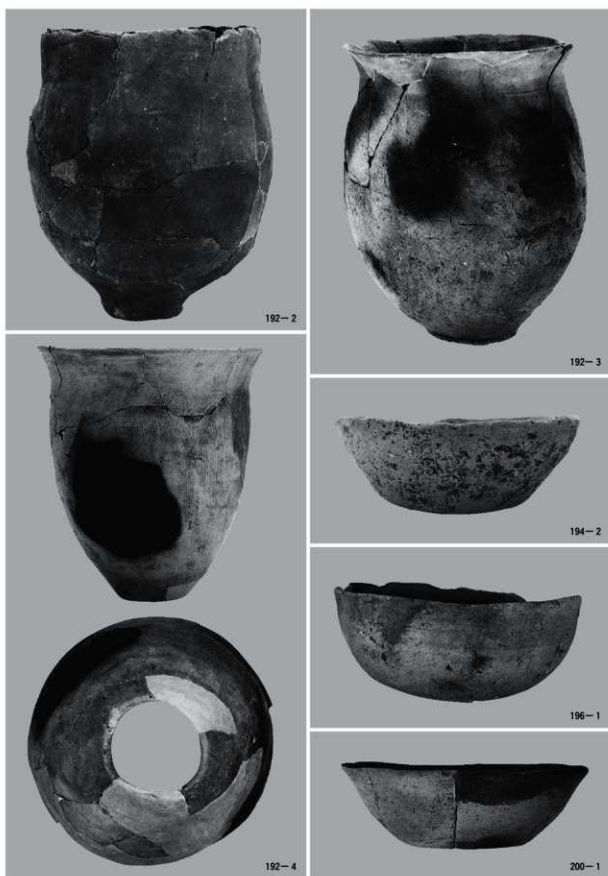
544 66・70・71・73号住居跡出土遺物



545 73・75号住居跡出土遺物



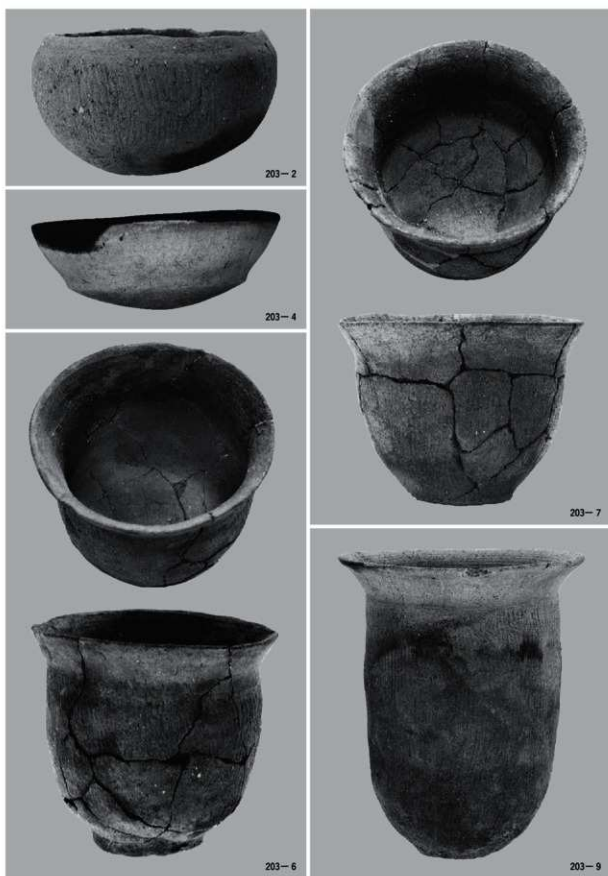
546 75号住居跡出土遺物



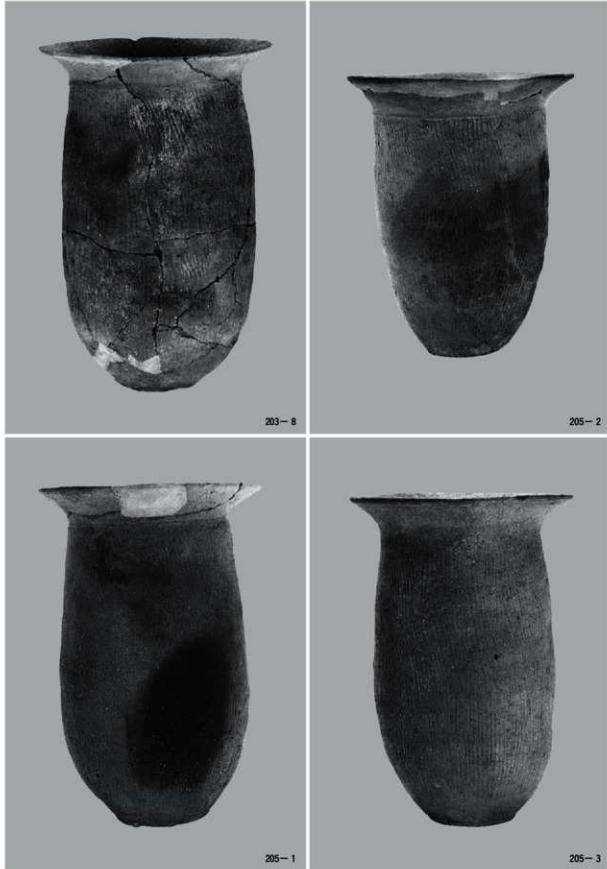
547 75~77・79号住居跡出土遺物



548 77・80号住居跡出土遺物



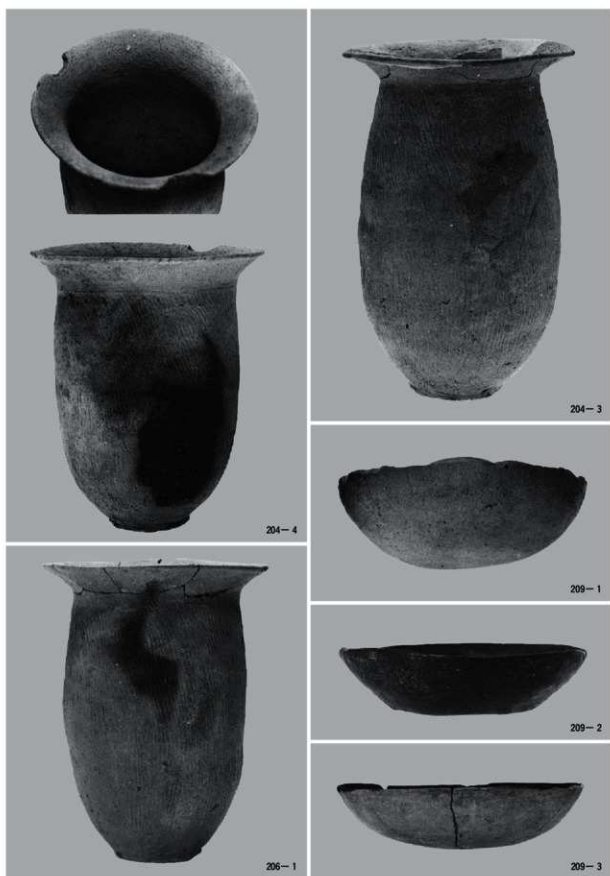
549 80号住居跡出土遺物



550 80号住居跡出土遺物



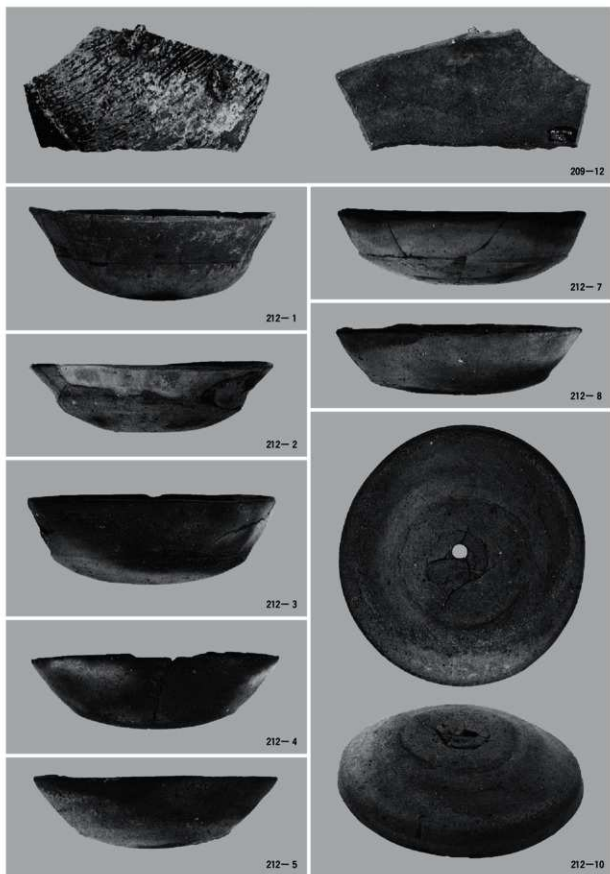
551 80号住居跡出土遺物



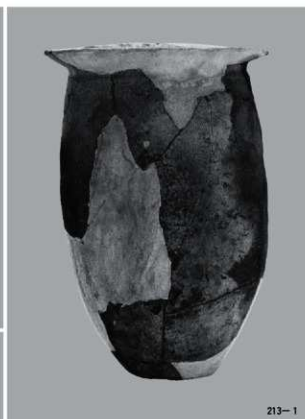
552 80・81号住居跡出土遺物



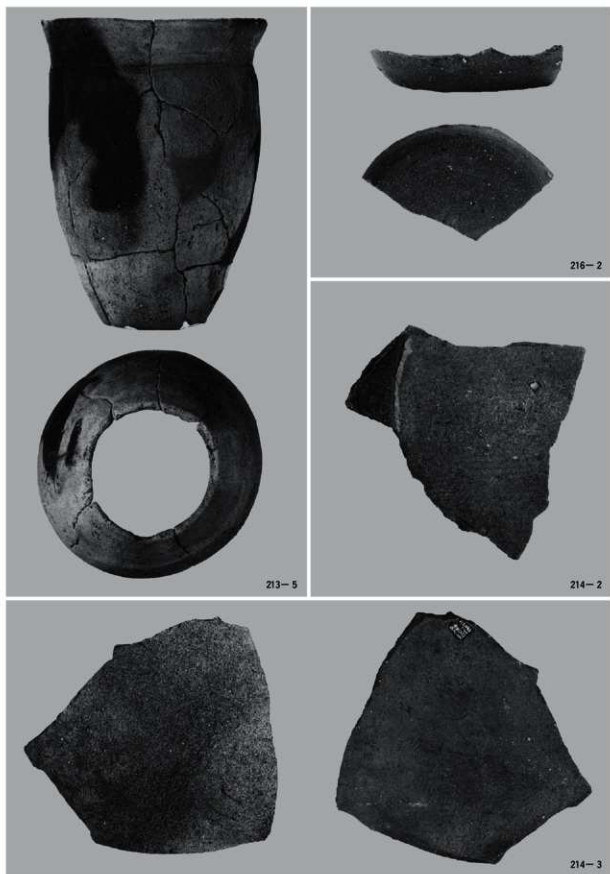
553 81号住居跡出土遺物



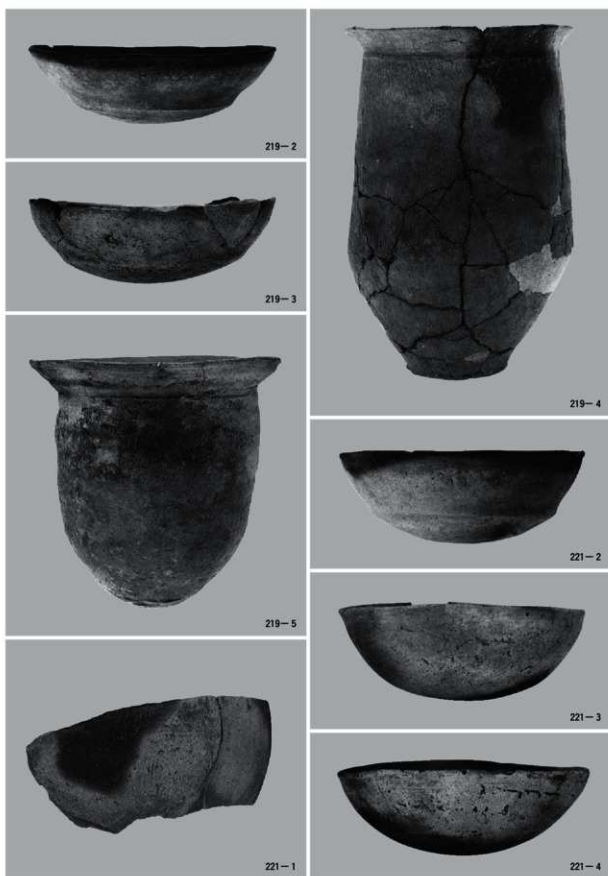
554 81・82号住居跡出土遺物



555 82号住居跡出土遺物



556 82・83号住居跡出土遺物



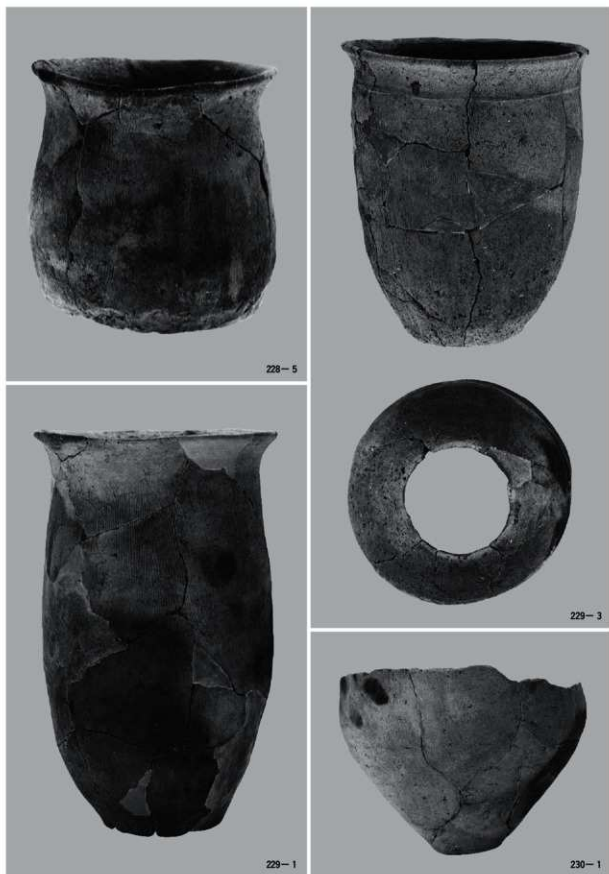
557 84・85号住居跡出土遺物



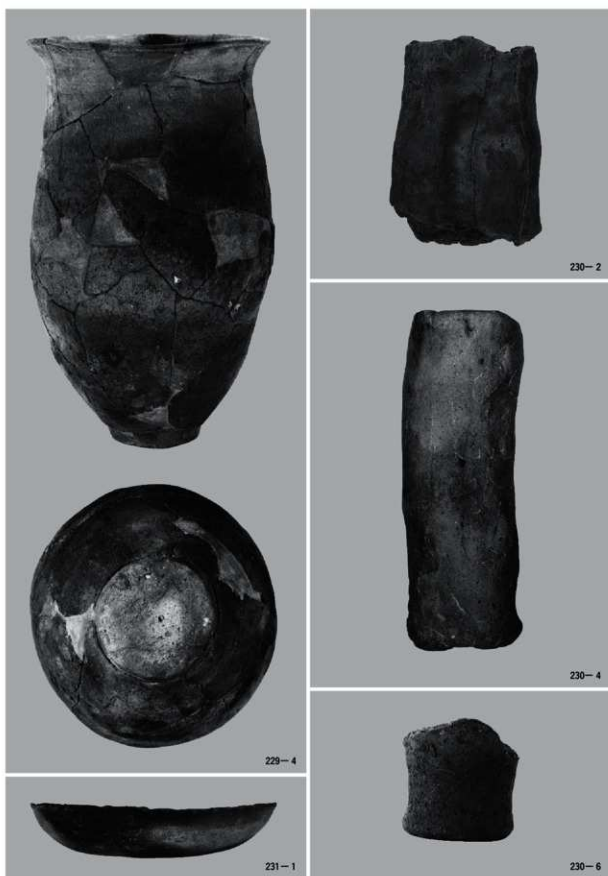
558 85・87・88号住居跡出土遺物



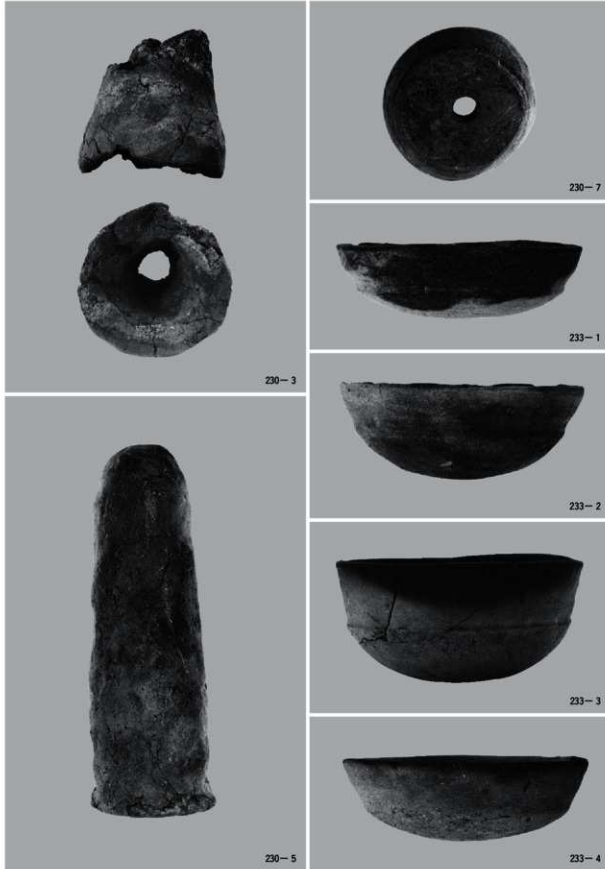
559 87・88号住居跡出土遺物



560 88号住居跡出土遺物



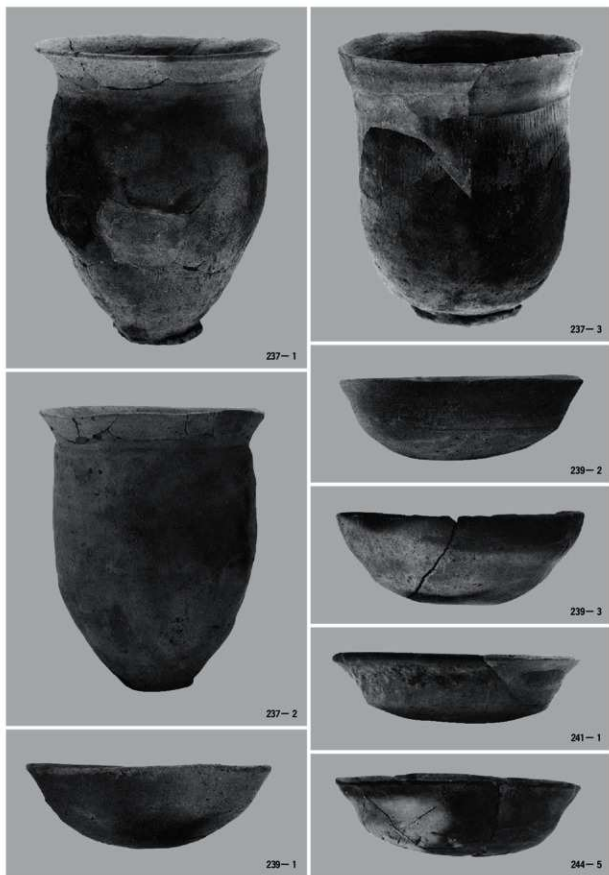
561 88・89号住居跡出土遺物



562 88・90号住居跡出土遺物



563 91号住居跡出土遺物



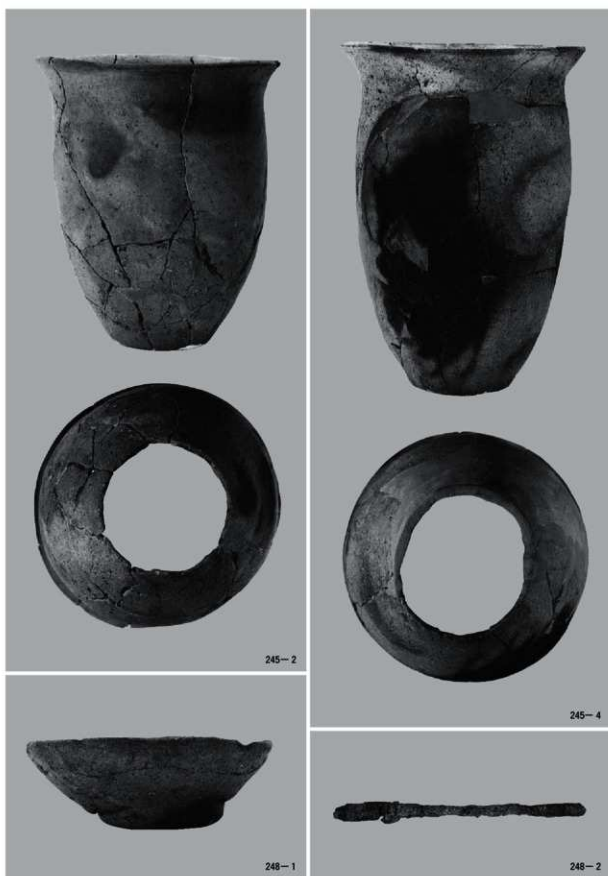
564 91～94号住居跡出土遺物



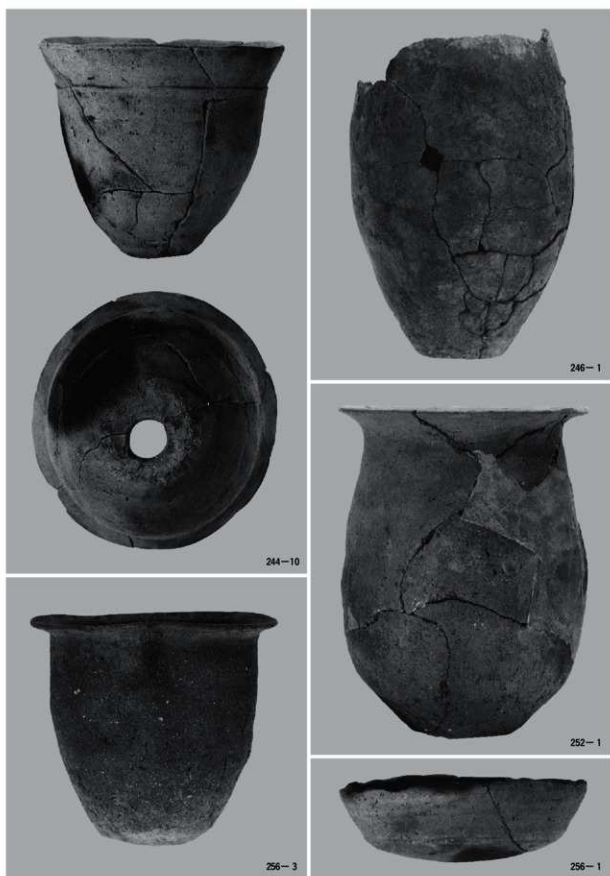
565 92・94号住居跡出土遺物



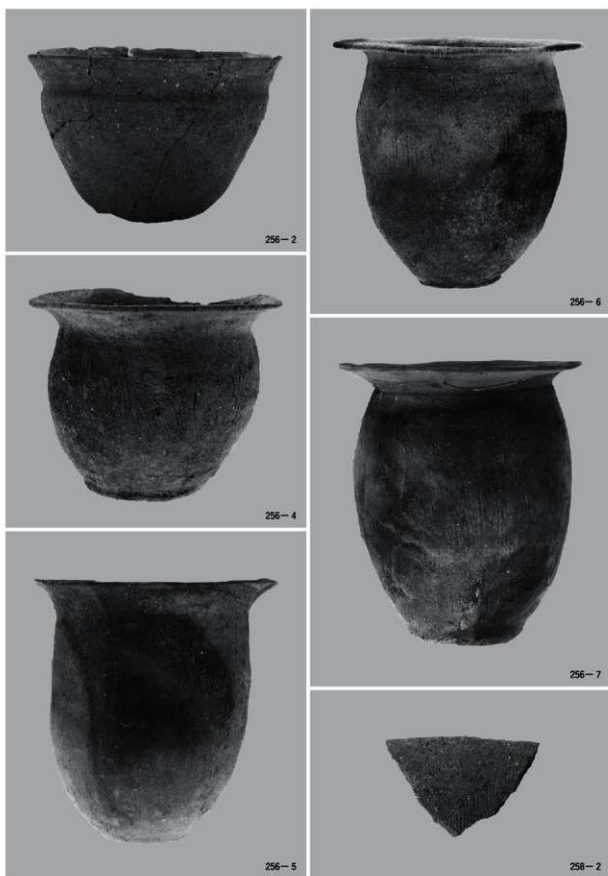
566 94号住居跡出土遺物



567 94・95号住居跡出土遺物



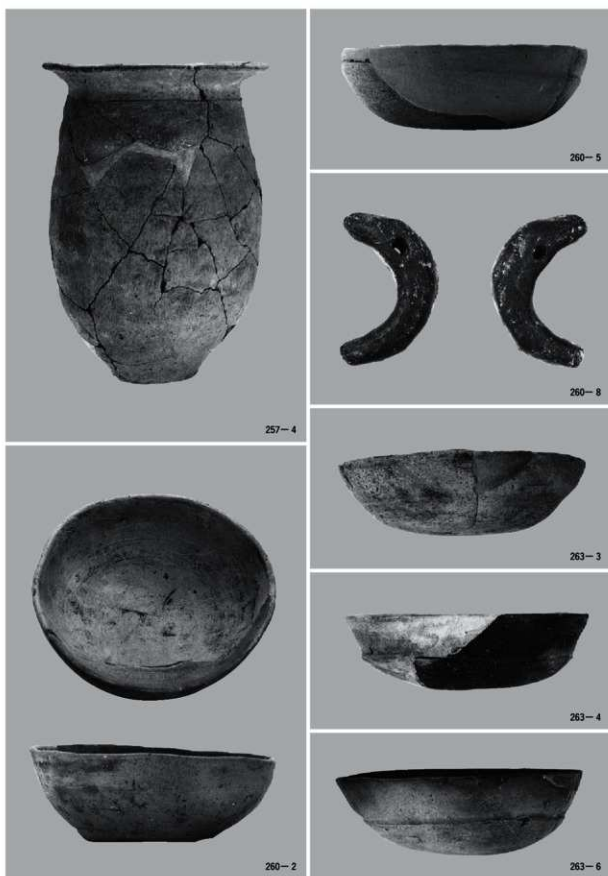
568 94・97・98号住居跡出土遺物



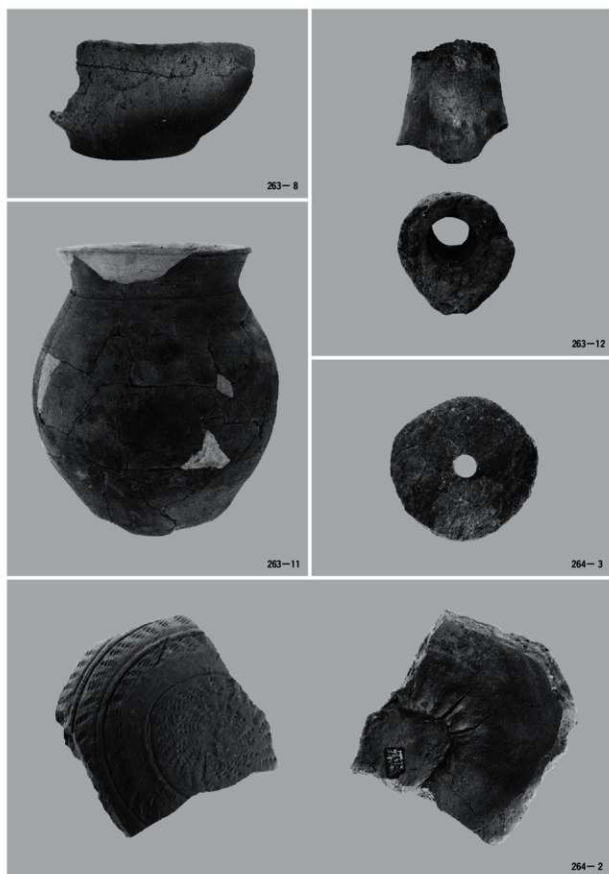
569 98号住居跡出土遺物



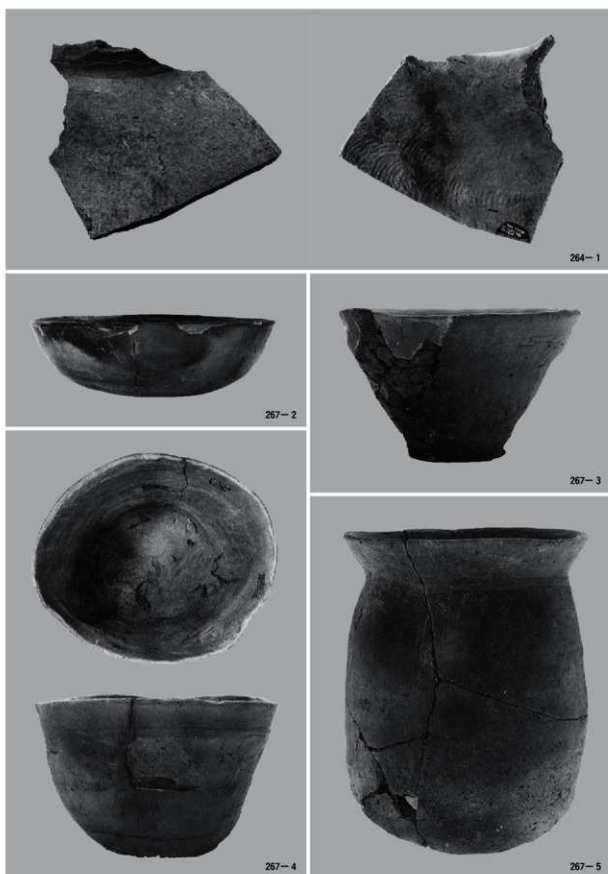
570 98号住居跡出土遺物



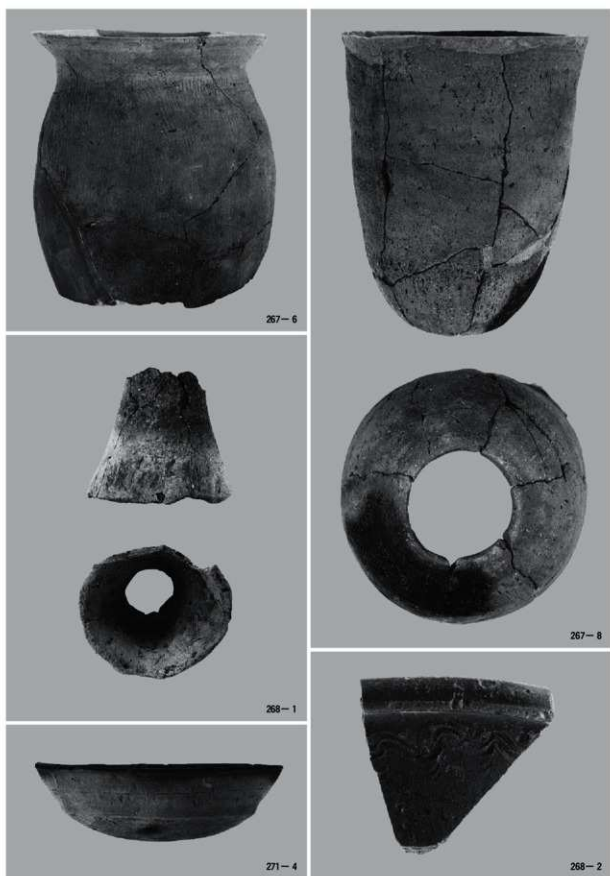
571 98~100号住居跡出土遺物



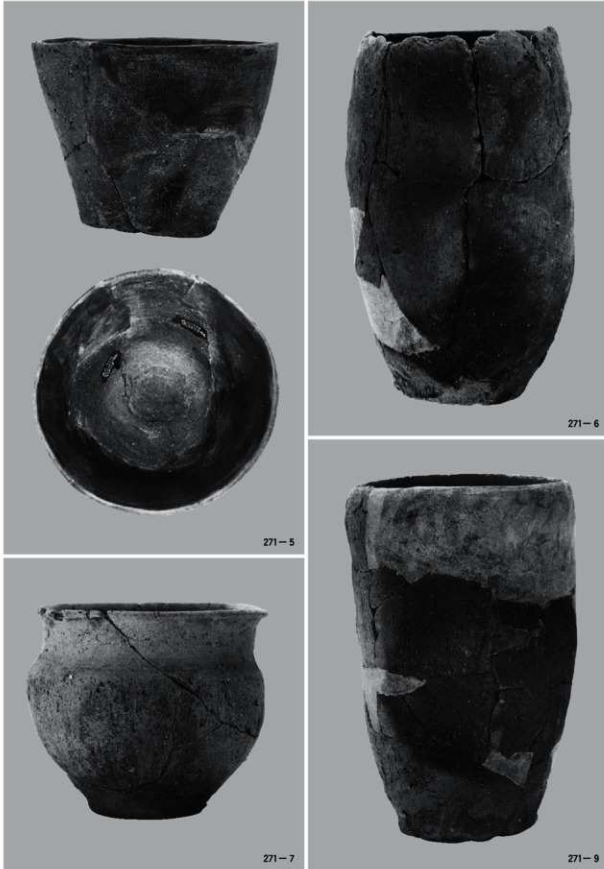
572 100号住居跡出土遺物



573 100・101号住居跡出土遺物



574 101・102号住居跡出土遺物



575 102号住居跡出土遺物



576 102・103号住居跡出土遺物



275-7



275-11



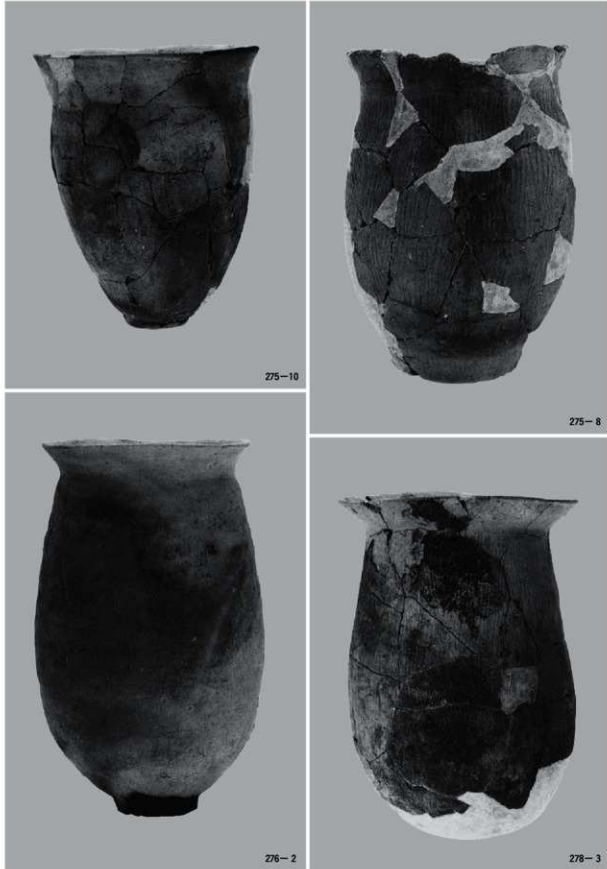
276-1



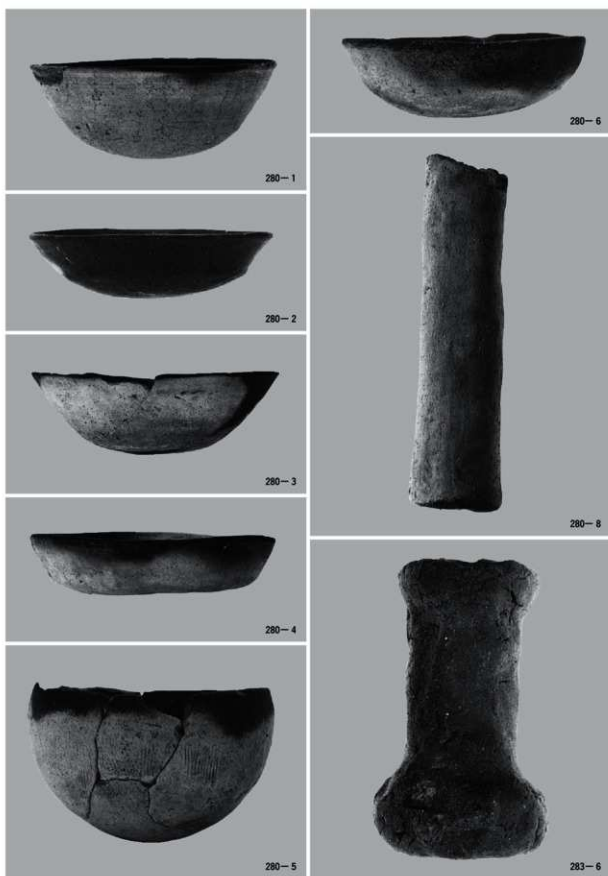
275-12

577 103号住居跡出土遺物

580



578 103・104号住居跡出土遺物



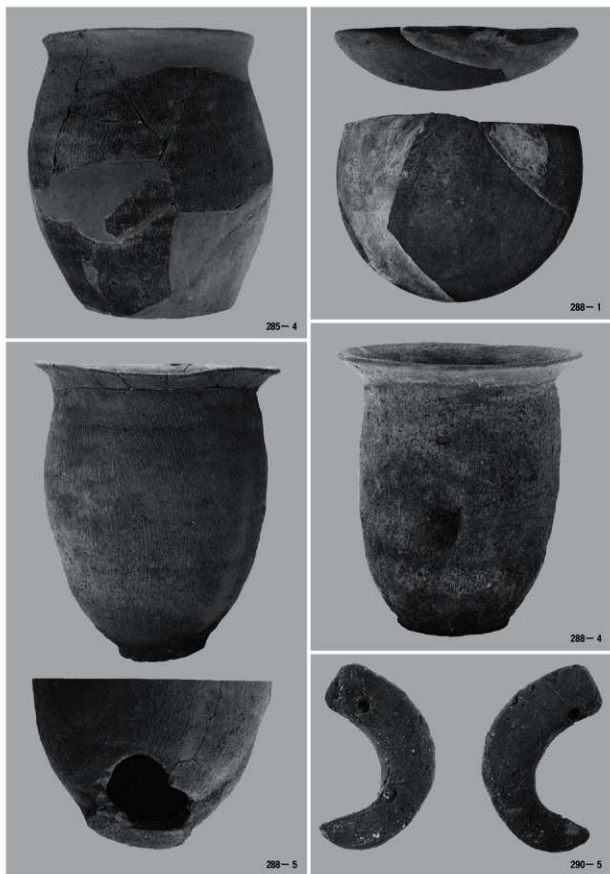
579 105・106号住居跡出土遺物



580 106号住居跡出土遺物



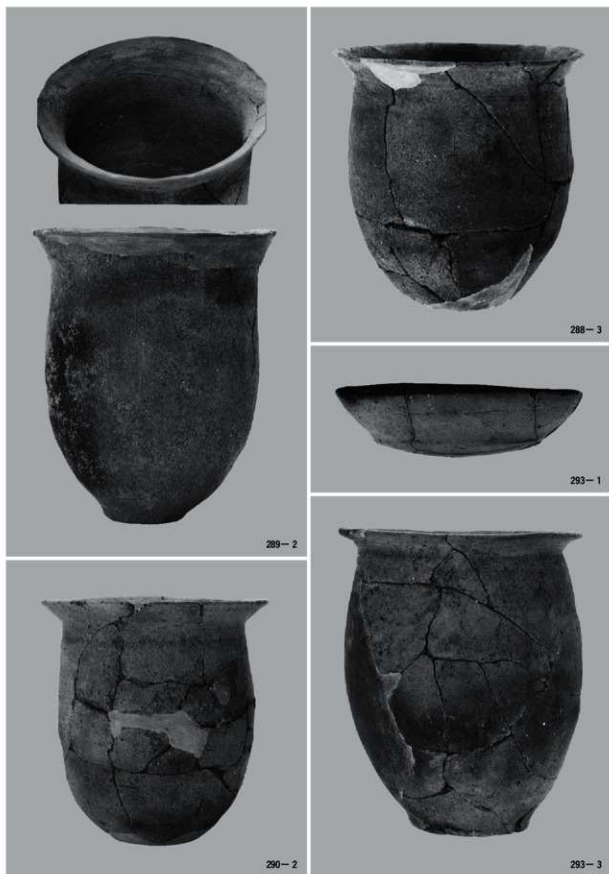
581 107・108号住居跡出土遺物



582 107・108号住居跡出土遺物



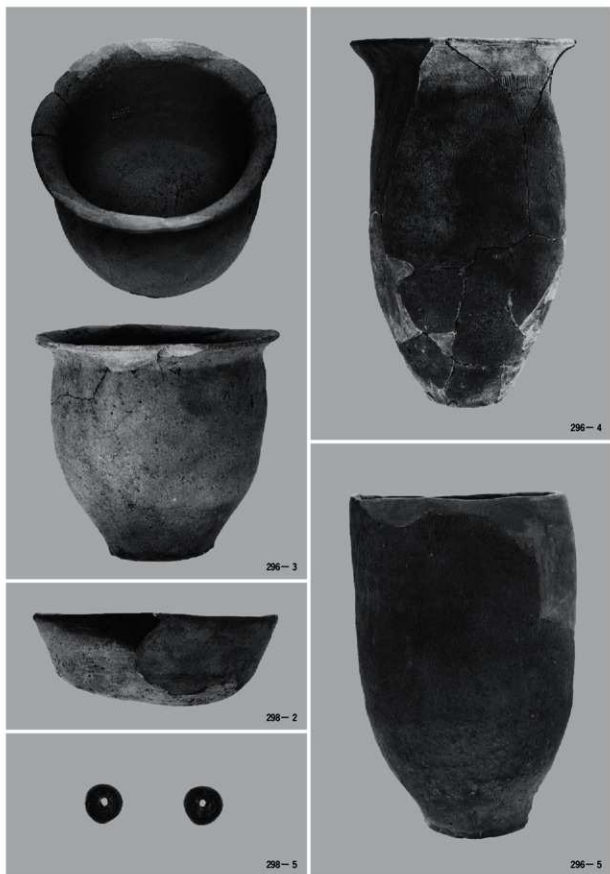
583 108号住居跡出土遺物



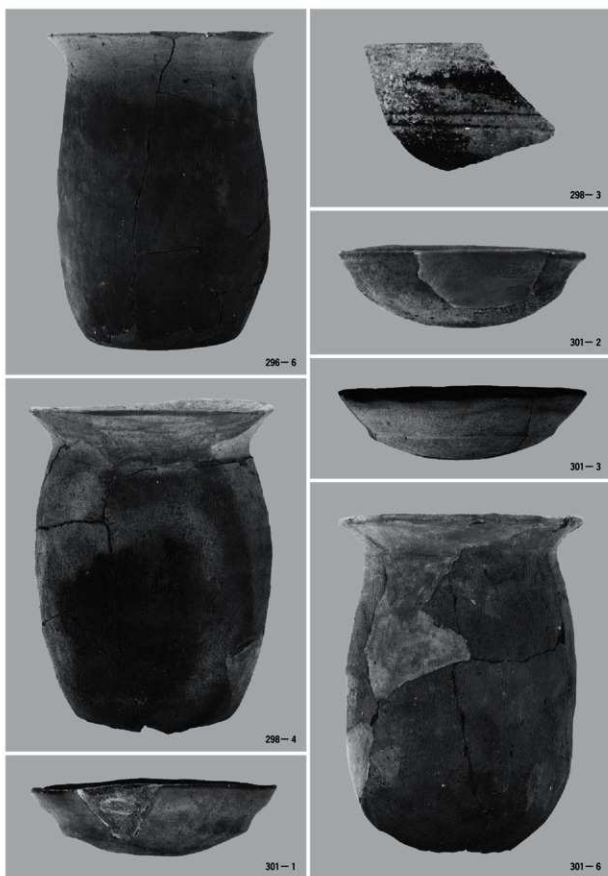
584 108・109号住居跡出土遺物



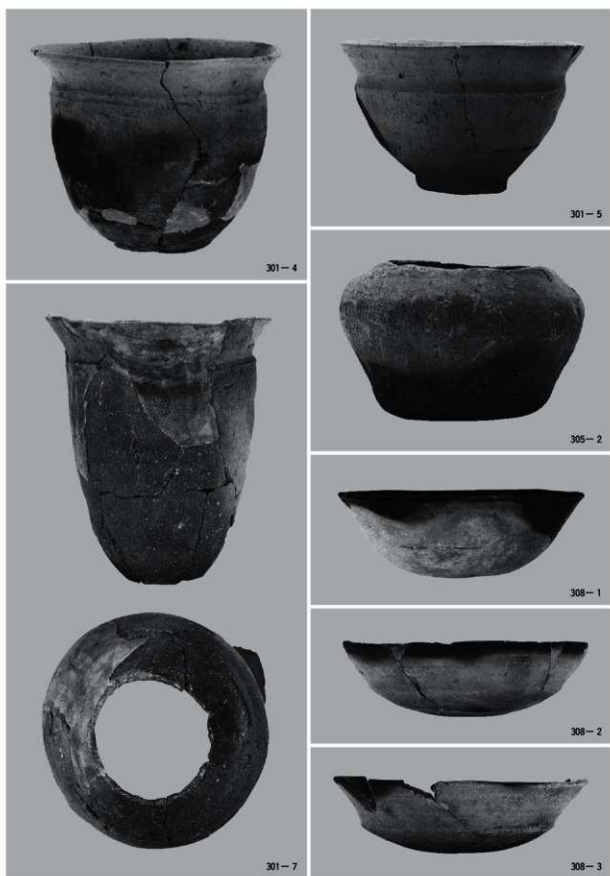
585 109・110号住居跡出土遺物



586 110・111号住居跡出土遺物



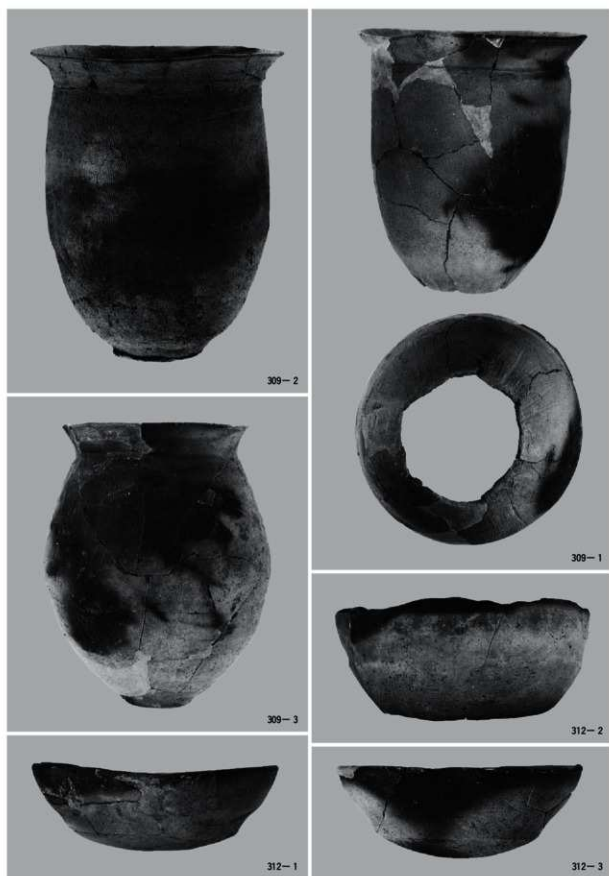
587 110~112号住居跡出土遺物



588 112・114・118号住居跡出土遺物



589 118号住居跡出土遺物



590 118・120号住居跡出土遺物



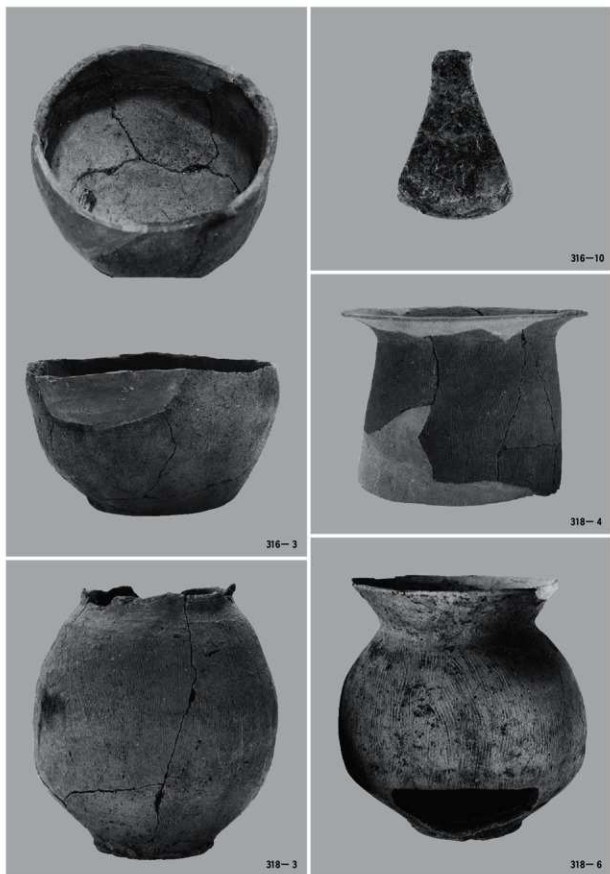
591 120号住居跡出土遺物



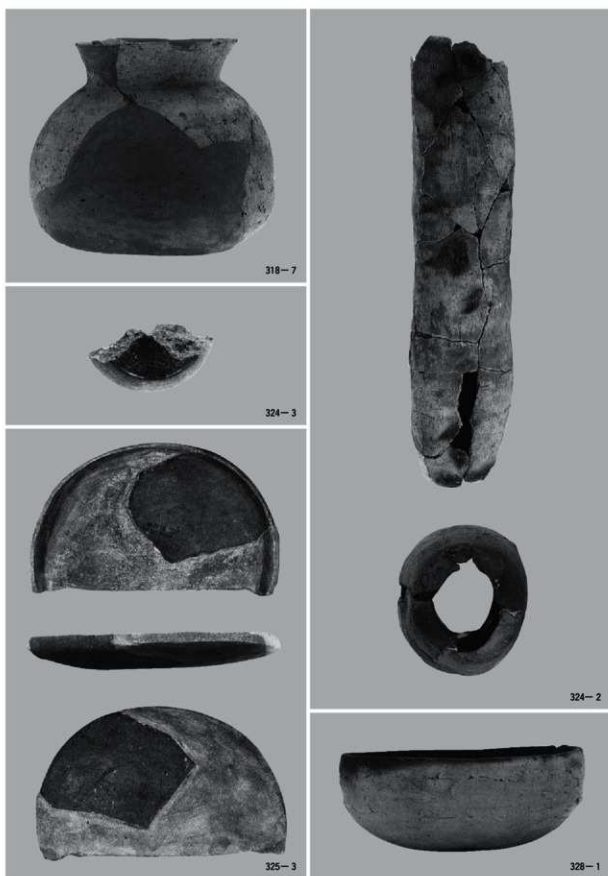
592 120～122号住居跡出土遺物



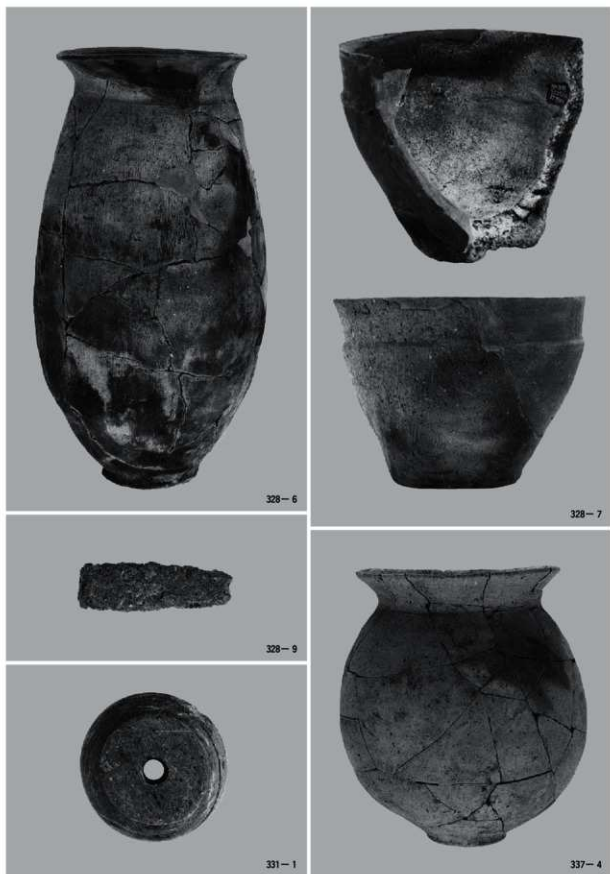
593 121・122号住居跡出土遺物



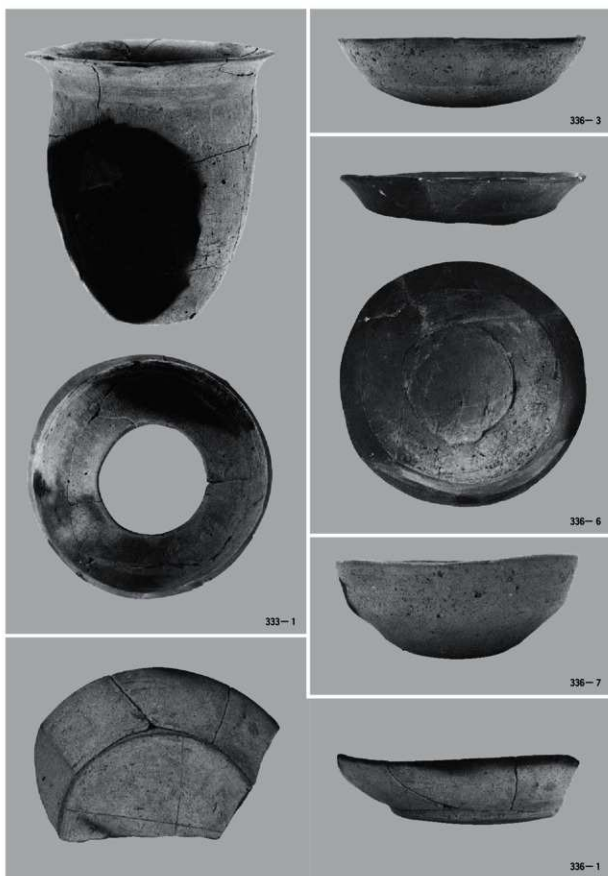
594 122・123号住居跡出土遺物



595 123・126・127・129号住居跡出土遺物



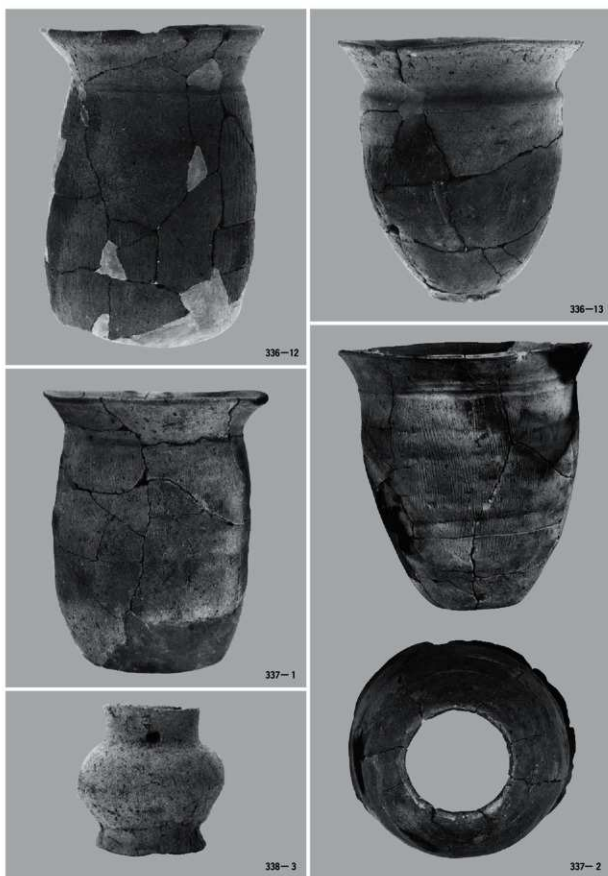
596 129・131・136号住居跡出土遺物



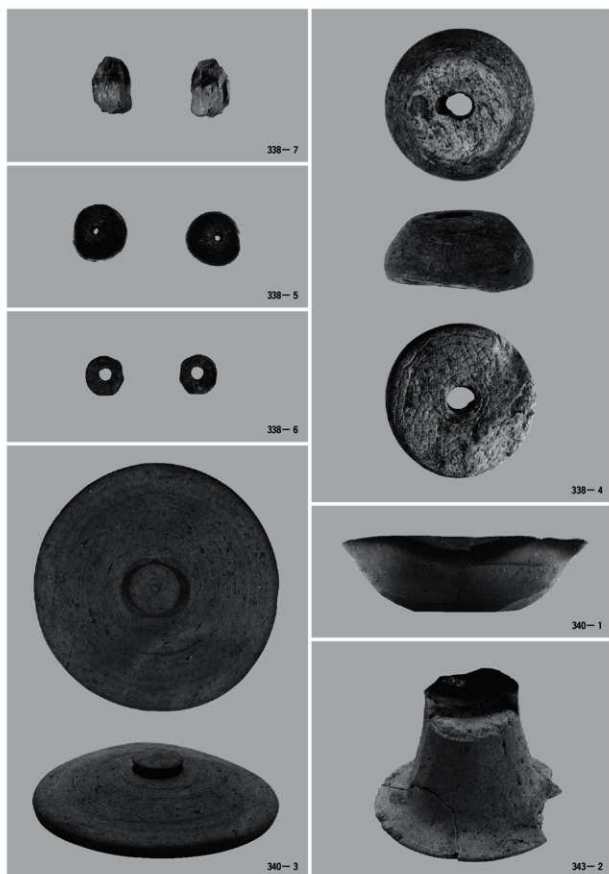
597 134・136号住居跡出土遺物



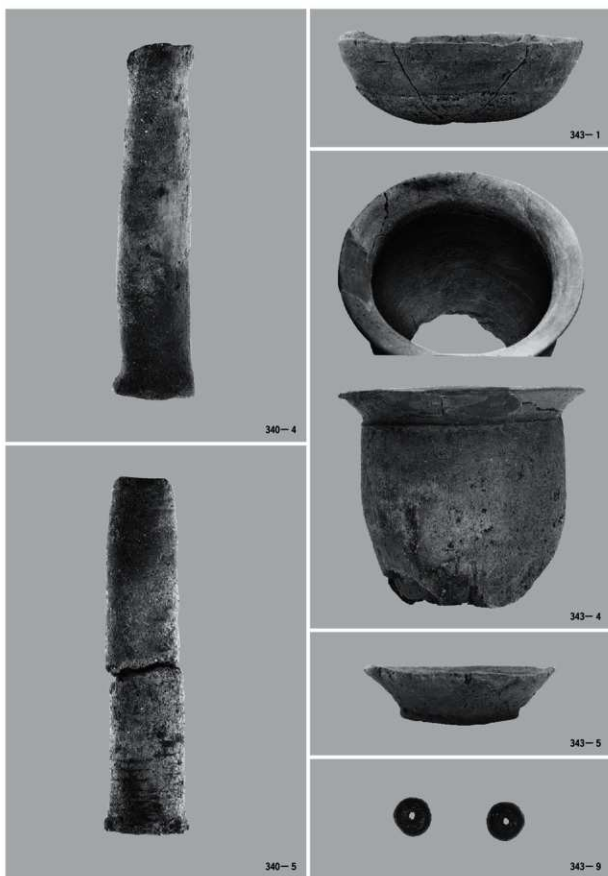
598 136号住居跡出土遺物



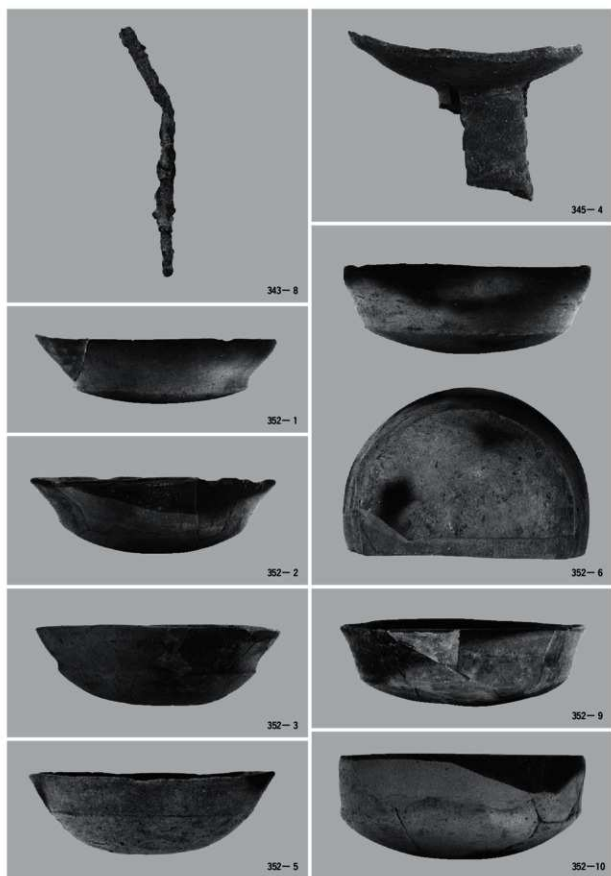
599 136号住居跡出土遺物



600 136~138号住居跡出土遺物



601 137・138号住居跡出土遺物



602 138・139・142号住居跡出土遺物



352-8



352-13

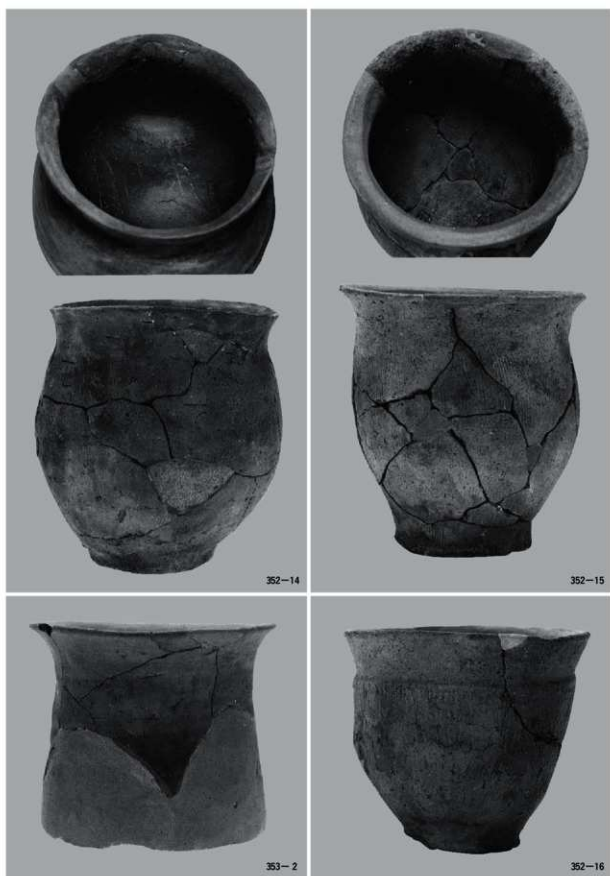


353-1



354-1

603 142号住居跡出土遺物



604 142号住居跡出土遺物



353-3



355-2

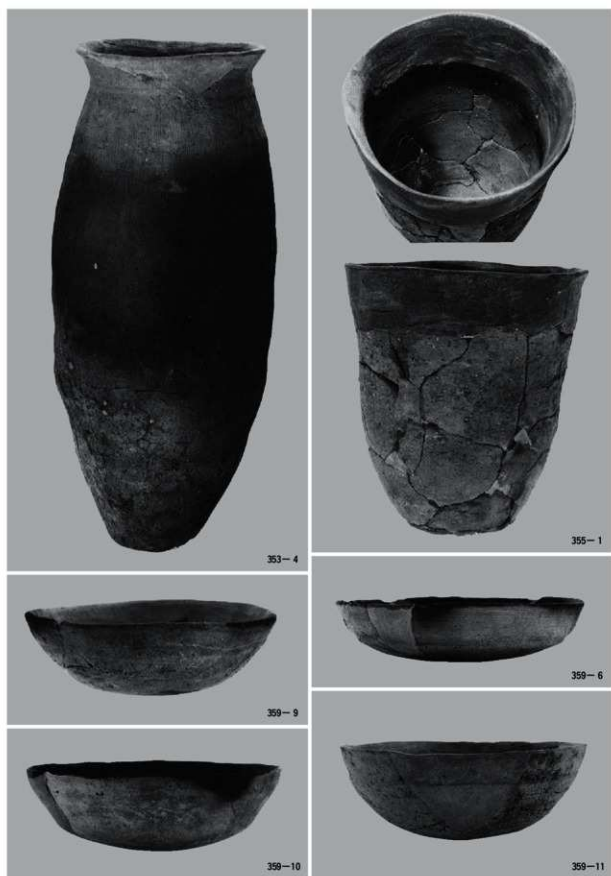


354-2



354-3

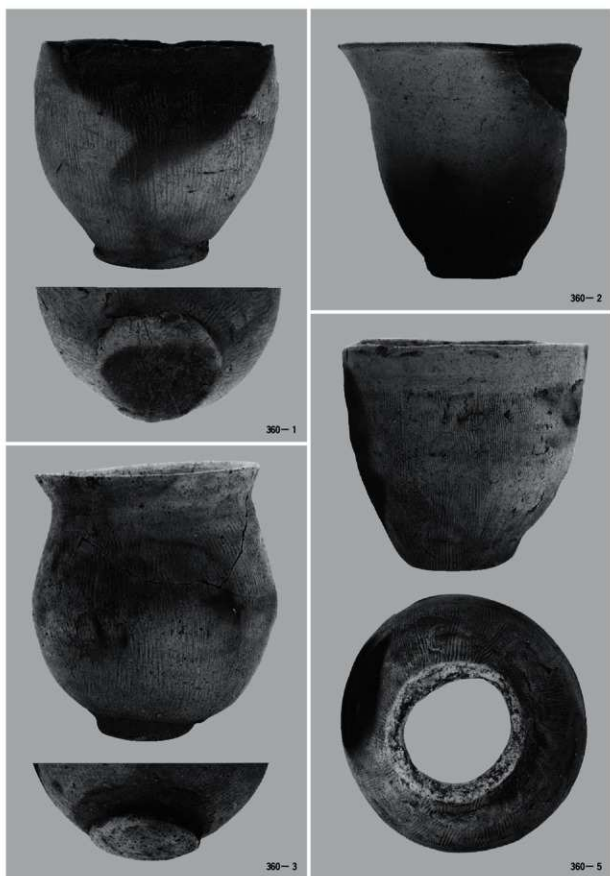
605 142号住居跡出土遺物



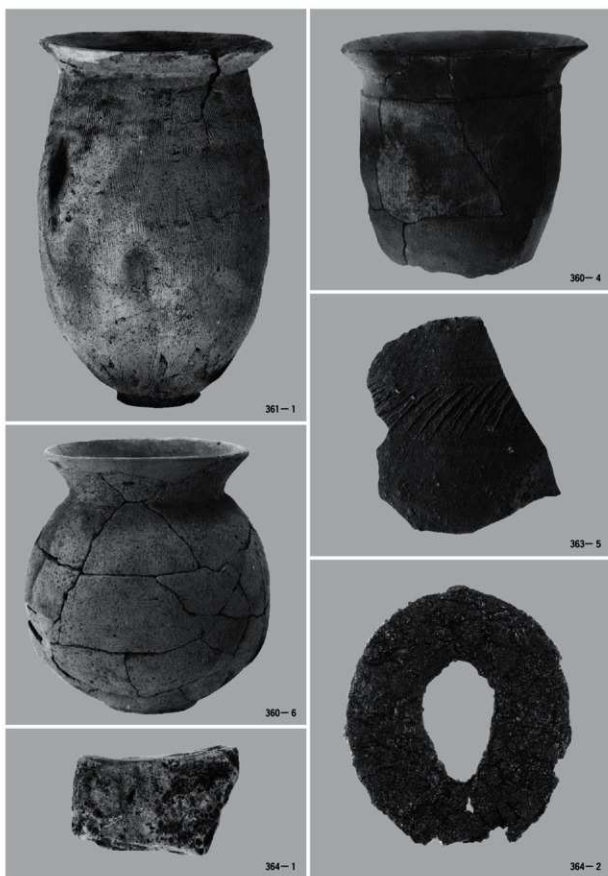
606 142・143号住居跡出土遺物



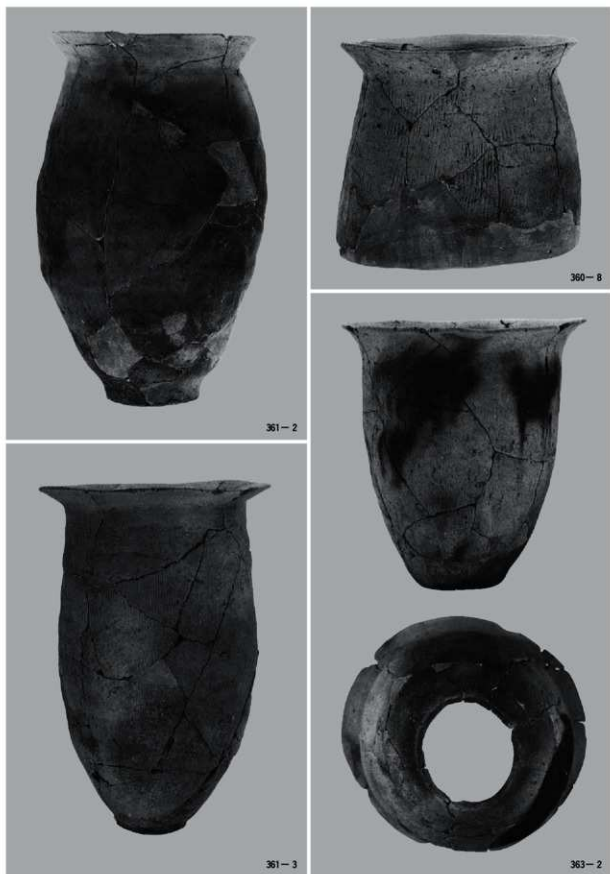
607 142・143号住居跡出土遺物



608 143号住居跡出土遺物



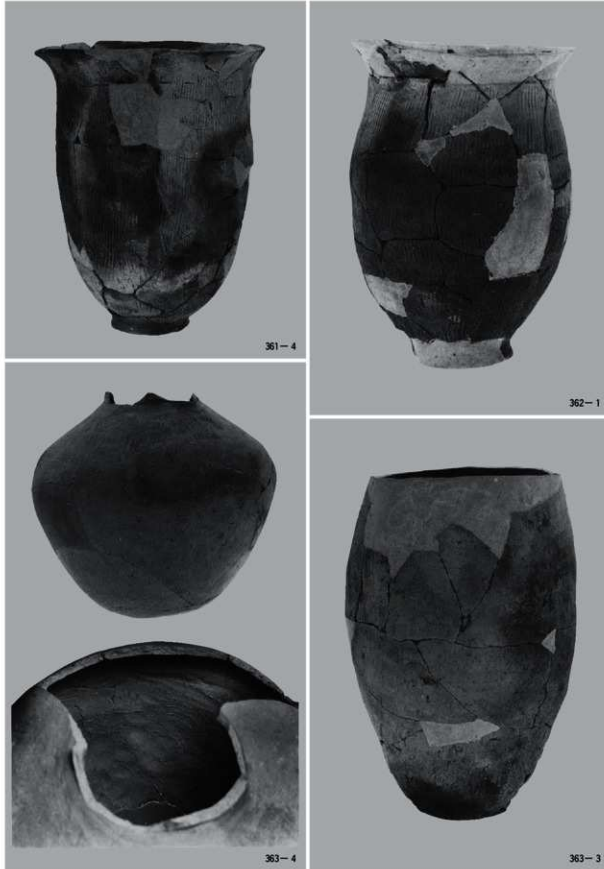
609 143号住居跡出土遺物



610 143号住居跡出土遺物



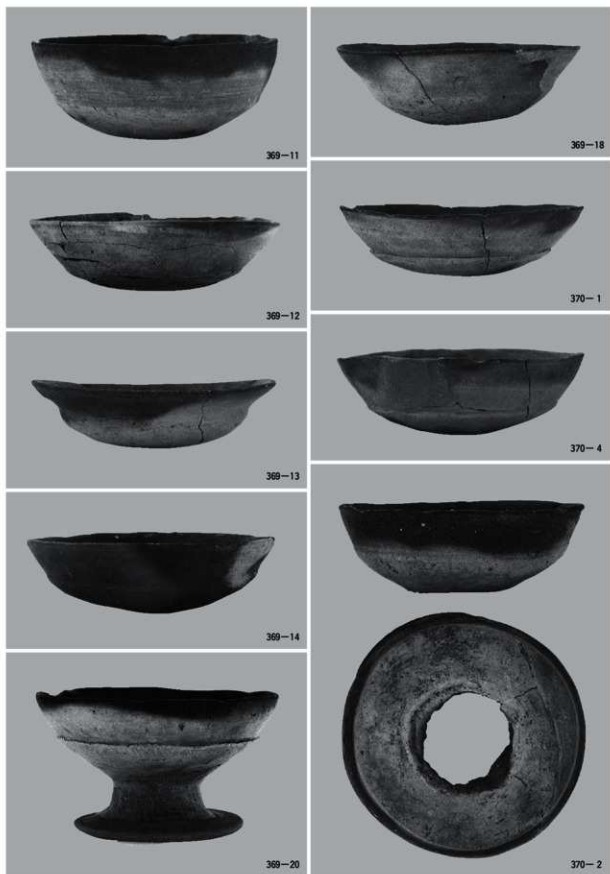
611 143号住居跡出土遺物



612 143号住居跡出土遺物



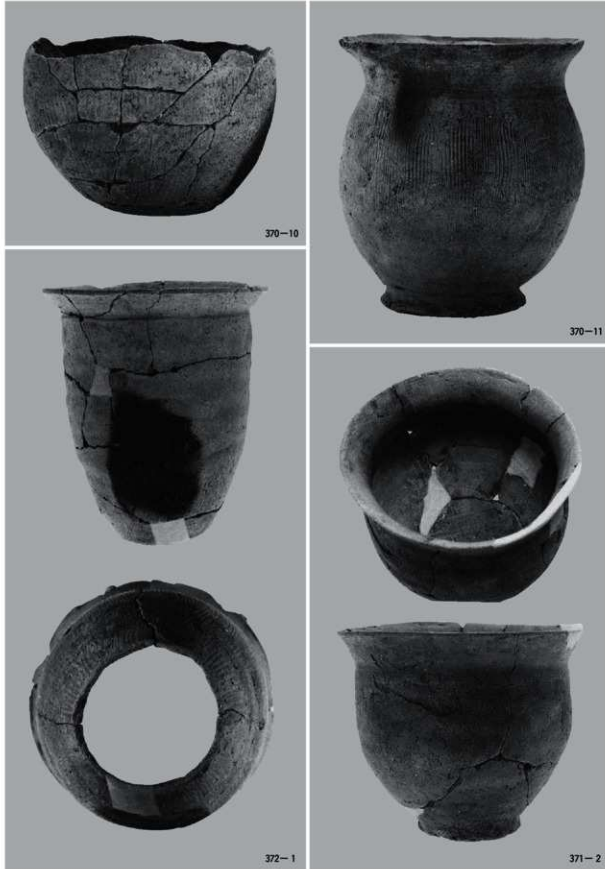
613 144号住居跡出土遺物



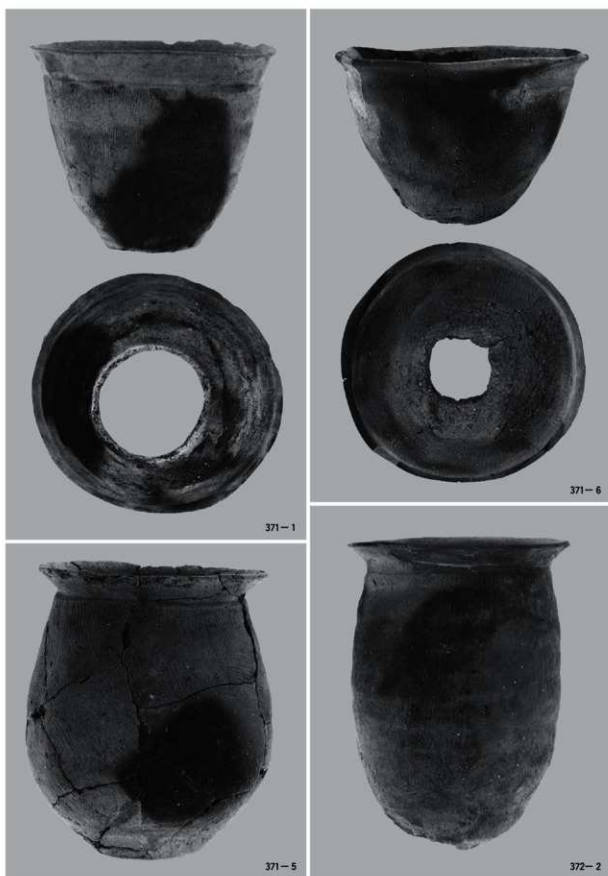
614 144号住居跡出土遺物



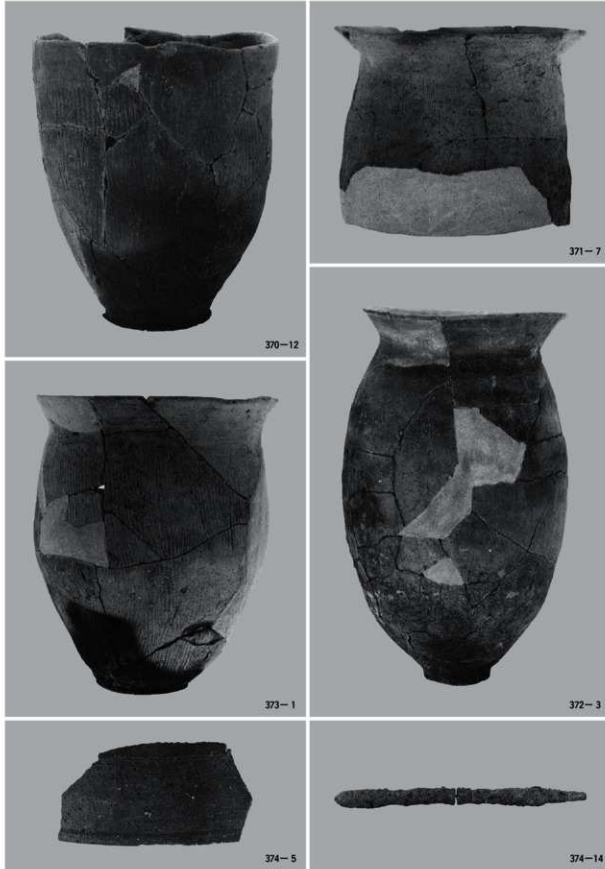
615 144号住居跡出土遺物



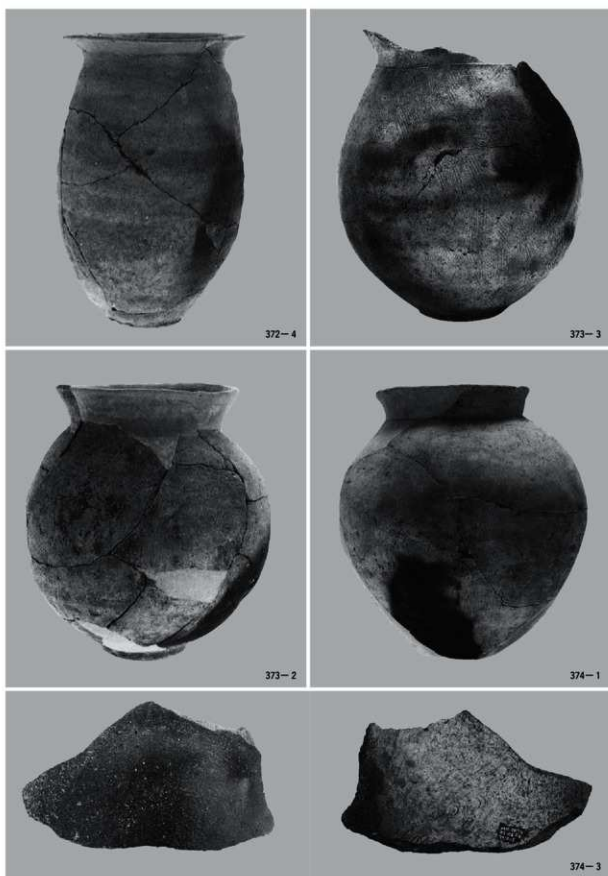
616 144号住居跡出土遺物



617 144号住居跡出土遺物



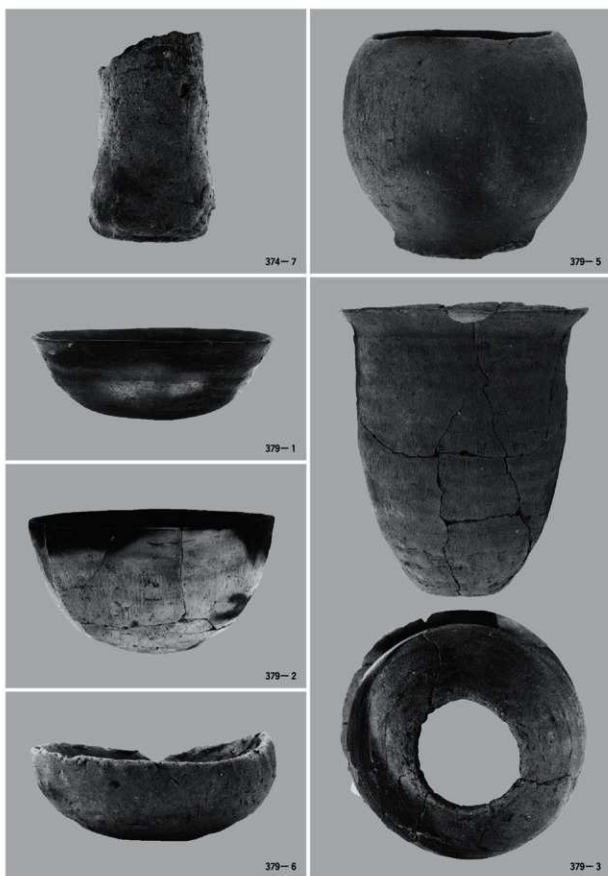
618 144号住居跡出土遺物



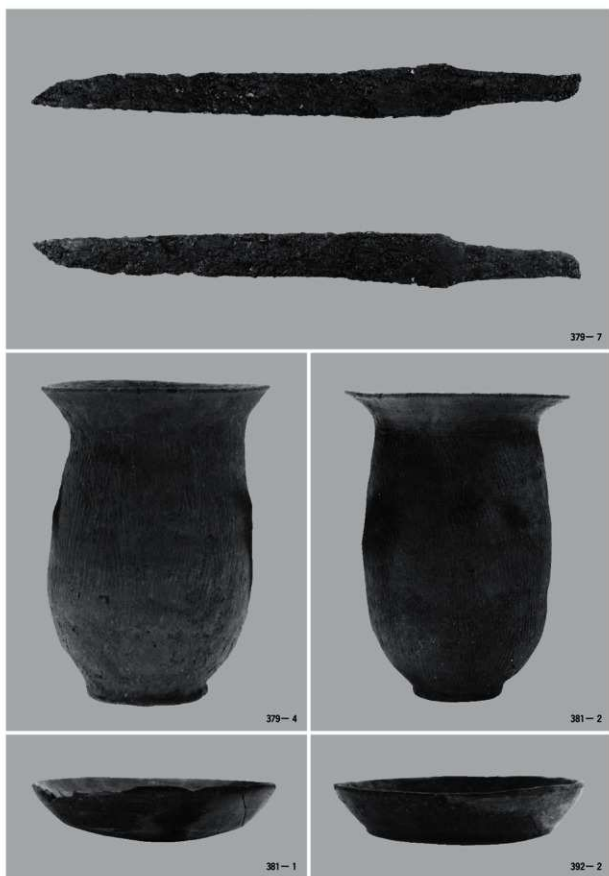
619 144号住居跡出土遺物



620 144号住居跡出土遺物



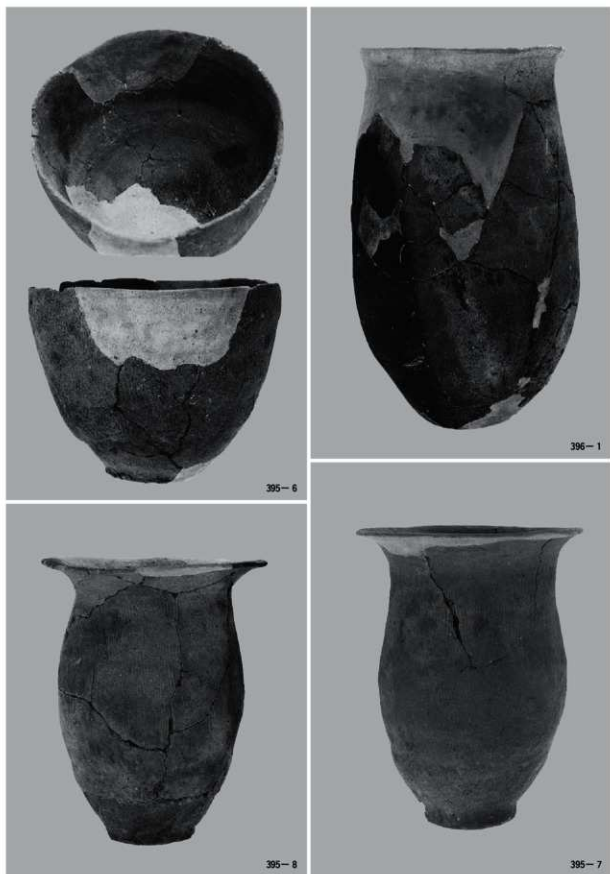
621 144・147号住居跡出土遺物



622 147・148・156号住居跡出土遺物



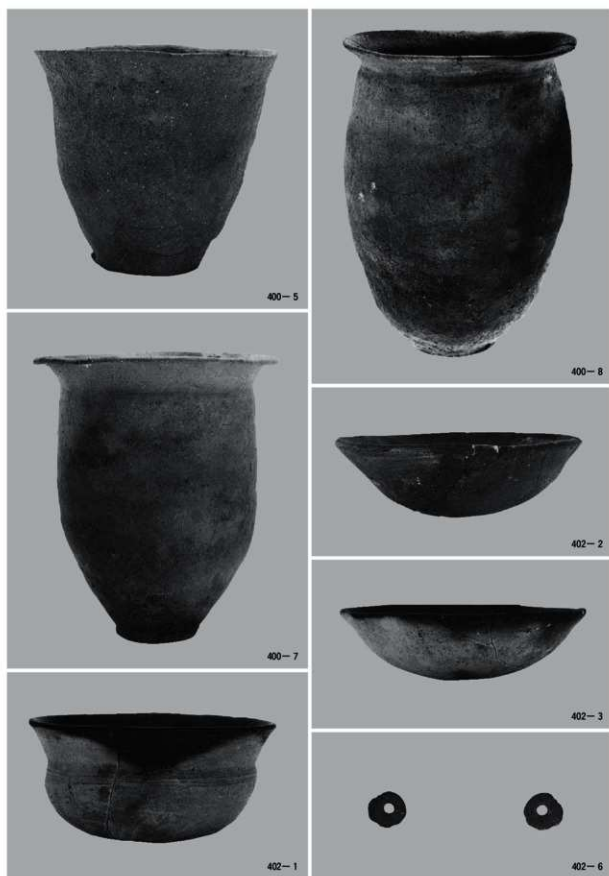
623 154・156・157号住居跡出土遺物



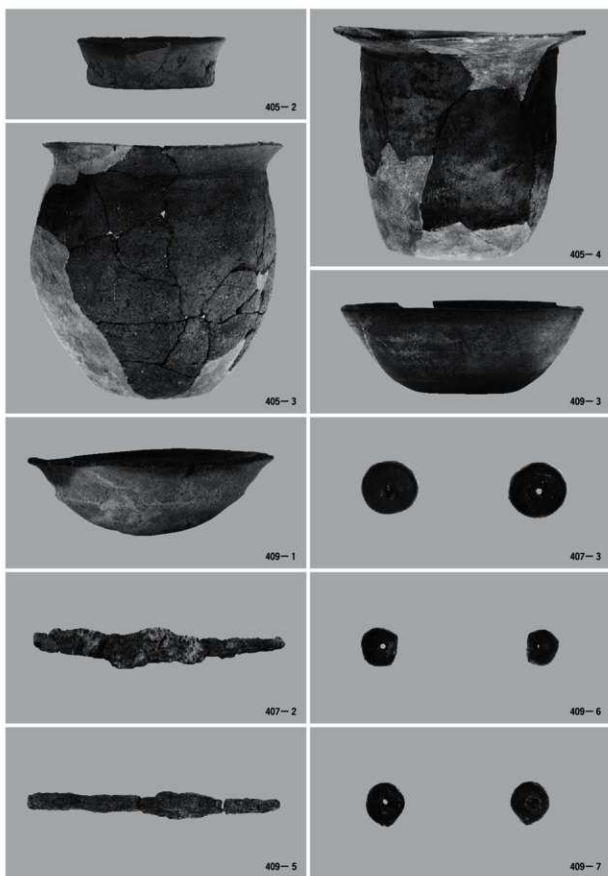
624 157号住居跡出土遺物



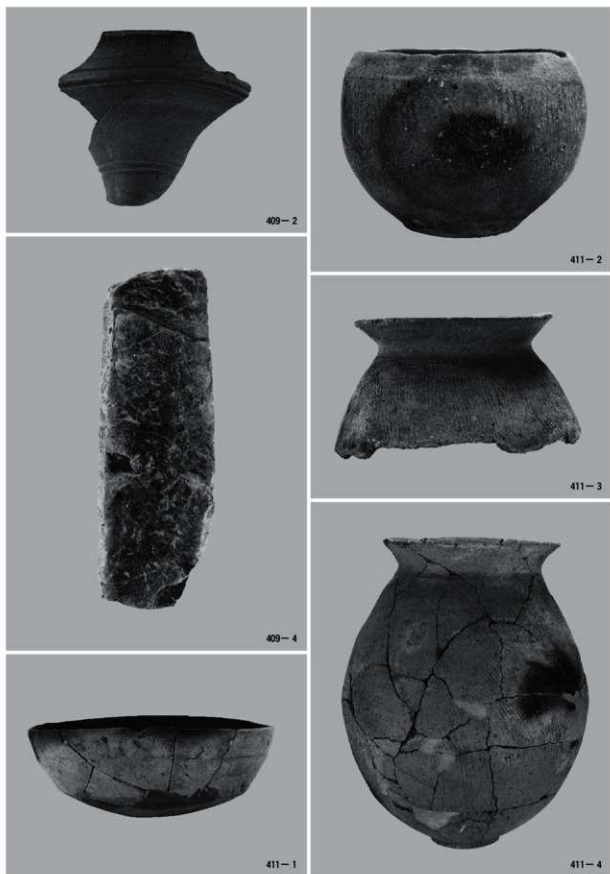
625 158・159号住居跡出土遺物



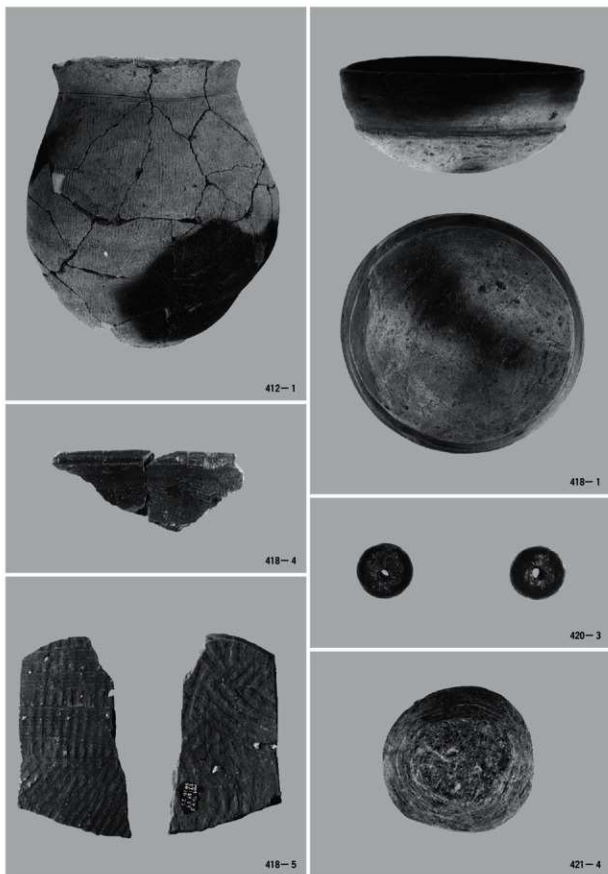
626 159・160号住居跡出土遺物



627 161・162・164号住居跡出土遺物



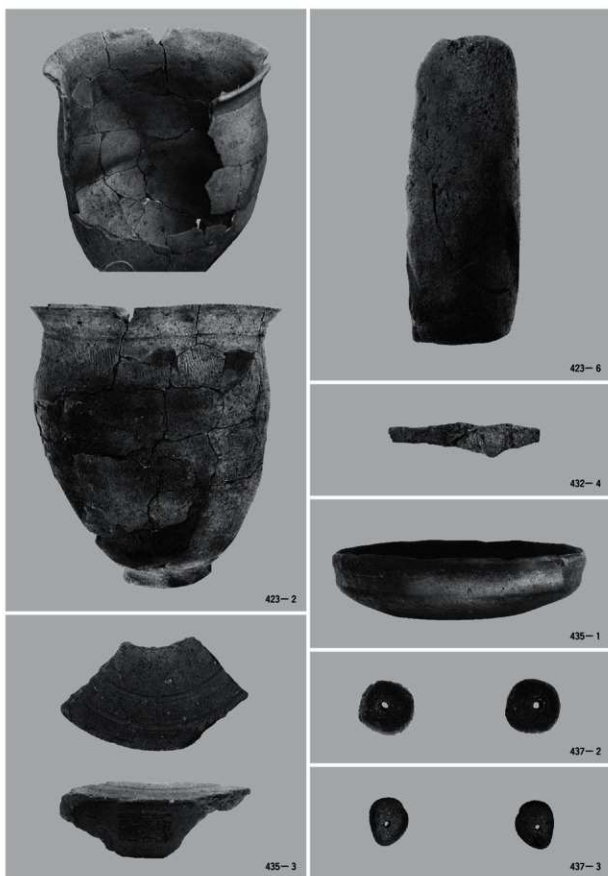
628 164・165号住居跡出土遺物



629 165・169・170・173号住居跡出土遺物



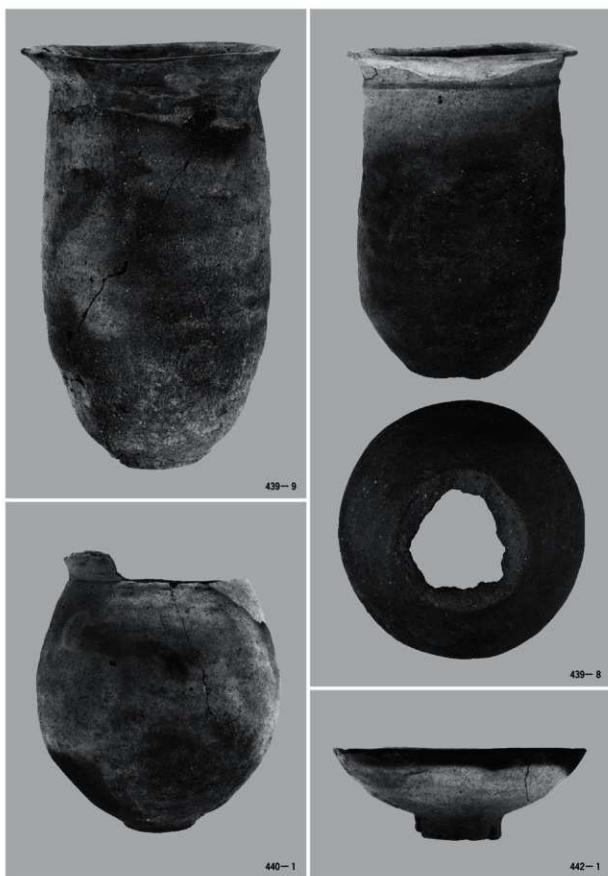
630 174号住居跡出土遺物



631 174・191・193・194号住居跡出土遺物



632 194・195号住居跡出土遺物



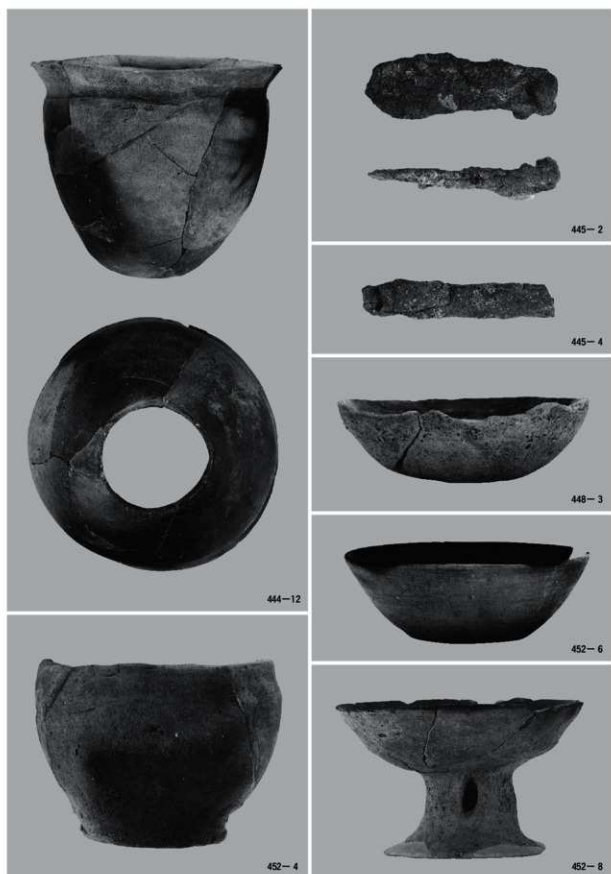
633 195・196号住居跡出土遺物



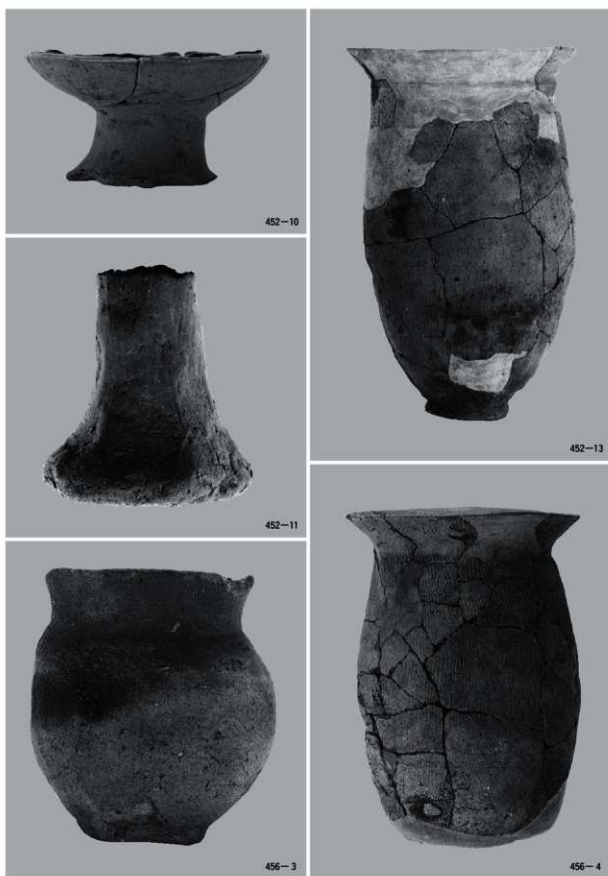
634 195・196・199号住居跡出土遺物



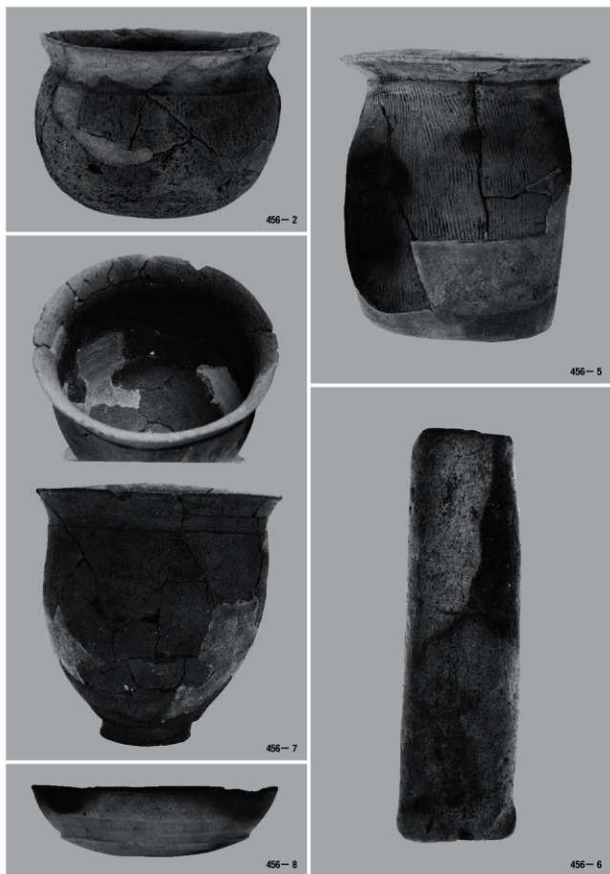
635 199号住居跡出土遺物



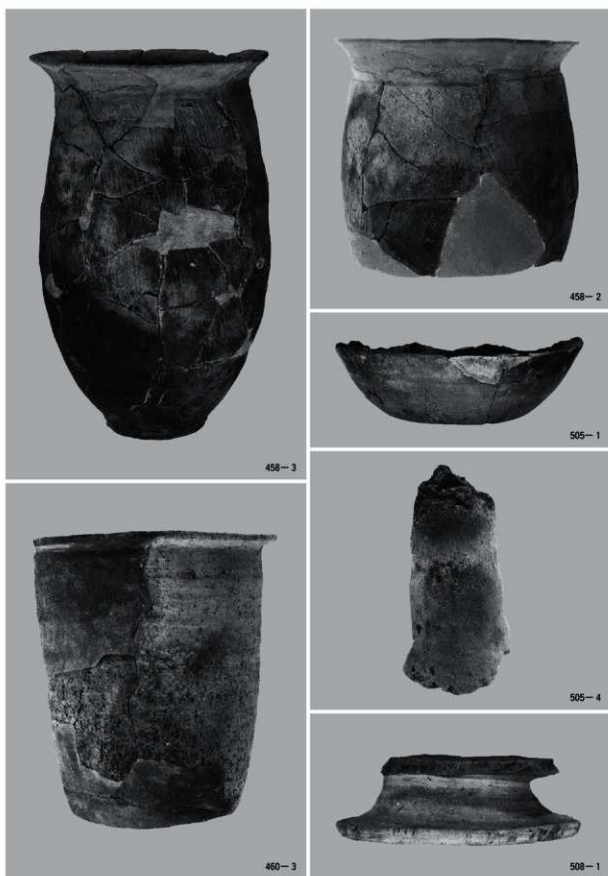
636 199・214号住居跡，12・14・17号土坑出土遺物



637 17·18号土坑出土遺物



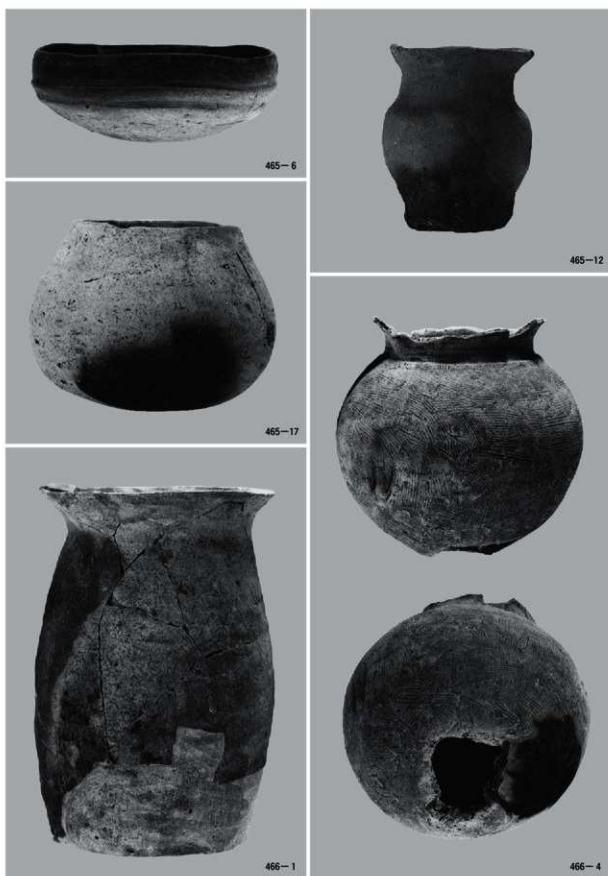
638 18・22・35号土坑出土遺物



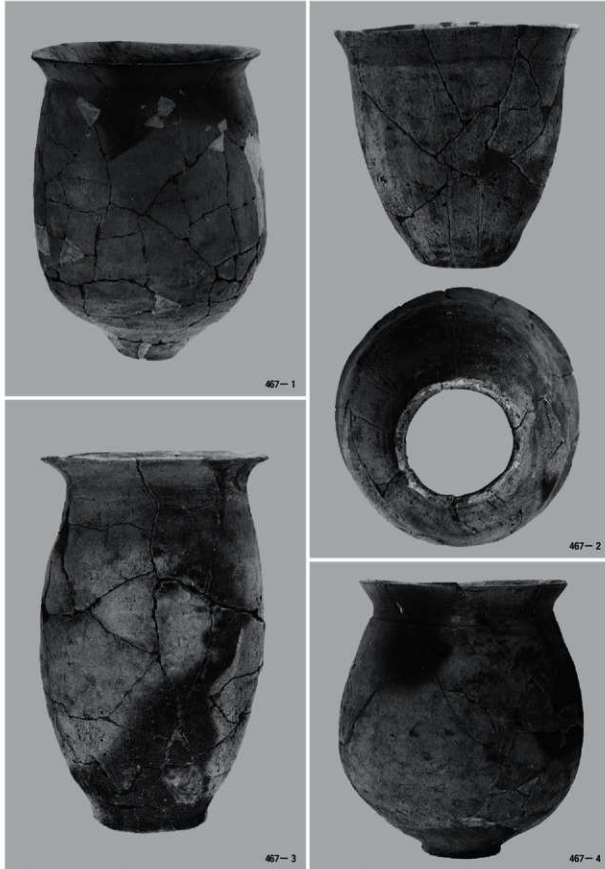
639 1・3号烧土遺構，2・7号特殊遺構出土遺物



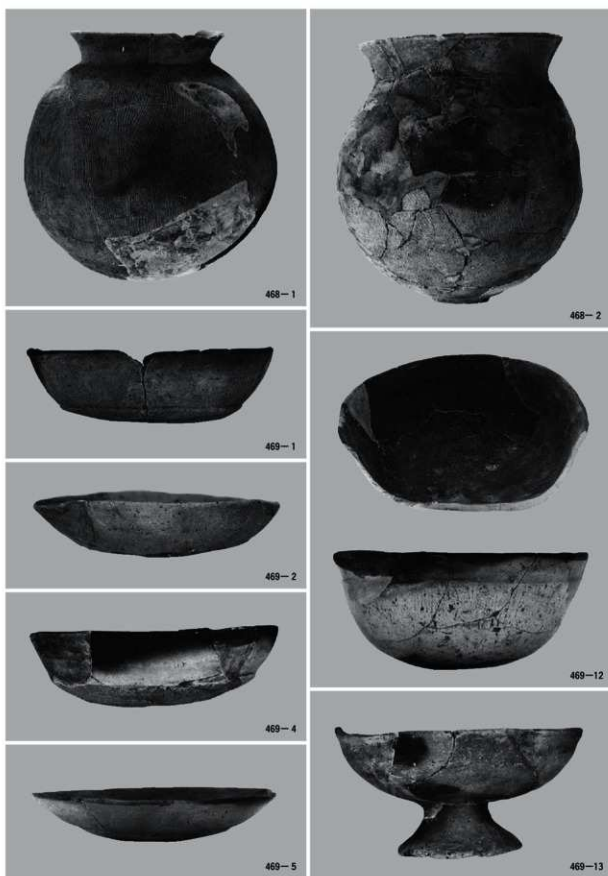
640 1号溝跡出土遺物



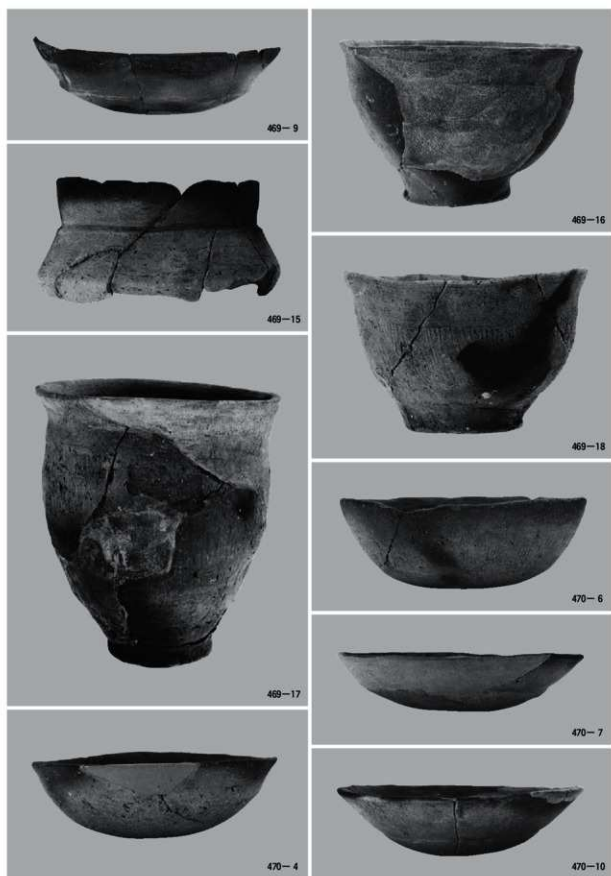
641 1号溝跡出土遺物



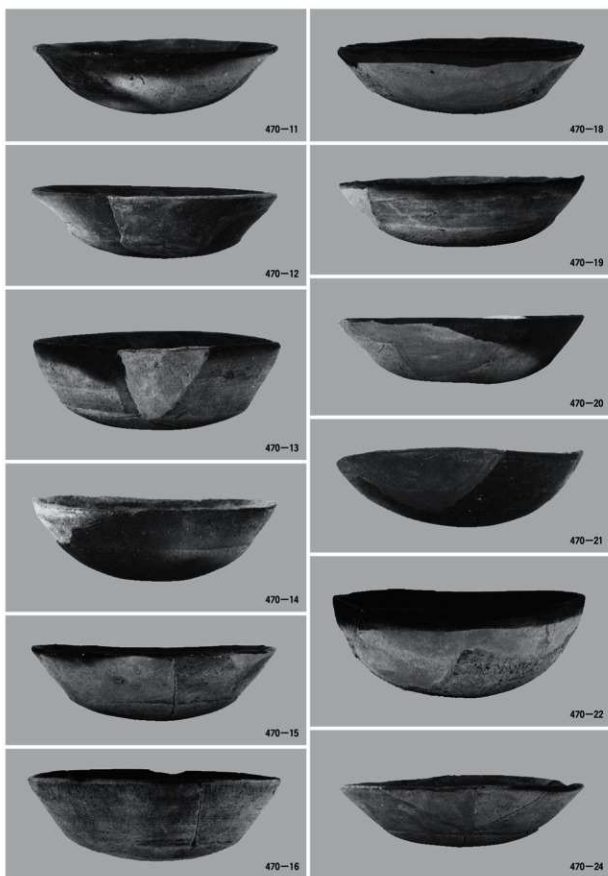
642 1号溝跡出土遺物



643 1号溝跡出土遺物



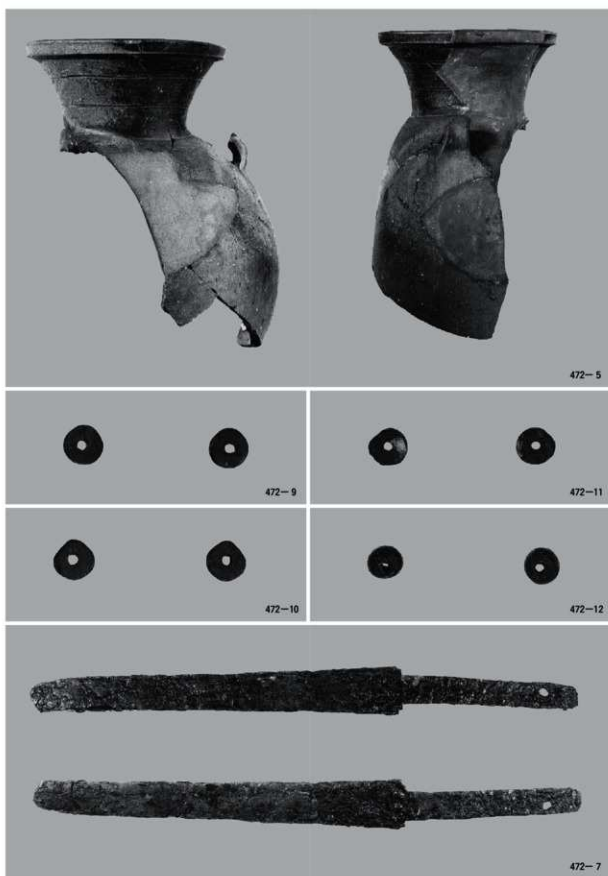
644 1号溝跡出土遺物



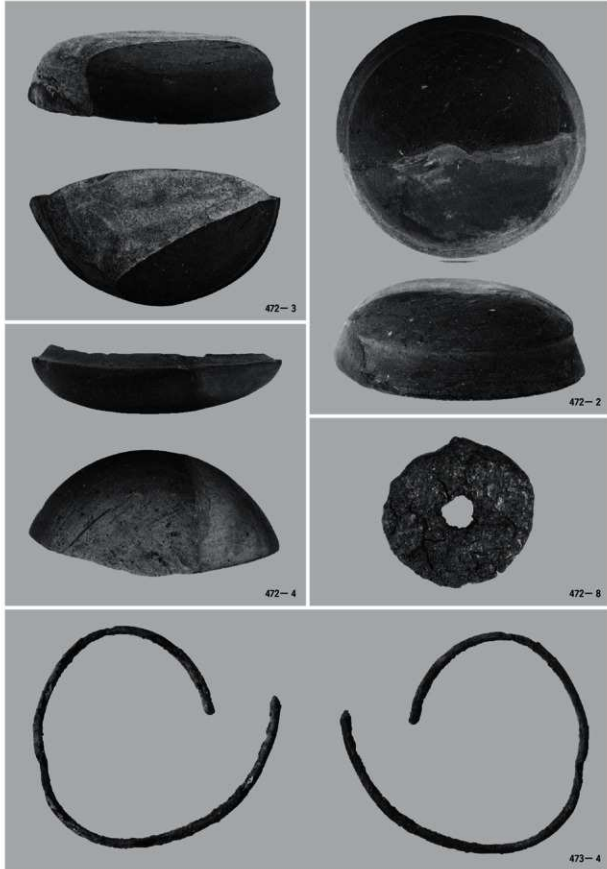
645 1号溝跡出土遺物



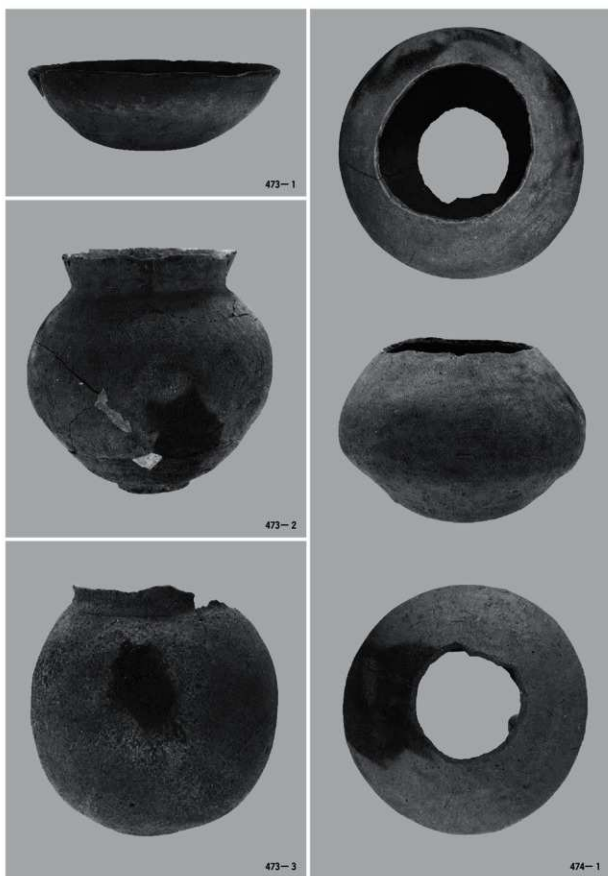
646 1号溝跡出土遺物



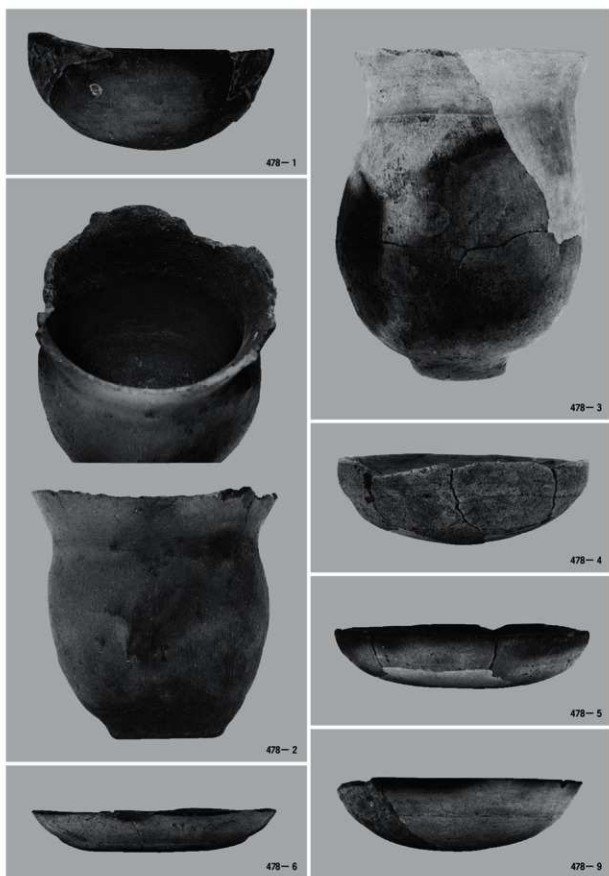
647 1号溝跡出土遺物



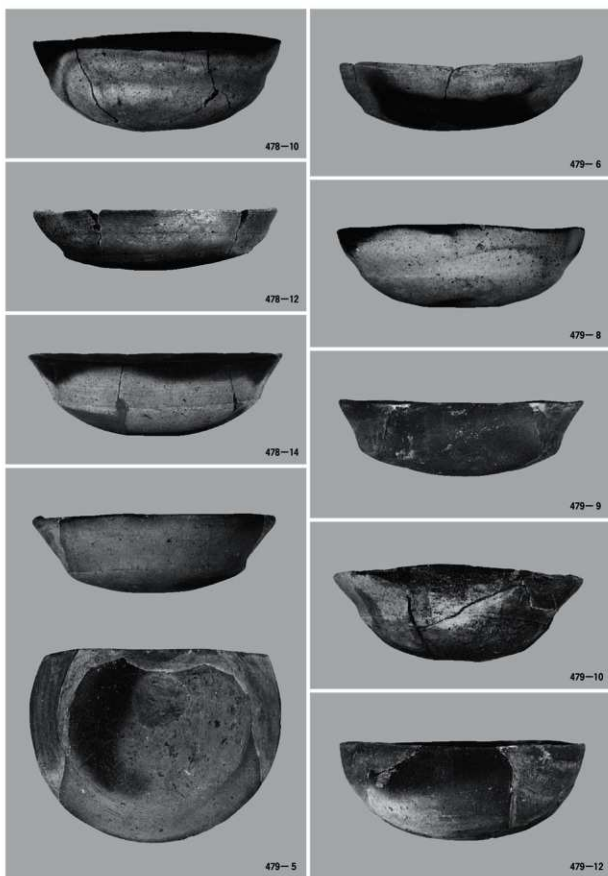
648 1号溝跡，6号特殊遺構出土遺物



649 6号特殊遺構出土遺物



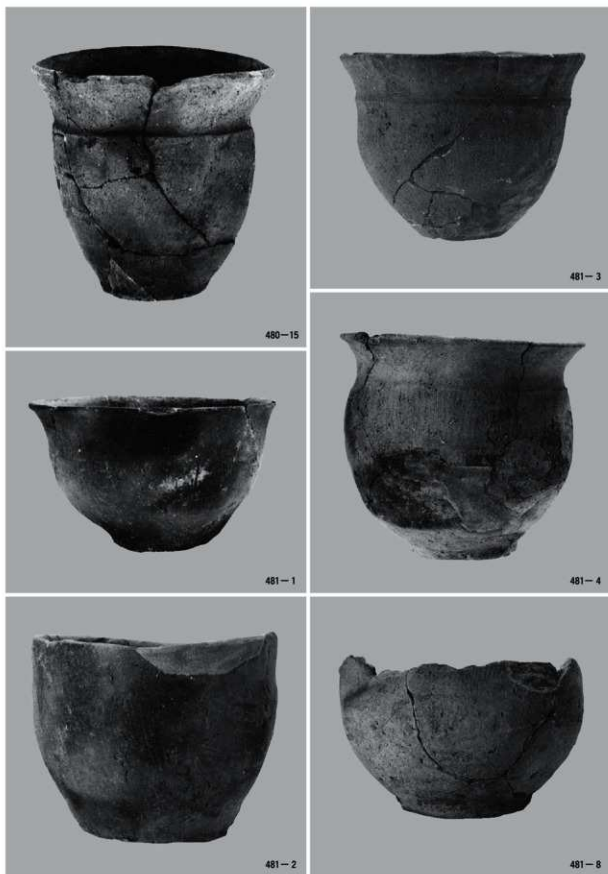
650 2号溝跡出土遺物



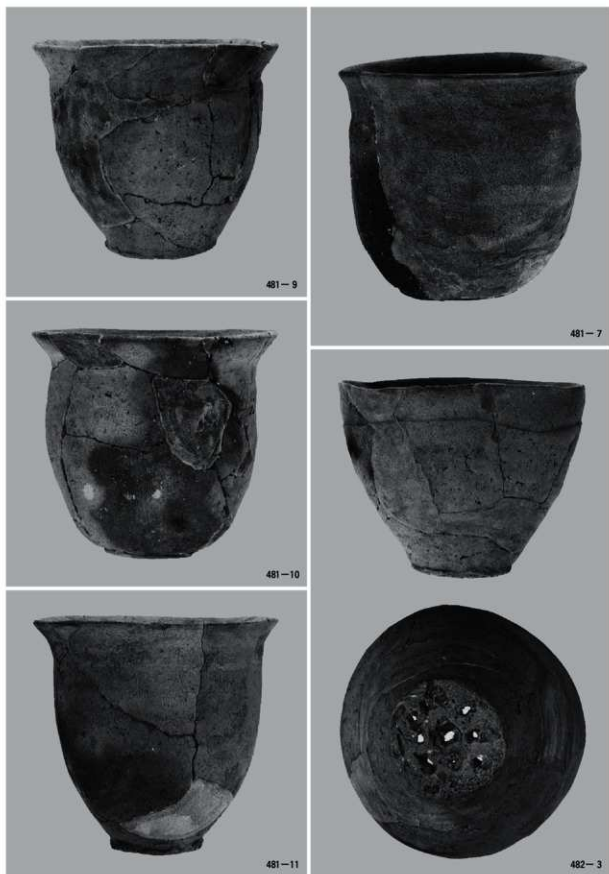
651 2号溝跡出土遺物



652 2号溝跡出土遺物



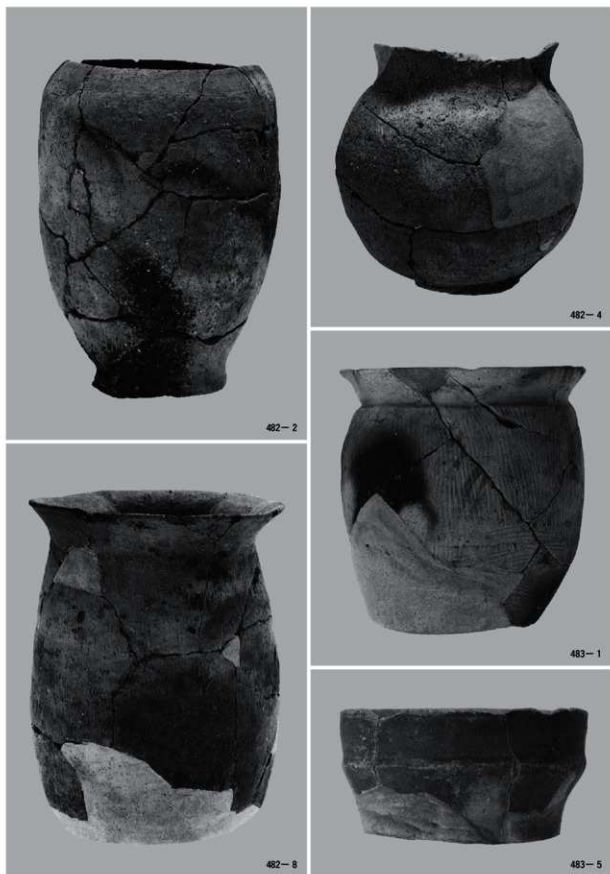
653 2号溝跡出土遺物



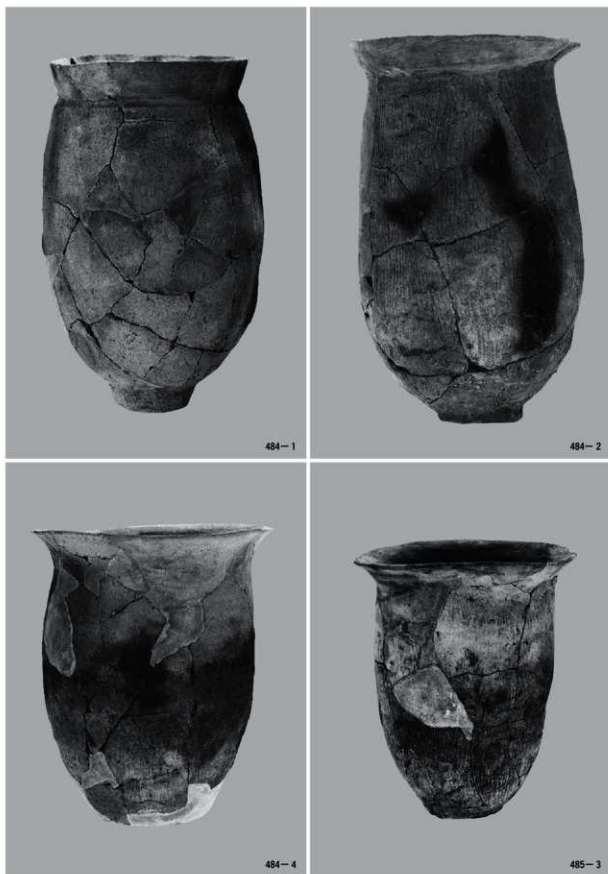
654 2号溝跡出土遺物



655 2号溝跡出土遺物



656 2号溝跡出土遺物



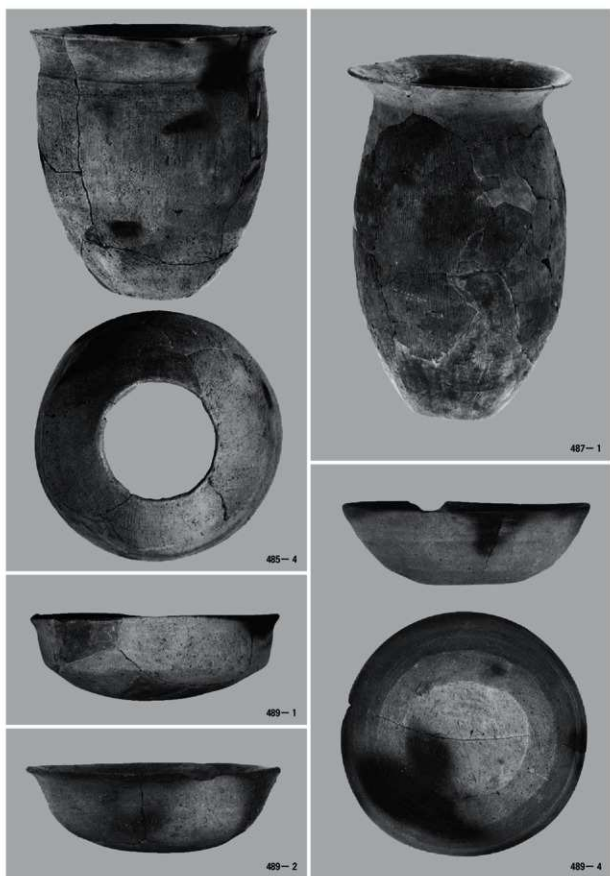
657 2号溝跡出土遺物



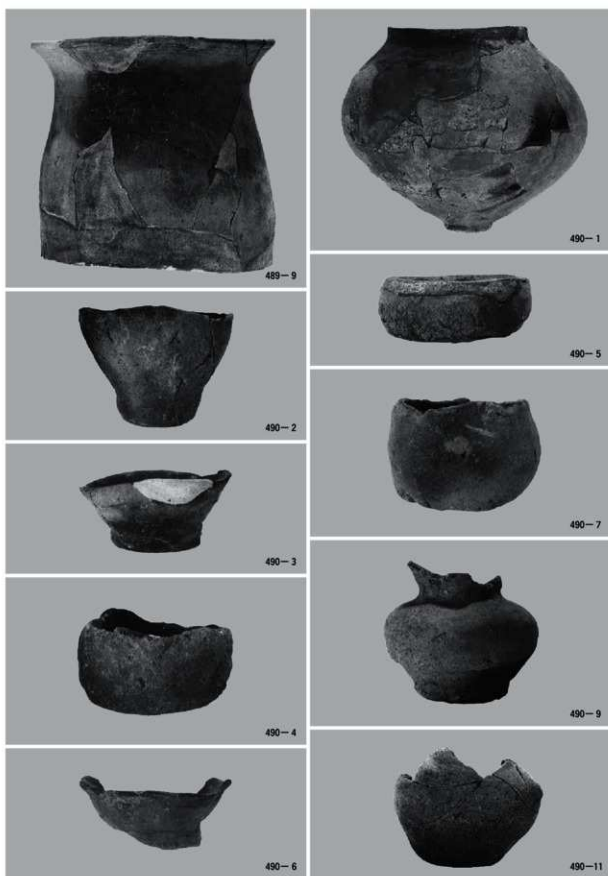
658 2号溝跡出土遺物



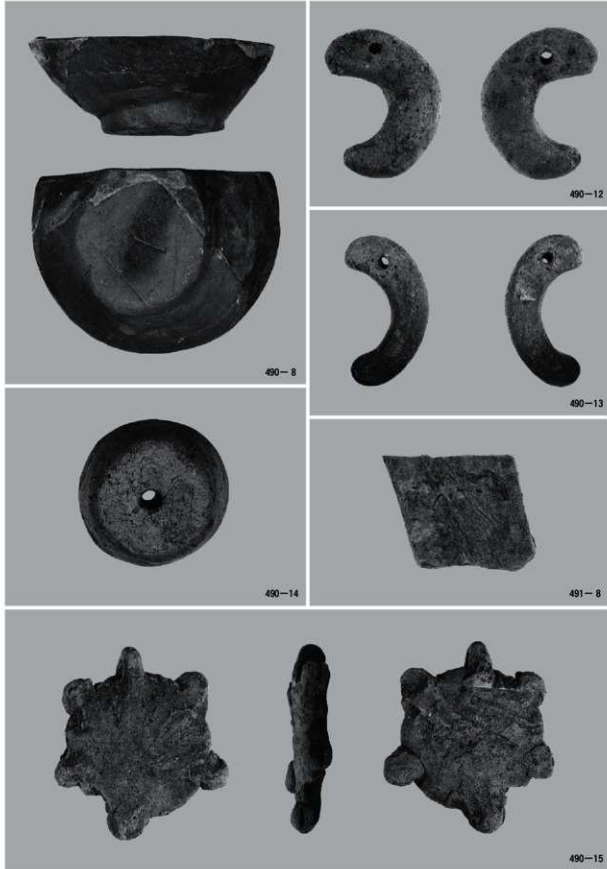
659 2号溝跡出土遺物



660 2号溝跡出土遺物



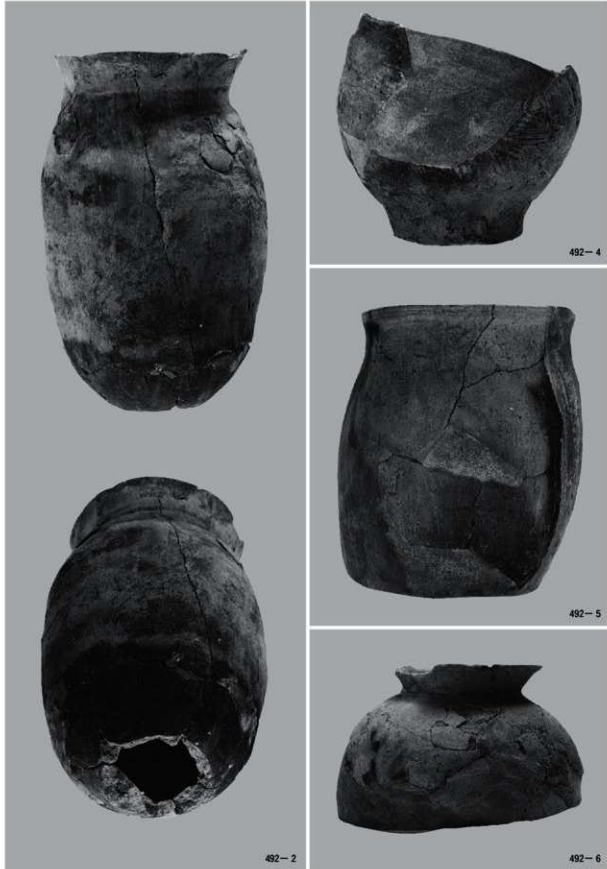
661 2号溝跡出土遺物



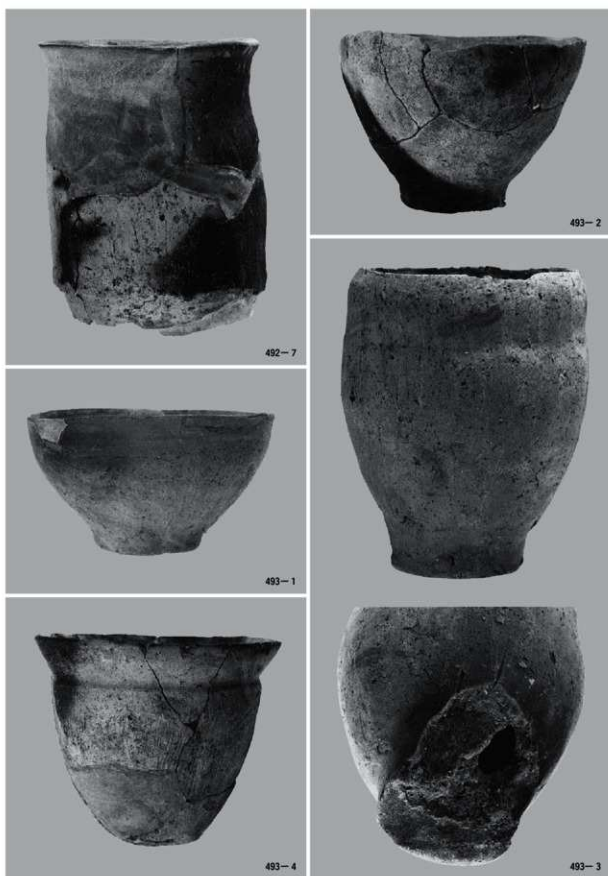
662 2号溝跡出土遺物



663 2号溝跡出土遺物



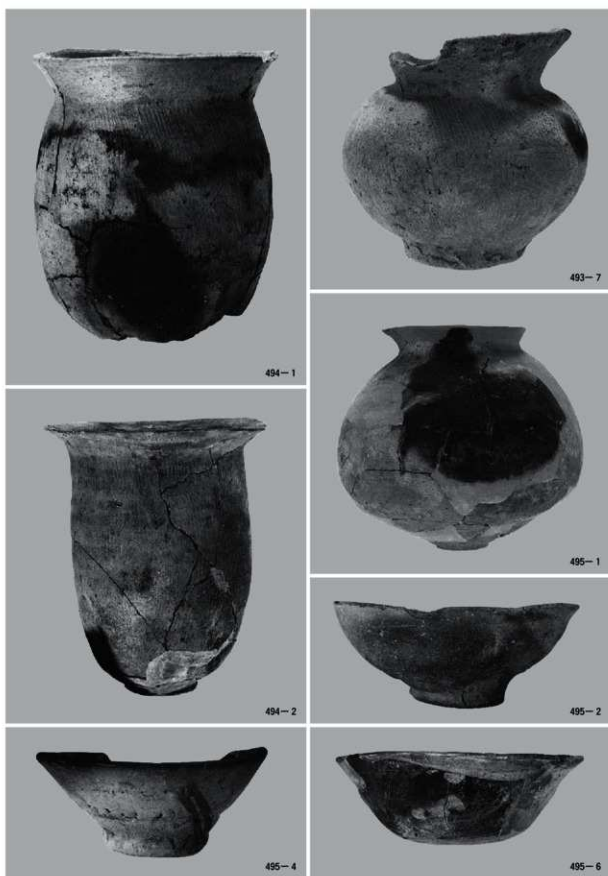
664 2号溝跡出土遺物



665 2号溝跡出土遺物



666 2号溝跡出土遺物



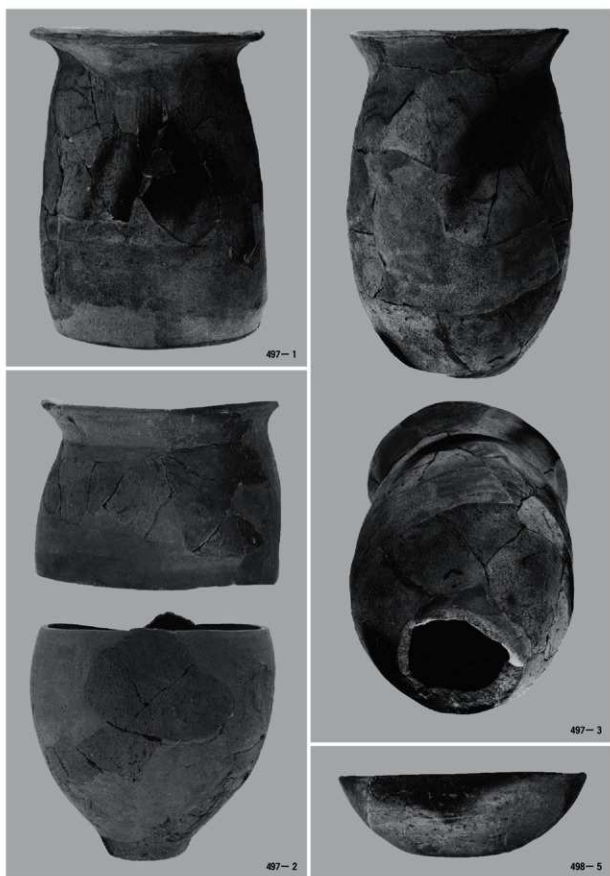
667 2号溝跡出土遺物



668 2号溝跡出土遺物



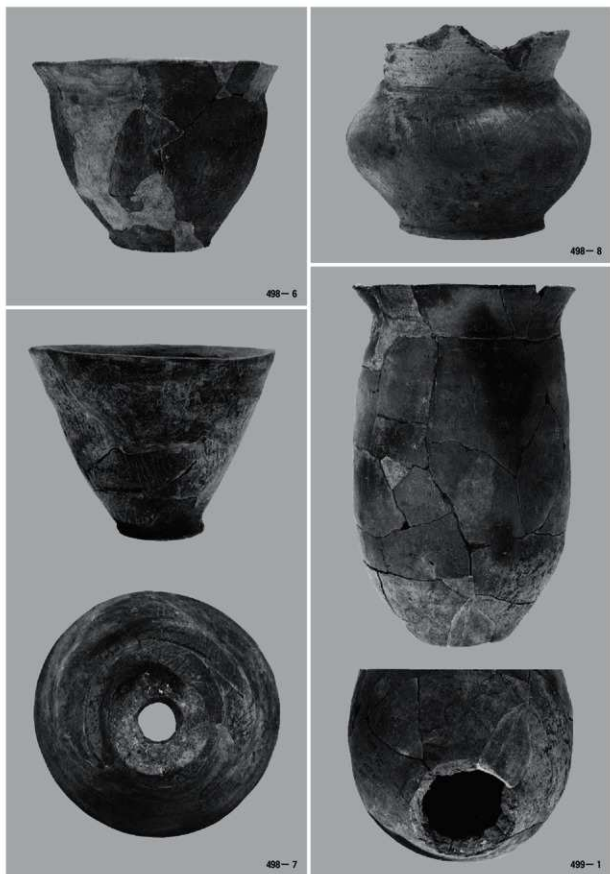
669 2号溝跡出土遺物



670 2号溝跡出土遺物



671 2号溝跡出土遺物



672 2号溝跡出土遺物



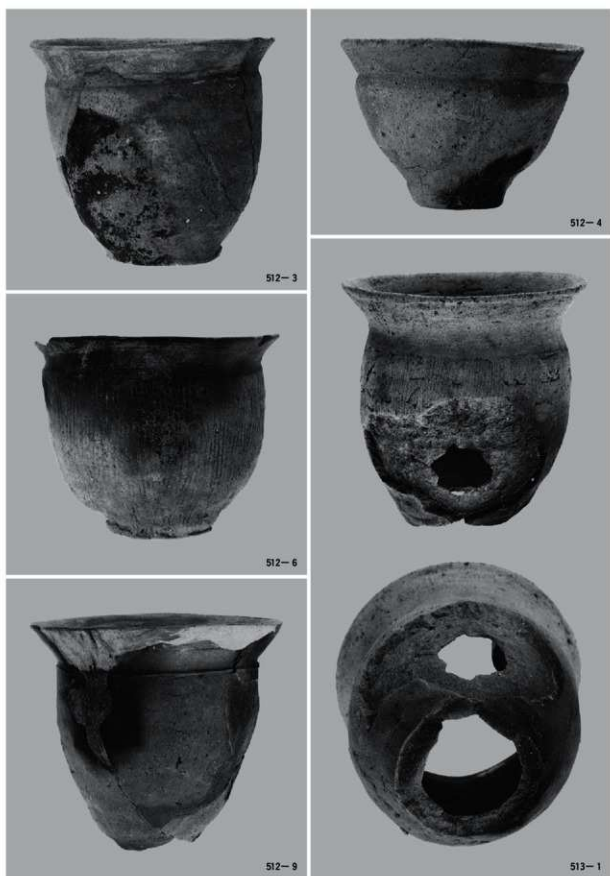
673 4·5号溝跡出土遺物



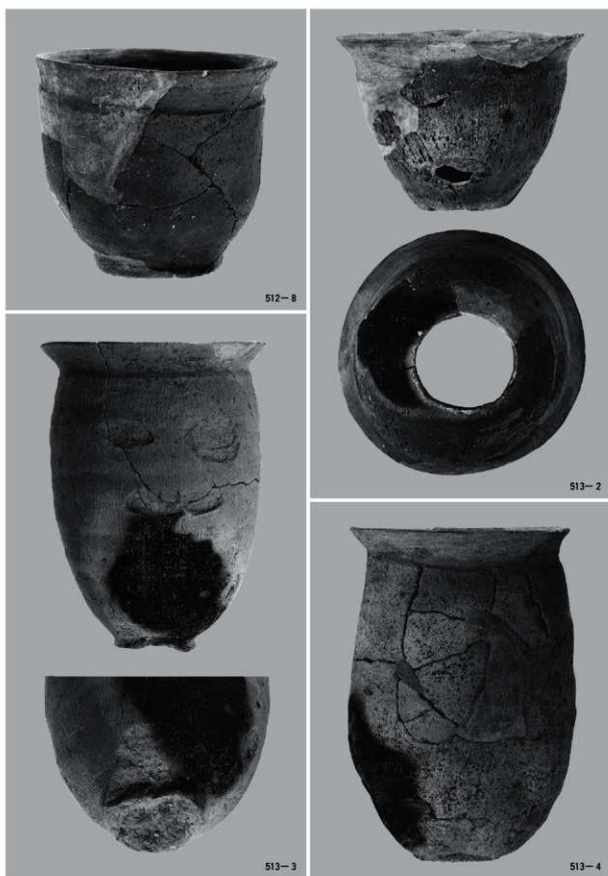
674 1号遺物包含層出土遺物



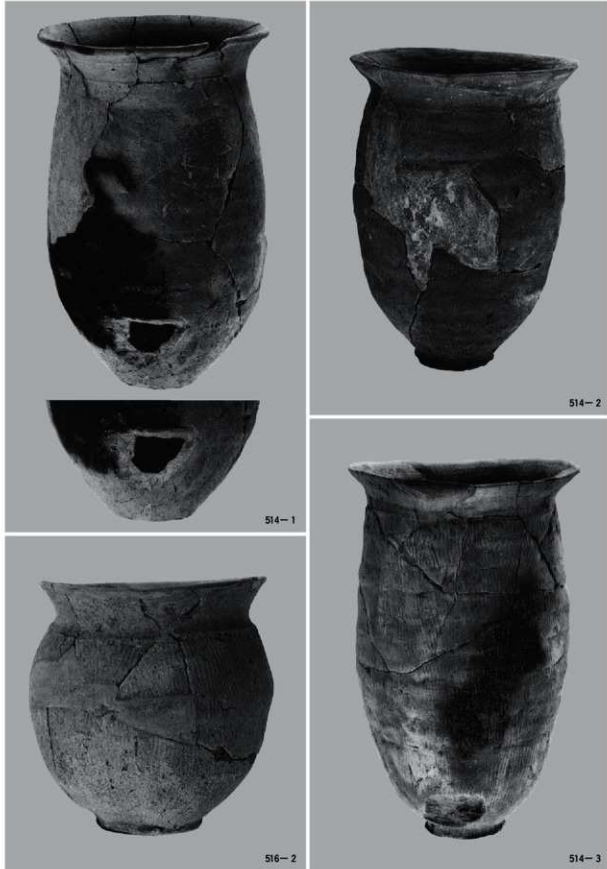
675 1号遺物包含層出土遺物



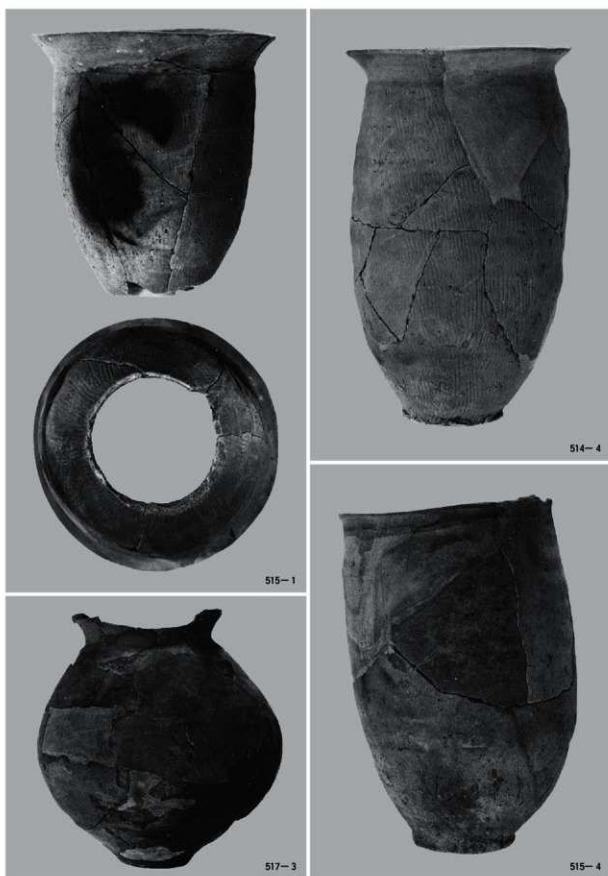
676 1号遺物包含層出土遺物



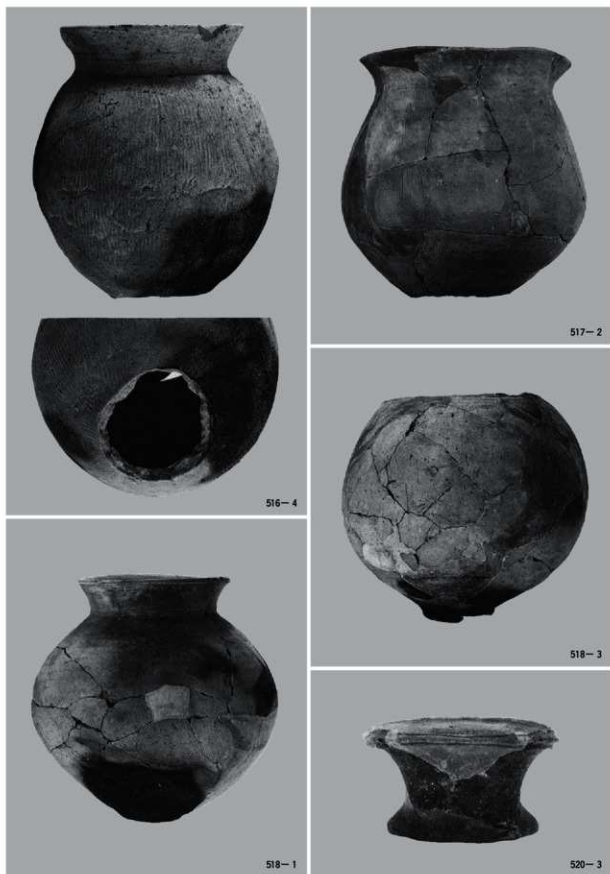
677 1号遺物包含層出土遺物



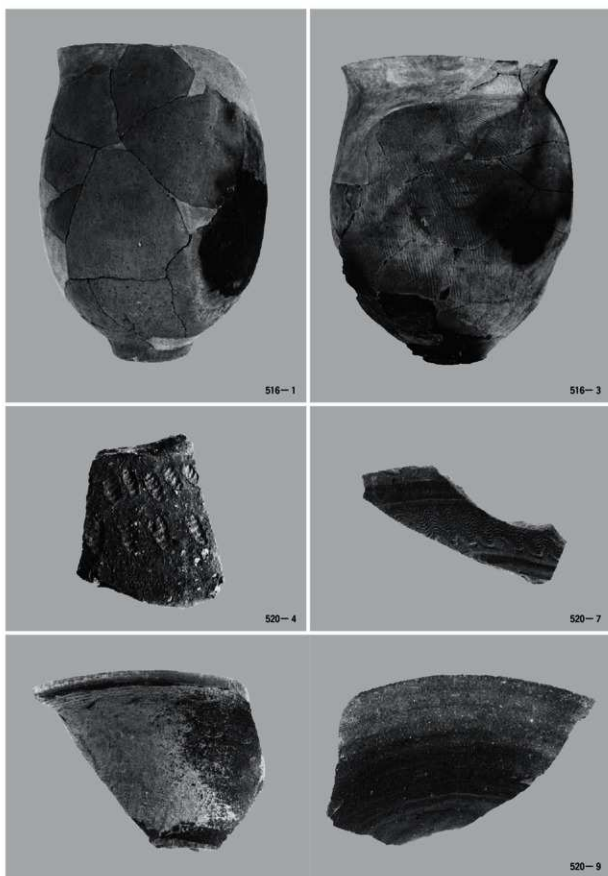
678 1号遺物包含層出土遺物



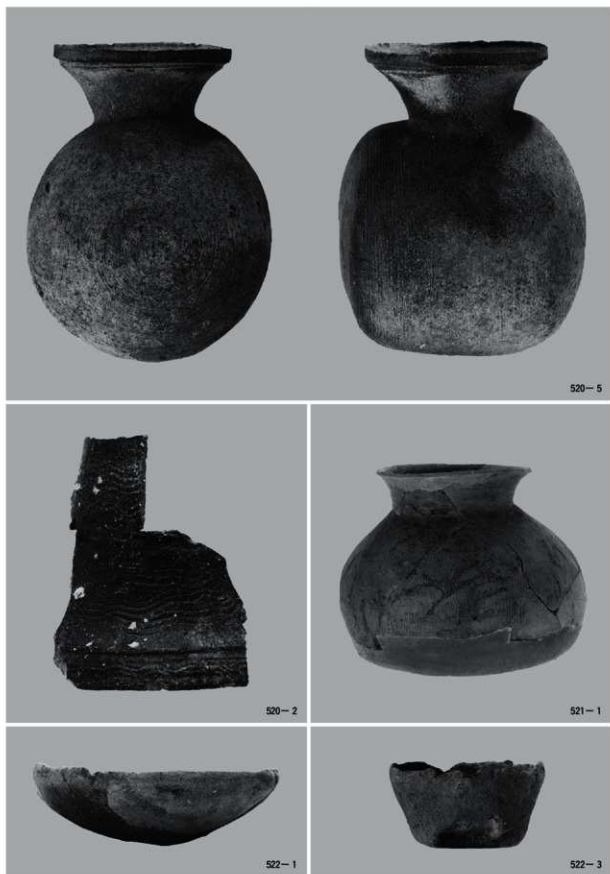
679 1号遺物包含層出土遺物



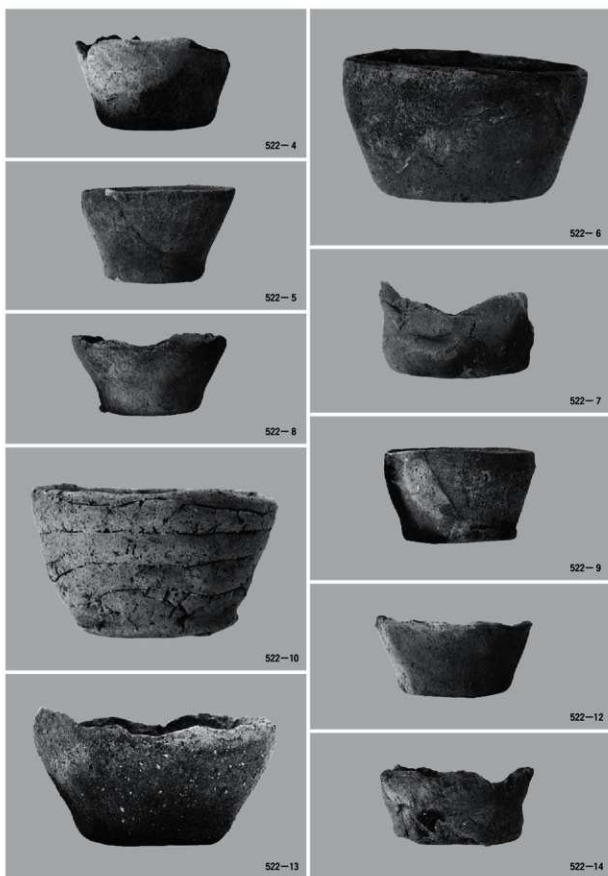
680 1号遺物包含層出土遺物



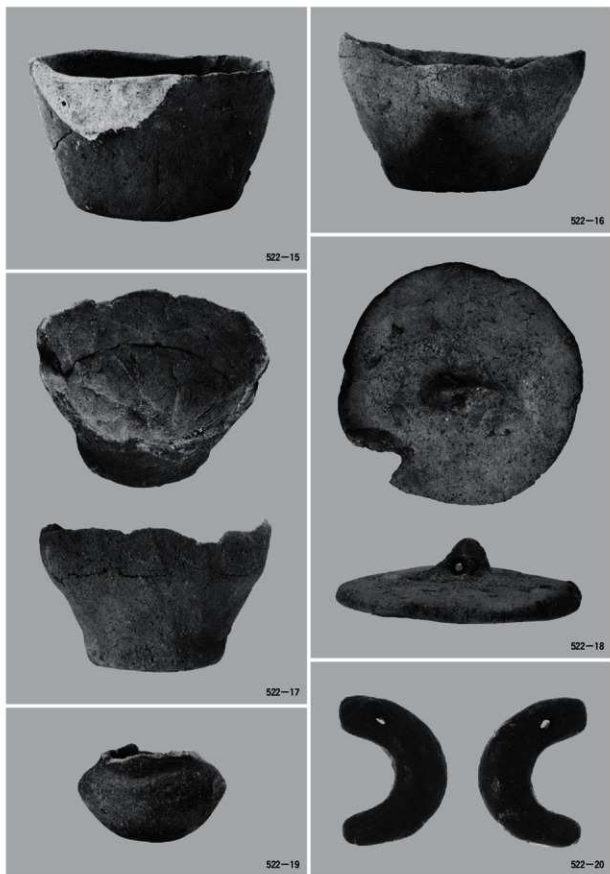
681 1号遺物包含層出土遺物



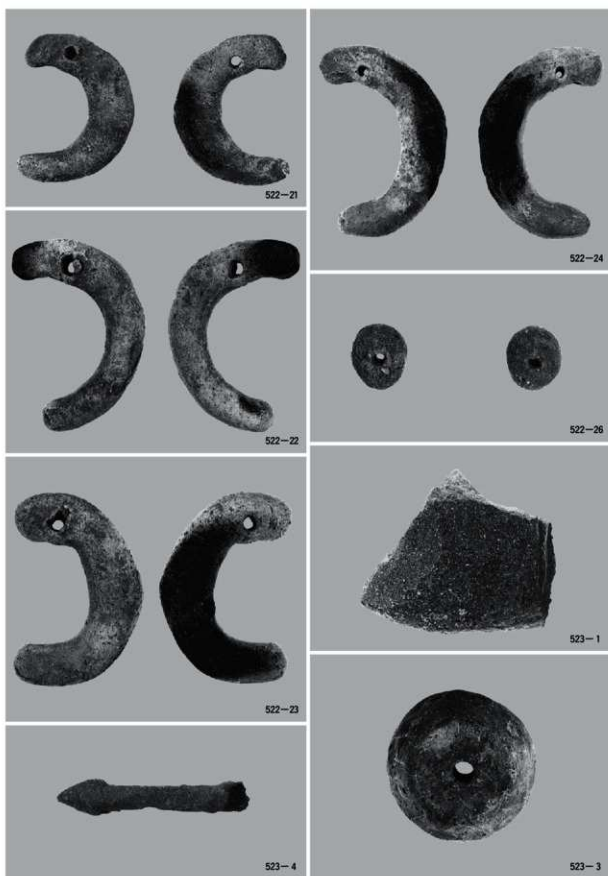
682 1号遺物包含層出土遺物



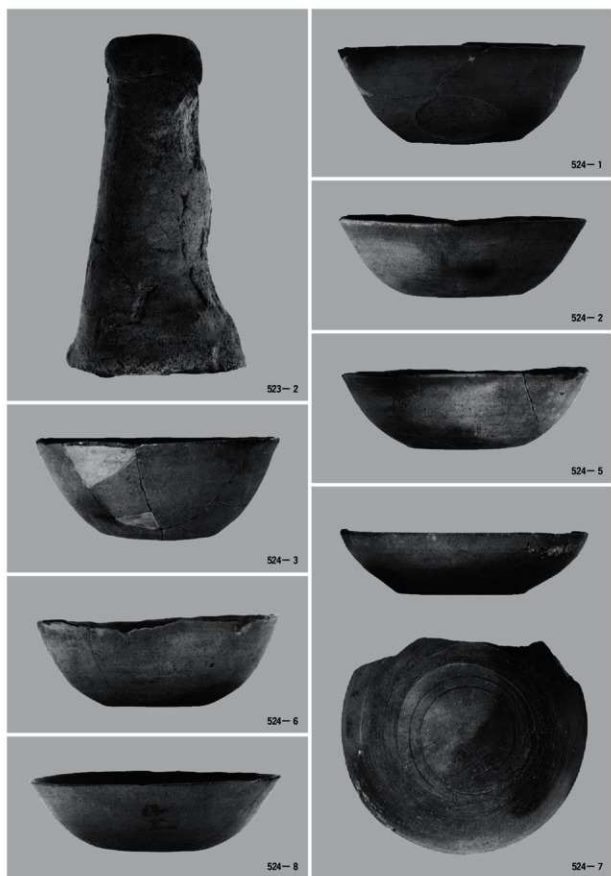
683 1号遺物包含層出土遺物



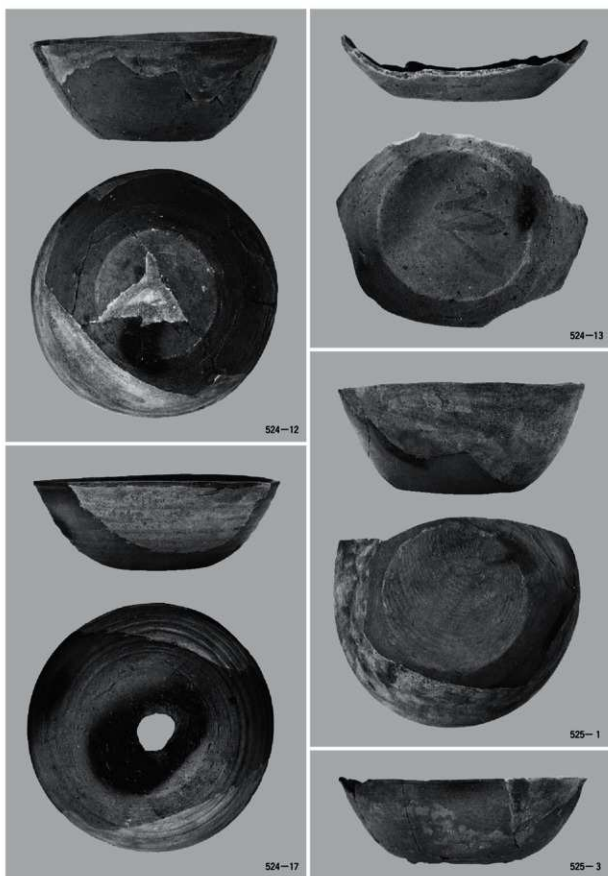
684 1号遺物包含層出土遺物



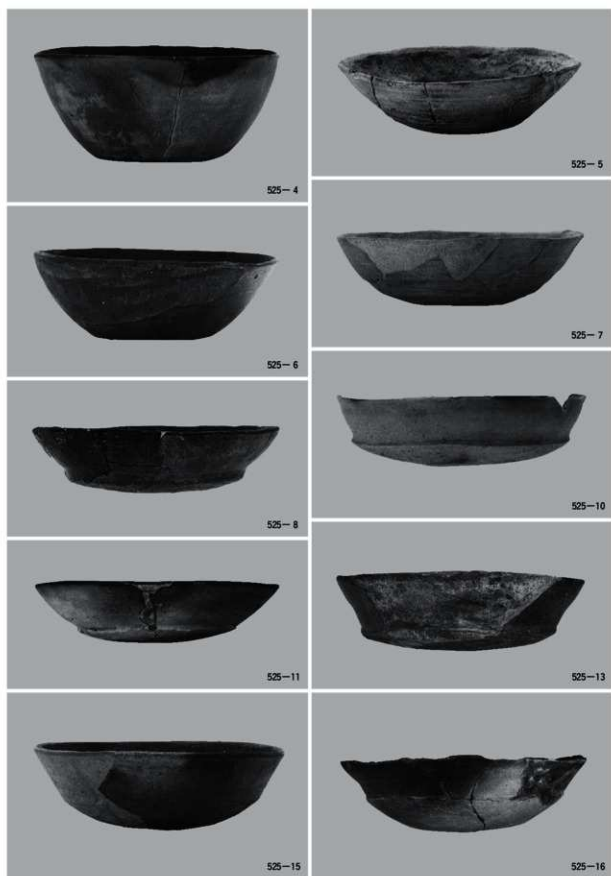
685 1号遺物包含層出土遺物



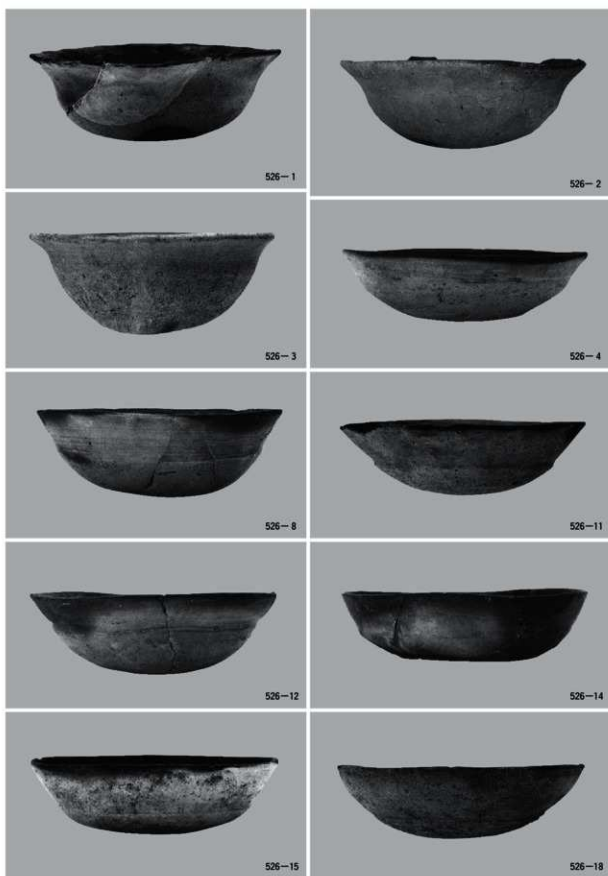
686 1号遺物包含層，遺構外出土遺物



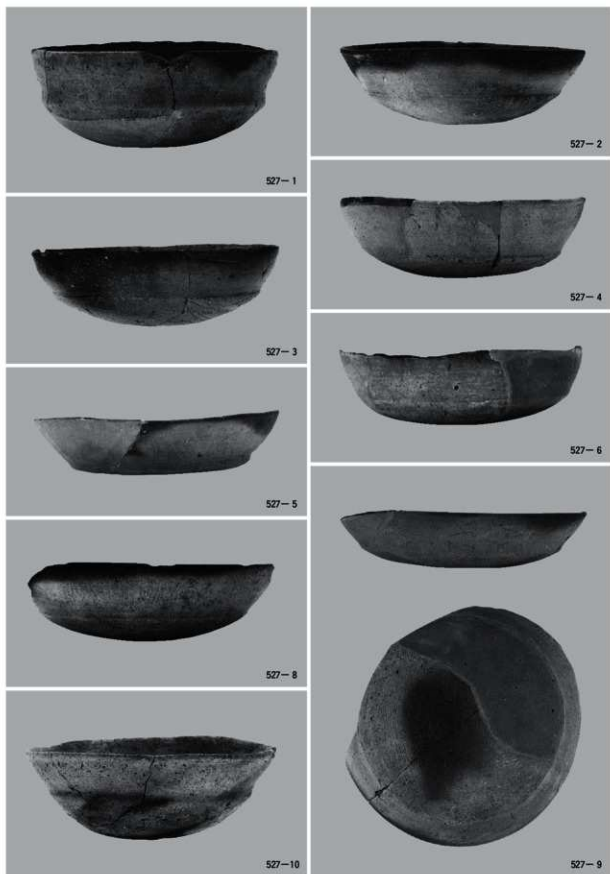
687 遺構外出土遺物



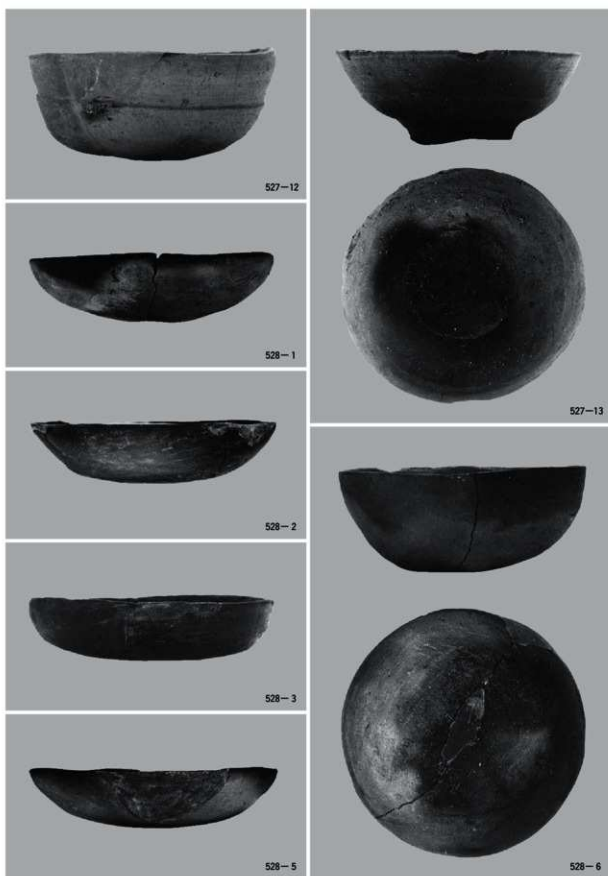
688 遺構外出土遺物



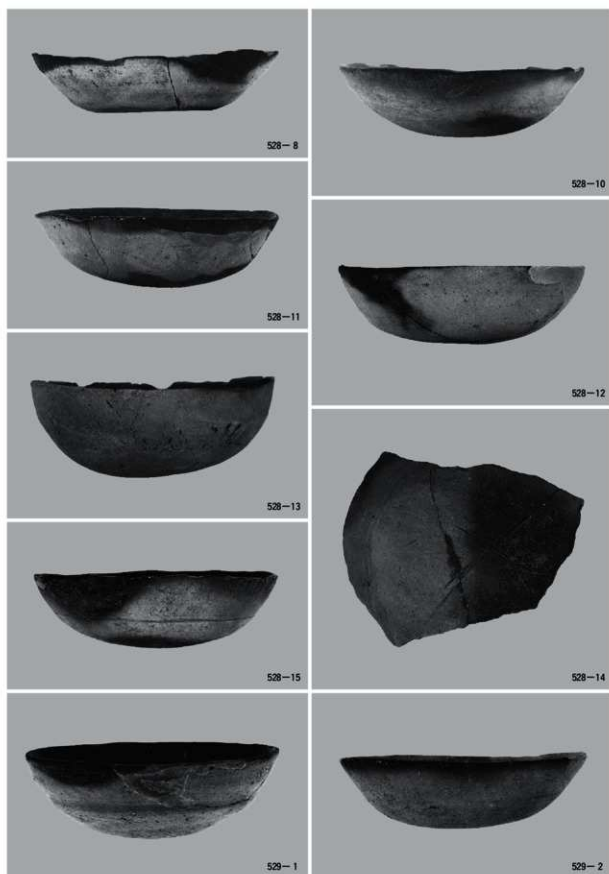
689 遺構外出土遺物



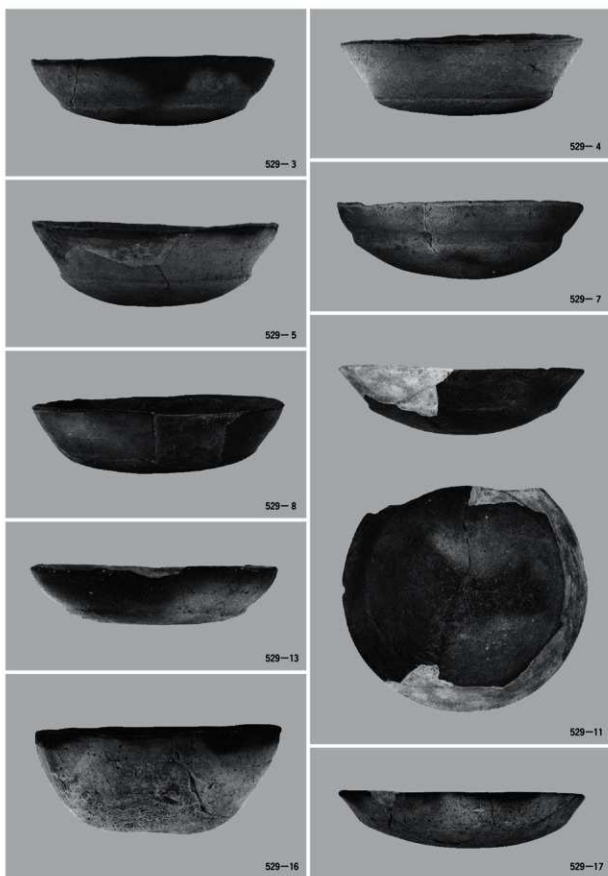
690 遺構外出土遺物



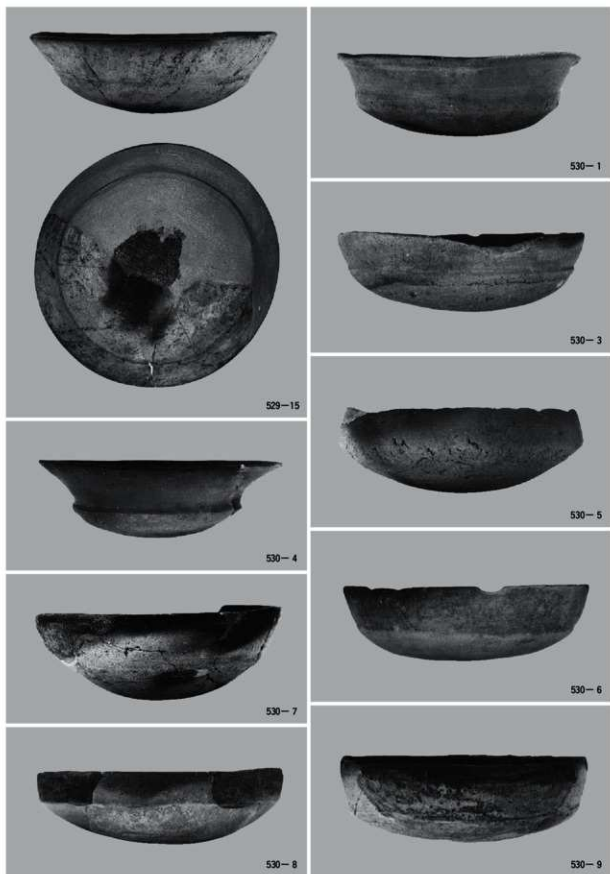
691 遺構外出土遺物



692 遺構外出土遺物



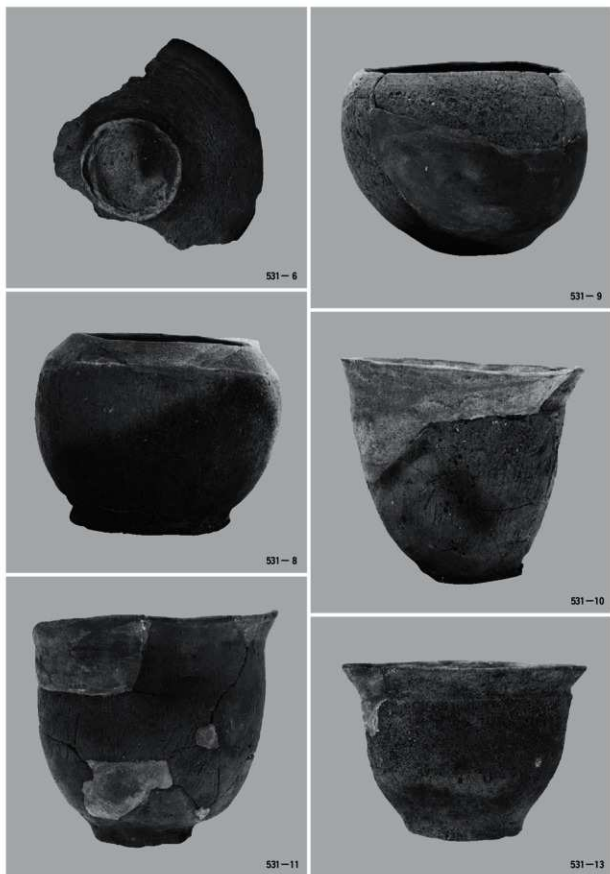
693 遺構外出土遺物



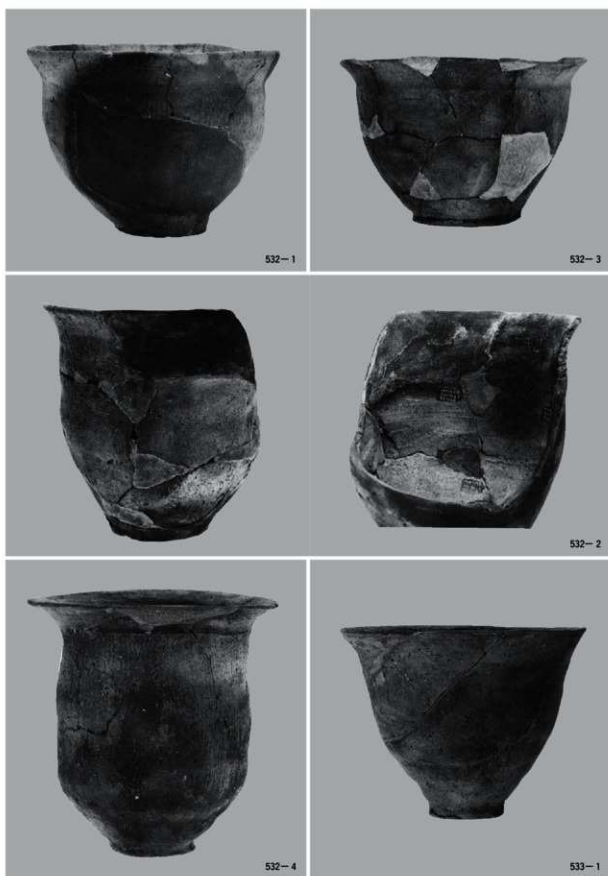
694 遺構外出土遺物



695 遺構外出土遺物



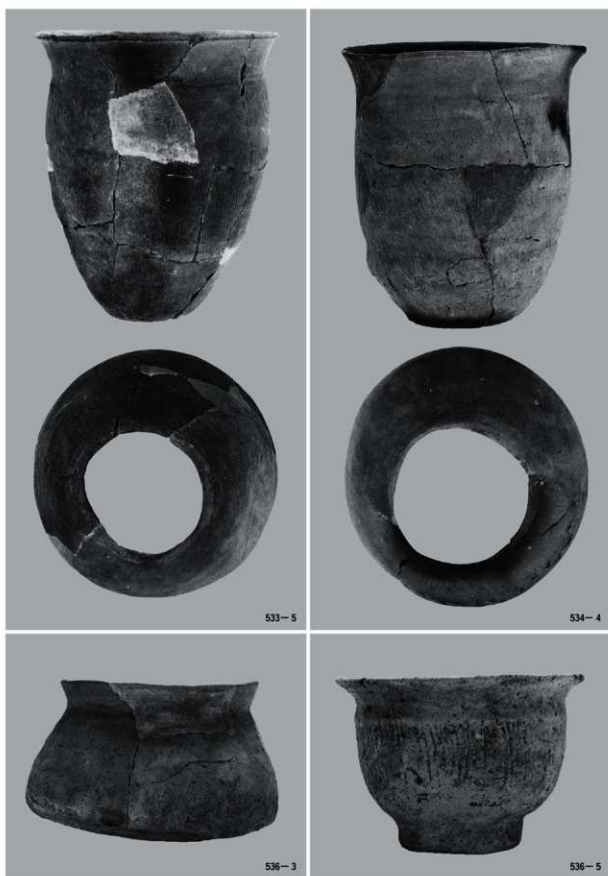
696 遺構外出土遺物



697 遺構外出土遺物



698 遺構外出土遺物



699 遺構外出土遺物



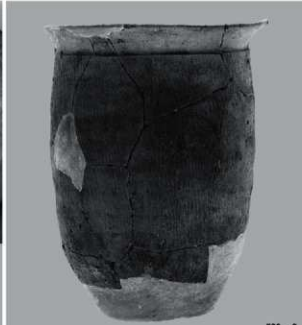
700 遺構外出土遺物



536-1



537-3



536-2

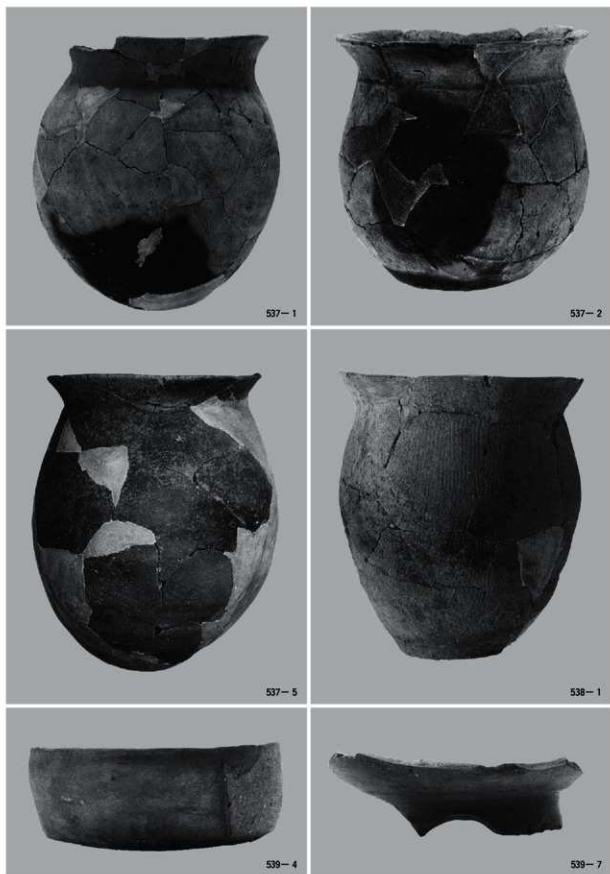


536-4



537-4

701 遺構外出土遺物



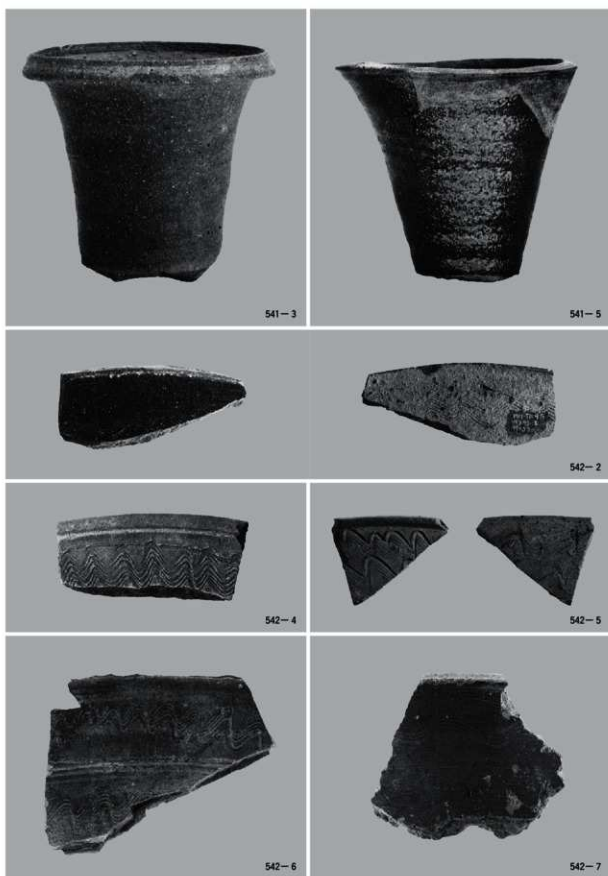
702 遺構外出土遺物



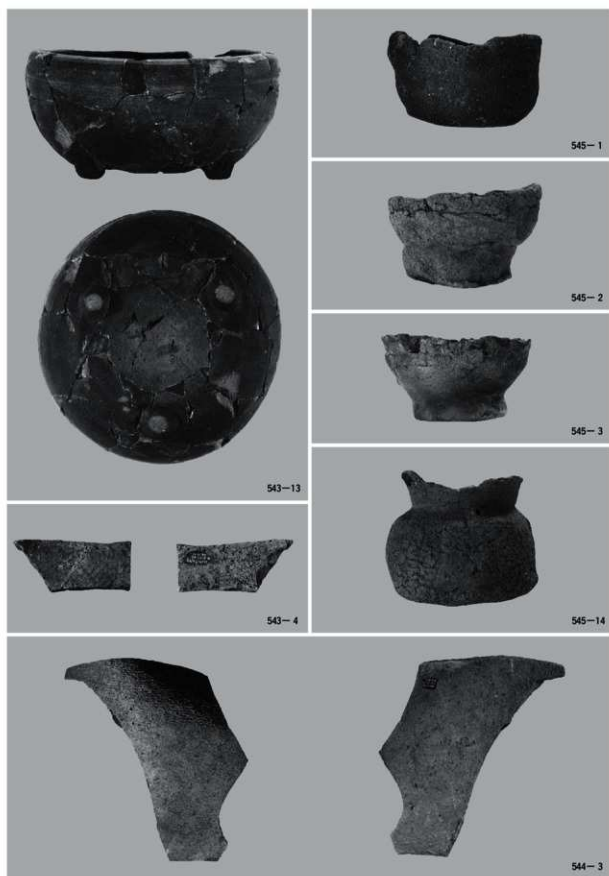
703 遺構外出土遺物



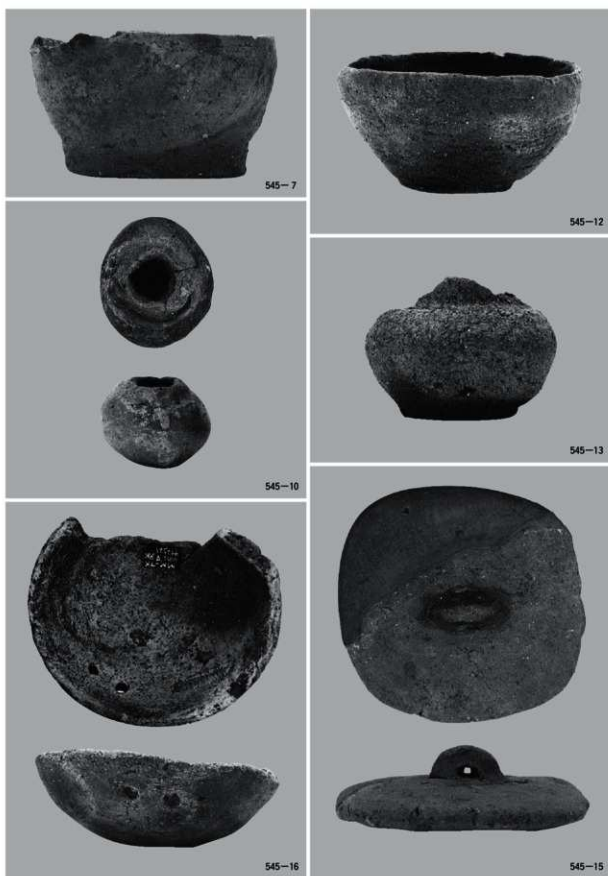
704 遺構外出土遺物



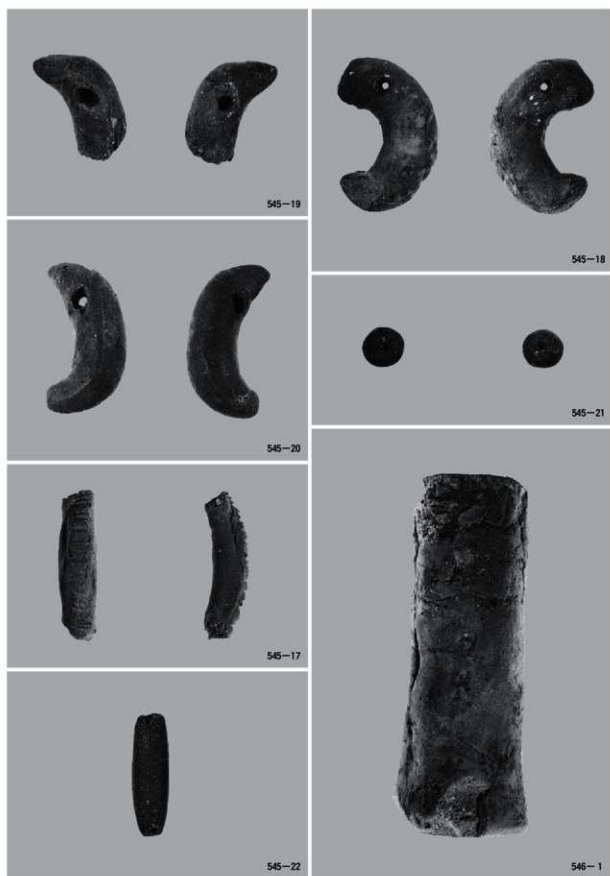
705 遺構外出土遺物



706 遺構外出土遺物



707 遺構外出土遺物



708 遺構外出土遺物

写 真 図 版

第2編 きたのわき 北ノ脇遺跡



1 調査区全景（北より）



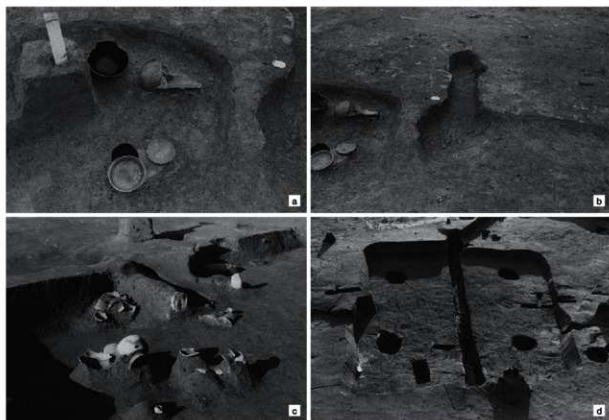
2 調査風景



3 1号住居跡 (南西より)



4 2号住居跡 (南西より)



5 2・3号住居跡細部

a 2号住居跡遺物出土状況(南より)

b 2号住居跡カマド(南西より)

c 3号住居跡カマド周辺遺物出土状況(南より)

d 3号住居跡柱穴跡(北東より)



6 3号住居跡(南東より)



7 4号住居跡 (南東より)



8 5号住居跡 (北西より)



9 6号住居跡 (南西より)



10 6号住居跡細部

a 遺構断面 (南西より) b カマド (南西より)
c カマド断面状況 (南西より)



11 7号住居跡（南西より）



12 7号住居跡カマド（南西より）



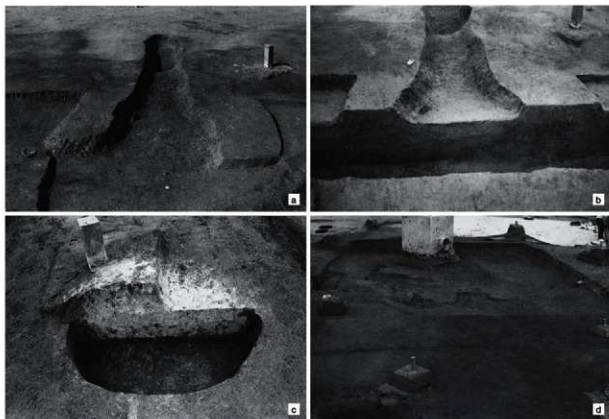
13 8号住居跡（西より）



14 9号住居跡（南より）



15 10号住居跡 (西より)



16 10号住居跡細部

- a カマド (東より) b カマド断面状況 (東より)
 c 白色粘土 d 圓形状況 (東より)



17 11号住居跡（南東より）



18 12号住居跡（西より）



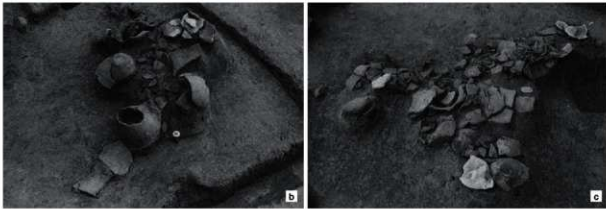
19 13号住居跡 (南東より)



20 14号住居跡 (北東より)



21 15号住居跡（南東より）

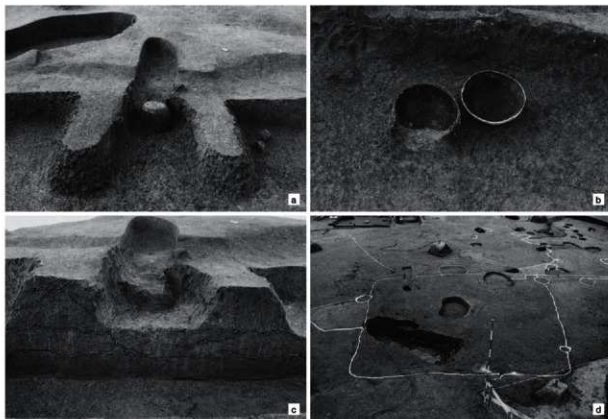


22 15号住居跡細部

a 道横断面（北西より）
b 遺物出土状況
c 遺物出土状況

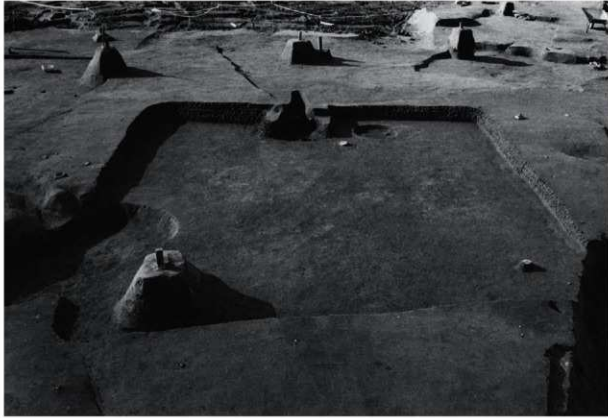


23 16号住居跡 (南東より)

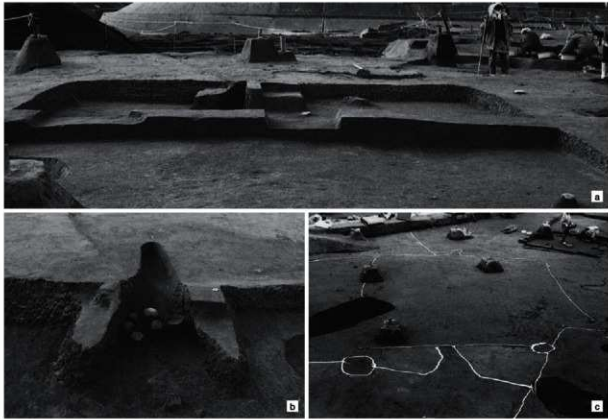


24 16号住居跡細部

a カマド (南東より) b 遺物出土状況
c カマド断面状況 (南東より) d 概出状況 (南東より)



25 17号住居跡（東より）



26 17号住居跡細部

a 遺構断面（東より）
b カマド（東より）
c 掘出状況（東より）



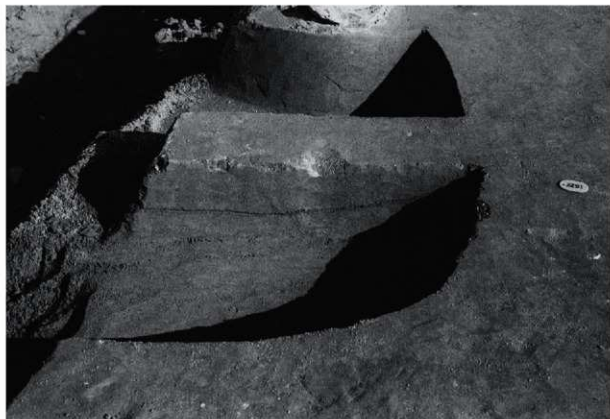
27 18号住居跡 (南東より)



28 19号住居跡 (南東より)



29 20号住居跡（南西より）



30 21号住居跡遺構断面（東より）



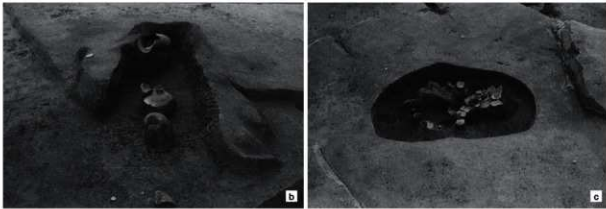
31 22号住居跡遺構断面 (南より)



32 23号住居跡 (南より)



33 24号住居跡（南より）



34 24号住居跡細部

a 遺構断面（南より） b カマド（南より）
c 貯蔵穴（北より）



35 25号住居跡 (東より)



36 25号住居跡細部

a 遺構断面 (南より) b カマド (東より)
c 掘形状況 (東より)



37 26号住居跡 (南東より)



38 26号住居跡細部

a 遺構断面 (南東より) b カマド (南西より)
c 土器ピット痕跡 (南西より)

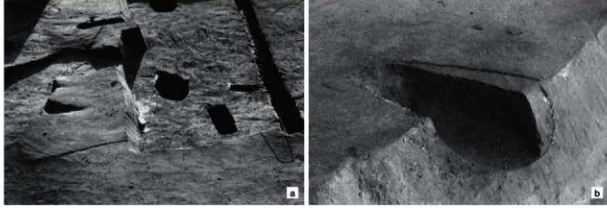


39 27号住居跡 (南東より)



40 27号住居跡細部

a 道構断面 (南東より) b カマド (南東より)
c 遺物出土状況



41 28号住居跡細部

a 検出状況（北東より） b 標道断面（北西より）



42 29号住居跡（北西より）



43 34号住居跡（北西より）



44 30号住居跡 (南より)



45 30号住居跡カマド (南より)



46 31号住居跡（南西より）



47 33号住居跡（西より）



48 32号住居跡 (南東より)



49 32号住居跡カマド (南東より)



50 35号住居跡（南東より）



51 36号住居跡（東より）



52 37号住居跡 (東より)



53 38号住居跡 (南より)



54 39号住居跡（東より）



55 40号住居跡（東より）



56 41号住居跡 (南より)



57 41号住居跡遺物出土状況 (南より)

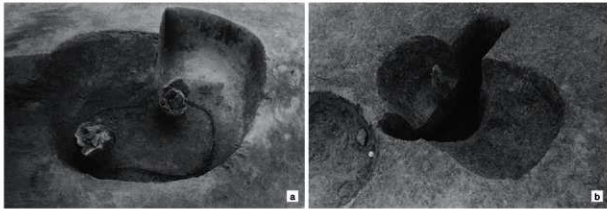


58 41号住居跡細部

a 概出状況(南西より) b 遺物出土状況



59 42号住居跡(南東より)



60 1号土坑, ビット群

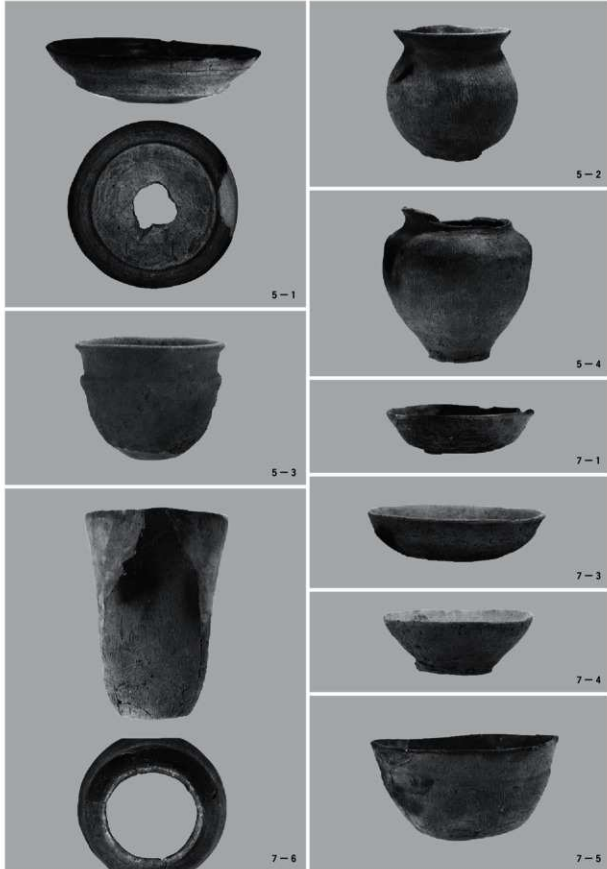
a 1号土坑(南より) b O19-7クワッド P31柱材出土状況(南より)



61 1・2・3号柱列跡全景（南西より）



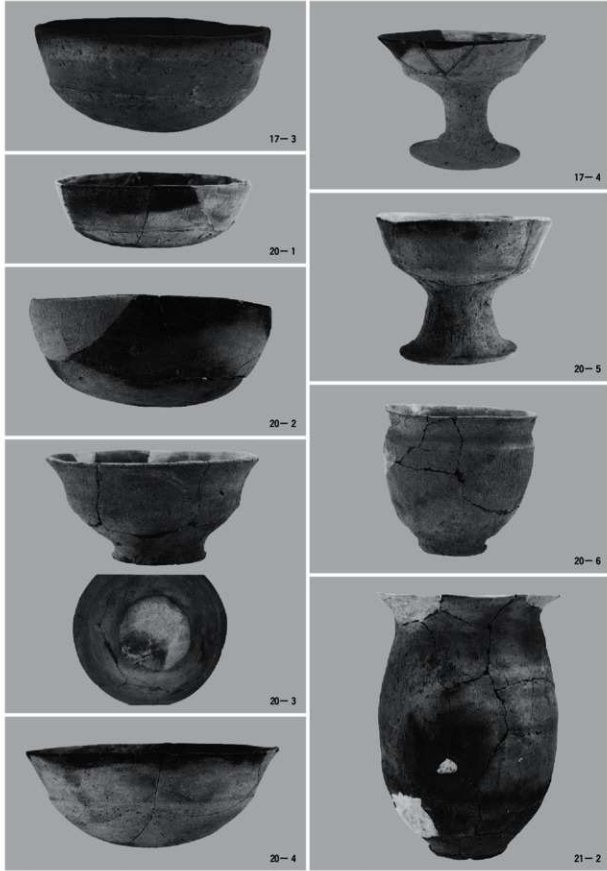
62 冬場の調査風景（北ノ脇道跡を臨む）



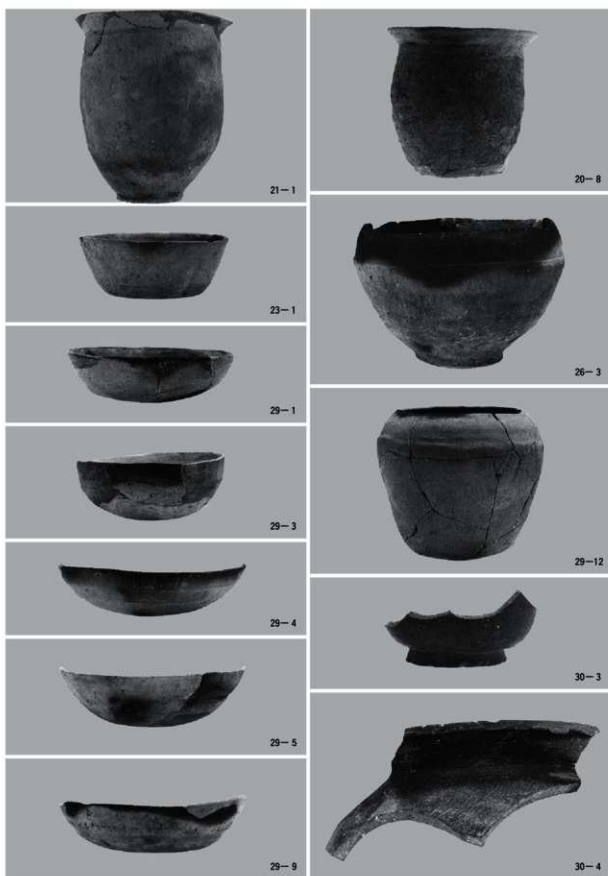
63 1・2号住居跡出土遺物



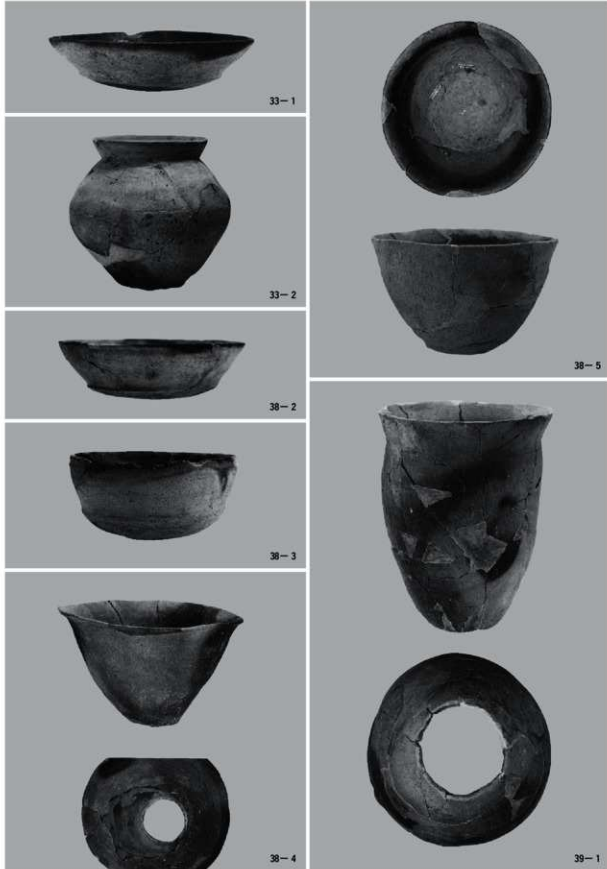
64 3号住居跡出土遺物



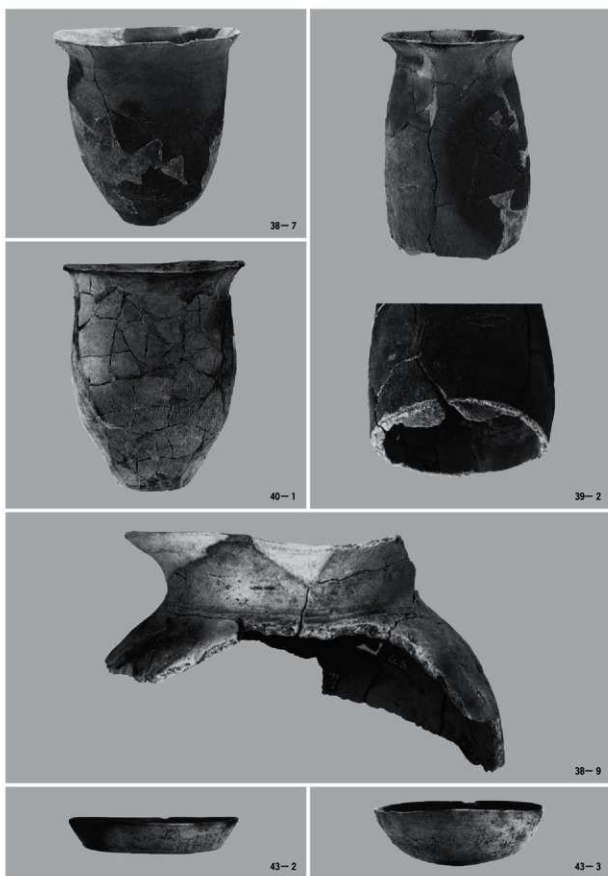
65 4・6号住居跡出土遺物



66 6・7・9・10号住居跡出土遺物



67 12・15号住居跡出土遺物



68 15・16号住居跡出土遺物



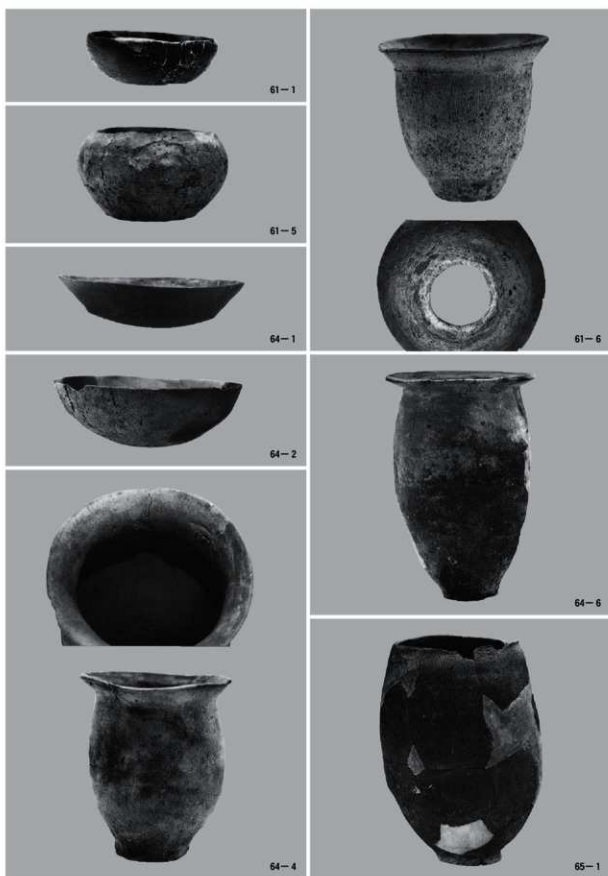
69 16～18号住居跡出土遺物



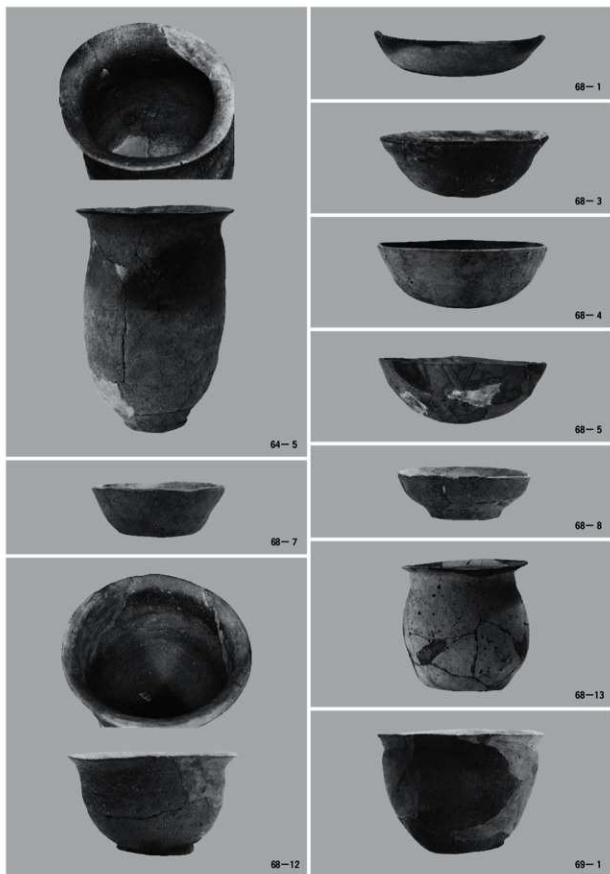
70 18・19・21～23号住居跡出土遺物



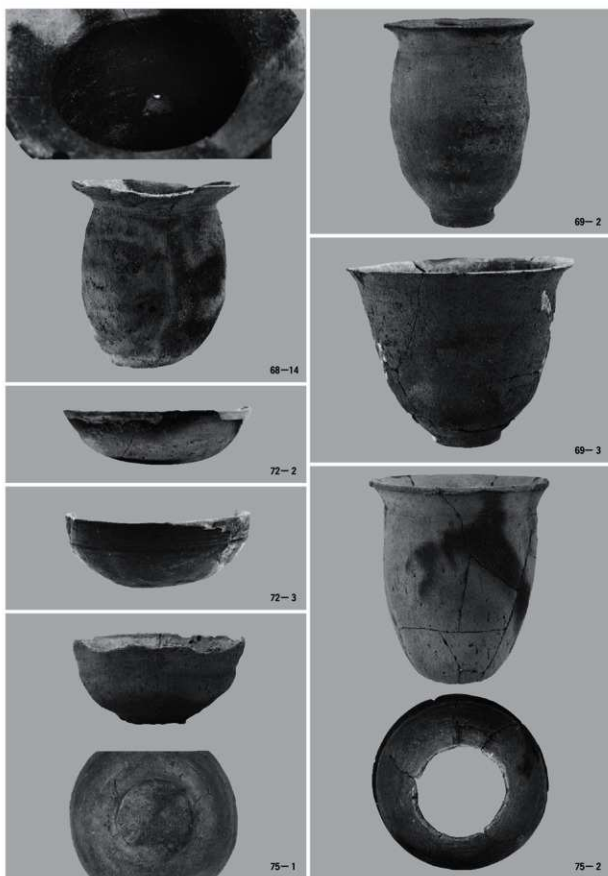
71 24・25号住居跡出土遺物



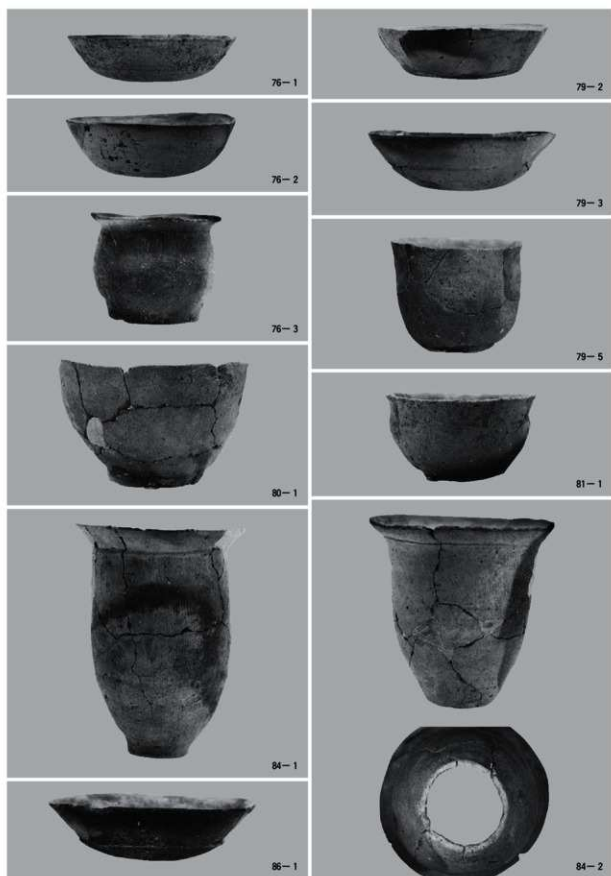
72 25・26号住居跡出土遺物



73 26・27号住居跡出土遺物



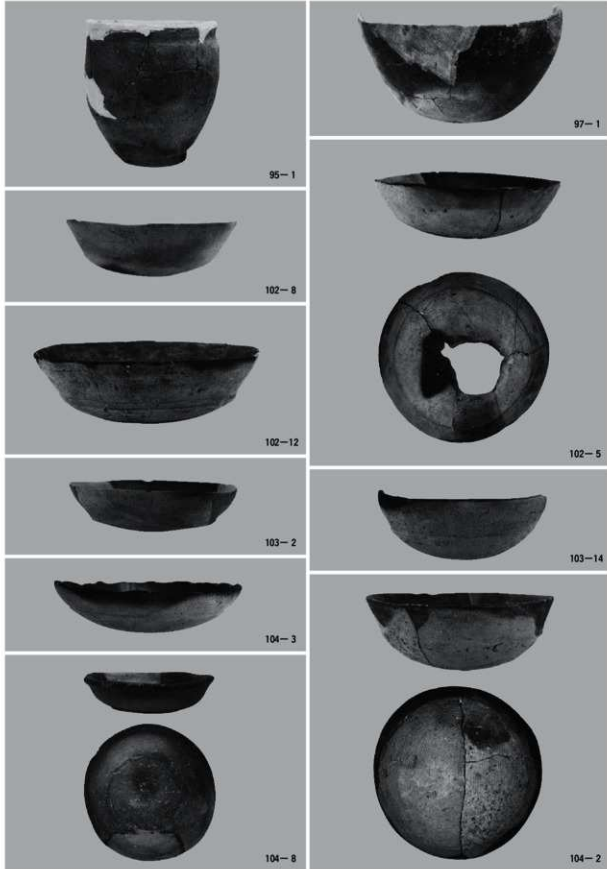
74 27・29・31号住居跡出土遺物



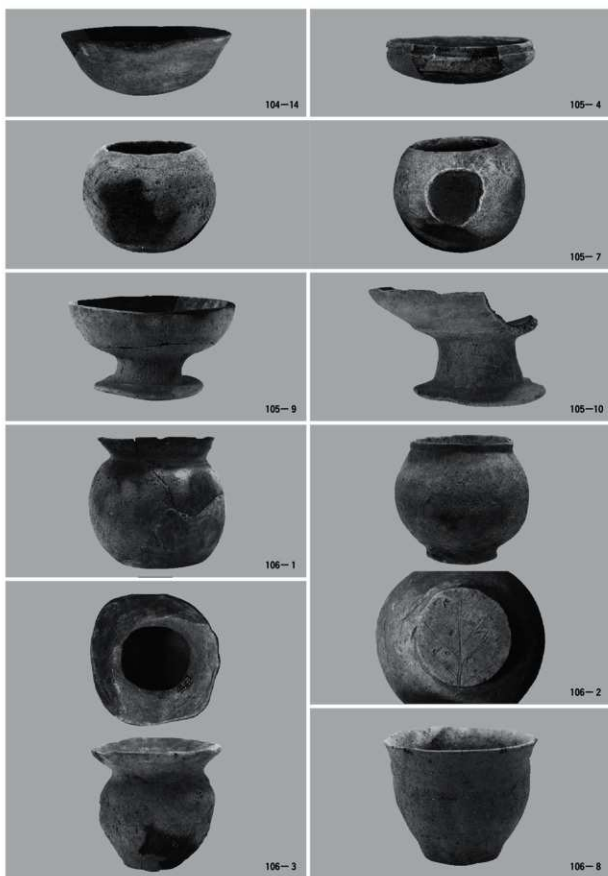
75 32-35・37・38号住居跡出土遺物



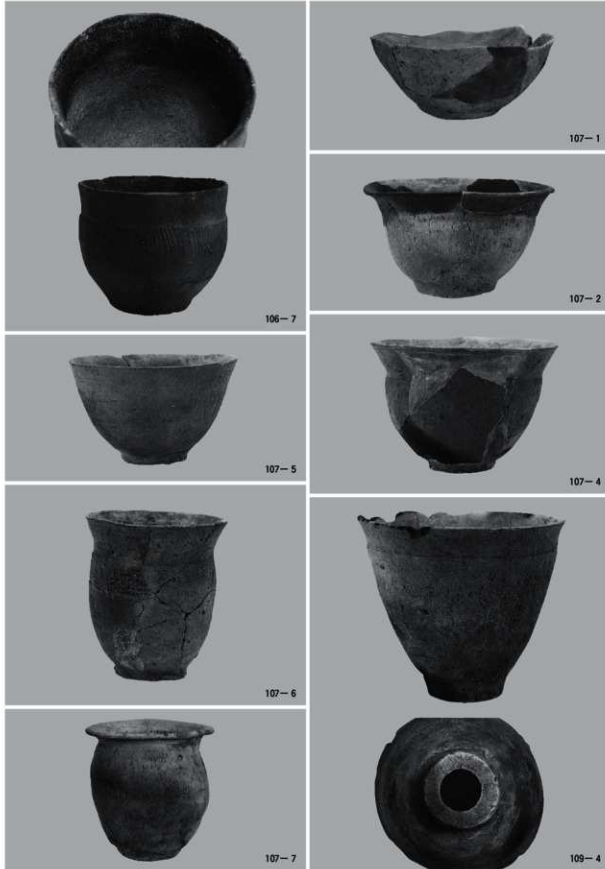
76 41号住居跡，1号土坑出土遺物



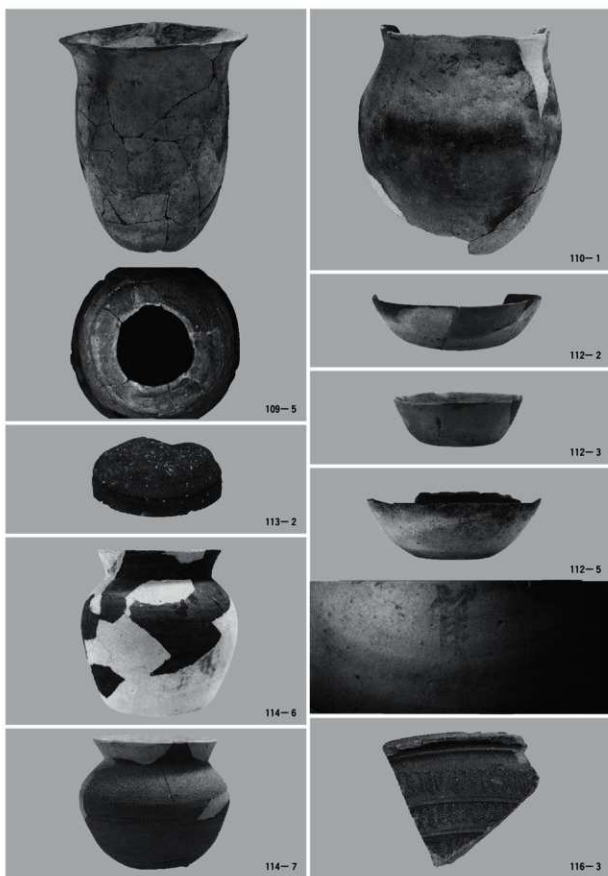
77 1号土坑，O19-7・P2，遺構外出土遺物



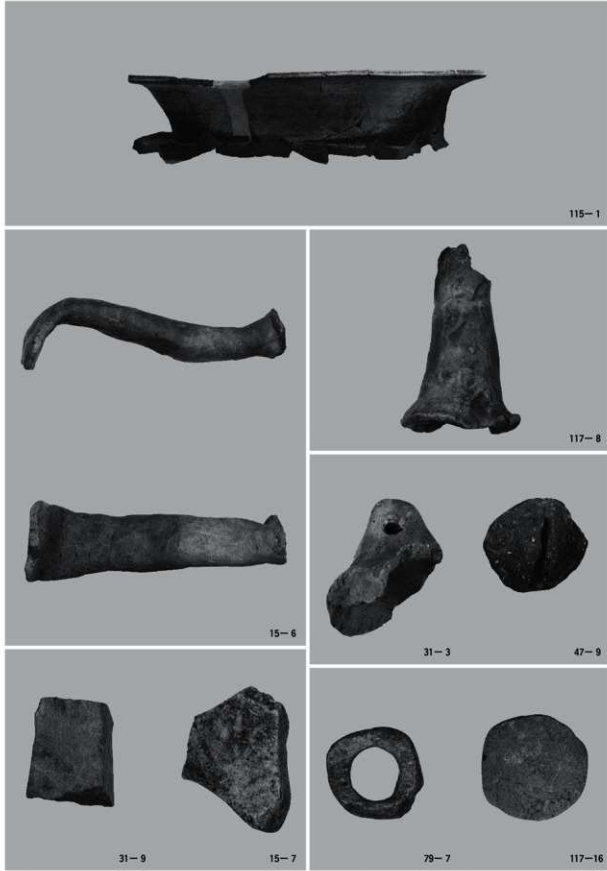
78 遺構外出土遺物



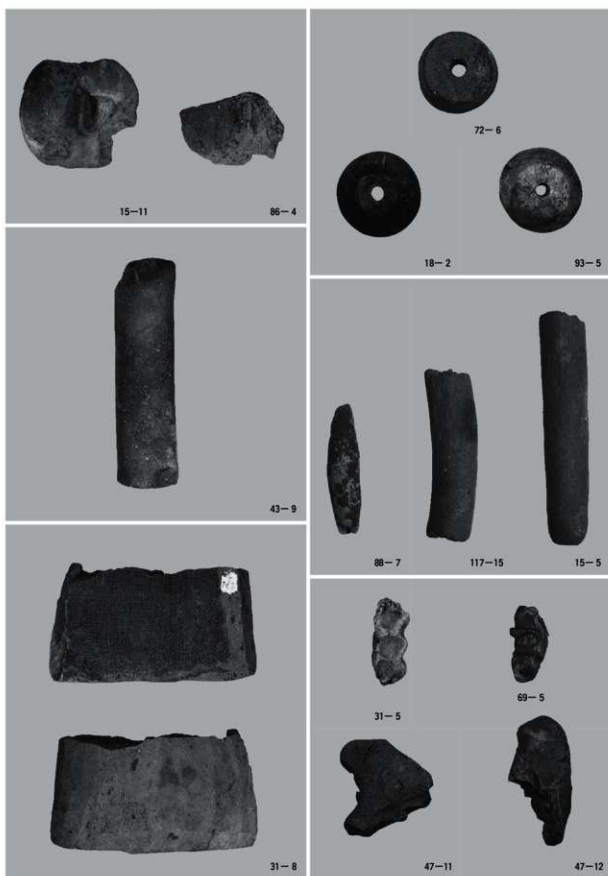
79 遺構外出土遺物



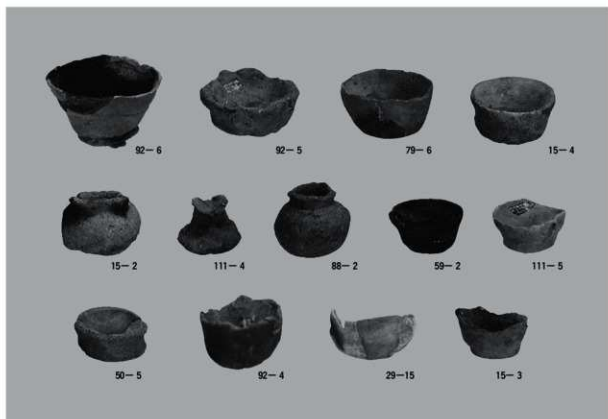
80 遺構外出土遺物



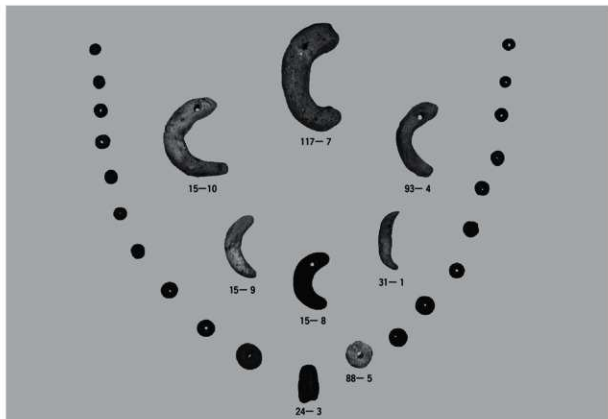
81 遺構外出土遺物，土製品，石製品



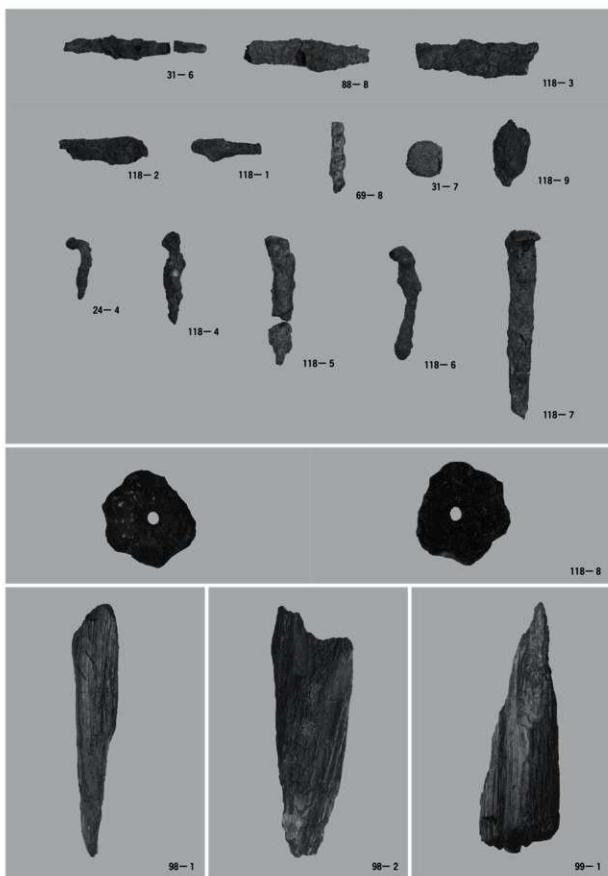
82 土製品, 石製品



83 ミニチュア土器，手握ね土器



84 土・石製玉類



85 鉄製品, グリッドビット出土柱材

報告書抄録

書名	阿武隈川右岸築堤遺跡調査報告								
副書名	高木・北ノ脇遺跡								
巻次	2								
シリーズ名	福島県文化財調査報告書								
シリーズ番号	第401集								
編著者名	安田 稔・高久田富裕・佐藤あかり・菅原祥夫・大河原 健・大波紀子								
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 Tel.024-534-9191								
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8065 福島県福島市杉妻町2-16 Tel.024-521-1111								
発行年月日	14年11月28日								
所収遺跡名	所在地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
高木	福島県安達郡 本宮町高木字 高木	07323	0087	36度 0分 1秒	139度 50分 6秒	19990412 ～19991223	11,150㎡	阿武隈川右岸築 堤に伴う事前調 査	
北ノ脇	福島県安達郡 本宮町高木字 北ノ脇	07323	0087	36度 0分 1秒	139度 50分 6秒	19990412 ～19991223	1,300㎡	同上	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
高木	集落跡 散布地	古 奈 平	墳 良 安	竪穴住居跡	176軒	土師器	1,451点	自然堤防上に営まれた古墳～奈良・ 平安時代の集落跡。主体は、古墳時 代終末期の7世紀である。200軒を越 える竪穴住居跡が検出され、2,300点 以上に及ぶ膨大な図示遺物が出土し た(約700箱)。 7世紀の集落は、幅6～8mの大 溝で集落内部が区画され、後背湿地 では「水辺」の祭祀が行われている。 出土遺物には、豊富な土師器のほか、 須恵器提振・機軸・鏡、銅鏡、 銀環、鉄刀、座金などの特殊器物が 含まれる。	
				土坑	35基	須恵器	190点		
焼土遺構	3基	陶器	1点						
集石遺構	1基	土製品	109点						
溝跡	5条	石製品	48点						
特殊遺構	7基	金属製品	37点						
遺物包含層	1か所	水晶	1点						
			※ (図示点数)						
北ノ脇	集落跡 散布地	古 奈 平	墳 良 安	竪穴住居跡	42軒	土師器	308点		
				土坑	1基	須恵器	70点		
			柱列	3基	土製品	68点			
			ヒット	126個	土製品	3点			
					金属製品	15点			
					鉄滓				
					※ (図示点数)				

福島県文化財調査報告第401集

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

高木・北ノ脇遺跡

平成14年11月28日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団（遺跡調査部）
発行 福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
財団法人 福島県文化振興事業団（〒960-8116）福島市春日町5-54
TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781
国土交通省東北地方整備局福島工事事務所
（〒960-8584）福島市黒岩根平36
印刷 株式会社 山川印刷所（〒960-2153）福島市庄野字清水尻1-10

本報告書は中性紙を使用しています。